が、元來多情なるヘンリーはアヲと稱する年少き美婦を見て深く之を喜び、之を妾となさんとしたりしかども聽かざりしなり以て、彼はカタリナを離別しアヲを娶らんとしたりしが、法王に遮延之を許さざりしなり以て、先づ密かにアヲを娶り、後大監督に依りて離婚を實行し、以て法王に服從せざるの態度を示せり。國會も亦國王の希望に從ひ、地上に於る英國教會の首長は英國王也との決議をなし、斯くて法王との關係を斷ちたり。是れ即ち英國に於る改革の端緒にして、其動機全く宗教的に非ざりしなり以て、寺院を廢し其財産を没收したる外、教義の改革の如きは毫も其頓着する處に非ざりき。故に一五三九年『大聖典』と稱せられたる聖書の翻譯を批准し、且六箇條の信仰箇條を公表したりしが、其第一條には化體說を主張し、第二條には一般の信徒は聖盤の葡萄酒を飲むべからずとなし、第三條には牧師の結婚を禁じ、第四條には僧侶の獨身の契約を嚴守すべきことを命じ、第五條には牧師は一人にて死者の靈魂のために聖體を執行すべきこと、第六條には牧師の前に懺悔すべきことを規定し、而して此信仰箇條に從はざる者を死刑に處すべしと命じ、毫も改革の實を示さざりき。

教義の改革の實行せられたるはエドワルド六世（一五四七－五三在位）の治世に在り。彼はヘンリー八世第三の妻ジヤネの子にして、即位の時齡僅に十歲に過ぎざりしが、不思議なる智慧と宗教的熱心とを有せしのみならず、自ら改革を來むる志あり、且攝政たりし叔父も亦新教徒なりしため、其治世中は故障なく改革進行せり。且又クランメル監督となり、國王及び攝政の助力に依り、教義的改革を行ひ之に適ぜる信仰箇條を發表し、又教會禮拜の風習なる改良せり。教義は穩和なるカルヴィン主義、禮拜の風習は儀式的にして、英國教會今日の信仰箇條及び禮拜の風習と大差なし。エドワルド在位僅に六年にして死し、其姉メリー位に即きて、改革に一轍塗を生ぜり。

メリー女王（一五五三－五八在位）はヘンリー最初の妻カタリナの女にして、母より舊教を學びたると、改革運動は母の無慚なる歷史の原因たりしと、且法王に熱心服從したりしとに依り、大に改革に反對し、英國の教會を再びもとの有樣に復せんとしたりき。而して國會議員の多數も亦改革運動緩止の事に贊成したりしを以て、若し女王にして寬容なる心を以て痛次箇條を採用するの政策を取りしならんには、英國に於ける改革運動は一層大なる打擊を蒙りたりしならん歟、メリーは元來宗教的熱狂者にして新教徒を死刑に處せずんば滿足することを能はず、遂に無辜なる迫害を開始し、化體說を信ぜずといふのみなるのみを以て、凡そ二百八十六人を火刑に處し、ファーベル、ラチマル、リッドレー、クランメル又其他に死し、パセル及びゼチバに逃れたる者亦少からず。於是却て國民の反動を起し、彼女に綽名するに『鮮血のメリー』を以てし、其壓制に抗せしがば、却て改革運動を勵長したりき。

メリーに嗣ぎて王位に即きしエリザベツ女王（一五五八－一六〇三在位）となる。エリザベツの治世に新教は再び其勢力を回復し、遂に英國民大多數の永久的宗教となりたり。右王治下の教會歷史は二期に區別せらるべし。即ち其第一期は國教と羅馬教會との分離完成したる事にして、第二期は國教とピウリタン派（淸教）との關係明白となりし事也。エリザベツはヘンリー第二の妻アヲの女にして、羅馬教の說よりすればアヲはヘンリーの本妻に非ず、從てエリザベツも王位に即くの資格なりしなり以て、羅馬教に服從すること能はざりしが、左りとて彼女は敢て熱心に改革說を主張したるにも非ず。然れ共彼女は又政治家的才能を有し、巧に教會の事務を指導したりき。即ち彼女は先づ治世の第一年に、英國教會の首長は國王也との令を發したり。四十二の信仰箇條は此時（一五六三）三十九箇條に改定せられたれ共、其實質に於ては緩化なりき。此の如くして國教會は全く羅馬教會と分離して、永久に固定せられしが、不幸にしてピウリタン派に果して寬容すべきやの問題起り、新教徒中に劇烈なる爭論を起したりき。ピウリタン派とは根本的改革を望むの一派にして、牧等の先輩は迫害の當時ジエネバの如き地に逃れ、長老政治を學び、完全なる改革を來むるの心を起して本國に歸りしが、エリザベツの是認せざる改革に據らず、之を非難せしがため、エリザベツの悲憤を招きたりき。尤も爭論の中心となりし者は教義に非ずして、禮拜の風習に關係する事なりき。例之古代より傳はりし風習に從へば、教會の牧師が說教をなし、又は禮典を執行する時は僧服を著するを常とし、又信者が聖盤を受くる時は跪くの風あり、又洗禮を施す時に小兒の頭上に指にて十字架の形なすの風あり。ピウリタンの徒謂へらく、此の如き風習は取へ聖墓典と云ふには非ざれ共、羅馬教の誤謬に深き關係を有するなを以て、之を全廢せざれば、古代より傳はりたる其他の風習をも守るの恐ありと。然るに之に反對する者は謂へらく、古來既に一般の習慣となりたる風習を茲りに廢するは、寧ろ改革運動を妨害するの恐れありと。然るにピウリタン派の人々は同速

みて長老政治を主張し、監督政治を不可となし、エリザベツ及び都監督に反對して、宗教の自由を主張したりしが、一五八八年國會はピウリタン派を以て國法に違反せる者也との決議を通過し、茲に爭論終結の一段落を告ぐるに至れり。

【第十七世紀に於る英國の基督教】　第十七世紀英國教會の歷史は、國教對ピウリタン派との爭鬪、ウエームス一世（一六〇三－二五在位）薩格蘭より入りて位を繼ぎしが、蘇國長老教會に入なりしに拘はらず、英國々教會が國王の權力を尊重するを喜び、監督政治を是認し國教會を保護せり。ピウリタン派の牧師等は、ウエームスが英國に來らんとする途中に於て、八百人連署の請願書を獻げ、教會に行はるゝ種々の惡風を改革せんことを請ひしが、ウエームスは之を拒絕して受けず、更に英國に於る教義と禮拜とを一定すべしと宣告し、且我命に從はざる者は國外に追放すべしと令し、ピウリタン派を壓抑したりしが、唯一箇の精編なる宮書の翻譯を改正せり（一六一一）ウエームス王欽定譯と稱する者是也。チヤールス一世（一六二五－四九在位）ウエームスに繼ぎて位に即き、益々專制主義を實行しピウリタンの徒を迫害せり。大監督ロウドは極端なる監督主義を主張し、且教會の禮拜を羅馬教の如くなさんと努め、ピウリタン派の教ふる所に反對して、安息日は午前中に禮拜を執行し、午後には娛樂をなすべしと敎へ、此命令に從はざる者は嚴罰に處せられたりしが、熱心なるピウリタンの徒は數千人相率ひて米國に移住するに至れり。然るにチヤールスは又十一年間議會を開かず獨裁政治を實行したるがため、政府的自由を來むる者ピウリタンの徒と相結び彼に反抗したりしより、彼は議會を開き議員の請願に從ひ、國民の自由を許すべしとのことを約束したりしが、龍々其約に背きしがため、遂に民權黨の爲に斬首せらるゝに至り、斯くて共和政治の時代（一六四九－五八）來れり。クロムウエル民權黨に推されて『國家の保護者』たる名稱の下に政權を握るに至り、國會は監督主義を廢し、其禮文の使用を廢止し、一時ピウリタン派の勝利に歸せしが、クロムウエルの武斷的政治とピウリタン派の極端なる勝意主義とは、漸く多數國民の嫌忌する所となり、彼れ死するや其後を承けて共和政治を保持せんとする者なく、チヤールス二世（一六六〇－八五在位）を迎へて王位に即かしめ、再び監督政治の復興を見るに至れり。即ち一六六二年『西一條例』を布き、監督政治を全然承認し、祈禱書を使用すべしとの事を令し、之に從はざる牧師凡そ二千人を破門せり。敬虔にして博學なる神學者バックスター及びハウが國教會を去り國外に追放すべしと令し、ピウリタン派を壓抑したりしが、唯一箇の精編なる宮書の翻譯を改正せり（一六一一）ウエームス王欽定譯と稱する者是也。チヤールス一世（一六二五－四九在位）ウエームスに繼ぎて位に即き、益々專制主義を實行しピウリタンの徒を迫害せり。大監督ロウドは極端なる監督主義を主張し、且教會の禮拜を羅馬教の如くなさんと努め、ピウリタン派の教ふる所に反對して、安息日は午前中に禮拜を執行し、午後には娛樂をなすべしと敎へ、此命令に從はざる者は嚴罰に處せられたりしが、熱心なるピウリタンの徒は數千人相率ひて米國に移住するに至れり。然るにチヤールスは又十一年間議會を開かず獨裁政治を實行したるがため、政府的自由を來むる者ピウリタンの徒と相結び彼に反抗したりしより、彼は議會を開き議員の請願に從ひ、國民の自由を許すべしとのことを約束したりしが、龍々其約に背きしがため、遂に民權黨の爲に斬首せらるゝに至り、斯くて共和政治の時代（一六四九－五八）來れり。クロムウエル民權黨に推されて『國家の保護者』たる名稱の下に政權を握るに至り、國會は監督主義を廢し、其禮文の使用を廢止し、一時ピウリタン派の勝利に歸せしが、クロムウエルの武斷的政治とピウリタン派の極端なる勝意主義とは、漸く多數國民の嫌忌する所となり、彼れ死するや其後を承けて共和政治を保持せんとする者なく、チヤールス二世（一六六〇－八五在位）を迎へて王位に即かしめ、再び監督政治の復興を見るに至れり。即ち一六六二年『西一條例』を布き、監督政治を全然承認し、祈禱書を使用すべしとの事を令し、之に從はざる牧師凡そ二千人を破門せり。敬虔にして博學なる神學者バックスター及びハウが國教會を去り國外に追放すべしと令し、ピウリタン派を壓抑したりしが、唯一箇の精編なる宮書の翻譯を改正せり（一六一一）ウエームス王欽定譯と稱する者是也。チヤールス一世（一六二五－四九在位）ウエームスに繼ぎて位に即き、益々專制主義を實行しピウリタンの徒を迫害せり。大監督ロウドは極端なる監督主義を主張し、且教會の禮拜を羅馬教の如くなさんと努め、ピウリタン派の教ふる所に反對して、安息日は午前中に禮拜を執行し、午後には娛樂をなすべしと敎へ、此命令に從はざる者は嚴罰に處せられたりしが、熱心なるピウリタンの徒は數千人相率ひて米國に移住するに至れり。然るにチヤールスは又十一年間議會を開かず獨裁政治を實行したるがため、政府的自由を來むる者ピウリタンの徒と相結

び彼に反抗したりしより、彼は議會を開き議員の請願に從ひ、國民の自由を許すべしとのことを約束したりしが、龍々其約に背きしがため、遂に民權黨の爲に斬首せらるゝに至り、斯くて共和政治の時代（一六四九－五八）來れり。クロムウエル民權黨に推されて『國家の保護者』たる名稱の下に政權を握るに至り、國會は監督主義を廢し、其禮文の使用を廢止し、一時ピウリタン派の勝利に歸せしが、クロムウエルの武斷的政治とピウリタン派の極端なる勝意主義とは、漸く多數國民の嫌忌する所となり、彼れ死するや其後を承けて共和政治を保持せんとする者なく、チヤールス二世（一六六〇－八五在位）を迎へて王位に即かしめ、再び監督政治の復興を見るに至れり。即ち一六六二年『西一條例』を布き、監督政治を全然承認し、祈禱書を使用すべしとの事を令し、之に從はざる牧師凡そ二千人を破門せり。敬虔にして博學なる神學者バックスター及びハウが國教會を去り國外に追放すべしと令し、ピウリタン派を壓抑したりしが、唯一箇の精編なる宮書の翻譯を改正せり（一六一一）ウエームス王欽定譯と稱する者是也。チヤールス一世（一六二五－四九在位）ウエームスに繼ぎて位に即き、益々專制主義を實行しピウリタンの徒を迫害せり。大監督ロウドは極端なる監督主義を主張し、且教會の禮拜を羅馬教の如くなさんと努め、ピウリタン派の教ふる所に反對して、安息日は午前中に禮拜を執行し、午後には娛樂をなすべしと敎へ、此命令に從はざる者は嚴罰に處せられたりしが、熱心なるピウリタンの徒は數千人相率ひて米國に移住するに至れり。然るにチヤールスは又十一年間議會を開かず獨裁政治を實行したるがため、政府的自由を來むる者ピウリタンの徒と相結

和蘭より入りて王位に即き、新教各派に對し、其禮拜の自由を許すべしとのことを約束したりしが、龍々其約に背きしがため、遂に民權黨の爲に斬首せらるゝに至り、斯くて共和政治の時代（一六四九－五八）來れり。クロムウエル民權黨に推されて『國家の保護者』たる名稱の下に政權を握るに至り、國會は監督主義を廢し、其禮文の使用を廢止し、一時ピウリタン派の勝利に歸せしが、クロムウエルの武斷的政治とピウリタン派の極端なる勝意主義とは、漸く多數國民の嫌忌する所となり、彼れ死するや其後を承けて共和政治を保持せんとする者なく、チヤールス二世（一六六〇－八五在位）を迎へて王位に即かしめ、再び監督政治の復興を見るに至れり。即ち一六六二年『西一條例』を布き、監督政治を全然承認し、祈禱書を使用すべしとの事を令し、之に從はざる牧師凡そ二千人を破門せり。敬虔にして博學なる神學者バックスター及びハウが國教會を去り國外に追放すべしと令し、ピウリタン派を壓抑したりしが、唯一箇の精編なる宮書の翻譯を改正せり（一六一一）ウエームス王欽定譯と稱する者是也。チヤールス一世（一六二五－四九在位）ウエームスに繼ぎて位に即き、益々專制主義を實行しピウリタンの徒を迫害せり。大監督ロウドは極端なる監督主義を主張し、且教會の禮拜を羅馬教の如くなさんと努め、ピウリタン派の教ふる所に反對して、安息日は午前中に禮拜を執行し、午後には娛樂をなすべしと敎へ、此命令に從はざる者は嚴罰に處せられたりしが、熱心なるピウリタンの徒は數千人相率ひて米國に移住するに至れり。然るにチヤールスは又十一年間議會を開かず獨裁政治を實行したるがため、政府的自由を來むる者ピウリタンの徒と相結

イットフィルド出でゝ、所謂メソヂスト運動を開始し、爰に第二の宗教改革行はれたりき(『ウェスレー』及び『メソヂスト教會』の條參照)。此運動の結果として國教會内にも新精神發起し來り、所謂福音主義派なる者起り、其中にはヴェン。ニュートン。カサバル。ウィルベルフォルス等の人々あり、メソヂスト教徒に劣らざる熱心と雄辯とを以て、福音の眞理を宣傳し、ために英國宗教界の狀態を一新し、外國傳道及び社會的事業の端緒を開くに至れり。

【第十九世紀以後の英國】　第十九世紀の英國は宗教的自由の發達したる時代、外國傳道及び社會的事業の實地に行はれたる時代也といふべし。從來英國にては國教會に屬する者のみ政權を有し、非國教徒にして、國會議員となり、又は官吏とならんとする時は、聖餐を守るため國教會に出席するを要し、又羅馬教の信徒は全然官吏又は議員たることを得ざりしが、一八二八年非國教徒も全然政權を與へられ、其翌年羅馬教徒も亦此特權に與かるを許されたり。此の如く一方に政治的自由と宗教的自由の發達せるに方り、教會の權威を尊重し、且敬度的生活を更に深望ならしめんとする者あり、此運動中津大學に起り(一八三三)漸次其勢力を得るに至れり。所謂牛津運動と稱する者にして、其主意とする所監督主義、教會の禮典、儀式及び古代の教會を尊重するに在り。此運動の主動者はニウマン。ピゼー。キーブル。マンニング。フェーベル等にして、ニウマン。マンニング。フェーベルは其宗教的熱心より遂に羅馬教會に轉ずるに至れり。國教會に三派あり。一は高教會派にして、監督の絶對的權力、使徒的傳承說に重を置き、且儀式を尊重す。此派の中に最も極端に儀式を重ずる者あり、宗教改革者が法王派と稱したりし者にして、彼等は私語的懺悔、囑瞩をもす等の儀式を重じ、宗教改革を以て過誤又は異尼也となせり。高教會派の反對に立つ者を低教會派となす。三十九箇條の自然的說明を主張し、監督政治を以て教會の本質也となすの說を否み、又極端なる儀式的行爲を拒斥す。此二派の中間に立つを廣教會派となす。此派は教會を尊重すると共に寛大なる同情を旨とし、基督教の根本的大主義に依りて互に愛し互に協同して、基督の道を實行せんとする者也。此派の代表的人物とも云ふべきはアルノルド。ロユリアスヘー。ア。モリス。キングスレー。スタンレー等也。

非國教會も亦第十九世紀以後大なる進歩をなしたり。且此世紀に入りて新に起りたる宗派あり、ブリモス兄弟派(一八六〇ブリモスに起る)救世軍(一八七八)は其最も重なるものにして、福音同盟會(一八八四六)青年會(一八四四)の創立せられたるも亦此世紀也。且英國教會を初め非國教會の各派に於て傳道的精神著しく勃興し、盛に內外の傳道を開始し、以て今日に至れり。又慈善的事業——貧院、孤兒院、感化院、勞働者保護の如き——も此世紀に於て大なる發達を見るに至れり。

思想の方面に於ては科學の發達、殊に進化論の一及びダルウィンに依りて明にせられたる以來、神學上に大なる影響を受くるに至れり。又聖書の高等批評、比較宗教學、古物學等も第十九世紀中頃以後大なる發達をなし、ために舊來の思想を根底より覆され、教會は一時之がため不安を感じたれ共、國民の根抵に深く刻み付けられたる宗教思想は容易に拔く べからず。今日は尙一方に極端なる保守派ありて妄りに舊來の思想を固守せんとし、又他方には極端なる科學者ありて、一切神秘的要素を破壞せんとすれ共、概して論ずるに英國の宗教界は最も健全にして、靜に神學の再建設をなさんとする者あり、實行的方面と共に思想の方面も徐々として進行しつゝあり。現時國教會に在りて進歩說を取る者の代表者と見るべきはティルパーフォース。ヘンスレー、ヘッション。ラッシダウル等也。會衆派の牧師アール、ウェー、カムベルは『新神學』を著して(一九〇六)一時世論を動せり。

インスピレーション

[Inspiration. 術語]

或る精神を人の心に鼓吹するの義にして、聖書記者の上に及ぼせる神の靈の働を表す。元來此語は一人の感化の他人に及ぼ 力を云へる者なれ共、之を聖書の上に及ぼせる神の力を表する者として用ゐたるは、提後三の十六に『聖書は皆神の靈を受けたる者』とあるを、拉丁譯に『神のインスピレーションを受け』と譯せるに基けり(希譯には『默示』とあり)。リーは之に定義を下して『インスピレーションとは如何なる程度如何なる方法に依りて爲さるゝに拘はらず、神に依りて選ばれたる人々之に導かれて、其職權に依り、言を以て神の聖意を宣言し、若くは聖書を錄する。を爲す聖靈の活動の力也』と云ひ、サンデーは『或人々は他の人々よりも敏感にして有力なる心意を與へられ、其書きたる言は、他の書物の有する能はざる力と純正と完全とを以て、神の性質及び神と人との關係に關する眞理を吾人に示す。吾人は之を聖靈の人心に及ぼす働に歸す。而して吾人は此働をインスピレーションと稱す』と云へり。インスピレーションは唯基督教經典のみ有するに非ず、他教の經典例之ゼイド、ゾロアステルの經典、佛教の經典及びコーランも亦神より出でたりとの信仰に基きて其信ずべき者なることを主張す。經典を有せざる未

開の人種中にも尙神は夢及び託宣に依りて其意を人に知らしむる者也との信仰存す。完全なるインスピレーションは、基督に於て頂點に達せる歷史的天啓に於てのみ見るを得べしと雖も、吾人は其他の經典にはインスピレーションなしと主張するを要せず。

【聖書の主張】　新約記者及び其當時の猶太人は一般に、舊約のインスピレーションを受けて書かれたる者なることを承認し、舊約中の文書は神聖にして、眞の意義に於て神の言也と信ぜられたり。即ち耶蘇自らは舊約を以て其教訓の證據也となし(太十九の四、約五の四十六)之を引きて墓寬の誘惑に答へ(太四の四、七、十)自己の天職の確實なるを證し(路四の十七—廿一)又之を當時の傳說に對照し『神宣へり』と云ひて之を引けり(太十五の四)使徒等も亦舊約の必ず應ずべきことを信じ(徒一の十六)之を『神の論』と云ひ(羅三の二、彼前四の十一)又之を神と同一視せり(羅九の十七)フィロン。ヨセフスも亦舊約の神の靈の力に依りて書かれたる者なることを明言せり。新約聖書のインスピレーションは稍々之と異れる基礎の上に立てり。インスピレーションの最高例は耶蘇自身にして、彼は又其弟子のインスピレーションの根源也。彼はパプテスマを受けし時聖靈に滿され、其靈の力に依りて其事業をなし、其言を語れり。新約聖書の中心をなす者は即ち新の知くして神靈の力に依り語られたる彼の言にして、新約の此部分は初より確實なる證據として承認せられたり。然れ共彼の證人として彼の顯現の意義を世に明にせんために選ばれたる人々は、神のインスピレーションを要し、彼等に之を與へらるべきこと屬々約束せられたり。(約十四の廿六、十六の十三、一約二の廿七)此約束は耶蘇の世を去りて後成就し、使徒等は聖靈の誘導に依りて教へ、又言及び書翰に依りて教會を建設せり。保羅は其書翰中に明に『基督我に在りて語りり』と云ひ(哥後十三の三)又其福音は『耶蘇基督の默示に由りて受けたり』と云へり(加一の十二)。

【インスピレーションに關する諸說】　インスピレーションに關し古來諸說あり。(一)機械說又は口授說又は逐語的インスピレーション說(The 'mechanical', or 'dictation' theory, or theory of verbal inspiration)　聖書の記者を以て單に神の代書人に過ぎずとなし、聖書の一言一語を以て悉く神の言なる者也となす者にして、此說に從へば、聖書に記されたる事實、教義、教訓、歷史及び年代に關する事柄、他の書より引用せる事、科學の眞理、預言若くは人生普通の出來事に言及せる事等凡て人の業に非ずして神の業也。人は唯聖靈の導ける儘に筆を紙となして神の言を書き記したるに過ぎず。此說は最も古くより行はれたる說にして、基督教以前に於てプラトン。フィロンの之を主張し、教會に於ても近世に至る迄一般に此說を保持したりき。然れ共此說は(イ)口授とインスピレーションとを同一視すれ共、元來此二者は同一に非ず、何となれば口授には靈的感化なく、インスピレーションには靈の交通に由りて言語の助を要せざれば也。(ロ)又此說は聖書の上に顯はれたる現象と一致せず。即ち聖書の記者は實際に於て受動的に非ずして活動的也。彼等は其記せる事實の智識を超自然的に與へられたりと云はず、自ら目擊したる事を記したるか、然らざれば信ずべき記錄より其材料を精撰せりと云へり。(ハ)又聖書には文法上の錯誤、文體の不完全、前後に於る記事の矛盾等あり。例之耶蘇の言語の四福音書に記す所相同じからず、又使徒行傳の記事を悉く保羅の書翰と一致せしめ難きが如し。神を以て聖書の單一なる記者也とせば、如何にして此の如き事實を解說し得んや。(ニ)新約記者の舊約を引くや之を以て神のインスピレーションを受けたる者也となしたること確實なれ共、彼等の之を引くに方りては或は希伯來語よりし、或は希臘語よりし、而して多くの場合に於て逐語的ならずして、原語と相違する所多く、又同一の言語も引く所の記者に依りて相異れり。是等の理由に依り、今日は最早逐語インスピレーション說を把持する者なし。

(二)　階級的インスピレーション說(The theory of degrees of inspiration)　聖書中の文書の價値の異同に依り、其インスピレーションにも亦階級ありと想像する者あり。斯く猶太教のラビ、中世の煩瑣哲學者及び近代の減る記者は、聖書のインスピレーションを暗示(suggestion)指導(direction)振作(elevation)及び主宰(superintendence)の四に區分せり。監督ダニエル、ウィルソンは其一人にして、彼は之に定義を下して左の如く云へり『暗示のインスピレーションとは、眞理の各部分を暗示し、且精密に口授せる場合に於る聖靈の交通をいふ。指導のインスピレーションとは、記者をして其示されたる事柄を自由に記載するを得せしめ、唯其力を働かしむる場合に記者の心を指導する助をいふ。振作のインスピレーションとは、記者の心の努力に一層の勢と勇氣とを加ふる者を云ひ、主宰のインスピレーションとは、記者が其與へられたる默示を毀傷せざるやう注意する者をいふ』と。インスピレーションに程度あるは疑なきことなれ共、右の區分果して完全なりや頗る疑はし。

(三) 動的インスピレーション説 (Dynamical theory) 此説は器械的インスピレーション説に反動して起れる者にして、記者の人間的性質を以て全く使用せられざりしとなさず、神に依りて用ゐられ、導められ、強められたりしとなす。即ち神の力自然の法則に從て、人の能力の上に働けるにて、神は其使命を與ふるに適當なる人を選みて其聖意を通ず。聖書中に發見する創説と不完全とは其人間的要素にして、眞理は神より出でたる者也となせり。エラスムス。アロチウス。パックステル。ヘーレー等此説を保持し、近時多くの學者も、聖書記者は教義及び人間の行爲に關する事に就ては、誤謬なきやうインスピレーションを受けたれ共、比較的緊要ならざる事柄に就ては正確なるを保し難しとの説を抱けり。故に此説を又『緊要説』(Essential theory) とも稱す。此説は器械的インスピレーションに比すれば眞理に近しと雖も、何が故に聖書の記者は緊要の事柄に就てはインスピレーションを受け、瑣細の事柄に就てはインスピレーションを受けざりしや、又此の如き結果を生する神の心と人の心との間に存在する關係如何、又吾人は何を以て緊要となし、何を以て不緊要となすべきや等に就て何等の解説を與へざるを以て尚不充分なるを免れず。

(四) 吾人は聖書に顧れたる事實に基き、インスピレーションに關し左の如き斷定をなすことを得べし。(イ)インスピレーションを受けたるは人にして文書に非ず。聖書の語を以てすれば『人聖霊に感じて語りし也』(彼後一の廿一)インスピレーションとは、或る思想が之を受くる人の心の内容若くは狀態と何の關係もなく、又此人が其儘之を世に宣傳すべき形狀に於て、緊衝的に發吹せられたりといふが如き意義に非ず。彼は坐して書ける時、曾て在りしと同一の心意及び精神の狀態に在る也。而して斯くして彼の書きたる文書は、心意及び精神の特一なる狀態の異常、特例なる產物に非ずして、記者從來の思想及び經驗より生じたる自然の產物たるに過ぎず。而して彼の過去の教育と智識及び彼が全く基督の靈に其身を服從せしめんとしたる過去の努力は、彼が今產出せる處のもの丶中に入る也。(ロ)聖書の記者が神のインスピレーションを受けたりといふは、彼等が聖書を書ける時、聖靈の感化を受けたりとの意に外ならず。凡ての基督信徒は皆此同一なる靈を有し、之に依りて基督に在る眞理を知り、基督に在りてなされたる神の顯現を理解することを得る也。而して彼等の中或者がインスピレーションを受けたりといふは、彼等が其他の人々に優りて神の靈魂に關する基督の意義を領解悟得するの才能を有せりとの意に外ならず。(ハ)インスピレーションは本來靈の賜にして、第二の意義に於てのみ心意上の賜也。神の靈は德に人の中に宿り給ふべしと雖も、人は之がために宗教上の事柄に於てさへ誤謬なき者となり得べからず。インスピレーションは人の凡ての能力を一の目的に向はしめ、之を高め之を純化すと雖も、人を有限の世界以外に導き出すこと能はず。インスピレーションは熱情の如く、鼓舞し作興することに依りて人の心意を照し、愛の如く一の目的に興味を集中せしむることに依りて人の記憶を富ましめ、人生の高尚なる目的の如く、理性に光を與へ、精神に智慧を與へ、又人をして神の性質と目的とに同情を有せしめ、人をして神を見、其默示を悟了することを得せしむ。此の如き意義に於て聖書の記者は神のインスピレーションを受けたる也。

インデックス リプロラム プロヒビトラム

『禁讀書目』の條を見よ。

印度 India or Hindustan.

地名 廣袤 一百四十七萬四千方哩、北ヒマラヤ山、南ベンガル灣及び印度洋の間に橫れる廣大なる帝國にして、氣候風土同一ならず。概して水利乏しけれ共、ブラマプトラ及びガンヂスの二大河あり。後者は其長サ一千三百哩に達す。人口二億九千四百卅六萬（一九〇一年調）世界人類の五分の一を占む。カルカッタ、ボムベー、マドラス及びルクナウは此國最大の都市也。此國の人民は雜種也。亞歷山大帝以前此國に居住せし原始民族今日尙存在す。最古の人種なドラヴィダ族と稱し、此中にタミル、テルグ、マラヤラム語等を用ゆる者を含む。此等の土人は皮膚淺黑にして、北方より來れるアリアン種及び波斯、亞剌比亞等より來れる回教徒と混合せり。最近の混血種は歐羅巴、殊に英國より來れる者にして、其數少しと雖も最も優勝の地位を占む。人民は其信奉せる宗教に依りて區別せらる。婆羅門教（又は印度教と稱す）は其起原最も古く、基督降生數世紀以前に溯るべし。次に佛教にして一時婆羅門教を壓倒せんとする勢ありしが、後婆羅門教の復興に依り一時殆ど根絶せんとするに至れり。次に印度に入り來りしは回教にして、最後に入り來れるも基督教とす。此等の宗教の中現時最も勢力あるは婆羅門教及び回教にして、人口の九割二分は此二宗教に屬す。即ち前者は二億七百萬、後者は六千二百五十萬の信徒を有す。佛教は之に次ぎて九百五十萬の信徒を有し、基督教徒又之に次ぎて殆ど三百萬の信徒を有す。此外シック教徒二百萬、ゾャーン教徒一百五十萬、拜火教徒九萬四千人、猶太教徒二萬人あり。言語は一

百五十種に分る。其中最も重なるは、アリヤ印度語、ドラヴィダ語及び西藏緬甸語の三にして、國民の九割七分は此等の言語を用ゆ。而してヒンデ、ベンガリ、マラチ、パンヂャビ語等は第一種に屬し、タミル、テルグ、マラヤラム語等は第二種に屬す。印度上古の歷史は漠として知る可らずと雖も、アリアン種の中央亞細亞より印度に移住し、土人を征服して恒河の流域に繁殖せしは、紀元前凡そ二千年の昔也とす。リグヴィダの時代（前一四〇〇）にはアリアン種は遊牧の人民にして未だ種姓なるもの勿りしが後漸く墮落し、メヌの法典（前九〇〇）には明に僧族、王族、平民、奴隷の四種姓を記載せり。釋迦の出でたるは紀元前凡そ六百年の頃にして、彼は平等の主義を唱へて種姓の制度を破壞せんと企てしかば、從來僧族の壓迫に苦める諸種姓は爭ひて佛教に歸依し、其死後凡そ二百餘年を經て阿育王（アショカ）のマカダ國王となるに及び、厚く佛教を尊信し其弘布に力を盡せしを以て、其勢一時全印度を風靡するに至れり。回教徒の初めて印度に侵入せしは紀元六六四年にして、彼等は一時擊退せられしが、七一一年再び大軍を率ひて侵入し、再び擊退せられたり。印度が歐羅巴と關係を生じたるは第十五世紀の末にして、葡萄牙人ヴァスコダガマが始めて印度に航路を開きしを以て初となす（一四九八）爾後百餘年間葡萄牙人はゴアを根據として東洋の商權を專有せしが、異教徒を强て基督教に改宗せしめんとせしと、土地の侵略を企てしとに依りて遂羅門教徒及び回教徒の反抗を受けたり。此時に際し和蘭人も漸く意を東洋貿易に注ぎ、東印度會社を組織し（一六〇二）葡萄牙の植民地を奪ひ、英國も亦東印度會社を創設し（一六〇〇）次第に遂羅門教徒の尊敬を得たり。英人は葡萄牙人の覆轍に鑑み、土地の侵略を後にせしが、マーラータの同盟起りて以來蜂亂相續ぎ爲めに貿易上大塡害を受けたれば、東印度會社は遂に土地を占領して貿易の安全を謀ることを議決するに至れり。（一六八九）是れ英人が印度侵略の濫觴也。之より先き佛蘭西も印度會社を組設し（一六〇四）東洋の貿易に從事せしが、其根據地英人の根據地を距ること遠からざりしが故に勢ひ競爭を免れず。偶々アルコット地方に內亂あるに乘じ（一七四四）英佛二國各副王を擁立せんとて相攻爭し、英國東印度會社書記クライブを得たり。爾後印度に內亂ある毎に英人は之に干涉し、着々として其勢力を扶殖、擴張し、一八四〇年佛國の勢力を壓倒し、一七六一年英人は最後の勝利を得たり。爾後印度に內亂ある毎に英人は之に干涉し、着々として其勢力を扶殖、擴張し、一八四〇年の初には印度全土遂に英國の版圖に歸せしが、一八七七年英國政府は印度會社の政權を收めて之を政府に移し、英國女皇ヴィクトリアは印度女皇の尊號を荷ひ、政府に印度省を置き、カルカッタに總督を派遣し、印度大臣の下に在りて印度の政務を執らしむ。英國は又緬甸と葛藤の末一八八五年遂に之を滅ぼし、其地を擧げて印度の屬州となせり。

【基督教の傳道】 過去二百年間歐米の基督教會は印度傳道の爲めに其全力を盡し、ジェーゲンバルグ。ジュリルツ。ヘンリー、マルチン。ケーレー。マルシマン。レギナルド、ヘベル等の名は近代の印度傳道史上に其光彩を放てり。古代の傳說に依れば初めて印度に基督教を傳へたりしは使徒トマスなりしといふ。然れ共其眞偽は素より知り難し。確實なる歷史は葡萄牙王がフランシス、ザヴィエー（一五二二）死を宣教師として此國に送りたりしに初まる。一五三四年ゴア印度の最初の監督區となる。葡萄牙も印度を占領せし一の目的は編會を宣傳するに在りき。斯くて羅馬教は幾多の變遷を經て漸く羅馬に赴きしが、其印度國民の道德的及び社會的生活に及ぼせる影響は極めて少し。新教の最初の傳道事業は一七〇五年丁抹王フレデリック四世に依りて創始せられ、其翌年ジェーゲンバルグ（Ziegenbalg）トランクイバルに到着し、愛に其獻身的事業を開始せり。是より後歐米の傳道會社は相競ふて宣教師を送りたりしが、當時の宣教師は唯に土人の抵抗を受けたりしのみならず、東印度會社は其傳道事業を妨害し、或地方に在りては全く傳道を禁止したることあり き。於是一八一三年英國國會は、東印度會社に命じて印度に在る英國臣民に傳道及び教育を爲すの權利を與へしむべしとの決議を通過し、一八三三年更に傳道事業を爲すの自由を許し、據さて此特權を米國より來れる諸傳道會社に附與せり。

印度に於る基督教の近況に關しては、一九〇七年四月東京に開ける萬國學生基督教青年會大會の席上に於て、ブガー氏が『印度と基督教』と題して演說せる者、其大體を述せるを以て、其大要を摘出すべし。氏曰く『第三世紀の昔より南印度にスリヤ基督教徒の一團ありき。第十六世紀に至り有力なる羅馬教の布教あり。最近二百年の間に新教の傳道起れり。去れど今日尙印度に於る凡ての基督信者は人口の百分一に過ぎず。此は筐にスリヤ基督教の千七百年間、羅馬教の四百年間、新教の二百年間の傳道の結果としては憐れむべき者也と云はざるべからず。而して其印度教に及ぼせる勢力に至ては、第十八世紀の終りまで教義にも實際にも何等見るべき影響なかりし事明也。然るに第十九世紀に至り新風潮は來り、新運動は起れり。其最も重要にして基督教と密接なる關係を有するや、吾人の總密なる商量考慮

ん要する者あり。(一)教育ある階級に於る歐化主義の勃興。其最も注意すべき要點は(イ)改革に依れる進歩に對する希望。彼等は印度が一變するか、然らずんば滅亡するあるのみなるを知り、有らゆる方面に於て進歩と改革とを叫べり。(ロ)教育に對する熱心。彼等は泰西的訓練なくんば到底印度の實力を進め、國家の繁榮を來すこと能はざるを認め、國語と英語とを以て教育の弘布を切望せり。(ハ)自由を得んとの熱望。彼等は英國民の自由に對する光榮ある歷史を學び、之を印度に移植せんことを望み、之がため盛なる國民的運動起れり。(ニ)平等の要求。人間の尊嚴は平等也との感覺動に國民的意識を鼓吹せり。是れ現時の印度に於ける最強最烈の感情にして、彼等は教育は何人も等しく有する權利なるを認め、職業と仕官に機會の自由を要求し、從て此觀念は階級制度の問題に及べり。(ホ)婦人に對する新態度。不當なる男尊女卑の舊思想に基ける多くの習慣は消滅しつゝあり。即ち寡婦に再婚を禁ずるの不條理なること、小兒結婚の大惡事なること等次第に明になり來れり。(ヘ)人道的新感情。印度政府は道德上の要求より、印度教の認容せる非人道的の習慣、即ち寡婦の燒殺、旅人の殺戮と掠奪、殺兒、宗教上の苦行苦行及び淫祭の行爲等を禁じ、國民も亦政府の命令を遵守せり。

(二) 宗教上の變化。以上に智識的社會的生活に影響する重なる點なれ共、宗教に至りては彼等大に泰西の勢力を怖れ、印度教を保護するために多くの有力なる團體基督教に反して起れり。而して今日教育ある人の多數はアニーベザント夫人の首唱に成れる印度教のリバイバルとして知られたる團體に加盟せり。此徒は印度教を完全に保護せんとする者にして改革を喜ばざる者也。其外多種多樣なる凡ての團體は皆熱心に基督教に反對し、印度教に對する基督教徒の批評を反駁するために餘力を擲ぎす。其重なる主張の一は、彼等の維持する滅教義は基督教に劣ることなしと云ふに在り。彼等は印度教の人類的宗教なることを唱へ、全世界に傳道者を送らんと企て、且其眞實なる一神教にして純全にして且實際的なる道德を有し、其學說は以て迷信を破るに足り、近世の科學哲學と完全なる調和をなせりと斷言せり。抑も此等宗教的改革運動の意義如何。(イ)是れ印度教の防禦的武裝の破れたるを示す。今や教育ある人々の心は開かれ、彼等は印度教が之に抵抗せんために自ら用ひたりし泰西的勢力を熱心に歡迎し、且之を非常に尊重せり。(ロ)新運動の凡ての主たる觀念は印度教の精神の正反對也。印度教は過去の幻影に眩惑せられ、改革を尊き入るゝ事に依りて固執するに反し、近世の印度人は未來進歩を求む。彼等は階級的思想を忘れ、人類平等の主義に依り、婚人に對する新なる侯氣を教へ、其法律と習慣が見て以て動物に劣れりとせる人種に同情的にして、印度教の一八三〇年以後の事にして、力ある勢力の活動し初めたるは第十九世紀のことなるが、此等の大變化の生じ來りし重なる原因に基づき左の如し。(あ)英國的教育。印度人の思想を近世的ならしめ、彼等に自由の價値を領會せしめたり。(い)基督教的教育。(う)基督教的熱善事業。(え)人民の幸福を增進することを力め、宗教と階級の如何を問はず、凡ての種族を平等に遇せんとせし政府の行動は、多くの方面に於て大に近世の印度人の思想を刺戟し變化せしめたり。上來述べ來れる所に依りて、印度に於ける著しき智識的、社會的、宗教的勃興が、基督教傳道と印度政府の兩者の相結合せる勢力より來れるを見るべし。而して吾人もし最も有力なりし凡ての基督教的運動が新教々會より來れることに注目せば、此大なる變化の重なる原因は新教の傳道にして、羅馬教の事業は價値なきに非ずと雖も、革命的運動の要素として認知せらるべき程の否に非ざるを知るべし。印度に於る新教は既に期る成功をなしたるが、更に其發達の跡を驗すれば、左の著しき點を有するを見るべし。即ち(一)新教傳道の數字上の成功は遙に羅馬教、及びスリヤ基督教の事業の上に在り。一八七二年より一九〇一年に至る廿九年間に基督教は長足の進歩をなし、統計に依れば百分の百十三の增加を爲せり。而して新教は實に四倍の增加を爲したり。(二)新教傳道のみ凡ての宗教、凡ての階級より信者を得ることに成功せり。印度教に屬する最高階級と、回教より得たる信者の數は僅少なれ共兎に角之を得たり。新教會にはあらゆる階級の民を包容して印度帝國の縱圓たり。(三)新教傳道は印度の各地に散在する原始的民族と、壓抑せられたる下層社會より多くの信者を得、從て其勢力大に彼等の間に及び、彼等の中に基督教に向ひ來る大運動を惹き起せり。(四)新教基督教徒は全印度に於る最も進歩的なる團體也。此事は下層社會より無學文盲なる多の人々隊を爲して絕久不教會に後入し來るにも拘はらず、婚人教育に於て新教徒第一流に在り、高等學校の學生は普通人口一萬人に一人の割合なれ共、新教徒の中に在りては一千人に一人の割合なるを以て知

るべし。又基督教の與ふる教育と社會的自由の結果として、新教徒は富と社會的位置と其勢力とに於て急速なる進歩を遂ぐつゝあり。ベンガルのブラマ、ソマジの徒を除く外如何なる團體も、斯る大なる割合にて社會の尊敬を受くる位置を占むる教育ある人を有せざる者なし。(五)新教々會の進歩の最も著しきは、基督教的生活に在り。過ぐる二年の大リバイバルに於て教會內に於ける基督の活力は各方面に顯はれ來り、至る處に基督信徒を動して一層深き信仰と一層深き生活に達ましめたり。而して其結果の最大なる者は傳道的熱情の勃興にして、過去廿五年間に自給傳道なし大成功を得たる若干の新教徒の男女を出せり。傳道隊と地方傳道會社は多くの所に起れり。ヂャフナとチンチヤベリ傳道會社は其最も著名なる者也。而して最も光榮ある新計劃は純く宗派を離れ純然たる印度人より成れる國民的傳道會社の組織にして、此會社は印度と錫蘭に在る凡ての新教々會の青年代表者の會合に依りて、一九〇五年の耶蘇降誕節の日セランポレスに於て成立せる者也。終りに新教傳道の未來に就て數言を述べんに、吾人は印度人を大別して三となすことを得べし。第一は教育ある階級にして、既に述べたるが如く、彼等の中に存せし印度教の防禦的武裝既に破れ、基督教には反對なるも、尙基督教的思想に心を動され、之に支配せらるゝ者也。一八三〇—七〇年の間に多くの基督教的學校に於て基督を信ずる多數の學生を出し、此等の悔改者率先して大なる働を爲せり。一八七〇年以來學校に於る信徒の增加は減退したれ共、青年會の事業盛大となり、教育ある階級より信者の起り來ること今日の如きに未だ曾て之れあらず。第二の階級は原始的民族と下層の民とにして、此等の者は絕えず群を爲して基督教に來り、其社會的地位の進歩顯著し。第三の階級は印度人民の中堅たる印度教徒と回教徒也。此等の人々は其信條の偏執なる教育に依りて其心固定し、新しき眞理を容るゝに不適當となれる者にして、未だ泰西教育の刺戟を深く感ぜざる者也。此等幾百萬人の傳道は多額多緯の大事業にして、之を教化するは全く將來の事に屬す。

インノーセント一世 Innocent I. 人名 羅馬法王(四〇二—四一七)。法王アナスタシウス一世の子にして、彼に嗣ぎて法王たり。彼の取りたる主義は、法王の權力を擴張し得べき凡ての機會を利用すべしとの、さにして、彼は凡ての監督に向て靠要なる事件は法王に諮議すべき命じ、羅馬教會は使徒得得より傳承し來れる者なれば、凡ての教會は堅く之と結合し、其權威に服從すべきを極言し、如此くして漸次其權力を擴張せり。四一七年彼はペラギウスの異端排斥に關するカルセーヴに於る會議の決議に准允を與へ、又ヴリソストムがアレキサンドリアの大監督テオピラスのために迫害せらるゝや之に干涉し、之を救ふこと能はざりしと雖も、彼に慰籍と同情とを與へたり。彼れ死して後羅馬教會聖徒の中に列せらる。

インノーセント二世 Innocent II. 人名 羅馬法王(一一三〇—四三)。其名はガレゴリー、才智あり、其生活又高潔にして、王室と親密の關係を有せしがば、法王ホノリウスの時さに死せんとするに方り、法王內閣員の一部はグレゴリーを選びて法王と爲せり。然れ共彼は羅馬貴族の多數が彼に敵するを知り、遁れて一庵室に其身を置せり。此時他の法王內閣員はペテル、ピエル レオニ(Peter Pierleoni)を選びて法王となし、之をアナクレクス二世(Anacletus II.)と稱せり。於是インノーセント二世はピサに遁れ、次にセノアに往きしが、ベルナルドは彼を迎へて佛蘭西王ルイ六世と會見し、エタムプスに開ける會議に於てもインノーセント二世の法王たることを承認せしがば、當後兩派の間に長き爭あり。一一三〇年ジュールシバルタに開ける會議にはインノーセントの法王たることを承認し、使を遣はして獨逸帝ロテーア及び佛蘭西に在る諸監督の之を承認せんことを求め、英國王ヘンリーも亦インノーセントの法王たるを承認せしがば、彼は大に之に勵まされて、ロテーアの羅馬に入りてアナクレクスを逐はんことを請へり。一一三三年ロテーア即ち以太利に入りて、アナクレクスを聖ペテル寺院に圍繞し、インノーセントを立てゝ法王となせり。後アナクレクス死するに及び、一一三九年ラテラン會議に於て教會の平和宣言せられしが、シヽリー王ロージエルと聯て敗れ其捕となり、僅にローゼルの王たることを承認し、敎されて羅馬に歸り、後只管獄中に於て寥りたる靈魂を醫するに勤めたりしが、後又佛蘭西王ルイスとの平和破れ之と爭へる際死去せり。

インノーセント三世 Innocent III. 人名 羅馬法王。其名はランダス、最古のロンバルド家の一より出で、羅馬の貴族及び法王アレキサンデル三世に敵意を有する僧侶のために選ばれて、自ら法王と稱せしが(一一七九)後アレキサンデルの爲めに捕せられ、ラ、カヴァの庵室に送られたり(一一八〇)。

インノーセント三世 Innocent III. 人名 羅馬法王(一一九八—一二一六)。羅馬貴族の子にして、一一六〇年に生れ、當時の完全なる

教育を受け、法王ヤレスチンに隨ぎ三十七歳にして法王に擧げられ、十八年間其權力を振ひしが、法王政治は實に彼を以て其極點に達したりき。彼が法王權を主張せることはグレゴリー第七世と異らざりしが、彼はグレゴリーの知く愚經辛苦を經ることなくして、教會を支配する全權を執行し、又各國の支配者なる監督する權なも實行せり。彼の主張に從へば、法王は此世に於る神の代理者にして、教會を支配するの全權を有するは勿論、國家の政治は之を各國の支配者に一任すと雖も、法王は其支配者の行爲を監視し、其惡行を責むるの權力を有し、もし法王の命に從はざる時は其位を褫奪するの權あり。彼の說に從へば、使徒等が用ゐたる『二の劍』(路廿三の廿八)は彼得の手に在りし者にして、即ち彼得及び彼得の繼承者たる法王が神より與へられたる二種の權力の譬喩也。此の如き信仰に依りて、彼は其在位の間靈的權力と政治的權力とを實行したりき。今其實例を擧ぐれば、第一、獨逸に於て新帝を立てんがため大亂爭の起りし時、彼は其二名の戰爭者を審判し、自らよしと認むる者、即ち彼に服從せる者を正當なる皇帝と決定して、之を贈けたり。然るに難くして彼の助力したる者も一たび帝位に登るや、又遂に彼に反對するに至りしを見て、彼は更にフレデリッキ二世を擧げて皇帝となし、之に代はらしめたりき。第二、佛蘭西國王が妻を離り、後之を憎み、國内に在る監督の准允を得て、遂に之を離別し、新に他の妻を娶りしや、彼聞て大に之を怒り、嚴しく其不法を譴責し、且新妻を去りて再び舊妻を迎ふべしとの一を命ぜり。國王は其愛する新妻を出し、其憎める妻を再び迎へ入るるに忍びず、斷然法王の命を拒まんとしたれ共之を免すこと能はず、遂に止むを得ずして彼の命に從ひ、再び最初の妻を迎へ入れたりき。第三、英國王は大監督を選ぶ事に就て法王と其意見を異にし、法王に服從せざりしが、彼も亦終に法王に屈從し、其國を法王に讓り、毎年貢を法王に納むることを約して其政治を預り、毎年貢を法王に納むることを約したりき。彼も彼は如何にして如此佛英兩國王に勝を制したりしやと云ふに、彼は彼等が己れの命に服從せざるを見て、法令を發し其國内に於る教會の大禮典の執行を禁じたりき。於是國民は彼等が救を受くるに最も必要也と信じたりし洗禮、晩餐等の禮典に預かるを得ず、死者あるも教會にて葬儀を擧げて之を葬るを得ず、下等動物の如く屍を土中に埋むるの外道なかりしかば、國民は此世に於る慰着を失ひしのみならず、又永遠無窮の生命をも失ふが如く感に、非常なる憂悲に陷りたりき。左れば之を見ては如何に頑麗なる國王と雖も法王に服從せざるを得ず、遂に法王の爲めに勝を制せらるゝに至りたりき。蓋し當時一般の人々は教會の禮典を以て救濟に必要也と信じ、又當時の國民に概して愛國心に乏しく、其國王みを以て專に壓制家に過ぎずとなせしが故に、此壓制家が法王に服從するは敢て彼等の愛とする所に非ざりき。且當時の國王は多くは不品行にして、婚姻上の不潔、姦淫の罪惡等ありしを以て、法王は正義の保護者として之に強るの機會を得たりき。是れ彼が比較的容易に國王に勝を制するを得たりし所以也。彼は又第四十字軍の首唱者にして、彼の奬勵に從ひ、數萬の軍勢は海を航進するの計劃なりしが、船賃缺乏のため船主に誘惑せられ、中途より コンスタンチノープルに出で、其地を攻め取りて、其處に拉丁王國を建設せり(一二〇四)於是第後數十年間コンスタンチノープルの監督も亦法王に服從して彼の命に從ひ、再び最初の學を迎へ入れたりき。第三、英國王は大監督を選ぶ事に就て法王と其意見を異にし、法王に服從せざりしが、彼も亦終に法王に屈從し、其國を法王に讓り、唯自ら屬土として其政治を預り、毎年貢を法王に納むることを約したりき。彼も彼は如何にして如此佛英兩國王に勝を制したりしやと云ふに、彼は彼等が己れの命に服從せざるを見て、法令を發し其國内に於る教會の大禮典の執行を禁じたりき。於是國民は彼等が救を受くるに最も必要也と信じたりし洗禮、晩餐等の禮典に預かるを得ず、死者あるも教會にて葬儀を擧げて之を葬るを得ず、下等動物の如く屍を土中に埋むるの外道なかりしかば、國民は此世に於る慰着を失ひしのみならず、又永遠無窮の生命をも失ふが如く感に、非常なる憂悲に陷りたりき。左れば之を見ては如何に頑麗なる國王と雖も法王に服從せざるを得ず、遂に法王の爲めに勝を制せらるゝに至りたりき。蓋し當時一般の人々は教會の禮典を以て救濟に必要也と信じ、又當時の國民に概して愛國心に乏しく、其國王みを以て專に壓制家に過ぎずとなせしが故に、此壓制家が法王に服從するは敢て彼等の愛とする所に非ざりき。且當時の國王は多くは不品行にして、婚姻上の不潔、姦淫の罪惡等ありしを以て、法王は正義の保護者として之に強るの機會を得たりき。是れ彼が比較的容易に國王に勝を制するを得たりし所以也。彼は又第四十字軍の首唱者にして、彼の奬勵に從ひ、數萬の軍勢は海を航進するの計劃なりしが、船賃缺乏のため船主に誘惑せられ、中途より コンスタンチノープルに出で、其地を攻め取りて、其處に拉丁王國を建設せり(一二〇四)於是第後數十年間コンスタンチノープルの監督も亦法王に服從するに至りたりき。一二一五年法王の召集に應じ、諸方の監督及び大監督等羅馬に遊會し一大會議を開きたりしが、此會議は唯法王の屈榮に盲從して之を承認したりしに過ぎず。而して此會議に於て法王が教會の頭首たること明白となり、彼は實際に獨裁者主政治を實行し、一人にて教會の政務を決定したりき。インノーセント三世は此の如く法王の權力を主張し、擴張したれ共、又基督を敬愛する念深く、基督の福音を宣傳するに努めたりき。

インノーセント四世 Innocent IV.

人名 羅馬法王(一二四三—五四)。セレスチヤン四世に嗣ぎて法王となる。其カルヂナルたりし時、獨逸帝フレデリッキ二世と友とし善かりしが、法王となりて後、總會を召集しフレデリッキを廢し、且之を破門せしかば、兩者の間に長き爭あり。斯る爭の中に在りて彼は尙東洋傳道を計劃し、又宗教法に關する著書を爲せり。カルヂナルは赤帽を戴くべしとのことを定めたるは此法王也。

インノーセント五世 Innocent V.

人名 羅馬法王。グレゴリー十世に嗣ぎて法王となる(一二七六)在位僅に數月、東西兩教會の一致を謀らんため、獨逸皇帝に大使を送らんと計劃中死去せり。哲學其他に關する著書頗る多し。

インノーセント六世 Innocent VI.

人名 羅馬法王(一三五二—六二)。クレメント六世に嗣ぎて法王となる。教會の法律に精通し、且道德上頗る嚴格なる人なりしかば、其法王となるや直ちに當時行はれたる惡風の矯正に着手し、先づ不法の授與金を取りかへし、過重の租稅を廢し、其藪冠の際昇級を得んとの希望を以てアヴィヨンに集まりたる僧侶を遣責し、五日以内に其任地に歸るべきを

命じ、身を以て節儉を示し、カルディナル等の奢侈を禁ぜり。又羅馬に於て即位せるチャールス四世を即日獨逸に歸らしめ、ボロナをミラノの首長ベルナルドよりの奪ひ取り、英王エドワルドと佛王ヨハンとの間を調和せしめ、其妻を毒殺せるカスチルのペドルを破門し、メンザカント僧派を再興せし等其施設せし處頗る多く、方正剛直の法王也として知らる。

インノーセント七世 Innocent VII.

人名 羅馬法王(一四〇四—〇六)。六十五歳にしてボニフェース九世に嗣ぎ法王となる。品性の高潔と博學とに依りて著はる。即位後幾ならずグウエルフ、ギベルリン兩黨の爭起り、羅馬市民の殺さるゝ者あり、法王は爲めに一時羅馬を出奔するの止むを得ざるに至りしが、後間もなくして羅馬に歸れり。當法王ベネヂクト十三世セノアに來り、インノーセントと和せんことを請ひしが之を許さず。法王は幾ならずして彼に卒中症を以て死せり。

インノーセント八世 Innocent VIII.

人名 羅馬法王(一四八四—九二)。監督、カルディナルを歷て法王に擧げらる。基督教國の君主を結合して土耳其に對し十字軍を起さんとし、一方に君主と國民とを勸めて兵を擧げしめんとすると共に、他方には自ら土耳其帝と條約を結び、年々二十萬圓の租稅と基督の俘虜を刷したりと傳へられたる聖槍とを得て、土耳其帝位の覬覦者セヲムを幽閉せんことを約せり。彼は貞潔の譽を破り十六人の子あり。十三歳の小兒を立てゝカルディナルと爲す等非行頗る多し。

インノーセント九世 Innocent IX.

人名 羅馬法王(一五九一)。教會財庫の讓與を禁じ、過重の租稅を減じ、ヂンコナの港を改築し、サヴル河の氾濫を防ぐ爲め、聖アンゼロの側に運河を築く等施設する所頗る多かりしが、在職僅に二ヶ月にして死せり。

インノーセント十世 Innocent X.

人名 羅馬法王(一六四四—五五)。七十二歳にして法王に擧げらる。久しく其兄弟の妻ドンナ、オリンピアと不正の關係を有せしが、夫の病死後オリンピアは公然法王の室となり、隱然其の生活を指導し、法王を勸めて歲入增加の道を謀れり。法王は正統教理を保護するに熱心にして、ヤンセニウスの說を罰せり。然れ共財路は公然行はれ、官職は公然賣買せられ、法王は其財庫を富ますんとの目的を以て、穀物賣買の特權を獨專し、其結果以太利に於る農業の衰頽を來せり。要するに教會は彼の治世に於て最も沈衰慘敗に赴きたりき。

インノーセント十一世 Innocent XI.

人名 羅馬法王(一六七六—八九)。剛直にして才能あり。其法王となるや、僧侶の紀綱を振肅し、當時社會一般に行はれたる不道德を改革せり。彼は道德を重んじ、其顧の爲めに其子を世に送り、其他の人々を遠して義憤を受けしめ給へりとの教義也。是れアウガスチン派普通の神學說にして、カルヴイン派の教ふる所也。カルヴイン派の之に反對する教義をスウプララプサリアニズムと稱す。其略を見るべし。

インマヌエル Immanuel (ヒブリー Emmanuel)

人名 『神我倩と僧に在り』の義にして、ユダ王アハズが四利亞及びエフライムに攻められたりし時、預言者イザヤが神の與へ給へる徴兆として生るべしと預言せる子の名也(賽七)然れ共如何なる意義に於て豫兆となるべきや明ならざるを以て學者の間に諸說あり。又インマヌエルの母をハーアルマー(ヒブリー 處女)とあり)として記せり。日本譯には『處女』と譯したれ共、此原語は少女の義にして必ずしも未婚の處女の意あるに非ずとしたり。企劃に對して、彼は却て教會を害する者也となして之に勸力せざりき。

インノーセント十二世 Innocent XII.

人名 羅馬法王(一六九一—一七〇〇)。佛國僧侶と劇烈なる紛爭の後遂に之に勝ち得たるは、此法王の力也。彼は又熱心に僧侶の惡風矯正に力を盡せり。殊に親戚推挽を禁ずるの法令を發し、此弊風を根絶したるは彼の功に歸すべし。

インノーセント十三世 Innocent XIII.

人名 羅馬法王(一七二一—二四)。此法王の治世中は教會一般に平和にして、以太利は繁榮せり。

インフララプサリアニズム Infralapsarianism.

教義 Infra は『後』の義、Lapsus は『墮落』の義にして、神は其榮光を顯はさん爲め、世界を造り、人の墮落を許容し、墮落したる人々の中より無數の人々を『恩の器』として選び、其顧の爲めに其子を世に送り、其他の人々を遺して義憤を受けしめ給へりとの教義也。是れアウガスチン派普通の神學說にして、カルヴイン派の教ふる所也。カルヴイン派の之に反對する教義をスウプララプサリアニズムと稱す。其略を見るべし。

す。此語の冠詞（希伯來語ハーアルマーの『ハー』は冠詞也）を有するに拘ても諸說あり。或は給人の稚說な總稱せる也と云ふものあり。或は預言者又は王の寵を指せる也と云ふものあり。或はユダの民又はダビデの家を擬人化せる也といふ者あれ共何れも當らざるが如し。此預言を解するの道唯當時の歷史的狀態、イザヤが初めより有したりし說念、及びダビデの家に關する思想を考ふるに在るのみ。當時の歷史的狀態は左の如し。アハズ王の治世に方り四利亞及びエフライムの王同盟してユダを攻む。彼等の目的はユダをも强てアッスリヤに對する此攻守同盟の中に加へんとするに在りしが、アハズ之を肯ぜざりしが故に、彼等兵を擧げてユダを攻めアハズを屈し、彼等の傀儡子を立てゝ之に代へんとせり。此風聞一たびユダに達するやヒ下の人心動搖せしかば、イザヤ、エホバの託宣に依り、往きてアハズを迎へ、此同盟に就て語り『此事行はれず』と云ひ、且救を得るの道唯エホバを信ずるに在りとの事を告げたり。後又彼はアハズに告げて、エホバに一の證兆を求めよと云ひたれ共、アハズ之を求めざりしかば、イザヤはアハズの頑固と不信とを怒り『之を小事として又我神をも煩はさんとするか、此故に主自ら一の證兆を賜ふべし』とて、インマヌエルと稱する子の生るべきことを告げたる也。

抑も此インマヌエルは證兆なりや、又は確證なりや。之に關する學者の說一ならず。或は云く、是れ北部諸邦の同盟成らずして、ユダのエフライム及び四利亞の手より救はれん事の約束也と。此說に依れば證兆と云ふはインマヌエルの名の意義（『神我僕』と解に在り）と其出生の時とに在り。即ちインマヌエルを指せるに非ず、如何なる少婦にても孕みて子を生まば、神がユダをエフライムと四利亞より救ひ給へる紀念のために、其子をインマヌエルと名くべしとの意也。此解說に甚だ單純なれ共、マヘルシヤラルハシバズの預言（八の一―四）と重複するのみならず、此二國より救はるゝは幾竟東にアッスリヤの覇絆を擊るに外ならざれば、直ちにインマヌエルの意義に衝突せりと云はざるべからず。或は之を以てインマヌエルの名の意義と、其出生當時の狀態とに關せる事とし、ユダが北部諸邦の同盟より救はるべしとの事（インマヌエル）と、ユダがアッスリヤの爲めに蹂躪せられて荒廢に歸すべしとの事（『乳酪と蜂蜜とを食はん』）との二を預言せる也と說くものあれ共、其結果前說と異らず。故に吾人は此預言を以て更に大なる意義を有せる者也として解說せざるべからず。而して之を爲すには更に數事を考へざるべからず。即ち先づ他人の通常稱して國民的危機と稱する者も、預言者殊にイザヤの知き者に在ては、又是れ宗教的危機也。彼がアハズに同ひ『もし爾曹信ぜずば堅守豆つことを得じ』と云へるは、無意義の言に非ずして、實に彼が預言者的生活の中心思想也。而してユダの王も民も共に此信仰を缺きたりき（七の十二、十三、八の五以下）。又此時イザヤは意氣頗る激昂せる者ありしが、アハズが彼の言を斥くるに及びて、彼は益々激昂して『赤我が神をも煩はさんとするか』と云へり。左れば彼が與ふる證兆に必ずしも魯兆也と云ふ可らず。彼に眼を放ちてエホバの國の運命を卜し、神の審判が此不信なる王國の上に下り『エホバはエフライムがユダを離れし以來臨みしなき日を臨ませ給ふべく』其日『凡て國の中に殘れる者は乳酪と蜂蜜とを食ふべき』事を見たり。然れ共是れ終りに非ず、遺れる民は立ち歸り、荒廢の中に『神我僕』と信に在り』といふ者あるべし。換言すれば彼はユダ國民の不信に依り、アッスリヤの爲めに蹂躪せられ、耕田は變じて牧場となり、僅に生存せる民は乳酪と蜂蜜とを食ひて生くるに至るべく、而して後悔改めて救はるべしとの事を預言せる也。四利亞とエフライムとより救はるべしとの事を預言せるには非ず。是れイザヤ預言の直接の意義なれ共、希臘譯聖書の記者が此言に神秘的の意義ありと信じたりしや否明ならず。但し希臘語の παρθένος は一般少女の義にして、必ずしも未婚婦人の意に非ず。然れ共メッシヤが處女より生るべしとの信仰は早くよりパレスチナ及び近歷山地方に流行したりしが如し。此信仰は以賽亞書の精や神秘的なる此語著くは希臘譯の語より出でたる者なるべしと雖も、新約全書記者がイザヤの言を耶蘇の生涯に適用したるは（太一の廿二以下）彼等が耶蘇の生涯に於て此語の最も深き宗教的意義を發見したりしが爲めなるべし。

ウの部

ウァイア ダンカン ハルクネス Weir, Duncan Harkness [人名] 一八二二―七六 蘇國の神學者。グラスゴー大學東洋語學の教授にして、希伯來語に精通し、希伯來語及び舊約聖書研究の神學上最も重要なる人明にせり。彼は又聖書改譯者の一人にして舊約聖書を擔當せり。キットーの『聖書文學雜誌』及び『帝國聖書字典』に時々寄稿せ

るの外著書なし。是れ彼が教授の職に其全力を委したるが爲めにして、彼の知く希伯來語に精通せる者が、完全せる著書を遺さゞりしは學者の一般に遺憾とする所也。

ウァイゼーッケル カルル Weizsäcker, Karl [人名] 一八二二―九九 獨逸の神學者。一八六一年バウルに繼ぎて、チュビンゲン大學の神學教授となり、又『獨逸神學年鑑』の主筆として有名也（一八五六―七八）『聖書史の研究』（一八六四）『使徒時代』（一八八六、英譯一八九四）の著あり。

ウァイトブレヒト ゴットロブ フリードリッヒ Weitbrecht, Gottlob Friedrich [人名] 一八四〇 獨逸の神學者。其著『耶蘇傳』（一八九六再版）は直截簡明を以て名あり。

ウァイズ ベルンハルド Weiss, Bernhard [人名] 一八二七 獨逸の神學者。ケーニヒスベルヒ、ハルレ、ベルリン諸大學に學び、殊にドルチルの感化を受くること多し。一八五二年ケーニヒスベルヒ大學の講師、續て助教授となり、一八六三年キール大學の神學教授となり、一八七七年伯林大學の神學教授となる。新約聖書に關する造詣頗る深く、聖書神學の事業の尚未だ充分明ならざりし時に方り、新約聖書の作者は作者自身の書きたるものに依りて解說せざる可らず、又其教訓の相違を明白に區別せざる可らず、然れ共其相違の中に根本的一致を認め、相互間の關係を發鑰さを明にせざる可らずとの事を明白にしたるは、ウァイズの力與りて大也とす。其著『新約聖書神學』は此精神に依り綿密、緻密に聖書の注釋的研究を基礎として成りたる者にして、一八六八年初めて世に出で、留後五版を重ね、英語にも飜譯せらる。

ベルンハルド ウァイズ

右二著共に英語に飜譯せられ、廣く讀者を有す。彼は又マイエルの『新約全書の批評的、解說的註釋書』に筆を執り、之に寄與する處少からず。彼は此の如く教授、著者として世に貢獻する爲大なりしと次に出でたるは『耶蘇傳』（三卷、一八八二）にして、其鍵全博識に加ふるに、宗教的熱情を以てせるは此書の特色也。『新約聖書總論』は一八八六年に出で、カノンの歷史及び聖書各卷を叙說する事頗る詳也。

共に、實際傳道の事にも深き興味を有し、傳道上の論文を公にしたることも亦少からず。一八八〇年以來普國に於る神學教育に關し、文部大臣の顧問として盡す處多く、普國に於る神學教授が思想、言論の自由を有するは彼の力に待つ處多しといふ。彼自らの神學上の地位は温和的保守派とも云ふべく、極端なるルーテル教會正統派よりは常に疑惑を蒙り、又所謂批評派と稱する者よりは、單に舊來の傳說を辨護する者なるかの如く思惟せられたりき。

マルベルヒ大學の新約聖書教授ヨハネス、ウァイズ(Johannes Weiss)は彼の子息にして、父の特色を傳ふ。通常リッチュル派と目ぜらる。

ウァイズ クリスチアン ヘルマン Weiße, Christian Hermann 人名 一八〇一—六六 獨逸哲學者。ライプチッヒ大學の哲學教授たり。神話及び審美學に關する著書あり。又『哲學的教義』『編哲歷史』等を著し、新教派神學の發達に貢獻する處多し。前者は基督教の有神論とヘーゲルの萬有神說とを調和せんとしたる者也。

ウァイズマン アウグスト Weismann, August 人名 一八三四 獨逸の生物學者。曾て墺太利のステフェン公爵の侍醫なりき(一八六一—二)。ギーセンに在りて、ロイカルトに從ひ動物學を學び、一八六六年フライブルヒ大學の動物學教授となる。彼は初め純正動物學の研究に全身を委せしが、眼疾の爲め顯微鏡的研究を廢せざるを得ざるに至り、其注意を進化論の問題に轉じたりき。彼は個體に變異の起る所以を說明せんことに努力し、凡そ變異の生ずるは主として父母の生殖質(ヂェルムプラズム)の混成に依る者にして、即ち組先々より遺傳せし所の生殖質の結合の工合如何に依りて變異を生ずる也と云へり。而して彼は之が說明の骨子として、有生單位(ビオフォア)なる云ふ假說を提出し、之に基きて有名なる決定素の說を立てたり。斯くて強れ遺傳を說明して曰く、組先の形質の遺傳するは、此決定素の父母より遺傳せるに因る者にて、又かの變異の生ずることあるは、此決定素の有生單位に復歸し、爰に新なる別樣の決定素を組成するに因るとす。彼の著書の中最も大切なる者は英譯せられたり。即ち『成來論の研究』(一八八二)『遺傳に關する論文』(一八八八—九二)『生殖質』(一八九三)及び『進化論』(一九〇四)是也。

ウァイズマン ニコラス パトリック スチーブン Wiseman, Nicholas Patrick Stephen 人名 一八〇二—六五 英國ウェストミンステルの大監督。十六歲羅馬のイングリッシ、カレッヂに入り、後其教師となる。羅馬及び倫敦に在り『科學と天啓教との關係』の知き主意に關する講演者として名聲あり。其『羅馬教會の教義』と題せる書は、英國に於て深き興味を以て讀まれたり。羅馬教會の英國に於て勢力を得るに及び、ウェストミンステルの大監督となる(一八五〇)彼は又美術、教育及び國民の進歩に與りて力あり。

ウァチアヌス ヨアキム フォン ワット Vadianus, Joachim von Watt 人名 一四八四—一五五一 セント、ガルの改革家。ウィンダーミンナに學び、ヴィンダーミーに會す。博覽にして柔通く當時の學問に通ぜり。選ばれてウィンナ大學の拉丁及び希臘語教授となり(一五一〇—一八)醫學博士の學位を受く。一五一八年セント、ガルに歸り醫術を開業す。改革說を奉じ、其地位と勢力とを利用して之を誘入せり。常にヴィンダーミーと通信し、一五二三年ベルンに、開きたる會議の長たりき。セント、ガルに在る改革黨の首領となり、アナバプテストに反對せり。一五二六年市民に推されて市長となり、一五三一年再選せらる。其死するや改革派の人々痛惜せざるはなかりき。

ウァッツ アイザック Watts, Isaac 一六七四—一七四八 英國著名の讚美歌作者。神學を學び、一六九八年倫敦マルタ、レーン獨立教會の副牧師となり、一七〇二年ナサンシー博士に繼ぎて其牧師となり、其死に至るまで職に在り。七篇にして詩人たるの才能は彼しかり、其處女作(Horae Lyricae)は一七〇六年に至る迄は公にせられざりき。翌年其『讚美歌』出つ。好評嘖々として『英國讚美歌發明者』の名を得たり。從來教會の禮拜には詩篇のみを歌ひしが、此時より讚美歌をも併せ歌ふの風起れり。今や彼の作りたる讚美歌に廣く基督教會の用ゆる所となり、如何なる宗派の聖歌集にも之を見ざる者なし。我國の『さんびか』中にも第十七を初めとし、彼の作に係る者都合廿二を載せたり。吾人の歌ひ慣れたる『あめなるわがやな、あふぎみれば、なみだにかすめる、目も晴れけり』(第三百十二)は彼の作の一也。或る點に於ては他の讚美歌作者に劣れる所あるべきも、其感情の濃かにして暖なること、其言語の單純にして力あること、未だ彼に及ぶ者あるべからず。然れ共彼の作も其形式、內容に於て全く缺點なしといふ可らず。次に出でたるを『新約の言語に摸倣せるダビデの詩篇』となす(一七一九)彼は之を以て最も重要なる著作と爲せり。此詩篇の特色は其編音的なるに在り。彼は其表題の示す如く新約の思想を以て詩篇を說明し、律法に代ふるに福音を以てせり。此詩篇は忽ち

教會の採用する處となり、宗教的生活を深からしめたる効少しとせず。一七二〇年『小兒用聖歌集』出で、英國少年の愛誦する處となり、今日に至るも年々の發賣高頗る多し。彼は唯讚美歌の作者なるのみならず、論理學、天文學、地理學、英文典、教育學、倫理學に關する著書亦頗る多し。

ウァットソン ジョン Watson, John 人名 一八五〇—一九〇七 英國の牧師、著作者。相續てロヤアルモンドの自由教會、アラスゴーの聖馬太教會、リヴァプールのセフトンパルク長老教會の牧師たりしが、健康の衰へたるがため一九〇五年其職を退けり。一八九六年米國エール大學ライマンビーチャル講演の講演者なりき。彼は其思想の進歩的なりしがため、異端の告訴を受けたることありき。著作家としての名を『イアン、マクラレン』(Ian Maclaren)と云ふ。其最も有名なる著作を『ベサイド、セ、ボンニー、ブライヤー、ブッシ』と稱し、一八九四年の作にして、一九〇五年更に之を改曲に改作せり。其外『セ、ティース、オフ、アウルド、ラング、サイン』(一八九五)『ケート、カルチギー』『主の心』(一八九六)『主の傳』(一九〇一)『素樸の諸德』(一九〇三)『吾人信仰のインスピレーション』(一九〇五)等何れも著名也。

ウァットソン リチャルド Watson, Richard 人名 一七三七—一八一六 英國教會の監督。創橋大學化學教授(一七六四)續て神學教授となり(一七七一)後ランダッフの監督となる(一七八二)學識深からずと雖も『聖書辨證論』の二書共に傳ふべし。前者はギッボンに對し、後者はトム、ペーンに對して著作せる者也。

ウァトケ ウィルヘルム Vatke, Wilhelm 人名 一八〇六—八二 獨逸の神學者、批評家。一八三七年伯林大學の教授となりしが、其著『舊約聖書の宗教』に於て述べたる說自由に傾きたりと雖も、教授の全權を行ふことを止めらる。彼は僅約に關し現時ウェルハウセンの取れる說を發表したる最初の作者の一人にして、モーセの五經に記されたる編註に關する規定は、俘囚以後に成りたるもの也、俘囚以前の編註に律法に依りて定められたるに非ず、其性質異教の犧牲に異ら ず之の說を唱へたりき。尙『舊約聖書の歷史的序論』(一八八六)及び『宗教哲學』(一八八八)の著あり。

ウァルデンス派 Waldenses 宗派名 第十二世紀の下半佛國の南部に起りたる教派にして、ボヘミヤン及びセラヴィヤン教徒を除きては、羅馬教會に反對して起りたる中世の教派にして、今日に傳はれるもの獨り此派あるのみ。此派は佛國のリヨンに起り、ペテロ、ヴァルド(Waldo)と稱する豪商の首唱する處也。一一七七年の頃彼は宗教的熱心を抱き、基督の足跡に從はんとて、其財產を賣りて之を貧民に施し、又聖書を佛國語に飜譯し、之を一般の人々に敎へんとて、其徒を諸方に派遣して平民的修道を爲さんとしたりき。即ち彼等は自ら『リヨンの貧民』と稱し、基督の七十人の弟子に倣ひ、二人宛諸方に往き聖書を敎へたりしが、監督之を許さずりしを以て、直ちに法王に訴へ其認可を請ひたりしかども、法王も亦無智無學の小民は聖書を知るに足らずとて其請を許さざりき。然れ共彼等は之がために毫も屈することなく、法王の命に背きて傳道をなしたりしを以て、遂に罰しき迫害を蒙り、一時山中に潛伏して自ら其道を守るの外効りき。此敎派の敎義は羅馬教會と異なる點なく、唯彼等は凡ての人々は自ら聖書を讀み、直接に基督の道を學び得べき者也との事を敎へ、又僧侶の特權を拒否し、普通の信徒も亦聖餐を執行し得べきことを主張せしを以て、法王の怒を招き迫害を蒙りたりし也。新教の起るに及び彼等は羅馬教會と離れ、宗教改革運動に加はりたりしがため、一層の迫害を受けたりしが、彼等は之に反抗して毫も屈する處なかりき。一八二七年英國の陸軍大佐ペッタワイス(Beckwitth)此派に屬する一農夫の孫と婚し、彼等の中に住し、數百の學校を建て以て其死する時に至れり。一八八年サヴォイ侯アルベルト此派に屬する者に凡て宗教上政治上の權利を與へたり。斯くて南佛蘭西及び北以太利の山中には今日尙數萬の敎徒殘存するを見る。

ウァルトン ブリアン Walton, Brian 人名 一六〇〇—六一 英國の聖書學者。一六二六年倫敦聖マルチン、オルガルの牧師となりしが、一六四一年其職を奪はれたりしを以て、牛津に遁れ、數國語を以て記せる聖書の出版に全力を盡したり(一六五四—七)彼に此企に於てアッシェル、ウイトフート及び其他の學者の同情と助を得、且グロンヴェルの保護を受けたり。斯くて希伯來、カルデヤ、サマリヂ、スリヤ、アラビヤ、ペルシヤ、エチオピヤ、希臘、拉丁の九箇國語を以て記されたる聖書六卷を出すに至れり。是れ數國語聖書の嚆矢也。彼れ一六六〇年チェステルの監督となる。

ウァルド ペテロ Waldo, Peter. 人名 『ヴァルデンス派』の條を見よ。

ウァルド ウィリアム ジョルジ Wald, William George 人名 一八一二—八二

英國の神學者、辯論家。初め自由神學派に屬せしが、後ニューマンの感化を受け、牛津運動の哲學者たりき。一八四四年『基督教會の理想』を著はしたりしが、翌年に至り之がため即を得て、羅馬教會に轉じ、同教會に屬するウェーヴ聖エドモンド、カレッヂの講師となりたり。又『ダブリン評論』の主筆たりき(一八六三—七八)。

ウァルド ウィルフリッド ヒリップ Wilfrid Philip 人名 一八五六 英國の著述家。一八九〇年ダルハムのアッシュカレッヂ哲學講師となる。『信仰の番兵』(一八八四)『宗教の去就』(一八八六)『ウィリアム、ウォルウ、ウァルド及び牛津運動』(一八九〇第二版)『不可見者の證據』(一八九四)『問題と人』(一九〇三)等の著書あり。

ウァルド ジェームス Ward, James 人名 一八四三 英國の哲學者。會衆派の牧師となりしが其說の變化せるに依りて之を辭し、劍橋トリニチー、カレッヂのフェローとなり(一八七五)後心意學教授となる(一八九七)後は一八九五—七年アバルヂーンに於る『ギッフォード講演』の講演者なりき。『自然主義及び不可識論』の著あり(一八九九)。

ウァルドロウ ラルフ Wardlaw, Ralph 人名 一七七九—一八五三 蘇國の神學者。會衆派に屬しグラスゴーに住せり。後蘇國會衆派神學校の教授となり、又奴隷廢止運動に與りて著大なる働を爲せり。

ウァルハム ウィリアム Warham, William 人名 一四五〇—一五三二 英國カンタベリーの大監督 初め法律を學び後教會に入る。尚書、倫敦の監督等を經て大監督となり(一五〇四)又牛津大學總長となる。ヘンリー八世位に即くに及びウルセー君寵を恐れしが、後は會議の職を辭せり。博洽にして政治的才能に富み、有德にして自ら奉ずる薄し。エラスムスの友なりしが、宗教改革に反對し、聖書の譯譯を拒み、異端を容赦なく迫害せり。

ウァルバルトン ウィリアム Warburton, William 人名 一六九八—一七七九 英國の神學者。ブラントブラットン、リンコルンシアの牧師たりしが、後退きて刻苦勵精書を讀み、多くの著書を出せり。其最初に出でたるは『教會と國家との同盟』となす(一七三六)次に出でたるは『モーセの神使たる事』也(一七三七—八)其目的、モーセ教には靈魂不滅の教理なきを以て、神より出でたるものに非ずと云へる自然神說を破するに在り。續で『ポープの人論辯護』及び『人論註釋』出つ。後彼はリンカン院の說教者、國王附の牧師、グロセステル、ダルハムの牧師、ブリストルのディーンを歷て、一七五九年グロセステルの監督となる。一七六二年『恩惠の教理』を著して、ウェスレーを攻擊せり。其他『ボリンブロック卿の哲學』『自然教及び天啓教の教義』『說教集』等著書頗る多し。

ウァルバルトン講演 Warburtonian Lecture. 雜語 一七六八年、舊約聖書の預言より天啓教の眞理を證するの目的を以て、監督ウァルバルトンが五百磅を出し創設せる者にして、此講演は爾後毎年倫敦リンカン院禮拜堂に於て行はる。

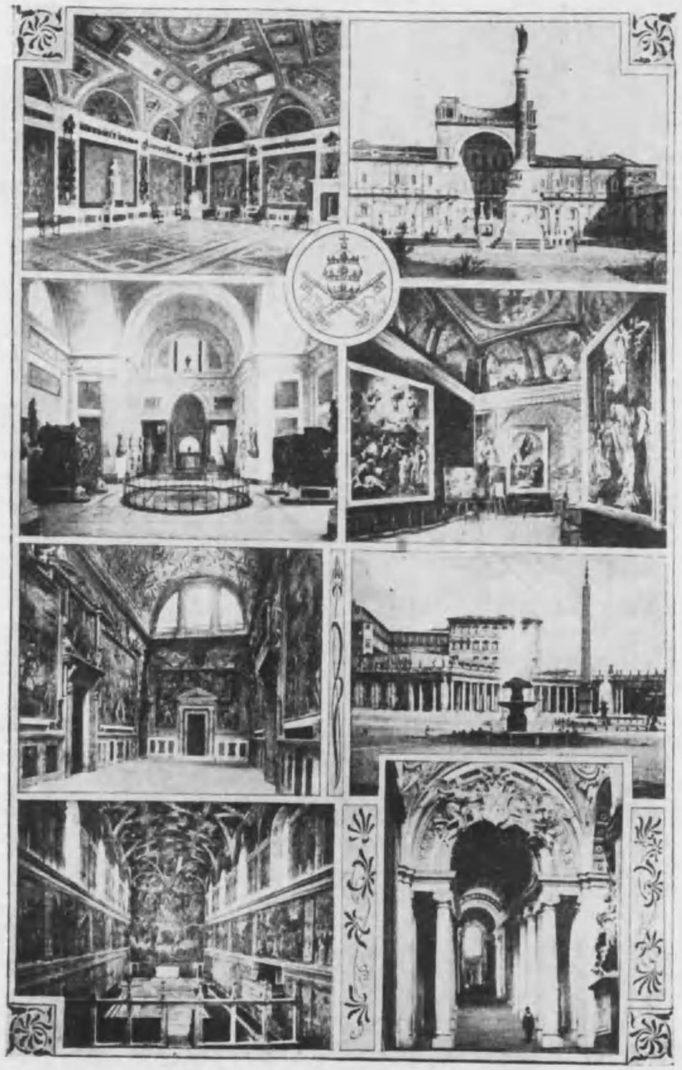
ウァルヒ クリスチャン ヴィルヘルム フランツ Walch, Christian Wilhelm Franz 人名 一七二六—八四 獨逸神學者 曾てゲッチンゲン大學の神學教授たり。教會史家として貢獻する處多し。

ウァルヒ ヨハン ゲオルグ Walch, Johann Georg 人名 一六九三—一七七五 獨逸神學者、前者の父。曾てエナ大學の神學教授たり。ルーテルの著書廿四卷を出版し、又稱義主義ルーテル派内に爭論を起せる宗教同盟の歷史五卷を著せり。

ウァルプルガ Walpurga. 人名 英國の聖徒。聖ボニフェースと共に獨逸に往きて傳道し、後ハイデンハイム尼院長となる。七七八年頃死す。

ヴァウガン ハルベルト Vaughan, Herbert 人名 一八三二—一九〇二 ウェストミンステル羅馬教の大監督。其大監督たりし間に起りたる重なる出來事は、ウェストミンステルに大會堂を建てし事也。

ヴァチカン宮殿 Palace of the Vatican 建物名 羅馬法王の宮殿、チベル河の右岸、ヴァチカンの丘上に在り。長き間に渉りて建てられたる數多の建物より成り、長千百五十一呎、廣七百六十七呎あり、四千四百二十二乃至一萬六千の室を有し、世界最大の宮殿也と稱せらる。『ヴァチカン』なる名は Vates(預言者)より來る。此地方古昔のエトルリア人占考の地也と信ぜられたるに依る。曾てヴァチカン丘の麓よりチベル河に至る一帶の地を總稱してヴァチカンと稱したることあり。カリグラの圓形興行場爰に在り、後ネロの圓形興行場となり、ヴァチカン丘上の庭園に於て無數の基督教徒を火刑に處したることあり。使徒發見の十字架に釘けられたるも此地なりしと傳へらる。法王の宮殿は初めラテランに在りしが、シンマカス(四九八—五一四)もとの獨發得教會に接近せるヴァチカンに宮殿を建てたり。シ



ヴァチカン宮殿

ナルレマンはアドリアン一世(七七二—七九五)及びレオ三世(七九五—八一六)の法王たりし間此處に住したりきといふ。インノーセント三世(一一九八—一二一六)此處に宮殿を再築せしが後朽敗に赴けり。於是ニコラス三世(一二七七—八一)更に之を增築し、國賓接待の爲めに之を用ゐたり。法王間の爭止みて、法王のアヴィヨンより歸り來るに及び、ヴァチカンは法王の宮殿として撰まれ、以て今日に至れり。現時のヴァチカン宮殿は諸法王の經營せる處也。即ちヨハネ二十三世(一四一〇—一七)は掩路を造りて之をセント、アンゲロと連結せしめ、ニコラス五世(一四四七—五五)は更に之を延張、装飾するの工事を起し、アレキサンデル六世(一四九二—一五〇三)之を落成せり。シックスタス四世(一四七一—八四)はSistine Chapel を築き、インノーセント八世(一四八四—九二)はBelvedere を築き、エリアス二世(一五〇三—一三)庭園を作りて之を宮殿と連絡せしめ、シックスタス五世(一五八五—九〇)は圖書館を築けり。現時の法王宮殿の工事を初めたるは、シックスタス五世にして、之を竣工せしめたるはクレメント八世也(一五九二—一六〇五)法王の室は至て質素にして、內閣員の室は直ぐ其上に在り。

ヴァチカン宮殿の中最も著名なるは、一四七三年パシオ、ピンテリの築きたるSistine Chapel とす。是れミカエル、アンゲロ(一四七五—一五六四)が天井及び壁畫を畫きたるに依る。天井には舊約全書より題題を撰び、天地創造の初日よりノアの酒に醉ひたるこまに至る迄、及び預言者ヨナ、エレミヤ、エゼキエル、ヨエル、ダニエル、イザヤ、ザカリヤ等を畫けり。而して祭壇の壁には『末日審判』の光景を畫けり。宗屬及び其他ヴァチカンの諸室には、又フェエの精巧なる技術を見るべし。ヴァチカンには又古代の彫像を集むること世界第一と稱す。ヴァチカン圖書館には希臘、拉丁及び東洋語の寫本二萬三千五百八十部及び印刷書卷凡そ五萬部を藏す。最も貴重なるはヴァチカン寫本(Codex Vaticanus)と稱せられたる聖書にして、蓋し第四世紀の產物也。

ヴァチカン會議(シヲイ) Vatican Council. 【事蹟】羅馬教會最後の宗教會議にして、一八六九年十二月八日を以て羅馬の聖教得教會に開かれ、翌年七月十八日(或は十月廿日)を以て一時閉會せり。監督ヘフエル(Bishop Hefele)は之を以て第廿回の大會議也となせ共、ベラルミン(Bellarmin)其他羅馬教會神學者の多數はトレントの會議を以て第十九回也となす。此相違はピサ(一四〇九)コンスタンス(一四一四)及びバセル(一四三〇)の改革時代の會議の全部若くは一部を正當の者として承認するや否やより生ず。ヘフエルはピサの會議を排斥したれ共、コンスタンス及びバセルの會議を正當也として承認せり。ドリンガル(Dollinger)を首領とせる舊カトリック派はヴァチカン會議を承認せず、故に彼等に教會より破門せられたり。此會議はトレントの會議と同じく、羅馬教會に取りては最も重要なる者にして、トレントの會議は宗教改革に依りて起りたる疑問を決せんために召集せられ、プロテスタント派の教義を以て有罪也と宣告したりしが、ヴァチカンの會議は羅馬教會內に起れる近代の合理說及び自由說を排斥し、且最終教權の問題を確定せん爲めに召集せられたり。即ち法王ピウス九世在位の廿三年(一八六八年六月廿九日)召集令を發し、翌年十二月八日詳盡なる儀式を以て之を開きしが、法王無謬說の通過後(七月十八日)直ちに獨佛戰爭開始せられたるがため、一八七〇年十月廿日此會議は無期に延會せられ、獨佛戰爭間接の結果法王は政權を失ひ、獨逸帝國はプロテスタント派を採用するに至れり。此會議の代議員たる權を有せる者千三十七人にして、出席したる者七百六十四人、歷史ありてより以來最大の會議也と稱せらる。此會議の議に上りし者は信仰、條例、僧派及び儀式に關することなりしが、教義に關し議決せられたる最も重要なる者を左の二箇條となす。(一)羅馬公教會の信仰に關する律令にして、即ち近代の合理說、萬有神說、唯物說、及び無神說を排斥し、神、造られたる物、及び信仰と理性との關係に關する正統教理を明にせる者是也。此律令は論旨一致を以て可決したり。(二) 更に重要なるは法王無謬に關する律令にして、之に關しては異論を唱ふる者凡そ二百人ありしが、終極の場合に至り反對する者僅に二人となり、遂に五百三十三人の多數を以て七月十八日法王無謬說を可決せり。即ち羅馬法王は法王として信仰上の事、倫理上の事に關し、天の佑助を受けて教ふるが故に謬誤なし、彼の裁決は最終にして之を攻む可らざる事、法王は公教會を總轄し、監督中の監督たる事、諸監督は法王の代理者なること猶法王自らが基督の代理者なるが如しとの事を可決したる也。

ヴァチカン寫本(シヲボン) 『聖書の寫本』の條を見よ。

ヴァルデス 【人名】 ユアン ド Valdes, Juan de 一五〇〇—四一 西班牙の宗教改革家、著述者。其晩年の十年をナポリに送る。El Dialogo de las Lenguas と題する匿名の著述に教會及び國家の惡弊を論示したる者にして El Dialogo de Mercurio y Caron と共に當時の最大著作と稱せらる。

Cientos y Diez Consideraciones Divinas は英譯せられたり。

ヴァレリアン Valerian. 人名 羅馬帝(二五三—二五九年在位)。即位の初には基督教に對して好意を表せしが、二五七年に至り劇烈なる迫害を開始せり。彼はデシウス帝と同じく主として監督及び教會の領袖たる人々を迫害せり。初めは單に集會を開き、又は禮拜を行ふことを禁ずるに過ぎざりしが、次には之に背く者は凡て鐵山に送りて鐵夫となすべしとの令を發し、次には之に背く監督、長老、執事は凡て死刑に處すべしとの事を令せり。羅馬のシックスタス及びカルセージのクプリアンは帝の爲めに殉教者の死を遂げたり。然るに帝は彼斯と戰ひて利あらず、俘虜となりしを以て(二五九)迫害も亦終を告げたり。

ヴァレンチニアン三世 Valentinian III. 人名 羅馬帝(四二五—五五年在位)。四五五年羅馬の監督が全基督教會の首長として、立法及び司法の最高權を有するを承認する旨の勅令を發せり。但し此勅令が西帝國の範圍内にのみ效を有したりしは論なし。

ヴァレンチヌス Valentinus. 人名 第二世紀に出でたる異端派の神學者。一四〇—一六〇年頃羅馬の哲學者として名あり、大に殉教者ユスチヌスと戰ふ。彼の說はノスチック派に屬す。(「ノスチック派」の條を見よ)。

ヴァレンチン 聖 Valentine, St. 人名 クラウデオ二世の時、(一說には二七一年二月十四日)ウレリアンの時)羅馬にて殉教者の死を遂げたる監督なりしと信ぜらる。元來ヴァレンチン節(St. Valentine's Day)とは何等の關係なかりしが、鳥の交接を初むるは此日に在りとの古き思想より、二月十五日にはユノの女神を祭り、青年が無名の艶書を認めて其情婦を選むの風ありき。此異教的淫風を廢せんとの考より、異教の神に代ふるに此聖徒の名を以てせり。是れヴァレンチン節の起源也。然れ共今日は此節を守る者なし。

ヴァレンス Valens. 人名 東羅馬帝(三六四—七九年在位)。アリウス派最後の雄將として教會歴史に重要なる地位を占む。彼れ初めニカヤ信條とアリウス派神學說との區別さへ知らざりしが、當時コンスタンチノープルには正統教會なかりしより、アリウス派に屬せる教長ユウドキウスより洗禮を受けたりしが、其緣故より偶然自らアリウス派となり、ゴッス人との戰より凱旋するや正統派の迫害を開始せり。當時埃及には正統派盛大にして且アタナシウス尙生存せしを以て、之を如何ともすること能はざりしが、アタナシウス死し、アリウス派なるルシウスこれに代はるに及び、ニトリアの荒野に於る虐殺行はれたり。帝が曾て久しく住したりしアンテオク、及び小亞細亞の他の地方に於ては、正統派に屬する監督を追放せり。又コンスタンチノープルにては、ユウドキウス死し、正統派のユウデアアリウスに代りて立ちしが、帝は直ちに之を追ひ、代ふるにアリウス派の教長を以てせり。於是八十人の長老等之に抗議せしが、帝は彼等を船に乘せ、沖に乘り出さしめ火を放ちて之を燒けり。

ヴァロムブロサ Vallombrosa. 僧派名 ベネディクト派の一派。一〇三九年ヨハネ、ゲアルベルタスの創設する所にして、其寺院は伊太利フロレンスの西叢たる森林中に在り。然れ共今は林學校に用ゐられ、又避暑場となれり。ミルトンの『失樂園』中に此寺院に言及する所あり。

ヴァン ダイク Henry Van Dyke. 人名 ヘンリー 一八五二 米國の著述家。ロード、アイランドのニウポルト合同會衆教會の牧師となり、後紐育ブリック長老教會の牧師となりしが、一九〇〇年プリンストン大學の招に應じ、英文學の教授となる。『宗教の眞實』(一八八四)『詩篇の話』(一八八七)『文學的剽竊の罪』(一八八八)『テニソンの詩』(一八八九)『青年に對する說教』(一八九三)『美術に於る基督』(一八九九)『小き河』(一八九五)『他の賢人』(一八九六)『漁師の好述』(一八九九)『綠の花』(一九〇二)等の著者あり。

ヴァンダル Vandals. 種族名 日耳曼種族に屬す。其初めて歴史に顯はれたるは、マルコマンニ及び他のゲニウプ種族と共に羅馬帝マルカス、アウレリウスと戰ひし時に在り。後又彼等はゴス及びゲピド人等と共にダキアの境にてプロバスと戰へり。彼等は遂にダキアの地に住し、文明の技術を學び、アリウス派の基督教を採用せり。四〇九年に至り彼等はヒレニスを橫ぎりアンダルシアに一王國を建て、四二八年ゲンセリック立てられて王となりしより、教會歴史に直接の關係を生ずるに至れり。時に亞非利加の大守ボニフェース羅馬に叛き援をゲンセリックに請ふ。於是ゲンセリックは五萬の大軍に將として亞非利加に向ひしが、ボニフェースは此時既に聖アウガスチンを併して、羅馬政府と和し、ゲンセリックの西班牙に歸らんことを望みたれ共此は不可。時時にして亞非利加に在る羅馬領は悉く征服せられ、ヒッポー(四三〇)カルセージ(四三九)相續で陷り、亞非利加全くヴァンダル族の占領する處となれり。後彼等は地中海の西海岸をあらし、シシリー、

サルデニヤ諸島を略し、四五五年ゲンセリックは進で羅馬に入り之を掠取せり。亞非利加に於る彼等の兇暴は最も甚しく、當時亞非利加教會は拉丁教會の最も繁榮なる者なりしが、彼等は自らアリウス派に屬するを以て、之を迫害すること甚しく、聖堂を破壞し、教會の財産を浸收し、監督及び僧侶は或は之を追放し、或は之を斬首し、或は之を火刑に處し、富める信徒は搶へて貴金を課し、或は其財産を沒收し、或は奴隷となして之を賣る等最も殘忍を極めたり。フヲリック(四七七—八六)ゲンセリックに代るに及び、一時迫害止みしが、四八四年カルセードに會議を召集し、其結果見て アリウス派の信仰を採用すべきことを命じ、之に從はざる者は悉く追放せられたり。後のヴァンダル王の中には稍や寛容なる者ありて、一時正統派教會の再興を見しことありたれ共、結極亞非利加に於る拉丁教會と拉丁文明はヴァンダル人の爲めに全滅に歸せり。

ウィゼルスブーン John Witherspoon. 人名 ジョン 一七二二—九四 長老派の神學者。米國獨立宣告の調印者。蘇國に生れ、エヂンバラ大學に學び、說教家となる。一七四四年米國に移住し、後ニウ、ジャルセー大學の校長となる。諸義制度を開始せるは此人也。其著『教會の特質』及び『神義の教理』は最も有名也。

ウィックリッフ John Wicliff. 人名 ジョン 一三二四—八四 英國の宗教改革家。牛津大學を卒業し、後其大學の教授となり、中世の學者と同樣なる方法を以て哲學を教へ、大學者として名聲を博したりしが、唯に神學者たるの職務を盡したるのみならず、彼は又愛國者として羅馬法王の壓制に抗し、英國の獨立を保護するの志を起せり。即ち第十三世紀の頃より英國々王は羅馬法王に服せる證として、年々法王に貢を納め來りしが、之を覺識すべきや否やの問題起り、國王は國會の意見を請れて之を禁止するに決したりしが、此時に方りウィックリッフは筆を執り、其決議の正當なるを熱心に論ぜり。僧(云ふ、ウィックリッフは當時國會議員なりしと。又彼は法王が英國の事件に干涉する僧權を拒絶し、英國の獨立を守るべき事を論じ、且教會の惡風、殊に監督の奢侈と乞丐僧(ドミニック派及びフランシス派の僧侶)の無益なることを極論せり。古傳に依れば、ウィックリッフ篤き病に罹り危篤に陥りし時、一人の乞丐僧來りてウィックリッフを訪ひ『汝今や死に臨む、思ふに懲きに我等を非難攻擊せしを悔ゆるならん』と云ひしに、彼れ聖に應じて答へて『否、我れは尚生存して益々汝等の惡風を非難攻擊せざるを得ず』と云ひたりしと。彼は書に僧侶の奢侈、不品行を論責したりしのみならず、尙進んで教會の教義に反對するの運動を起せしかば、僧侶も法王もこれが爲めに憤怒し、法王は此の如き運動を防止し、且彼を嚴罰に處すべきことを命ぜり。於是論爭の監督は彼を召喚し、之を審問せんとせしが、之がため其深き愛國心を喜ぶ貴族及び平民の亂を起さんことを恐れ、其審問を中止せり。然るに後ウィックリッフは法王の命に依り、大學を退職し、自己の村落に歸り、其地の教會の牧師となり、其職を盡しつゝ其處にて死せり。其後三十一年を經てコンスタンスの大會議(一四一四—一八)はウィックリッフの說を否定し、彼の遺骸を墓中より發掘し、之を焼き塞つべきことを決議し、遂に其遺骸を灰として河中に投棄せしめたり。

ウィックリッフ

【彼の說教】 彼が大學に於て說教するや拉丁語を用ゐ、學者的態度と思想とを以てせしが、教會に於て說教する時は英語を用ゐ、極めて平易、直截にして力ある說教を爲せり。彼は說教の目的は聖書の敎訓を建つるに在る事、說教すべき事柄は聖書の敎訓にして、當時の說教者の如く異教の物語、小說、詩歌等を以て徒に讀衆を喜ばすことを努む可らざる事を敎へたり。聖書は實に彼の唯一の標準唯一の源泉にして、彼の說教は聖書を以て徹底せられたりき。彼は屢々聖書以外の事に就きて論じたりしかども、之を批判するや必ず聖書の敎訓を以てせり。彼の說教には『信仰に依て義とせらるべし』との敎訓を發見せざる共、神に對する敬虔と自己及び人に對する眞心とに最も大なる重を置き、神の榮に對する熱心、基督に對する愛及び人の救に關する誠意とを鼓吹せり。

【彼の神學】 彼は第十四世紀に流行したりし名目論に反對し、實體論を熱心に主張せしが、其外彼が宗教に關する新說左の如し。(一)聖書のみを信仰の標準となし、聖書に適合せざる者は、其法王の敎たるを監督の敎たるとに論なく決して之を容るべからずとの事を敎へ(二)敎郡勞を否定し、神の聖敬す

る者は何人も直接神の所に來り、神の恩惠を自由に蒙ることを得べしとのことを說き、且神を敬愛する農夫の祈禱は金讃を貪る監督が執行する聖禮禮より も、神前に於て大なる價値あることを敎へ、又分外功德說即ち法王が分外功德を以て人の罪を贖すの權ありといふは、神に對する冒瀆なりとのことを說きたり。(三)彼は又化體說を全然排斥せり。即ち彼は聖禮を守る者は基督の死を紀念する事に依り特別の恩惠を蒙ろべきも、パンが變化して基督の肉となるが知きことは之れなしと敎へたり。(四)當時の法王の奢侈と不品行なることを知りしのみならず、全然法王政治の無用なる事を論じ、基督は世の終まで敎會と共に在り、敎會の唯一の首也と說き、(五)僧侶獨身主義を非難し、又敎會が奢侈を以て濫費する財產は、國家が當然敎會より受領すべき者也と論ぜり。

【彼の聖書飜譯】 前に云へる知くウィックリッフは監督、法王よりも聖書を尊重し、之を以て信仰の唯一の標準とせしが、尙彼は一般の信徒に向ひ聖書を研究し、聖書を以て直接に神の道を學ぶべきことを敎へたり。故に彼は此說を實行するの目的を以て聖書を英文に飜譯せんとしたり。中世に方り使用したりし聖書は拉丁譯なりしが故に、詩篇を除くの外、一般の信徒は聖書を讀むことを能はざりき。羅馬敎會は、基督は聖書を敎會に與へたりしが故に、敎會は其意義を說明し之を其信徒に敎へざるべからずと敎へたりしが、ウィックリッフは之に反對し、信徒は聖書の說明を僧侶に一任すべからず、自ら之を研究して神の聖意を學ばざるべからずと說き、自ら先づ新約全書を英譯し、又友人の助力を以て舊約全書をも飜譯せり。尤も當時の學者はウィックリッフの知き大學者と雖も、希臘語、希伯來語を解することを能はざりしが故に、之を原文より飜譯することを能はず、唯之を拉丁譯より重譯したるに過ぎざりしと雖も、當時の英國人は之に依て初めて自ら聖書を自國語にて讀むことを得たりしが故に、其宗敎上に與へたる効果の大なりしことを云ふ迄もなし。

【彼の派遣せし傳道者】 ウィックリッフは自ら說敎し、又聖書を英譯したりしのみならず、純粹なる福音を國民に宣傳せんとの熱心を以て傳道者を諸方に派遣せり。彼等は粗末なる赤色の衣服を纏ひ、裸足にて二人宛請方を巡回し、村里にて人々を集め、神の律法を敎へ、神の道を守るべき事等主として基督敎倫理を說き、且ウィックリッフの著にせる小冊子を配布して其道を擴むることに力を盡したりしが故に、其感化普く國內に波及するに至れり。彼の死後ロラルド(Lollard)の名を以て其敎を主張する者ありしが、後嗣烈なる迫害を蒙り少しれ共、尙第十六世紀の宗敎改革まで殘存せる者あり。此の知くしてウィックリッフは英國宗敎改革の先驅を爲したりき。

【彼の人格】 前既に云へる知く彼は當時の大學者にして、其大なる勢力を有したりし者其博學多識に依らずんばあらず。彼の學問は多方面に涉り、其說敎、論文は何れも其說明を當時のあらゆる學問より借り來れり。彼は又批評的眼識を有し、敎會の敎義、制度、習慣等一々之を嚴密に批評し、悉く聖書の標準に照して判斷せり。彼は其思想を言ひ顯はす方法に就ては餘り注意せざりしが故に、其說敎、論文は巧妙也と云ふ可らざれ共、其中には眞實、偉大なる人格の顯はるゝ者ありて大なる感化を人に與へたり。彼は智識の人にして感情の人に非ざりしかども、又深き確き信念より溢れ出づる熱情あり、議論中屢々喜惡の情表面に顯はるゝものありたり。彼は其信ずる處に忠にして從て忌憚なく其信ずる處を發表せり。彼は又講利、諧謔に富み、殊に僧侶に對しては最も巧に嘲罵の言を使用せり。要するに彼の目的は基督の眞理を擁護し、敎會の惡風を矯正するに在り。之がため其畢生の力を盡したり。

尙ウィックリッフに就き委しく知らんと欲せば、ロサースの『ウィックリッフ及びフス』(一八八九)ブールの『ウィックリッフ』(一八八九)を見るべし。

ウィッケルン ヨハン ハインリヒ Wichern, Johann Heinrich 人名 一八〇八—八一 有名なる基督敎博愛家、獨逸 "Inner-Mission" の創立者。ゲッチンゲン及び伯林大學にて神學を學び、神學博士の稱號を得て家に歸りしが、敬虔なる母に勸まされて、貧民の兒女の爲めに日曜學校を設け、遂に五百人の兒女を其下に集むるに至れり。一八三三年ハンブルグ市外に立てたる "Rough House" と唱へられたる者は、此學校より思ひ付きたる者にして、獨、佛、英、蘭等に在る之と同一の事業は模範を之に取れり。"Rough House" とは不良少年感化院といふべき者也。彼は又感化院の事業を經營し得べき人々を養成せんために "Brotherhood" と稱する者を創立せり(一八四五)而して彼は又疾病貧困のために苦みつゝある人々を救はんとして、之を其同胞に訴へ "Inner Mission" と稱する新運動を開始せり。フレデリック、ウイルヘルム帝の時に至り、朝臣の間に厚遇せられ、大なる感化を貴族に與へたり。彼は又監獄改良に力を盡し、且軍人接護會を組織せり。

ウィッシャルト ジョルジ Wishart, George 人名 一五一三(?)—一五四六 有

名なる蘇國の殉敎者。一五三八年希臘語聖書を敎へたりとの罪を以て、異端の告訴を受け、監督ヘッボルンに喚問せられたりしが、逃れて英國に往けり。翌年ブリストルに在り、處女マリアを拜むことゝ、其伸保たることゝを否みたりとの故を以て、再び異端の告訴を受けしかば、又逃れて外國に往き、其多くの時を獨逸及び瑞西に送れり。一五四三年再び英國に歸り、劍橋コルパス、クライスト、カレッヂに在り。翌年蘇國に歸り、各所に於て彼の所謂基督敎根本敎義を說敎せり。ウォン、ノックスのプロテスタントに歸せるは、實に彼の働に依れり。一五四六年遂に捕へられ、異端を篤へたりとの故を以て、死刑の宣告を受け、焚殺せられたり。彼は當時の蘇國人の中に在りては、最も博學にして才藝を有し、眞の勇氣を以て道に殉したりきといふ。

ウィッシャルト ジョルジ Wishart, George 人名 一五九九—一六七一 蘇國エヂンバラの監督。長老敎會の勢力盛なるに及び(一六三八)逃れてニウカッスルに往きしが、捕はれてエヂンバラに送還せられ、獄に繫がる。後赦されてモントローズ侯と共に、大陸に往き、シャイダムに在る蘇國牧師となりしが、一六六二年エヂンバラの監督となる。

ウィッテンベルグの一致 (イッチ) The Concord of Wittenberg. 事項 聖禮に關するサキソン改革家と瑞西改革家との間の爭論を調和せんとて、長き商議の結果、一五三六年五月廿九日遂に兩派の一致を見るに至れり。之をウイッテンベルグの一致といふ。此商議の動力となりしは、政治的にはヘッセ侯ヒリップ、神學的にはバッツェル也。ダウィングリーの死後ルーテルが『ツウィングリーの途に立たず、ダウィングリーの座にすわらざる者は編也』と云ひたりしは、如何にルーテルが瑞西派に對して嫌忌の念を有したりしかを知るべし。然るにメランクトンは之に異り、バッツェルの感化を受け、漸くルーテルの聖晩餐に關する說に對する興味を失ひつゝあり。又他方に在りては、瑞西の改革家等も亦バッツェルの力に依り、漸次サキソン派の改革家等に近ひんとするの傾向あり。此形勢を見て取りたるバッツェルは、一五三四年十二月メランクトンとカッセルに會合し、兩派の一致案を作り、遂に兩派の同意を得て、一五三六年五月廿二日ウィッテンベルグに在るルーテルの書齋に會合せり。議論の主題は聖晩餐に關することなりしが、當時ルーテルは疾病に罹り、爲めに短氣、祖暴となり、バッツェルも亦頗る周章狼狽せるものありき。ルーテルは瑞西の改革者等に向ひて、其從前信じて敎へたりしことを取消すべしとのことを要求したりしが、彼等の之を斥くるや大に之を怒りたりき。然るに翌日に至り形勢一變し、バッツェルは頗る明晰、巧妙となり、ルーテルも亦溫和、親切となれり。議論の末サキソンの神學者等は別室に退き熟議したりしが、其結果瑞西派の提議したる信條を承認せり。翌日更にメランクトンの家に會し、洗禮、敎免等に關し議論したりしが、是又兩派相一致するに至れり。日曜日に至りバッツェルは朝、ルーテルは夜說敎し、此商議に與りたるもの皆共に聖禮に與れり。兩派共極端なる人々は尙之に滿足せざりしが、ルーテル、バッツェル共に之を和め、漸くにして其爭論を終るに至れり。

ウィットシウス ヘルマン Witsius, Hermann 人名 一六三六—一七〇八 獨逸の神學者。アレーニンゲン、ライデン、及びウトリヒト大學に學ぶ。ウトリヒト大學に在るや專心希伯來語を學び、齡十八歲にして希伯來詩を以て敎主の預言に關する需演をなせり。敎敎會の牧師を經て後一六七五年フラネッケル大學、一六八〇年ウトリヒト大學の招聘を受く。一六八五年和蘭全權大使の法敎師として英國に遊べり。一六九八年ウトリヒト大學を辭しフライデン大學の敎授となる。『神人間の契約の天則』(一六八五)は其最も著名なる著書也。

ウィチプレン子ル派 Winebrennerians. 宗派名 『神の敎會』と稱せられたるバプチスト一派。創立者ヨハン、ウィチプレンチルは獨逸レフォルムド敎會の敎師にして(一七九七—一八六〇)一八二〇年米國ペンシルバニヤ州ハリスブルグに移住せしが、幾ならず其敎會內にリバイバル起りたり。彼の云ふ所に依れば、之がため彼は其屬する總會の敎師及び會員より迫害を蒙りしを以て、遂に一八二五年總會より分離するに至れり。分離後引續きリバイバル起り、眞に悔改めて神に歸する者少からず。彼は此等の悔改者を以て敎會——彼の言を用ゆれば『靈的にして、自由なる獨立敎會』——を組織し、又其悔改者中より敎師たる者を養成せり。一八二九年最初の敎會組織せられ『神の敎會』(The Church of God)と名けらる。翌年敎師を會し新敎派の基礎となるべき主義を議定す。ウィチプレンチル議長となり、其說敎に於て新約聖書的敎會の信仰及び行爲の標準を示せり。即ち件の敎會は(一)唯信者に依りてのみ組織せらるべく(二)宗派的若くは人間的名稱を用ゆることなるべく(三)聖書の外信仰箇條及び條例を用ゐざるべく(四)外國の管轄權に服從せざるべく(五)各個敎會々員の多數に依りて選擧せられたる役員に依りて統轄せらるべしとの事是也。辭くして年會なる者起

れり。教師は長老と稱せられ、年會の指揮に從て或は定住し、或は巡回傳道を爲す。教會員は獨逸人也。此教派の教義は他の福音主義の教派と大體に於て異なる處なしと雖も、彼等は洗禮、聖晩餐及び洗足の儀式に重を置き、之を以て教會永久の必要禮典と稱す。彼等の信ずる所に依れば、洗足禮は凡ての信徒の行はざる可らざる義務也。聖餐は信徒のみ受くべき者にして、之を受くる時は起立すべく、又唯夕に於てのみ施行せらるべき者也。彼等は又神の教會が他のプロテスタント教會と異なる點として、之を以て文字に於ても精神に於ても、信仰に於ても行爲に於ても、初代の基督教を再興せる者也と爲せり。最近の調査に依れば(一九〇七)合衆國に於る此派の教會は九十三箇、教師七十一人、信徒八千五百人也。

ウィチル ゲオルグ ベネヂクト Winer, Georg Benedikt 人名 一七九九—一八五八 獨逸の神學者。ライプニッヒに學び、同大學の教授たり。其講演には聽講者常に滿堂せりといふ。文筆に於ては著書頗る多し。其最も著名なるは『基督教各派教義の比較的説明』(一八八二、第四版、英譯せらる)『神學的文籍の手引』(一八四〇、第三版)『聖書辭典』(一八四七、第三版、英譯せらる)『カルデヤ語文典』(一八八二、第三版、英譯せらる)『新約希臘語文典』(一八六六、第七版、英譯せらる)等也。最後の書は新約に於る希臘語の用法を明にし、聖書の研究上稗益する處少からず。彼の著書は科學的なれ共、彼は聖書を尊敬すること深く、且其眞義を闡明したるを以て其宗教、道德上に及ぼしたる感化甚だ大也。

ウィラルド フランシス エリザベス Willard, Francis Elizabeth 人名 一八三九—九八 米國の社會改良家。紐育州ナヤガヴィルに生る。女史切め身を教育界に投じ、エグランストン女學校の校長となり、又エグァンストン大學の美學教授たりしが、一八七四年職を辭して禁酒事業に其一身を献げ、獨り米國に於てのみならず、其事業を世界各國に擴張し、自ら其牛耳を執りて世界に於る禁酒婦人の首領たる觀あり。女史の著書は『禁酒事業に關する暗示及び助』(一八七五)『婦人と禁酒』(一八八三)『講壇に於る婦人』(一八八八)『幸福なる我が中世期』(一八九四)『車中の車』(一八九五)及び『何にても爲せ』(一八九九五)等也。

ウィリアム オッカムの William, Prince of Orange. 人名 一五三三—八四 オレンジは佛國の東南、ローン河の邊アヂョンの近傍に在る一小獨立公國にして、ウィリアムは其支配者也。彼は和蘭の貴族にして且皇帝の最も親しき臣の一人也。智慮深くして其思想な巧に隱蔽するを以て『沈默のウィリアム』なる綽名を得たり。當時西班牙王ヒリップ二世は壓制主義を以て和蘭國を支配し、新教徒を迫害し、聖書を讀む者、もし男子なれば絞殺に處し、女子なれば生き乍ら葬るべきことを定め、三ヶ月間に千八百人を死刑に處せり。且彼は金錢を貪り、之を奪はんとの目的を以て和蘭人に寄稿を謀したり。ウィリアムは初め之に反對して口を筆とを以て出來得る限り國民を保護したりしが、ヒリップ王の壓制益々甚しきを加ふるを以て遂に之に堪ゆること能はず、止むを得ず劍を取て立つに至れり。和蘭は國小に兵少く西班牙軍に敵せんこと容易に非ざりしと雖も、ウィリアムは能く國民の志氣を鼓舞作興し、先導者の責任を盡せり。彼は初め宗教的熱心乏しかりしも、改革説を容るゝに從ひ熱心の信者となり、宗教的自由を主張し、人々をして各自自由に其宗教を信ずることを得せしめたり。一五八四年彼は刺客の爲めに暗殺せらる。政治家、外交家として當時の人の中に最も重要なる地位を占め、且愛國心と忍耐とを以て和蘭國のために其全力を盡したりしを以て、國民は今に至るまで『國父』として尊敬せり。

オレンヂ公ウィリアム

ウィリアム ショールハムの William of Shoreham. 人名 英國宗教的詩人。リーブ寺院の僧、サヤルトサットンの牧師となる(一三二〇)一三二七年頃ダビデの詩篇を英譯し、又宗教的詩歌を作る。此等の詩歌は一八四九及び一九〇二年の兩度に出版せらる。

ウィリアム シャムパウの William of Champeaux. 人名 一〇七〇—一一二二 佛國の獨逸哲學者。巴理に學び、後學校を立てゝ書生を教ふ、アベラールは其弟子の一人也。一一一三年シャロンハルマーンの監督となる。神學上の著書多し。

ウィリアム ツロの William of Tyre

人名 一一三七—八三 中世の歴史家、英國人エルサレム聖墓の管理者となり、後ツロの大監督となる。其著はせる歴史は近年佛語に飜譯せらる(一八七九—八〇)。

ウィリアム マルメスベリーの William of Malmesbury. 人名 一〇九六—一一四二 英國マルメスベリーの寺院にて教育を受け、僧侶、書籍部長として其終生を終り、初代英國の歴史家として有名也。

ウィリアム ワイクハム William, Wykeham 人名 一三一四—一四〇四 英國政治家、神學者。エドワルド三世の朝倉鷹、大臣、大法官となり、又ウィンチェステルの監督となる。濱職の廉にて職を免ぜられしが、後其無辜なること明となり、リチャルド二世再び彼をウィンチェステルの監督及び大法官となせり。ウィンチェステル大學及び牛津のニウ、カレッヂに彼の創設する所也。

ウィリアムス アイザック Williams, Isaac, B.D. 人名 一八〇二—六五 ウェールスの詩人及び神學者。一八三一年牛津トリニチーカレッヂのフェローとなる。著作の詩及び散文は多くは新念的の者にして、詩の中には『カセドラル』『基督教の季節』、散文の中には『福音書の新念的註釋』『默示録』及び説教集等あり。其宗教上の意見はトラクタリアン派に屬し、『宗教的智識の交通』と題する有名なるトラクトの作者也。

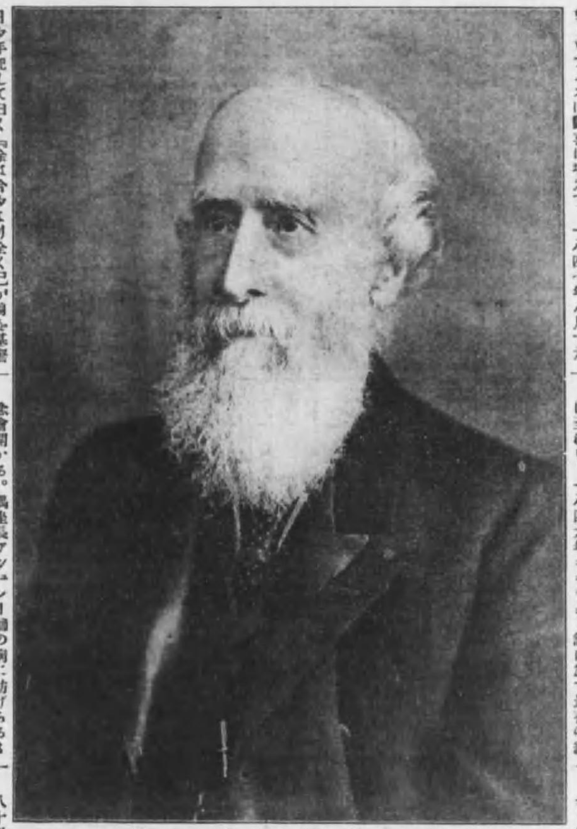
ウィリアムス サムエル ウェルス Williams, Samuel Wells 人名 一八一二—八四 米國東洋學者。一八三三年廣東傳道局の出版者となりて支那に往き、支那語を學び、創世記及び馬太傳を支那語に飜譯す。又『支那語簡易研究法』『英漢單語』『支那宜易案内』『中國』『支那語發音字書』等の著あり。一八五八年の天津談判に與りて功あり。

ウィリアムス ジョン Williams, John 人名 一五八二—一六五〇 英國ヨルクの大監督。劍橋に遊び、サリスベリー、ウェストミンステルのディーンを經て、ルーコンに歸さ英國の大法官となり、次で倫敦監督となり、熱心に其職務を盡せしが、秘密を漏洩したりとの廉を以て、大法官の職を免ぜられ、監督職を中止ぜられ、罰金を課せられ、四年間獄に投ぜられしが、後赦されてヨルクの大監督となる(一六四一)博學にして才能あり。王の虐遇を憤り憂死したりといふ。

ウィリアムス ジョン Williams, John 人名 一七九六—一八三九 英國の宣教師。『ポリネシヤの使徒』と稱せらる。倫敦附近のトッテンハムに生れ、一八一六年太平洋中のソサイエチー島の宣教師として派遣せられ、傳道の外法律の制定、砂糖及び煙草の耕作、印刷術及び建築術等を傳へたり。尚傳道の區域を擴張し、グッド島、ラロトンガ、サモア、及びフレンドリー島に及びしが、エロマンガ島の食人種のために殺戮せられたり『南洋島に於る傳道物語』の著あり(一八三七)。

ウィリアムス卿 ジョルジ Williams, Sir George 人名 一八二一—一九〇五 基督教青年會の開祖。英國ソマーセット州アシウエイ村の農家に生る。其受けし教育には取立てゝ云ふべき程のことなく、唯僅に低度の商業教育を施されしに過ぎず、其宗教上の薫陶とても亦然り。十五歲リヂッヂ、ワッルテル市に來り、ホルムスと云へる呉服店に奉公し、忠實に其職務を盡せり。彼は當時日曜日の朝毎に其店内にて禮拜を守りしが、十六歲の冬或る日曜の夕ヴイオン會堂に於て、牧師エバンウエームスの説教を聞きて悔改め、翌年遂に其教會に屬し、日なら『日曜學校の有力なる教師となれり。十九歲の時ヴリッウウォルテルの呉服店を辭し、翌年倫敦に往きヒチコック呉服店に入り、初めは年四十磅の約定にて入店せしが、數年の後には年三萬磅を得るに至れり。然れ共彼は其三分二を神の榮の爲めに献げたりしと云ふ。彼はヒチコック商店に入りてより、如何にもして店員百有餘名の心靈を救はんと心掛け、其寝室は祈禱の場となり、屢々彼等を招きしが初の間は却て嘲罵の的となれるのみ。幸に同志クリストファ、スミスなる得此事の爲めに共に力を盡せしが、漸次人々の注意を喚起し、參加人員漸く加はり、遂に主人に請ふて店内の空室を借りて會場に充つるに至れり。一八四四年同業の富豪オーエンも亦其支配人と語り同僚の集會を其店内に開きしが、同年六月六日ウィリアムスは同志十二人とヒチコック商館内の一室に集び『呉服商其他の商業に從事する青年の心靈狀態を改善する爲の會』なる者を創設せしが、七月四日同志の人々相集りて之を『基督教青年會』(The Young Men's Christian Association 略して Y. M. C. A. と稱す)と命名せり。是れ即ち今日の盛大なる基督教青年會の濫觴にして、ウィリアムスは時に齡廿三歲なりき。青年會創業時代の事業として記すべきは、個人的觸接、共同的祈禱及び聖書研究の三事なりしが、ウィリアムスは之が爲めに終始東西に餘定したりき。爾くて青年會は初めより健全なる進歩を爲し、其際宗教的團體の相前後して起りしと者、ヒチコック商館以外十有四を數ふるに至り、ラッドレー氏館に開ける毎週の集會も益々其人員を加へ、且靈活の氣次第に盛えぬ。彼等に何れ

も傳道心盛にして、其間には毫も宗派的感情匂りき。而して此青年會は瞬く間に宛も火の燎原を焼くが如くに、英蘇兩國の大都會を風靡するに至りしかば、ウィリアムスは歡喜に堪えず、一八四七年八月十九日夕手記して曰く『余は今夕より全く己が身を基督教青年會に與へて其財寶たらんことを厳かに宣言す』と。爾來彼の余生涯は青年會記錄中の者となりぬ。彼れ廿九歳の時（一八〇五）主人の女ヘレン、ヒチコックと婚す。於是彼は一方エキセター館に於る青年會講壇の士として人の注意を喚起せしと共に、又聖パウロ寺院の有爲活潑なる實業家として推さるゝに至れり。一八四九年エキセター館に於て最初の祀念會開かる。偶坐長アシュレー卿の病に妨げらるゝやウィリアムス代て集會を指導し、爾來其死に至る迄二三回を除くの外ウィリアムスの坐長は其恒例となれり。一八五一年の倫敦大博覽會に參集せる各國の訪問者に青年會を紹介するの好機會を與へたり。翌年ウィリアムスは商用にて巴瑪に赴き、同志を糾合して巴理にも青年會の基礎を置くに至れり。ヒチコック商館員の盡力にて青年會がアデレート、カルカッタ、モントリオル、ボストン等に設けられしも同年也。既にして會運漸く隆盛の域に進み、一八五五年ウィリアムス三十四歳の時巴理大會開催せられて萬國同盟締結せらる。爾後青年會は多少世上の批判を蒙りしが、一八六四年エヂンバラに開きたる代議員會にて、青年會對教會の關係其他重要の問題決定せられし以來、一段鮮活なる發展を爲せり。ウィリアムスは一八八四年伯林に開かれし萬國青年會大會に出席せしが、二年を經て一八八六年青年會中央部の會長に擧げられぬ。彼は寸暇なき商務に忙殺せられ乍らも、日々の戦務を終れば事務室を去り、匆々に晩餐を濟ませて青年會又は他の宗教的會合に臨むを常とせり。斯くて彼は一八九四年六月青年會五十年祀念會の倫敦に開かれたりし際女皇ヴィクトリアより勳爵士の爵を授けられ、之を前後して倫敦市より自由市民權を贈られたり。一九〇五年四月青年會萬國同盟の五十年祀念會巴理に開かるゝや、彼は康甚しく衰へ、英國に歸りて後トルケーに其病を養ひしが同年十一月六日死せり。



ウィリアムス卿　モニエル　モニエル

ウィリアムス卿 モニエル モニエル

Williams, Sir Monier Monier 人名 一八一九—九九 英國の東洋學者。印度ボンベーに生る。ヘーレーベリー大學の東洋語學教授となり（一八四四—五八）ケルヂンハム大學にてサンスクリット語を教へ（一八五八—六〇）牛津大學のサンスクリット語教授となる（一八六〇）後又同大學バリオル、カレッヂのフェロー（一八八二—八）印度會館の主事（一八八三）となり、一八八七年勳爵士の爵を授けらる。其『サンスクリット語字書』（一八五一—七二）『サクンタラ』（一八五三）『印度史詩』（一八七三）及び『印度の宗教的智慧』（一八七五）は最も著名にして、外に『印度の宗教的生活及び思想』（一八八三）『佛教』（一八八九）『婆羅門教』（一八八九）及び『印度教』（一八七七、八九）等の著書あり。

ウィリアムス ロージャー Williams, Roger 人名 一六〇〇—八三 北米合衆國ロードアイランド州の創立者、米國の政治及び宗教的自由の使徒。ウェールスの名家に生れ、牛津に於て教育を受けしが、英國の教會に反對し、非國教會の教師となりて一六三一年米國に航し、サレム、後プリマウスの補助牧師となり、一六三三年サレムの牧師となりしが、官吏の權威に對し危險なる新說を唱へたりとの理由を以て其職より退けられ、ロードアイランドに於てプロヴィデンス市を開始し、此地にバプチスト教會を創立したりしが、後バプチスト教會に快からずして之を去れり。一六四三年ロードアイランド殖民地の特許を得んため英國に航し、翌年其使命を全ふして歸りしが、一六五一年再び同一の目的を以て英國に航し、ヴェーン、ミルトン、及びコロンウェル等知名の士に交を結べり。一六五四年ロードアイランド殖民地長官の任を帶びて歸り、死に至る迄其職に留まれり。亞米利加印度人を愛し自ら其言語を研究し、能く彼等を保護せり。著書多く『亞米利加印度語の鍵』『獨的生活及び健康の實驗』等は其重なる者也。

ウィリアムス ローランド Williams, Rawland, D.D. 人名 一八一七—七〇 英國牌學者。創橋大學に學ぶ。キングス、カレッヂの教授となり、後ウェールス聖ダビデ神學校の副校長兼希伯來語教授となり、後又創橋大學の說教者に選ばる。有名なる『基督教と印度教』（一八五六）及び『基督の心に適へる合理的敬慶』（一八五五）は彼の著書也。彼は又『論文及び評論』紙上に掲げたる『ヂンゼンの聖書的研究の批評』（一八六〇）に於て蓮歩的の意見を發表し、ために劇端の告訴を受け、教職を中止せられしが、樞密院に上告し、前判決を取消されたり。

ウィルソン ジョン Wilson, John 人名 一八〇四—七五 蘇國の宣教師、印度語學者。一八二八年宣教師として印度に航し、女子教育及び印度語研究に熱心なるを以て名あり。『ボルジーの宗教』（一八四三）『三千年前の印度』（一八五八）の著あり。

ウィルソン トマス Wilson, Thomas 人名 一六六三—一七五五 英國教會の監督。デルビー侯の牧師となり、後に依りてソドル及びマンの監督に任命せらる。『基督教の原理及び義務』を著し、且之をマン島語に飜譯せり。

ウィルバーフォース ウィリアム Wilberforce, William 人名 一七五九—一八三三 有名なる英國の博愛家。創橋聖ジョン、カレッヂに學び廿一歳にして業を終る。直ちに國會議員となり、一八二五年老齢任に堪へずして辭職するに至る迄、引續き下院議員たり。家富み、才智あり、且社交を好みしを以て、勉め交際社會に入りしが、其師アイザック、ミルネルと共に歐羅巴大陸を旅行せる際、其師の宗教に關する眞面目の談話は深く其心を動かし、遂に一七八五年悔改して英國上流社會に於るウェスレーとなり、英國教會內福音主義派の領袖たるに至れり。一七八七年『風俗改良會』を創立し、彼を不朽ならしめし大事業、即ち奴隷廢止の運動に着手せり。彼は幼時より此事に注意し、十五歳の時既に此主意に關する論文を書きたることありしが、幼時の理想を實行するに着手したるは實に廿八歳の時なりき。爾後彼は其一生を此事業に委し、奴隷所有者の劇しき反對に遭遇したりしが、廿年間苦戰奮鬪の後、一八〇六年奴隷廢止案はグレンヴィル卿に依りて上院に提出せられて通過し、直ちに下院に廻附せられ、一八〇七年三月之を通過し、直ちに國王の批准を得、一八〇八年一月一日以後奴隷貿易は違法也との事布告せらるゝに至れり。彼は進より此事業を單獨にて爲したるにはあらず、バルク、タラルクソンは有力なる援助を彼に與へたりしが、彼は終始奴隷廢止黨の首領にして、其成功の大半は彼の努力に歸せざるべからず。既に法律上奴隷廢止を決せらるゝや、彼は又法律の勵行、奴隷の解放に其注意を向け、深く黑奴の利益を思ひ、獨り英國に於てのみに非ず、世界各國に於る奴隷を廢止せんために苦心盡力したりしが、其死する三日前奴隷廢止の事全く實行せられたることを聞きたり。彼の宗教的確信は『眞正の基督教と所謂基督教徒と稱する者の宗教とを比較せる實際的觀察』と題

せる其著書(一七九七)に於て之を見るべし。此書は信仰なき道徳は健全なりと、基督教に入生の需要に應ずるに足れりやの二問題を論ずる者にして、半年にして五版を重ね、又佛、獨、伊、西、蘭の諸國語に翻譯せられたり。彼は又『クリスチャン、オブゼルヴァー』と題する宗教新聞を發行し又『大英國及び外國聖書會社』を創立するに與りて力あり。彼み研究せんとする者は、アイザック及びサムエルの二子の手に成りたる彼の『傳』(一八三八、五卷)及び彼の『書簡』(一八四〇、二卷)を見るべし。而して最も便利なるはサムエルの手に成れる彼の『小傳』(一八六八、一卷)也。

ウィルバーフォース サミュエル Wilberforce, Samuel 人名 一八〇五—七三 英國教會の監督。博學家ウィルバーフォースの子也。牛津オリエル、カレッヂに學び、ブライトン、アルベルストクの牧師、サレーのアルチデヤコヂ、ウィンチェスチルのカノン、ウェストミンスチルのディーンを經て、牛津の監督(一八四五)次でウィンチェスチルの監督となる(一八六九)上院に在りて教會の辨護者たり、英國教會僧官會議の權限を擴張せるは彼の力に歸すべし。一時羅馬教會に傾きたりとの風評ありしが、彼は終始英國教會を羅馬教會化する凡ての企劃に反對せり。其重なる著書は『米國監督教會史』(一八四〇)『希伯來歴史の偉人』(一八七〇)等也。

ウィルフリッド Wilfrid. 人名 六三四—七〇九 英國ヨルクの監督。英國に於る羅馬教會の維持の一人にして、屢々英國王の爲めに其管區を追はれたれ共、其都度羅馬に至りて法王の後援を得たり。後羅馬に往く途中フリヴアン海岸にて難船し、フリヴアン人の中に傳道せり。

ヴィカル Vicar. 職名 『代理者』の義にして、羅馬教會に在りては此稱余頗る發達せり。教會の首はしも基督にして、基督は彼得を選びて其代理者となせり。羅馬法王は彼得の後繼者なるが故に基督の代理者也。而して法王は又法王の代理者を有す、教長、大監督、監督、監督等即ち是也。而して又教長、大監督、監督も亦其代理者を有す。英國教會に在りては、教區の主任者普通信徒なる時、教會の牧師を通常『ヴィカル』と呼び、其住宅を『ヴィカレージ』(Vicarage)と稱す。一八六八年に定められたる規定に從へば、教區の主任者に非ざるも、婚姻、洗禮等の儀式を司り、又教會員を破門する等の權を與へられたる牧師は『ヴィカル』と稱するを得ることゝなれり。

ヴィクトル Victor. 人名 三法王、二僞法王此名を稱す。(一)ヴィクトル一世 一八五—一九七 亞非利加の出にして、性急、熱狂を以て知らる。(二)ヴィクトル二世 一〇五五—五七 其在位中以太利に於て一回、佛蘭西に於て三回宗教會議を開き、當時教會の二大弱點たりし僧官の賣買及び僧侶の婚姻を禁じたり。(三)ヴィクトル三世 一〇八六—八七。(四)ヴィクトル四世 二僞法王此名を稱す。一はカルディナル、ボレゴリー、コンチ(一一三八)なれ共、彼は二ヶ月にして亡びたり。二はカルディナル、オクタヴィアヌス(一一五九)にして、其死に至る迄(一一六四)位に在りたれ共、實權敵手アレキサンデル三世に及ばざりき。

ヴィジタント尼派 the Visitation. Visitants or Nuns of Visitation. 僧派名 一六一〇年セールスの聖フランシス及びマダム、デ、シャンタルの創立せる尼派にして、初は病者、貧者を見舞はんことを主目的として立てたる結社に過ぎざりしが、疑惑を避くるため一六一八年之を僧派の組織に變じ、アウガスチン僧派の律を採用せり。其發達頗る速にしてマダム、デ、シャンタルの死する時には佛、伊、瑞、墺の諸國に蔓延し、八十七箇の尼院を有するに至れり。僧派律採用後は女子の教育を以て主目的となせり。

ヴィジリウス Vigilius. 人名 羅馬法王(五四〇—五五)。

ヴィジランチウス Vigilantius. 人名 第四世紀の末ゴリルに生れ、長老となる。エルサレムに往きエロームに謹ひ、留後兩者の間に爭論絶えず。彼は殉教者及び其遺物を拜するの風及び僧院主義を攻擊し、世より遁るゝは世に勝つことに非ず、獨身、貧窮の生活を守るは必ずしも高尚なる道德に非ずとのことを論ぜり。

ヴィタス Vitus. 人名 羅馬教會の聖徒。デオクレジアンの時殉教者の死を遂げたりと傳へらる。

ヴィタリアン Vitalian. 人名 羅馬法王(六五七—六七二)。

ヴィチー アレキサンドル ロドルフ Vinet, Alexandre Rodolphe 人名 一七九七—一八四七 瑞西の神學者、批評家。一八一七年バセル大學の佛文學教授となり、一八三七年ロサン大學の神學教授となる。佛文學の批評家として高地位を占めたり。其最眞の著書は『基督教哲學』『生きたる基督教』『編會書の研究』『牧會神學』『哲學及び文學の概論』にして悉く英譯せらる。神學に於ては福音主義を奉じ、悔改及び信仰に依りて救はるる教義を以て最も眞要也となせり。

ヴィンセント 聖 Vincent, St. 人名 古代教會の最も著名なる殉教者の一人にして、アフゴニアの名家に生れ、サラゴッサ教會のアルチデアコヂとなり、デオクシアン迫害の時殺さる(三〇三頃)。

ヴィンセント ド パウル Vincent de Paul 人名 一五七六—一六六〇 佛國がスコーンに生れ、フランシスカン僧派の教育を受けて僧となる。トウロウスよりナルボンに赴く途中海賊に捕はれ、基督教背信者の家に賣られしが、彼は後遂に其主人を再び悔改せしめたり。巴黎に歸り女王マルガレットのチャプレーンとなりしが、幾なく辭して之を辭し、クリキーの牧師、後又カサロンの牧師となる。此處に初めて『婦人慈善團社』を設立す。各自往きて貧民井に病者を助くるを以て其目的となせる者也。彼は又監獄、船舶及び此の如き場所の訪問を開始せり。一六二三年彼はバルガンザーのマコンに聖パロメオ協會を設立し、乞丐の撲滅を謀りしが、忽にして乞丐を絶つに至れり。彼は宗教的、博愛的熱心に加ふるに、人の性質に關する驚くべき智識と實行的技能とを有せり。故に其企てたる事業は凡て成功せり。其事業の中最大なる者を傳道僧侶の團社となす。初めは微々として振はざりしが、後大に世人の歡迎する所となりたり。『婦人慈善團社』の會員の多數は富家の婦人にして、家事を治むるを以て其第一の務となしたり。彼は又育兒院を立てたり。此等の諸協會は忽ち佛國以外、愛爾、保蘭、フルダリア、マダガスカル等に擴がり、普佛戰爭の際の如き大なる働を爲したりき。

ウェーア ヘンリー Ware, Henry 人名 一七六四—一八四五 米國の神學者。ハーバルド大學の神學教授、後新設の神學校教授となる。ユニテリアンの信仰を有せりとの廉を以て、正統派の人々より劾しき非難を蒙りたれ共、一八四〇年其明な失ふに至るまで其職に留まれり。『三位體派及びカルヴィン派に與ふる書』『宗教の基礎、證據及び眞理の研究』の著あり。

ウェーク ウィリアム Wake, William. 人名 一六五七—一七三七 英國カンターベリーの大監督。博學にして著書多し、其最も著名なるは『使徒的教父の眞正の書簡』(一六九三)なり。

ウェークフィルド エドワルド ギッボン Wakefield, Edward Gibbon 人名 一七五六—一八〇一 英國の神學者。劍橋大學に學びしが、國教會に反對し、ユニテリアンの說を奉ぜしが故に禁獄せりとの故を以て二年間獄に繫がる。家庭に在ては溫厚の人なりしが、其著書は辯疑的也。

ウェース ヘンリー Wace, Henry 人名 英國カンターベリーのディーン。一八三六年倫敦に生る。ボイル(一八七四—五)及びバンプトン(一八七九)の講演者たり、一八七五年倫敦キングス、カレッヂの教會史教授となり、一八八三年校長となる、又リンカン法學院の說教家たり(一八八〇—九六)進歩的福音主義を奉じ、ウィリアム、スミス相と共に『基督教家傳』を編輯し(一八七七—八七)又『聖書及び近世の諸研究』(一九〇三)を著はせり。

ウェールス長老教會 メソヂスト教會 Wales Presbyterian or Calvinistic Methodist Church. 宗派名 ホウエル、ハリス及びロウランド、ホイットフィルド傳道の結果として成りたる者なれ共、初めて之を教派に組織せるはトマス、チャールス也(一七三五—一八一四)チャールスの出づる五十年前頃より、ウェールスに於るメソヂスト教會は、漸次其基礎を堅め來りしが、カルヴィン派の教義を奉ずるを以て英國のメソヂスト教派と一致することを能はざりきチャールスの英國々教會を離れ、ウェールスメソヂスト教會に入るや、初めて之を一教派として組織せり(一七九〇—一)教會政治は實際に於て長老主義にして、教會の事務は總會、四季會、例月州會に於て掌る。此教派に屬する學校二あり。一はバラ、カレッヂと稱し、一八三七年の創立に係り、一はトレヴェッカ、カレッヂと稱し、一七六九年ハンチンドン夫人の創立する所也。最近の調査に依れば、教會の數千三百八十六箇、教師、傳道師の數千二百六十二人、信徒の數十七萬人也。

ウェステルン神學校 Western Theological Seminary. 學校名 一八二七年の設立にして、ペンシルバニヤ州アレガニーに在り。米國長老派に屬す。

ウェストコット ブルック フォッス Westcott, Brooke Foss 人名 一八二五—一九〇一 英國ダルハムの監督。一八六九年ペテルボロウのカノンとなり、翌年劉橋大學の神學教授に任ぜられ、且聖約全書改正委員に擧げらる。一八八四年ウェストミンスチルのカノンとなり、一八九〇年ダルハムの監督となる。彼は多くの人々殊に青年を引くの力を有し、彼に接近する者其感化を蒙らざるはなし。彼は又社會改良の事に最も深き興味を

有したりき。彼は著者として、教師として、極めて深き學殖を有すると共に、又納穏的、靈的要素なも有せり。彼の著書の中最も有名なは『新約經典史』(一八六六)『復活の福音』(同)『希臘語新約聖書』(一八八二)、ホルト博士共編)『蘇れる主の顯現』(一八八一)『父の顯現』(一八八四)『クリスタス、コンサムメートル』(一八八六)『化身及び普通の生活』(一八九三)及び『信仰と希望の言』(一九〇二)等也。

ウェストファリアの講和 事蹟 The Peace of Westphalia. 一六四八年三十年戰爭の終に、ウェストファリアに於て獨逸と瑞典との間に締結せられたる平和にして、宗教及び教會の問題に就き、此條約に於て議定せる二大點は、獨逸帝國の領域内に住せる羅馬教徒と新教徒との關係を定めたるアウグスブルグの平和條約を確認したる事と、ルーテル派及びレフォルメド派二教派の同一特權を承認したるとに在り。又此條約に於て、教會の所領及び歳入に關する所有權を規定せると、公伯が其領域内に於て信仰の告白を改作する權を規定せるとは、此條約に於て注目すべき他の點也とす。

ウェストミンステル アッベー Westminster Abbey. 教會名 英國倫敦の有名なる大會堂。傳說に依れば、最初の會堂は六〇五乃至六一〇年東サキソンの王セベルトの建設する所にして、使徒彼得自ら顯はれて之を聖別献堂したりしといふ。倫敦市の西側に建てられたるを以て、聖保羅教會と區別せんため『ウェストミンステル』(=West Minster=『西教會』の義)と稱せらる。然れ共通常此教會の建設者と目せらるゝは碩學者エドワルド(Edward the Confessor)也。エドワルドは此會堂にて戴冠式を行ひしが、爾後今上ウォルの五世に至るまで、世々の國王は、此處にて戴冠式を行ふを以て例となす(エドワルド五世は戴冠式擧行前死せり)又碩學者エドワルドは其建てたる會堂の聖別献堂後數日にして死し、此處に葬られたりしが、爾來ヨルヲ三世の時に至るまで、世々の王、后は此處に葬らる。近代に至りては唯に王后を葬るのみならず、英國著名の政治家、軍人、詩人、美術家、文學者等凡て英國民の尊敬せる偉人は此處に葬らるゝを常とす。ロジントン、アルゲインが『此所の嚴肅なる性質は人心を壓迫し、見る者をして無言の敬畏を起さしむ。吾人は實に其名聲を以て地上を充せし幾多偉人の骨に依りて身を圍繞せらるゝを感ぜずんばあらず』と云ひしは、誠に能く此森嚴なる會堂の光景を寫ぜりと云ふべし。此教會も其他の大教會と同に、漸次發達したる者也。現時の伽藍は、ヘンリー三世の建築に係る。王はエドワルド王の建てたる建物の東部を破壞し、更に之を莊麗ならしめんために、現時の伽藍を建てたる也。西部は一三四〇年より一四八三年に至る迄の間に於て增築せられたる者、北及び西に在る廊室、及び西南の塔側に在るエルサレムの室は、エドワルド三世の築く處也。又東端に在る莊ト、リットリングトンの築く處也。クロンウェル以前の內亂の際及び大なる禮拜堂は一五〇二—一五一二年ヘンリー七世の增築せる處也。クロンウェルの時代に至りしが、グリストフェル、レン卿之を再興するの命を蒙り、西端に二箇の塔を建てたり。會堂の形狀は拉丁十字形也。高壇の後に碩學王エドワルド禮拜堂(キャペル)あり、其後に又ヘンリー七世の禮拜堂あり。エドワルド禮拜堂の周圍に廣き迴廊あり、此迴廊は他の數多の禮拜堂を合せて五百十三呎、十字形堂橫邊の長二百呎、塔の高二百二十五呎、教會の高百二呎、毎日午前十時及び午後三時の二回禮拜あり。本堂及び十字形堂橫邊は毎日公衆の入るを許さず。

ウェストミンステルの會議 事蹟 Westminster Assembly. カルヴィン派及び清教徒派神學者の會議にして、英、米開國長老教會の教義及び條例の基礎此會議に於て定められる。此會議は蘇國々民がチャールス一世及び大監督ロードの虐政に反對し、其結果英蘇兩國の同盟成り、スチュアルト朝及び監督政治倒れて、クロムウェルの下に清教徒の起りたりし英國教會歴史に於る大運動に淵源し、英、蘇、愛三國のために、カルヴィン派及び清教徒派の主義に基き、完全なる信仰箇條、教會政治及び禮拜に關する規則を一定せんため、長期國會(一六四〇—五二)の召集せる者也。百廿一人の英國僧侶、五人の蘇國委員及び三十人の普通信徒總代より成り、會員は何れも國會の任命せる者也。此會議は立法的の性質を有せず、唯助言を與ふるに過ぎずして、決定の權は國會に在りき。一六四三年ウェストミンステル、アッベーに於て開かれ、一六四八年に閉會せり。最初後等は三十九箇條の教法箇條を修正せんとせしが、中途にして此計劃を棄て、政治及び禮拜に關する規則と共に、新なる告白を作れり。此告白に關しては、カルヴィン派中寛容兩派の爭論劇しかりしが、互に讓歩の結果、遂に其中を取るに至れり。斯く教義及び條例に關する基礎一定せしかば、此會議は常任委員會の知き者となり、遂に長期國會と共に別るゝに至れり。

ウェストミンステル標準 Westminster

ウエストミンスタル アッベー

Standard.

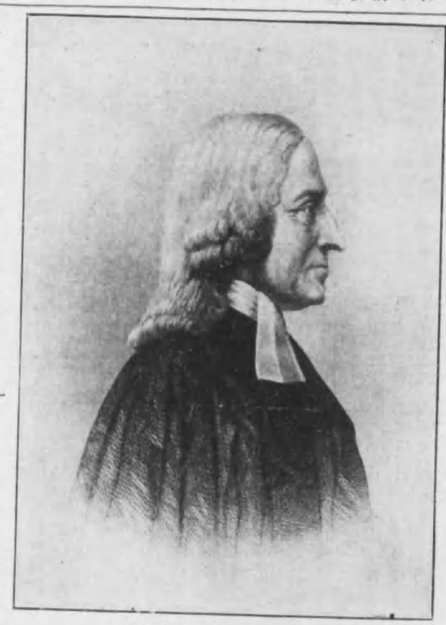
教義 ウェストミンステルの會議(別項を見よ)に於て、教義、條例、禮拜に關する標準を定め、長期國會之を准許せり。スチュアルト王朝の再興と共に英國にては之を廢棄したれ共、蘇國及び米國の長老教會は之を保持せり。又教義の標準は英國及び新英州の會衆派、多少脩正の上採用せり。(一) 教義の標準 (イ) ウェストミンステル信仰告白 一六四六年完成、一六四七年蘇國教會は其全體を承認し、一六四八年長期國會は多少脩正の上『宗教簡條』の名を以て承認せり。三十三章より成り、初めに聖書の教義を掲げ、末日審判の教義を以て終る。カルヴィン派の教義を最も明白に、最も強く、最も論理的に表明せる者也。(ロ) ウェストミンステル教會問答 二箇の問答書あり。一は大問答書にして、教師が講壇より説明する爲めに用ゐる者、二は小問答書にして、小兒に教ふるため用ゐる者也。二者共信仰告白と同時に調製し、長期國會之を准許せり。小問答書はルーテルの小問答書及びハイデルベルグ問答書に次ぎ、最も廣く新教派の教會に行はれ、其簡明なる點に於て他の問答書に優れり。(二) 禮拜の標準 一六四五年國會之を准許す。如何に禮拜を執行すべきやを精細に記し、式文を缺く。(三) 教會政治及び條例の標準 是れ長老派の教會政治の原理を示せる者也。

ヴェストリー Vestry. **制度** 英國教會に於て教區内に關する事を議定し、且教區の役員を選擧するために、教區内の信徒の集る會議ないふ。即ち教區會議也。

ウェスレヤン メリヂスト 『メッヂスト教會』の條を見よ。

ウェスレー ジョン Wesley, John

人名 一七〇三—九一 メッヂスト教會の祖。英國リンカンシア郡のエプウォスに生る。彼の父祖は何れも敬虔なる牧師にして、第十七世紀に於て英國民が受けたる激しき爭の中に立ちて、高貴なる生活をなしたる人々なりき。父をサムエルといひ、ウェスレーが生るゝ七年前エプウォス教區の牧師に任



ぜられたりき。彼は詩人、學者にして又同時に雄辯家たり、其筆と舌とを以て當時のあらゆる論爭に加はりたりき。母をスザンナといふ。第十八世紀に生れたる最も高貴なる婦人の一人にして、敬虔にして才智に富み、常に深く自己の責任を感じ、眞人を助け、又深き注意を以て十九人の小兒を教育せり。ウェスレーが此の如き家庭に生れて幼より其父母より善眞なる感化を蒙りたるは云ふ迄もなし。彼は十七歳にして牛津クライスト、チャルチ、カレッヂに入り、七年の後按手禮を受け(一七二五)翌年リンカン、カレッヂのフェローに選ばれ、廿三歳にしてマスター、オフ、アーツの學位を受く。父を助けてエプウォスに働くこと二年、又牛津に歸れり。

【ウェスレーの新生】 彼が牛津に歸りし年(一七二九)はメッヂスト教會の起れる紀元也として見るべし。是より先き、チャールス等に依りて既に組織せられたる『神聖倶樂部』は彼を一得て其會長となしたりしが、此時會員は僅に四人にして、ヨン及びチャールス兄弟の外には唯二人のみなりき。彼等には嚴しき規則ありて、一週に二日斷食し、一回聖餐を守り、日曜日の夜は神學書を讀みたりき。此の如くして彼等は嘲弄的にメッヂストと命名せられたりき。當時彼はトマス、エ、ケンピスの『基督模倣論』ウェレター、テールの『神聖なる生と死の法則』ウイリアム、ローの『基督教徒の完全』及び『重大の召』等を讀み、此等の

書より多大の感化を蒙れり。彼はローの書に就て、神の律法の正鵠なることを彼に教へしは彼の書なりしと云へり。賢くて彼は嚴格なる規律的克己の生活を營み、聖書を讀み、宗教的義務を熱心に勤行し、全心を神に献げて敬虔の生涯を送らんと努力したりき。偶々英國教會の一教師が、安逸の生活を棄てゝ眞面目の事業を爲さんとする者に新大陸に往くべしと云ふを聞き、ウェスレーは之に應じて、米國傳道の途に上れり(一七三五)彼れセヨルヴヤに在ること二年、漸次民衆の注意を引き、其説教を聞かんとする者漸く增加し來りしが、其極端なる教會主義と禁慾主義とは會衆の容るゝ所とならず、遂に失望と苦痛とを以て、セヨルヴヤを去り英國に歸れり(一七三七)。然れ共彼は此失敗に依りて自己の宗教の基礎の甚だ薄きものあるを悟れり。彼れ當時其日記に書して曰く『余がセヨルヴヤの印度人に基督教の性質を教へんとて故國を去りしより既に二年と四ヶ月を經たり、然れ共余は此間自ら何事を學びたりしか、嗚呼是れ他人を改宗せしめんとて亞米利加に往きて、我は未だ自ら改宗せざりしとの事是なりき、即ち余は神の榮を受くるに足らざる者、余の全心全生は悉く虚れて惡むべき者、余は神の生命より離れし惡の子、地獄の世嗣たる者也との事也』と。彼は實に十年の間跳と戰ひ、福音の律法を全ふし、其義を願はんと努めたりしが、尚即より免るゝこと能はず、聖靈の証を得ること能はざりき。而して是れ實に彼の自ら云へりしが如く、信仰に由りて之を求めず、律法の功作に由りて之を求めたりしが故なりき。彼はモラビヤンの教師より、眞の信仰は即に勝ち、即の紋を得るより來る平安と離るゝ可らざるものなる事、紋に至る信仰は瞬間にして得らるべきものなる事を學びたりしが、彼は遂に此信仰を倫敦プルダースケート街にて聞かれたるモラビヤン派の小集に於て得たり。彼れ自ら此時の事を記して曰く『余は此處に於て成人のルーテルの著したる羅馬書序言を讀むを聞けり、余に神が基督を信ずる者の心になし給ふ變化を敏するを聞き、余が心の不思議に感ゆるが如きものあるを覺えたり。余は自ら救はれん爲めに基督を信じたりしと雖、基督は余が即を取り去り、余を即と死との律法より救ひ給ひしとの確信を余に與へ給ひし、ことを感じたり、余は於是曾て余を嘲りし人々の爲めに力み祈して斯れり』と。

【メソヂスト運動の開始】　ウェスレーは神の爲めに全心を惠さんとの心に燃えて、獨逸より歸り來りしが(一七三八)英國教會は彼の説教に立つを禁じたり。彼は斷然意を決し、其曾て按手禮を受けたる權利を有せしを利して、倫敦及び地方に於て説教する權利なしとして、信仰に依りて義とせらるゝ云へる福音主義の教義を大膽に説きて、聽衆の心を動かしたりき。然れ共彼が立ちて説教したりし講壇は彼に對して一々鎖され、彼は全く教會に入ることを拒絶せられたりき。弟チャールスも亦倫敦の講壇に立つを拒まれ、此頃米國より歸り來れるホイットフィールドも亦ウェスレー兄弟と同樣なる待遇を受けたりき。一七三九年一月一日ウェスレー兄弟、ホイットフィールド、インガム等凡そ六十人の人々フェッザルレーンに於て愛餐式を行ひ、互に熱心に祈りて新年を迎へ、大運動を開始せんとしたりき。然れ共此運動を試むるに方りて未だ適當なる場所を得ざりしが、ホイットフィールドは此職場を野外に發見し、同年二月キングスウッド近隣の村落に於て、石炭鑛夫に向ひ説教し大なる成功を得たり。是より彼は尚數回野外説教を試み、終には聽衆一萬二萬の多きに達せしが、再び米國に航せんとするに方り、ウェスレーに書を贈り其事業を繼續せんことを求めしが、ウェスレーは當時『教會内に於てするに非ざれば人の靈を救ふことすら罪と思ひし』ことなれば、斯る新奇の方法を採用するに躊躇したりしが、彼は遂に其偏見に打ち勝ち、同年四月ブリストル附近の地にて、三千人に説教し、第十八世紀に於る英國宗教上の大運動は爰に其緒に就きたりき。此野外説教は大成功を奏したりしを以て、ウェスレーは教會にて集會する能はざる處にては、至る所野外にて説教し、曾て父の嘉例に立ちて説教したること又一再たらざりき。ウェスレー兄弟及びホイットフィールドの運動は頗くして長足の進歩をなしたりしが、彼等はモラビヤンと其步調を共にし、彼等のためにフェッテルレーンの協會を組織し、其改心者を此協會の會員となしたりき。然るに不幸にして一七三九年の終に至り、ウェスレーは獨逸より新に流來せる教師等が無道德主義と靜寂主義とを傳へつゝあるを發見し、百

方其誤謬を悟らしめんと苦心したりしが、其効なきを見て、斷然分離を宣言し、自ら一協會を組織するに至れり。彼曰く『斯の如くして余は何等豫定の計劃もなく、英國に於るメソヂスト協會を創始したりき』と。斯の如き眞社はブリストル、キングスウッドを初とし、ウェスレー及び其同僚の働に依り改心者の出で來れる所に續々組織せられたりき。

【メソヂスト運動の發達】　一七三九年以後ウェスレー及び其徒は、英國教會の僧侶及び政府の官吏に依て迫害せられ、説教、著書等の方法に依て攻擊せられ、又屢々亂民の一團に依てなやまされたりしが、彼等は之が爲めに毫も屈することなく一層の勇氣を以て活動したりしかば、メソヂストの傳道は手廣く擴張せられ、改心者益々增加したりき。ウェスレーは奇しき教を傳ふる者、平和の破壞者、盲目の狂信者、背教者、謀叛人、英國教會の面目を汚すべき、法王政治を再興せんとする者也として攻擊せられたりしが、彼は當時の教會が即人を誨改に導くの義務を忘れ、僧侶は世俗的に流れ、國民は即の爲めに滅亡しつゝあるを見て、來らんとする惡より逃るべきことを人々に警告するの使命を神より與へられたりと確信し、一切の攻擊、非難、迫害に場へ、東西に奔走して救靈の事業を爲したりき。彼は初め極端なる教會主義を持し、使徒的傳承、僧侶的階級の偏見を有したりしが、其間始めて運動の漸次進步し、獨力を以て外部の要求に應ずる能はざるに至り、其社中より最も敬虔にして且適當なる信徒を選びて之を補助者となして働かしめたりき。彼は又其協會の數の漸次增加するに從ひ、神を禮拜すべき會堂の必要を感じ、一七三九年ブリストルに質素なる會堂を建築したりしを初とし、續て倫敦其他に之を建築したりき。此等の會堂は初めウェスレー自らこれを保管したりしが、後メソヂスト教會は凡て『法定百人組』と稱する説教者の團體にて保管することゝなれり。又會員の數增加するに從ひ、中には協會の規律に從はざる者出で來りしかば、ウェスレーは自ら其姓名を認せる會員票を各會員に與へ、三箇月毎に之を書き換へ、會員たるに不適當也と認められたる者には之を突付せず、自然脫會するの制となしたり。又會堂の負債の增加するに及び、ウェスレーは十二人を一組となし、其一人をして組中の獻金を集めしむる方法を立てたりしが、此方法は後組會と稱するに至れり。此組會に經驗ある信徒をして各若干者となりたり。此集會の會員を監督せしむるの法にして、彼等は吉内福福相訪ひ相慰め、貧富強弱相助け相勵まし、如此して教會の一致聖徒の交際を謀りたりき。ウェスレーは不法なる會員を監督するの法を更に有効ならしめんために、試驗制度を立て、又三ヶ月毎に自ら各協會を巡回せり。是れ四季會の起れる初也。然れ共協會の漸く增加するに從ひ、彼は自ら惡く之を巡回して親しく會員を教訓すること能はざりしかば『總則』を作りて之を與へたり。又事業の發達に伴ひ講種の困難を問題起り來りしかば、彼は其同勞者と其責任を分つべき時機到達したりとなし、一七四四年彼と共に事業を共にしたる教師及び普通信徒の説教者を協議に會し、如何にして神の事業を進行すべきやに就て協議したり。是れ即ちメソヂスト教會第一の會議にして、此集會に列したりしはウェスレー兄弟、四人の教師及び四人の信徒説教家なりき。此集會に於て彼等はメソヂスト協會に何を教ふべきか、如何に教ふべきか、何を爲すべきかに就きて評議し、教義及び説教者に關する規則及び英國教會に對する態度を定めたり。ウェスレーは又説教者の働をして一層組織的に且有效ならしめんとて、巡回傳道法を定め、一年若くは二年毎に其任地を交代せしめたりしが、後彼は之を三年と改めたり。メソヂスト協會が此の如く長足の進步をなすに從ひ、ウェスレーと英國教會との間隔は益々相遠からざるを得ざりき。彼の同勞者の中には全く英國教會と分離すべきことを主張せる者ありしが、チャールス及び其他の人々は劇しく之に反對せしを以て、此問題は容易に一定せざりき。一七四五年彼は其同勞者に書を贈りて、其眞心の許す範圍に於て英國教會の僧侶と共同して働くべきこと、然れ共信仰に依りて内的救拯を瞬刻に得べしとの教義を棄て、若くは私人の家及び野外にて説教することを止め、若くは協會を解散し、若くは普通信徒の説教を禁ずるが如きことはなすべからずと云ひたりしが、此外の事に就ては何事をも云はざりき。彼は初め使徒的傳承を受けたる聖餐の許可なくんば、洗禮を施し若くは聖餐を行ふこと能はずと思惟したりしが、ロード、キンアの初代教會に關する著書を讀むに及び、所謂使徒的傳承なる者は虚構の説に過ぎず、彼れ自ら聖書に遵ひて監督たりとの確信を得るに至り、後又スチリングフリートの著書を讀むに及びて、基督若くは其使徒が一定の教會政治を設けたりとの説を排斥し、長老の行ひたる按手禮は確實也との事を信ずるに至れり。然れ共彼は此後四十年の間自ら按手禮を施こすことなく、説教家なる任命することを以て按手禮と同一なる者也となし、神が彼のために其道を開き給ふ時期を待ちつゝありき。而して彼は倫敦の監督が、米國に在るメソヂスト信徒の教師たる者に按手禮を施すことを拒絶するに及び、是れ神彼のために道を開き給へる也と

なし、英、蘇、米諸國の説教者に接手禮を施し、聖典執行の權を與へたり。又英國教會の長老タッタ博士に接手を施して之を聖別し、米國に於る總督となし、説教者アレキサンデル、マッデルにも英國に於る同樣の職を授けたり。チャールスは之を聞きて大に驚き、此の如くして英國教會との關係を破るが如きことを申止せんことを請ひ來りしが、彼は之に答へて、英國教會と分離せんと欲するに非ず、多くの靈魂の救はれんことを欲する也とのことを云へり。此の如く彼は英國に在る彼の徒に向ひては、英國教會に留まらんことを勸告し、彼も亦英國教會に在りて此世を終れり。

【ウェスレーの神學】　彼は熱心なる論辯家にして、其最も著しきはカルヴィン派の神學に於る論爭也とす。ホイットフィルドは米國に在りてカルヴィン派の神學説を抱き英國に歸り來りしが、ウェスレーが『自由の恩寵』と題する説教に於て、豫定説を攻擊し、是れ神を以て惡魔より惡き者となす者にして、神を涜すの甚き者也といふや、ホイットフィルドは再び斯ることを反復することを勿らんことを請へり。ウェスレーは之に答へて『願くは我等をして凡ての人に惜みなく救拯を獻ぐるを得せしめよ、神の選びの事に就ては緘默を守らしめよ』と云へり。彼等は此問題に就て相會すること能はず。故に分れては合し、合しては分れたりしと雖も、其交情は變ることなかりき。ウェスレーの神學は其大體に於て三十九箇條に示されたる英國宗教改革の神學に外ならざりき。然れ共救拯に關する教義は彼の神學に於て最も重要なる部分を占めたりき。彼曰く『吾人の首要なる教理は悔改、信仰及び聖潔是也、第一は宗教に入る道、第二は宗教に入る門、第三は宗教其者也』と。而して彼に從へば悔改とは唯犯したる罪を悲むのみに非ず、悔改に適ふ果を結ぶの謂、信仰とは唯基督の福音に信從するのみに非ず、我等の贖罪的犧牲及び我等の生命として基督に來る事也。而して稱義、新生及び聖潔は此信仰に由りて達し得べし。稱義とは救拯の意にして吾人は之に依て神との關係を變化する也、新生に由りて聖靈は吾人の性質を新にし、心を變化する也。聖潔は信仰に初まり、信仰の進歩と共に吾人の聖潔も亦進歩する也。而して彼は此内的聖化は今世に於て達し得べきことを信じ、基督教的完全又は完全の聖潔を説けり。彼は此基督教的完全を説きて、是れ『心を盡し精神を盡し意を盡し力を盡して神を愛することも、此中には眞意なく、愛に反對する者なく、思想、言語、行爲柔く純精なる愛に依りて支配せらるゝことを含めり』と。彼の神學に於て重要なる地位を占めたる他の教義は、聖靈の証のそれ也とす。彼自ら之に定義を下して曰く『聖靈の証とは神の靈直接に我靈に、我れの神の子たる事、耶蘇基督の我を愛し我が爲に自を與へたりし事、及び我が凡ての罪は抹され、我は神と和らぎたりとの事を証する其内的印象也』と。

【ウェスレーの性行及び事業】　彼は英國に生れたる最も多忙の人なりき。彼は斯へす旅行し、而して常に馬上に於てし、一日に二回若くは三回説教せり。斯くして彼は協會を組織し、會堂を開き、説教者を試驗し、任命し、條例を執行し、教會、學校、孤見院を監督し、之がために資金を募集し、メソヂストの攻擊者に答へ、聖書の註釋其他の書物を著作し、雜誌を發行し、通信を認むる等のことを爲せり。彼の巡回傳道者として旅行したりし路程は二十五萬哩に上り、毎週十五回の平均を以て四萬二千四百回の説教をなし、其著譯書は神學、傳記、歴史哲學、詩歌、文典、醫術等に渉りて總計二百部に及べり。其中最も著名なる者を説教集、日誌、新約聖書註釋、ウェスレー傳、アクベー

ウエスレー、アクベーに在る紀念碑

註釋とす。彼は此等の著譯に依りて得たる處凡そ廿萬圓に上りしと雖も、少しも之を自家の用に費さず、自ら奉ずること極めて薄く、終生清貧に安じたり。彼は毎朝四時に起き、事を爲す秩序的にして、瞬間と雖も惰情に過すことなし。彼は多方多面にして、一人にして同時に三四人の生活を送りたり。彼の性格に於て最も著しきは其誠實なることにして、彼は自己に對しても人に對しても眞率公明毫も飾る處無りき。彼は活動の人なりしかども、又靜の人なりき。彼は曖なる人なりき、然れ共猛烈には非ざりき。彼の驚くべき事業は熱心の衝動に依りて得たりしよりも、冷靜なる熟慮と沈着なる經營とに依りて得たりし也。彼は又日常の生活頗る謹愼細密にして、其室内の如き極めて清潔にして一紙の散亂せるもの勿りしといふ。寛大と慶量とは彼の他の特色にして、ユニテリアンの傳記をも羅馬教徒の傳記をも其自ら發行する雜誌に載せ、羅馬教徒の手に成りたる著書をもメソヂストの家庭に推薦したりき。彼は敬虔眞面目の人なりしに拘はらず、極めて深き同情を有し、和氣藹然たる者ありき。彼は極めて論理的なる頭腦を有し、思想明白、論理井然たりき。而して彼は之を包むに平易、簡潔にして且力ある言語を以てしたりき。彼は雄辯には非ざりしかども、其説教は極めて有力にして、權威を有てる者の如く語りたりしといふ。彼は四十八歳の時一寡婦と結婚したりしが、其結婚の生活は不幸なる者なりき。彼は頗る長壽を保ち、一七九一年三月平和と喜悅とを以て逝き、其遺骸は倫敦ジチー、ロード、チャペルに葬られぬ。彼は死する時其一生の働の結果として、メソヂストの名を有する徒十三萬五千と五百四十一人の説教者を遺せり。彼とチャールスとの紀念碑は後年ウェストミンステル、アッベーに建設せられ、ウェスレーの墓に附するに、ジョンの『我は世界を我が教區とす』凡ての中最もよきは神我等と共に在す事也』との言と、チャールスの『神は其工人を顧るも其事業を繼續せしむ』との言を以てせり。

【參考書】　ウェスレーの説教集三卷、日記、新約聖書註釋。ウェスレー傳はサウセー（一八二〇）ダイエルマン（一八七〇）キルタトン（一八九三）スチルター（一八九九）フイッチエット（一九〇六）ウィンチェスター（一九〇六）邦語にては高木壬太郎の『ジョンウェスレー傳』也とす。

チャールス　ウェスレー

ウェスレー　チャールス Wesley, Charles

人名　一七〇八　八八　サムエル、ウェスレーの末子にしてジョン、ウェスレーの弟也。ウェストミンステルの聖彼得カレッヂ、及び牛津クライスト、チャルチ、カレッヂにて教育を受く。彼は牛津に於る『神聖倶樂部』の最初の會員、メソヂストの名を得たる最初の人にして一七三五年接手禮を受けジョンと共にセオルヴヤに往き、彼に先ちて新生を經驗せり。彼は兄ウェスレーの立法的、組織的才能なく、其擧動寧ろ操急なりしと雖も愛嬌あり、愿ゝ矛盾の説を唱へしと雖も自己の説を固執することを堅く、又古典及び聖經に精通せり。説教家としてはジョンよりも雄辯にして、東奔西走兄と艱苦を共にしたりしが、後ブリストルに定住し、又會敎に移り死に至る迄説教せり。彼に於て最も著しきは其詩才にして、メソヂスト教會のみならず、凡ての基督教會は彼の作りたる讃美歌に負ふ所少から寸。チルレット博士曰く『我教會はウェンを除きてはメソヂズムの讃歌者（チャールスを指す）に負ふ

所何人よりも多し、初代メソヂズムの教義は唯耳に向ひて宣べられたりしのみならず、此天使の如き詩人の編纂なる讃美歌に由りて人の情意の中に歌はれたりし也』と。チャールスは五十年間毎週平均三首の歌を作りたりしといふ。而して其出版せられたる者四千六百、傳へられて今尚存する者凡そ二千、ウェスレアン教會の讃美歌中に在る者凡そ六百、我が『さんびか』に在る者十九『我がたましひを、あいするイエスよ』の歌は其最も人口に膾炙せる者也。彼れサラ、ツインを娶り八人の子を生む、其中二人は著名なる音樂者也(『ウヨン、ウェスレー』の條參照)。

ウェスレー サミュエル Wesley, Samuel 人名 一六六二—一七三五 ウヨン及びチャールスの父。初め非國教會の學校にて教育を受けしが、後國教會に入り、牛津エキセテル、カレッヂに學べり。一六九三年『基督傳』なる一詩を作り女王メリーに獻ぜしが、其報酬としてリンコンシア、エプウォスの教區を與へられたり。彼は博學にして敬度の念深く、且慈善心に富めり。彼れ多く書を著はし、之に依て僅に其大家族を支へたりき。『新約歷史』『舊約歷史』『約百記拉丁文註釋』は彼の著書の最も重なる者也。

ウェスレー スザンナ Wesley, Susannah 人名 一六六九—一七四二 ウヨン及びチャールスの母。父はサムエル、アンチスレーと稱し、有名なる非國教會派の神學者なりしが、スザンナは十三歲にして非國教會を離れ、國教會に入りたり一六八九年サムエル、ウェスレーに嫁し、十九人の子女を擧げたれ共、中九人は夭死せり。賢婦の聞頗る高し。チェルマンエ子女教育法に就き記して曰く『小兒生れて一歲に至れば、權威を恐るべきことを教へられ、又啼泣せざるを得ざる場合には靜に喩くべきことを教へらる。子女の食事は一日三度に限られ、最に間食を禁ず。夜八時に至れば手足顏等を洗ひて後就眠せしむ。子女は又言語を發し得るに至れば、主の祈を教へられ、朝夕復習せしめらる。一日六時間を以て課業を始むる時、及び每夜一日の業を終る時詩篇を歌ひ、且朝夕詩篇及び聖書の一章を讀み、其後にて課業を始むるを例とせり』と。夫の死後倫敦に往きてワ新禱するを例とせり』と。夫の死後倫敦に往きてワヨンと共に住居せり。

ウェスレー共勵會 Wesley Endeavour Society. 結社名 日本メソヂスト教會に屬する共勵會にして、米國メソヂスト教會のエプオス同盟會と同じっ其性質及び働等大體に於て基督教共勵會と異なる所なし。『基督教共勵會』の條を見よ。

ウェッセル ヨハン Wessel, Johann 人名 一四二〇—八九 獨逸宗教改革の先編者。ッオール、コローンに學び、巴理に往き留る、十六年。一四七六年ハイデルベルク大學の招聘を受け哲學教授となりしが、翌年すでに之を辭し、其故郷グレーニンゲンに歸る。其將まに宗教裁判に附せられんとする者あるを知り、遁れてウトレヒト監督の家に匿れ、多くの書を著したれ共之を出版せず。彼の死後メンヂカントの僧之を搜集して破毀したれ共、又彼に同情を寄する者あり、之を保存してルーテルに送りたりしかば、ルーテルは之を出版せり。ウェッセルは哲學のみを以て滿足するには餘に宗教的なりしが、宗教改革者たるには又餘りに哲學的なりき。彼は教會に關して『余は教會と共に信れ共、教會をば信ぜず』と言へり。彼は各人が教會より得る利益の大なることを承認したれ共、神との關係に就ては彼は一刻たりとも教會に依賴することを能はず、教會の組織は必要なれ共、偶發的にして變化せられ得べき者也と云へり。

ウェッツェル ハインリッヒ ヨセフ Wetzer, Heinrich Joseph 人名 一八〇一—五三 獨逸の神學者。東洋語學に達し、マルブルグ、チュービンゲン、パリ及びフライブルグ諸大學の東洋語學教授たり。一八四六年ベネヂクト、ウェルテと共に羅馬教神學辭典の編輯に著手し、翌年其第一卷を出版せり。此書は公平にして此主意に關する最良たり。

ウェッテ デ ウイルヘルム マルチン レベレヒト Wettete, Wilhelm Martin Leberecht 人名 一七八〇—一八四四 獨逸の神學者、批評家。ゲッチンゲン大學に在りエルゲルド大學の神學教授となりしが、其心より正統教義を奉ずること能はざるが爲め、一八八二年遂に其職を辭せり 一八八五年ハルレ大學言語學の教授となり、一八八五年マルブルグ大學東洋語學の教授となる。『以色列人の歷史編論』(一八七八)『メザナに於るモハメット』(一八八二)及び『モーセ五經の編輯』(一八八九)の著あり。極端なる消極的批評家にして、聖書に關しては全く自然派の地位を取れり。其舊約宗教の起源及び發達に關する彼の議論の要は即ち左の如し。曰く、以色列人民は元來生硬なる魂魄崇拜者にして、殊に死者の靈魂を拜みたりしが、迦南人の地に移住するに及び、彼等よりも發達せる迦南人の文化と其宗教とに接觸し、漸次多神教信者となり、後又早一神教信者となり

ウェルハウゼン ユリアス Wellhausen, Julius 人名 一八四四 獨逸の神學者、批評家。ゲッチンゲン大學に在りエルゲルドに從ひて學び、一八七二年グライフスワルド大學の神學教授となりしが、其心より正統教義を奉ずること能はざるが爲め、一八八二年遂に其職を辭せり 一八八五年ハルレ大學言語學の教授となり、一八八五年マルブルグ大學東洋語學の教授となる。『以色列人の歷史編論』(一八七八)『メザナに於るモハメット』(一八八二)及び『モーセ五經の編輯』(一八八九)の著あり。極端なる消極的批評家にして、聖書に關しては全く自然派の地位を取れり。其舊約宗教の起源及び發達に關する彼の議論の要は即ち左の如し。曰く、以色列人民は元來生硬なる魂魄崇拜者にして、殊に死者の靈魂を拜みたりしが、迦南人の地に移住するに及び、彼等よりも發達せる迦南人の文化と其宗教とに接觸し、漸次多神教信者となり、後又早一神教信者となり

りたり。エホバは元來迦南人の神の一にして、雷電の神なりしが、遂に貝色列人の國神となり、貝色列人民所領の擴大せらるゝに從ひて、其の權威の及ぶ範圍も亦漸く擴大せり。預言者に至りてエホバに關する觀念は漸次發達して、益々靈的倫理的となり、其勢力の範圍他國民に及び、其權威も亦漸次增大せり。斯くて宗教上の生硬、野蠻なる形式は、幾多の奮鬪を經て此高貴なるエホバの觀念と漸く調和し來りしが、獨的倫理的なる宗教は又漸く儀式と律法との中に包まれ、祭司なる者起りて預言者に代はるに至れり。所謂モーセの律法と稱する者は之に伴ふ幾多繁密の儀式と共に、斯くして長き間に發達せる結果也と。故にウェルハウゼンの云ふ處に依れば、以色列人民宗教の發達の次第は初めに魂魄崇拜、次に多神教、次に單一神教、次に預言者の倫理的唯一神教、次に僧因以後に於る祭司典是也。此說は多くの學者之を採用し、以色列宗教の研究に大なる光明を與へたり。

ウェルンクス フランシス ザビエー Wernx, Francis Xavier. 人名 一八四二 イエスイト社の首領。ウェルテンベルクに生る。十五歲盟社に入り、爾後ディットン學院にて宗教法典を學ぶ。一八八三年グレゴリアン大學の教授となり、一九〇四年以來其牧師たり。一八九七年以後宗教法典の編輯に從事し、既に四卷を發行せり。

ウェント ハンス ハインリヒ Wendt, Hans Heinrich 人名 一八五三 獨逸の哲學者、神學者。相續てゲッチンゲン大學の神學教授(一八八一—三)キール大學の新約註釋學教授(一八八三—五)ハイデルベルヒ大學の組織神學教授となり(一八八五—九三)最後にエナ大學に聰ぜられたり。其重なる著書に『基督教の完全の教説』(一八八一)『使徒歷史』(一八九九)『約翰福音書』(一九〇〇、英譯あり)『眞正基督教の規範』(一八九三)『基督教眞理の實驗的証據』(一八九七)『耶蘇の教訓』(一九〇一)『再版、英譯あり)『天啓の觀念と眞實、及び基督教の模範的形式』(一九〇四)等也。其神學說はリッチェル派の系統に屬す。

ウェーンライト ジョナサン メーヒュー Wainwright, Jonathan Mayhew, D. D. D. C. L. 人名 一七九二—一八五四 米國プロテスタント、エピスコパル教會の監督。久しく監督局の書記たり。著書多し。

ヴェスパジアン チッス フラヴィウス Vespasian, Titus Flavius 人名 羅馬帝(六九—七九)。チロ帝の下に在りて巡非利加の總督となり、後猶太の太守となりしが、六九年部下の軍隊に推されて羅馬帝となる。先づパタヴィナッスと共にエルサレムを滅し、翌年羅馬に凱旋す。斯くて猶太人は全く其國民的存在を失へり。但しヴェスパウアンは猶太人を處するに殘酷を以てせざりき。帝の治世間は基督教會の迫害もなく、史家ユウセビウスは明に平和の時期なりしと云へり。

ヴェニ クリアトル スピリッス Veni Creator Spiritus. 羅語 古代拉丁教會の讃美歌。聖靈降臨を祈れる歌也。伊希詳ならず、或はシャルレマン也と云ひ、或はアレゲリー、ビ、グレート也といふ。一六六一年初めて英國教會所譯書の中に入れらる。羅馬教會にては法王の遷擧、帝王の戴冠式等に用ゐ、英國教會にては教師の按手禮、監督の聖別式に用ゆ。我が『さんびか』四百六は此歌より換骨奪胎し來れる者也。

ヴェロニカ Veronica. 人名 傳說に依れば、耶蘇が十字架に釘けられんとてゴルゴタに往く時、彼に從ひしエルサレムの婦人の一人にして(路廿三の廿七)彼女は耶蘇の疲勞せるを有樣を見て、其顏より落つる汗を拭はしめんとて、手巾を取りて之に與へしに、耶蘇の後に至りて之をかへしたるを見れば、彼の顏の痕跡其手巾にのこれり。羅馬帝チベリウス病に罹り、此手巾に寫されたる聖容不思議の力ありと聞き、ヴェロニカを召す。既に至りて帝其手巾に觸れしかば病愈えたり。ヴェロニカは羅馬に留まり、死に臨みて之を彼得の後繼者クレメントに與へたりしといふ。第八世紀の初に至り、法王ヨハネ七世は聖マリア、マッギオレ教會に此寶物を有せりと主張したれ共、ミラノ及び其他の教會にても亦均しく之を所有せりとのことを主張せり。或はいふ、ヴェロニカとは手巾所有者の名に非ずして、手巾其ものを指せる也、即ち Veraicon (眞の姿) を誤れる也と。

ウォットン ウィリアム Wotton, William. D. D. 人名 一六六六—一七二六 英國の神學者。幼にして敏活且記憶力に富み、十二歲にして既に希伯來語、カルデア語、スリヤ語、アラビア語、希臘語及び拉丁語に熟達し、其他倫理學、哲學、地理學、文學并に科學等にも達せしと云ふ。一六七六年劍橋大學に入り、三年にして業を終へ、一六八五年聖ヨハン、カレッヂのフェローとなる。後教職に入り一六九三年バッキンガムシヤのッドルトン、ケインズの副牧師となり、一七〇五年サリスベリの牧師となる。『古代及近世學術觀』(一六九四)『主イエス、キリスト時代に於ける學者、パリ

サイに關する傳說及風習論』(一七一八)は其の最も重なる著書也。

ウォドロウ ロベルト Wodrow, Robert

人名 一六七九—一七三四 蘇國有名の教會歷史家。グラスゴー大學出身にして、一七〇三年イーストウッドの牧師に任ぜられ、終身其職に在り。早くより閑暇を利用して蘇國の教會歷史材料を集むるを事とせり。歷史家として彼は公平にして信用すべし。其著書にして出版せられざる者多けれ共、上梓せられたる者の中重なるは『蘇國教會苦難史』(一八二九)『蘇國教會の改革者及び有名なる教師の傳』(一八三一)等也。

ウォルゼー トマス Wolsey, Thomas

人名 一四七一—一五三〇 英國僧官、政治家。牛津マグダレン、カレッヂに學び其フェローに擧げらる。教職に入りソマアセットシア、リミンガトンの牧師、ヘンリ七世の法教師、レッドグレアの牧師、マクシミリアン朝の大使、リンコルンの副監牧師、ヘンリ八世の法教師、ウィンドソルのカノン、ヨルクの副監牧師タルネ、リンコルンの監督、ヨルクの大監督、ヘンリ八世の大法官、法王レオ十世の內閣員、ハス、ダーハムの監督、駐佛大使、及びウィンチェステル監督等に歷任せり。彼の權勢な有するや、豪奢を極め其配下に屬する者五百人の多きに達せり。然るに一五二九年彼は犯罪の嫌疑を受け、聖職を停止せられ、其所有の財產は國王に返上し、エッサアに退けり。後一たび赦されて監督所領を復せられたりしが、再び謀反の罪ありとの告訴を受け、自ら此告訴に答へんため、倫敦に來れる途中ラインステルの寺院に殁せり。彼は僞做にして名譽心に富み、外交術に長じ學問の保護者なりき。又法律に精しく、中世的神學者なりき。其教會改革の意見の如きは、早に外部の規律に過ぎざりしが、之れをへ其道德上許多の缺點のため實行するを得ざりき。

カルナヴルナヴウ ルセヒ

ウォルセステル サミュエル Worcester, Samuel, D. D.

人名 一七七〇—一八二一 米國の說教家。ホプキン教派に傾きたるが爲め、牧職に在ること凡そ五年にして其職を解かれたり。一八〇三年再びマサチュセッツ州サンムに於て教會の牧師となり名聲日に擧る。翌年ダルトマウス大學の神學教授に招聘せられて就職し、一八一〇年アメリカンボード傳道會社の通信書記に擧げられしが、健康を害し、保養の爲め南部の印度人傳道地を視察し、旅中に殁せり。著述家としては其明白なる論理の井然たるを以て名あり。生存中廿七篇の說教を集めて出版し、後一卷は彼の死後增刊せられたり。此外九小册子を著し又二卷の讚美歌集を編纂せり。

ウォルツウォルス ウィリアム Wordsworth, William

人名 一七七〇—一八五〇 英國の詩人。佛國革命を喜び、劍橋大學を出でゝ後往きて佛國に住せしが、政權ナポレオンに歸して後は其心に大なる反動起り、極端の保守家となるに至れり。彼はシェリーと共に第十九世紀に生れたる英國哲學派第一流の詩人也。幼より多情多感にして自信の念强かりき。彼は常に人心內部の感動に眼目し、之を自然界にも推及ぼし一意此神靈の影を捉へんと力めたりき。故に彼は一株の綠樹、一朶の行雲にも尙人生の榮枯盛衰を認めたりき。彼は又沈靜の人にして、思索夢想讀書散步悉く沈靜なりき。此の知き性格より自然に湧き出でし主義に曰く『我等の主とする處は心的生活に在り、我等は世人に此主義を解せしめざるべからず、讀者を動かさんとせば宜しく其心に訴ふべし、猶りに華麗なる服裝を用ゐて彼等の目を眩ぜんは陋也、詩の散文に近きは惜むべからず、俗語野言も可也、其氣魄の如きも田舍の老媼、市中の乞丐、野童走卒皆妙也、畢竟詩をして眞からしむる者は貴人を題とせずが爲めに非ず、唯感情の眞なるに在り』と。一言以て之を云へば彼の主義は精神的にして、彼は詩を以て社會を敎化して所謂心的生活に到らしめんことを期せし也。彼嘗て曰く『大なる詩人は凡て敎師也、余は敎師として貴ばる能はずんば寧ろ何者とも思はれざらんことを願ふ』と。彼の特所は古人の卑近として筆を着けざりし自然及び人間界の出來事を歌ひて能く其美を發揚したる處、ポープ等の擬古彫琢の技工に反對して、活天地を歌ひ活言語を用ゐたる處、『自然に歸れ』との時代の呼聲に和し乍ら、極端に聽せずして溫和なる自然主義を立てたる點に在り。約言すれば清新と高潔とは彼の爭ふべからざる長所也。其最大の作は『エキスカルジョン』『プレリュード』にして、前者は其思想純粹にして、其宗教上の理想を顯はせるを以て名あり。短篇の中

にて有名なるは『自由』『善務の歌』『雜魂不朽暗示の歌』『泉』『マイケエル』『調和』『呼子鳥に』等也。

ウォルツウォルス クリストファル Wordsworth, Christopher, D.D.

人名 一七七四—一八四六 詩人ウォルツウォルスの幼弟、劍橋トリニチー、カレッヂのフェローとなり、後聖職に入り、累進してトリニチー大學の長となる。『宗教改革以後佛國革命に至る間英國の宗教歷史上著名なる人物の傳』(一八一〇)は其最も著名なる作也。

ウォルツウォルス チャールス Worsworth, Charles

人名 一八〇六—九二 英國教會の監督。曾て牛津に在りし時、グラッドストーン及びマンニングは彼の學生の中に在りき。ウィリンチェスタアルの『マストルム』グレルナルモンドの『ウアルテェン』を經て、一八五二年聖アンドリウスの監督となる。希臘語文典及び沙翁に關する著書あり。

ウォルツウォルス クリストファル Wordsworth, Christopher

人名 一八〇七—八五 英國教會の監督。詩人ウォルツウォルスの弟にして、グリストフアルの子也。ハローの『マストル』ウェストミンスタルの『カノン』スタンフォルドの『ヴィカル』を經て、一八六八年リンカンの監督となる。文筆に秀で其著書は博學深玄を以て著はる『アセンス及アチカ』『希臘』『希臘語新約全書』『倫約全書』『詩人ウォルツウォルス傳』等最も名高し。

ウォルツウォルス ジョン Wordsworth, John.

人名 一八四三 英國教會の監督。リンカンの監督クリストファルの長子也。ウォルツウォルス學院の副院長、牛津ブラッセノース學院のフェロー、ナリエル學院の教授、ローチェスターの『カノン』を經て、一八八五年サリスベリーの監督となる。曾てパムプトン講演著たりしことあり(一八八一)著書亦頗る多し。

ウォルフ クリスチャン Wolff, Christian

人名 一六七九—一七五四 獨逸の哲學者。エナ大學に入りて數學、物理學、哲學及び神學を觧め、殊にデカルト、ライプニッツを研究して大に得る所あり。後ハルレ大學に招かれ(一七〇六)哲學の講義を以て大に名聲を博し、爲めに神學教授の講席に列する者少なく、且學生の中には彼等の講演の非科學的なるを譏る者ありき。續て彼れの神學上の著書『神、世界及びこれに關する理性的思想』(一七一九)倫理學上の著書『人の行爲に關する理性的思想』(一七二〇)及び政治上の著書『人の社交的生活に關する理性的思想』(一七二一)出づるに及び、敬虔派の宗教家等は彼が唱道したる純理說を危險也となし、彼を排斥せんとし、其說を曲解して、其唱ふる所に從へば國主に屬する兵士の說走することありとも敢て咎むること能はざる如きことあるべしとの主意を、時の普魯西皇フリードリヒ、ウィルヘルム第一世に告げて彼を陷れんと試むるに至れり。ウォルフは遂に此讒計のために陷られてハルレを逐はるゝことゝなり、四十八時間以內に國土の地を退去せざれば、笞刑に處せらるべしとの條件の下に追放せられぬ(一七二三)ウォルフは是より マルブルグに往き、其地の大學の教授となりしが、名聲又忽ちに揚れり。彼は其研究の主義方法を哲學及び神學に應用せるのみならず、又之を美學、法律學、文法等に

應用し、又其文體を聖書の飜譯に用ゐたり。一七四〇年フリードリヒ大王即位するに及び又ハルレに召喚せられ、其死に至るまで其地の大學に在りて教授に力め、且平時を授けられたり。彼が獨逸の哲學に致せる特殊なる功績の一は、從來獨逸の學者が哲學を講するや、概ね拉丁語又は佛蘭西語を用ゐたりしに、彼は獨逸語を以て哲學を論ずることに力めたるに在り。又彼が哲學を組織立てゝ叙述せることは、彼の功績の一に數ふべし。哲學攻究の方法より云ふ時は、純理派の特色は其極端の形を具して殊に明に彼の思想に現はれ來るを見る。彼はデカルトが其疑ふべからずとしたる自我の意識より出立して論歩を進め、スピノザが本體の觀念を根柢として推究したる論法を尙一層明かに演繹的のもの、概念的の者となし、哲學の研究は種々の事物を經驗し其經驗に基きて攻究を進むる者に非ずして、先づ吾人が心を以て形づくれる根本的概念より出立して演繹して進み行くべき者となしたり。是れ彼が純理派の攻究法なる極端に迄携へ往けりと思考せらるゝ所以也。彼が學説の長所はライプニッツの哲學を祖述して之に整然たる組織を與へたる點に在りて、獨創の見なし。然れ共又或點に於てはライプニッツの説を變化したるが如く見ゆる者あり。例之ウォルフは元子を以て凡て知覺力を有すとなし、而して知覺とは適當に靈魂にのみ屬するが如き能力を意味せり。又彼は身體と靈魂とを以て全く其實質に於て相異れりとし、ライプニッツが所謂萬物發達の階段説を却けたり。然れ共要するに是れライプニッツの哲學に形式を附するに方り、其哲學の精神に小變化を生ぜしに過ぎず。彼に於て注意すべきは、萬事を幾何學的の精細に歸せしめんとし、又既知の眞理を凡て數學的証明の基礎の上に置かんとせゝ事にして、彼は實に基督教の神秘を説くにも亦數學的証明を用ゐんとしたり。此の如くして彼は純理派の神學に其根本的原理と許多の言語とを供したりき。自然神學に即ち後の徒が最も熱心に開拓せし處にして、彼等は表象的言語、異端征伐に渡れ、自然を通して神に達し、受造物に依りて造物者を見んとしたりき。

ウォルフ 人名 ヨセフ Wolf, Joseph 一七九五—一八六二 獨逸の宣教師。猶太教の家に生れしが、ベネヂクト派の僧より洗禮を受け、羅馬に行きしが、異端を唱へたりとの嫌疑を蒙り、羅馬を退き英國に渡り英國教會に屬し、創橋に在て東方語學を研究する事二年、一八二一年猶太人の宣教師として派遣せられ、五年間東方諸國を旅行し、歸りて後北米合衆國に渡り、ニウ、ヨヤーシーに於て監督ドナンより按手禮を受けたり。後彼は歸國して僧侶に任ぜられ、ソンスウェイト、後ハイホイランドに住ぜり。彼は其旅行探檢に關する多くの著書を有す。

ウォルフ Johann Christoph Wolf, 一六八三—一七三九 猶太教の史家。獨逸ライプチッヒ、ハムブルグ高等學校東洋語學教授、後センド、カサリン教會の牧師。其大著作は『希伯來文庫』(一七一五—三三)と題する猶太人の傳記也。

ウォルフエンビッテル斷篇 Wolfenbüttle Fragmenets. 書名 自然神學の立場より福音の歴史を論ずる文籍の名にして、レッシングの出版する處、彼は一七七四年其初巻を出し、後漸次之に加へたり。一七八四年レッシングの死後七篇一冊となりて伯林に顯はれ、後數回の版を重ねたり。此等の斷篇がライマルスの作なることは今日一般の承認する處也。

ウォルムス Worms. 地名 ライン河に濱する獨逸古都の一にして、教會歴史上四回此地に重要なる出來事起れり。其一は宗教改革以前に起り、其三は改革中に起りたること也とす。

【ウォルムスの契約】 一一二二年九月市に近き牧場に開きたる國民大會に於て、羅馬法王と獨逸皇帝との間に稍ゞ五十年間爭はれたる國法及び宗教法に關する契約締結せられ、兩者の爭論を決定せり。之をウォルムスの契約(Worms Concordat)と稱す。此契約に依れば、皇帝は凡て教職の任命權を放棄し、教會法に從て教職を選擧、聖別する自由を教會に與へたり。而して法王は、獨逸の監督及び寺院長の選擧は皇帝の面前に於て爲すべきこと、選擧に關し爭論起れる場合には、皇帝は大監督及び監督の助言を聽き之を判決すべき事を讓歩せり。此契約は一一二三年第一回ラテラン會議に於て是認せられたり。

【ウォルムスの議會】 一五一九年獨逸皇帝死し其皇孫たる西班牙國王カロロ選ばれて獨逸皇帝となる。時にルーテルは素手以て羅馬法王に抗し宗教改革の意見を發表せしが、皇帝は一僧侶の身を以て一千年來守り來れる道に反對せることを以て極めて無道理也となし、且帝は當時西班牙國王、獨逸皇帝たるの外又墺太利の君主たりしを以て、自己の領地を合併せんとの考より教會の一致を謀らんとし、之がためにルーテルを罰せんとしたりしが、獨逸は當時獨墺政治に非ずして凡ての事議會の承認を經ざるを得ざりしかば、一五二一年皇帝はウォルムスに會議を開き、各聯邦の領主を初め自由市の代表者を召集

ウォルムス

し、ルーテルの位置を講ぜり。ウォルムスの市民は教會中央に高く聳ゆるはウォルムス國會の時議場に充てられし堂也

會の壓制に反對しルーテルの運動に贊成を表する者多かりしが、議會の議員中には皇帝と同意見を有する者あり、又ルーテルの説を多少贊成する者もありしが、結局ルーテルの意見を直接聞かざる以上之を罰するを得ずとの、ここに歸着し、ルーテルを議會に召喚することなれり。於是ルーテルは直ちに其召喚に應じウォルムスに向ひ、途中友人より、議會の前に立つは甚だ危險也との注意を受けたりしが、彼は『假令ウォルムス市中の屋上の瓦が悉く惡魔也とするも、我は敢て之を恐れず』と云ひて、四月十六日ウォルムスに到着し、翌日の午後六時頃議會の前に立てり。彼の將さに議會に入らんとするや、有名なる一老將軍はルーテルに向ひ『小僧侶よ、爾の職にんとする職は、余の職にんとする職爭よりも恐るべき者なるが故に、必ず汝の説を是也と確信せば安ぜよ、神は決して汝を棄て給はざるべし』と云ひ、又議事堂前に群集せる人々も、ルーテルを激勵して『死を恐れず男子の如く振舞へよ』と絶叫せり。彼は期くして議場に入り、獨逸聯邦の領主等其他數百の貴族に圍繞せられたる皇帝の面前に立てりしが、ウォルムス監督の秘書ヨハン、エックは卓上に在るルーテルの著書を指し、皇帝の名に於て『是等は汝の著書なるや、汝は之を放棄するや』と問へり。ルーテルは是等の問に答ふる前に熟慮すべき時を與へられんことを請ひ、廿四時間の猶豫を得て退き、翌日再び議場に顯はれ、拉丁語を以て其所説を述べたり。其所説簡短にして厳肅あり、且議場の隅々まで明白に聽き取られたりしといふ。エックは宜しく其所説を取消すべしと命じたれ共、ルーテルは之に答へて『我は我が眞心と聖書の論理とに依りて確信する所は、如何に法王、大會議の命を以てするとも之に從はざるべし』と云ひ、而して終に『我れ今爰に立つ、我れ此他を爲す能はず、神よ我を助け給へ、アーメン』と云ひて退場せり。皇帝は之を聞て怒り、四班牙人は嘲弄し、場外の群集は喧擾せり。ルーテルは旅館に歸り手を揚げて喜び『我れ今我事を終れり』と絶叫せり。皇帝は尙人を遣はしてルーテルの意を聽さしめんとしたりしが、事遂に成らざりき。

【ウォルムスの會見】 後プロテスタント及び羅馬教神學者の間に、兩派を調和せんとの目的を以て二回の會見あり。其第一回は一五四一年一月カルディナル、グランヴェルラの長たりし會談にして、プロテスタント側にて出席したるは、メランクトン、カルヴィン、ブルジゲル、アリニアス、メニアス等、羅馬教側にてはコックレアス、エック、ナウセア等也とす。兩派共戰爭を避けんとの誠實なる希望より集會したりしが、外より強大の勢力加はるに非ざれば到底調和の見込なしとの事實ならずして明白となり、動會に依りて此集會はラチスボンに移されたり。第二回は一五五七年ナウムブルグの監督ユリアス、ホン、ブルツの長たりし會談にして、『ウォルムスの商議』(Consultation of Worms)と名けられた

る者は是也。出席者はプロテスタント側にては、メランクトン。ブレンヅ。メールリン。シュネッヂ等、羅馬教側にては監督シドニアス。カニシアス。スタフィラス等なりしが、眞に兩派の調和を謀らんとする者はメランクトンの外には唯議長あるのみ。羅馬教會の目的はプロテスタント派中の分裂を促すに在りたるが如く、シドニアスはプロテスタント全教會は聖餐に關するカルヴィンの教義、稱義に關するオシアンドルの教義を承認するや正式に聞ちんとのことを提議せしを以て、直ちにプロテスタント派中の分裂を生じ、遂に何等の結果なくして解散するに至れり。

ウォルリン ヨハン オロフ Wallin, Johan Olof. 人名 瑞典の詩人、神學者。教會讚美歌改正委員に擧げらる。書中自作の讚美歌數篇あり。又同國最も雄辯なる説教家として名あり。一八三七年ウプサラの大監督となる。

ウォルレース アルフレッド ラッセル Wallace, Alfred Russel 人名 英國の旅行家、生物學者。一八二三年モンマウスシアに生る。採集のため四年をアマゾン河地方に費し（一八四八—五二）後八年をマレーアルキペラゴに費し（一八五四—六二）『アマゾン旅行記』（一八五三）『マレーアルキペラゴ旅行記』（一八六九）の著あり。思ふに此二書其著作中最も面白きものなるべし。彼はマレーに旅行中、自然淘汰に關するダルウィンと實際同一なる説を唱出し、後者の之に關する著書を知らやして其論文を之に送れり。彼の説は『自然淘汰の説に對する寄與』（一八七〇）及び『ダルウィニズム』（一八八九）の中に示さる。『ダルウィニズム』に於て彼はダルウィンの雄辯淘汰説を棄て、又自然淘汰は人類の高等なる性質を解説するこゝ能はずとの説を明にせり。彼が動物の地理的分布に關して有したりし趣味は、一八七六年公にせる記誌に依りて知るべし。又彼が博識なりしことは『土地風化論』（一八八二）『種殖』（一八八五）『奇跡及び近世の降神術』（一八七五）『驚異すべき世紀』（一八九九）『宇宙に於ける人の地位』（一九〇三）等の著書に依りて知るべし。又其自傳『我生涯』（一九〇五）を見るべし。

アルフレッド ラッセル ウォルレース

ウォルレース ウィリアム William 人名 一八四四—九七 蘇國哲學者。一八六八年牛津メルトン、カレッヂの助教授となり、一八八二年同大學道德哲學教授となる。『ヘーゲルの論理學』（一八七三及び九二）『ヘーゲルの心意哲學』『自然神學講義及び論文』（一八九八）『エピキュリアニズム』（一八八〇）『カント』（一八八二）『ジョーベンハウエル』（一八九〇）等の著あり。

ウォルレース ロベルト Wallace, Robert 人名 一八三一—九九 蘇國の神學者、新聞記者、政治家。エヂンバラの長老教會牧師となる（一八六〇—七六）『蘇國教會の趨向』と題せる著書に依り、異端の告訴を受けしが（一八七〇）後エヂンバラ大學教會歷史教授となる（一八七二）後教職を辭しラッセルに繼ぎ『スコッマン』の主筆となる（一八七六—八〇）一八八六年東エヂンバラより選出せられ國會議員となる。彼は其著作に於て、蘇國教會の改革、教會歷史と神學との關係、ウォルウ、プカナン等を論ぜり。

ウォレップ ヨハンネス Wolleb, Johannes 人名 一五八六—一六二九 獨逸の神學者。バセルにて教育を受け、セントエリサベツ教會の牧師となり、後神學教授に擧げらる。説教集の外に一卷の著述をなせり。『基督教神學節用』（一六二六）是也。彼は此書に依り神學歷史に著名の地位を占めたり。『拉丁譯聖書』の條見よ。

ヴォルゲート 『拉丁譯聖書』の條見よ。

ヴォルテール Voltaire. 人名 一六九四—一七七八 佛國の哲學者、文學者。巴理イエスイト派の學校に學ぶ。機智、好奇に富み、且文學を好む。一七一三年和蘭駐劄佛國公使の書記官となりてヘーゲに赴きしが、一婦人に關係せしがため其職を免ぜられて巴理に歸り、戲曲を作りて好評を博せり。一七二六年英國に赴き、一七二九年迄倫敦に止まり、英國思想の感化を受けたること少からず。即ちニュウトンの書を讀みて其世界觀に感服し、ロックより其心理學を得、自然神論者より其哲學的組織を採用し、英國の歷史及び制度より其社會的政治的思想を得たり。其著『Lettres Sur les Anglais』は即ち其英國より得たる新思想を國民の眼前に揭げたる者にして、此等の新思想を以て當時佛國の社會及び政會を支配したる思想と制度とを打擊せんとしたりしが、此書は公然官命に依りて焚かれたり。當時彼は又戲曲及び論文を公にし、文名歐洲を風動したりき。一

七五〇年普魯西亞帝フレデリック二世の招を受け伯林に往きしが、兩者の交情曖昧ならず、ヴォルテールは一七五三年遂に遁れて佛蘭西に歸り、其晩年を瑞西の國境に近きフェルネーに送れり。初め彼がフェルネーに赴きし時は、僅に四十六人の貧しき農夫ありしのみなりしが、彼が死せし時には時計製造、絹織物等の業に從事せる者千二百人ありしといふ。而して是れヴォルテールが此等の人々を助けて產を爲さしめたりし結果也といふ。

ヴォルテールは其鋭利なる筆鋒を以て貴族、僧侶及び僧侶の説きたる教會的基督教を攻擊したりしを以て、僧侶等の嫉しき迫害を蒙り、彼等より神の敵なるが如く讒惡せられたりしと雖も、彼は無神論を唱へたりしにはあらず。彼の有名なる言に曰く『もし世に神なくば人は神を造るべし』と。彼は有神の基礎を道德上の要求に置き、吾人は道德上の要求として神を信ぜざるべからずと考へ、又神の存在を信ずると共に靈魂の不滅を信ずることも、社會安寧のためには缺くべからざること也と思惟したり。而して彼は又ニュウトンの機械的世界觀に從ひ、天地萬物に意匠の顯れ居ることを認め、之を根據として神の存在を証し得べしと思惟したれ共。世界には又暗黑の方面あることを認め、其著『Candide ou un Optimme』に於て、其主人公をして（當時リスボン市の滅裂なる地震のために慘狀を極めたることに説き及ぼして）『若し斯ありてだに最も善美なる世界也と云ふを得ば、其他の世界が造られたらば如何』と云はしめたり。又彼はボープが『善人は神が吾人の如き一の滯たる者のために、其設け給へる永遠の法則を變へんことを求むるを得ず』と云へるに對し、『去れど此滯たる吾人も猶妥天に感泣し、且何故に此永遠の法則が各個人のために造られざりしかを領解せんことを求むる權利あり』と云へり。即ち彼は一方に善なる神の存在を信じたりしかども、世に災害苦痛多きを見て、神の全能を信ずること能はず、神の所爲に對し妨害を爲す者あり、即ち物質也と思惟したり。而して彼はロックの説に基き、此物質に精神作用あるが如く思惟したれ共、物質も精神も其何物たるや共に知り得べからざる者也となせり。彼は又精神も物質も共に永遠に存在する者也と思惟したりしが如し。斯するに彼は哲學上別に創見ありしに非ずと雖も、其鋭利なる筆と平易なる文體とを以て遠慮なく其思想を弘布したりしが故に、其惡化の及ぼす所頗る大にして、教會及び僧侶より は惡魔の如く讒惡せられたりし也。

ウジヤ Uzziah. 人名 ユダ第十代の王、アマツヤ及びエコリアの間に生れたる子にして（代下廿六の一、三）王下（十四の廿一、十五の一等）には、四箇處（十五の十三、卅、卅二、卅四）を除く外のアザリアと稱せらる。アザリアとは『エホバの助け給ふ人』の義なれば、其大勝利を得たるより名けられたるものなるべし。彼が父に繼ぎて王位に即きしは十六歲の時なりしが、彼は其父よりも敬虔にして忠實なるエホバの僕なりき。其五十二年の治世中にはアモス（一の一）ホセア（一の一）イザヤ（一の一、六の一）等の預言者あり。ヨエルも思ふに彼の治下に出でたるものならん。其敬虔に主としてザカリアの感化に依る（代下廿六の五）彼は戰爭を好み、其軍勢は强大、精政にして常に勝利を得たり。彼は石及び投石器を用ゐたる最初のユダ人なりしが知し（廿六の十一—十五）彼の治世の間ユダはイスラエルに類るを止めて獨立し、ペリシテ人、アラビヤ人を征服して、其名埃及の入口までも廣がり、エルサレムの門及び隅々の戍樓を立て之を堅固にし、又荒野にも戍樓を立て許多の水溜を堀り、家畜を保護せり（廿六の六—十）然るに彼れ旺盛なるに及び、其心高ぶり自らエホバの殿に入りて香壇の上に香を焚んとせり。祭司アザリヤ祭司たる勇者八十人を率ゐて彼の後に從ひ彼を諫めて之を爲すこと勿らしめんとせしかば、彼怒りて向其爲さんとする所を遂げんとせし間に癩病其額に起り、癩病人として別殿に遷され、其處にて死せり。以上はウジヤに關し列王紀略及び歷代志略の記す所にして、彼が軍備を整へ城壁を堅くし、且ペリシテ人、アラビヤ人等を征服したりしとの記事は歷史的にして疑ふべからず。但し彼がテグラテピレセルの記錄中に記されたるアザリヤなるや否やに就ては學者の間に議論あり。一定せず。通常の記錄に依れば彼の治世は前八一〇—七五八年也。

ウーダン カシミル Oudin, Casimir 人名 一六三八—一七一七 佛國メウエルに生る。一六五六年ブレモントレー派の僧となり、七八年イイ十四世がブシリーの僧院を訪ひし時説主も僧長も不在なりしに、ウーダン香く王を迎へて非凡の能力を示したり。後同派諸僧院の記錄調査を命ぜられて巡回し、八三年巴理に至りて定住し、八六年『スップリメンツム』、『スクリプトリプス』を著はせしに、テーヴの非難ありて全部改著するこゝとせり。九〇年巴理を去り改革主義を取り、ライデンに住みて大學圖書館長となりぬ。其の『コンメンタリウス』、『スクリプトリプス』、『エクレシエ、アンチキス』三冊は死後ライプチヒより出づ。

宇宙論的証據論 『有神論』の條を見よ。

ウットケ Wuttke, Karl Fredrich Adolf　カルル　フレデリヒ　アドルフ　人名　一八一九―七〇　獨逸神學者。故郷ブレスロウに於て神學を研究し、一八五四年伯林大學、六一年ハルレ大學の教授に任ぜらる。其の重なる著書は『基督教道德學初步』(一八六〇―六二)『異教史』(一八五一―三)『現時に於ける獨逸國民の迷信』(一八六五)等也。

ウッポ派 Ubbonites or Ubbenites.　宗派名　一五三四年ウッポ、ヒリップ(Ubbo Philipp)の開始せるアナバプチスト派中の溫和派にして、基督の王國の地上の王國なるを拒み、又離婚を否認せり。ウッポは一五六八年に死したれ共、其死する數年前アナバプチストの極端なるを嫌ひ、レフォルムド教會に轉ぜり。

ウヅ Uz.　地名　ヨブの生れたる地(伯一の一)創世記に依ればアラムの長子にして、シェムの孫なるウヅと云ひ(十の廿三)又ミルカがナホルに從ひて生みたる子にして、ブズ、ケムエルの長兄なるウヅと稱す(廿二の廿、廿一)。又デシャンの二子の一人なるもウヅと云へり(廿六の廿八)。創世記十章に記せる系譜は個人的なるよりも寧ろ人種的、地理的なれば、ウヅの民はアラミヤ系統に屬せるセミチック人種なること疑なく、又『ウヅの地』は廣大なる地理的觀念を表するものなること疑なし。然れ共約百記に記されたるウヅの地は、一地方を指せる名にして、一の十五、十七、十九に依れば、ヨブの所領はシバ人及びカルデヤ人の侵略を受けたる地にして、又荒野の方より大風吹き來りて家を倒せりと云へば、荒野の邊に瀕したる地なりしこと明也。又ヨブの朋友の來れる地を見れば此說の眞に近きを証すべし。然れ共此ウヅの地が何處に在りやは今日より精確に知り難し。

ウーヅ Woods, Leonard, D. D.　人名　レオナルド　一七七四―一八五四　米國の神學者。ハーバルド大學に學び、卒業後マサチューセッツ州のニューベリーに於て牧師たり。アンドーヴァル神學校創立せらるゝに及び、其の神學教授となり、一八四六年其退隱するに至るまで任に在り。後專ら神學校歷史及び自己の講義編纂のために盡せり。彼は米國トラクト會社、米國教育會社及米國矯風會の創立者の一人なり。又アメリカンボルド傳道會社の一人にして、二十五年間其委員として勤續せり。又彼はカルヴィン正統派の一男將にしてウェエチ、ビー、スミス博士彼を評して曰く『ウーヅは近代新英國神學界の最も思慮ある神學者なりき』と。『ユニテリアン派に贈る書簡』『三位一體派とカルヴァン派に贈れるウェアア博士の書翰に答ふる書』『聖書のインスピレーション』『教會政治』『完全の教理』『神學講義』等の著書あり。

ウーツ Jun. D. D. LL. D.　レオナルド　一七七四―一八五四　米國の說教家。ユニオン神學校、アンドーヴァル神學校に學び、卒業後アンドーヴァル神學校に學び、卒業後アンドーヴァル神學校に舉げられ、數年間『ニウヨルク文學及び神學評論』の主筆となり、一八三六年メイン州バンゴ神學校聖書文學の教授となり、後ボウドウイン大學長に擧げらる。メイン州歷史材料拾集のため歐洲に航し、歸來其携へ來れる者を出版し、又ウヨルツ、ナッブスの『基督教神學講義』を譯譯上梓せり(一八三一―三)。

ウニゲニツス Unigenitus.　雜語　一七一三年法王クレメント十一世が、ヤンセン派所產の註釋附佛語譯新約聖書禁制の旨を命ずる有名なる布令の名。四十人の佛國監督は此命令を奉ぜしが、十六人は之を奉ぜざりしゆゑ、迫害直ちに之に繼げり。(『ヤンセン派』の條を見よ)。

ウベルチヌス Ubertinus, de Casali　人名　ド　カサリ　フランシスカン派中最も嚴格なる一派の首領にして、一三三〇年頃死す。彼は後ペテザクト派に轉じ、又カルスウアン派に轉ぜり。

ウムブライト Umbreit, Friedrich Wilhelm Karl　フリードリッヒ　ウィルヘルム　カルル　人名　一七九五―一八六〇　獨逸の神學者。ウルマンと共に『神學の研究及び論攷』の編輯者として有名也。ゲッチンゲン大學にて最も熱心に東洋語學を研究し、ハイデルベルグ大學の教授となる。舊約聖書を專攻し、希伯來語に精通す。傳道の書、雅歌、箴言、但以耳書、以賽亞書等の註釋を著せり。

ウリム　トンミム Urim and Thummim.　雜語　舊約律前廿八の六に『サウル、エホバに問ひけるにエホバ對へ給はず、夢によりても、ウリムによりても預言者に由りても答へ給はず』とあるを見れば、ウリムは古代の以色列人が神の啓示を得る方法の一として用ひたりしものなること明也。然れ共此語の記されたる箇處は甚だ少く、ウリムとトンミムを併せ記せるは出廿八の廿、利八の八(此二箇處は祭司衆)申二の六十三、尼七の六十五、申廿三の八(此處には順序を顚倒せり)にして、民廿七の廿一、律前廿八の六にはウリムのみを記し、律前十四の四十一には之を遺せり。出埃及記には祭司長の

エポデに附帶せる胸牌(だにに)を興へたる後『汝モーセ書判の胸牌にウリムとトンミムを入れ、アロンをして其エホバの前に入る時に之を其心の上に置かしむべし』とあり。是に依て見れば、ウリムとトンミムはエポデとも異り、又胸牌を飾れる寶石とも異りたるが如く、又胸牌に入るゝことを得たりし比較的小なる物質的のものなりしなるべし。律前十四の希伯來語聖書には不幸にして缺損する所あるを以て明ならざれ共、希臘譯に依りて之を補へば、四十一節以下は『サウル云ひけるは、イスラエルの神エホバよ、汝何故今日汝の僕に答へ給はざるや、郎もし我に在るか、我が子ヨナタンに在らばウリムを與へよ、郎もし民に在らばトンミムを與へよ、かくてヨナタンとサウル籤に當り民のがれたり、サウル云ひけるは、我と我子ヨナタンの間の籤を引け、エホバの籤に當らしめ給へ者は死ざる可らず』となるべし。是に依て見ればウリムとトンミムとは嫌疑を蒙りたる者の郎の有無を發見する方法にして、我國上古の探湯の如し。然れ共是れ以上言語學の上よりも、又纔譯聖書よりもウリムとトンミムの何物たるを知るに由なし。唐二の六十三―尼七の六十五には、ウリムとトンミムを帶ぶる祭司の起りて其汚れざることを證する迄祭司の中より除かれたる者ありと云へり。是に依りて見れば俘囚以後に至りては之を用ゆることを知らず、又其性質の眞意なも知らざりしが如し。思ふに宗教の精神的意義漸く明なるに至り、此の如き方法に依りて神の聖意を判定するが如きことは漸次消滅したりしものなるべし。

ウリヤ Uriah.　人名　(一)　猶太王ダビデ『三十人衆』の一人(母後廿三の廿九)ヘテ人也。ダビデ、ウリヤの妻バテシバの色に迷ひ、宮に入れて之と寢ぬ。ダビデ人を遣はしてウリヤを呼び、之に戰爭の有樣を問ひ、家に往きて足を洗へと命ぜしに、彼は王の門の家に其主の僕等と寢れて家に往かず、ダビデ其故を問ひしに、答へて『匱とイスラエルとユダは小屋の中にとゞまり、我主ヨアブと我主の僕は野の表に陣を取るに、我れ如何で我家に往きて食飲し、又妻と寢ぬべけんや』と云へり。翌夜ダビデ再び彼を召して飲食せしめ、彼を醉はしめしが、彼は家に往かずして僕等と寢れたり。ダビデ、ウリヤを殺し其妻を奪はんと謀り、ヨアブに書を贈りウリヤを烈き戰の先鋒に出し戰死せしめよと云ひ送りぬ。ヨアブ斯く爲し、ウリヤ遂に戰死せり(母後十一)(二)　祭司長　黃八の二に依れば、彼はマヘル、シヤラル、ハシ、ヤズに關する預言の信實の共、王下十六の十―十六に依れば、宗教的改革を寬容したるのみならず、却て之を煽動したる剛性の人也。代上六の四―十五に記せる祭司長の目錄中に彼の名を逸せるは、彼が此の如く怯懦なりしがため也と想像せらる。(三)　預言者　キリヤテヤリムのシマヤの子。其死に關する物語耶廿六の廿―廿三に記さる。是に依て見れば、彼はエレミヤと同時代の人にして、恐らくはエレミヤの弟子なりしなるべし。彼はエルサレムとユダとに就きてエレミヤの言ひし所を述べたりしが、エホヤキム王の怒を遇るゝこと能はざりき。於此彼は懼れて埃及に逃げ往きしが、王人を埃及に遣はし、彼を引出して王の許につれ來らしめ、劍を以て之を殺し其屍骸を匿者の墓に棄てさせたり。王が單にウリヤを索めんために數人を埃及に遣はしたりとは信じ難し。其眞の目的は子ブカド子ザルに對し埃及の援を借らんが爲なりしと想像せらる。(四)ベテゾブの子なる祭司　巴比倫より歸る時エグラが神の殿の金銀及び器皿を委託したる人として記さる(廚八の廿三)又エルサレムの壁を修繕したる人として記さる(尼三の四、廿一)(五)　エグラが神の律法を讀みし時其右に立ちし人の一人(尼八の四)。

ウル Ur of the Chaldees.　地名　此地名は舊約聖書に四回見ゆ(創十一の廿八、廿一、十五の七、及び尼九の七)。カルデヤのウルといふの外其位置を記さゞるを以て、何れの地方を指せりや明ならず。且希臘譯にはウルの名を記さず、之を『國』と譯せるを以て一層不明也とす。學者の中には之を以て希臘人がエデッサと名けたるウルファ(又はウリア)と同一視する者あり。又他の傳說に依れば、カルデヤのウルは現時のムカイヤルと稱する處にして、南巴比倫に在りたる都邑なりしといふ。近時の學者の說に依れば、舊約のウルと稱するは一部邑の名に非ずして、アカッドの地方といふに同じと云へり。兎に角舊約に在りてはアブラハムの先祖の住したる地也として之を記せり。

ウルスラ Ursula.　人名　羅馬教會の聖徒。コローン教會の傳へたる物語に依れば、ウルスラはブリテンの基督教王デオノタスの女なりしが、ホロフェルネスと呼ばれたる不信者なる皇子に思はれ、婚姻の申し込を受けたりければ、三年の猶豫を請ひて十人の親友と一萬一千の處女を伴ひ、羅馬參詣の途に上り、海を渉りてゴールの海岸なるナラに着き、それよりライン河を溯りてコローンに達し、ベッセルに往き、其處より羅馬に赴けり。歸途法王シリアカスも亦此一行に伴ひしが、コローンに近づきし頃ハンス人顯れ出でゝ一行を悉殺せり。ウルスラ

は容色端美なりしかば、救されてハンスの王エッセルの妻たらんことを迫られしが、懇かざりしを以て又遂に射殺されたり。時に天使顯れてハンス人を逐ひ、コローン市は幸に其兇惡を免れたりしを以て、一行の晨禮を取りて之を葬り、各々其名を記せる墓石を立てたり。後クレマチアスと稱する回國僧此處に聖ウルスラ教會を建てたり。此事の起りたるは二三八年乃至四五一年に在りしと云ふ。但し此物語の眞僞に就ては中世より既に之を疑へる者あり。

ウルスリン The Ursulines. 【僧派名】 アンゲラメリキ (Angela Merici 一四七〇—一五四〇) が一五三五年アレスキアに創設せる者、女子を教育し、貧民病者を助くるを以て其目的となす。初めは貞潔、貧窮の誓約を强ふる等の事なかりしが、漸次規則を嚴にし、尼院を立つるに至れり。後、獨諸國に蔓延し、主として女子を教育し、且宗教問答を課することを爲す。其ウルスリンと稱するは、聖ウルスラ(其條を見よ)を以て其守護者となすに由る。

ウルトラモンタニズム 又アルトラモンタニズム Ultramontanism. 【術語】 拉丁語の『越えて』及び『山』の二語を結合せる語にして『山の彼方の』の意也。即ちアルプス山の彼方の主義、傾向、風潮等の義を表し、最初は稍や輕蔑の意を以て、以太利人が北方諸國民殊に佛、獨等の法律家、著家等を指すために用ゐしが、後には却て北方諸國民が以太利人の主義、傾向を形容するに用ゐ、而して主として之を宗教上の事に適用し、遂に羅馬教會にて、法王の權力を重視し、宗教上に於てのみならず、政治上に於ても至大の權力を有せんとする主義、傾向を指す語となれり。故に之を譯して法王至上主義といふも可也。故に此主義はガリカニズム (Gallicanism) に對して用ゐらる。ガリカンはゴール人即ち佛蘭西人の意にして、ガリカニズムは即ち佛國の羅馬教會内に於て法王の權力を制限し佛國をして法王の拘束を脫せしめんとする主義、傾向を指す。

ウルバン Urban. 【人名】 八法王の名。

(一) ウルバン一世 二二三—二三〇 アレキサンデル、セベラスの時殉教者の死を遂げたりと傳へらる。(二) ウルバン二世 一〇八八—一〇九九 ゲイクトル三世の死後クレゴリー黨に依りて法王に擧げらる。一〇八九年羅馬の會議に於てヘンリー四世及びクレメント三世を破門の刑に處したりしが、一〇九一年却て彼等の爲めに羅馬を追放せられ、ベネーヴェルト伯のもとに逃る。後コンラッド其父に背くに及び羅馬に歸る事を得、其死に至るまで位に在りき。其生涯の最大事件はクレルモントの會議(一〇九五)に於て彼のなしたる演說第一十字軍の起點となりしこと也。(三) ウルバン三世 一一八五—八七 彼の政策は全くフレデリック、バルバロッサに對する憎惡の念より來れり。然れ共彼の皇帝に對して施せる輕卒なる計劃は凡て失敗に歸せり。(四) ウルバン四世 一二六一—六四 彼の政策の最大目的はシシリーのマンフレッドを羅馬に召喚せしに、召に應じりき。彼れマンフレッドを滅ずに在ぜざりしかば、其土地をアンジョウのチャールスに與へたりしに、マンフレッド却て法王を羅馬より追放し、法王は遂に宣死せり。(五) ウルバン五世 一三六二—七 アヴィヨンに住せる最後の法王。彼は以太利國政治上の混亂を治むることを謀ばず。教會に關せる諸處の都市を掠奪したるベルナボ、ゲイスコンテを破門の刑に處したれ共、其掠奪せる都市を返還せしめんがためには尚巨額の金を彼に拂ひたりき。(六) ウルバン六世 一三七八—八九 グレゴリー十一世に繼ぎて法王に擧げられしが、其傲慢と專横とに依り忽ち其内閣員と衝突を起し、彼等は別にクレメント七世を立てゝ法王となせしかば愛に分裂を生じ、クレメントはアヴィヨンに住し、ウルバンは羅馬に住せり。(七) ウルバン七世 一五九〇年位に上りて未だ聖別式を受くるに及ばずして死す。(八) ウルバン八世 一六二三—四四 其政策よりすれば、羅馬教の首長と云はんよりは寧ろ以太利王といふべく、墺太利及び西班牙に反對し、リセリウ及び佛蘭西を助け、斯くして間接にプロテスタント教徒と結びたりき。彼は其尙カルディナルたりし時よりガリレオの友にして其稱讚家なりしが、法王となりし後もガリレオの保護者なりき。之に對しガリレオは羅馬イエスイト派の天文學者を攻擊せる、惡星に關する論文を新法王に奉りたりき。一六三二年ガリレオは約に背きて再びコペルニカスの哲學說を唱へたりしが、法王は之を召喚し宗教裁判に附したりしが、數日間拘禁せられたるのみにて放免せられたりき。彼は又詩人を保護し、且自ら作家なりき。

ウルフィラス Ulphilas. 【人名】 三一一—八一 ゴスの使徒。ニコメデアのユウセビウスに依り聖別せられて、西ゴスの宣教監督となり、聖書をゴシック語に譯譯せり。是れ日耳曼種族の言語に譯譯せられたる最古の者なれ共、今日存在せるものは僅に其一部分のみ。

ウルマン カルル Ullmann, Karl 【人名】 一七九六—一八六五 獨逸の福音主義神學者。ハイデルベルヒ及びチュウビンゲン大學に

學び、後伯林に往きニャンデルの感化を受け、福音主義の神學を採用し、其最も有名なる代表者の一人となる。一八一九年ハイデルベルヒ大學の講師となり、後教授に擧げらる。一八二八年ウムブライトと共に『神學の研究及び論辨』と題する雜誌を發刊せしが、此雜誌はニャンデルに依りて代表せられたる福音主義神學の機關となれり。翌年ハレ大學に招かれ、教會歷史及び組織神學を講ぜしが、後又ハイデルベルヒに歸れり。當時彼はストラウスの『耶蘇傳』に對する論文數篇を公にせり。一八五三年監督の職に擧げられ、熱心に教務を處理せり。後又教會の最高會議の主長となりしが、其内閣を組織せる教師と意見合せず、其非難を蒙りしかば一八六一年遂に其職を辭し、爾後其雜誌の編輯に全力を盡せり。彼は創始的の人に非ざりしかど、高貴なる品性と天才を有し、第十九世紀に獨逸に出でたる最も有名なる神學者の一人なりき。

ウールストン トマス Woolston, Thomas 【人名】 一六六九—一七三三 英國自然神教に屬する著作者。創橋ジドニー、サセックス、カレッヂのフェローに擧げられ神學士の學位を授けらる。『救主の奇跡』(一七二七—二九) の外數多の著書あり。基督の奇跡の非歷史的なるを論じ單に一比喩に過ぎずと論じたるがため、一年牢獄に投ぜられ百ポンドの罰金を科せられ、狂氣して獄死せり。

ウルルスペルゲル ヨハン アウグスト Urlsperger, Johann August 【人名】 一七二八—一八〇六 獨逸クリスチャン、アッシエーションの祖。ハレ大學にて學び、アッシスブルグの牧師となり、一七七六年迄其地位に在り。自然神說の盛なる時代に生れ最も熱心なる信仰の擁護者にして、多くの書を著せり。其最大の業は敬虔の續神を養成せんとの目的を以て、バセルにクリスチャン、アッシエーションを開始したりしことにして、其結果バセル聖書及び傳道會社を產出せり。但し彼の晚年は失望と不安とに終れり。

ヴント ウィルヘルム マックス Wundt, Wilhelm Max 【人名】 一八三二 獨逸の生理學者、心理學者。バデンに生れ、ハイデルベルヒ大學に於て醫學上の講演を爲したりしが、後哲學の創始的說明者として知らるゝに至り、一八七五年以來ライプチッヒ大學の哲學教授たり。其著『哲學大系』(一八八九) には科學及び形而上學に關する從來の著作を納む。『生理的心理學原理』の第五版は一九〇四年英譯せられ、心理學に關する文獻中最も重要なる者として知らる。彼は實驗心理學を大成したる最も廣き影響を斯界に與へ、深く學者に尊敬せらる。

エの部

英國教會 (イングランドのクロイ) Church of England. 【宗派名】 『英國教會』なる名稱は、英國教會の羅馬教會より分離せざる以前より用ゐられたるが如し。一五三三年カンテルベリー及びヨルクの會議 (Convocations) に於て、英國王(ヘンリ八世)を以て、英國教會の首長となすとの事を決議し、且同時に國王は靈性上の事に關しては權力を有せずとの事を宣言せり。一五三四年羅馬に訴ふることを禁じ、諸監督の法王に依りて認許せらるゝの制を廢し、且聖書に依るに、羅馬の監督は他の外國に在る監督より優れたる權威を有するものに非ずとの事を評決し、次で國會も亦國王の最上權を承認せり。一五三六年『羅馬の監督の教權』を廢止するの法令を發し、一五七〇年法王ピウス五世が女王エリザベツを破門するに及びて、英國教會は全く羅馬教會と分離するに至れり。英國教會なる名稱は、屢々廣義に於て英、蘇二國を初め、其他の諸國に在るアングリカン教會に用ゐらるゝ難も、嚴密の意義に於ては、英國及び威耳斯に在る國教會を指す者也。(『英國』の條參照)。

【神學及び禮拜】 英國教會教義の標準は三十九の信仰箇條及び『祈禱文』にして、之に教會問答及びエドワルド六世の時公にせられたる二卷の說教集を加ふるを得べし。然れ共教義の細說に至りては頗る相異りたる諸說行はる。即ち一方に在りてはカルヴィン派の神學說を奉ずる者あり、他方に在りては新教の要素を縮小し、三十九箇條の中には、トレント宗教會議の議決と調和し難き者あることなしと主張せる者あり。然れ共公平に觀察すれば、英國教會教義の標準は溫和なるカルヴィン派の神學說にして、聖書の權威、稱義の教理を重視し、アダムの子孫は凡て腐敗せる性質、即ち原罪を有せりとのことを教へ、預定は神が人類の中より基督に在る者を選び出し、之を願ほんとの無究の目的也と說けり。(詳細は『信仰箇條』三十九箇條の項を見よ) 然れ共近年神學

の傾向大に變化し、今日に至りてはカルヴィン派に關する爭論は過去に屬し、又之を說く者なし。他の教派に於けるが如く、此教會も亦科學の進歩、聖書の高等批評等の影響を蒙り、三十九箇條の說明に對しても寛大なる態度を取る者多し。英國教會の禮拜は儀式的にして、『祈禱文』に依りて律せらる。日曜日の禮拜は祈禱、聖書朗讀、詩篇互讀、讃美歌、說教等より成り、說教は通例短かけれ共、前後の儀式に關する長し。洗禮、聖餐式、婚姻式及び其他の儀式に關する形式は一切規定せられ、此外に出づること能はず。

【教職の階級】 教職を三階級に分つ。即ち監督(Bishop)司祭(Priest)及び執事(Deacon)是也。監督は教師に按手禮を授け、又堅信禮を施し、會員の聖餐に陪するを許し、教會を聖別して神に獻ずる等の特權を有す。監督を任用するの權は國王に在り。司祭は祭壇に奉仕し、聖餐のパンと葡萄酒とを濆む。執事は司祭を助けて聖堂の勤行、及び教區內の働をなす。又說教し、聖書及び祈禱文を讀み、又聖餐のパンと葡萄酒を分配し、洗禮を施す時に、司祭を補佐する ことを得べし。以上の三階級を總稱して教師(Clergy)といふ。信徒にして教師たらんと欲する者は左の資格を要す。即ち學力、操行、信念及び一定の年齡にして、年齡に就て云へば、執事たらんとする者は廿三歳以上、司祭たらんとする者は廿四歳以上、監督たらんとする者は三十歳以上ならざる可らず。學力に就て云へば、執事たらんとする者は、牛津又は劍橋大學の神學部を卒業するか、又は其他の神學校の卒業證、履歷書等に依りて其學力を審査し、其可なる者を任ずる者とす。又教師となる際には、信仰箇條及び英國教會の憲法を以て神の聖言に一致せりとの信仰を告白するを要す。(『アングリカン教會』教職の項參考)。

【教會政治】 英國教會は國家に隸屬し、英國王を以て其最上の統治者となし、國會を以て其最高の立法府となす。カンテルベリーの大監督は英國第一の貴族にして、國王の戴冠式を執行す。監督は各々其宮殿(パレス)を有し、其廿四人は上院に出席することを得。(一)行政區劃 全國(英國及び威耳斯)を二大教區(大監督管轄)に分つ。即ちカンテルベリー大教區及びヨルク大教區是也。カンテルベリー大教區は更に之を分ちて二十五箇の中教區(監督管轄)となし、ヨルクの大教區は更に之を分ちて十箇の中教區となす。而して其下に各數多の小教區あり。全國を通じて三十五箇の中教區、一萬四千の小教區を以て成る。大教區の首長を大監督(Archbishop)となす。即ちカンテルベリーの大監督及びヨルクの大監督にして、共に英國王の命を承けて其區內の宗務を總括す。此二大監督は其資格及び權限に於て同一なれ共、其席次に於てはカンテルベリーの大監督を先とす。故にカンテルベリーの大監督は教職中の最高位に在り。國王は教會首長の名稱を有すれ共、實際に於ては總裁せず、命令をカンテルベリーの大監督に傳へ、彼をして一般の宗務を總攬せしむ。大監督は職權上終生上院に列するの權あり。重罪の裁告となりし場合にも、上院に於て審問せらるゝことなく、又貴族の陪審官を用ゆることなし。中教區には其首長として監督一人を置く。但しカンテルベリー及びヨルクの中教區に在りては、大監督同時に其首長を兼ぬ。監督の下に副監牧師(Dean)役牧師(Canon)及び監督參事(Archdeacon)あり。副監牧師は其職監督に次ぎ、教區內の宗務を分擔して監督を補佐し、役牧師は又其下に在りて宗務に從事す。監督參事は監督に隨從して機務に參與す。監督の職務は教區を總括するに在れ共、更に之を細說すれば、教區內の宗務を總裁すること、其麾下の教會及び教師を監督すること、牧師の進退賞罰等を行ふこと、教師に按手禮を授くること也とす。小教區は一箇の教會又は二三箇の教會を以て成る。其長を牧師(Vicar)補助牧師(Curate)の三種あり。牧師の職務は教會財產の所有者として其事務を監督すること、教區を觀察すること、其監督觀察する所の監督に報告すること、監督の命令を部下に傳達すること等也とす。正牧師は其教區內の十分一稅及び其他の寄捨物を受くる權利を有すれ共、副牧師は單に其一部を受くる權利を有するに過ぎず。又各教會には牧師の外に信徒の役員ありて俗務を分擔す、之を分ちて世話人(Church Warden)副世話人(Sidesmen)及び事務員(Vestry)となす。

(二)立法會議 教義に關する事件、及び教會の法律規則等は會議に依りて定む。而して會議に三種の別あり。其一を大教區會議(Convocation)とす。上下兩院を以て成る。上院は監督を以て組織し、大監督之が議長たり。下院は副監牧師、監督參事、及び下級牧師の代議員を以て組織し、其議長を"Prolocutor"と稱す。信徒は代議員を有せず。此會議は每年一回之を開き、國王之を開くの勅語を發す。國王の許可なく新に法律を設くるを得ず、又其議決は國王の批准を經るに非ざれば効力を生ぜず。其二を中教區會議(Conference)とす。監督の召集に依り監督所在地に開き、其教區內各教會の牧師召集の命に應じて集會し、教區內に起れる事項を議定す。其三を小教區會議(Vestry)とす。教區內の信徒教會に集り其區內

に關する事を評議し、且役員の選擧を行ふ者とす。(三)司法裁判 分ちて三箇とす。其一を中教區裁判所とす。第一審を爲す法廷にして監督判事を任命し其職を行はしむ。此判事は學士の稱號を有するものたることを要す。其二を大教區裁判所とす。第二審を司る裁判所にして、カンテルベリーに在る者をアーチエス裁判所と云ひ、ヨルクに在る者をヨルク衡平裁判所と云ふ。何れも大監督の監督に係り、高等司法裁判所の判事を勤め、英國教會の信徒たる者、若くは十年以上辯護士の職に從事し、英國教會の信徒たる者の中より、國王の認可を經て判事を任命する者とす。其三を樞密院とす。最高修審の宗教裁判所にして、大教區裁判所にてなしたる控訴の判決に對する上告裁判所也。凡て宗教裁判所に於て關係すべき權能は左の三者に限らる。即ち教師の信仰及び教訓に關すること、教會の席次に影響する事項、及び會堂及び墓地に關する事項是也。而して宗教裁判所は通常の信徒に對して裁判するの權能なく、又宗教の教義、儀式に涉りて其是非を判決するの權能なし。

英譯聖書 【書名】 English Versions of the Bible.

英譯聖書が今日に至りしは一朝の事に非ず。早くよりアングロサクソン語又はアングロノルマン語に飜譯せられたりしが、此等は何れも斷片的にして聖書の一部に止まるのみならず、多くは義譯にして如字的飜譯に非ず。初めて英語聖書の飜譯を完成したる者をウイックリッフとす。以下今日に至る飜譯の概要を記すべし。

【ウイックリッフ譯】 ジョン、ウイックリッフ(John Wiclif)は一三二四年ヨルクシアのリッチモンド附近に生れ、牛津大學の教授たり。麗馬法王に抗し宗教改革を唱へたる人にして、之がため聖書の知識を普及する必要を感じ、聖書の飜譯を開始せり。先づ默示錄を飜譯し、次に福音書を飜譯せしが、間もなく殘餘のものも飜譯せられ、一三八〇年新約聖書全部の飜譯成れり。次で舊約全書に移り、主として其友ニコラス、デ、ヘルフォルド(Nicolas de Hereford)之が勞を取り、ウイックリッフは唯最後の書數卷及び經外聖書丸そ三分一を飜譯したるに過ぎざるが如し。斯くして一三八二年の中頃には聖書の全部英語に飜譯せらるゝに至れり。尤も此事業には危險及び困難伴はざりしに非ず。ヘルフォルドは英國を出公に有罪の宣告を受け、ルッテルウォルスの教區に退きたりしが、飜譯の聖書は一般に寬假せられたりき。一三八八年に至りてジョン、パルヴェー(John Purvey)は此飜譯を改正し、最も有益なる序言と簡短なる註釋とを附して之を公にしたりしが、此改正譯は舊譯に代りて廣く世に行はるゝに至れり。當時希臘、希伯來二語の研究未だ盛ならざりしを以て、此二譯は拉丁譯より重譯せる者なりき。是れ此二譯の一大缺點也。

【ナンダル譯】 次に出でたるはウイリアム、ナンダル(William Tindale)の飜譯也。ナンダルは一四八四年頃グロチエステルシアのスリムブリッヂに生れ、初め牛津に學び、後劍橋に遊べり。一五二一年故鄕に歸りウォン、ソルシ綱の家庭教師たりしが、聖書の知識を尙一層普及せしめんとの志を起し、其目的を達せんため二年の後倫敦に往き、監督タンストウルに寄り其助力を得んとしたりしが、能はず。英國にては聖書飜譯の事業到底成らざるを悟り、一五二四年獨逸に往き、ウイッテンベルグにルーテルを訪ひたりしが如し。兎に角彼が一五二五年にはコローンに於りて、新約聖書全部出版の事業に從事しつゝありし事疑なし。然るに彼の企劃は或る羅馬教僧侶の發見する處となり、僅に其底に印刷せる者を携へてウォルムスに遁れ、同年若くは翌年初めて印刷せられたる英語の新約聖書公にせらるゝに至れり。書卷の大きは初め四折判なりしが後之を八折判に改めたりき。然れ共後亦幾ならず四折判のもの出版せられたりき。而して此二種の新約聖書は直ちに英國に送られ、大に歡迎せられたりしが、之を撲滅せんとの政策其効を奏し、八折判の者にして今日完全に殘存せる者僅に一部あるのみ、四折判の書に至ては唯僅に斷片として存在せる者あるのみ。ナンダルは尙獄外に在りて靜に其事業を繼續し、一五三〇年マルブルグに於て『モーセの五經』の飜譯を出版し、一五三一年には『ヨナ書』を序言と共に出版せり。改正『創世記』は一五三四年に刷はれ、希臘語と比較して改正せられたる新約全書は、同年アントウェルプに於て出版せられたりき。一五三五年"The O. H. Testament"として知られたる飜譯出でたり。O H の二字は二枚目の表紙に在る頭文字より取りたる者にして出版者の姓名なるべしといふ。此飜譯はナンダルの最も眞實、熱心に修正したる者也。彼の飜譯したる聖書は非常なる速力を以て世に弘布せられ、一五三六年には其新約聖書の第七版願はるゝに至りしといふ。然れ共彼の勞力は遂に酬ひられず、彼は敵の手に渡されグルグルドに於て凡そ一年間獄に繫がれたる後、一五三六年十月遂に殉教者の死を遂げたり。ナンダルが聖書飜譯の爲に盡したる功勞に就ては爰に詳に述ぶること能はざれ共、其一二の點に就て之を云はんに、彼の事業の獨立的なりしことは特筆すべき點也。彼は間接にパルヴェー、及びルーテルの飜譯に

貫ふ所なしと云ふ可らざれ共、此等に謹弱したる痕跡なく、初めて希臘語及び希伯來語より英譯したる名譽は彼に歸せざる可からず。第二は彼の飜譯が彼に次ぎて起れる飜譯者に與へたる感化の偉大なりし事也。即ち吾人が今日有する宗教語に多く彼の創作に歸せざる可らず。而して彼の飜譯に獨斷的傾向なく、又原文に忠實なりしは更に記臨すべき事也とす。

【コヴェルダル譯】　チンダルの飜譯に次ぎて顧はれたる者なマイルス、コヴェルダル（Miles Coverdale 一四八八―一五六九）の飜譯也とす。彼はクロムウェルの勸めに依り、聖書飜譯の事業に其一身を委し、一五三五年其最初の全部印刷したる聖書を出版せり。其表題を『聖書、即ち獨逸語及び拉丁語より忠實に英語に飜譯したる新舊約の聖書』と稱す。其初の數葉にヘンリ八世に献ずる言を載す。其中に彼は自己が創始的譯者に非ずして、既に飜譯せられたる五種の書より之を飜譯せる旨を記載すれ共、彼は單に從前の飜譯を改正したるのみならず、彼此相比較して最も有益なる修補をなしたり。

【マシユウの聖書】　最後他の飜譯相續きて出づ。其一なるマシユウの聖書（Matthew's Bible）となす。眞實の編輯者はクロン、ローウェース（John Rogers）にして、思ふに彼はチンダルとの關係を匿さんため、トマス、マシユウの別名を以てしたる也。此聖書がチンダルの譯と密接の關係を有するは疑なし。即ち其新約聖書の全部と舊約聖書の半部はチンダルの譯にして、殘餘はコヴェルダルの譯也。然れ共編輯者の批評眼なを有したりしことは明に之を認むるを得べし。彼は頁緣に異譯を附し、衛語に說明を施し、又多くの註釋を施し、且熱心なるプロテスタントの精神を顯はせり。此書は初めクロムウェル、後ヘンリ王の准允を得たりしが故に、廣く英國民の間に擴布せられたりしが、女王メリーの即位するに及びローウェースは捕へられてニューゲートの獄に繫がれ、一五五五年火刑に處せられたり。

【タヴェルネ譯】　マシユウの聖書と密接の關係を有するものなりチャルド、タヴェルネ（Richard Taverner）の聖書となす。一五三九年出版せられ、最も眞實なる撰譯に從ひ飜譯せられたる者なれ共、別に重要なる變更のなされたる者あるを見す。

【大聖書】　クロムウェルは前に云へる如く聖書飜譯の事業を助けたりしが、從來出でたりし飜譯を以て滿足すること能はず、一五三八年コヴェルダルに向ひ、マシユウの聖書を基礎として全然新飜譯を試むべしとの事を勸告したりき。コヴェルダルは已理に於て印刷せんとしたりしを以て直ちに同處に往きたりしが、其事業の未だ完成せざるに先ちて宗教裁判開始せられたりしを以て、幸うじて之を英國に送り、間もなくして之を終了し、一五三九年最も大胆の聖書也との理由より『大聖書』（The Great Bible）と稱せられたる者公にせらるゝに至れり。其表紙は頗る意匠を凝せる者にして、ヘンリ王『神の言』を右方に在るクランメル及び他の教師と、左方に在るクロムウェル及び他の尊通宿徒に渡すの狀を描けり。而して又此聖書は希伯來語及び希臘語に熟達したる學者等が原語より忠實に飜譯せる者なることを附記せり。一五四〇年大監督クランメルの長き序文を附したる新版世に出でたり。是れクランメルの聖書（Cranmer's Bible）と稱せられたる者也。引き續きて次の十八箇月間に他の五版世に出でたり。

【セチヴァ聖書】　女王メリー位に即くに及び、クランメルは火刑に處せられ、聖書を公に使用することは嚴禁せられぬ。此に於て重なる改革者等はセチヴァに逃れ、以爲らく今の時に於て神と教會とのために靈の道聖書飜譯より善きはなしと。其結果として一五五七年ウィリアム、ホイッチンガムの新約聖書の飜譯出版せられたりしが、一五六〇年に至りホイッチンガム、トマス。サムソン。アンソニー、ゼルビーの共譯に成る聖書全部の飜譯世に公にせられぬ。是れ即ちセチヴァ聖書（Geneva Bible）と稱する者にして、從來の者に比すれば大に進歩し、後の欽定譯聖書は之に據れる者頗る多し。

【監督聖書】　クロムウェル及びクランメルの後繼者が、カルヴィン派より出でたる飜譯を歡迎ぜざりしは怪むべきに非ず。去れば大監督パルカーは多くの學者を集め、コヴェルダル譯改正の事業に着手し、一五六八年監督聖書（Bishop's Bible）と稱せられたる飜譯成りぬ。之を監督聖書と呼べるは數多の監督此事に與りたるがため也。大監督管區の大會議に於て此飜譯を用ゆべしとの・ことを議決せしを以て、廣く世に行はれた共、數多の人々に依りて別々に飜譯せられたるがため、飜譯區々にして一致せず、之を從來の者に比するに大なる進歩を見す、從てセチヴァ聖書の地位を奪ふに至らず、其後に出でたる飜譯に及ぼせる影響も亦甚だ大ならず。

【羅馬教會譯】　次に出でたるは羅馬教會の手に依りて飜譯せられたる者也。女王エリザベス治世の初め、英國羅馬教の或る人々は大陸に逃れたりしが、一五八二年彼等の手に成れる新約全書公にせられたり。此飜譯は希臘語を參考として拉丁語よりなされたる者にして、レムスの英學校に於て出版せられたり。是れより先き既に舊約全書の飜譯も成りたりしが、是又一六〇九―一〇年の突ドゥアイに於て出版せられたり。斯くして成りたる聖書全部を『Rheims and Douai Bible』と稱し、主として ウィリアム、アレン。グレゴリー、マルチン。ヨチャルド、ブリストウ三人の手に依りて飜譯せられたりと信ぜらる。

【欽定譯】　今や吾人は欽定譯（The Authorized Version）と稱せられたる吾人が今日通常有する英譯聖書の由來に來れり。此聖書の今日與へたりし感化の大なるに比して、其起源の殆ど偶然的なりしは寧ろ奇とすべし。ジェームス王の即位するや、教會に行はるゝ誤譯を調査せんため、一六〇四年ハムプトン宮廷に宗教會議を召集したりしが、第二日の議事中清教徒の領袖レーノルズ博士は、ヘンリ八世及びエドワルド六世の治下に出でたる飜譯には錯誤多く原文の眞理を誤る者少からざれば、寧ろ新に飜譯するこそよからんとの・ことを發議せしに、此提案曾て自ら詩篇の飜譯を企てたりし王の嘉納する所となり、王は直ちに飜譯に着手すべき・ことを命じ、此飜譯は牛津、劍橋兩大學の最眞なる學者に依りて爲さるべく、其上にて更に監督及び教會の重なる學者之を校閲すべく、而して後樞密院に提出し、最後に國王の准允を經べく、斯くして完成せられたる上は、教會は必ず此譯を採用すべく、其他の者を使用すべからずとの・ことを定め、且此飜譯には頁緣に註を附く可らずとの事を命ぜり。斯の如く國王は新飜譯の事業を贊成せしが、實際飜譯に着手したりしは一六〇七年にして、四十七人の改譯者六部に分れ、各部先づ其割り當てられたる部分を改譯し、同時に其他の部分の改譯をもなし、斯くして修正せられたる聖書全部を、更に各部より選出せられたる代表者の校閲に附し、其細目を調整せしめ以て出版の準備を爲さしめたり。憐憫たる苦心の結果此譯は二年九箇月にして全く終了し、一六一一年新飜譯出版せられたりき。此飜譯内容の特質は爰に詳說し難しと雖も、執筆者の目的は新なる飜譯を企てんとの事に非ずして、從來の者を改正せんとの事なりき。彼等の基礎としたりしは監督聖書にして、其他の飜譯を參考として使用したりき。此新飜譯が世人の承認を得たるは一時のことに非ず。公許の聖書として監督聖書に代りたるは、出版後間もなきことなれ共、全くセチヴァ聖書の地位を奪ふに至りしに、第十七世紀中頃以後の事なりき。最も能く此飜譯の眞價値を認めたるは、蓋し一八七〇年改譯委員として選ばれたり し人々なるべし。彼等曰く『吾人は此大飜譯を一行毎に精密に、注意して研究せざるを得ざりき。而して吾人は斯く研究すれば研究する程、益々其單純、其莊嚴、其力、其言語、其正確なることを稱讚ぜざるを得ざりき』と。素より此新飜譯と雖も完全にして修補すべき點なしと云ふに非ず。否長き間には改正增補せられたる點少からず。又更に新飜譯の必要を唱へたる者も少からざりき。斯くして遂に英國教會南部の大教區會議に於て改譯の議起り、遂に吾人が今日有する改正英譯なる者を生ずるに至れり。

【改正英譯】　改正英譯（The Revised Version）の事業が英國教會大教區會議に其源を發したるは、他の些譯と異る處也。即ちサンダル及びコヴェルダルの飜譯は個人の事業、大聖書及び監督聖書は共に通宜に其端を發し、セチヴァ及び羅馬教會譯は共に通宜者の事業也。然るに改正英譯は英國教會代表的人物の熟案に初まり、他教會の補助を得て成れり。一八七〇年、前年任命したる委員の報告を採用し、改譯委員を大教區會議員の中より選定し、此委員に何れの宗派に拘はらず、此事業に協力せんとする有名なる學者を任用するの自由を與へ、斯くして採用せられたる委員は直ちに新舊約の二部に分れて飜譯に着手せり。彼等は改譯事業の指針として八箇條の規則を定めしが、其最も重なる者は、變更は可成少くし、且原語に忠實なるべく、欽定譯及其以前の飜譯に用ゐられたる言語を用ゆべし、各部共二回改譯すべし、即ち第一回は準備にして第二回は最終決定なるべし。證據の確實なる本文を採用すべく、出席者三分二以上の同意あるに非ざれば本文を變化すべからずとの事也。斯の如く可成不必要の變更を爲さゞるべしとの注意を以て此事業を初めたりしが、從來の飜譯に誤譯あり、又同一の原語を種々に飜譯せる等の・ことありて、之がため欽定譯と改正譯との相違頗る多く、新約全書中本文のみにても五千七百箇處以上ありといふ。然れ共此の如く多くの相違あるに拘はらず、根本的教義に影響する者は之れあらず。新約全書の改譯には凡そ十年半の時日を費し、一八八一年五月其結果を出版せり。後四年を經て舊約全書の改譯成り、一八八五年五月改譯聖書の全部出版せられたり。殉新約各々改譯事業の主義を明にせる序言あり。又附錄には協力事に從ひたりし米國委員の英國委員と其說を異にせる諸點を明示せり。經外聖書の改正譯は一八九五年終了し、一八九八年改正譯の新版出づるに至りて改譯の事業全く完成せり。

エヴァンジェリスト

Evangelist（eiaŋjeliz-ts）。

【衛語】『福音宣傳者』の義にして、『傳道者』又は『道を宣ぶ』と同一の語源より出づ。弗四の十一にエヴァンジェリスト（『傳道者』と譯す）は使徒、預言者、牧師、教師と列し、預言者の次に記せ

り。以て傳道者の職は使徒、預言者、牧師と異り、單に基督の道を宣ぶるに在りしを知るべし。而して彼等は教職の階級の中に入らず。執事、長老、使徒も傳道者の職を爲すことあり（徒八の廿五、哥前一の十七等）監督（又は長老）たりしテモテも『傳道者の工を爲せ』と勸められ（提後四の五）エルサレム七人の執事の一人なるピリピも『傳道者』と稱せらる（徒八の五、廿一の八）又傳道者は巡回者として、甲の地より乙の地に轉することを常とす。斯くピリピはサマリアにて教み宣べ、かゼに往く途にて寺人に聖書を說き聞かせ、後カイザリア及び其附近にて傳道したり（徒八の四十）又傳道者は獨立にて働くことあれ共（八の四）主として使徒の同勞者又は補助者として働き、彼等に俘ひ、其指揮を受けて働けり。此語を巡回傳道者のみに用ゐたりしはテオドルにして、又之を初めて福音書記者にのみ適用したりしはエクメニウス也。今日にては此語此兩樣の意義に使用せらる。

エクスタシー Ecstasy. 【術語】 宗教三昧に入りて我を忘れ、直接に神明に交り、神明に充され、神明の中に沒沒し、意識を超れ形骸を脫せる境涯にして『恍惚』『奪魂』『忘我』等と譯すべし。歷史上の例は聖テレッサ、スウィーデンボルグ等の記錄に之を見るべし。此狀態を起すの方法は、催眠術のそれと相似たり。

エケケ ホモ Ecce Homo. 【雜語】 ピラトが耶蘇を猶太人に示し『見よ是れ其人也』と云へる語の拉丁譯（『ヴォルゲート』）にして、後苦祷の耶蘇傳をも『エケケ、ホモ』と題せり。

エゲド ハンス Agede, Hans 【人名】 一六八六—一七五八 氷州（グリーンランド）の使徒。諾威のセンヌエンに生れ、コーペンヘーゲンの大學に學び、ヨーゾン教會の牧師たりしが、一七一七年宣教師となりて氷州に往き、僅ること十七年、エスキモー人を教化せり。其歸るに及び其事業を其子パウル、エゲドに委託せしが、パウルは一七四〇年迄其地に留り、氷州語の文法及び字書を著はし、又新約全書の飜譯を完成せり。爾後此地の傳道は漸くに進歩し、今日に至りては全島悉く基督教化せり。

エコランパディウス ヨハン Oecolampadius, Johann 【人名】 一四八二—一五三一 獨逸の宗教改革者。實の名フラスゲン、又ホイスゲン、又ホイスシャイン（Husgen, Heusgen or Heuschein）現今の獨逸ウェルテンベルヒ領のヴインスベルヒに生る。父母は卑賤の民なりしが、母は敬虔の念に富めりき。初め父の意に從ひ法律研究のためボロニヤに赴きしも、故障ありて中止し、目的を轉じて神學研究のため一四九九年ハイデルベルヒ大學に入り、一五〇三年卒業して選擧侯フィリプの家庭教師に擧げられしも、意に滿たずして辭し、故鄕に歸り暫く牧會に從ひしも、尙古語を研究せんとて一五一二年チュビンゲンに行き、此所にてメランクトンと相知り、次でスツットガルトに行きロイグリンと共に希臘語を研究し、一五一四、五年の頃ハイデルベルヒに歸りて基督信者の猶太人マタイ、アドリアニと共に希伯來語を研究し、後一旦鄕里に歸りしが間もなくバーセルに招かれて大會堂說教者となられぬ。エラスムスは彼を歡迎して自己の聖書出版事業を助けしめ、新約全書中にある七十人譯聖書よりの引用と希伯來語聖書よりの引用とを區別せしめしが、暫くして彼は復た故鄕に歸り此問題かにエコーレムの拉丁譯聖書を希伯來語聖書と比較し、且エラスムスを始めゼーデル、メランクトン等と交通し居たり。彼がアウグスブルグの教會より說教者に聘せられ之に赴きし頃、ルーテルは同地にて法王代理カルディナル、カエタンの前に顯はれたりしかば彼は直ちにルーテルに味方したり。一五一九年匿名にて公にせる一書に、信仰に由てのみ義とせらるゝ事を論じてルーテルの功を讚し、エッグの說と態度とを攻擊せり。一五二〇年彼は附近の一僧庵に入りしが、一五二〇年エッグが羅馬よりルーテル破門の法勅を齎らし歸りし後には、彼はルーテルを稱して其の敵よりも福音に近しといひ、又一五二一年發行の說教にては マリア禮拜を惜め晚餐の化體を否定し、次で僧侶の前に罪を告白することを止めて基督の命也となすの說を否定するの書を著せり。一五二二年僧庵を去り、其十月またバーセルに赴きぬ。此の時より彼の生活は其の活動期に入れり。當時バーセルは瑞西にて唯一の大學の所在地、最有力なる印刷者の居所、一國知識の中心なりき。エラスムスはヴァテンハイムの監督を始め多くの學者に圍まれて此地に居り、共に瑞西の舊教派を代表し、大學は舊教信仰の護持者たりき。彼は聖マルチン教會の牧師として說教せしが、翌年市會は彼を大學の聖書講師に任ぜり。大學側にては之を認めざりしが彼は以賽亞書を講じて中に教會の時弊を攻擊せしかば、エラスムスの不興を買ひ、且舊教派の反對論激しくなりぬ。此を以て彼は大學の抗議にも拘はらず公開の辨論をなし大に成功せり。彼は依然說教を繼續し、一五二五年には聖マルチン教會の牧師に任ぜられたり。改革は漸く勢を得つゝありしも尙未だ強からず、市會は其年改革者の著作出版を禁止し、彼はアナバプチスト徒と

同一視せられ、又ヴィングリ等見て改革派には異端なりと宣言せられぬ。然れどバーセルの改革主義は斯かる事にて熄止すべくもあらず、一五二七年市會は大會堂說教者たるマリウスとエコラムパディウスとを召集して『ミサ』に關する双方の意見を徵せしに、マリウスの辯論は甚だ弱く、之に反して彼のは明白透徹條理整然として學者的の議論なりき。市會は其の何れを採るべきを決する能はず、兩者の意見を共に印刷に附して公にせり。一五二八年ベルン縣にては改革主義を採用し、バーセルも翌年の春之を採用せしかば、彼は市と縣の諸教會の總理に擧げられ、一方にはアナバプチスト派を論駁しつゝ、一方には教會政治の組織に力を盡したり。彼はヴィングリの如く創始的の神學者に非ざりしも、獨立の見を有し其の精神は穩當溫和なりき。ヴィングリとともにツヴィングリ、カルビンとベザとの如かりき。

エサルハドン Esarhaddon. 【人名】 アッスリヤ王センナケリブの子、次でアッスリヤの王となる（前六八一—六六八）マナセを巴比倫に生擒せしアッスリヤ王（代下三十三の十一）はエサルハドンなりやアサルハニパルなりや確かならず。王下及び賽の記事によりてセンナケリブが其二子アドラムメレクとシャルザーの爲めに害せられし後、エサルハドン其王位に上りしことを知る。ユダとベニヤミンの敵がパレスチナに入りしは此王の命也（紀元四〇一）楔形文字の碑文多く出でたるも彼の即位に關して別に云ふ所なし。彼の最初の事業ハ巴比倫を滅ぼしことにして（前六八〇）爾來彼ハ歷『巴比倫の支配者、又スミルアカド（南方及び北方の巴比倫）の王』と稱へたり。トレミーの古典巴比倫王の目錄中に彼の名記され、其在位を十三年とす。彼又歷々軍を出してメデヤの諸國を攻め、西はエゲヤ、フェニキヤ、ピリスチヤよりシプラスに至るまで盡く之れを攻略せり。彼ハ寬仁大度にして國內能く治まり、壯麗なる宮殿城廓を建てたり。ニネベ、カラ（ニムロド）巴比倫のものハ殊に宏壯也。カラの『四面の宮殿』と稱するは其尤も雄大壯麗なるものにして、彼は其完成を見ずして死したり。彼の死後アサルハニパル位を繼ぐ。南四の十に記さるゝナスナパルは是れならん。

エジオンゲベル Ezion-geber 【地名】 紅海三十五、中二の八）舊約聖書中常にエラトと并び稱せらるゝを以て其相接近せるを知る可し。又之によりて此地のアカバ灣頭エドムの極南に位する地たるを知る可し。ソロモン王は此地に造船所を設けたり（王上九の廿六）

エジプト Egypt 【地名】 埃及（Aegypt）なる名は國名及び河の名（ナイル）としてホーメルの之を用ゆ。セミチック語より來れりと云ひ、又はサンスクリット語より來れりと云ふ者あれ共、希臘人のみ此名を用ゆるを見れば、希臘より起りたるものなること疑なし。但し其語源は明ならず。土人は之を『ケム』（Kemi）と稱し、象形文字にては鰐魚の尾を以て表はす。ケムとは『黑』といふの義也。住民の皮膚黑きがために非ず（土人の皮膚は赤色也）此國の土色黑きが爲めに斯く名けられたる也。希伯來人は之を『マツル』又は『ミツライム』（複數）と稱す。古より埃及（Lower Egypt）下埃及に至る三角形を爲すの地にして、分ちて七州となす。上埃及（Upper Egypt）は其中海よりカイロに至る三角形を爲すの地にして、分ちて二となす。上埃及も亦七州に分る。

埃及

【略史】 埃及住民の起源及び其年代に就きては未だ其正確なることを知らず、故に學者の說一ならずして、其年代に至ては甲乙の間に千年若くは千年以上の相違あり。然れ共彼等の重なる要素が東方より來りしとの事に就ては諸學者相一致せり。古代の傳說に依れば、埃及人種祖先の地は『プント』（Punt）也といふ。プントとは蓋しサマリランド、エリトレア及び亞剌比亞に向へる海岸を含める一帶の地なること疑なきに似たり。而して此プント人は北印度地方より來れりとの說あれ共、未だ之が正確なる証據を有せず。此國の歷史は紀元前五千年乃至六千年に初まる。遺據ある記錄に顯はれたる最初の名をメナ又はメチス（Menes or Menes）と稱す。是れ第一王朝の創立者にして、アビドスの近隣より來り、ナイル河に至る地に其權力を及ぼし、一市を起し、之をメムフィスと稱し、其首都となす。此王國南アスワンに及び、上下埃及を併有するに至れり。第四代に至り、古王國は其隆盛の極に達せり。二箇の最大なるピラミッドの建てられたるは此時期也。此等のピラミッドの周圍を飾れる墳墓、死者を葬むために設けられたる室、此等のものに彫ゑれ、又は畫かれたる繪畫、彫刻等より著人は當時埃及人の有したりし生活の觀念、其美術、商賣、風俗、習慣、富、名譽、宗教、禮拜等の事に至る迄之を學び得る也。第五代より國勢次第に衰退に傾き、以て第十一代に至れり。第十一代は最初のセベブン朝にして、此時よりセベスの遷都せらるゝ迄（前二一〇〇頃）ヒクソスと稱する異敎なる人民（牧者）東より來りて埃及を侵し、下埃及を略取し、

メンフィスを奪ひ、之を其首都となし、斯くて五百年間埃及を支配したりき。ヒクソスは思ふに埃及の古碑に所謂ケタと稱する者にして、此ケタは今日一般にヘテ人也と想像せらる。後アヽメスなる者起りて埃及を救ひ、ヒクソスを國外に放逐せり。之を第十八代と爲す(前一五七八)埃及王朝の最も誇ゃたる時期にして、彼に次ぎて王位に上る者八人、トヽメス三世は其最大なる者にして、兵を出してユフラテ河に及び、ヘテ人を征服し、カルナクに神殿を建築し、又美術を奬勵せり。第十九代の王朝はラメセス一世を以て初まる。ヨセフの埃及に到着したりしに、蓋し此子セトス一世の時にして、モーセの教育せられたりしはラメセス二世(前一三二五)の宮廷なりしなるべく、以色列人の埃及を逃れ出でしは、メノフテスの時なりしなるべし。第十九代の末より第廿代の王朝に至り、國勢再び衰微に向へり。第廿二代の王朝(前九七〇)に至り、埃及は又以色列と交渉を開けり。即ち埃及王シシアクはユダの王レホボアムと戰ひ、遂にエルサレムを略取せり(王上十四の廿五)此事は又埃及の古碑に記さる。然るに後國勢又振はず、第八世紀の終に至り、エテオピヤの征服者シヤバタ(ヘロドタスのサバコン、聖書のソウ)の略取する處となる。第廿五代の王朝是也。然れ共此エテオピヤ朝の勢力は未だ以て外敵を防ぐに足らず。故に其最後の王タハルカ(前六七二)アロを援けてアツスリヤに敵せしより、アツスリヤ軍埃及を攻むるや、遂に其征服する處となる。然れ共後アツスリヤ軍の其東境に事あるに及び、プサメチカス一世起りて、アツスリヤに背き、其羈絆を脱して獨立し、第廿六代の王朝を立てたり。爾後凡そ百年間國内平安なりしが、希臘王カムビセス來寇してナイル河に達し、遂に進んでエテオピヤを陷れたり。後子クタ子パスニ世起りて一たび其勢力を恢復し、第三十代の王朝を立て少康を得たりしが、再び波斯のために征せられて復た起つこと能はず。彼波斯帝國滅亡するに及び、埃及は歴山大王(前三三二)の手に移り、大王の歿後は其太守トレミーの手に移れり。トレミー相繼ぐこと十五代、クレオパトラと稱する六女王あり。トレミーの治世三百年に渉り、其間歴々西利亞と戰へり。又此間盛に希臘の文物を輸入し、アレキサンドリア市は希臘文學の最大中心となり、廣大なる書籍館建設せられ、埃及の文學のみならず、東洋の文學悉く希臘語に翻譯せられたり。羅馬帝國起るに及びて之に敵すること能はず、前三〇年遂に其屬領となる。當時羅馬帝にアウグスト、カイザルなりしが彼はコルチリウス、ガルスを埃及の太守と爲し、宗教の自由を許し、又藝に神殿を造營せり。クラウデオ二世(二六八)以後國民歴々羅馬の羈絆を脱せんとして之に叛きしが果さず。當時埃及古代の宗教に漸次衰頽し、基督教之に代はり、アレキサンドリアは遂に基督教の中心となるに至れり。六一九年波斯國再び埃及を侵し、十年間其勢力を維持せしが、アラブ軍之に叛きしかば、羅馬帝ヘラクリウス其機に乘じて再び羅馬の勢力を恢復せり。然るに間もなく後期人を驅逐せしアラブ人は新興の宗教(回教)を信じ、非常なる勢力を以て羅馬軍と戰ひ、遂に六四一年羅馬兵を驅逐し、サラセンの將アムルを立てて王となし、埃及は遂に回教の支配下に來れり。之れより先き埃及古代の王族及び貴族の子孫は漸次其跡を絶ちつゝありしが、僅かに殘存せるコプツも此時に至り回教王の劇しき迫害を蒙り、漸次其數を減ずるに至れり。第十六世紀に至り土耳其帝セリム一世波斯に勝ち、其勢力を以て埃及を攻め之を取り、爾後埃及は土耳其の屬邦となれり。一七九八—一八〇一年埃及は英、佛及び土耳其三國紛爭の地となりしが、後各國共に撤兵を約し、一八〇三年秩序の全く回復せるを待ちて英軍も亦埃及を去り、モハメッド、アリ其王位に即けり。然るに後埃及政府の失政に依り、又歐羅巴強國の干渉を招き、遂に英國政府の保護國となり以て今日に至れり。埃及古代人種の今日殘れる者はコプツのみにして、其數凡そ四十萬人あり。埃及の人口は一千萬にして、フェラヒン種(農夫業とす)其四分三を占め、其他はベダウィン、コプツ、ヌビアン、土耳其人、レヴァンチン、アルメニヤン、猶太人及び歐羅巴人也。

【古代の宗教】 古代埃及に起れる多くの宗教を爰に詳說せんことは素より難し。埃及古代の宗教には印度の佛陀、回教のモハメッドと稱するが如き、偉大なる教師なかりしと雖も、古代に在りて埃及國民の如く覆性不朽なる確信したりし人民又他に之れあらざりしなるべし。尤も古代の埃及に關しては、埃及學者の著書甚だ少からずと雖も、未だ悉く其秘義を解くに至らず。古代の人民が至上者に關し最も高き觀念を有したりしとの事は、其文學に許多の證據あり。彼等は之を『テルと稱す。『テルとは希伯來語のエル、サンスクリット語のブラマと同義なれ共、彼等は之を普遍名詞に用ゐ、『萬物の背後に在る力』の意義の外に、又種々の勢力を表明するために用ゐたり。他の宗教に於けると同じく、埃及の宗教に在りても、普通人民は眞理の最高なる觀念を得ること能はざるが故に、其秘義を明にするために表象を用ゆるの必要を生じ、斯くて『テルは『神權』又は『諸神』となるに至れり。印度のブラマがブラマ、シヴァ、

スクンイフス

ヴィスヌの三方面を有し、茲に此三方面が各々人格を有する個別の神として崇拜せらるゝに至りしが如く、埃及の宗教に於ても諸神は漸くに增加せられ、後世に至りては甚しく墮落するに至れり。埃及神話の神は宇宙の凡ての權力を代表する者にして、『アメン之を三神に顯はせり。即ちアメン、ラ其要ムト其子クンス是也。神の家族に關する神話前根據は太陽にして、レノフ相及ひマックスミウレルは日出、日沒、晝夜の衝突、光暗の爭鬪、日々、月々、年々天地の間に起れる太陽の行動は埃及神話の重なる題目也と云へり。即ちオシリス神には之に敵する弟神セトあり。是れ晝夜の爭を表する也。オシリスの關親セヴ及びヌは地と天空とを表し、其妹イシスは陸、イシスに依りて生みたる其子ホルスは日中、セトの妻ネプチスは日沒を表す。而して此等の物語の倫理的方面は又善惡の爭鬪を表する也。ラは日神、ヌは天の海を表し、諸神の父と稱せらる。ヌの子はス及びテフヌトにして、空氣及び露を表す。ヌに敵する者なアペピと稱し、蛇也。ラムは沒せんとする日、メンツは戰神、バストは必要なる日熱、セケトは酷熱を表す、何れも日に屬する諸神也。各地方には各々其守護神あり、故に聖々其宗教的熱心より、相互の神の効徳を論じ劇烈なる紛爭を來したることあり。祭司は常に大なる權力を有し、セマス、メンデス、メンフィス及びヒリオポリスの學校に在る祭司長は最上權を有したりき。又神殿の禮拜を司るために多くの祭司及び女祭司あり、オロ及び其家族も亦祭司の職を有したりき。埃及の重なる動物は凡て或る神に取りて神聖なる者とせられ、其表象として擬ぜられたりしが、斯く選ばれたる動物は其神の重なる官能を表するに足る特質を有したりき。即ち鷹は日神の表象として保護せられ、其死する時は之を木乃伊となして葬れり。牝牛はハトル女神、貓はバスト神、蛙はヘクト神の表象たり。又或る神々を表するに人体に或る動物の頭を附する者あり、又全體動物なるものあり、又動物の頭のみなる者あり。古代埃及人の最も重要なる經典なる『死者の書』(The Book of the Dead)と稱し、二百章より成る。其或る部分に頗る古昔の者なれ共、之を解することは頗る困難也。然れ共其翻譯せられたる部分を見れば其言語頗る佳麗にして、他の宗教の神秘家の言と比するを得べし。其大部分は不分明にして解することは能はざれ共、其精細なる心理學は頗る興味あり、吾人は其一端を解するを得べし。其いふ所に依れば、人の身體は一なれ共、七部より成る。而して之を保存せんとするには或る秘密なる方法に依りて其分離せる者を再び結合せざる可らずと。彼等が屍體を腐敗せしめざらん爲めに苦心し、其葬られて後何人も近づくこと能はざるやう、ピラミッド又は墓地に深く之を藏したりし所以の者は實に此信仰に依りしも。

【埃及に於る基督教】 傳說に依れば、使徒馬可初めて亞歷山に基督教會を創立したりといふ。此傳說の確否は明ならざれ共、亞歷山は後基督教の中心となり、且數督駐在地となりたり。第二世紀に至りては、此地は又神學校の所在地となり、オリゲン此處に講を垂れて學生を教授し、爾後二百年間基督教は此地に隆盛を極め、希臘教會の有名なる神學者を輩出せしめたり。然れ共基督教は遂に埃及國民に普及するに至らず、一たび基督教に改宗したりし者も、多くは其信仰淺薄にして、一の偶像教より他の偶像教に移りたるに過ぎざるが如き觀ありたりき。第七世紀に至りアラブ人來りて埃及を征服するに及び、彼等は一方に劍を取り、他方にコーランを持して回教を強制せしを以て、國民は唯ゞ凡て之を受納し爾來今日に至るまで回教國として存在せり。然れ共彼等の中には又基督教に忠信なる者あり、其子孫は所謂コプツ教會を組織し、以て今日に至れり。彼等は其才能、教育に於てアラブ人に優れるを以て、今日政府に其地位を有する者多し(コプツ)の條を見よ)一七六九年に至りモラビアン派は、埃及に新教の傳道を初めたりしが、一七八二年に至り之を廢棄し、英國倫敦の『チャルチ、ミッシ、ナリー、ソサイエチー』も一八二六年同じく此地に傳道を開始したりしが、コプチック教會の內部は到底改革の見込なきを以て、凡そ廿五年の後又之を廢棄したり。一八五四年米國の合同長老教會は亞歷山及びカイロの二ヶ所に傳道を初め、最初十年間は此二ヶ所に其働を限りたりしが、後漸次傳道地を擴張し、又男女の宣教師を送り、盛に傳道したりし結果コプツの中に基督教を信守る者漸く加はるに至れり。現今埃及には新教に關する獨立教會十三あり、信徒の數凡そ九千人に達せり(一九〇六調)。又新教徒の手に依りて成れる男女の學校あり。亞歷山及びカイロには在住外人のために設けたる英佛の諸教會あり。又亞馬教會あり。又法王權を承認せる『ユーナイチッド、コプツ』と稱せられたる一派あり。

パロの木乃伊

埃及人福音書 Gospel according to the Egyptians. 【書名】 新約聖書外編書中の一書。オリゲン、ヒッポリタス及びエピファニウス此書のことを云へり。此書著者の名を記さず。現存せる斷篇には、耶蘇とサロメとの問答を載す。男女間の關係を論じ、罪惡に非ずとするも暫時的の者に過ぎざることを云へり。第二世紀中頃の作にして、幾分かノスチック教的の着色を帶びたりと信ぜらる。

埃及探險資金 Egypt Exploration Fund. 【雜誌】 一八八二年アメリア、ビー、エドワルヅ嬢 (Miss Amelia B Edwards) の創立せし語學的調査を爲し、其結果を報告するに在り。著名なる古物學者此事業の爲めに力を盡せり。即ち其重なる人々を擧ぐれば、エム、ナヴィル。教授ダブリヤー、ジー、ホガルス。教授イー、エー、ゲルドチル。ガレンフェル。ハント二博士是也。每年大部なる翻譯を出版するの外、古物學的年報なも出版せり。米國

に支局あり。又一八九七年希臘羅馬分局なも設立せしが、其出版したる者の中には第三世紀に成りたる馬太傳の斷片其他貴重なる發見を記載せり。

埃及譯聖書 Egyptian Version. 【書名】 古代の埃及語に飜譯せられたる聖書にして、吾人の知る所の者二あり。一は『メンフィチック譯』と稱し、下埃及の方言を以て譯せられたる者、他は『セベイック譯』と稱し、上埃及の方言を以て譯せられたる者是也。此等の飜譯の成りたる時期は精確に知る為すを難も、第四世紀の初め、若くは第三世紀の終には既に存在したり。

エスコリアル Escorial. 【建物名】 西班牙國マドリッド市の西北廿七哩に在り、同時に宮殿、教會、庫室、墳墓及び博物館を兼ね、最も有名なる建物の一也。海拔三萬五千呎の高處に在り。ヒリップ二世(一五六三—九三)が聖ロッレンス紀念の爲めに建てたる者にして、其兩親の死を表せんために、全部焰硝の形狀を爲せり。而して其建物は頗る宏壯佳麗なるに拘はらず、人をして自ら陰鬱寂寥を感ぜしむ。其教會は歐洲に在る最も美麗なる建物の一にして、長さ三百四十呎、廣さ二百呎、高さ三百廿呎。庫室には二百の畫伯を容るべく、圖書には古代の名畫を傳ふ。

エステル以士帖書 The Book of Esther. 【經名】 舊約聖書中の一書。波斯の首都ショシャンに住せる猶太人の一少女エステルが、波斯王アハシュエロスの后となりしこと(前四八五—四六五)及び王の寵臣ハマンが猶太人を虐殺せんとしたりしなを、エステル其身を死地に立てゝ遂に其國人を救ひたりしことを記せる者也。

【記事の概略】 アハシュエロス王治世の三年、先づ貴族及び牧伯の爲めに百八十日、次に臣僚の爲めに七日酒宴を設け、其終りの日に王は皇后ヲシテの美麗な民等と牧伯等に示さんとして、侍從に命令郡へ、ヲシテなして后冠をかぶりて王の前に來らしめんとせしが、ヲシテ其命を奉ぜざりしかば、王大に怒りて直ちに后位を廢し、且遍く國中に詔を發して、凡て男子たる者は其家の主たるべきことを命ぜり(一章)後王怒解けヲシテに代り后となるべき者を遍く國中に求めたりしに、シュシャンの住人にてベニヤミン族なるモルデカイの姪にして且養女なるエステル其選に當り、其治世の七年終に立てられて皇后となりたり(二章)後王ハマンなる者を寵し、之を高めて諸牧伯の上に置き、諸臣をして跪きて彼を拜せしめしに、モルデカイ獨り彼を拜ぜざりしかば、貴大に怒りモルデカイ及び其國人を悉く殺戮せんと欲し、王を勸めて諸方州に發し、國中に在る猶太人は男女老幼に拘はらず悉くこれを殺し、其所有を沒收せんと謀れり(三章)於是猶太人の間に大なる哀あり しが、モルデカイはエステルをして王の許に往き其民の爲めに矜恤を請はしめんとせり(四章)第三日にエステル王に近づくことを得しが、王はエステルに向ひ『汝の願は何なるや國の半分に至るとも汝に與ふべし』と云ひければ、彼は唯王とハマンを其酒宴に招きしに、王又前言を繰りかへせしかば、エステルは翌日も亦王とハマンと其宴の席に臨まんことを請へり。ハマン深く之を喜び、其宴の席に從ひ、翌日モルデカイ刑罰の許を得んと期待せり(五章)其夜王眠ること能はず、侍臣をして記錄を讀ましめしに、モルデカイ曾て王の侍從二人の陰謀を告げたりしと記せるに遇ひ、未だ何の榮譽と爵位をも彼に與へしことなきを知り、翌朝ハマンの來れる時、王の尊ばんとする人には如何に爲さばよからんと問ひしかば、ハマン謂えらく、王の尊ばんとする人とは我に非ずして誰ぞやと、即ち斯る人には王の衣服をきせ、王の馬に乘らしむべしと答へぬ。王即ちハマンに命じ其云へる如くモルデカイに爲さしむ(六章)第二の酒宴の日王又エステルに向ひ前言を繰りかへせしかば、エステル即ち彼れと其民を滅亡の中より救はんことを請へり。王驚きて斯の如きことを心にたくめる者は誰ぞやと問ひければ、エステル答へて、其敵其仇はハマン也といふ。王之を聞きて大に怒り、侍從に命じてハマンがモルデカイを懸けんとして作りたる木にハマンを懸けしむ(七章)。モルデカイ於是ハマンに代る。エステル王に奏してハマンが猶太人を滅さんと謀りて諸州に書き送りたる者を取り消さんことを請ひしか、彼斯の法一たび出したる詔を取り消すことを許さるゝを以て、王はモルデカイに命じ更に諸州に書を送り、猶太人を滅さんとする日彼等をして相集り、立ちて己の生命を保護するを得せしむ(八章)斯くて猶太人殺戮の日として定められたる十二月十三日到着せしかば、各所に在る猶太人相集りて其敵を防ぎしか、ショシャンに於ては五百人を殺し、翌日更に三百人を殺せり。地方に在ては十三日に七萬五千人を殺せり。此出來事を紀念せんがためにエステル及びモルデカイは諸州に散在せる猶太人に書を贈り、十二月十四、十五日を以て祝日となさんことを命ぜり。是れ即ちプリム節の起源也(九章)斯くてモルデカイはアハシュエロス王に次ぐ者となり、猶太人の中にて大なる者、衆民に喜ばるゝ者となれり(十章)。

【此的價値】 此書の目的がプリム節の起源を明に

し、之を守る動機を示さんとするに在りしは明也。然れ共書中の記事が如何なる點迄歴史的價値を有するやは疑問也。此書に記する彼斯の風俗、慣例に關してはトビト又はユデス書に在るが如き錯誤なく、アハシュエロス王の性質も歴史の傳ふる所と一致すれ共、俘囚中の猶太人の一少女が后位に擧げられたること、ハマンがモルデカイ一人に對する私怨より猶太人を除かんと決心せしこと、エステルの内奏に依りて局面俄に一變し、獨りハマンを罰したるのみならず、七萬有餘人の彼斯人を殺戮せしこと等頗る不自然にして事實也と信じ難し。故に從來の批評家は、此書の記事は大體に於て歴史的基礎に依りて作られたる者なれ共、嚴密の意義に於ては歴史的ならざる者あり、記者は傳説を本とし、之に自己の知る所の彼斯人の生活、風俗を加へ戯曲的に編成したる者也となせり。本書の値の目的は猶太人の地位及び勢力を説示せんとするに在り。故に此書は純然たる猶太的精神を發露し、排外思想の主張を示せり。此精神は俘囚時代以後猶太國民が外國政府の下に壓服せられ居りし影響にして、彼等は不知不識彼斯人又は希臘人に對して敵愾心を抱くに至りし也。此書は此の如き性質なりしが故に猶太人の中には大に尊敬せられしが、基督教徒の中には之を聖經中に入るゝを拒みし者さへありたりき。然れ共此書は猶太人民の頑强なる、容易に大國政府の壓迫に屈せざる精神を示す者として其價値少からず。

【著作の年代】　此書著作の年代は明ならざれ共、アハシュエロス王のことを記すに方り、稍々の時代を隔てたりしが如く爲せり。批評家の多數は之を以て、希臘時代の初期（前三三二に初まる）若くは前三世紀の作也と爲せり。

【參考書】　ドライヴァルの『舊約文學雜論』セースの『以士帖』、尼希米亞及び以士帖』ライルの『舊約經典』等を見るべし。

エズレル　Jezreel.

地名　ヤルボアムとヘルモンとの間のエズレルと稱する平原に在る邑。イスラエル王アハブが聖に其都を定めし迄は其名聞えざりしが、彼は邑の東に宮殿を建て、其近傍にバアルの神殿を築き四百餘人の祭司を養へり（王上十八の十九、下九の廿）アハブの家滅亡後此邑は再び沈衰して又聞えず。

エゼキエル　Ezekiel.

人名　猶太の預言者、以四綴書の作者。祭司の家に生れ、前五九七年エホヤキン王と共に巴比倫に囚はれ、他の人々と共にケベル河畔なるテルアビブに住せり。テルアビブの俘囚民は其數頗る多かりしが如く、彼等は素より富有なる生活を爲したるには非ざりしども、又非常なる困難の狀態に在りしとも見えず。エゼキエルは己の家に住し（綴三の廿四、八の一、十二の三）以色列の長老は彼の側に侍し其言を聞かんとて彼の許に來れり（八の一）彼が預言者たるの召を蒙りしは、俘囚後五年にして（一の二以下、前五九二）彼が此時何歳なりしや今日より之を知ること能はざれ共、其預言書に記せる最後の預言は（廿九の十七）其後廿二年目に當れり（前五七〇）彼はケベル河畔より泡にエルサレムを望み、此處より種々の表象と想像とを以て、エルサレム滅亡の近きに在ることを預言せり（一―廿四章）以色列人民の重なる罪惡は其偶像禮拜に在り。是れ勿めより其歴史に著しき事實にして、當時尙此風は盛に行はれたりき。而して今やエルサレムの腐敗は殆ど其極度に達せり。是れエゼキエルが反復エルサレムの滅亡すべきを説く所以也。然るに巴比倫に在る俘囚の民さへ無帰着にして、其道德上の狀態毫も變化する處なりき（何二の十四以下）故に彼は神の審判尙彼等の上に在るべきを思ひ、如何にもして彼等の中或るもの丶靈魂を救はんことを欲したりき（綴三の十六、廿三の六）然れ共彼の忠言に耳を傾くる者なく、彼は俘囚民の中に在りてさへ公に語ること能はず、唯僅に其家に訪ひ來る者にのみ語り（三の廿四以下）斯くしてエルサレムの滅亡に至れり。彼と俘囚民との間の反對は明白にして、彼は常に彼等を目して『悖逆の族』（二の七、四十四の六）と呼べり。然れ共彼はエレミヤの如く、彼等の將來に望を屬し、セデキヤ王及びエルサレムに在る猶太人々々ば見棄てたりしと雖も、俘囚の民は其潔められたる後終に善良なる以色列國民の基礎を作るに至るべしとのことを言へり（十一の十七以下、十七の廿二―廿四、廿の廿七以下、廿六の廿五以下）。

以西結書（エゼキエル書）　The Book of Ezekiel.

經名　舊約預言書中の一書。預言者エゼキエルの作にして、全篇を通じて彼の手に成りたる者なること學者一般の承認する處也。

【此書の内容】　此書の特色は全篇四十八章を通じて、終始一貫の用語、結撰、主旨あり、而して每預言には各々精細の日附を記せるに在り。本書内容の概概を述ぶれば、（一）一―廿四章　エゼキエル預言の初期に屬する默示を錄す。多くはエルサレム滅亡に關する預言にして、其中には後に至り多少變改せる者あり。（二）廿五―卅二章　隣南に接せる外國民（七箇の）に關する預言を錄す。此等の預言はエゼキエル公年遲を對ぜる中間に在り、彼が歴遊の二年間に屬する者也。然れ共中には又後に屬する者あり。（三）卅三―卅九章　エルサレム滅亡の報知

と共に、逃亡者來り、エゼキエル再び口を開きて預言したりし時（卅三の廿二）以後に關する默示を錄す。即ち以色列國民恢復の預言にして、思ふにエゼキエルの預言は之を以て完結したりし者なる、後に四十章以下を附加したる者なるべし。（四）四十―四十八章　理想的神政府の異象を錄す。即ち先づ初にエホバの住み給ふべき聖所を描き（四十―四十三）次に祭司の職務、禮拜に關する儀式を述べ（四十四―四十六）終りに聖地の有標及び其中に住する人民の性情を描けり（四十七以下）此等の異象は後に附加したるものなれ共、其思想は書中初めの部分を通じて之れあり、既に顯はしたる主義を發展せる者也。

【宗教思想】　エゼキエルの宗教思想は之を二の點に約するを得べし。即ち其第一は從來預言者の既に明にせる宗教的眞理を更に明白に且獨斷的に表明し、之を神の攝理なる嚴き理論の中に結合せる事にして、第二はメッシヤ的希望に特殊の方向を與へ、之を以て國民生活の實際的理想、宗教的新運動の起點となしたること也。第一の點は最も明白に一―卅九章に顯はさる。エゼキエルは此等の章に於て、神と世界との關係に關する其思想を明にせり。今其概要を擧ぐれば、彼の神に關する觀念（一、八、十、四十三章）は之を從來の預言者に比すれば更に超然的にして、彼は吾人が形而上的と呼ぶ神の性質に最も重を置けり。彼はエホバは怒、嫉、憐憫等を有すると道德的人格也との眞理を把持したりしと雖も、之と共に神の活動は自己中心にして、人に對する神の働の動機に、其働の恩惠たるを審判たるとを問はず、自己を顯現せんとするに外ならずとのことを主張せり。次は以色列國民に關する觀念にして、彼はホセヤ、イザヤ、及びエレミヤと異り、以色列國民は常に偶像禮拜の傾向を有し、其過去に先榮の歴史に非ずと云ひ、又他の預言者がエホバと以色列國民との關係を以て神の自由選擇に歸するに、エゼキエルは更に一歩を進めて、之を以てエホバが其國民に自己の榮を顯はさん爲也となせり。而して彼は此の如くエホバの榮は歴史上以色列國民の運命と同一なるべきを以て、エホバの神たることの最終の顯現は、以色列國民が其本國に歸還し、エホバの神聖なる性質を其上に反照せることに依りてのみ成就せざるべからずと爲せり。次にエゼキエルの思想に於て最も著しきは、神の前に在りて各人皆自由と責任とを有せりとの教義也。宗教とは神と各個人との個人的交通に外ならずとの思想は、既に他の預言者の中に見る所なりしと雖も、之を論理的形狀に表明し『子は父の惡を負はず、父は子の惡を負はず、義人の義は其人に歸し、惡人の惡は其人に歸すべし』（十八）とのことを明言したるはエゼキエルの功に歸すべし。エゼキエルの預言の最も直接、最も偉大なる歴史的感化を有する者は、四十―四十八章の異象に含まれたる理想也とす。此異象に於て最も著しきは、メッシヤ的預言の形狀の中に政治的宗教的憲法を示したることにして、是れ即ちエゼキエルが考へ出せる、最終的にして、彼は吾人が形而上的と呼ぶ神の性質に最も重を置けり。彼はエホバは怒、嫉、憐憫等を有すると道德的人格也との眞理を把持したりしと雖も、之と共に神の活動は自己中心にして、人に對する神の働の動機に、其働の恩惠たるを審判たるとを問はず、自己を顯現せんとするに外ならずとのことを主張せり。次は以色列國民に關する觀念にして、彼はホセヤ、イザヤ、及びエレミヤと異り、以色列國民は常久たりしと雖も、之を論理的形狀に表明し『子は父の惡を負はず、父は子の惡を負はず、義人の義は其人に歸し、惡人の惡は其人に歸すべし』（十八）とのことを明言したるはエゼキエルの功に歸すべし。エゼキエルの預言の最も直接、最も偉大なる歴史的感化を有する者は、四十―四十八章の異象に含まれたる理想也とす。此異象に於て最も著しきは、メッシヤ的預言の形狀の中に政治的宗教的憲法を示したることにして、是れ即ちエゼキエルが考へ出せる、最終的理想也。此異象に於て最も著しきは、メッシヤ的預言の形狀の中に政治的宗教的憲法を示したることにして、是れ即ちエゼキエルが考へ出せる、最終的理想は、エホバ其國民の中に在り、其聖所に於て見るべき榮光を以て住し給ふべしとのこと也。爰に記せる制度が主として祭司的性質を有するは、一はエゼキエルが自ら祭司なりしと、又一は神聖に關する祭司的觀念が神政體の政治主義に最も能く適當せるが爲めなりしなるべし。エゼキエルの此理想的律法がモーセ律法の發達に如何なる影響を與へしかは、爰に論ずる限りに非ざれ共（『モーセの六經』を見よ）近時多數の批評家の意見に依れば、エゼキエルは申命記と所謂祭司典なる者との中間に位せり。而して彼の律法の特殊なる點は、批評家の到達せる此結論に依りて最もよく説明せらるべし。兎に角新以色列國民の依りて以て結合せられたる全運動が、エゼキエルの異象の中に預示せられたる方針に從て動きたりしことは明なる事實也。如何なる點に迄此書の此部分が、俘囚より歸還せる以色列國民の先達に依りて、其律法の方案として採用せられたりしや明ならざれ共、エゼキエルの示したるメッシヤ的希望が、猶太國再建設の一大刺擊となりしこと明也。但しエゼキエルの教訓は之をエレミヤ及び第二イザヤに比すれば、全體として同情と福音的自由とを缺き、又基督教の準備たるよりも律法主義の時代の準備となりしこと疑なし。吾人は新約記者の彼を引用したる者あるを見ず。又釋外聖書の外新約記者に何等かの感化を與へたりしや否疑問なれ共、彼が個人の價値、悔改の效果を明にしたること、罪惡を以て神に對する思想として深く感じたること、神の律法を成就するために新しき心の必要なることを説きたること、神は恐怖深くして人の卿を放すに熱心也とのことを明にしたること等は、預言書中最も先輩ある眞理として見るべき者也。

【參考書】　總論としてはドライヴァルの『舊約文學雜論』註釋としてはデヴィドソン（劍橋聖書）スキンネル（エキスポヂッター、バイブル）カーレー（スピーカース、コンメンタリー）を推す。

エック　ヨハン　マイエル　フォン　Eck. Johann Maier von

人名　一四八六―一五四三　ルーテルの反對者。南獨逸エックに生る。ハイデルブルグ、チュビンゲン、コロン等に學び、

インゴルスタット大學の神學教授となり（一五一〇）生涯此大學の實權を握れり。博覽強記なれ共、見識と明白さに於て缺くる所あり。ルーテルが九十五箇條の意見を公表するや、エックは之に反對したりしが、一五一九年六月ライプチック領主の宮殿に於て、彼は大にルーテル及びカールスタットと論じ、ルーテルを屈せしめんとして『汝の說は大會議に於て異端者として放棄せられたるハッスの說と異なる所なし』と云へり。ルーテルは實際其說のハッスと大に異らざるを思ひ『ハッスの說は假令大會議に於て廢せられたるも惡しき者に非ず』と答へしかば、領主は之を聞て大に驚き『然らばベストの如き教也』と絕叫したりき。エックは知此くして義面勝利を得たる如くなりしが、ルーテルは亦も屈することなく、益々明白にして斷乎たる態度を以て羅馬教を攻擊して止まざりしかば、彼は遂に武力に訴へて之を屈せしめんとしたりき。然るに獨逸の諸侯伯は彼の求めに應ぜざりしを以て、一五二〇年彼は遂に羅馬に往き、ライプチック討論の情況を法王に訴へ、ルーテル被門の命令を携へて獨逸に歸りたりしが、事遂に意の如くならざりき。彼はラチスボンの集會（一五二四）にも、赤バテンの會議（一五二六）にも列席したりき。又アウグスブルクの議會（一五三〇）にも出席して、プロテスタント信仰告白の草文を草するに與りて力あり。ウォルムス（一五四〇）及びラチスボン（一五四一）の會議にはメランクトン、ブカセル、カルヴィン等に反對して職ひたりき。然れ共彼は晩年に至り、新等兩教の調停のために頗る盡力したりき。

エックハルト Eckhart. 【人名】 一二六〇—一三二九 獨逸神祕學派の開祖。ドミニック派の僧侶にして、サキソニーに於るドミニック派の寺院長、ボヘミヤの監督代理となり、巴理に來りて教へ、ストラスブルクに移住し、此處にて『自由の靈の兄弟』と相知り、後フランクフォルトに移り、ドミニック派寺院長となれり。其說教の世の常ならざるより疑を蒙り、異端として訴へられ、一たび無罪の宣告を受けしが、コロンの大監督ヘンリーのために再び訴へられ、ストラスブルクのニコラス彼を審問するの命を蒙れり。然るにニコラスは自ら神祕說を奉ぜしを以て、エックハルトの無罪を宣告せしに、ヘンリーこれを聞かず、エックハルトを、ニコラス二人ん異端として宗教裁判に附したり。二人は此に於て法王に訴へたりしが、遂に有罪の宣告を蒙りたり。然れ共其弟子等は彼を敬愛すること甚だ深く、スーソーは彼を解して『聖師』と云ひ、其說教は至る處の寺院に於て謄寫せられたり。彼の死後法王は彼に對する宣告を取消したり。

彼の說は所謂神祕學說にして、今其大意を述べんに、從れ只爲らく、萬物の太原は想と物となる超絕する名狀す可らざる者、即ち『無』と名くるより外なき者也。是れ即ち神性にして、此神性が實際に活動する原なる神性に自らを知る知識に依る。即ち萬物の太なる者初まる也。自らを知らんとする活動を起さゞる狀態に於ての神性は、『無』と云ふより外に名くべき語なし。彼に造化作用は畢竟神性の自識作用也。而して神は自らを知らんには、先づ自らを言ひ出さゞる可らず。例之吾人が我が影を鏡面に投じて初めて我を見得るが如し。此の自識作用に依りて初めて能言なる主觀と、所言なる客觀と相分る。前者は即ち父なる神にして、後者は即ち子なる神也。而して父の言として言ひ出されたる子が復た父に歸る所、換言すれば兩者の相離れざる處を聖靈と名く。故に父なる神と子なる神とは、別れ乍ら尙一にして、神は聖靈に於て自らを愛する者也。而して父神の造化作用は、神が自らを知り、自らを言ひ顯はす作用に外ならざれば、神以外に萬物に於る實在なく、神を取り去れば一として獨立自存する者あるべからず。萬物は唯それが神なることに於てのみ實在を有す。之を神と區別する者は唯其個性也。故に眞理の本體を知らんと欲せば、萬物の差別相より眼を轉じて神に歸入せざるべからず。人間は自ら意識して神に歸入することを得。吾人が神を見ると、吾人が神に見らることゝは同一不二也。吾人が神を知ることに於て、神は自らを知る也。神は自らを愛する愛を以て我等を愛す。蓋吾人に於て神に愛せらるゝ者は神自らなれば也。朽ち果つべき物に紳され、之を追ひ求め我意を固執する心を離れて、唯神をのみ知り神をのみ愛するに至りて、吾人は初めて究竟の怡安に達するを得べし。此に至りて神が吾人の靈魂に生れたりといふべく、又神が人間となれりともいふべし。斯くなれる人は之を基督と名くるも可、又神と名くるも可也と。彼は此の如く凡神的神祕說を唱へたれ共、之がため個人的存在と責任とを輕視することなく、唯各自直接に神と交るべきことを敎へたりしのみ。

エッグルストーン エドワルド Eggleston, Edward 【人名】 一八三七—一九〇二 米國の牧師、著作者。インヂアナ州のヴェヴェーに生る。一八七四年『基督教共勵教會』と稱する無信條の教會を創設したりしが、一八七九年に至りこを廢棄せり。著書頗る多く、英語の讀者に頗る其名を知らる。

エッセース アンド レヴィウス Essays and Reviews. 【書名】 一八六〇年出版せられたる一書。聖書及び神學に關する書中の思想進歩的なりしがため、英國教會に波瀾を生じ、一八六四年の大教區會議に依りて異端の宣告を受けたりき。書中の記者は博士（後大監督）テムプル。博士ロウランド、ウィリヤムス。教授ペーデン、ボウエル。牧師エチ、ピ、ウィルソン。シ、ダブリュ、グードウィン。教授マルク、パッチソン。及び教授ビ、ジョウエットにして、グードウィンを除くの外盡くアングリカン教會の牧師也。此書に關し劇烈なる爭論數年相續き、ウィリヤムス博士及びウィルソン牧師は一時教職を停止せられ、樞密院は此判決を破毀せり）テムプル博士は一八六九年エクセテルの監督に選ばるゝに方り、大なる反對を受けたりき。然れ共書中の思想は頗る穩健なる者なりき。

エッセ子人 Essenes. 【宗派名】 猶太教の一派。此派に關する吾人の主なる資料はフィローン、ヨセファス及びプリニー也。エッセ子とは如何なる義なるや明ならざれ共、エヴルドは『敬虔』の義なるべしと云ひ、ライトフートは『沈默せる人』の義なるべしと云へり。エヴルドの說聽くべきに似たり。

【起源】 此派は何時頃起りたりしや正確に之を定め難し。然れ共ヨセファスは紀元前二百年頃即ちパリサイ、サドカイの二派が起りたりし頃に起りたるものなるべしと云へり。此派は猶太教の中に發生したるものなりや、又は他より來りて猶太教の中に入りたる者なりや、之を定めんこと又難し。彼等はパリサイ人に似たる處あれ共、之と頗る異り、律法に熱心なれ共、其凡てを守らず、預言者の精神を得たるものあれ共、パリサイ人よりも更に甚しく外面の清潔を重ずる處あり、猶太人なれ共異國人と交らず、エホバの僕なれ共異邦人の如く太陽を崇拜せり。去れば此派が單に猶太教の產物に非ずして、外來の影響を受けたる者なること疑なし。カイムは之を評して『彼等は眞細工の繪畫の如く內部の調和なる有せず、宗教としては素より憐れむべきもの也』と云へり。去らば其外來の影響なる者は那邊より來りしや、尙次に記する處に依りて之を知るべし。

【組織及び習俗】 フィローン及びヨセファスの言ふ所に依れば、當時エッセ子人の數は凡そ四千以上にして、パレスチナ及び四利亞のパレスチナに接する地方にのみ生息したりしといふ。然れ共プリニーの言ふ處に依れば、彼等は又エンゲディ市に近き死海の西岸にも住居したりしが如し。彼等は其產業を共に、其間互に何等の區別をも設けず。又凡ての人に對して平和を重じ、奴隸及び戰爭を禁じ、一切の武器を製造することを爲さゞりき。彼等は一人の首長を選びて其上に置き、之をして彼等を統轄せしめ、又凡事の職を爲さしめたりき。兄弟もし大罪を犯せば之を審鬥すれ共、怒罵する者には再び歸り來ることを得せしむ。彼等は又婚姻及び男女の交を禁じ、猶太人の中より入り來る者に依りて其缺けたる補ひ、又小兒を養ひて之を教育し、之に此派の爲すべきことを習學せしめたり。成人にして此派に入らんとする者は先づ其一切の財產を鄙たざるべからず。斯く爲す時は此派の兄弟の守るべき規則書を、其排泄物を埋むべき鍬と、潔齋の時使用すべき白衣とを受くべし。然れ共候補者は直ちに其中に入ること能はず、先づ十二ケ月の試期を經て潔齋式に列するを得、更に二年を經て、社中の事を一切他に漏洩せずとの嚴厲なる誓約を爲したる後、社中の者と共に食事に列することを得。

エッセ子人は利未的潔齋の律法を守らざる人々と觸接せざらんため、凡て其要するものゝ供給を彼等の中に仰ぐ。即ち社中の人々は自己の最も長じたる方面に働く也。斯くて彼等の中には農夫あり、牧者あり、養蜂者あり、料理人あり、裁縫人あり、教育者あり、各々其職に盡し、而して悉く一定の時間を宗教の研究に献ずる也。彼等は日出前に起き出で、先づ共に集りて太陽に向ひ祈禱を捧ず。此事終らざる前には俗事に就きて語ることなし。禮拜終れば各自定められたる業務に就き、十一時に至れば皆共に入浴すれば白衣を着し、最も嚴肅に食堂に入りて共に食事す。食物は甚だ單純にして、主として植物性のものより成る。食事は司祭の祝禱を以て初まり、感謝を以て終る。食事中は皆沈默して語言する者なし。食事終れば、再び職業服を着し業務に就き夕刻に至る。而して夕食に就くこと又前の如し。斯の如く凡ての事監視者の指揮に從て爲さゞる可からずと雖も、彼等は又自己の適宜と認むる處に從て不幸なる人々を助け、又は社中以外の人々を矜恤することを得べし。彼等は安息日を守ること甚だ嚴にして、此日には火を焚くことなく、又器物を動かすことなからんため、凡て前日に食物を調理するを常とせり。而して此日は全く宗教上の修養と聖書の研究とに費したりき。曾常にては長幼の序に從て各々其席を占め、又適當の衣服を纏へり。一人律法を讀み、經驗に富める者之を說明し、其他の人々は默して靜聽せり。

【エッセ子人の神學】 彼等が太陽を崇拜し、毎朝之に祈禱を捧げたりしとの事は前既に云へるが如し。彼等は又不潔物を匿し之を埋むることに力を盡

せり。彼等は肉體の復活を拒否して之を信ぜざりしかど、靈魂の不滅を信じたりき。彼等は又動物犧牲を捧ぐることを爲さざりしが、神殿に供物を送ることを爲したりき。又彼等は天使を信じ、其社中に入るに方りて其名を云はすとの誓約を爲すを要したりき。彼等は經典を學びたれ共、其經典の何物たりやは明ならず。彼等は又禍物の根、石の性質等を學び、此等及び潔齋式に關係ある之と同樣の研究に依りて、將來を預言し得べしと信じ、ヨセファスの云ふ處に依れば、彼等の預言は多く適中したりしといふ。此の如くエッセ子派には他の猶太教諸派と相異り、外國より輸入し來れる要素あり。抑も此要素は何處より得來りしや。之に關し歐洲學者の間に異說あり。ヨセファスが『彼等はピサゴラスが希臘人の中に誘入したりし生活の方法を實行せり』と云ひしより、新ピサゴラス派の萌芽を猶太教の蕾樹に接ぎたる也と云ふ者あり。クェレルは其最も重なる主張者也。之に反しライトフートは、エッセ子人はパレスチナの東境死海の濱に住居したれば、希臘哲學の感化を受けたりしと云ふ可らず、彼等の有したりし外國的要素は波斯より來れりとのことを述べたり。思ふに日出を拜し、天使を信じたるが如きは、彼斯教の感化にして、極端なる禁慾主義を守り、動物的犧牲を否認し、共產的生活を送りたるが如きは、ピサゴラス派哲學の感化を受けたる者なるべし。或る人々は耶蘇が屬々パリサイ、サドカイの徒を叱責したりしに拘はらず、一言エッセ子人に及ばざりしを見て、耶蘇及びバプテスマのヨハネはエッセ子人なりしなるべしと想像せり。福音書中に此派の事の一たびも記載せられざるは著しき事實にして、エッセ子人と初代基督教徒との間に類似の點ありしは疑ふ可らず。然れ共エッセ子人が安息日を守ることの極端に猶太的なりしこと、及びヒッポリタスの言ふ所に依れば、彼等が改宗者に割禮を强制したりしとのことは、之を以て基督教徒は、其組織及び修道法等を幾分かエッセ子人より採用したりしものなるべし。尙詳なる基督教の時代に於る猶太人民史』ヤイムの『救主耶蘇の傳及び時代』等を見るべし。

エッチンゲル フリードリッヒ クリストフ Oettinger, Friedrich Christoph

人名 一七〇二—八二、スロビアの見神哲學者。チウビンゲン大學に學び、母の敎訓に背き法律を棄てゝ神學を研究す。自ら曰く、其の時より我は別人なりき、我服飾はもはや美はしからず、もはや交際社會には出入せず、語ること少くして唯だ聖書を讀み、唯ジセロ其他を留め置きのみ。而も熱心に哲學を研究し、神學にてはベンゲルを理想として之に文通し、哲學にてはベーメを理想として、神秘的哲學を立てゝ聖書の大眞理の本質を發見せんと願ひたり。一七二八年北獨逸に遊びてチッジェンドルフ及びヘルンフットに會ひ、希伯來、希臘及び雅歌の講義を始め、中途にしてハルレ大學の聘に應じて講師となり、此にて醫學をも研究したり。ルーテル派教會より彼を退けんとせし運動ありしも果さず。彼はウルテンベルヒに歸り、サウビンゲンの講師となり、ヒルサウ其他の牧師となり、終にムルハルトの敎長に擧げられたり。彼は當時を增し來れる個理思想に反對し、其の聖書的哲學に由て、凡て人類と事物の實相との間を隔れる迷想を排除し、實相を明かにし、生活を之に適合せしめんと勉めたり。彼は自然と神の言とを二つの聖書なりとし、自然の敎訓に就ては煉金家を研究し、舊約に就ては『カバラ』を、新約に就ては師父ベンゲル並にベーメ、スウェデンボルグ其他の神秘家を研究したり。彼は曰く、思想も存在も第一の物に非ず、生命と運動こそ第一なれ、生命は體なかるべからず、靈なるものも亦みな體を有す、體を有することは實在たることなり、此世の體の缺點より淸めらるゝ時、體は完全となる、基督は死と復活に由て人類のために眞の生命を回復したり、今基督の體は靈の完美なり、有體なることは神の經綸の目的なりと。彼の說は當時の勢力ある學者には容れられざりしも、國內にも承認者なかりしに非ず。而して後のシェリング及びバーデルなど感化する所多かりき。ミカエル、ハーンと云ふ農夫は最も深き心服者にして人民の間に彼の說を散布し、瑞西に於てはスプライス（一八五四年死）出でたり。彼の著は甚だ多し、エーマン編の全集あり。

エッディー メリー ベーカー グローヴァー Eddy, Mrs. Mary Baker Glover

人名 クリスチャン、サイエンス派の開祖。一八二一年米國ニューハンプシア、コンコルドに近きボクに生る。會衆派に屬せしが、一八六六年クリスチャン、サイエンスを『發見』せり。是より先き夫人は長き間疾病のために苦められ、醫藥も施すに處なかりしが、一日夫人は偶然として凡ての原因は心意に在りとの事を悟得し、其不治と思はれし疾病都ちに平癒するを得たり。夫人の恢復は實に意外にて、其醫師も亦之を以て奇跡也となしたりき。夫人は此發見後退きて靜かに眞理を研究し、聖書を取りて之を夫人が得たる新思想の光明に照し、其結果夫人の平癒も亦神の立て給へる自然の法則に外ならざることを悟り、心理的作用に依りて凡ての疾病を癒し得べきことを宣言し、一八七九年『クリスチャン、サイエンスの教會』を組織せり。夫人は又『クリスチャン、サイエンス雜誌』を創刊し、又マッサチュセッツ形而上學協會を創設せり（『クリスチャン、サイエンス』の條を見よ）。一九〇九年五月夫人死せりとの報傳はりたれ共、家人は其喪を秘して公にせず。

エッデイー夫人

エヴラ Ezra.

人名 エヴラの事蹟には以上聖書七—十章、尼希米亞記八—十章及び經外書エヴラに記さる。彼は祭司、又は學士と呼ばれ、經外書第二エヴラには預言者と稱せらる。彼は祭司の家に生れたれ共、其重なる事業は學者なりき。彼は預言者より學者への過渡時代に生れたれ共、預言者たる彼の働は著しからず。彼はモーセの律法に精通せる學士也と稱せらる。是れ彼が律法の熱心なる研究者なりしを云へる也。彼れ彼斯に在り、アルタシヤスタ王の恩寵を得、其許を受けて前四五八年千八百人の同行者と共に巴比倫を出立し、四ヶ月の後エルサレムに歸れり。彼れ既にエルサレムに歸り、彼斯王の彼に與へたる權威に從ひ新政府を建てんとせしが、人民は之に向ひて甚だ不熱心なりき。且彼等の中には富みたる者多かりしが、エホバに對する敬虔の念乏しく、祭司、牧伯の中にさへ外國の女を娶りて偶像禮拜に向ふ危險なりとなし、神殿の前に泣伏して祈りしが、民之に感激して外國の女を去らんと云ふ者あり。多少異議を唱ふる者ありしが、エヴラは三ヶ月を期して遂に改革を斷行せり。エヴラが律法を其民に讀み聞かせたりとの事は尼希米亞記八—十章に記さる。子ヘミヤは前四四四年エルサレムに來れり。其最初の事業は石垣の再築なりき。則ち尼希米亞記に依れば、エヴラがエルサレムに集れる民の前に律法を讀み、民が之に從ふべしとの約束をなしたりしは、此後の事也。律法を敎ふるの目的を以て之をエルサレムに携へ來りしエヴラが之を讀むを遲延したりしは解すべからず。或る學者はエヴラ離婚を强行して民の反對を買ひしが故、時機至らずとして遲延したりしも也と云へり。兎に角エヴラとネヘミヤとの關係は困難なる問題也。子ヘミヤが歸國の際自ら筆を執りし記錄中に、彼よりも十三年前に波斯王より權威を得て歸國したるエヴラに言及せず、又エヴラが神殿の前庭にて律法の書を讀み大改革を行ひし記錄中に、其一年前猶太に來りしネヘミヤの事に言及せざるは頗る解し難し。之を以てエヴラの史的存在を疑ふ者多へあれ共、吾人は未だ之を斷言するを得ず。

以士喇書及び尼希米亞記 The Book of Ezra and The Book of Nehemiah.

經名 舊約聖書中の二書。同一の時期に起りたる、同一の問題を詩す。且此二書元來猶太の初代の經典に在ては一書なりしこと疑なし。而して又之を現時の形狀になしたるも同一人の手に依ること明也。故に此二書は共に論ずるを以て便宜也とす。

【此書の內容】 此二書は以色列國民の彼斯より歸還し、猶太國を再興したることを記したるものなれ共、猶太回復史の全體には非ず。唯僅に其史中に起りたる敎筒の出來事の大要を示したる迄にして、此書の全く何事をも語らざる長き時期あり。即ち此書の全時期は五三七年以色列人が初の俘囚より歸還せる時より、四三二年子ヘミヤ第二回のエルサレム行に至るまで一世期以上に跨りたれ共、實際書中の物語の關係せる時限は僅に其十分一に過ぎず。今其梗概を左に示すべし。

(一)喇一の一—四の五　俘囚の初の一行の歸國せること、歸國後先づ祭壇を築き、祭祀をなし、神殿再建の事に從ひしが、サマリア人の妨害に遂ひて其業の中止せられしこと（前五三七）。(二)喇五、六章　預言者ハガイ及びザカリアに鼓舞せられ、神殿の再起に着手し、前五一五年ダリヨス王治世の六年第二の神殿成る。(三)喇七—十章　前四五八年アルタシヤスタ王の命に依り、エヴラ、エダとペニヤミンの族を率ひて歸國し、大改革を斷行す。(四)喇四の六—廿三　猶太の敵人引續きてエルサレム石垣の再築を妨ぐ（前四四六五—四二五）。(五)尼一の一—七の七十三　前四四五年アルタシヤスタ王の許を受け、子ヘミヤ知事としてエルサレムに來り、敵人等の反對にも拘はらず、五十二日間にてエルサレムの石垣を築

ト上ぐ。(六)七の七十三—十三の三　聖年エズラ神殿の前にてモーセ律法の書を朗讀し、石垣新築の祝のため構廬節を守る。(七)十三の四—卅一　前四三二年ネヘミヤ再びエルサレムに歸り神殿を潔む。

【此書の結構】　近時聖書の批評家は、希伯來文學は他のセミチック文學と同じく多くは編輯の結果に成れる者也とのことを示せり。此書も亦現形に於ては種々の文書より編輯せられたる者にして、之を分析すること必ずしも困難なる業に非ず。讀者は此二書の大部分、殊に尼希米亞書の大部分が第一人稱を用ゐて記されたるを見るべし（以士喇七の廿七—九の十五、尼一の一—七の七十三、十二の廿七—四十二、十三の四—卅一）『我』なる代名詞は以士喇に在てはエズラを指し、尼に在ては ネヘミヤを指す。此等は各々エズラ及び ネヘミヤの書きたる備忘錄にして、大體に於て原形を存す。而して此等の備忘錄の大部分が紛失して傳はらざりしは明也。故にエズラの物語には適當の冒頭なく、又彼は律法を教へんためエルサレムに來れりとのことなれ共、其結果に就ては何事なも記さず。ネヘミヤの物語も亦屢々突然として始り、突然として終れり。其他の部分は備忘錄を基礎となしたるものなれ共、其原形に非ず。例之以士喇七の一—十の如き、第三人稱を用ゐたるが如き、編輯者の手に成れる者なること明也。而して此編輯者は歷代志略の編輯者と同一人也。創世記より列王紀略の記事は、天地開闢に始まり、前五六一年エホヤキム王の釋放に終り、猶太國再興の事に及ばず、故に其缺を補はんため、以士喇、尼希米亞、歷代志略の三書は成れる也。思ふにエズラ、ネヘミヤの備忘錄、及び其他に散見せる雜書を集めて、後の記者之を今日の以士喇書、尼希米亞記に編輯し、後又若干何史を參酌し、アダムより以下ネヘミヤが第二の住居なエルサレムに下したるに至る迄（前四三二）の記錄を編み、之を歷代志略と稱し、以士喇書の前に置けり。是れ歷代志略下の終りの文章中途に切れて直に以士喇書に續く所以也。

【參考書】　總論としてはドライヴェルの『舊約文學綱論』セースの『以士喇、尼希米亞及び以士帖』註釋としてはライル（創橋聖書）ローリンソン（ブルピット、コメンタリー）シュルツ（ランゲ註釋書）等を推す。

エヅラ第一書　(ダイイチショ)

【書名】　舊約經外聖書中の一書。エズラの事を記せる書の標題頗る混亂せり。希臘譯には此書を Esdras A. と なし、Esdras B. の中に以士喇書及び尼希米亞記を含めたり。然るに拉丁譯には以士喇書を Esdras I. となし、尼希米亞記を Esdras II. となし、從て Esdras A. は Esdras III. となり、Esdras IV. は更に晩出の偽經に用ゐられたり。英國教會の新譯書及び早き時代の英譯聖書には此四書を載せたり。以士喇書、尼希米亞記のみを經典となし、他の二書に『エズラ第一書』『エズラ第二書』の名を附して經外聖書の中に入れたるは、セプチュアジント譯を以て嚆矢となす（一五六〇）此書は一部分（三の一—五の六）を除くの外全く經典（以士喇書、尼希米亞記）中に存在する材料より成り、神殿再築の歷史を反復せる者也。此書の存在を初めて證せるは、ヨセファスにして、彼は之を經典に代用せり。此書と以士喇書との關係に關しては三說あり。第一說は之を以て七十人譯の希臘語より編輯したる者に過ぎずとなす者にして、此說に依れば、希臘人の中には七十人譯中の希伯來語的文攻を解せざる者あり、故に彼等が領解し得るやうに修正したる也と云へり。然るに此書を驗するに七十人譯よりも希伯來語に近接せる箇處甚だ少からず。去れば單に希臘語より編輯したる者也と云ひ難し。第二の說は歷代志略、以士喇書、尼希米亞記の早き希臘譯より取りたる者にして、七十人譯より全く異りたる飜譯也となし、第三の說は直ちに希伯來語より飜譯したる者也となせり。此二說何れも是なりや、議論未だ一定せず。又此書のみに關する部分（三の一—五の六）はダリアス王宮廷の事を記せる者なれ共、何れより其材料を得來りしや明ならず。此書編輯の時に關しても、一方に於ては之を以士喇書、尼希米亞記の編輯せられし時、即ち紀元前三百年頃也となし、他方に在りては、ヨセファスの時代、即ち紀元百年頃也と爲すものありて、其何れが是なるや俄に定め難し。編輯の場所に關しては、此書亞歷山に住せる猶太人のために書かれたる者なるが故に、亞歷山に於て書かれたる者なるべしと一般に信ぜらる。

エヅラ第二書　(ダイニショ)

【書名】　舊約經外聖書中の一書。英譯經外聖書に此書を『エズラ第二書』と稱するは、其第一章の初に『預言者エズラ第二の書』とあるに基く。然れ共通常は拉丁語の寫本に從ひ『エズラ第四書』として知らる。斯くエズラ書の標題に相違を生じたる原因二あり。(一)拉丁譯がエズラなる拉丁名を經典の以士喇書、尼希米亞記に用ゐたること。(二)此書の最初の二章と結末の二章とは、後人の附加したる者なるが故に、寫本に之を別々の書となしたること是也。此書は元來希伯來語にて書かれたる者を、希臘語に飜譯せられたる也との說もありれど共、今日にては此說は放棄せられ、一般に元來希臘語を以て書かれたに彼等が領解し得るやうに修正したる也と云へり。

る者也と信ぜらる。此書が拉丁、西利亞、亞剌比亞及びエチオピヤ等の語に飜譯せられたりしを見れば、如何に重ぜられたる者なりしやを知るべし。此書の原文は三章—十四章にして、天使がエズラに與へたる異象を記す。初めの二章は猶太人に反對の精神を以て書かれたる者にして、神は以色列人を棄てゝ異邦人を愛すべしとの事を記し、終の二章（十五、十六）は古預言者の態度を以て埃及、亞細亞、巴比倫等諸國民の上に來るべき禍患を記せり。此書は沈痛なる失望の調を以て記され、究極の勝利と幸福との希望も、眼前に來れる慘憺たる表徵の中に葬り去られぬ。思ふに此書は此の如き時、此の如き場所に於て書かれたる者なるべく、吾人もし此書を以てエルサレムの滅亡したる時書かれたる者にして、全書悉く紀元七十年の出來事以後に於る猶太人の望なき有樣を描きたる者也と想像するを得ば、書中の意義自ら驚嘆たるを得べし。然れ共此書著作の年代に關しては、學者の說一ならず。而して此問題は主として書中に記せる鷲の異象の解說如何に依りて定まる。或る學者は異象を以て國王及び共和政治時代を表する者也とし、之をシーザルの死後間もなく書かれたる者也となし、他の學者は異象を以て羅馬帝國を表する者也として、之を紀元前三十年アントニーの死後間もなく書かれたる者也となし、更に他の學者は鷲を以て羅馬帝國を代表する者也となし、ドミシアン帝の治世（八一—九六）に書かれたる者也となせり。近時の學者は一般に第三說を取る。而して此書は全然猶太人的にして、著者はパレスチナに住せる猶太人なるべしと想像せらる。結末の二章（十五、十六）は二八六年頃の作にして、最初の二章（一、二）は之れよりも早き時代の作なるべしとは、近時多くの批評家の一致する所也。

エチオピヤ　Ethiopia.

【地名】　『目に燒けたる顏の地』の義。ヘロドタスは此名を上ナイルの處に用ゐ、メロエを以てエチオピヤ全州の首都となせり。是れ即ち埃及の屬領カシ又はケシ（聖書のタシ）の國にして、前八世紀に至り獨立國となりしが、前五十四年波斯王カンビセスに征服せられ、後羅馬帝アウガスタスの時羅馬の所領となる。第六世紀の初アブラクス マイト王海岸全體を統轄するに及び、エチオピヤ王國はハベシヤット（Habasiat）と稱せらる。近時アビシニヤと稱するはハベシヤットの轉訛なるべし。（『アビシニヤ教會』の條參照）。

エチオピヤ譯聖書　(ヤクショ)　Ethiopic Version.

【書名】　其起源の正確なることは明ならざれ共、アビシニヤに於る基督教の初代、即ち第四世紀乃至第六世紀の頃、希臘語の聖書より飜譯したる者なること明也。頗る原語に忠實にして、有名なる學者に依りて飜譯せられたるには非ざれ共、誤謬比較的少し。

エデッサ　Edessa.

【地名】　北メソポタミヤの古市にして、聖書の所謂カルデヤのウルと同一也と信ぜらる。紀元前一三七年より二一六年迄オスローヘン獨立王國の首都なりしが、カラカラの爲めに滅ぼされて羅馬に屬し、後アラブ人に略せられ、後又一たび獨立せしが、再び滅ぼされて、今に土耳其政府の治下に在り。基督教の此地に入りしは最も早き時代にして、此國の王アブガルスは基督と通信を往復したりしとの傳說あり（素より信ずるに足らず）。第三世紀には監督の駐在地となり、第四世紀には幾多の壯麗なる教會及び寺院設立せられたりき。然れ共一たび回教徒に征服せられてより、此等の會堂は回教の會堂となりたり。現時希臘教の大監督及びアルメニヤ派の監督尙此地に住す。

エデル・シャイム　アルフレッド　Edersheim, Alfred

【人名】　一八二五—八九　墺太利の神學者。ヴィンナに生る。其父母は猶太人なれ共、彼は基督教を信じ、蘇國エヂンバラに學び、古アベルディーン自由教會の牧師（一八四八）トルケー島老教會の牧師（一八六一）ドルストシア英國教會の牧師（一八七六）となり、又リンカン院の講師となる。著書頗る多し。其最も著名なるは『救主耶蘇の傳及び其時代史』（一八八三）及び『聖書歷史』（七卷、一八七五—八七）となす。何れも考證廣博を以て稱せらる。

エデン　Eden.　(ヘブ "Éden")

【地名】　創世記に『エホバ神エデンの東の方に園を設けて其造りし人を其處に置き給へり』（二の八）『河エデンより出で園を潤し、彼處より分れて四の源となれり、其第一の名はピソンと云ふ、是は金あるハビラを繞る者也、其地の金はよし、ブドラヒと瑪玉彼處に在り、第二の河の名はギホンと云ふ、是はクシの全地を繞る者也、第三の河の名はヒデケルといふ、是はアッスリヤの東に流る3者也、第四の河はユフラテ也』（二の十—十四）とあり。エデンは『獄樂』の意にして、其園の位置に就ては古來諸說あり。北極又に濠洲に在りしとさへ唱ふる者あり。ロセフス、エノク書及び其他の人々は、之を極東北即ち蒙古のアルタイ山の附近に在りしとなし、サンソン、レフンド、ブンセン、カイル等は之をチグリス、ユフラテ兩河の水源アルメニアに在りしとなし、カルヴィン、ボカルト及び近時のアッスリヤ學者は之をカルデアに在りしとなし、レ、クレルクは之をクリソルホアス、オロンテス兩河の間なるダ

マスコに在りとなし、ハイデゲルはヨルダン河の水源パレスチナに在りとなし、ハルドウィン及びハシグィは之を南亞剌比亞に在りとなし、レナンは之をカシミルの附近に在りしウディアナの園と同一視し、ベルソイ、ラッセン其他の人々は之を印度富闍那の須彌山と同一也となせり。ヨセファス、ユウセビウス、アウガスチン、アムブロース及びエロームはピソンをガンヂス河也とし、コスマスインデプロイストは之を印度河也とし、猶太の註釋學者は之をナイル河也となせり。之に反してヨセファス及び教父の多數はギホンを以てナイル河也となせり。コスマスはギホンをガンヂス河也となし、回教の學者等はギホン及びピソンをオクサス及びヤクザルテス二河と同一視し、聖マルチンはピソンを亞剌比亞のワディー、エル、ルマと同一也となせり。

然れ共エデンの園の地理は楔狀文字の碑銘に依りて、近時漸く明となるに至れり。巴比倫の『平野』を巴比倫人はエディン(Edin)と名く。蓋しセミチック人は之を取れる也。アッスリヤ語にては之をツエルと云ひ、亞剌比亞語のツオルと同じ。ツエルなる名は尙チグリス、ユフラテ二河の間なる『低地』に用ゐらる。此二河は曾て直ちに波斯灣に注ぎたりしものなれ共、年々流す處の汎濘に依り、古昔の河口は今は海を距ること八十哩以上の河上に在り。古のカルデヤの港はエリドゥ(『よき市』の義)にして、今はアブシャラインと稱し、ユフラテの河口に在り。此近傍に『聖所』と名けられたる園ありて、此處に聖橄欖樹(生命の樹)あり。其瑶瓌の根は底なき地の深淵に達し、其葉は女神バフの臥榻たり、其枝の蔭の下にはタムムヅ神の廟あり、其中には何人も入るを得ず。アッスリヤの彫刻には屢々此生命の樹の其兩側に二の守護の靈即ちケルビムの置かれたるを見る。此等のケルビムは翼を有し、其頭は鷲又は人也。レノルマントの云ふ處に依れば、アッスリヤ人の護符に、ケルブなる言を守護者の代りに用ゐたるを發見したりと云ふ(詳くは『ケルビム』の條を見よ)。

ヘンリー、ローリンソン卿は、曾てピソン、ギホンの二河をウクヌ、スラブの二河と同一視したりしが、後又ピソンを巴比倫人の穿ちたる運河アラクタとなし、ギホンをユフラテの西に流るゝ今のユカ也となせり。デリッチも亦ギホンを以てアラクツとなしたれ共、ピソンをばパラカット河也となせり。此二河の名は未だ楔形文字の碑に於て同視すべき者を發見せず。然れ共ピソン河の圍繞せるハビラの地は、西、埃及の境に達せる北亞剌比亞の沙地なりしと云へば(創廿五の十八、母前十五の七)此處より出でたりといふブトラクは楔形文字碑銘のブルチカチなるべし。ギホンは思ふにチグリス河の東、ルリスタン山に其源を發するケルカ河、即ち楔形文字のウライ河なるべし。ピンチエスは巴比倫楔形文字の碑中にパルデス即ちパラダイスの名を發見したりといふ。

エデン Edén. 〔種族名〕 王下十九の十二に『テラサルのエデンの人々』(賽卅七の十二『エデンの族』)とありて、セナカリブ王の父祖が征服したる種族の中に加へらる。ゴザン、ハラン、レゼフと共に之を列するを見れば、メソポタミヤに住せる種族にして、楔形文字のビト、アヂニ(『アヂンの家』の義)と同一なるべし。結廿七の廿三には、ツロと交易したりし商賈の中に數へたり。此處にもハランと共に列するを見れば、是又ビト、アヂニと同一なるべし。尤もマルゴリオウスは之を以て今の南亞剌比亞のアデン也となせり。

摩一の五に記せるベテエデン(『エデンの家』の義)は、前後の言より察すれば、ダマスコ附近に在る王宮を指せる者の如し。然れ共之に就ては諸說ありて一定せず。ドライヴェルは、ベアルベックの西北廿哩に在る今のエーデンを指すが、然らざれば上に記せるビト、アヂニの事なるべしと云へり。

エドマンド 聖(セント) Eadmund, St. 〔人名〕 八五五年東アングリアの帝位に登る。國民を愛撫し、温和を主義とし、弱者の保護者となる。八七〇年異教徒たる丁抹(デンマルク)人東部アングリアに上陸し僧尼を殺戮し、教會を破壞せしを以て、帝は其暴行に抵抗せしが、捕へられて八七〇年斷頭臺に死せり。オックスフォルドの國會は聖エドマンド日を英國國祭日に數ふるに決せり。

エドマンド 聖(セント) Edmund, St. 〔人名〕 一一九五―一二四〇 牛津及び巴理に學び、後牛津の教授となり、一二三三年カンターベリーの大監督に舉げらる。羅馬法王の主張に反し、國民教會の首領たりしを以て、グレゴリー九世並にヘンリー三世と相爭ひしが、遂に志を果さず、一二四〇年英國を去り、ポンテグニーに行き、後ソイシーに死せり。

エドレー Edrei. 〔地名〕 (一)バシヤンの第二の首府 以色列人がモーセに率ひられ、ギレアデよりバシヤンに入らんとして進みし道筋に在り。曾てオグ王が以色列人を要擊して戰死したる處也(民廿一の卅三、申三の一―十)其舊蹟は凡そ周圍三哩許あり、神殿教會、回々教の寺院等存在す。現今のエドラ又はアルアトと稱ふる處是也。(二)ナフタ

リの都府 ボルダーは之を以てケデシの南二哩に在るナルクライベの事也とす(民十九の三十七)。

エドワルヅ 〔人名〕 ジョナサン Edwards, Jonathan 一七〇三―五八 米國の神學者。コンネクチカット州イースト、ウインゾルに生る。幼にして聰悟、六歳にして拉丁を學び、十三歳にして拉丁、希臘、希伯來の諸語に通じ、且當時旣に物理、動物、哲學等の諸科を學びて深く造詣する所あり。其ロックを愛讀したること、守錢奴の其財囊を守るが如き熱心を以てしたりしといふ。十七歳にしてエール大學を卒業し、留りて神學を學ぶこと數年、廿歳の時舉げられて教授となりしが、廿四歳の時ノルサムプトン教會の牧師となり、二十三年間其職に在り。エドワルヅは唯に其學識の卓越したりしのみならず、敬虔の念最も深く摯實人を動かす者あり。該博なる智識と鋭利なる論辯力とに加ふるに、神祕的傾向を以てせり。彼の說教は思想奧妙にして議論的なれ共、又平易にして解し易く、人の心臟を刺すが如きものあり、深き確信と、白熱の如き熱情とを以て說教するが故に聽く者感動せざるなし。

一七三四年十二月彼の說教の結果としてリバイバル起り、悔改者の新に教會に加はる者三百人の多きに達せり。此リバイバルはノルサムプトンを初めとして各所に行はれ、終にコンネクチカット全州に及びたりき。從來小兒の時洗禮を受けたる者は、未だ深く新生の經驗を有せずとも、之を教會の正會員となし、又聖餐に列席するを許したりしが、エドワルヅは之に反對し、新に生れて其身を全然神に獻ぐる決心なき者は、決して之を正會員となし聖餐に列せしむ可らずと說きたりしがため、端なくも教會員との衝突を來し、彼が四十七歳の時遂に其牧職を辭するに至れり。於是彼は州の西方未開の地に移り、印度人の宣教師となりて六年間其職を盡したりしが、偶々プリンストン大學の校長アアロン、バル死するに及び(一七五七)選ばれて其後を襲ひしが、就職後數週にして痘瘡のために死せり。

エドワルヅは新英(ニューイングランド)州カルヴィン派神學の開祖也。其『意志の自由』は彼がロックより得たる思想の影響を示せり。彼は此書に於て、最も精細、巧妙に定命說、即ち哲學的必然と、前行の動機に依りて得らるべき撰擇の前の確實を論じ、此確實を必然より區別せり。彼の說に依れば、人は意志の誤れる撰擇に反對する『自然的能力(ナチユラル、アビリチー)』を有すれ共、『道德的不能力(モラル、インアビリチー)』は、神の恩寵を離れては、此反對を實際に起すことを勿らしむる也。其『原罪』に於ては、人類は其生るゝ時携へ來る意志の傾向に向ては、自ら責任を負ふべき者なることを論じ、其『德』論に於ては、人の一般に有する愛と、之が運行に屬する善とを區別し、後者は神に依りて生れたる者のみ有する者也と云ひ、『愛情論』には更に深く自然の愛と神聖の愛との區別を論じて、其神祕的傾向を示し、『萬物創造に於る神の重なる目的』に於ては、神の有し給ふ凡ての善を萬物に與へ給ふこと是れ創造の目的也と云ひ、『贖罪の歷史』には、歷史に於る神の意匠、計劃を詳論せり。此等の著書の効果は頗る大にして、所謂『エドワルヅ派』又は『新神學者』又は『新光明』("Edwardeans" or "New Divinity Men," or "New Lights") と稱する一派を造くるに至れり。彼等は何れも一七四〇年に起れるリバイバルの贊成者なりき。而して又彼等は常に温和カルヴィン派及びアルミニヤン派の反對する處となりたりき。サムエル、ホプキンス。ジョセフ、ベラミー。小ジョナサン、エドワルヅ。ナサニエル、エムモンス。チモシー、ドワイト等は此派の最も重なる人々なりき。エドワルヅが神祕的傾向を有せりとのことは前既に述べたる處なるが、彼れ少時父の牧場を逍遙せし時の事を自ら記して曰く

『余が此處に逍遙しつゝ天空と雲とを眺めつゝありし時、余は神の稜威と恩惠とに就きて得も云はれぬ一種の快感に打たれたりき。稜威と柔和とはいとも美はしく結合して見えき。聖き稜威は温和に、美に、而して温和は莊嚴に、偉大に見えき。神の卓絕、智惠、純潔、愛は萬物に顯はるべく見えき。日にも月にも星にも、雲にも青空にも、草にも花にも樹にも、水にも凡ての自然にも顯はるべく見えき。余は屢々長き間坐して月を眺め、又雲と天空とを見て、爰に神の榮光を認め、造物者と贖主とを思ひ回らしつゝ、低き聲もて之を讚美したりき』。

彼れ又其曾て起りし實驗を語りて左の如く云へり。

『一七三七年余は曾て健康を養はんとて或る森林に騎馬を試みたりしが、余はいつもの如く馬より下りて獨り靜なる場處に退き、祈と默想とに餘念なかりしが、余は不思議にも神と人との仲保者なる神の子の榮光を見たり。基督は得も云はれぬ卓絕を以て顯はれ、斯くて凡そ一時間も經たりしが、余は此間涙にくれ且聲を高めて泣きたり 余は自らなきが如く、塵埃に臥す如く、全く基督に滿たされたるが如く感じ、聖き愛を以て彼を愛し、彼を信じ、彼に依りて生き、彼に事へ、彼に從ひ、天の如き純潔を以て全く潔められたるを覺えたりき。余は之と均しき經驗を屢々有したりき』。

エドワルヅはウェスレーと同年に生れ、其學識に於ては、ウェスレーに優り、其靈的能力に於ても亦敢て

ウェスレーに劣ること勿りき。ロベルト、ホールは彼を評して『人の子の中最大なる者也』と云ひ、ウィリアム、マッキントッシ輩は『米國に出でたる唯一の形而上學者也』と云ひ、ロベルト、モーアヘットは『哲學的神學者として監督バットレルに匹似せり』と云へり。

エドワルヅ ジョナサン 小 Edwards, Jonathan, the Younger. 人名 一七四五—一八〇一 米國の神學者。前掲ジョナサン、エドワルヅの第二子、マッサチューセッツ州ノルサムプトンに生る。プリンストン大學に學び、業を卒りて後コンヂクチカット州ホワイト、ヘブン教會の牧師となり(一七六九)職に在ること廿六年。其身を全然神に献げざる會員に反對したるも、一七四〇—四二年のリバイバルに次ぎて起れる反動さに依りて、會員と衝突し、一七九五年其職を辞し、翌年コールブルーク教會の牧師となる。此教會の會員は智慮あり、愛情あり、神學及び哲學上の研究を爲すの餘暇を費に與へしかば、彼も亦此地に其一生を送らんとしたりしが、一七九九年選ばれて紐育ユニオン大學の校長となり、誠實に其職務を盡したりしかば、其名聲頗る高く、哲學者として學生に與へたりし感化甚だ少からざりき。然れ共職に在ること長からず、未だ三年に満たずして熱を患へて死せり。彼は其哲學的才能に於て、其敬虔に於て、又其擬範的生活に於て頗る父に類せり。其神學に於ても亦父と同じく、所謂『エドワルヅ派』の神學を奉じ、最も贖罪の政治說を駁疏せり。其最大事業は父の著書を編輯出版したりし事にして、彼亦著書あり『自由及び必然に關する論』『贖罪の必要』に關する三の說教は其最も重なる者也。

エノク Enoch. 人名 (一)カインの長子(創四の十七十八) カイン一の邑を建て、之れにエノクの名を命ず、其遺跡明かならず。(二)ヤレドの子にしてメトセラの父、セツの後裔として、アダムより七世に當る。生涯神と偕に歩めり。三百六十五歲にして神彼を取り給ひければあらずなりぬ(創五の廿四、希十一の五)猶太人の間にはエノクに就て妄誕不經の說傳へらる。即ち彼は文字算術天文學を發明し、又最初の著述者なりしと云ひ、彼の見たる幻業と預言とを記したる書、ノアと共に其方舟の中に保存せられ、後世まで傳へられたりしと云ふの類是也。新約聖書中三度エノクの事を記す。(イ)路三の三、系圖の中に之を記す。(ロ)希(ヘブ)十一の五、創世記に載する所と同じ。(ハ)猶太書十四節、之れはエノクの書より引きたるもの也。

エノク書 Book of Enoch. 書名 舊約(ヒボク)經外聖書中の一書。創五の廿四に『エノク神と共に歩めり』と云へることあり。後世に至り此言を以て、エノクが超人類的特權を享有し、惡の起源、鴻去に於る人と天使との關係、彼等諸來の運命及び正義の最後の勝利等に關する特別の默示を受けたりとの意也と解せり。左れば舊經の盛に行はれたりし時代に至り、エノクの名を寄へる舊經の顧はれたりしも惟むに足らず。此書が元來セプチック語を以て書かれたる者なる事は舊經學者の一般に同意する所なれ共、原語は希伯來語なりしか、又はアラメイック語なりしかに就ては今日尙議論あり。此書は希臘、拉丁及びエチオピヤ語に飜譯せられたれ共、其本文の全部殘存せるはエチオピヤ語あるのみ。其エチオピヤ語は前二世紀乃至一世紀に書かれたる者にして、舊約聖書の一部なる事は舊經學者の一般に同意する所なれ共、惡の起源、鴻去の運命及び正義の最後の勝利等に關する特別の默示を受けたりとの意也と解せり。左れば舊經の盛に行はれたりし時代に至り、エノクの名を寄へる舊經の顧はれたりしも惟むに足らず。此書が元來セプチック語を以て書かれたる者なる事は舊經學者の一般に同意する所なれ共、原語は希伯來語なりしか、又はアラメイック語なりしかに就ては今日尙議論あり。此書は希臘、拉丁及びエチオピヤ語に飜譯せられたれ共、其本文の全部殘存せるはエチオピヤ語あるのみ。其エチオピヤ語は前二世紀乃至一世紀に書かれたる者にして、或る程度迄は其思想及び言語の上に影響を與へたり。ユダは其書(十四、十五)に之をエノク眞正の書として引用せり。其外新約書中に此書の言語、文字を用ゐたる處少からず。バルナバは之を聖書として引用し、猶太の學者も亦之を聖書として引けり。此の如く此書は第一世紀の猶太教徒及び基督教徒に向て第二經典の地位を占めたりしが、第二世紀に至り猶太教徒は之を排斥し、第三世紀の終頃より基督教會も漸次之を排斥し、アビシニア教會の外之を用ゐる者なきに至れり。一七七三年此書アビシニヤにて發見せられ、其近代の飜譯一八二一年に至り世に公にせられぬ。近時學者の信ずる處に依れば、此書はもと浩瀚なる叢書にして、今日殘存せる者は僅に其一部分に過ぎず。教授アール、エチ、チャールスは著作の年代に從て此書を下の如く區分せり。即ち(一)一章—卅六章(前一七〇より選から分)罪、義、及び審判を論ず。(二)八十三章—九十章(前一六六—一六一)前と比すれば一層獨創的也、地上のメッシヤ王國を論ず。(三)九十一章—百四章(前一三四—九五)天に於る編なる不死を論ず。(四)卅七章—七十章(前一世紀の初半)發達せるメッシヤ人格論を載す。(五)七十二章—七十八章、八十二章、七十九章、天國の事を論ず。(六)紛失せるノア書の記入。此書が新約全書の思想及び言語に影響を與へたりしとの事は既に之を云へり。此書は實にメッシヤ、メッシヤの王國、陰府、復活及び惡鬼に關する思想に於て、舊約より新約に移る津梁を架せり。基督、義しきもの、選ばれたる者、人の子の舊名稱が、此書に於てメッシヤに適用せられたりしが如きは其最も注目すべき點也とす。

エノク秘義の書 Book of the Secrets of Enoch. 書名 舊約(ヒボク)經外聖書中の一書。凡そ千

二百年間脚失したりしが、近年露西亞に於て其寫本を發見したり。此寫本がスラヴォニア語にて記載せられたるが故に、エチオピヤ語のエノク書と區別する爲め、之れをスラヴォニヤ語のエノク書と稱す。もと希臘語にて書かれたる者にして、紀元元年乃至五十年埃及に於て、希臘生れの猶太人が作りたる者なること諸種の事實に依りて知らる。此書の云ふ處に依れば、人の靈魂は凡て世界の基の定まらざりし以前に於て創造せられたる者にして、天父は地獄に於る各自の寓居も亦神の創造し給へる所也。人の身體は七の實質より成る。人は元來善眞なる者に造られ、又善惡を知るの知識と共に自由の意志を與へられたり、彼は先嗜の二律を教へられ、自ら其運命を造ることを許容せられたれ共、身體を有するが爲め、惡を撰み其結果遂に罪の償として死を得るに至れり。人は皆終に審判せらるべき者にして、義人は終の審判を免れ永遠の生命に至るべしと雖も、惡人は地獄に赴くべく、死後には赤悔改の餘地あるなし。此書には又一千年說あり。作者以爲らく、創世記に記されたる創造の物語は過去に適用すべきのみならず、又將來に適用すべし、此世界が六日に造られたりと云ふは、六千年間繼續すべしとのことにして、神が第七日に安息せりと云ふは、六千年の終に一千年の安息ありとの意也、此一千年の過ぎて『無究なる第八日』と稱すべき、永遠の幸福の未來世來るべしと。記者は又七の天のことを語れり。亦以て保護、希伯來書記者、及び約翰默示錄の中に在る七の天の思想の淵源する處を察すべき也。

エバ 『イブ』の條を見よ。

エバル Ebal. 地名 ゲリヅム山と相對したる山の名。海拔三〇七六呎、地上一二〇〇呎也。

隔山相距る一哩半、山脚に相接し、其項に立てば相呼聲すべし。只色列人が祝福と呪詛とを宣べし山の一也(申十一の廿九、書八の三十—三十五)コンダーは此山の頂上神聖の場所と稱せらるゝ近世のアマドエドティン(信仰の山)を以て、ヨシュアの祭壇を築きし處ならんと云へり。近世のナブラス(古代のシヅケム)は此の谿谷中に在り。

エヒウ Jehu. 人名 イスラエルの王にして、アハブの家を滅し、バアルの祭司を死刑に處したる人也。彼は預言者エリシヤの使者に依りて膏を灑がれて王となり(王下九の六)頗る勢力を有したり。ギレアデのラモテとエズレルとの交通を遮斷し、自ら兵車に乘りてエズレルに往く。時にイスラエルの王エホラムと、彼の病を訪はんとて往きしユダの王アハヤと共に、エズレルに在り。エヒウの來れるを聞き、共に兵車に乘りて彼を迎へ其使命を問ひしに、彼は弓を以て二王を射殺せり。彼れエズレルに入り、朝臣に其劍を與へて、窓より望み居たるイセベルを投げ落して殺さしむ。斯くて彼は又ユダ王アハヤの家の者四十二人を捕へて悉く之を殺し、アハブの家を勦絶し、又バアルの祭司をバアルの神殿に集め、其集るを待ちて之を撲殺せり。然れ共彼はエホバの律法を行はず。故に其國はハザエルのために侵略せられたりき。彼れ在位廿八年、死してサマリヤに葬らる(王下九、十)。

エビオン派 Ebionites. 宗派名 希伯來語エビオン(貧者の義)より來り、初めは凡ての基督教徒を指す名なりしが、後猶太人基督教徒のみを指す名となれり。第四世紀に至りエピファニウス、エローム等はナザライト派より區別せられたる猶太教會の一派を指すために此名を用ゐたり。此派に關する初代教狀の証明は斷片的にして且時々矛盾せるを見る。新約聖書中には當時猶太教會に派ありしことを記さゞれ共、異りたる傾向の存在したりしことは明に指示せらる。即ちエルサレムの宗教會議に於ては、保羅に反對して、異邦の信徒に割禮を施し、且命じてモーセの律法を守らしむべしと主張せる者あり(徒十五の五)又加拉太教會にも此の如き教師ありて、無邪氣なる信徒を惑はしたりき。然れ共猶太人の基督教が異邦人の教會と分れて別に一派となりしに、エルサレム滅亡後にして、後漸次異端を唱へ、遂にエビオン派、ナザライト派の二派を爲すに至れり。ナザライト派は尙保羅の使徒たる權能を承認し、自ら律法を守りたれ共、之を異邦人基督教徒に向て强ゆることを爲さゞりしが、エビオン派は保羅を排斥し、異邦人基督教徒も亦律法を守らざる可らずとのことを主張せり。是れユスチヌス時代の事也。イレニウスも、エビオン派に頑然として律法を固守し、保羅を排斥し、馬太傳の外他の福音書を信ぜずとの事を記し、且彼等は基督の處女降誕を信ぜず、基督を以て通常の人となしたりしとの事を傳へたり。オリゲンはエビオン派に二派あり、一派は奇跡的降誕を拒否し、一派は之を承認したりしと云へり。エローム。エピファニウス等の傳ふる所に依れば、エビオン派は一千年太平說の信者にして、主もに死海に瀕せる地方に住したりしといふ。猶太的基督教はノスチック哲學及び希臘哲學の入來と共に全く消滅するに至れり。

エビルメロダク Evilmerodach. 人名 巴比倫のネブカドネザル大王の子にして其後繼者。王下廿五の廿七—卅に依れば、彼はユダの王エホヤ

キメルは其三十七年間の俘囚より宥して之を獄より出し、其位を巴比倫に共に居る王等の位よりも高くし、其獄衣を脱へしめ、一生の間王の食卓に就かしめたり。ペロサスの說に從へば彼は僅二年位に在りたるのみ(前五六二—五六〇)タイエルは王がエホヤキンに對して爲せる行爲は寧ろ其後繼者の行爲となすが以て適當也となす。王の治世の碑文多くありと雖も一も其年代を詳にするものなし。前五六〇年其義兄弟ネリグリサル黑闇を讓き之を殺して其位を奪ふ。

エピクーロス Epikouros (Epicurus). 人名 エピクーロス學派の祖。前三三七乃至三四一年サモス島に生る。自らに獨學ぜりと稱すれ共、恐くはクセノクラテースの門弟たりしならんといふ。前三〇六年雅典府に在りて教授を初め、其庭園に其同志を集めて其學派を開けり。其人物溫厚にして深く人に愛せられしのみならず、其哲學も實用を專とし衆人に解し易かりしかば、其門に集り來りし者夥しく其勢頗る盛なりき。彼れ前二七〇年に沒しぬ。多くの著述をなせしも、今日に存する者甚だ少し。

エピクーロス說 Epicureanism. 學說名 ストイック說に對する倫理哲學の一派にして、アリストートルの死後間もなく希臘に起りしもの也。主唱者なエピクーロス說に從へば、人生の善とは即ち快樂にして、快樂を顧れて別に善ある事なく、人生の惡とは即ち苦痛の謂にして、苦痛を離れて別に惡ある事なし。一言以て之を言へば、快樂即善、苦痛即惡にして、其論出する所近世の快樂說と全く同一なり。但しエピクーロスの所謂快樂とは普通に誤解ぜらるゝが如く劣等なる快樂を謂ふに非すして、克己と單純生活とより來る精神の平安、精神の自由を謂ふものなり。エピクーロスは又精神の平安及び自由に加へて、朋友の親みを以て理想的快樂即ち眞誠なる善の一とせり。惜び哉今日にありてはエピクーロス說は劣等なる快樂說、野蠻なる本能主義と同一說ぜらるゝに至りしこと也。エピクーロス說の他の特徴を擧ぐれば、本體論に於ては唯物的原子論を取り、認識論に於ては感覺論を取り、宗教に關しては全然超自然的の事項を否定し、世俗の宗教の迷信を打破するを以て其天職となせり。此學派の重なる者を擧ぐれば、エピクーロスの親友メトロドーロス、隣りて有名なる羅馬の詩人ルークレシウス等也。

エピクテートス Epiktetos. (Epictetus) 人名 ストア學派の最も有名なる學者。六〇年頃フルギヤのヒエロポリスに生る。始め羅馬市にしが、其間ストア學派の說義を聞き、其後自由の身となりて其說を奉ずるに至れり。然るに九〇年他のストア派の學者と共に、暴君ドミティアーヌスの爲に羅馬を逐はる。此に於てエピルスのニコポリスに遁れて、此處に其居を定めて其教を講ぜしが遂に此地に死せり。彼れ著書なし。其弟子フラヴィウス、アリアヌス、師が日常門弟に向て爲したりし談話教訓を收錄し、二書を編せり。其教會歷史に特殊の興味を有するは、マルカス、アウレリウスに感化を與へたりしがため也。

エピスコパル チャルチ 『アングリカン教會』『英國教會』『米國プロテスタント監督教會』『監督政治』等の條を見よ。

エピスコピウス シモン Episcopius, Simon 人名 一五八三—一六四三 アルミニウス派の神學者。アムステルダムに生れ、ライデンに於てアルミニウス及び其反對者ゴマルスの門に學び、前者の說を奉ぜり。アルミニウスの死後其迫害甚しかりしを以て、一六〇九年フラチッケルに移住せり。一六一二年ゴマルス死するに及び、ライデン大學の教授となりしが、カルヴィン派の劃しき反對に逢ひ、ためにドルトの會議(一六一八)召集せらるゝに至れり。彼は異端派の首領として此會議に出席せしが、彼等は彼及び其徒十二人を罰し之を國外に放逐せり。此に於て彼は西班牙、ネデルランド及び佛蘭西に往き、凡そ八年を此間に送りたりしか、爭論漸く息みしを以て、一六二六年故國に歸りてロッテルダムの牧師となり、後アムステルダムに於るアルミニウス派大學の教授となり、其處に沒せり。アルミニウス派の神學を大成せしは、アルミニウスよりも寧ろエピスコピウスにして、彼の神學は其"Confessio""Apologia"及び"Institutiones Theologiae"に於て見るを得べし。

エピファニウス Epiphanius. 人名 三一〇—四〇三 コンスタンシアの監督。パレスチナに生れ、埃及に往き、後故國に歸りて僧院を立て其長となりしが、三六七年選ばれて監督となり、爾後最も熱心にオリゲンの神學に反對せり。『公現節』(コロゲンセッ)との條を見よ。

エピファニー Epiphany.

エフタ Jephthah. 人名 以色列の士師にして且戰勝者也。彼の事蹟は士十一、十二に記さる。彼はギレアデのたけき勇士にして、妓婦の子也。彼れギレアデの長老のために其家を逐はれ、東スヤのトブに往き、其地の盜賊者の首領となれり。アンモン人の以色列を侵せるに及び、ヨルダン河の東に在る以色列人は其大將を得るの必要を感じたりしかば、ギレアデの長老等エフタをトブの地より携へ來らんとし、往きて其意を通ぜり。エフタはアンモン人と戰ひ勝たば其首領となるべしとの條件を以て其請を容れ、ギレアデの民と契約を結び、人民歌呼の中に其大將となりたり。斯くて彼はギレアデのミグパに於て、エホバに誓願を立て、戰勝ちて凱旋せん時、初めに我家の戶より出で來りて迎ふる者を燔祭として獻げんと誓へり。彼が人身を犧牲として獻げんとしたりしことは其言に依りて明也。ギレアデの所有權に關し彼とアンモン王との間になせる商議は、後人の遞入也と信ぜらる。アンモン王は以色列人のアルノンよりヤボクに至るアンモンの地を奪へりとのことを擧げて、以色列の無法を誘へつゝあるに、エフタは其地方はアモリ人の王シホンより取りたる者にして、モアブ人より取りたる者に非ずとの ことを辯ぜり。此の如く其問答の矛盾せるを見れば此問に誤謬あること明也。斯くてエフタはアンモン人と戰ひ之を敗りて凱旋し、ミグパに在る其家に歸りしに、其女誠を取り舞ひ踊りて之を出で迎ふ。此は彼の獨子にして、其外に男子も女子もなし。エフタの悲歎、女の容容天命に從ふて其身を投げ出せる有樣、最も巧に描出ぜらる。『父其誓ひし誓願の如くに之を行へり』是よりして年々以色列の女子等年に四日程エフタの女の爲めに哀哭をなし、以色列の定例となれり。斯くて又エフライムの人々エフタの許に往き彼と戰はんとせしかば、エフタ、ギレアデの人々を集めて之と戰ひ、大に之を敗り、エフライム人の逃れ來りてヨルダンを渡る者あれば、悉く之を殺せり。其殺したる者四萬二千人とあるは誇張に失す。

エフライム エフラエム 人名 四利亞の使徒。第四世紀の初めニシビスに生る。ニシビスの彼斯領となるや(三六三)去てエデッサに往き、其殘生を此處に送り、其道徳主義と熱心なる說教とに依り大なる名聲を博し、三七八年頃死せり。彼の說は其大體に於て アタナシウス派なれ共、著しく一性論の傾向を有せり。著書頗る多く聖書の大半の註釋の外、說教、論文あり。註釋の外何れも詩形に於て書かれ、頗る巧妙の域に達せり。

エフス Jebus. 地名 士十九の十、十一及び代上十一の四、五に記さるゝのみ。『是はエルサレムなり』とあるを以て、通常エフスはエルサレムの舊名也と信ぜらる。『エルサレムは此人民の住居なりしが、ヨシヤパテの時に至りて其人民ヨシヤパテに攻撃せられたれ共、テルエルアマルナ碑には此想像の誤れるを示せり。又『エフス人』と稱せられたる人民ありしを以てエフスは彼等の都市の名也と想像せられたれ共、此想像も正しからず。エルサレムなる名は既に早き時代より存在したりき(士一の七、廿一、書十五の六十三、母後五の六)。

エフス人 Jebusite. 種族名 以色列人が遷南を占領せし初めに方り、エルサレムを所有せし部族の名也。以色列人が容易にエフス人を其犧牲より逐ひ出すこと能はざりし事は書十五の六十三、士一の廿一、十九の十一十二に記さる。然れ共彼等遠にダビデのために其シオンの城塞を奪はれ、是よりエルサレムは『ダビデの邑』と稱せらる(母後五の六—九)エフスの城塞に就ては尙ほ書十五の八、十八の十六に記さる。書十の廿三、廿六にはエルサレム王アドニセデクの以色列人に敗られ殺されたりしことを記したれ共、邑の掠取せられたることに就ては何事も記されず。士一の八のユダの子孫が之を攻め取り、且火にて焚きたりとの記事は、士一の廿一と合はず。エフス人は何時、又如何にして其城塞を取りたりしや明ならず。テルエルアマルナ碑にはアブザクバ、エルサレム市地方の支配者也とのことを記したれ共、其住民の名を記さず。吾人は又エフス人の如何なる種族なりやを詳にせざれ共、思ふに迦南人の一種なりしなるべし。

エプオス同盟會 Epworth League. 結社名 メソヂスト教會の共勵會。エプオスはリエスレーの生れたる地、依て名く。其性質基督教共勵會と同じ。『基督教共勵會』の條を見よ。

エベル ヨハンチス ウィルヘルム Ebel, Johannes Wilhelm, Dr. 人名 一七八四—一八六一 獨逸ケーニゲスベルゲの牧師。突神術的の意見を傳へたりとの理由を以て其職を逐はれ、獄に投ぜらる。『ケーニゲスベルゲ宗教的運動』の條を見よ。

エペソ Ephesus. 地名 初代基督教會の歷史に有名なる都市にして、小亞細亞の西岸に在り、ケーステル河に臨む。半ば平原に半ば丘上に建てられ、サルデスに重る要路にして、南にミレタスあり、北にスムルナあり。前十一世紀の頃アセンス王コドルスの子アンドロクルス此地に殖民し、幾ならずして有名なる市場となり、其港灣には船舶輻輳せり。後相續きて彼期、マセドニア、羅馬の所領となりしが、二六二年ゴッス人のため破壞せられ、後之を再興したれ共、再び舊時の繁榮に復せず。今日にては稀少なる人口を有する一寒村にして、アカサルク(潔なる神學者の義)なる名に依りて、僅に基督教初代の往時を追懷せしむるに過ぎず。

アルテミスの殿　エペソをして有名なりしめたる者は、有名なるデアナの殿なりき。世界七不思議の一にして、希臘諸地方より多くの人々爰に參詣したりき。木造はもと亞細亞的女神にして、木乃伊の如く巻かれ、其胸は一帯に乳房を以て蔽はれ――豐饒の表象なるべし――其像は天より落ち來れりと信ぜられたりき（使十九の廿五）紀三五六年歴山大王出生の夜此殿堂焼失せしが、エペソ人は直ちに再建に着手し、諸人は其師具を献じ其熱心を顧はしたりき。斯くして建築せられたる殿堂は諸構麗る莊麗にして、イオニア風の最も完全なる諸物也と思惟せられたりしが、ゴッス人のエペソを滅すや、併せて此殿堂をも全く破壊したりき。

エペソと基督教會　エペソは早くより使徒の傳道地として最も有名なる地の一なりき。即ち此教會は保羅の創立に係り、約翰之が顧問たり、テモテ之が監督なりき。此教會が早くより組織せられしことは、保羅がミレトスより使を遣はして教會の長老を呼びたりしこと（使廿の廿四）約翰が小亞細亞に在る教會の初めに之を置きたりしこと（默二の一）とに依りて之を知るべし。約翰は其晩年を爰に送れり、其福音書は思ふに此地にて作られたりし者なるべし。パロの初めて説教したりしは此地也（使十八の廿四―廿八）。保羅とエペソとは其關係殊に深く、彼は第二傳道旅行の歸途プリスキラ又びアキラと共に初めて此地に來り、第二回には二年若くは三年此處に留れり（使廿の卅一）會堂にて説教せる後、テラノスの講堂に入り道を信ぜざりし人々と論ぜしが、彼の説教は大なる効果を奏し、多くの人々來りて道を信じ、曩に魔術を行へる人々も、其價銀五萬程の書籍を集めて人々の前にて之を燒けり（十九の十二―廿）然るに彼の成功はアルテミスの銀龕を造る工人の業を妨げしを以て、之がため大なる騒擾起り擧て彼に敵せしが、彼は遂にマケドニヤに往けり（十九の廿三―廿の一）彼がエペソ人に書を贈りしことは紀元四九年に宗教會議の開かれたる地として著名也（『エペソの大會議』の條を見よ。又エペソは四三一年及び四

以弗所書 The Epistle to the Ephesians

【經名】新約聖書保羅書翰中の一書。

【例れの教會に贈られたる者なりや】保羅がエペソに在る聖徒に贈れりといふ此書翰を讀むに方り、二箇の困難に接す。即ち其一は使徒行傳にエペソ教會の信徒を以て猶太人也となすに（十八の十九、十九の八、十三―十六）此書は明に異邦人に贈られたることにして（二の十九、三の一）其二は使徒行傳に依れば、保羅は二年以上エペソに留りたりしと云ひ、テモテ及びアリスタルコも亦保羅と共にエペソに在りたりしと云へば、（十九の廿九、（十九の中に多くの親友を有したる者なるに、保羅は此書を認すに方り、其慣例に從ひてエペソに在る朋友に問安の言辭を述ぶることを爲さざりしのみならず、彼等に向ひ自己の使徒たることを證言したることも也。去れば此書が何れの教會に贈られたりしやに就ては、既に初代の教會に於て多少の疑問を存したりき。即ちテルチュリアンは、マルキオンが此書を以て保羅のラオデキヤ人に贈りたる書也となしたりしのことを傳へ、自己も亦マルキオンの所言を是認したりしが如し。パウルは最古の寫本には『エペソに在る』といへる言なしと云ひ、吾人の今日有するシナイ及びバチカン寫本は實に此文字を有せず。故に今日の批評家はマザ及びアッシャーの思惟したりしが如く、此書を以て亞細亞諸州に在る諸教會に贈られたる回文也となせり。保羅は羅馬四書に於て其書をラオデキヤ人の教會に讀み聞かせ、又彼等もラオデキヤより來る書翰を讀むべしとのことを命ぜり（四の十六）彼が所謂ラオデキヤより來る書とは、彼の書きたる書翰なること明なれ共、其書翰の獨りラオデキヤ人にのみ贈られたる者に非ざりしことは、彼が羅馬四書に於てラオデキヤの教會及び其會員の安否を問ひたるに依りて明也。何となればもし其書がラオデキヤ人にのみ贈られたりしものならば、保羅は此等問安の語を直接に其教會に贈りたりしと思惟せざる得ざれば也。去れば其ラオデキヤ人の教會に贈られたる書と稱する者も、此エペソ人に贈りたりと稱する者と均しく回文的の者なりしこと明也。否其ラオデキヤに贈りたりと稱する書こそ、此エペソに贈りたりと稱する書に非ずや。保羅はテキコがエペソよりコロサイに往くに方り、ラオデキヤを經過すべきことを知れり、故に彼はラオデキヤ教會をも看過することを欲せず、エペソ人、ラオデキヤ人、及びコロサイ人を均しく刺せんとして一書を認め、テキコをして之を三教會に携へ往かしめ、而してコロサイ人に命じてラオデキヤより來る書を讀めと云ひし也。去らば此書の殊にエペソの教會に贈られたるに非ずして回文的の者なりしこと明也。

【此書の内容】此書の鍵は教會の一致にして、教會と神との一致、基督教會内に在る二大派、即ち猶太派と異邦派との一致、及び公同教會信徒間の一致は此書の大主眼也。『或は天に在り、或は地に在る萬物は基督に在りて一に歸せり』（一の十）是れ世の初めよりかくれたる奥義にして、今人に明にせられたり。彼等はアンテオケの監督等の到着せざるに先ちて、胡頭第一に子ストリウスを破門し、其監督職を褫たりしが、アンテオケの監督等到着するに及びて、彼等も亦會議を開き、グリルを破門したりしが、ため、爾後兩派の間に大なる紛亂を極めたりしが、二三年を經て調和成り、遂に子ストリウスの破門を承認するに至りたりき。

盜賊會議（Robber Council）四四九年テオドシウスに依りて召集せらるゝ之を盜賊會議と稱するは、其黨派的精神に依りて支配せられしこと、議長の壓迫なる態度と軍隊の闖入したりしとに依る。議長は亞歴山の監督ディオスコラスにして、教主的氣質と法外なる名譽心を有せる人也。出席せる監督百三十五人。コンスタンチノープルの會議（四四八）に依りて黜けられたるユウチケスを復し、ユウチケスを黜くるに力を盡したりしコンスタンチノープルの教長フラヴィアンの地位を顛ひ、暴力を以て之に反對する凡ての運動を防止せり。聞くしてユウチケスの告訴人なるドリヽウムの監督ユウセビウスは軍隊のために殺され、羅馬の副監牧師セ。リーは僅に身を以て遁れたり。此暴挙なる會議の決議はカルセドンの會議（四五一）に依りて覆されたり。

エホバ　神の名。『神』（舊約聖書の）の條『神の名』の項を見よ。

エホバ古典　『モーセ六經』の條を見よ。

エホバの僕 The Servant of Jehovah.

【術語】舊約書五十三に『見るべきうるはしき容なく、うつくしき貌なく、我等が慕ふべき艶色なし、彼は侮られて人に棄てられ、悲哀の人にして病患を知れり……彼は我等の病患を負ひ、我等の悲哀を擔へり』と云はれたる人をいふ。然らば預言者

る神の永遠の目的也（三の五、九）而して萬物を神と和がしめんとの目的は、凡ての時代に於て成就の點に向て進みつゝあり。人も亦此目的の中に包含せられ、神の前に聖く從なからんために、世の基を置かざりし先より基督の中に簡ばれ、又基督に由りて神の子と爲らんことを預め定められたり（一の四、五）而して神の此目的は基督に依りて成就せられたり。何となれば『神の充足れる德に悉く形體なして基督に住めるが如く』（四二の九）『教會は彼の身體にして、萬物を以て萬物に滿しむる者の滿てる所なれば也』（一の廿三）基督は又猶太人異邦人を均しく神と和がしめんために、先づ二者をして互に和がしめたり（二の十六、十七）而して彼等をして斯く眞に神と和らぎ凡て神に滿てる者を滿しめんには、先づ基督をして信仰に依りて彼等の心に居らしめ、又彼等をして基督の測る可らざる愛を知らしめざるべからず（三の十七―廿）もし教會及び教會の會員にして『彼等の召されて有つ所の望の一なるが如く、體一、聖一、主一、信仰一、バプテスマ一、神即ち萬人の父一なるを知らば』彼等は其互に誤認し分立したりしことを恥ちて、其共に公同教會に屬する同一體なることを感ずるに至るべし。既に如此一致の精神教會を支配するに至らば、彼等相互の關係に至ても亦變化を生ずべし。即ち彼等は互に設なれば、謊言を棄て各々其隣に眞を言ふに至るべく、又彼等は凡の猥毒、毒惡、怒惡、喧嘩、誘惑又凡ての惡を棄て、互に仁慈と憐憫とを有するに至るべし（四の一―廿二）斯くて信者は最後にノスチック教の禁慾主義に對し、家族の關係は之を棄つるを要せず、基督が人類に與へ給しが如き愛を以て行ふべき者なることを示せり。

【此書の作者】パウルは此書は基督教會が一致の必要を認めの成就したりし時に成りたるものなるに、保羅の時代には猶太派異邦派と氷炭相容れざるが如き有様に在りしと云へば、保羅以後の作ならざるべからずと云ひて、保羅作の説を否みたれ共、初代教會に於て兩派の間に氷炭相容れざるが如き爭ありしと云ふは誇張の説にして、此書の成りたる時代には此爭既に少くも小亞細亞に於ては終極に達したりし也。デ、ヴェットは此書は哥羅西書を敷衍したる者に過ぎざれば僞作ならざる可らずと云ひ、其他にも二書の類似より保羅作説を拒否する者あれ共、此二書は同一の使者に依りて之を送らんがため、同日若くは同週日間に書かれたる者なれば、同一の思想、言語の顧はるゝ者あるは當然の事也。然れ共此二書主眼とする所は相異れり、即ち哥羅西書はノスチック教を攻撃するを主とし、此書は教會の一致を主とせり。此書の確實に關する外部の証論は羅馬のクレメント、イグナシウス、ポリカルプ等此書を引用せり。又第二世紀の聖經に既に此書を保羅の作として包有せり。

【參考書】總論としてはフライデルの『保羅教』ライトフートの『聖書論』ホートの『羅馬書及び以弗所書緒論』ケアイス。ケアン及びユーリッヘルの『新約聖書總論』註釋書としてはマタルソン。エリヤット。アルフォルド。モール（銀橋聖書）マイエル。フリッツシ。ヴェスコット。ヴェイル。ヴェイルを推す。

エペソの大會議（Councils of Ephesus.）

【事蹟】第三の大會議　四三一年（六月廿二日―八月廿一日）テオドシウス二世及びヴァレンチニアヌス二世の召集に依り、エペソ聖メリー教會に開き、歴山の シリルの議長たりしが、後日して百九十八人となれり。彼等はアンテオケの監督等の到着せざるに先ちて、胡頭第一に子ストリウスを破門し、其監督職を褫たりしが、アンテオケの監督等到着するに及びて、彼等も亦會議を開き、グリルを破門したりしが、ため、爾後兩派の間に大なる紛亂を極めたりしが、二三年を經て調和成り、遂に子ストリウスの破門を承認するに至りたりき。

盜賊會議（Robber Council）四四九年テオドシウスに依りて召集せらるゝ之を盜賊會議と稱するは、其黨派的精神に依りて支配せられしこと、議長の壓迫なる態度と軍隊の闖入したりしとに依る。議長は亞歴山の監督ディオスコラスにして、教主的氣質と法外なる名譽心を有せる人也。出席せる監督百三十五人。コンスタンチノープルの會議（四四八）に依りて黜けられたるユウチケスを復し、ユウチケスを黜くるに力を盡したりしコンスタンチノープルの教長フラヴィアンの地位を顛ひ、暴力を以て之に反對する凡ての運動を防止せり。聞くしてユウチケスの告訴人なるドリヽウムの監督ユウセビウスは軍隊のために殺され、羅馬の副監牧師セ。リーは僅に身を以て遁れたり。此暴挙なる會議の決議はカルセドンの會議（四五一）に依りて覆されたり。

エホバ　神の名。『神』（舊約聖書の）の條『神の名』の項を見よ。

エホバ古典　『モーセ六經』の條を見よ。

エホバの僕 The Servant of Jehovah.

【術語】舊約書五十三に『見るべきうるはしき容なく、うつくしき貌なく、我等が慕ふべき艶色なし、彼は侮られて人に棄てられ、悲哀の人にして病患を知れり……彼は我等の病患を負ひ、我等の悲哀を擔へり』と云はれたる人をいふ。然らば預言者

に依りて頗く描かれたる人は誰なりや。基督教會は一般に之を以て救主即ち耶蘇基督を指せる者也と爲せしが、近來批評家の中には之に對して異說を唱ふる者あり。或學者は之を以てユダの王ヘゼキヤ（其條を見よ）となし、或學者はユダの王エホヤキン（其條を見よ）となし、或學者は彼第王クロス（其條を見よ）となし、又他の學者は賽五十三を以て全く神話也となせり。然れ共以上諸種の解說皆困難あり。從來基督教會にて信じ來りしが如く、預言者が將來の救王（卽ち基督）を指きたる者也となすこと最も解し易し。

エホヤキム Jehoiakim. 人名 ユダの王。ヨシヤの長子、エホアハズの兄弟にして其繼承者也。在位十一年間政を行ひ、殺されて驢馬を埋むるが如く埋められ、曳かれてエルサレムの門の外に投棄てられたり（耶廿二の十九）彼れ其初の名をエリアキムと云ふ（王下廿三の廿四）埃及王パロ子コに助けられ、廿五歲にして位に卽き、埃及に朝貢す。四年の後巴比倫王子ブカデ子ザルの爲めに敗られて巴比倫に朝貢す。三年の後之に背きしが、謀成らず、捕へられて獄に繫がる。後殺されて巴比倫の附庸となりユダを治む。預言者カリヤを殺したるは彼也（耶廿六の廿三）エレミヤの預言の卷物を切り割きて爐火に投じたりしも彼也（耶六の廿三）彼の事蹟の概略は王下廿三の廿四—廿四の六及び代下廿六の四—八に記されて共、或る細密の事柄は耶廿二（十三—十九）、廿六章に記さる。

エホヤキン Jehoiachin. 人名 ユダの王。エホヤキムの子にして其繼承者（王下廿四の八—十六）其在位僅に三月と十日。巴比倫王子ブカデ子ザル、エルサレムを陷れ、一萬の俘虜と共に彼を捕にして巴比倫に携へ往けり。獄に在る、こと三十七年、エビルメルダク其治世の元年彼を獄より出し、巴比倫に在る王等の上に置き、其死ぬる日迄巴比倫王の前に食せしめたり（耶五十二の廿一—廿四）。

エホヤダ Jehoiada. 人名 ユダヤの祭司にして、ヨアシの叔母エホシバの夫也（王下十一の一—十二の一）ヨアシを助けてユダの王位に卽かしめ、アタリヤを殺し、王を補佐して大功あり。彼は『イスラエルの中に於て神と其殿とに向ひて善事を行ひたれば、人衆ダビデの邑にて王等の中間に之を葬れり』と其死せる時百三十歲（代下廿四の十五、十六）。

エホラム 人名 又はヨラム Jehoram or Joram. ユダ及びイスラエル二王の名。（一）ユダの王。ヨシヤパテの長子にして其繼承者也。廿二歲にして位に卽き在位八年（前八九二—八八五）アハブの女アタリアを娶り、其惡感化を蒙りて己に優れる兄弟等を殺し、凡てエホバの目に惡き見ゆることを爲せり。於是エドム人及びリブナ相續てユダに背き自立せり。預言者エリヤ書を贈りて之を警告せしが聞かず。ペリシテ人及びアラビヤ人心を併せて來り攻め、王の家に在る貨財を奪ひ、其妻子を擒にして去れり。彼も亦腸腑の病を得、二年の間苦みて後死しかども、之を惜む者尠りき（王上廿二の五十、王下八の十六—廿四、代下廿一の八—廿）（二）イスラエル王。アハブの子也、故にユダ王エホラムの義兄弟に當る。其事蹟は王下一の十七、三の四—廿七、六廿四に記さる。彼は積極的に惡しき人也と云はんよりも、寧ろ柔弱の人なりしといふべし。熱れ共其家の遺法に從ひてバアルを崇拜せり。ユダの王ヨシヤパテと交を結び、共にモアブを攻めて之に克てり。其スリヤとの戰に於ては預言者エリシヤ彼の顧問となり、敵の謀を預言したりき。後ハザエル、ダマスコにてイスラエルに敗きしが、エホラム、ユダの王アハジヤの援を得、ギレアデのラモテを於是其傷を療さんとてエズレルに歸りしが、エヒウ、エリシヤの言に從ひ、彼に敗きてエズレルに往き、彼に逢ひ弓なひきしぼりて其肩の間を射たれば、其矢彼の心を射拔けり。エヒウ其時ビデカルに命じ、彼の屍を取りてエズレル人ナボテの地に投げ棄てしむ。エホラムはナムリ朝最後の王也。

エマヲ Emmaus. 地名 路廿四の十三に記さる。エルサレムより三里ばかり隔りたる地にして、復活の耶蘇此途にて二人の弟子に顯はれたりしとあり。然れ共其場所詳ならず。ガラヤ湖四岸のエマオも、ヨッパの東の丘上に在るエマオニコポリスも聖書には此名を以て稱せられたること無し。

エムベリー Emlbury, Philip 人名 ヒリップ 一七二九—七五 米國最初のメソヂスト說教者。愛蘭に生る。大工を業とし傍ら說教せり。一七六〇年米國に往き新組育に移住す。一七六六年バルコラ、ヘックの勸に依り、自宅にて說教を初めしが、翌年有名なる『リッキング、ロフト』に集會を開けり。翌年今のウヨン、ストリート教會の在る場所に最初のメソヂスト教會を建てしが、彼は大工として工事を助けたり。後カメデンに移り、大工兼說教者として働きたりき。

エムペドクレース Empedocles. 人名 前五世紀頃の希臘哲學者。シ、リー島のアクラガスに生る。萬物は地水火風四元素の聯合に依りて成る、之を動す者は愛憎の二勸力也と說けり。父メトーン

時の攝政家を排して民主政治を興すに與りて力あり、エムペドクレースも亦大に民主黨の爲めに盡せり。彼は又宗教家、醫家として大に時人に尊信せられたり。其說きし者は、思ふに輪廻轉生、未來賞罰說の如き者なりしなるべし。

エムモンス ナサニエル Emmons, Nathaniel 人名 一七四五—一八四〇 米國の牧師、神學者。エール大學に學び、後神學をウヨン、スモクレーに學ぶ。スモクレーはベラミーの弟子にして、ベラミーはウヨナサン、エドワルヅの弟子也。故にエムモンスも亦エドワルヅ派に屬し、ウブキンの說を敷衍せり。

エメルソン ラルフ ワルド、Emerson, Ralph Waldo 人名 一八〇三—八二 米國の詩人、哲學者。ボストンに生る。一八二九年ボストン市ユニテリアン第二教會の副牧師、後牧師に擧げられたりしが、一八三三年之を辭す。翌年歐羅巴に遊び、ランドル。ゴルリッヂ。カオルヂウォルス及びカライルと相知るに至れり。殘にカライルとの親交は長く繼續し、互に其國人に其著書を紹介したりしが、兩者の哲學的意見は全く相一致するに至らざりき。米國に歸りて後彼はコンコルドを以て其永住の地となせり。一八三六年彼は其處女作『自然』論を公にせり。又彼と意見を同ふせる人々彼の家に集會したりしが、彼等は『超絕派』(Transcendental School) の名を得たり。此超絕派は獨斷的倫理說に反動して起りたる者にして、スピノザ。ジュライエルマッヘル及び同時代の獨逸哲學者の影響を受け、經驗主義及び倫理主義を排し、直觀的、歷史的事實を以て宗教に必要ならずとなし、直觀的、超感性的要素を重視せり。其他のユニテリアン派と異るは直覺を重視するに在り。今總てを著しく凡神的傾向を有せり。

エメルソン

エメルソンは一八三七年フイ、ベタ、カッパ會に於て『米國の學者』と題する演說をなし、翌年又ハーバルド大學の神學生に向て演說をなし、名聲是より大に振ふ。彼の論文集の初卷は一八四一年に、第二卷は一八四四年に公にせらる。此間又彼は『ダイアル』(Dial) と題する新英州超絕派の機關雜誌を發行せり。其詩集は一八四七年世に出づ。此年彼は又英國に遊ぶ。其結果として『英人の特性』(English Traits) 一八五六）出づ。是れより先き彼は又『代表的人物』を著せり。南北戰爭の後『May day』と題する詩を公にし（一八六七）次で『Society and Solitude』と題する論文（一八七〇）『Parnassus』と題する詩集（一八七五）最後に『Letters and Social Aims』と題する論文集（一八七六）を公にせり。彼は熱心なる個人主義の主張者にして、國家の政治的制度にまれ、有名なる宗教家、學者の言論にまれ、苟くも個人主義の發達に利ならざる者は、之を以て墨也と思惟したり。彼はカライルと同じく凡神論者にして、其樂天主義は凡神論の結果也。彼の哲學上に貢獻したる一事は、形體法と道德法とを同一視したりしに在り。彼はプラトーンと同じく、自然の現象を以て、理想的眞理の淡影也と爲せり。彼の文體は頗る解し難し、是れ一は譫言體なると、又一は常用の言語を用ゐざるに在り。又其詩も音律の調和に無頓着なる者多しと雖も、中には形式よりするも最も完全なる者あり。其內容よりすれば米國第一流の詩人也と云はざる可らず。

エラスチアニズム Erastianism. 學說名 教會に於る國家主權說。トマス、エラスタス (Thomas Erastus 一五二四—八三 瑞西バデンに生る。神學、哲學、醫學を學び、ハイデルベルグ、後バセルの醫學教授たり。ツヴィングリーの弟子にして、聖製及び教會政治に關し、熱心に師の說を主張しカルヴィン派と戰へり。窟にユニテリアン說を奉ぜりとの理由を以て破門せられぬ）其著書に於て、破門は神の命令也とのこと、教會は法律を作り、刑罰を與ふる權利ありとのこと、及び基督信徒の罪は國家の官吏に依りて罰せらるべき者に非ずして、牧師、長老に依りて罰せらるべき者也とのことを拒否したるより、教會に於る國家の主權を主張せる說をエラスチアニズムと稱す。然れ共廣き意義に於て此說はエラスタスより起りたる者に非ず。

エラスムス デシデリウス Erasmus, Desiderius. 人名 一四六五—一五一六 第十六世紀の最大文學者。和蘭のロッテルダムに生る。アグエンテル及びヘルツォゲンブッシの學校に學び、一四八六年親戚のために强ゐられて寺院に入れられ、之がため種々なる苦惱を嘗めたりしが、一四九一年カムブレーの監督のために救はれて寺院を出づるの自由を得、巴理大學に送られぬ。一四九七年英國に赴き留る、こと一年半、牛津の神學者コルト

に遊び其感化を受く。次の六年間は佛、蘭二國に在り、續て伊太利に往き、一五一〇年まで其處に留り、それより再び英國に往き、劍橋大學希臘語の教授となりて五年を送り、又六年を和蘭に送りたる後、一五二一年瑞西のバセルに移り、死する迄凡そ十五年間其處に住居せり。彼は當時教會にて高僧の職を授けんとしたれ共辭して受けず、獨、英、蘭諸國に於ける文學的運動の先驅として非常の勢力を有し、當時世界著名の學者と交り、學問世界の王者たるが如き者ありき。彼は實に古文學研究の爲めに盡し、又宗教改革のために盡したること甚だ少からず。即ち彼は一方に於て神學研究に關するスコ。學的方法の缺點を無遠慮に暴露し、他方に於て當時の僧侶の無學と不品行とを忌憚なく攻擊せり。又彼は當時多くの文學者の抱きたる異教的精神を好まず、カルヒ、ホン、ハッテンの取りたる改革的方法を排斥したりき。然れ共彼はヘラヂウス説の傾向を有したりしがため、耶蘇の眞性質を領解すること能はず。彼は教會の改革を希望したり しかども、改革家的熱情、克己的愛心、世に勝つの信仰及び殉教者的勇氣を缺きたりき。從て彼は文學者的生活を喜び、神の力に依りてよりも、人文の力に依りて教會を改革せんとしたりき。故に彼はルーテルの改革運動が漸く爭論を起き起らんとするや、ルーテルを以て智慧と温和とを缺ける者也となし、且自ら『我は殉教者たるに足らざる者也』と云ひて、次第にルーテルに反對し、法王に服從することを願はしたりしが、遂に異端の嫌疑を蒙り、教會の禮典に與ることを得ずして死せり。彼の最も重大なる事業は新約全書に於る批評的、註釋的論文、及び希臘語新約全書の出版也。此新約全書の原文には附するに拉丁語の譯、註釋及び緒言を以てし、大改革の起りし前年即ち一五一六年其第一版を出版せり。此外彼は又教父の著書を出版し、且スコラ的神學、僧侶の腐敗及び普通一般の迷信を嘲弄非難せる論文を公にし、改革のため盡したる効少からず。

エラスムス（一五二六ドレレル畫）

エラテ 又はエロト Elath or Eloth.

【地名】 アカバの灣頭エドムの極南端に在る海港。申二の八にエヂオンゲベルと共に以色列人の止まりし處として記さる。エラテ、エロト、エヨムは蓋し皆同一の場所を云へるものにして、以色列人が紅海を渡りし後停止せし第二の所なるべし。又創十四の六にあるエルパラン、三十六の四十一にあるエラ、代上四の十五に記さるゝイルエラも亦同所なるべし。エドムがダビデの爲めに略せらるゝや此地以色列人の有に歸す（毎後八の十四）ソロモン王の時には海軍の重要なる根據地となれり（王上九の廿六）以色列王國の分裂するやエドムは依然ダビデ家の臣下たりしが、ヨシャパテの子ヨラムの時に至りて獨立せしが（王下八の廿）アマジアとウヤ相次ぎてエドムを攻むるに當りて再びユダの領地となり（王下十四の廿二）ペカ王とレヂンと相合してアハズを攻めし時、此地は又ユダの軛絆を脱したりしが、スリヤに屬せしやエドムに屬せしや明かならず。是れ前七三四年の事にして、今のアカバ是也。

選 エレビ Election. (*Ἐκλογή*)

【術語】 舊約に在りては、主として神が諸國民の中より以色列人を己の民として選び給へることを（申四の廿七、七の七等）及びエルサレムを禮拝の中心として選び給へることに用ゐ（十二の五等）又神が或る個人を重要の職に選び給へることを、例へアロン及び其家族を神殿に奉仕するために選び給へることを、王、祭に『ダビデを選び給へる』ことなどに用ゆ。新約に在りては、一回舊約選民の意義に用ゐられたれ共（徒十三の十七）多くは教會を全體として、若くは其一員として、又時としては或る特殊の職務を行ふ者として（十二使徒、使徒保羅の如し）此語を使用せり。耶蘇も亦『選ばれたる』者として二回記さる（路九の廿五、廿三の廿五、約一の廿四）神は如何なる理由に基きて或る國民又は或る人々を選み給ふやに就ては、聖書に明文を見ずと雖も、人間の方面に選ばるゝ價値あるより寧ろ神の愛、信實及び憐憫に基く者なることは申七の八、九の五、羅九の十六、十一の廿九に指示せらる。又神の或る國民又は或る人々を選び給ふ目的如何といふに、一方に在りては神に對して特殊の關係を有せしめ、他方に在りては神及び人類に對して特殊の責任を負ひ、彼等に依りて神の眞理を明にし以て世を救はんとするに在り。此思想舊約に在りては『エホバの僕』の觀念に最も著しく顯はる（賽四十以下）新約に在ては、前者に就ては『神は萬世の前に彼者を選びて信仰に富ませ、己を愛する者に約束し給ひし所の國を嗣ぐべき者とならしめ給ふ』と云ひ（雅二の五、弗一の四參照）後者に就ては『聖靈なして召して幽暗より出し其奥光に入り給ひし者、己の德を顯はさしめんために聖靈を此の如き者となし給へる也』と云へり（彼前二の九、約十五、弗一の四—十四參照）換言すれば教會又は基督教徒の目的は、單に一個人の救を得んとするのみに非ず、又之に依て世界を教化せんとするに在る也。神が賜くして選び給へる者は、果して悉く其目的を達し得べき者なりや。此等の一切に就ては『恩寵』『預定』等の條を參照すべし。

エラム Elam.

【地名】 チグリス河の對岸巴比倫の東に在る地方にして、北はアッスリヤ、メデヤに接し、東はメデヤ及び彼斯に隣し、南は彼斯灣に臨む。創十の廿二によれば、此地方はシェムの子孫の住せし處にして、其子エラムより此名出でたり。希伯來人は此地をエラムと云ひ、アッスリヤ人の碑銘にはイラムチと云へり。シェムの子孫の此地に來りし時は、既に他の住民ありて之に混ぜしものゝ如し。是れエラムの碑銘がセミチック語にあらずして、アルタイヤレニアン系に屬すれば也。アッスリヤ人に敗られ、センナケリブの軍に從て猶太を攻む（賽廿二の六）後再び獨立す。エレミヤは之を神怒を蒙るべき國民也と云ひたりしが（耶四十九の卅四—卅九）果してネブカドネザル王の爲めに亡されたり。巴比倫滅亡の後彼斯人の爲めに併呑せられ、後シロ、マケドニヤに併せられ、終に彼斯帝國に亡ぼさる。近世解釋されたるアッスリヤのアッサル、バニパル（前六六八—六二六）の記錄は聖書の記事の正確なることを證す。

エリ Eli.

【人名】 猶太最初の祭司長アロンの第四子イタモルの苗裔にして、祭司長たり。アビアタルの子アヒメレクはイタモルの子孫（代上廿四の三）にして、アビアタルはエリの正統の子孫なれば（王上二の廿七、母前二の廿一、廿五參考）エリも亦イタモルの子孫也。其子ホフニとピネハス素行惡まらず、エリ爲めに心を痛む。之が爲めに其家亦廢絶す（撒前三の十三、十四）以色列を治めしこと四十年、良色列の軍敗ると聞き、驚き悲しみて倒れ頸を折て死す、年九十八（母前四の十五）。

エリ エリ ラマ サバクタニ Eli, Eli, Lama Sabachthani.

【雜語】 耶蘇十字架上にて呼びたる語にして『我神、我神、何故我を棄て給ふや』の意（太廿七の四十六、可十五の卅四）。希伯來語とアラメイック語とを混合せり。

エリオット ジョルジ Eliot, George.

【人名】 一八一九—八〇 英國の女小説家。メリー、アン又はマリアン、エヴァンスの假名。一八四六年ストラウスの『耶蘇傳』を英譯して好評あり。後獨逸に遊び、歸りて後『クエストミンステル評論』の主筆となる（一八五一—三）此頃又フォイエルバハの『基督教眞髓』を英譯せり。女史はヘルベルト、スペンセルの紹介に依り、ウォルター、ヘンリー、ルウイスと相知りしが、遂に之と婚し（一八五四）相携へて獨逸に遊びぬ。於是ルウイスは『ゲーテ傳』を起稿し、妻はスピノザの倫理書を飜譯して其生を支へたりしが、ルウイスは其妻の劇詩家的才能あるを認め、之を勸めて脚本を作らしめんとせり。エヴァンスは夫に勸められ、獨逸より歸りて後一篇の小説を著しぬ。『Scenes of Clerical Life』是也。夫妻は再び獨逸に遊びしが、エヴァンスは第二の小説に着筆し、歸

トッオリエ ウルロウ

國後發稿し"Adam Bede"と題して出版せしに、讀者の喝采は前者に過ぎぬ。一八六〇年"The Mill on the Floss"出でゝエリオットの名聲全く定まり、英國空前の女作家として喧々稱揚せられたりき。引き續きて尙種々の作あり。一八七八年ルウイス歿しぬ。二年を經てゲョン、クロッスに再婚せしが、同年十二月歿しぬ。女史は自由を尊重せしと共に、敬虔の念深く、又剛毅なる氣象と慈悲深き情とを兼備せりき。

エリオット ジョン Eliot, John. 人名 一六〇四—九〇 亞米利加印度人の使徒。英國ハルトフォルドシアのウイッドフォルドに生る。亞米利加印度人なる此遊牧の民を一大基督教會に組織せんとの志を抱き、マッサチューセッツ州ボストン附近のロックスベリーに『新る印度人』の都邑を建て、基督教を銅色人に宣傳することに於て大に成功せり。彼は聖書を土語に飜譯し、又教會問答なも土語にて著せり。

エリコ Jericho. 地名 ヨルダン河の西五哩、死海の北六七哩、ヨルダンの谿谷中に在り。往昔以色列國民がヨルダンを渉り迦南の地に入らんとせし時、初めて妨害を蒙りし邑にして、當時國王此處に住居し、城壁堅固にして商賈又繁昌せり（書二の三、六の二）。ヨシュア攻めて之を陷れ、ベニヤミン族の所領と爲す（十八の廿一）氣候暖く土地肥沃『棕櫚の邑』と稱せられ（申卅四の三等）麻、薔薇、桑、葡萄等の產出を以て名あり。此邑の舊約に記さるゝ者六十三、新約に記さるゝ者七。耶蘇傳道の終りがリラヤよりエルサレムに往かんとて此地を過りて盲者を愈し（可十の四十六）又ザーカイに會せり（路十九の一以下）。善きサマリヤ人の喩話中の旅人が盜賊に

エリコ道（善きサマリヤ人亭）

遭ひしもエルサレムより此邑に下る途中なりき（十の卅）此邑の羅馬に歸するや、アントニー城壁を築き、且宮殿を建てゝ冬の離宮となせり。後ヘロデスの營繕なる破壞せり。後十字軍に依りて再建せられしも也とも云ひ、或は英國の人也とも云ひ、又蘇國の生れ也とも云ふ。八四三年巴理に往きシャール王に仕へ、宮廷の學校の教授たりき。彼れ初めてスコラ哲學の精神とも云ふべき語、即ち『眞正の宗教は眞正の哲學也、眞正の哲學は眞正の宗教也』そのことを唱へ、理性と教會の教義との一致を示さんと企てたりき。故に彼の論証は一方に於ては教會の教義を標準とし、他方に於ては理性を模範とせし。實際に於ては寧ろ道理を獨立なる者として之に從へる傾向あり。道理と信仰とを調和せんとする時には、常に重な道理に置き、之に合はさんがためには、教會の教ふる所を替唯として解することをも躊躇せざりき。彼は神を以て絕對的原因となし、凡ての實在は彼の中に在り、彼の外に實在する者なし、萬物の存在するは、神がそれに於て現ばるゝがため也、故に森羅萬象に神の顯現と云ふも可也と云ひ、ロゴスを以て能造化なる神が所造化なる萬物の間に位する形體以上の理想にして、神の顯現の最高なる者、即ち至善也となし、又萬物は神に歸入し和合するを以て其終極の目的となすと云ひて、造化せられたる萬物が神に復歸して、彼に一致和合する狀態を說けり。而して彼は又實在を以て哲善なる者也となし、惡を以て消極的にして實有の體を備へざる者也となせるが故に、智人の即惡を以て意志の方向の誤れる者、即ち眞實存在せざる者を眞實存在するが如く誤想し、そを善なる者として意志することも之なし、其失敗するは必然の結果として受くべき刑罰也と論ぜり。

斯くの如くエリゲーナの思想は一見して如何に新プラトーン學派風の思想に影響せられたるかを認め得べし。從ひて後に教會が彼の說を排斥して正說ならずとしたるも怪むに足らず。善し當時に在ては哲學

エリゲーナ スコッス Erigena, Scotus 人名 煩瑣哲學者の先驅。八〇〇年乃至八一五年に生れ、八七七年には尙生存せりき。愛爾の産

は尙一般に怯しげなる者とせられし趣ありしのみならず、エリゲーナの思想は教會の方面より云へば餘りに獨立なるに過ぎたれば也。

エリザベツ Elizabeth. 英國女王。『英國』の條を見よ。

エリザベツ 聖 Elizabeth, St. 人名 一二〇七—三一 匈牙利王アンドレアス二世の女、プレッスブルグに生る。ツウリンギア侯ルウイス四世と婚し、ツウリンギアのエリザベツと稱せらる。其一身を宗教及び慈善の事業に委せしが、一二二七年ルウイス死するに及び、其義兄弟ヘンリー、ラスプのために迫害せられ、叔父なるバムベルグの監督の許に逃れ、マルベルグに退きて其處に死しぬ。彼は當時新に起りたるフランシスカン派及びドミニカン派の運動に加擔したりき。

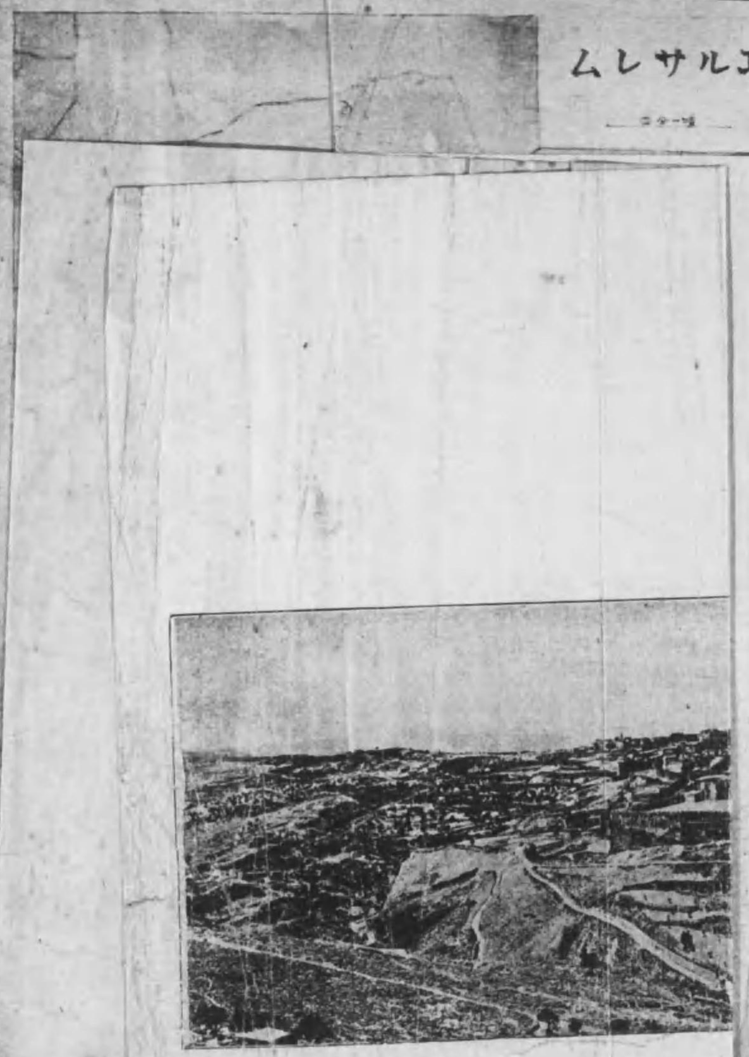
エリシャ Elisha. 人名 沿伯來の預言者にして、エリヤの後繼者也。其師ぜる時にエリヤ之れに己れの外套をかけて預言者の職を授けたり（王上十九の十九—廿一）彼其の勵翠を棄てゝ之に從ひ、忠信にして卓越なる弟子となれり。其預言者としての活動は正さに四王の治世に及びて約半世期間に渉る（前八九〇—八四〇）既にエリヤによりて宗教上の改革は爲されたれば、エリシャは其後を承けて之を成就すべき位置に立ちたりしが、彼の性格奇龍く之に適したり。即ちエリヤは嚴格、靜寂、孤獨なりしに反し、エリシャは慈悲柔和にして社交家庭の人也。エリシヤはエリコ及ヨルダンの附近に屢々來り、又ギレアデ、ベテル等にも往來したり。又サマリアに住せしことあり。彼は貧民の友となりて、常に家庭の團樂に至るまで能く意を注ぎたり。曾て驢を以て悪水を清め（王下二の十九—廿二）又預言者の子等の爲に其羹の毒を去りしことあり（四の卅八—四十一）又貧債の爲めに苦める寡婦を救ひ（四の一—七）水に溺れんとせし牛を小童の爲めに救ひ上げ（六の一—七）僅のパンを飢ゑる百人を養ひ（四の四十二—四十四）シュナミ人の爲めに小兒を與へ（四の八—十七）其小兒の死するやこれを蘇生せしめ（八の一—六）其名聲スリヤに擴れり。ナーマンは其指示に依りてヨルダン河に身を清めて其癩疾を去りたりき（五章）彼の驚行は其私生涯に現れしのみならず、又公生涯にも現れたりき。即ちヨラムは其國歩艱難の時に彼に國事を謀りたり（三の十一）彼がスリヤ人の來て預言せしことは適中して、スリヤ王をしてあらざりしかと疑はしむるに至れり（六の十一）又敵が彼を捕へんとするや、彼はエホバの力に依りて彼等の眼を眩ましこれを捕へ、サマリヤに誘ひ（六の十三—十九）又ハザエルの王位に即くことゝ、以色列人に復讐を爲すべきことを預言したり（八の七—十五）彼は常に國民を思ふて止まざりければ、王は彼の將に死せんとするを聞くや、痛く悲みて彼を我父と云ひ兵車と云ひ騎兵と云ひて彼を賞讃したり。其崇高なる智識に於てはエリヤは及ばざりしが、靜の思識は豐に彼の上に在りたりき。

エリム Elim. 地名 以色列人が紅海を渡りし後に止まりし第二の塩所也（出十五の廿七、民卅三の九）此に十二の泉と七十本の棕櫚ありしが、留來少しの變化起らざりし如し。蓋しリッデ、ガランデルは之れと同一ならん。或は尙南に偏してリッデ、ウセテ又はメイトベと同一カりと云ふ者あり。

エリヤ Elijah. 人名 イスラエル北王國に屬する大預言者にして、紀伯來史上偉大なる人物の一人也。其事蹟は王上十七、十八、十九、廿一の四章同下の初の二章及び代下廿一の十二—十五に記さる。ダニエルの如く、又十二小預言者の多數の如く其家系明ならず。彼は其事蹟中六たび『テシベ人』と記さるれども『ギレアデ』の住人（王上十七の一）たる事明なれば、上ガリラヤのテシベに非るべし。七十人譯に『ギレアデのテシベより』とあり、ヨセファスの歷史には『ギレアデの市なるテスボナの人』と記さる。兎に角此の廣濶にして豐饒なるギレアデの地方に於て此大預言者は生れたり。十四世紀頃のパレスチナ旅行家にして博學なる猶太人パーチはアディ、マレに在るエル、ルスチブを以てエリヤの生誕地なりと爲せしが、後一八七六年亞米利加パレスチナ探檢協會のセラ、メリル博士も亦之れに同意したり。博士バンダイクは之を以てテシベの亞剌比亞語なりとす。此地はガリラヤ湖の南方二十二哩、ヨルダン河の東約十哩、古代ペラの南東約六哩の處に在り。ケリテ川は其遺蹟不明なれども恐くは此地方に在りしものならん。

此預言者の始さは明ならず。列王紀の記事に依れば、其上天はイスラエル王アハブヤ（前八九七—八九六）の治世に在りしもの3如し、代下廿一の十二に在るエリヤの書簡はユダヤ王ヨラム（前八九二—八八五）に寄せたるものとすれば、エリヤは其師エリヤの上天前に其職を始めしものと見さる可らず、兎に角エリヤの公職はアハブヤ王を戒飭せし事を以て終さす。其使業は實にアハブ王の偶像禮拜に反抗したるに在り。

其傳記の劇曲的なるは出埃及記に至ぐ。イスラエル十九代の中第七世の王なるアハブは由來薄志弱行の人、フェニキヤ人セベルを娶りて起さなし、當來



勢心に偶像教を信じ、祖先傳來の其宗教は全く地に塗れんとするに至れり。此に於てかエリヤは身に羊皮を纏ひ、腰に革帶を束ね、短衣蓬髪エホバの預言者と稱してヨルダンの對岸より現れ、アハブ王若し悔改めてエホバに歸らずば全國雨も露も之を沾す無けんと絶叫したり。危險の身に及ぶを恐れてギレアデの荒野に退き、烏の爲めに養はれ、又フェニキヤのセレパテに遁れて一寡婦の許に養はれ、其家族と共に奇蹟的生活を爲し、其寡婦の子を復生せしめたり。後三年を經て旱魃と饑饉極度に達するや、再びアハブ王に面して天より火を降しカルメルの祭壇を焼き、バアルの預言者四百五十人を殺せり。雨み霰りてアハブ王の前を去り、ゼズリールの入口に赴りしが、セゼベルの怒烈しきを以て又逃れてビエルシエバの荒野に行けり。彼は失望の極死を決するに至りしが、シナイに赴きて神の幻象に接して信仰と勇氣とを恢復するに至れり。後六年を經て又アハブとセゼベルに面會し、ナボテを殺せし罪を責む。エリヤがアハヤと最後の會見を爲せしは是より後三年若くは四年のことなり。エリヤの生涯は此の如くイスラエル王國が滅亡に導きし偶像禮拜に反抗したる苦心慘憺の歴史なり。其傳記に奇蹟的行爲の多きは怪むに足らず。是れモーセと同じく眞宗教の危機に際して活動したる者なれば、自ら此の知くなりしなり。彼は希臘教會に於ても亦羅馬教會に於ても七月廿一日を以て聖徒として祭らる。

エリヤの默示錄 The Apocalypse of Elias. 書名 舊約經外默示錄中の一書。ヨリゲン、エピファニウス及びエローム之に言及せり。此書の斷片アキミムより携へ來れるコプチック教徒の寫本中に在り。元來猶太的默示錄なりしを、後基督教の

作者に依りて改變せられたりと推測せらる。

エルウード トマス Ellwood, Thomas 人名 一六三九—一七一三 英國のクエーカル教徒。フォックスと共に英國の大部分を旅行せり。又ミルトンの友にして、『失樂園』の思想を初めて彼に暗指したり。

エルヴェシウス Helvetius. 人名 一七一五—七一 佛國の哲學者。『アンシクロペディスト』の一人。彼の思想は宗教上にては自然神教に傾き、神の深奥なる性は吾人の知り得べからざる處也と云ひ、認識論上にては感覺論を取り、倫理學上にては主我的快樂說を取り、以爲らく、吾人の精神は本來唯感覺を感ずる力、及び自愛の性のみを具有する者也、自愛の性とは、自己の快樂を求むる心の謂にして、此心實に是れ吾人一切の動機を左右する唯一の動力也、德行も不德行も苦痛を避け快樂を得んとの動力より出で來る者にして、正義と云ひ、仁愛といふも畢竟利益の觀念の上に建てられたる者に外ならずと。一七五八年巴理の大監督、羅馬法王及び巴理府の議會は彼の著書を禁制せしを以て、彼は一時外國に遁れ、フリードリヒ大王の朝廷に往きて其處に滯留せしことあり。彼は天性慈悲心深く、公共事業のために其財産及び所得を擲ちたりき。

エルケサイト Elkesaites. 宗派名 猶太人基督教會內の一派、其教理ノスチック派に近し。名稱の由來詳ならず、或はガリラヤのエルケシと稱する村落より來れりと云ひ、或は希伯來語背教者の意より來れりと云ひ、或はエルケサイと稱する創立者の名より來れりと云ひ、或は『稀くれたる力』の義より來れりと云ひ、或は書物の名より來れりと云ふ。兎に角彼等は天より來れりと稱する一書を有す。此書には猶太教と基督教とを混合せる自然教の思想を有し、星占學及び魔術を推許せり。彼等は舊約全書の法律を以て尙盛衰也が なしたれ共、儀式を排斥し、洗禮を以て罪を洗ふの力ありとなし、罪々之を反復せり。基督に關しては ノスチック派と同一の意見を有せり。トラヤヌスの時代に起り、死海の濱に住したりき。

エルサレム Jerusalem. 地名 エルサレムの名は初めて舊約約書(ヨシュア)記(十の一、十五の六十三)に見ゆ。此名の意義に關しては古來諸博の說ありしが、近時の發見に依れば、以色列人がパレスチナを征服せし以前既に此名の存在したりしこと、此名は『サレムの邑』即ち『平和の邑』の意義なることの明なるに至れり。而して初めは單にサレムと呼ばれたりしが如しと雖も、ヨシュアの時代には既にエルサレムと呼ばれたりし事疑なし。又此邑はエブスとも呼ばれたりしが如し(書十八の廿八、士十九の十)現今猶太人及び土着基督教徒は一般にエルサレムなる舊名を用ゆ。

【略史】 猶太の傳說に從へば、アブラハムの時代にエルサレムは既に一箇の都邑なりしが如し(創十四の十八)希伯來人の迦南を征服せし頃は、迦南王の首府にして(書十の五)エブス人此處に住りたりき。テル、エル、アマルナ碑に記されたる、エルサレムの王より埃及王アメノフィス四世に贈りたる書翰(前一四〇〇年頃)に依れば、其頃埃及人は城壁を築き、守兵を置きて此地に住したりしが如し。然れ共後パレスチナ及び西利亞の埃及に背くに及び、其守兵撤退せられたるが如く、以色列人がヨシュア指導の下に迦南を征服したる頃は迦南王の首都なりしこと疑なし。ダビデ以色列國王となるに及び、エブス人

橄欖山より見たる今のエルサレム

エルサレム

より之を奪ひて其首都となし、之れより以色列の國勢殷々として進歩せり。ダビデが住したりし『要害』（毋後五の六）は思ふに東方の丘上、現今『聖女の泉』と稱する泉の上に在りたりしなるべし。ダビデ及びソロモン治世の間、城壁、宮殿、堂塔等飾築せられ、大に其面目を一新し、ソロモンの神殿モリアに新築せらるゝに及びて結構其極に達したりき。然れ共此等の遺址は神殿の庭地を圍める石垣の一部分の外今日殘存せるものの一も之れあるなし。ソロモンの死後王國の二分するや、エルサレムは自然舊時の地位を保つこと能はざりしと雖も、其子ブカドチッザルの爲めに滅ぼさるゝ迄は尙其繁榮を維持したりき。ソロモンの死後此時に至る迄凡そ四百年、此間エルサレムは少くとも五回敵のために圍まれ、其圍まるゝ毎に多少の損害を蒙りたりしが、其間の辭くるに及びては之が修復改善を施したりしを以て尙舊時の偉觀を保存したりしと雖も、前五八八年遂に全く巴比倫のために滅され、其住民は巴比倫の俘囚となりたりき。斯くて七十年間エルサレムは荒廢に委したりしが、猶太人の巴比倫より歸り來るや又之を再興せり。即ちゼルバベル王は神殿をソロモン神殿の左りし地に再建し、猶太教の禮拜を再興せり（前五一六）後六年エズラ起り、後更にネヘミヤ顧はれ、共にエルサレム回復の業を繼續し、ネヘミヤは城壁を築き、巨大なる石垣を以てエルサレムを圍めり。爾後凡そ一百年間エルサレムは漸次發達して、舊時の繁榮に復しつゝありしが、前三三二年歷山大王のために攻められ、住民は城門を開きて降服し、辛ふじて其殘壞を免れたりき。歷山の死後エルサレムは四利亞及びパレスチナの全地と共に埃及王トレミーの所領に歸し、凡そ百六十年間平安に經過したる後、前一七〇年及び一六八年の二回四利亞王アンチオカス、エピファネスのために攻められ、遂に其手に落ちたり。ユダヤ、マッカビウス四利亞の壓制に抗して起り、前一六四年遂に四利亞軍を敗りエルサレムを回復したり。然るにマッカビウス朝、內に相鬩ぎしを以て羅馬人の干涉を蒙り、エルサレムは前六四年又ポムペーのために陷らる。此役猶太人の死する者一萬二千人に及びしと云ふ。後廿五年を經てエルサレムは又パルウアン人のために奪はれたりしが、後三年を經てヘロデ大王羅馬軍の援を得て之を圍み、遂に之を其手に收めたり。ヘロデは其性多慾暴戾なりしが、美術及び建築の保護者にして、其治世中パレスチナ及びエルサレムを飾るに無數の結構輪奐たる建物を以てし、以て物質的繁榮の新紀元を開けり。彼は壯大美麗なる神殿を建て、其數地の北端に强大壯麗なる城廓を築き之を『アントニアの城』と名けたり。彼は又エルサレムの周圍に巨大なる石垣を築きたりき。是れ所謂第二の石垣なるもの也。後アグリッパ一世に至り（三九）又更に巨大なる石垣を築く、第三の石垣是也。而して此壯麗なるエルサレムは遂に記元七〇年に至り羅馬帝ティタスの爲めに全く滅され、羅馬帝ハドリアン猶太人を市內より放逐して之を羅馬後六十年間荒廢の狀態に在り。一三〇年に至り羅馬帝ハドリアン猶太人を市內より放逐して之を羅馬市となし、其名をAelia (Capitolina)と改めたり。後數年を經てシモン、バルコクバ（『星の子』の義）と稱する猶太人羅馬に反して起り、エルサレム及びパレスチナを回復せんとせしが事成らず。是よりエルサレムは久しく沈頹して又圍ゆるものあらざりしが、コンスタンチン大帝に至り、稍や世人の注目する處となるに至れり。ユリアン帝の時猶太人を奬勵してエルサレムに歸らしめんとしたりしが、彼等は最早其宗教的熱心と國民的精神とを失ひしを以て、帝の奬勵も其効を奏せず、爾後今日に至るまでエルサレムの歷史は事實に於て猶太人と關係絕りしといふも可也。

四五一年カルケドンの會議に於て、エルサレムを以て教長の駐在地となしたりしが、是よりエルサレムは基督教國の宗教的感情の中心となり、各地より聖墓教會（The Church of the Holy Sepulchre）に參詣する者出で來り年々其數を增加するに至れり。斯くて教會及び寺院各所に起りたりしが、六一四年再び回教徒のためにあらされ、遂に彼斯王コスロス二世のために奪はれ、エルサレムは事實に於て全く滅亡したり。後羅馬帝ヘラクリアス一たび之を彼斯人の手より奪ひしが、六三七年又回教王オマルのために取られ、回教徒はエルサレムに驕るに至れり。爾後今日に至るまでエルサレムは全く回教徒の手中に在り。一五一七年以來土耳其帝實に之を管轄せり。

【地理の概略】 古昔のエルサレムは南北に延張せる二個の峰と相並行せる丘上に在り。四の山をシオン山と云ひ、シロアムの池よりダマスコ門に至るまで南北に走れるチロピオンの谿谷に依りて東西に分る。オフェル及びモリヤ山の東にキデロンの谿谷在り、シオン山の西にヒンノムの谿谷あり。此二谿谷相從する所よりヨディー、エン、ナル（『火の谿谷』の義）の谿谷死海に達せり。現時の市街中に圍容せる街衢あるは、蓋し古昔の市街の北境の北、第一の石垣と壞せられたる部分に自然の回隔ありしを示す者なるべし。然れ共今日にては寓石の堆積甚しく之を古昔の形狀に復することを能はず。東オフェル及びモリヤ山の間にも亦些少の凹隔あり。古昔エブス人の建てた

るシオンの城塞、後ダビデが奪ひて『ダビデの市』と名けたる地は、ヨセファスの書及び初代基督教著述者の傳說に依れば、西丘に在りしが如しと雖も、聖書の物語（尼二の十二及び三章）に依れば東丘に在るが如く、近代探査の結果も亦後說を是認せり。現時モリヤ山上に在るハラムの敷地はヘロデ王の建てたる神殿の敷地なること疑なし。神殿敷地の北にベセサ山あり、人工的に造られたる凹陷に依りてモリヤ山と相隔つ。北に在る城壁を第一、第二、第三の石垣と稱す。傳說はカルヴァリーを以て現時聖墓教會の在る地に在りとなせども、亦之を以て市外『髑髏山』に在りとなす者あり。何れか是なりや明ならず。

【現時のエルサレム】 過去廿年間エルサレムは其廣袤に於て、其人口に於て大に擴張せられたり。是れ近年猶太人及び獨逸巴人が盛に此地に移住し來り、壁外に多くの家屋を建築したるがため也。今や橄欖山上は家屋を以て蔽はれ、ダマスコ門の北には廓外の街衢起り、西は猶太人の住宅ジャファ門より凡そ一哩以上に涉り、又多くの村落露國の旗亭より四ピルゲット、マミラの附近に及べり。南には更に他の家屋あり、獨逸殖民地ヒンノム谿谷の南の高地に立ち、西南には停車場あり。現時の人口五萬以上、其中三萬は猶太人にして、彼等は近年俄に增加したり。

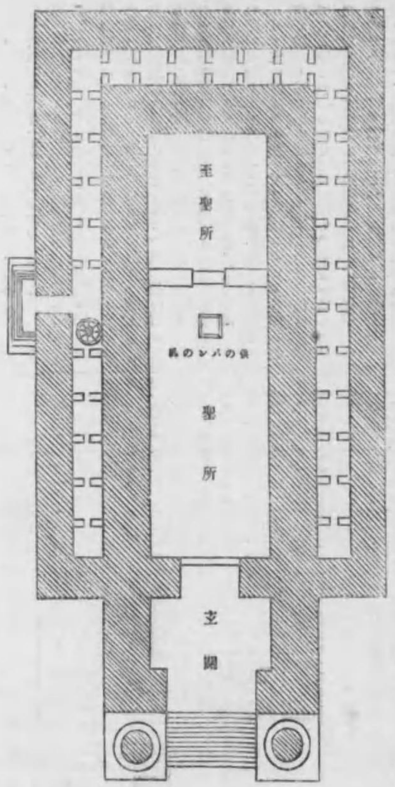
エルサレムの會議（クリイド）

The Conference of Jerusalem.

【事蹟】 基督教最初の會議。初代教會に於て、異邦人の改宗するに方りては先づ猶太教の儀式に從ひ割禮を受くべきや否やに關し、猶太教主義を固執せる人々と、異邦人の使徒なる保羅との間に議論合はず。於是アンテオケの教會は數人の者をエルサレムに送り、使徒、長老等の意見を聞かしめんとせり。蓋し彼等はエルサレム教會を母教會として敬ひたれば、其意見を徵するは當然の事也と信じたるのみならず、使徒及びエルサレムに在る先輩の信徒は、直接に耶蘇の教訓を受けたる者なれば、如此重大なる問題に關し彼等の說を聞くを以て必要也と信じたりし也。此會議は紀元四八年乃至五二年に開かれたる者にして、其詳細は使十五及び加二の一—十に記さる。此二書の記事を併せ考ふるに、保羅とバルナバはエルサレムに上り、先づ雅各、彼得、約翰の三人、即ち教會の柱たる人々に逢ひて其意見を徵し、而して後公會を開き、使徒及び長老等に議りしものゝ如し。此會議に於て雅各は思ふに議長の地位を占めたりしなるべし。彼得先づ口を開きて、コルネリオの實例を擧げ、異邦人が不割禮の儘信仰に依りて天の賜を蒙るは神の聖意に適ふ事也と述べ、且神の前に在りては猶太人と異邦人との別なき、ことを論じ、救を得るは律法に依らず、神の恩惠に依るとの事を述べたり。次で保羅とバルナバは異邦に於ける傳道の實際の結果を報告し、以て彼等の傳道が如何に聖意に適ふかを証したり。於是雅各は『我

ウェストミンステルのエルサレムの室

れ思ふ、異邦人の中より神に歸する者を煩はすは宜しからず』と斷言せしかば、集會の人々皆賛成の意を表し、雅各の議に從て書を異邦の信徒に贈り、嗜偶像に捧げたる肉を食ぜざる事、姦淫の事、勒殺したる物と血とを喫むことを決し、全會の中より



ソロモン神殿表面圖

に、ブポット、ヴットリングトン客室として之を建設せり。之をエルサレムの室と稱するは、其掛くる所の輕幀エルサレムの繪畫を以て飾れるが爲め也と云ひ、又『平和の場所』と稱する聖所に隣れるが爲め也とも云ふ。ヘンリー四世は一四一三年エルサレムダ及びシラスを選び、此書を携へ保羅、バルナバと共にアンテオケに遣はさんことを定めたり。

エルサレムの室

【建物名】 英國倫敦ウェストミンステル副監牧師館の巨室にして、一三七六年より一三八六年の間

墓詔の途上此室にて死去し、アザソン（一七一九）コングリーヴ（一七二八）も其葬儀前此室に置かる。第十七世紀に於るウェストミンステルの會議も爰に開かれ、第十九世紀に於る欽定聖書改正委員も此室にて其會議を開けり。

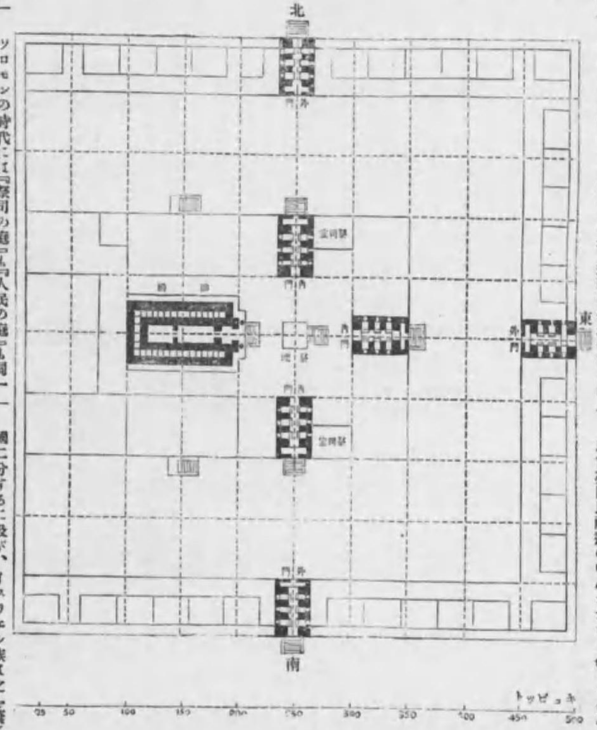
エルサレムの神殿（テムプル）

Temple at Jerusalem.

【建物名】 希伯來語 ヒカール（狹義に於て『聖所』の義）及び バイト（『家』の義）譯して神殿となせる希臘語新約に三あり。即ち naos（神殿の總圍全部を指す）vaos（聖殿のみを指す）及び oikos 是也。

【ソロモンの神殿】 以色列王ダビデ既に四方を征服し了り、檜の宮殿に住むに至りし時、幔幕の中に在る神の櫃を取りて置すべき神殿を造らんとしたりしが、神預言者ナタンに託りて『汝は我がために我の住むべき家を建つべからず』と云ひ、且其生む所の子神の家を建つべしとのことを告げ給ひしかば、彼は其志を果さゞりしが（爾後七の一、代上十七の一）之が準備を忘らず、其材料を集め意匠を凝すことを爲したりき（王上五、代上廿二）ソロモン王ダビデに嗣ぎて立ち、父の遺志を繼ぎて直ちに神殿の造營に着手し、ツロの王ヒラムに命じてレバノンの檜を伐り出し、且工人を送らしめ、又以色列に徵して數萬の人夫を集め、石を鑿出さしめ、斯くてソロモンの建築者とヒラムの建築者等材木と石とを備へ、以色列人出埃及後四百八十年、ソロモン王即位の第四年二月に工を起し（前一〇一二）第十一年八月に其工を終れり（王上六の一—廿八）此神殿の構造は幕屋の模型に從ひ、唯之を擴張したるのみ也と云ひ傳へたれ共、近時批評家の觀に從へば、幕屋は以色列人俘囚の時迄は實際存在せざりしと云へば、幕屋の方却て此神殿の模型に從ひたりしものなるべし。神殿は『家』、其周圍の『庭』『祭壇』及

び其他のものを包有す。『家』は矩形にして長サ（東西）六十キュビト、濶サ二十キュビト、高サ三十キュビト也。神殿は三部に分る。即ち至聖所、聖所及び拜殿の廊にして、此廊は『家』の部分に算入せられず。聖所は長方形にして、東西四十キュビト、南北二十キュビト、至聖所は長廣高共に二十キュビト也『家』の高サ三十キュビトなれば、至聖所の上には十キュビトの空間なかるべからず。拜殿の廊は家の前面に在り、家と接續し、長サ十キュビト、濶二十キュビトあり。此廊の入口に二箇の圓柱あり、ヨアキン及びボアズと稱す、高サ共に廿三キュビト也。家の四周に旁房（サイドチェンバー）を有する三層の連接屋を建て、家の體壁と神殿の體壁の周圍に繞らせたり。下層は濶五キュビト也、此等の連接屋に入るには外方よりす。家に造り附の格子ある窓あり、是れ風通しのため設けたる者也。至聖所には窓なし、是れ神は『濃き雲の中に居らん』と云ひ給へば也（王上六の十二）家の壁板には檜の木を以てつくり、金を以て之を蔽へり。家の四周の體壁は內外共にケルビムと綜櫚と咲ける花の形を彫めり。代下三の五に依れば、大殿は松の木を以て張りつめ、美金を以て之を蔽ひたりしが如し。神殿の入口には橄欖の木の戸を造り、其二の扉も亦橄欖の木也、其上にケルビムと綜櫚と咲ける花の形を彫み金を以て之を蔽へり。至聖所の中には神の櫃あるのみ、此櫃の上に高サ各十キュビトを有する二の大なるケルビムあり。聖所の前面には供のパンを載する机あり。家の周圍に又『祭司の庭』あり（代下四の九）又『內庭』と稱せられ、聖石三層と檜の厚板一層を以て造らる（王上六の廿六）梁に燔祭の瓶、銅の海及び十の銅の洗盤あり。此外別に又『外庭』（『大庭』又は『人民の庭』）ありとの說あれ共、近時の學者の中には



エゼキエル神殿裏面圖

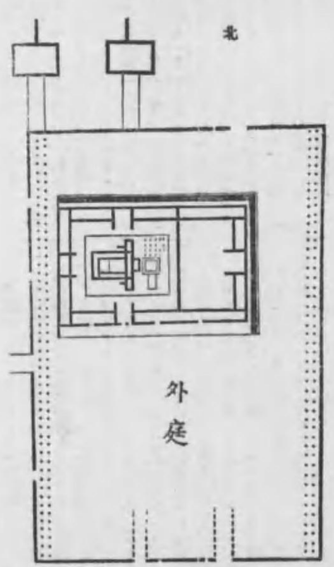
ソロモンの時代には『祭司の庭』も『人民の庭』も同一なりしとの說を唱ふる者あり。神殿建築の歷史には門の事を記さゞれ共、南方に門ありてソロモン王は之より神殿に出入したりしなるべし。又北及び東にも門ありしが如し。

神殿の建築成るやソロモンは之を神に獻げ、贖くて以色列國民禮拜の中心となりしが、ソロモン死して國二分するに及び、イスラエル族は之を棄てゝ顧みず、ユダ族さへ態々別に壇を造りて偶像を拜せり。神殿に貯へられたる金銀は態々政治の目的のために費消せられ、又其財寶は態々外敵のために掠奪せら

れたりしが、遂に其獻堂の後四百十六年にして巴比倫王のために全く滅されて、民盡に囚虜せり。後十四年エゼキエルは新しき神殿の異象を見たり、事は以西結書四十—四十三に記さる。

【第二の神殿】　前五三六年波斯王クロス猶太人の國に歸ること、及び神殿を再建することを許し、且巴比倫人が第一神殿より掠奪せる金銀の器皿なども、又其造費を補くべしとの事を詔せり（歷一、六）斯くてゼルバベル及びヨシュア指導の下にバレスチナに歸りたる人々は、神殿再建に必要なる準備を爲したる上、歸國後第二年に其再建に着手せしが、ソドン人はレバノンより檜を欲り出してヨッパに送り其工を助けたり。サマリア人も亦之を助けんとせしが、猶太人之を欲せざりしが故に却て之を妨げたりき。此工事の初まりたりしは前五二〇年にして、其竣工せるは五一六年也。廻六の三に依れば此神殿の高サ濶サ共に六十キュビトにして、第一の神殿よりも大なれ共、基二の三に依れば第一の神殿に劣れり。其劣れりといふは神の櫃及び金銀寶石の在らざるがためなるべし。後西利亞王アンチオカス、エピファネスのために掠奪せられたりしが、ユダス、マッカビウスの之を彼等の手より奪ひかへして之に修理を加へたりき（前一六五）ヨセフアスの云ふ所に依れば、アレキサンデル、ヤンネウス『祭司の庭』と『外庭』との間に木の欄杆を設けて之を區別したりしといふ（前一〇六）。

【ヘロデの神殿】　ヘロデ大王は其即位の第十八年（前二〇—一九）新神殿の造營に着手せり。彼は國民の宗教的生活を高めんとの希望より此事業を爲さんとしたりとの、ことを演說したりしとて、ヨセフアスは其演說を傳へたれ共、彼の眞目的が之に依りて自己の名を不朽に傳へんとしたるに在りしこと疑なし。彼は猶太人民の疑惑を解かんため、先づ新殿建築の材料を集め、而して後舊殿を破壞せり。『家』の造營は頗る取り急ぎて一年半に之を竣工し、周圍の建築には八年を費せしが、工事は尙進行して大守アルビヌスの時に至る迄（六二—六四）之を終らざりき。此神殿の建てられし土地は、今のハラム、エシ、シュリフの地にして、ヘロデはゼルバベルの神殿の占めたりしよりも二倍の地を使用したりき。神殿全體圖の正門は四側に在り、尙南側に二箇、東側に一箇の門あり。『外庭』は通常『異邦人の庭』と稱せられたる者にして、異邦人は此中に入ることを許されたりしが故に廣く名く。其東部に新約聖書に所謂『ソロモンの廊』あり。『外庭』には悉く石を敷けり。『內庭』は短形ななし、『婦人の庭』『以色列人の庭』『祭司の庭』及び『家』を包有す。面して『外庭』より一段之を高くせり。『內庭』に九箇の門あり、其四箇は南側に、其四箇は北側に、其一箇は東側に在り。『家』は更に一段高き處に在り。內部は高サ長サ共に六十キュビトにして、濶二十キュビトあり。古殿と同じく聖所、至聖所の二部に分れ、聖所は長サ四十キュビト、至聖所は長サ二十キュビト也。此至聖所には何物なも存置せず、一年一回即ち贖の日に祭司長之に入ることを得るのみ。聖所には供のパンの机、香の壇、七の枝ある燭臺あり廊は高サ濶サ共に百キュビトにして、厚サ十一キュビトあり、高壁の如く家の前面に立てり。聖所と至聖所との間に幕あり。家の中には日光なく唯燭臺の光あるのみ。東側の外四側北側には小さき旁房あり、三層に並列し、其數合せて三十八箇あり。『祭司の庭』は祭司のみ入るべき處なれ共、犧牲を獻ぐる場合には他の以色列人も入ることを許さるゝことあり。此神殿は七〇年に至り遂に羅馬人のために滅され、今は荒廢なる回教の寺院其遺址に立てり。



ヘロデ神殿の模型

エルシャダイ 『神』(舊約聖書の)の條『神の名』の項を見よ。

エルスカイン 人名 エベネゼル Ebenezer Erskine, 一六八〇—一七五四 蘇國分離派教會の祖。名門の家に生る。廿八年間ポルトモータ及びキンロスシアに於て牧師となり頗る名聲あり。『The Morrow of Modern Divinity』と題する書長老教會の總會に於て異端として罰せられしも之に服せず、次で牧師推薦權に關し又總會と議合はず、遂に他の三人の牧師と共に蘇國教會を離れ、別に『Associate Presbytery』なる者を組織せり。(一七三三)後總會は彼等に復歸を勸めしも肯ぜず。後又此功能なる教會も誓約の事に關し二派に分れ、エルスカインは反對派の會議に依りて其教職を破はれたり。

エルスカイン 人名 トマス Erskine, Thomas. 一七八八—一八七〇 蘇國エヂンバラに生る。初め法律を學び辯護士の業に從事せしが、後リンラセンに退き著作に從へり。壯年の時より當時の蘇國神學に慊焉たらず、自ら最もよく天啓の思想を表白せりと思へる者を登見せり。以爲らく、基督教の眞理の標準となすべき者、唯人の靈性と一致するや否、人の普遍にして深奥なる靈的要求に適應するや否に存すと。彼は熱心に此說を主張し、其純潔、高貴の品性に由りて當時の人々に大なる感化を與へたり。

エルダテ モダテの書 書名 The Book of Eldad and Modad. 此等の名は民十一の廿六—廿九に在り。此名の書『ヘルマスの牧者』に記されし共、此外の事に就ては全く明ならず。

エルドマン ヨハン エドウァルド Erdmann, Johann Eduard. 人名 一八〇五—九二 獨逸の神學者、哲學者。ウォルマルに生れ、伯林にて(ヘーゲルの感化を受く。初め其故郷にて牧師の職を奉ぜしが、後ハレ大學の教授となり、死に至るまで其職に留まれり。彼は主として哲學史家として知られ『近世哲學史梗概』(一八三四—五三)及び『哲學史』(一八六五—七)の著あり、廣く世に行はる。

エルリオット 人名 チャルロット Elliott, Charlotte 一七八九—一八七一 英國の讃美歌作者。クラフアムに生れ、獨身生活を送り、ブライトンに死す。女史讃美歌作者を以て其名を不朽にせり。『いまほなきわれを、血をもてあがなひ』(『さんびか』第二百十一)は其最も有名なる者の一也)

エルリコット チャールス ジョン Elliott, Charles John 人名 一八一九—一九〇五 英國の監督、聖書註釋學者。倫敦キングス、カレッヂ神學教授、後又劍橋大學の神學教授(一八六一—三)たりしが、エキセテルのデイン、次でガロウチェステル及びブリストルの監督となり、一九〇五年辭職せり。聖書註釋書の外に許多の著書あり。

エルリス 人名 ウィリアム Ellis, William 一七九四—一八七二 英國の宣教師。倫敦に生る。一八一五年倫敦傳道會此に依り南亞非利加に、後ポリネシアに派遣せらる。一八二五年倫敦傳道書記長となる(一八三〇)。一八三五年マダカスカルに往き、迫害のため困難せる傳道を再興し、之を強固ならしめたり。爾後十年間四たびマダカスカルに航し、其觀察を公にせり。

エレア學派 ギリシヤ Eleatics. 學派名 ソークラテース以前の希臘哲學の一派にして、其中最も重要なる者也。クセノファネースに初まれりとなす史家あれ共、此派眞の開祖と見做すべきはパルメニデスにして、ゼノーン、メリッソス等之を組織發展せり。此學派の根本思想は、實有の者は平等一知にして、變化なく生滅なしと云ふことに在り。既に實有は平等一知、不變化、不生滅也とせば、吾人の感官の認むる差別、多樣、轉變、生滅の世界は實有に非ずして非有也。故に又吾人の感官は吾人に誤謬を教へ、迷妄を示す者にして、實有の眞相を吾人に示すは唯理性のみならざる可らず。是れ此學派が一元的思想を其極端迄論理的に推究したる結果也。

エレミヤ Jeremiah. 人名 猶太の預言者也。アナトテの色なる祭司の家に生れ、ユダの王ヨシア治世の十三年より、俘囚の時迄凡そ四十年間預言せり(前六二六—五八六)父なるヒルキヤといふ。然れ共之を以て神殿に於て律法を發見したる同名の祭司長と混同すべからず(王下廿二の八)思ふに彼はソロモン王がアナトテに追放したりしアビアタルの裔なりしなるべし。エレミヤの時に召されたりしは年尚少なりし時なりしが如し(耶一の六)彼は初め靈時の間アナトテにて預言したりしが、後エルサレムに往きて預言せり(十一の廿一)然れ共最初の廿二年間は著しき出來事なくして經過し、其預言の精髓のみ保存せらる(三—十章)カルケミシの戰爭ありし紀元前六〇五年は彼の生涯の轉機にして、彼はそれより先き既にユダ國の滅亡を預言せしが、今や彼は初めてカルデヤ人の名を示し、ユダの被等に依りて滅ぼさるべきことを告げたり(廿五章)カルケミシ戰爭の後四年ヂプカヂザルは遂にユダを其屬邦となせり(王下廿四の一)エレミヤはユダ國のみならず、カルデヤ國及び埃及、ヲグ、エドム等諸國の將來

(七十年間)なも預言せり。彼の說に依ればカルデヤ國の勢力に抵抗するは無益にして(耶廿七の八)全滅を免るゝの道は唯之に服從するに在るのみ(廿七の十一)而して七十年の終にはカルデヤ國の手より救はるべしと云ふに在り。此七十年は前六〇五年に初まり、五三六年即ち俘囚最後の年に終る。上に記せる轉機後の彼の生涯に於て、著しき他の事實は、彼が神の命令に從ひて、エホヤキム治世の四年に其預言を書に記せる事也とす(廿六章)耶利米亞書廿五章に記せるは即ち彼の預言の眞髓也。エホヤキムは(ヂプカヂ子ザルに服從すること三年にして死し(王下廿四の一—六)其子エホヤキン彼に繼ぎしが、在位僅に三ヶ月(耶五十二の廿一—廿四)ヂプカヂ子ザルは其民の過半を追放せり。ゼデキヤ、エホヤキンに繼ぎしが(廿七の一)エレミヤの地位は、人民の頑梗なると其謀導者の無頓着なるとに依りて頗る苦境に陷れり(廿一—廿四章)ゼデキヤ王は埃及王の救援を期待し、其亂を破りてヂプカヂ子ザルに背けり。於是カルデヤ人はエルサレムを圍み、且兵を埃及に進めて之を攻めたり。ゼデキヤは之を見て大に希望を之に屬せしが、エレミヤは其希望の迷謬に過ぎざることを示せり(廿七の六—十一)是れより彼が慘憺たる歷史は初まり、彼は獄に投ぜられたり(廿七の十一—十六)王は彼の助言を求めしに、彼は尙エルサレムの滅亡を預言して止まざりしかば、王怒りて彼を獄の庭に在る阱に投げ入る。其阱には水なくして汚泥のみなりしかば、エレミヤは汚泥の中に沈みしが、王の室の寺人なるエテオピア人に救はれたり(廿八の一—十三)是れエレミヤの受けたる苦難の極點也。斯くてエルサレムはゼデキヤ王治世の十一年に陷落し、エレミヤは敵されてヂブカヂザルに往き、カルデヤの太守ゲダリヤに至れり(四十の一—六)ゲダリヤ殺るゝに及び、エレミヤは人々に強ゆられ、彼等と共に埃及に往けり(四十一の十七—四十三章)猶太人の住せるタパネスにて埃及に逃れ、其處にて終を遂げたりしが(四十三、四章)聖書に彼の事を記せるは之を以て終となす。エローム、テルサリアン等は、彼が擊ち殺されたりとの事を傳ふ。彼の死後人民の彼を尊慕と稱する者カイロに在り。彼の死後人民の彼を尊敬すること甚しく、其預言は俘囚の當時熱心に學ばれ(申九の二、代下廿六の廿一、結一の一)彼は理想的人物となり(マッカビース下二の一、十五の十四等)癈失再現すべき預言者也と想像せらるゝに至れり(申十八の十五、太十六の十四、約一の廿一)エレミヤは預言者中最も困難なる事業を爲し、最も慘憺たる歷史を有す。彼は一再ならず其生命の危機に瀕したることありき。又其心情の其言語に顯はれたること、エレミヤの如き者他に之れあるなし。即ち彼が熱心は『エホバの語我心に在りて、火の我が骨の中に閉ぢ籠りて燃ゆるが如くなれば、忍耐につかれて堪へ難し』(廿の九)との言に顯はれ、其憂鬱の心情は『嗚呼我が生れし日は咀はれよ、我母の我を生みし日は祝されざれ』(廿の十四)と云ひ、又『エホバよ汝我を勸め給ひて我れ其勸に從へり、汝我を抽へて我に勝ち給へり、我れ日々に人の笑、嘲弄となる也』(廿の七)との言に洩れたり。彼は此の如く屢々憂鬱に沈みしが、其天職を疑ふ程に失望に沈まざりき(廿の十一)彼の性質に於て著しきは、其甚だしく相反せる性質を共に有したることにして、即ち彼は其心體の勇壯なる、直言國議國民を勵責して恐れざりしと共に、其國民のために其首を水となし、其目を涙の泉となしたりき(九の一)彼が其敵を神に訴ふるや『エホバよ汝は彼等が我を殺さんとする見の謀略を知り給ふ、其惡を絞す、ことなく、其郎を汝の前より拭し給ふ勿れ』(十八の十九—廿三)と云ふと共に、其國民の外國に擄へらるゝを見ては『擄へ移されし者のために痛く嘆くべし、彼は再び歸りて其故國を見ざるべければ也』(廿二の十)と云ひて、蚤に千行の涙を禁ずること能はざりき。彼が爲人は所謂男子の男を拔き結人の和氣を寓めたる者と云ふべし。彼が預言者の中に更に特出せるは其宗教的愛國心にして、詩百卅七篇は彼の作也と傳へらる。

耶利米亞記 書名 The Book of Jeremiah. 舊約預言書中の一書。預言者エレミヤ(別項『エレミヤ』參照)の預言を記したる者。書中之を書に錄すに至りし次第を叙す(卅六章)即ちユダ王エホヤキムの四年エホバの言エレミヤに臨みて云ふ『汝卷物を取り我が汝に語りし日即ちヨシヤの日より今日に至る迄、イスラエルとユダと萬國とに就て我が汝に語りし凡ての言を之に錄せ』と。於是エレミヤ、バルクを呼びて其口授する所を錄せしむ。翌年九月バルク、エルサレム神殿の上庭の新しき門の入口にて、ユダの諸色より集り來れる人々にエレミヤの言を讀み聞かせたりしに、有司之を聞きて是れ民心を煽動し國安を妨害する者也とて之を王に告げしかば、王は其卷物を取り來り侍從の一人をして之を其前に讀ましむ。讀みて來だ數行ならざるに王は怒ち縛として怒り、手づから其卷物を寸斷して之を火中に投ぜり。於是エレミヤは又エホバの命に從ひ、バルクを呼び再び其口授する所を錄せしむ。而して此第二の卷物には嚮にエホヤキムが火に焚きたりし書の言の外に、又斯る言を多く附加へたり。其附加へられたりと稱する者の幾分かは、新なる預言なりし

なるべしと雖も、其多くは前の預言を更に精密に記したりし者なるべし。此第二の卷物は今日吾人が有する此預言書の初の部分を構成する者なること疑なし。但し吾人は此書の編輯者が如何なる範圍に於て此卷物を用ゐたりしか、又如何程迄原作者の順序を保存したりしかを知ること能はず。思ふに或部分は同一性質を有する曉出の語と結合せんとして順序を變改したりしなるべし。又エレミヤは廿餘年の久しきに渉れる預言を記憶に從て、バルクに口授したりしと云へば、其在りし儘に之を再現すること能はず。彼の目的は其覆轍及び敎訓の概畧、過去の歷史及び現在の狀態に關せる彼の判斷、及び將來に關する彼の確信を綴して之を保存し、且之を人々に示さんとするに在りき。故に此書の初の章は斷片的にして遞嬗なく、同一章に在る語にして、異りたる時に屬する者あり。又其冒頭及び時日は原作者の筆に成りたる者に非ずして、編輯者の手に出でたる也。エホヤキムの五年以後に關する部分は頗る混亂して、其順序の知きも容易に之を定むべからず。其中にはエレミヤ自己の手より出でたりと思はる3者なきに非ざれ共（例之廿四、廿七章の如き）此時より以後のエレミヤの言は多く歷史の枠の中に入れられたり。此等の歷史的要素は何人の手に成りたりや詳ならざれ共、エレミヤ自己の手より出でたる者に非ざること明也。歷史の枠の中に入れられたるエレミヤの言は、果して彼れの用ゐたる言を其儘記したる者なりや明ならざれ共、中にはエレミヤの言が編輯者の手に來りし時、既に歷史の枠に入れられたりし者もありしなるべし。兎に角其歷史は大體に於て確實にして信ずべき者なること學者の一般に認むる所也。

【此書の內容】 (一)第一章　エレミヤ召されて預言者となる。(二)二—六章　エレミヤ最初の預言、エホヤキムの五年に綴されたる者にして、ユダの偶像禮拜、イスラエルとの比較及びユダの上に來るべき審判。(三)七—九章　預言の第二集にして、エレミヤ神殿の門に立ち、エホバを拜せんとて其門に入りし人々に告し言。其大要『萬軍のエホバ以色列の神、我れ汝等を此地に住ましめん』といふに在り。(四)斯く云ひ給ふ、汝等の途と汝等の行を改めよ、去らば十章　以色列の家の偶像禮拜。但し此敎節は後の預言者の作か、然らざればエレミヤが晩年俘囚の民に言ひたる者也。(五)十一、二章　エレミヤをしてユダの諸色に往き、申命記の精神に從て行ふべきことを勸めしめたること。エホヤキムの治世人民敎善の淺薄なりしこと。アナトテの人々エレミヤを害せんとしたりしこと。エホバ、エレミヤに忍耐すべきことを告げ給へること。(六)十三章　國民腐敗の狀態及び其結果、改善すべしとの勸奬。(七)十四、五章　エホバの怒、人民の祈、及び之に對するエホバの答。(八)十六—十七の十八、九—廿七　安息日聖守の勸奬。(十)十八—廿章　陶人の敎訓。(十一)廿一の一—十　エルサレムの包圍に關するセデキヤの問に對するエレミヤの答。(十二)廿一の十一—廿三の八　ユダの諸王に關するエレミヤの批判。(十三)廿三の九—四十　セデキヤの時有力なりし諸預言者に對する言。(十四)廿四章　エホヤキム道宣後の預言。(十五)廿五章　カルケミシ戰爭の時の預言。(十六)廿六章　エホヤキム治世の初の預言。(十七)廿七—廿九章　セデキヤ治世の預言。(十八)三十—卅三章　イスラエルの恢復に關する重なる預言。(十九)卅四章　セデキヤ及びエルサレム將來の運命。(廿)卅五、六章　エホヤキム治世の預言。(廿一)卅七、八章　エルサレム包圍中のエレミヤ。(廿二)卅九—四十三章　エルサレム浸落後のエレミヤ。(廿三)四十四章　埃及に遁れたる人々の偶像禮拜を譴責す。(廿四)四十五章　バルクに對する預言。(廿五)四十—五十一章　埃及、ペリシテ、モアブ、アンモン、エドム、ダマスコ、巴比倫等に關する預言。(廿六)五十二章　エレミヤ、カルデヤ人に捕へられたること及びユダ國民の俘囚に關する記事。

【此書の宗敎思想】 此書の特色は宗敎的人格を顯はすに在り、宗敎的眞理を敎ふるは其特色に非ず。換言すれば、預言者の既に敎へたる眞理は、生命となりてエレミヤの人格に顯はれたる也。(一)罪墓の觀念　先づエレミヤの心を滿ぜるは國民の罪墓にして、彼は彼等がエホバを棄てたるを以て、活水の泉を棄てたるに喩へたり。彼は宗敎を以て神と人との直接なる關係となし、當時の國民の宗敎なる者の眞實に非ざるを指摘して之を證實せり。又彼は宗敎を以て內的なる者となし、犧牲、神殿、神祭、律法者の知き外形的事物より、人々の心を內面に轉ぜしめんとせり。彼は罪墓の所在を以て心に在りとなし、心の改善を以て最大急務也となせり。云く『汝等の新田を耕せ、荊棘の中に植く勿れ、汝等自ら割禮を行ひてエホバに屬き、己の心の前の皮を去れ』(四の三、四) 又云く『心は萬物よりも僞る者にして甚だ惡し、誰か之を知るを得んや、我れエホバは心腹をさぐり、腎腸を試み、各に其道に從ひ、其行爲の果に依りて報ゆべし』(十七の九、十) 彼は人類の罪を以りしかを示す。(十八)三十—卅三章　イスラエルの

て罪圖也となし、一人の公義を行ひ、眞理を求むる者なしとなし（五の一）此有樣を變へ得る者は獨り神あるのみとなせり。『我れ彼等に我のエホバなる知識の心を與へん、彼等我民となり、我れ彼等の神となならん』（廿四の七）。(二) 神の觀念　エホバのみ神にして、異邦人の神は神に非ず（二の廿一、十六の十九）エホバは諸國民を治め給ふ（廿五の十五以下）又彼の力は自然に顯はる（十四の廿二）終れ共彼は眞實に彼の民に自らを顯はし給へり（三の十九、十五の十六）彼は『地に仁慈と公道と公義とを行ふ者』にして（九の廿四）假令其民彼に背きて罪を犯すも、其名の爲めに彼等を棄て給はず（十四の七、廿）宗敎の眞體は信仰に在り『凡そエホバを頼み、エホバを其恃とする人は福也』（十七の七、八）。(三) 國民の將來に關する觀念　エレミヤは深く國民の罪惡を感じ、其滅亡の來るべきを預言せり。五九七年の俘囚後に至り其心漸く和らぎ、エホバ彼等にエホバを知るの心を與へ給ふべきことを語り（廿四の六）又エルサレム包圍せられ、其浸落近づきたりし時、ユダ、イスラエル共に恢復の時あるべきを預言せり（三十—卅三章）。

【參考書】 總論としてはドライヴェルの『舊約文學緒論』註釋としてはエルドゥ、ランゲ、ストーン（創橋聖書）チェーネ（ブルピット、コンメンタリー）バウル及びベンネー（エキスポジットル、バイブル）等あり。併せてチェーネの『エレミヤ、其生涯及び時代』デーヴィッドソンの『俘囚及び歸國』を見よ。

エレミヤの書 ▶Epistle of Jeremiah.

[書名] 舊約經外聖書中の一書。舊約聖書中の耶利米亞記と混同す可らず。預言者エレミヤの名に藉りて、巴比倫に在る猶太人に贈りたる書軸にして、罪墓の壓縮として彼等の受けたる俘囚は七倍續すべしとの、ことを說き、又偶像禮拜の愚なることを述べて、彼等が其莊嚴なる儀式のために欺かれ、エホバに背く勿らんことを勸めたり。此書が預言者エレミヤの作に非ざることは、其希臘語にて書かれたること、文體の耶利米亞記より遠に劣れること等に依りて明也。學者の想像に依れば、作者は前一世紀頃埃及に住したりし人にして、俘囚に在る猶太人が偶像禮拜に染まんことを深く憂へ、預言者エレミヤの名を藉りて此書を作れる者なるべしといふ。

エレミヤ二世 Jeremiah II. **[人名]** 一五三六—九四　東方敎會の敎長。黑海沿岸のアンキアルスに生れ、若くしてラリサの大都監督となり、一五七二年にはコンスタンチノープルの敎長となりしが、陰謀のため二たび廢位となり、競爭者に年金を給して辛うじて地位を保つを得しかば、之がため財帑窮乏し、一五八九年には露帝をモスクワに訪ひて財政上の助力を乞ひ、其の求むる所なれば得しも、之に代へて露西亞を獨立の敎長管轄となし、モスクワの大都監督ヨブを敎長となすの要求に應じ、己が部下の監督より嚴しく非難せられたり。エレミヤ二世の他の著しき事跡は、獨逸新敎との交涉なりき。一五七三年ステフェン、ゲルラッハ、コンスタンチノープル駐劄獨逸大使附說敎者として赴任し、其の寫らせるチュビンゲン大學長官ヤコブアンドレー及び希臘學者マルチン、クルーシウスの藏書に由て頗る東方敎會に歡待せられしかば、ナウピンゲン神學者等は後また二たび書を贈りアウグスタ皆白の希臘譯及びアンドレー說敎の希臘譯を贈りたり。エレミヤは之に對し一ヶ總密なる議論を試み、敎會、敎職、僧侶の結婚等の知き諸條には稱讚の意を表せしが、聖旅は子なる神よりも遲らるると云ふ說を取れる所、善行の功績を無視する所をはじめ、一體には皆自ら攻擊せり。獨逸の學者ルカス、オウアンデル及びグルーシウスは再び之に答へ、エレミヤまた之を駁してアンドレー、ジェップ、ピーテンボッハ、ヘールブランド更に之に答へしが、一五八一年エレミヤの發せし攻擊を最後として交綏したり。

エーレル グスターフ フリードリッヒ（後にフォン エーレル） Oehler, Gustav Friedrich **[人名]** 一八一二—七二　獨逸の舊約聖書神學者。カルテンベルヒのエピンゲンに生る。母は九歲の時に死せしも深き宗敎的感化を彼に殘せり。エーレル幼より編物、九歲の時四ツの國語と共にペルシヤ語及びアラビヤ語を修めたり。チュビンゲン大學に學び、シュミッド及びストイデルの誘掖を受け、特に前者の新約聖書神學講義に於ける強健にして積極的なる信仰に感化せらる。一八三四年バーゼルに招かれ其の宣敎師養成所の敎師となり、翌ヶ附近都邑の敎會にて說敎をなし、居ること三年にして去り、伯林にて一夏を過し、一八三七年チュビンゲンに赴き講師となりたり。此にて自ら東邦國語の敎授に任ぜられんと望み居りしに、一八三九年エヌルド聘せられて此は蘭研に歸しめ。されどドルネルのキールに轉任せしに由りて再び望を起し居りしに、之も赤後の篤信ヤコブアンドレーの反對に由て消えぬ。されど一八四〇年には同神學校の敎授並にシェンダルの牧師となりたり。此より先き彼はストイデルの家族より囑せられて其の舊約神學講義を編纂し、一八四〇年伯林より出版せしが、同年ストイデルの女と結婚したり。同年ふたたびマールブルグとブレスラウより招かれ、ブレスラウの方に應じ、次第に

學生の信用と傾聽とを得るに至れり。一八四六年ロストックより招かれしも之を辭し一八五二年伯林に轉じたるホフマンの後を襲ふてチウビンゲン神學校の長となり、同時に舊約神學教授となる。一八六七年にはフランツ、デリッチの後繼者としてエルランゲンに招かれしも之を辭ぜり。プレスラウにてもチウビンゲンにてもエーレルは異常なる勤勉と眞心殺き態度を取て講義し、學生をして徹底せる研究をなさしめんとせり。彼は舊約神學と共に又以賽亞書、詩篇、約百記、ダニヤに關する預言、小預言者、希伯來書、基督教敎義學に就て講義し、屢々『諸君を唯一の主に向はしむること此れ神學講義者の最聖最重の義務にして又光榮喜悦なり』と言へり。其講義は同僚バウル及びベック等の之共に學生の多く參聽する所となり、舊約の豐かなる內容を示してシュライエルマッヘル等が喚起したる反舊約感情を除去するに力めたり。其の研究は博言學に基づきて成られたるが、彼は舊約を以て進行し行ける天啓にして新約とは有機的の關係あり、神は其の計劃に由りて一部づゝの啓示なし、新約に至て完結したりと云せり。彼は又高等批評の或點をも容れ、五經の材料の多きこと、以賽亞書著者の二人なることをも認めたり。其のチウビンゲンにて死せんとするや、看護者に向て我れ此病に依り詩篇と約百記の意味を此れまでになく明かに知るを得たりと言へり、彼の著作の最も重なるはヘルツォーグ宗教辭典中の四十項の文章なり。又神學校講演全集及び舊約聖書神學なり。後者は精密なるを調子の敬度的なるとに於て類少し、英譯あり。

エロヒム 『神』(舊約聖書の)の條『神の名』の項を見よ。

エロヒム古典 『モーセ六經』の條を見よ。

エローム ○ 拉丁教父。Jerome. Hieronymus と稱す。其眞の名を Sophronius Eusebius と稱す。ダマルサアとハゾノニアとの間に在るストリドンと云へる邑に生る。兩親は基督信徒なりしが其他の事は詳ならず。幼にして羅馬に往きドナチウス。ゲイクトリヌス等に就きて、拉丁、希臘の文學を學び深く造詣する所あり、彼は又羅馬に在りて洗禮をも受けたり。後更に眞理の溫奧を極めんとてトレヴェス、アキライアに往き、更に進んで東に赴かんとせしが、一夜彼は夢中基督の前に立ちて『爾は誰なるや』との問を受け『余はクリスチヤン也』と答へたりしが、其時基督は『否、爾はシセロ（羅馬の有名なる文學者）の弟子也』と云ひたりしと夢み、覺めて後全然文學の研究を廢止し熱心神の事業に從事せんと決心せり。元來彼は隱遁主義の傾向を有せしかば、アンテオクに近き沙漠に退き數年の間山間の生活を送れり。後彼はアンテオクの長老となり、又基督教に改宗せる一猶太人を師として希伯來語を學びたりき。後彼はアンテオクに住せしが、三八二年羅馬に歸り、監督ダマススの書記となり、爰に新約聖書拉丁語の譯文を改正するの事業に取り掛りしが、個個及び信徒の中に彼に反對する者ありしを以て、三八五年羅馬を去りてパレスチナに往き、ベテレヘムに住し、羅馬より彼に從ひ來りて自ら尼院を建てたるパウラと稱する貴婦人の寄捨に依り、寺院を建てて、死に至るまで此處に止まれり。而して彼は此處に廿餘年を費して舊新約聖書の翻譯を完成せり。元來拉丁語の聖書翻譯は、第二世紀に北亞非利加に於て成りし者にして甚だ不完全なりしを以て、之を改正せんとする者多く出で來りしが之を集す者あらざりき。エロームは深く拉丁、希臘の文學に達したりしのみならず、希伯來語にも通じたりしを以て、新約聖書を改譯したるのみならず、舊約聖書を新に飜譯したり。ヴェルゲート（Vulgate）と稱する者即ち是也。彼は性質急激にして辯論を好み、能く異端と戰へり。彼又著書多し。

エンクラタイツ Encratites. 學派名 當の意義に於て學派又は宗派と稱するを得され共、厭世主義を抱ける一派也。イレニウスの云ふ處に依れば、ササルニヌス及びマルキオンの弟子中に、之に屬する者ありしと云ふ。彼等は肉食、飲酒、婚姻等を禁ずる一派にして、早くより印度に行はれ、又猶太にも（エセ子ス派是也）希臘にも（ピサゴラス派是也）行はれたり。而して基督教會の中に入り來りしより、ノスチック派の中に盛に行はれたり。此派の重なる人々はタチアヌス、ササルニヌス、マルキオン、ユリウス、カッシアヌス、及びセヴェルス也。彼等は『埃及人の福音書』『アンドレ、ヨハテ、トマス行傳』及び其他の僞經を信ぜり。

エンゲジ Engedi. 地名 死海の南岸中央に在る斷崖より迸出する溫泉にして、ラス、モルセドの南二哩に在り。昔時は之をハザゾンタマルと云へり（代下廿の二）アブラハムの時より知られる（創十四の七）エンゲジの曠野とは、ユダの荒野のエンゲジに沿ふたる方面にして、洞穴岩石多き地方也。ダビデは此地に身をかくせしことあり。

エンジェリック ブロザルス Angelic Brothers. 宗派名 和蘭神秘派の一派。ヨハン、ゲオルグ、ギヒテル（一六三八—一七一〇）の創設に係る。ギヒテルは自ら完全に達し、天使の如く凡ての肉慾を棄つるを得たりとのことを告白せり。

オの部

オーエン 人名 ジョン Owen, John, D. D. 一六一六—一六八三 英國ナックスフォルド縣スタッドハムに生る。父は牧師にしてウエールス人の血統に屬す。祖先は有名なるプリトン人カラクタスの裔グラモルガン公アエガン、アプ、イヤルより出づ。ヨハンは十二歳にして既に牛津に送られ、一六三二年パチエロル、三五年マストル、オヴ、アーツの學位を得、三七年此を去れり。時にロードは大學に勢力を有し高派教會政策を行ひ居りしかば、オーエンは之を喜ばず將來立身の障りとなるをも顧みずして、其主義の訓練に從ふことを拒み、斯くて精神上物質上の困難に圍まれ愛蘭の狀態に陷れり。學校を去る前聖職を受け、王黨の一人ラゲレース卿の附屬牧師となりしが、國會黨に同情して其の職を辭し、倫敦に赴き名高きエドモンド、カラミーの說教を聞かんと欲し、アルアルマンボリー教會に坐せしに、折しもカラミーに代りて演べし他の說教者の引きし『あゝ信仰薄き者よ汝等何ぞ恐るゝや』てふ語に太く心を打たれ、此に精神に一轉を來しぬ。

其より『アルミニウス主義の研究』を著はしてカルヴィン主義を主張し、非高派教會の意見を示せしが、德て長老教會の委員よりフォルドハムに任地を與へられ、ルックと云ふ婚人と結婚し、一六四六年には議會に立て說教し名聲を得てコプシャルに任地を與へられたり。此にて彼は教會を牧しながら又獨立陣營を作りたり。當時精神的の同志者集りて獨立の團體を造りしは例多き事なりしも、之と共に尙カルヴィン派論爭に加はり、又國會黨に向てなせる說教を公にし、自ら全く國會黨に同情して其の職を辭ぜり。王處刑の翌日には議會に招かれて說教せり。されど彼は謹慎を以て說教を終始し、一言も悲劇に說き及ぼさず、唯だ各黨に對する精神的教訓を與へたり。後間もなくクロムウエルに會ひしに『君へは我れ面識を乞ひ置かざるべからざるなり』と言はれ、オーエンは『其は君よりも我の方にこそ負多けれ』と答へ、クロムウエルより愛蘭同行を乞はれて多少躊躇しながらも之に應じ、歸りて又蘇格蘭に同行し、折しも同國にては國會黨と蘇格蘭王黨との爭ひ酣なりし中に長老教會にて說教し、一六五一年コッヂシャルに歸りしが、衆議院は彼を牛津のクライスト、チャルチのディーン職に選擧したり。

獨立主義の人にして教職給を受くるは矛盾の至りなれども、オーエンは自ら少しも怪まずして之に就き、其の敏腕を揮つて內亂の間紊れたる秩序を回復せしかば、彼の執政の間は諸大學の長は碩學の人物なる以て充てられ、教育も宗教も振ひ、多くの人才こゝに養はれ、アントニー、ウッドの如き狂信的の輩も、オーエンを認めて基督教紳士となせり。一六五二年副學頭となり、翌年は議會にて對和蘭海戰勝利感謝の說教をなし、次の年には倫敦に於ける神學者會に列し共に各教會の合同を謀りしも成らず。長期議會解散後には牛津より選ばれて衆議院議員となり、教職及び其の進退俸給に關する諸委員となり、有名なる博士ボコックを救ひて虐待に陷らざるを得し會に立て說教し名聲を得てコプシャルに任地を與へ、一六五五年クロムウエル政府顧覆を謀るの徒黨四部に起りし時には、公安のため鎭壓に力を盡し、同年又國內の猶太人待遇問題のため自宅の會議に列し、翌年にはウエストミンステル院にて名高き『シオンを建つる神の聖殿』と之に就て民の爲むべき事』てふ說教をなし、クロムウエルが王位を希ひし時には之を喜ばず、其の護國官就任には少しも式に與からず、一六五八年クロムウエルの許可を得て獨立諸教會サボイに會合し信仰告白を公にせし時には、オーエンは其の序を書けり。此の會合の在りし間にクロムウエルは死し、リチャルドと之れに襲ぎ、オーエンは其の第一議會にて說教せしが、政治上の困難は其より續出し、終にリチャルド倒れて長期議會再召集となれり。オーエンは一六五九年の議會說教を最後とし衆議院よりディーン職を解かれ、前のディーン、レーノルグ再び之に任ぜられたり。オーエンは此に於てスタッドハムに退きぬ。

オーエンは共和政府の顧著なる人物なりしも、王家回復後も一身上極めて安全なりき。一たび倫敦にて暴民に圍まれしも官吏に保護せられて危を免れ、チャールス二世の大臣クラレンドン卿に會見せし時はプロテスタント主義の職務として稱讚せられぬ。オーエンはサボイ會合には何等の活動的地歩を取らず、其他謹歩的の計劃には一切與からず。此點に於ては長老派の同盟と意見合はざりき。彼は又新英州の會衆派の微量なる動作を喜ばず、ハーバード學長に聘ぜられたるも之を辭したり。チャールス二世が大赦を布告せし時にはオーエンは之に上書し、王及びヨルク侯と會見し禮儀を以て迎へられしことあり。彼は又著名の人々と交はり、其の中には倫敦に於ける彼の教會員たりし者も少からざりき。其の教會はヨセフ、ケリルが生前に牧せし教會と合併し

獨立教會を造り居しものなり。一六七六年オーエンは老を養ひ、翌年富める婦人と再婚し夫人の所領たるイーリングに退きて餘生を送れり。死なんとする時チャールス、フリートウッドに書を贈りて曰く『余は我に行かんとす。即ち余の寵の愛せし者へ行かんとす。彼方より永遠の愛を以て余を愛せし者へ行かんとす。余が懼めの基礎は全部此愛に在り。我は教會の給なる暴風惡濤の中に殘す。されど大なる水先案内者其中に在れば敢しき一漕手の喪失は數ふるにも足らざるべし』と。

オーエンの著書は概して組織よりも内容に於て貧し。彼はカルヴィン派なれども其の所說は何人をも驚して力に富む。論爭的の著作よりも信仰的の者は一層面白く特に『基督の榮光に就ての靜思』の如きは心を新ならしむ。オーエンの全集は一八二六年トマス、ラッセル版あり、善き詳傳を添ふ、又エヂンバラの博士ゲールド編のものも存す。

オーエン 人名 ロバルト Owen, Robert 一七七一―一八五八 社會主義者。英國北ウェールス、モントゴメリーシヤのニウメウンの貧家に生る。十四歲の時曾教にて職業に就き、後マンチェストル附近のショールトン臼場に、後又羅格閣ニウ、レーナルクの紡績工場に雇はれ、其の持主デビッド、デールの女と一八〇一年結婚す。オーエンの博愛的の計劃によりて同場の工人の道德は高くなり、小兒の教育は進歩せしかば、心あるものは之に注意し、斯くてオーエンは名高くなるに至れり。一八一三年『新社會觀』なる著書を著はして穩和なる共產主義を唱へ、一八二三年米國に渡り、インデアナのウェバッシに地面を購ひ、ニウ、ハーモニーを建て共產主義を實行せんとせしも全然失敗し、二七年英國に歸りてオルビストン、レナークシヤ、タイサアレー、ハムブレヤ等に會を立て協力主義を實行せしが、之も失敗に歸し、二八年メキシコ政府に招かれて共產社會を立てんため同國に赴きしも、何の甲斐なくして歸り、賜くて死に至れり。彼は不信者なりしかば二九年にはレンシンナチにて博士ブレキサンデル、カムベルと基督教證據論を討論したりしが、晩年には感靈教の信者となれり。多分其子ロバート、デール、オーエンの感化に由るものならん。オーエンは精力に富み又斷行力に富めり。去れど幻想的なりき。其の共產主義を實行するには、門地、能力、資本の社會的遺別を除去せざるべからずと言へり。彼と其徒はオーエン派と呼ばれ、一八二七年には勞働同盟を起せり。『社會新組織論』『基督教證據論討論』『人類精神及實行の革命』等の著あり。彼の傳記にはバッカード著、ブース著、サルガント著あり。

オーエン 人名 ロバルト デール Owen, Robert Dale 一八〇二―七七 有名なる感靈教の唱道者。社會主義者オーエンの子、父と共に一八二三年米國に至り其事業を助け、一たび歸歐せしも再渡して合衆國に歸化し、一八二八年フランセス、ライト女史と共に『自由研究者』なる週刊雜誌を發行して社會主義を主張し、基督教の超自然的起原を否定せしが、三年にして廢刊し、一八三五年より同州インデアナ立法院に列り、四三年より二期間獨邦會議代議士となり、五三年より五八年までは國交代理としてナポリに送られ、六〇年には『組織トリビウン』誌上にてホレース、グリーレーと離婚問題を論じ、之を集めたる小册には六萬部の賣行を見たり、後は又熱心に奴隸解放を主張せり。七二年インデアナ大學より法學博士を贈らる。オーエンは最も著しき感靈教者にして靈界の存在を信じ、此世の生存者と死者と交通あることを主張せり。ウォンソン百科字典中の感靈教（スピリチュアリズム）の項はオーエンの筆なり。著書多く特に『道德生理學』『他界の境への足跡』『教誨創度の非』等名高く、又自叙傳あり。

律法 Law. 術語 爰に律法と稱するは希伯來語の『トラー』新約希臘語の『ノモス』を譯せる者にして、共に神の律法を指す。

【舊約に於る律法】 希伯來語『トラー』(תורה) は『導く』又は『教ふる』と云へる動詞 (ירה) より來り、道德上、宗教上、若くは儀式上の務に關し、祭司がエホバの名に依りて與へたる教訓若くは指導の義也。

(一) 言語の歷史 此語の最も早く起れるは、出十八の十六、廿二にして、此處にモーセが二人の爭に對して與へたる審判を『法度』及び『作法』と稱せり。古代のセミヤック人は精の知く困難なる問題の起れる場合に、酋長又は士師之を判決したりしが、斯くして判決せられたる者は先例となり、相積りて民法又は刑法なる者漸次發達するに至りしなるべし。預言者に至りて『トラー』は彼等が宗教又は道德的義務の問題に關して、エホバの名に依りて與へたる教訓を指すために用ゐられたり。然れ共之と共に此語は又廣き意義に於て、祭司が殊に儀式的律法、例之犧牲の種類、其性質、其之を獻ずる場合、聖き物と穢がらざる物との區別等に關し、エホバの名に依りて與へたる口頭の教訓を指す爲めに用ゐられたり。時を經るに從ひて此語は又或る主意に關する教訓の一部を指すために用ゐられたり。例之『墨祭の律法』と云ひ、『贖例の律法』と稱するが如し。而してエヂプ以

後、即ちモーセの五經なる者が現時の形狀をなすに至りて後は、此語は尙廣くモーセの五經を全體として意義するに至れり。

(二) 三種の律法 以上言ふ所に依りて之を見れば、希伯來の律法には三種の性質を備ふるを見るべし。即ち或る例之は三種の性質を備ふるを見るべし。即ち或る例之は法、儀式法及び道德法是也。此等の律法はモーセの作りたる者にして、彼は現形の法律の作者には非ざれ共、口頭的教訓の作者にして、律法の主義を精神を與へ、所謂モーセ五經と稱する者の基礎を作りたり。

(三) 律法の書かれたる起源 律法は初め口傳せられたる者也。然らば何時頃より文書に載せられたりや。五經を綿査するに、吾人は其中に保有せる律法は同種類の者に非ずして、文體、内容、範圍の異りたる幾多の部分の集まりたり者なること、其異りたる部分は一時代の產物に非ずして、數時代を經て漸次に生じ來りし者なることを知るべし。思ふに初めて筆にせられたる者は、或る特殊の主意に關する祭司律にして、次に此等の者が數節せられ、增補せられ、以て現時の五經中に在る律法成るに至りしなるべし。然れ共何時頃之を筆にすること能はず。

(四) 同義の語 舊約には又律法と同義の語を使用す。即ち『法度』『作法』『勸』『誡』『証』『勸』『誡』是也。

(五) 律法の法典 希伯來の律法は、エホバ及びエロヒム法典 (JE) 申命記 (Dt) 聖潔法 (H) 及び祭司法典 (P) より成る。

(イ) JE 古典の中には十戒（出廿の二―十七）及び『契約の書』（廿の廿―廿三の卅三）を有す。『契約の書』と稱するは、希伯來律法中最古の法典也。主として農業に從事せる當時の單純なる社會に住する人々の生活を律せんとしたる者にして、民法及び刑法に關する規定、道德、宗教及び儀式に關する規定を載す。『契約の小き書』又は『契約の書』（卅四の十―廿六）と稱せられたるは、廿三の十―十九に在る儀式に關する規定を反復せる者也。

(ロ) 申命記に掲載せられたる律法を『契約の書』に比する時は、直ちに此書の律法の、更に發達せる社會に生活せる人民のために設けられたる者なる知るべし。概して論ずるに申命記は後代の要求に從て、『契約の書』を改正增補したる者也といふも可也。損害賠償に關する規定（出廿一の十八―廿二の十五）を除くの外、出廿の廿二―廿三の卅三に記せる規定は大抵此書に載せられ、且全く新なる多くの規定を增加せり。

(ハ) 神聖に關する律法 (Law of Holiness 略號 H) は利十七―廿六章に記載せらるゝ處の者にして、主として古き律法より成り、後代の作者が祭司法典の組織と精神とに調和せしめんために、改正增補したる者也（利未記の條を見よ）之を『契約の書』に比するに、此律法の原文（改正增補せざる者）には、民法及び刑法に關すること少く、主として道德的儀式的律法を掲げたること明也。

(ニ) 祭司法典 (Priest's Code 略號 P) は主として宗教的儀式、殊に犧牲及び清潔に關する規定にして、創世記（一の十七）出埃及記（十二、廿八―卅一）及び利未記、民數紀略の大部分に記載せらる。此法典は順る組織的にして、幕屋を中心とし、以色列人の神聖を保持し、個人とし又國民として神の前に價値ある社會を造らんことを以て目的となす。祭司はレビと共に聖所に仕へ、人民のために適當の犧牲を獻げ、贖罪、清潔の儀式を行ふ。犧牲に種々あり、而して其細目詳に規定せらる。此法典は神に捧げられたる聖き民の觀念を示す。而して會衆は國民に非ずして教會也。此觀念は其大職に於て以四結書四十―四十八に記されたる根本思想と同じ。唯爰には詳細に之を記せるのみ。此法典に最も著しき思想は贖罪及び清潔の思想にして、犧牲を記するに聖祭、贖祭等の名を以てす。其目的此等の儀式を行ふことに依りて、以色列人の罪と汚とを取り去らんとするに在り。此法典は初代の文籍に衝突する所あり、又之に就て沈默する者あるを見れば、其現時の形狀に在ては、エゼキエル以後の時代に成りたる者なること明也。然れ共其中の凡ての制度が此時代に創作せられたりと云ふに非ず。不完全なる形狀に於て其以前より既に存在したりしこと疑なし。此法典の特質と稱すべきは、儀式的規則の累積、殊別せること、及び之を他の早く成りたる法典の宗教の隨意的性質に比し、此法典の宗教の著しく律例的性質を帶ぶること是也。早き時代に成りたる法典に在りては、宗教的儀式は大抵日常生活の狀態及び必要より起りたる者にて、犧牲は宗教的感情の隨意的發現の結果、祝部は收穫其他の時季に守る處の者、安息日は人情主義に基きて立てられたる者なりしが、祭司法典に在りては、凡て此等の儀式は組織化せられて其本來の意義を失ひ、儀式のために儀式を行ふことゝなり、宗教の生命は消失するに至れり。晩代の猶太教が全く形式化するに至りしは即ち此結果也。然れ共祭司法典のみ以色列人生活の標準なりしと想像すべからず。『E』法典及び申命記中に記されたる法典は之がために其力を失ひしに非ず。申命記の道德的、精神的教訓も亦祭司法典の儀式と同一の權威を有せり。且預言者に靈的宗教の有力なる說明者にして、常に道

他律法以て儀式に優れりとのことを說教したりしかば、猶太人は全然祭司法典の支配の下にのみありしに非す。故に猶太人の律法と稱するは全體としてこれを考察すべく、其一部分のみを以て稱すべからす。

之を要するに、LE 法典及び申命記には主として人道、正義及び道德に關する義務を說き、正義敬虔なる國民を作るを以て目的となせり。故に眞實に此法典に從ふ者は正義の道を難るることなく能はす。然るに星移り物變るに從ひ儀式的法典漸次發達し、遂に愛に主として以色列國民信仰の明白なる表明を見るに至れり。此法典は罪惡の觀念を深くし、罪の赦免の必要を悟らしめ、犧牲の意義を明にし、斯くして時滿つるに及び基督の犧牲に於て眞實に經驗せる原理を立てたり。略言すれば所謂モーセの律法なる者は、其發達の凡ての歷程に於て、守るべき義務、從ふべき法度及び戒るべき主義を以色列人の眼前に置き、彼等に人の性質は限制、訓練を要する者なることを教へたり。俘囚以後に至り希臘の勢力の侵入するに及び、以色列人は此律法に依りて其國民の多數を以て宗教的獨立を這り、斯くして其神より委れられたる宗教振興の天職を盡したり。斯く神は此律法に依りて其民を教育訓練し、以て彼等が外部の法度に依らず自ら治め得る時の至るを待ち給へり。使徒保羅が律法を稱して『基督に導く師傅』といへるは〈加三の廿四〉實に此意義也。

【新約に於る律法】　新約に用ゐられたる希臘語『ノモス』(νόμος) は凡ての律法の意なれ共、冠詞なき時は神の律法又はモーセの律法の義となる。今便宜のために左の項目に從ひ、新約に於る律法の意義を明にすべし。

(一)　耶蘇の律法に對する態度　耶蘇は他の猶太人と同じく、律法の下に生れ、律法の要求に從て割禮を受け、潔めをなし、十二歲の時エルサレムの神殿に參詣して律法の子となれり。而して思ふに彼は律法に從て教育せられたりしなるべし。然れ共彼が律法に對する受動的、無意識的關係は、公生涯に入るに及びて所動的、有意的に變化せり。然らば耶蘇が律法に對する態度如何。(イ)耶蘇は律法を全體として立てたる制度也として承認し、之に犯す可らざる神權を附せり。而して彼は最も明白にして且強き語を以て此意義を顯はし『天地の盡きざる中に律法の一點一畫も遂げ盡さずして廢ることなし』〈太五の十八〉と云ひ、又『我れ律法と預言者を廢るために來れりと意ふことなかれ、我れ來りて之を廢るに非ず成就せんため也』〈玉の十七〉と云へり。彼は律法に從ひ之を成就する者也と信じたり。即ち『律法と預言者は四十六の十六〉と云へるは、舊約の天啓は全體として既に過去に屬せるを云へる也。『我れ新誡を爾曹に與ふ、即ち爾曹相愛すべしとの是也、我爾曹を愛する如く爾曹も相愛すべし』〈約十三の廿四〉と云ひ、又『是故に天に在す爾曹の父の完全なる如く爾曹も完全なるべし』〈太五の四十八〉と云ひて、自己者くは天父を生活の模範となせるは、律法以上の新標準あるを示せる也。彼は又最も明に當時の人々の真心を行爲に依りて說明せられたる律法を非難し、『されど我れ爾曹に告ん』との語を發端として之に靈的解釋を附したり〈太五の廿一以下〉儀文的律法に關しては、耶蘇は多く語らざりしと雖も、彼が倫理的意義なき儀文を排したるは明にして、彼は唯に當時の傳說な攻擊したりしのみならず、手を洗ふことゝ、潔き物と潔からざる物との間に區別を爲すこと等に關するモーセの律法をも排斥したり。

(二)　初代教會の律法に對する態度　初代教會の信者は皆敬虔なる猶太人なりしかば、律法に就ては初め彼等の間に何等の問題なかりき。彼等は基督信徒となりし後も從前と異ることなく、エルサレムの神殿にも參詣し、其他守るべき律法を守り他の猶太人と同一の生活を爲したりき。然るに幾なら少して彼等一般の注意を喚起せる出來事こそ起りたれ。即ちイタリヤ隊の百夫長コルネリヤが、使徒彼得より洗禮を領し教會に受け入れられたる一事にして、割禮を受けたる信徒等は之を聞て驚き、且エルサレムの信徒は彼を爭ひたりしが、彼は其在りし次第を告げて、神の異邦人に賜ひし賜物は拒む可らずとのことを答へたりき〈使十の一—十一の十八〉此は單に一個人のことなれば猶太人信徒も深く心を勞するに至らざりしが、アンテオケを初めとし、保羅バルナバの働に依りアンテオケ以外よりの基督教傳播し、多くの異邦人達を信ずるに至りしより、此等の者にも猶太人と同じく割禮を施すべしとの議論頗る喧しかりき。於是所謂エルサレム會議なる者を開き〈使十五〉異邦人信徒には偶像に獻げし物と血と勒殺したる物と姦淫とを戒むる外、何なも負はせじとのことを議定し、以て律法の問題を一定したりき。然れ共此後尙暫く此問題に就て猶太教與味を帶べる人々と寬宏なる信徒との間に此問題に關し爭論あり。保羅は之がために大に戰ひたりき。

(三)　保羅の律法論　保羅の律法論は其四大書翰(羅馬、哥前後、加、羅)殊に加、羅二書に於て發見すべし。前者に於て律法を稱するは主として儀式的律法にして、後者に於て律法を稱するは主として道德的律法を意義すれ共、保羅に在ては二者共に神の律法にして、其論點律例的服從は救の道に非すと云ふに在り。今左に簡略に保羅の律法に關する立場を述ぶべし。彼謂へらく、人の生活を支配する大なる力は罪と惡靈とにして、之に比すれば律法は唯次位に在り。モーセは猶太人に取りては其宗教上最も大切なる人物なれ共、人類の靈的歷史の上より之を論ずれば、モーセの地位はアダム若くは基督よりも遙に劣れり。然らば律法の猶太人に爲す所如何。其第一は罪を知らしむることなり。『律法に由らざれば我れ罪の罪たるを識ることなし』(羅七の七—廿五)律法は罪を知らしむるのみならず、又罪を犯す者の上に來るべき刑罰を知らしむ(四の十五)律法を犯せることを知るは、即ち又刑罰の身に及ぶべきを知る也。又保羅の云ふ處に依れば、『律法が立つるは罪を增さんため也』(五の廿)『罪は誡の機に乘りて我を誘はし、其誡をもて我を殺せり』(七の十一)法れども之がために律法を立て給へる神を咎む可らず、又律法を非難す可らず。律法は聖く義しく且善也。善なる者我を死なしむるに非す、死なしむる者は罪也、我は肉なる者にして罪の下に賣られたり〈七の十一—十四〉斯く『律法は肉に依りて弱く』〈八の三〉罪と死の法とより我を救ふことは能はす。換言すれば律法は唯人をして罪と罪の刑罰とを知らしめ、且人をして益々罪を犯さしむるのみにして、毫も救拯の力なし。人を救ふ者は耶蘇基督に依れる恩惠にして、是れ活す靈の法也〈八の二〉此外別に救あることなし。去らば基督教徒と律法との關係如何。曰く、基督教徒は律法と最早何の關係なし。『我れ律法に由り律法に向ひて死れり、是れ神に向ひて生きんがため也』〈加二の十九〉彼は律法の下に在りて義を行はんとしたれ共、彼の經驗は、律法に依りては義も生命も得べからざる者なることを彼に示せり。『我れ基督と倶に十字架に釘けられたり、もはや我れ生くるに非す、基督我に在て生くるなり』〈加二の十九〉彼の目的は義を行はんことも也。然れ共是れ律法に依りて達し得べきに非す、唯基督に在りて生くるに在るのみ。律法は肉に由て弱く、能はざる所あり。然れ共靈は肉よりも強く、律法のなし能はざる所を爲し得べし。吾人は肉に從て行はず、靈に從て行ふ、斯くして吾人は律法の要求を成就する也〈羅八の四〉去れば基督教に在ては又律例的の者なる要せず。教會の要する者は唯耶蘇基督に在る生命の靈に律法のみ。保羅は基督教を以て『神の誡なるに在り』(哥前七の十九)と說かるに非す。然れ共彼の所謂守るべき誡は形式的律法に非ずして愛也〈羅十三の十、加五の十四、六の二〉。

(四)　善信榮書記者の律法論　善信榮書記者の所謂律法と稱するは、保羅のそれと異り、道德的律法に非ずして禮拜に關する宗教的制度の謂也。一言を以て此書の思想を云へば、愛に神の民なる者あり。其神に對する關係は、其有する祭司の如何なる者なるやに依りて變化す。而して祭司變化すれば律法即ち宗教的制度も亦變化せざるを得ず。舊約の律法に在りて仲保たる者はレビ的祭司にして『何事をも全ふせし所なし』〈七の十八〉基督教は之に異り、其仲保たる者はメルキセデクの班に在る神の子耶蘇也。『前の法度は其荏弱と益なきを以て廢せられ、更に意れる希望を立てられたり、我儕此望に依て神に近くことを得る也』〈七の十九〉といふに在り。記者は又律法を以て『來らんとする善事の影にして實の形に非ず』と云ひ〈十の一〉基督教を以て律法を廢せる者と爲せり。

オキノ　ベルナルデノ　Ochino, Bernardino　人名　一四八七—一五六五　以太利宗教改革者の一人。フランシス派に屬せし僧侶なりしが、一五三四年には更に同派中の最嚴峻なるカピューシン派に入り熱誠にして非常に雄辯なる說教者となりぬ。ナポリにて大審說教をなせし時之を聽きしチャールス五世は『此男は能く石をも動かす』と言ひたりと云ふ。ヴェチエ其他の都市に說教すれば人民は他の教會を棄てゝ彼に集り、名譽大第に高くして終に法王パウル三世より其の告白師とせられ、一五三八年にはフイレンチエのカピューシン派は彼を舉げて其の管長に選びぬ。然るに一五四〇年彼の說教に神より義とせらるゝことに重きを置き、教第勞慄獄等を無視したる節ありたるは、異端なりとてナポリにて訴へらる。翌年再び前職に選ばれ、其より ヴェネチエにて著作等をなして活動せしが、一五四二年羅馬教廳より召喚せられ、將に之に赴かんとせしに、フイレンチエに至りて友人ペトロ、マータルの時に外國に走らんとするに會ひ、之に誘められて自

ちも脱れてウェヲバに走り、其所にて以太利よりの脱走者等に説教したり。カルヴィンの書翰中にも彼な『見ての點に於て大なる人』と稱せる所あり。同市に在りてもオキノは尚以太利語にて六冊の説教集を著はしぬ。其の説く所は簡單銳利にして福音的なり。一五四五年彼はアウグスブルグに行きて、又以太利人の信徒を牧せしに、四七年皇帝は市民にオキノ引渡を命じたり。されど宣吏の好意に由り脱れてストラスブルグに至り、ベトロ、マータルと遺ひ相携へて英國に走り、倫敦にて又以太利脱走者等の牧師となり、改革主義の著作をもなしぬ。メリー位に即きて彼は再びウェヲバに脱せしが、セルヴェタス處刑に就て否認の意を表せしかば、此にも留まり難くチューリヒに赴きぬ。其頃晩餐に關する二の著作をなし、更に基督の人格、事業、三位一體に關する問答體の書を著はし、又多要主義を是認するが如く思はるゝ結婚論をも著はせしに、是等は懇疑的のものなりしかば之がためにチューリヒを逐はれ、ニュエンベルグに行き、更にクラカオに行きしが、一五六四年加特力教外の外人は皆な波蘭より追放すべの布令出でしに由り、獨逸へ歸らんとして途中にて死たり。

オザノン アントアヌ フレデリー Ozanam, Antoine Frédéric 『功德』(オヂヤヒ)の條を見よ。

行(オヂヤヒ) Works.

人名 一八一三—五三 佛蘭西の學者、著作者。伊太利ミラノに生れ、リヨン及巴理にて學び、一八四一年ソルボンの外國文學教授となる。篤信博學にして文才秀つ。ギボンの羅馬衰亡史に對する著作をなし、基督教文明の歴史たる羅馬教會の發展を書き表はさんと企てしが之を大成せず。唯だ斷片的に『ダンテ及び十三世紀の加特力哲學』(『五世紀文明史』(エー、ジー、ダリンの英譯二冊あり)其他を著はせるのみ。全集十一冊巴理より一八六二—七五年に出づ。

オジアンデル アンドレアス Osiander, Andreas

人名 一四九八—一五五二 獨逸改革者の一人。インゴルスタット大學に學び、一五二〇年ヌレンベルヒにて僧となり、同地の聖伯來語教師又聖ラカレンス教會の説教者たりしが、改革派に與みし、其の性質の勇猛激烈なるより其の主義の誘入に非常なる霊力をなし、一五二四年には町會に向て書を附り、三二年にはプレッツと共にヌレンベルヒ及びブランデンブルグのルーテル派諸教會の憲法を組立てたり。然れども剛情と傲慢とのために友人との間面白からず。一五四八年『インテリム』(サヤールス五世が試みたる新舊教調和のための讓歩の個條)の成立つやヌレンベルヒを去て普漏士のアルブレヒト侯の許に行き牧師となり、又ケーニヒスベルヒ神學校の初等教授となりしが同地にても亦改革時代中に最も醜かりし論爭を引起せり。論爭は一五四九年四月に彼の爲したる法律と福音ふ結論演説をマッテアス、ラウテルヨンが信仰に由て義とせらるといふことを説き、舊教をもカルヴィン説をも共に排し、義とせらるゝは義を嫁せらるゝに非ずして神の本質的の義と基督の神性とを注入せらるゝなりてふ神祕説を唱へ、マルチン、ケムニッツ及びメルキオル、イウンデルが之に反對したる時に於て絶頂に達せり。メールリンは初め兩派を調和せんとせしが直ちにオウアンデルの反對者となりぬ。オウアンデルは侯に説きて反對者の著作の出版を禁止することをも勉めぬ。此の論爭は普漏士の境外にまで波及し、メランクトンは書をオジアンデルに贈りしも唯だ激なる返書を得しのみ。斯くて八方に敵を受けて職はんと勇を鼓せる時オウアンデルは俄に死せり。侯は平和にせよと命ぜしもメールリンは追はれオウアンデル黨は勝を占めぬ。

オスグード サミュエル Osgood, Samuel

人名 一八一二—八〇 米國の牧師又文學者。ハーバルド大學卒業、同神學校を出で、チャンニングア及びウェーアに感化せられて、一八三五年ユニテリアン派に入り教職となり、三八年より同派の三の教會を引きつゝき牧せしが、六九年神學説に變化を來し、一年間歐洲に旅行せし後監督教會に入り、聖ヨハネ教會の牧師となる。紐育にては第一流の文學者として認められ、種々の文學的團體に深き興味を有するに由て名高くなれり。『基督教傳記の研究』『人と僧に在る神』『人生行旅の里程表』『學生生活』等の著あり。

オスモンド 聖 Osmond, St.

人名 もとノルマンデーの人。『征服者』ウィリアムに從て英國に行き、一〇七八年サリスボリーの監督に任ぜらる。其の著『リーベル、オルデナリス』は禮拜の儀式を説ける者にてヘンリー八世の時まで用ひられたり。一四五八年聖者の列に入れらる。

オスワルド 聖(セント) Oswald, St.

人名 ノルサムブリアの王。六〇五年頃生れ六四二年ブリテン偶像教の代表者たりしペンダと戰ひて死し、聖者號を贈らる。エデルフリスの子なりしも少時故ありて流寓し、イヨナの僧院に於て基督教を教へられしかば、歸りて位に即きて後大いに教の傳播に力を悉し、エーダンの傳道旅行には同行せり。

オーステルツエー ヤン ヤコブ ファン

Oosterzee, Jan Jokob van

人名 和蘭の神學者。一八一七—一八八二 ウトレヒト大學にて非常の優秀を以て學を卒へ、一八四〇年ケムチスピンチンディク及びアルクマールの牧師となり、一八四四—六二年ロッテルダム大教會の牧師となり、其より死に至るまでウトレヒト大學教授として、初め聖書神學、組織神學、牧會學、説教學を教へ、後新約聖書總論、教理史、宗教哲學等を教へ、和蘭の福音派の領袖を以て目せらる。學問辯舌信仰共に一代に傑出し、著書又頗る多く、英語に譯せられて其の保守的實際的なる宗教家等に稱せらる。『基督傳』(一八六三—六五、第二版)、『基督論』(一八五五—六一)、『路加傳講義』(一八五八、英譯あり)、『牧會的書翰』(一八六三第二版)、『雅各書』(一八六六第二版)、『新約聖書神學』(一八八二第四版)、『基督教教理』(一八七〇—七二)等は其重なるものにて殆ど悉英譯ありて盛に行はる。又自叙傳及辯證學の遺著あり。

オッカジオ論(ロン) ウィリアム Occam, William (Guilielmus Occamus, or Ochamus).

人名 一二八〇頃—一三四七頃 煩瑣哲學者。一三〇〇年英國リンコルンシヤ州ストーのディーン職に擧げられしも之を辭し、フランシス派に入りしが、後巴理に行きてダシ、スコツスに學び、自ら又哲學を教へ、不可屈の學者たりとの名を博せしが、アンセルム及びヴィクトリヌ以來哲學界を獨占せし實在論に反對して唯名論を主張し、之を復興せんとせしかば、多くの反抗に會ひ、其の説は後には巴理大學にてさへ教ふることを禁ぜられたり。彼は一たび英國に歸りて其派の地方寺院取締となり居たるが、一三二二年ベルヴアにて開かれしフランシス派總會にて、當長たるチェセナのミカエル、同盟たるベルガモのボナグラチアと共に、法王の決定に反對して自派の主張を表明し、基督と使徒とは曾て私産を有したること無しと論ぜしかば、三人ともアビヨンなる北朝法王宮に呼ばれ、尚不屈なりし故に一三二四年獄に投ぜられたり。四年の後終に脱獄して以太利に走り、帝ルイス及び南朝法王ニコラス五世に稱りしが、ルイス獨逸パイエルンに歸り退くことゝなるや、また同盟の友人等と共に之に從ひ行き、ミユーニヒに居を定め、盛に文學的の活動を勉めて直接法王及び法王政治を攻擊したり。然れども晩年に及び友人等或は死し或は法王に和するを見ては寂莫の感に堪へず、終に却を申し出で寄島く之を容られたり。彼は天性より批評家なり。哲學の實在論と教會の教義的傳説と當時の政教説とに而も敬虔を以て批評せり。

オッカムの唯名論　オッカム論じて曰く、もし通性個物に先ちて存在せば、其存在する狀態に於ては必ず個々物たらざるを得ず。若し又通性を以て個物の中に存在する者とせば、是れ通性なる者となすべき也。何となればそは多なる物の一々に存在せざるべからざれば也。又此の如く見る時に、一個物は多の實物の結合したる者とならざる可らず。何となれば種々通性が一個物に並存すれば也。斯く通性は個物に先ちて存するとも考ふ可らず、又個物の中に在りとも考ふ可らず、唯吾人の概念として存在すと見るべき者也と。彼の唱へし唯名論は斯くの如くロッセリーヌス等が唱道せし所とは同じからず、寧ろ概念論とも云ふ可きもの也。

オッカムの知覺論　オッカムに從へば、吾人の外物を知るは直接也、去れど吾人の思ひ浮ぶる所は外物の模寫に非ずして唯外物の自然の標幟也。言語は之と異りて勝手に定めたる標幟也。故に吾人の知る所は外物其れ自身に非ずして唯其ふるしとなるもの也。故に吾人は又外物それ自身の有樣を知る能はず。外物の知識に優りて確かなるは吾人の内心を見る知識也。去れど内心の知識も亦所謂靈魂の本體を見るに非ずして唯其狀態を知るに止まる。之を要するに一切の知識は外物を知覺するか、將た内心の狀態を知るか、其何れかの經驗に基きて來る者にて、此他に吾人の直接に知識し得る者なし。故に又神を知る直接の知識なし。宗教上の事は論証す可らず　神を知る直接の知識なし。故に神の存在及び其一なることは、最密なる意義に於て論証すること能はず。因果の鏈鎖は端なき者にして何處に最初の原因あるかを定む可らず、又假令最初の原因ありとするも、之を唯一不二也とすべき充分の理由なし。故に果より因を推す論を以てするも、遂に究極的原因に到達することを必ず可らず。又靈魂が非物質のものにして、不死也といふことも道理上充分の証明を爲す可らず。三位一體論、萬物創造論、化身論の如きも亦道理を以て証明す可らざるのみならず、通常所謂道理に違反する所ありといふことを得べし。

二重の眞理　オッカムは又以爲らく、哲學者に取りて眞理ならぬことも宗教家に取りて眞理なることを得べく、又宗教家の承認することにして、哲學者の承認す可らざることなきに非ずと。斯くて二者の範圍を異なりと爲してより彼此其眞理なる異にせりと見るに至り、從て二重の眞理といふ説廣く唱道せらるゝに至りぬ。

斯くして信仰と理性との職務を界して兩斷するに至

り、宗教の哲學的根據を打ち建つるなほて當初の目的とせりし頑瑣哲學は、頓みに衰頽の域に沈淪しぬ。

牛津 Oxford. 【地名】

英國オックスフォルドシアの首府にして、倫敦の西北五十五哩テームス、チェルウェル兩河の會合する處に在り。英國最古の大學所在地として最も有名也。牛津大學の初めて建てられたるは第十二世紀の頃なれ共、アルフレッド大王之を建てたりとの傳說に信じ難し。同世紀の終には學生の數四千あり。第十三世紀に至りては頑瑣哲學及び自然科學の根據地として、歐洲に於ける大學の魁たり。ダンス、スコタス及びロージャー、ベーコンの名最も顯はる。同世紀の終よりメルトン、カレッヂを初めとし、幾多のカレッヂ漸次設立せられ、同大學は長足の進歩を以て發達せり。コルバス、クリスチ(一五一六)クライスト、チャルチ(一五二五)兩カレッヂの設立せらるゝに及び、牛津は新學問の中心たり。後者はカルヂナル、ウォルセーの地を擅ひて建設せし處也。然れ共宗教改革の時教會財産の沒收せらるゝに及び、大學としての牛津は殆ど滅亡せしが、此時よりち牛津監督區は新に設立せられたり。エリザベス女王の朝牛津大學は再び歴史に向ひ、トマス、ボードレー兩は宏壯なる圖書館を設立し、且多くの圖書を備へたり。自然科學が牛津に於て重要の地位を占むるに至りしは、ロードが配ロン、カレッヂの學長(一六二一—二二)及び大學總長(一六三〇—四一)たりし頃よりの一ことにして、一六六二年王家學會の設立せらるゝに及びて其極に達せり。此時期は第十九世紀の終を除き、牛津の歴史ありてより以來最も多くの建物を加へたりし時にして、ボードレー圖書館を擴張し、英國最初の植物園を設け、又巨多の教堂を殿立せり。王政復古(一六六〇)後牛津は再び沈衰に赴き以て第十八世紀の終に及びしが、第十九世紀の初試驗制度改正したりし以來又多くの改革を爲せり。即ちフェローたる者は獨身生活を爲さざる可らずとの規定、及び教職たる者に非ざれば フェローたるを得ずとの規定を廢止し、新學科殊に自然科學に關する課目の新設し、非國教徒に對する制限を廢止し、非國教派の神學生を養成せんため、マンスフィールド及びマンチェスターの二カレッヂを新設し、且女子に入學の特權を與へたり。カレッヂは各々自治の權を有し、其理事會員に缺員ある時は自ら之を補ひ、且學科を定むるの權を有す。然れ共試驗を管理するは全く大學の權に屬す。此大學に屬するカレッヂは合せて廿一箇にして、外に五箇の學院を有す。餘橋と相並びて學問の府と稱せらる。

牛津大學は英國の宗教的生活と最も親密なる關係を有す。即ち第十四世紀に於てはウイックリッフ改革運動の中心となり、改革者自らパリオル、カレッヂの學長たりき。後リッドレー、ラチメル(一五五三)及びクランメル(一五五六)—何れも餘橋大學の卒業生也—は此處に於て火刑に處せられたりき。第十七世紀に於る內亂の時には、スチュアルト朝に與し、チャールス王は三年間此處を以て其首都となせしが、國會黨は一六四六年牛津を攻めて之を取り、王黨に與せし者を放逐し、一六五一年クロンウェル選ばれて總長となれり。王政復古後大學は再び王朝に忠誠を表し、國會黨のために放逐せられたる者は召還せられたり。後ウェームス二世即位するに及び、大學は王の羅馬教と高手的政策を稟受せざりし故を以て、其怒に觸れたりしが、女王アンの朝に至りてウェームスに對する同情大に大學內に勢力を得るに至れり。第十八世紀に至り牛津は又英國の歴史に於て最も著明なる宗教運動の出立點となれり。此運動は即ちメソヂスト運動と稱する者にして、其唱首ジョン、ウェスレーは牛津の學生にして又其フェローなりき。ジョンの弟チャールス、ウェスレー及びホイットフィールドも亦此大學に學びたる者なりき。第十九世紀に至り牛津は又宗教的中心にして、カルヂナル、ニウマンを首領とせる牛津運動なる者は即ち此處に起れる者也。(牛津運動に關しては尙其條を見よ)。

宗教會議も屢々牛津に開かれたりしが、其中殊に注目すべき者二あり。其一は一三八二年開かれたる者にして、化體說を攻擊したりとの理由を以てウイックリッフを召喚せる者也。此會議は彼に向て刑罰的の宣告を下さざりしが、彼は王命に依りて大學に於て教授することを禁ぜられたりき。其二は一四〇八年開かれたる者にして、ウイックリッフの黨に向ひ、謹め許可を受くるに非ざれば彼の著書を讀む可らず、殊後英譯の聖書を用ゆ可らずと云へることを初とし、十三箇條の命令を下せる者也。

牛津監督區は一五四二年ヘンリ八世に依て初めて設置せらる。監督附屬の教會は初めオスチーの禮拜堂なりしが、一五四六年以降牛津クライスト、チャルチを用ゆ。牛津監督の最も有名なるはヘンリー、コムプトン(一六七四)ジョン、フェル(一六七六)トマス、セッケル(一七三七)及びサムエル、ウィルバーフォルス也。

牛津運動 The Oxford Movement. 【專讀】

一八三三年英國牛津に起れる英國教會內高教派の運動。第十八世紀に起れる信仰復興の結果、及び政治上自由思想進歩の結果として、福音主義の低教會派英國教會內に在りて漸く勢力を有するに至れり。此低教會派は非國教派の人々と交り、彼等と傳道事業を共にし、且教會の獨立(國家に對して)福音の自由(正統說に對して)及び信徒皆祭司主義(教主主義に對して)を唱へ以て高教派に反對せる者也。此二派の外に又廣教會派なる者起れり。此派は前二派の如く組織的の團體に非ざれ共、其中には獨逸神學及び哲學に通ぜる著名の學者多く、唯に高教會派の頑固、狹隘に反對したりしのみならず、又教會及び神學の廣闊なる基礎を求めんとしたり。非國教會諸派の活動さへあるに、國教會內の此二派が之と紛糾を通じて之を助くるが如き舉動を爲すを見て、高教會派の人々は之に反動して、自派の利益を保護せんとして極端なる運動を起せり。此運動の中心は二人三三年以來牛津にして、其首領はピュセー(Pusey)ニューマン(Newman)二教授、其機關はエ Tracts for the Times。也。彼等がトラクテーリアン(Tractarians)と稱せられたるは之がため也。此トラクトは一八三三—四一年に出版せられたる九十箇の論文にして、此等の論文は英國公會主義に基き、一方に羅馬法王に對して眞正のプロテスタント主義を保持し、他方に極端なるプロテスタント主義に反して眞正の公會主義を保持せんと努めたる者也。然れ共三十九箇條の許す限り羅馬加特力教義に傾き、遂には全く其教義に屈りたり。即ち此等の論文の主意とする處の梗概を述ぶれば、第一は監督政治を尊重することにして、即ち監督を通じて使徒等より傳はりたる教職の權威を承認し、尊重し、監督なき宗派の教師は教會の禮典を執行する權利なき者にして、神より刑罰を受くべき者也とすなし、又此の如き靈教師の關係する教會の信徒は神の契約に與ることを能はずとのことを說きて、國教會と他教派とを區別を極論し、第二は教會の禮典を尊重することにして、信仰及び斷祭の如き方法を以て神の恩惠を蒙るべきことを教ふる說に反對し、聖公會の祭司が執行する禮典を以て神の恩惠を蒙るべきことを說き、又洗禮に依りて新に生れ得べきことを教へ、晚餐を說明するに聖體現在說を以てし、基督の肉體が實際にパンと葡萄酒と共に在ることを論じ、第三は教會の儀式を尊重することにして、彼等は羅馬教の如き儀式を執行することを喜び、司式者は教師に非ずして祭司なりと斷言し、祭司は羅馬教の僧侶と同樣の法服を著すべく、又日中にても鐘鈴を鳴し、香を燒き、而して早朝食前に晚餐を執行し、或は信者のために祈禱をなし、或は信徒の祭司に對して懺悔すべきことを論じ、第四は古代の教會を尊重することにして、彼等は第一世紀の教會は未だ以て完全なる摸範となす可らざれ共、最初三百年間の發達は尙之を聖靈の働に歸すべく、第三、四世紀の教會は凡て完全なる摸範となすべしとのことを說きたり。以上はトラクテーリアン所說の大要を說きたる者なるが、ニウマンがトラクト第九十に於て、三十九箇條の信條を、教會の教義及び行爲に關し羅馬加特力教の立脚地を取れる者に依りて承認せられ得べき基礎に據りて說明せられ得べしとのことを論じたるよりしば、牛津大學はトラクトは大學の准可したる者に非ずして論ずる所の如きは許容し難き者也とのことを公言せざるを得ざるに至れり。且從來此運動を贊成したりし牛津の監督パゴットは、トラクトの續刊を禁止し、他の監督等も亦多くは彼等に反對し、非公會派の人民は彼等を憤りたりき。然れ共又他方に在りては高僧及び貴族の中に、彼等を庇護する者も少からざりき。一八四五年ニウマンは羅馬教會に轉じ、留後神學の研究に其餘生を送れり。法王ピウス九世は彼に對して別に何等の注意をも拂はざりしが、一八七九年レオ十三世は彼の羅馬教會に對して爲したる功績を認め、醇ふるにカルヂナルの位を以てしたりき。トラクテーリアンの多數はニウマンの取りたる行動を不可となして英國教會に留り、ピウゼー(一八八二死)を首領と仰ぎ、是よりピウゼー派(Puseyites)と稱せられたりき。然れ共又ニウマンの例に敢ひたる者も少からず。一八四六年の末に羅馬教會に轉じたる著名の教職及び信徒の數實に百五十人以上に上りたりき。

トラクテーリアンの徒は一八四六年より五八年まで十二年間二箇の教義的論爭のために大なる影響を蒙りたり。其一はゴルハム事件(The Gorham Case)と稱する者也。元來三十九箇條の信條は、洗禮を以て新生及び神の子となることの媒介たりと云へるルーテル派の教義の上に立てる者にして、トラクテーリアンの徒は之に非常の重を置きたりしが、エキセステルの監督區裁判所は監督の處置を以て正當也と判決したり。然るに樞密院の審判委員は前裁判を不當となし、ゴルハムを教職に任命すべしとのことを命ぜり。於是ゴルハムはカンテルベリーの大監督に訴へたりしに、大監督區裁判所は監督の處置を以て正當也と判決したり。然るに樞密院の審判委員は前裁判を不當となし、ゴルハムを教職に任命するを拒みたり。於是ゴルハムはカンテルベリーの大監督に訴へたりしに、大監督區裁判所は監督の處置を以て正當也と判決したり。然るに樞密院の審判委員は前裁判を不當となし、ゴルハムを教職に任命すべしとのことを命ぜり。於是ヒルポッツは初め女王の裁判所、次に高等法院に訴へたりしかども、樞密院の判決を覆すことを能はず。トラクテーリアンの徒凡そ千五百

牛津運動

人相集りて會議を開き抗議を申出でたりしも何の効果なく、一八五〇年ゴルハムは遂に教職に任命せられたりしが、抗議者の多數は羅馬教會に轉じ、其外凡そ六百人はニウヲーランドに殖民せり。第二はデニソン晩餐事件（The Denison Eucharist Case）と稱し、一八五一年ヒロピー派のアルチディーコン、デニソンなる者晩餐に關するカルヴィン説を代表せる三十九箇條の信條に反對し、不信者も共に主の肉を食ひ血を飲み得べしとのことを主張したりしかば、一八五四年デヒトルと稱する一教師之が女王の裁可所に訴へたりしかば、裁判所は大監督なして之を審理せしめたり。大監督に依りて任命せられたる委員は審理の結果原告の申分を承認し、デニソンにして其説を改めずんば其職を褫はるべしとのことを判決せしが、上告院は判決の手續に誤ありとの理由を以て、其判決を停止し、デニソンは依然其職に留まれり。

羅馬教的教義の發達に努めたりしトラクテーリアンの徒は、一八五〇年の中頃より其結果を教會の儀式及び生活に適用し初めたりしが、期くして彼等は新に儀式派（Ritualists）の名を得たり。（『儀式派』の條を見よ）

オッテルバイン ヒリップ ウィリアム Otterbein, Phillip William 人名 一七二六—一八一三 米國『基督同胞教會』（Church of United Brethren in Christ）の開祖。獨逸に生れ、一七五二年獨逸改革教會の牧師となり、シュラッテルに從て米國に移住し、ランカスターを始め同教派の諸教會に牧師たりしが、其間に自ら心の變化といふを經驗し、新總諸集會を組織し、普通信徒を主會者として教育し、屋外にて禮拜をなし、他派の牧師と親交を結び、一七八四年には博士コークを助けてメソヂスト派の友たるアスベリーを監督に任ずることに與かり、一八〇〇年にはメンノー派の友ベームと謀りて十三人の教役者の會合をバルチモーアに催し、其結果『基督同胞教會』なるもの組織せられたり。オハイオ州ウェスタービルのオッテルバインは此の派の管轄に屬し此人の名を冒む。

オットフリード ワイセンブルグの Otfried of Weissenburg. 人名 九世紀の人。獨逸マインツのワイセンブルグの僧院の僧なり。一萬五千句を以て編書書の物語を詩に作り、當時街民間に殘れる異教の歌を驅逐せんとしたる人也。

オーツ タイタス Oates, Titus 人名 一六一〇—一七〇五 英國人、名高き法王陰謀なるものゝ構造者。父は浸禮派の教師、己も銀行卒業後浸禮派の教師となりしが、國教會に轉じ海軍附牧師となり、更にヴァラドリッド及び聖オーマーのイエスイト教院に入りて天主教會に轉ぜしが、過失ありて放逐せらる。然るに其頃（一六七八）英國に於ては天主教徒再び國教たらんことを企て、其の活動隆然盛んなるものあり。皇太子ヨルク侯は勿論、國王チャールス二世までも之に同情し居たるを以て、之新教徒に不安危懼の念に動かされ居たるを以て、之を見て取りたるオーツは法王新教徒を根絶するの陰謀を企て居れり、自己は之に關する密書を手に入れたりと稱し、之をエドモンドベリー、ゴドフレーの前に保證したり。人心は之に由て甚だしく激動せしが、折しもゴドフレー暗殺せらるゝありて更に狂へるばかりとなり、貴族兩議院は事實を調査し、五人の貴族院議員は獄に下され、兩院は武器にて護衛せられ、其街衢は鐵鎖にて遮斷せられたり。貴族院は其年天主教徒を兩院より除名するの案を可決し、此案は一世紀中の間行はれ居たり。慧盛やゝ鎮定せんとせし時ペドローなる者現はれて、軍隊を上陸せしめ、新教徒を虐殺せんとするの陰謀あることを知れりと誓ひしかば、騒亂は益に増して激しく、オーツは非常なる人望を得て、白館（ホワイトハール）中に室を與へられ、千二百磅の年金を給せられしが、一六八〇年スタッフォルドの處刑後人心の反動起り、且つヨルク侯はオーツの猛烈なる攻擊に對して讒毀の訴訟を起し、オーツは之がために十萬磅の科料に處せられし上獄に下されたり。後、王位に即きて後更にオーツを罰し、首枷臺に登らしめ、烈しき笞刑を加へぬ。後ウイリアムとメリー位に即くに至り、彼は免されしのみならず、四百磅の年金を給せられたり。當時天主教の陰然たる活動ありしは事實なれども、オーツの稱へし如き陰謀の企てられし形跡は見えず。彼は一般に虚構時人を欺きし者なりと信ぜらる。

オトー フライジングの Otho of Freising. 人名 一一一一—一一五八 ヘンリー四世の孫、コンラド三世の半兄弟、フリードリッヒ一世の叔父、巴理にて學び一一三三年モリムンドのシトー僧院に入り、三七年フライジングの監督となり死に至る。時の政治及び宗教の活動には悉く與りたるが尚歴史家として最も名を得たり。其の『ドー、デュアプス、シビタリブス』は歴史なれども、寧ろ歴史哲學にして此世の不幸と天國の光榮とを對照し説明せるものなり。

オトー パムベルグの Otho of Bamberg. 人名 一〇六〇—一一三九 ポメラニヤの使徒。スプビヤに生れ、波蘭にて學校教師となり、ラデスラウスー侯の信任を得、次でヘンリー四世に事へ、

一一〇一年尚書に、聖年パムベルグの監督となる。一一二四年ポメラニアに行きて國内に住むスラヴ人に基督教を傳ふ。盛んに行幸を聖へ多くの贈物を贈らして至りしかば、既に基督信徒たりしポメラニヤ侯と紀とは厚しく之を迎へ、一年程の滞在に由て重なる都市には信徒生じたり。此に於て其の隨從僧アダルベルトをユーリンの監督に任じて歸り、二七年再び之を訪ひたり。八九年クレメント三世より聖者號を贈らる。

處女 Virgin（ヴァーヂン） 術語 希伯來語 בתולה（ベトゥラー）は通常男知らぬ婦人を指す、申廿二の廿三、母後十三の二の如し。此語は בן（ベン）を加へ、曾嗜的に人民、種に又也列國民の義に用ゐらる。寡婦七の廿二、耶十四の十七等の如し。然れ共又他の國民にも用ゐらるゝことあり。寡廿二の十二、四十七の一の如し。耳一の八には婚嫁せる年少き婦人に用ゐらる。אלמה は比較的稀に用ゐらるゝのみなれば、其意義を決定せんこと難し。創廿四の四十三にリベカに關聯して用ゐたる此語は、處女の義なること明也。歌一の三（耳譯には『女子等』とあり）は同一の意義なるべけれ共、必ずしも然るを要せず。歌六の八には后、妃嬪と區別せるを以て、是又同一の意義なるべけれ共、必ずしも然りとなすを要せず。故に聖七の十四の意義も、言語の用法に依りては決定し難し。然れ共前後の文、及び八の一—四より之を察するに、其與へられたる徴兆なる者は、其子の出生の奇跡に非ずして、其出來事の遠に來るべきこと、及び其子に與へらるべき表徴的名に在り。七十人譯が之を παρθένος と譯せるは、思ふにインマヌエルの母は其當時に於ては處女なりしとの意義にて、處女の意に解したりしものなるべし。馬太傳は七十人譯より引きて、之を直ちに耶蘇が處女より生るゝことの預言也となしたり（『インマヌエル』の條を見よ）。近世に至る迄基督教徒も亦一般に斯く解したりき。猶太人はユスチヌス以來之を疑ひ、アキラが舊約聖書を希臘語に飜譯したりしも亦主として之に依れりといふ。新約には歌十四の四の外此語に訛き別に言ふ處あるなし。其處にては貞潔を守れる人を指して云へり。

オネシモ Onesimus. 人名 『腓利門書』（ピリモンジョ）の條を見よ。

オナイダ コンミュニチー Oneida Community. 結社名 自稱宗教的完全論者の一團體にして、財産及び妻の共有を主張したりノイス（John H. Noyes）の創立に係る。ノイスは一八三〇年米國ヴルトマウス大學を卒業し、後アンドーヴァル及びニッハンガにて神學を學び武教家となり、オナイダ及びファリングフォルドに結社を設け、盛に其主義を鼓吹せしが、ハミルトン大學の教授ミーアス及び其他の人々のために反對せられ、一八七九年遂に解散するに至れり。

オノリウス Honorius. 人名 羅馬帝。三九五—四二三年在位。十歳の時テオドシウス一世を嗣ひ、兄弟アルカディウスに東帝國の、オノリウスは西帝國の主となる。性格弱くテオドシウスの異教反對法律を嚴々極端まで實行し、三九九年には異教神殿を一時に毀たしめしが、其の屬行は不能に終れり。北亞弗利加にては異教徒の方基督信徒より多かりしが、後者却て此の法律のために苦められぬ。四〇九年帝は心を轉じて一視同仁の布令を發せしが、四一六年再び異教徒を軍隊行政の官職より解けり。ドナチス派に對しては移送罰金を加へしが、却て同派を狂暴に誤りたる誤ありき。

オノリウス一世 Honorius. I. 人名 羅馬法王。コンスタンチノープル及び亞歴山の皇帝及び教長等に與みして基督一意論を唱へ、コ府の教長ヘニ書翰を贈る。之がため六八〇年の第六世界會議は彼及び同論者を宣呪し、後龍者レオ二世は其後この決議を認定せり。此の事實は法王が羅馬教會の異端と稱するものに陷りしことなるを以て、後世法王の不可謬權を論する理由となりしが、天主教の學者等は或は此の事實を否定し、或は種々の辞を設けて強て之を辯じ、一八七〇年法王不可謬權が教會の教義となりし後には多くの議論類出したり。

阿巴底亞書 Book of Obadiah. 聖書名 舊約聖書中の一書。預言者中最も短き者にして僅に廿一節より成る。

【名及び詞典に於ける地位】 オバデヤの名は舊約書中屢々見る所にして、『エホバの禮拝者』又は『エホバの僕』の義なるべしといふ。尤も此預言書のオバデヤは果して何人なりや、ヂリッチは之を以て、ヨシャパテが教導を爲さしめんとてユダの邑々に遣はしたりし方伯（代上十七の七）と同一人也となしたれ共其然るや否確かならず。又此名に一節—九節に記されたる預言の作者の名なりや、又は之を補遺して此書を現在の形狀になしたる記者の名なりや、若くは又此二の記者共にオバデヤと稱せられたりしや、今日より之を定め難し。希伯來語の聖書には、此書は十二小預言書中の第四位、亞歴書（アモス）と約拿書との間に在り、希臘譯聖書には第五位、約耳書と約拿書との間に在り。希臘譯聖書には第五位、約耳書と約拿書との間に在り。此書は曾て新約聖書中に引用せられたることなき舊約聖書中の一也。

【内容】 此書全篇殆どエドムに關する預言を載

す。即ち先づエドムの滅亡近きに在るべき旨を預言して曰く、彼等の住せし山岩の巍嵩も恃むに足らず、敵は假令彼等が鷲の如く高く騰り、星の間に巣を造るとも之を地に曳き下すべし、彼等を誘ふる智慧も施すに處なかるべしと(一—九)彼れ其理由を示して曰く、是れ彼等がエルサレムの災厄に嘲りし日、之に暴虐を加へたりしがため也と(十、十一)彼は此に於て彼等に告げて曰く、エダの子孫の滅亡を喜ぶが如き無慈悲のことを爲すべからずと(十二—十四)而して彼は又初に歸りて彼等の上に來るべき刑罰を述べて『エホバの日萬國に臨むこと近し、汝の爲せるが如く汝も赤ぜられん』と云ひ、又『救者シオンの山に上りてエサムカの山を鞫かん、而して國はエホバに歸すべし』と云ひ(十五—廿一)以色列國民最後の勝利を預言せり。

【時代】此書の時代を決定すべき重なる標準二あり。即ち一は十一—十四節の言にして、二はエドムに關する耶利米亞書の預言との關係也。(一)十一—十四節に於て本書の記者は、エルサレムの遭遇したる『災難の日』『滅亡の日』『苦難の日』に就て語り、此日には『他國人』エルサレムに攻め入り『戲なひき』たりしこと、及びエドム人は猶太人の滅ぶるを喜びたりしのみならず、又其敵を援けて路の辻々に立ち、其逃亡者を斬りたりしとのことを云へり。此書の記事は紀元八六年カルデヤ人がエルサレムを滅したりし時、エドム人が猶太人に對して願はしたりし敵意に就て語りたりし者と見るべし。(二)本書の此記事と耶四九の七—廿二の記事とは密接なる關係あり。此關係は一方の書他方の書より借り來りしか、又は兩書共或る早く書かれたる同一の書より之を得來りしとなすことに依りて說明し得べし。而して此二書を比較するに、全體として本書に記されたる預言の一層創作的形狀を有するが如し。然るに耶四十九の七—廿二の年代は四十六の一、二(紀元前六〇四)及び內部の証據に依りて、エルサレムがカルデヤ人のために取られたりし前の時期也と定まり居れば、本書の預言にして、もし此出來事の後に起りたるエドム人の行爲を指したる者也とせば、耶の模倣となり顯し。故に此二書の類似は、二書共に二書より先きに存在したりし預言より得來りしと者にして、本書は些少之を變化して從に入れ、耶に更に大なる變化を施したる者と假定することに依りてのみ解說し得べし。此先きに存在したる預言は、本書一—九節より成る。從にぱ前五六年の特殊の狀態には言及せず。耶には順序を變化し、七、九兩節を缺けり。尤も此預言は全體として論ずれば、本書の方創作的にして、特殊の事柄より論ずれば、耶の方に創作的の要素一層多きが如し。

【參考書】總論としてはドライヴェル、クイチンの舊約聖書總論、註釋書としてはエワルドの『舊約の預言者』ツヌルツ、アダム、スミスの『十二預言者の書』マイリック(『スピーカース、コムメンタリー』中の)ペルーン(劍橋聖書)等を推す。

オバーラン ジャン フレデリー Oberlin, Jean Frédéric 人名 一七四〇—一八二六 アルサスローレーヌの牧師、又改革者。ストラスブルクにて修學、一七六七年スタインタルの牧師となり、留來死に至るまで六十年間其職に在りき。スタインタルはアルサスローレーヌの邊境にある寒邑、住民は早く改革教を奉じ居たり。オバーランは此の貧窮無學の民の間に興味と熱心とを以て活動し彼等の狀態を進歩せしめんと勵めたり。彼は宗教的の事を教へしのみならず、學校を建て、農事の改良を敎へ、道路橋梁の工事に率先して自ら勞働し、商庫貯蓄銀行農會を設立し、製造所を誘ひてスタインタルに移らしむる等の事をなせり。牧師としては感化强くして族長の如く、其の說教は平易簡明にして同情に富みたり。一月三回の日曜には佛蘭西語を以て說教し、第四日曜には獨逸語を以てせり。收入の十分の三は慈善のために投じ、尙外國傳道にも寄附する所あり。繼神は寬大にして天主教徒をも許して晚餐に列らしめたり。永世に關しては「ッヴァター」等の說に同意なし、天の地獄を教會に掛け、又靈を信ずべしとなし、永遠の刑罰なぱ否認したり。彼は佛蘭西革命を歡迎し是を以て非基督的なる貴族僧侶主義を破らんとする小石なりとなし、國民的說節を盛に守り、自ら忠君主義の敵なりと稱し、人民の主權を極度までに認めたり。彼の教會に一時閉鎖の厄に遭ひしも風せずして孤外にて說教し、スタインタルに逃歸し來る者をば寬容したり。其の功績は認められ共和曆二年國會は感謝の決議を發せり。同盟軍アルサスに侵入せし時もスタインタルは彼のために軍隊の壓迫を免れ、一八一九年には名譽賞牌を得たり。彼は又倫敦聖書會社の事業に深き興味を抱き、其の最初の外國會員なりき。

オプタータス Optatus. 人名 北亞弗利加ヌミデヤのミレーヴの監督。其の一代に就ては何等の傳ふる所なし。唯だ其著『ドナチスマート、ドナチスタールム、アドヴェルスス、パルメニアヌム』續れるのみ。同書はドナチス派の人パルメニアヌムの著書(此書今はなし)に對し加特力派の立場より抗論したるもの)にて、以てドナチス派の歷史を知

るべく、又教會てふものに就て彼のアウグスチン等の有したる思想の先驅の既に彼に於て存したること、又後に四方教會の固持したる晚餐に就ての容說的思想も既に彼に於て始まれること、ペテロの教會を代表するの思想は亞弗利加にても承認せられ居りしことを見るに足る。書は七卷より成れど第七卷は後人の附加なるべしと云ふ。エロームに從へば三六四年より三七五年までの間に書かれたる者なり。一五四九年メーエンス出版をはじめ多くの巴理版あり、最も佳なるは一七〇〇年のデュピン版なり。

オベルリン神學 Oberlin Theology. 『フィンキー、ルー、ター』の條を見よ。

オベルリン神學校 Oberlin Theological Seminary. 學校名 米國オベルリン大學に屬する神學校にして、其教授は大抵會衆派に屬し、其神學は主ドリルド派のカルヴィン主義に傾きたりき。

オラフ 聖 Olaf, St. 人名 諸國の王。一〇一五—三〇在位。もと舊王家の系なれど漂泊の中に教育せらる。其信仰者なれども性暴惡にして海賊なりしでなし、英王ケニュートに對して英國にて戰ひたり。されど一〇一五年歸りて王位の請求を容れられ位に卽て後は基督教の弘通を計りぬ。されど其の手段暴戾を極め反抗者逃遁者をば追放、財產沒收及び體刑に處したり。かくて兇も角も教會此ら附倚任ぜられ安息日定められしが、國內の不平は衰たしく、ケニュート侵擊の時には之に從ふ者甚だ多く、オラフは露西亞に走り、歸り來りて戰ひしも敗れてスタイクルスバドにて殺されたり。されど後の法者たるケニュートの子には國人また服ぜずして反動起り、翌一〇三一年僧俗の會議にてオラフは聖者と決定せられ、遺骸を掘り出だしてニダロス大會堂に安置したり。奇蹟は此に起り巡拜者は集り來り、十二世紀には其の受難及奇蹟の書出で其の名遠近に振へり。羅馬教會も別に之に抗議せざりしかばオラフは諸國の守護聖者となりたり。

オリヴァース トマス Olivers, Thomas 人名 一七二五—九九 英國の說教者。少年時代に放蕩不羈なりしがホイットフィールドの說教にて改悔し、一七五三年リエスレー派の說教者となりて活動し、カルヴィン、アルメニアン兩派論爭の時には大なる働をなし、ウエスレー死にし時に頌文を作れり。其他『アブラハムの神をほめよ』外三の說美歌は最も佳なるものとして世に認められ居れり。

オリヴァント アルフレッド Olivant, Alfred, D.D. 人名 一七九八—一八八二 英國ランダフの監督。一八二一年劍橋ニ學院のフェロー、一八二七—四三年ラムピーテル聖デビッド學院の副長、一八四三—四九年劍橋大學神學教授、最後にランダフの監督となり死に至る『ヨセフの歷史原文の解剖』說教集等の著あり。舊約改譯委員の一人なりき。

オリヴィ ピエル ジャン Olivi, Pierre Jean 人名 佛蘭西の僧にして、十三世紀の中頃生れ一二九七年に死す。フランシス派に入り巴理にて神學を修め、其の碩學と極度に道德の嚴止なるとにて著はる。其派の主義の極貴を守り、又未來說的思想を有したり。其著『ポスチラ、スーパラコメリア』は生存中には反人弟子の間に讀まれしのみなりしも、一三二六年法王ヨハテ二十二世に其中より六十項を拔摘して之を罰し、オリヴィの墓を發いて遺骸を燒きぬ。

オリヴェタン ピエル ロバルト Olivetan, Pierr Robert 人名 佛蘭西の改革派の一人。一五三八死す。カルヴィンの親族にして一五三三年にはフェチヴァの富豪の家客たりしが、改革主義宣傳の告のため市を追はれてニューシャテルに行き、聖書を佛語に譯せり。一八三五年ニューシャテルより出版し、後カルヴィンの訂正を經、一般に佛國新教徒の稱用する所となりぬ。

オリエル ジャン Olier, Jean Jacques, 人名 一六〇八—一六五七 佛國の牧師。ソルボンにて神學を學び、パリのヴィンセントの會議に屢々出席し、青年教役者養成のため獻身せんと決心す。一六四二年巴理聖スルピースの牧師となり同所に天主教神學校を建て、五二年牧師を辭して專ら神學校の事に從ひたり。其の著書は大抵信仰的のもの也。

オリゲン 又オリゲヌス Origen. 人名 第三世紀初年の有名なる神學者。其名は埃及の神ホルボス(Or-Hons)より取りしものなるべく、ユセビウスが呈したるアダマンチウス(Adamantius)といふ綽名は他に類なき勤勞を意味すと エロームは說明し、フォーチウスは論難當るべからざるを意味すと說明せり。一八五年若くは六年に亞歷山に生れしが如く、父母は基督信徒なりしを以て幼時領洗せしものゝ如し。幼にしてパンテヌス及びクレメンスより信仰問答を敎へられしが、二〇二年の迫害に父レオニダスは入獄、財產沒收、最後に死に處せられ、彼は一貴女に養育され、十八歲位の時監督デメトリウスの許可を得て信仰問答敎育の職に就き、其の學校は迫害のため閉鎖中なりしもヘラクラス及びパカルスとスヘる兄弟の異敎徒の弟子を得、專心之に

教育につとめ、古書を寫しては之を寶さ、自らに身に宮刺を施して神の國のために獻げぬ。異教徒と接すること多きに從て自らの組織的修養の必要なるを切に感じ、新プラトーン派の先驅者アムモニウス、サクカスの門に入りて希臘哲學を學び、後多少希伯來語を學び、羅馬にも赴きしことあるが如く、名聲次第に高く、在邑の創比亞の一羅馬官吏は師として彼を招くに至れり。亞歷山に於ける二一五又は六年のカラカラ帝の迫害は特に學者を殺戮せしものなりしかば其がためにやオリゲンは遁れて寫にパレスチナに至りぬ。エルサレムの監督アレキサンドルとカイザリヤのテオクチスタスは彼を歓迎し教會にて說教させたり。然るに亞歷山の監督はオリゲンが尙長老となり居らざればとて抗議を申出で、彼を呼び返し、再び前職に戻かしめたり。されど二一八年頃にはアレキサンドル、セゲエルス(後に帝)の母マムメヤの聘に應じ其の基督教の師となりぬ。改宗者にして其の友たりしアムブロシウス常に彼を助けて文學に力を盡さしめ、多くの筆記者寫字者等其の下に働ほりぬ。彼は此に於て少からざる著作をなせり。二三〇年頃パレスチナを經て希臘に赴きしが、テオクチスツスとアレキサンドルとは彼を長老に任職せしかば、デメトリウスはまたも怒り、其の召集したる二回の大會にて、彼は長老職を戰はれ說教を禁ぜられたり。パレスチナ、フェニキヤ、アラビヤ、アカヤの教會の外は皆此の決議に同意せり。されどオリゲンはカイザリヤに留りて聖書講解に力を注ぎ、神學の一派を起しぬ。二三五年頃カパドキヤに行き、同地に在るカイザリヤの監督フィルミリヤンとの厚き友交の間に二年間迫害を避け、二三八年頃此地を去りてアテンに行き、尙延べて著作に從ひ、ペリル對ポストラの教義論爭の時はアラビヤの會議に召喚せられてペリルを說伏したり。フィリップ夫妻に書を贈り、又ケルススに對する駁論を著せしは此の頃なり。デシウスの迫害にはカイザリヤかヨロかに在て苦みしが二五四年頃天寿を全うして死し、ツロに葬らる。

【著作】 オリゲンは六千の著作をなせりと言はるゝ位に多くの書を著せり。批評的解釋的なるものには、批評に『ヘキザプラ』、解釋に詩篇及び加役太書註、說教に多くの斷片あり。中にルーフィヌスの飜譯せるもの少からず。彼は說教には餘り得意ならざりしが如し。舊約の講解中にては馬太、約翰、羅馬書全部、詩篇、雅歌、新約中にてはルーフィヌスの飜譯あり。哲學的の者にては、基督教と哲學者の說とを比較せる『ストロマタ』あり。模本教義に關する著(ペリ、アルコン)あり。雜著には殉教者の事、新の事を初め、多くの書翰あり。其中唯だ二つ殘れり。次は辯証的大著作にして、ネロ朝かのエピクルス派哲學者ケルススが『ロゴス、アレテス』といふ書(今は失なし)にて基督教を批評し基督信徒は秘密結社にして其の信仰は盲目的なり、基督は姦淫より生れしこと、其の十字架は恥辱なり、神の化身に不合理にして代贖は神の義と愛と兩立せず、基督教の義は哲學者の教に劣り、其の神觀は哲學者のそれの續神的なるに如かずと言へるに對し、『ゆ答辯を與へ、基督教徒は眞理に從ふ、其信仰は自常生活の普汎的原則なり、十字架は贖の意義を有し、基督の人格は獨創的なり、神の化身は神話と異り、神の恐怖の確なる計劃より出でて、罪人を化せんがためなり、福音は最も偉高く又最も續神的なりと言へり。

【神學】 オリゲンは時代の哲學の助を借りて基督教を哲學組織と同等に組織せんと勉めたる大人物の一人なり。彼は積極的に根本教義を說明し、グノスチック派及び其他の異端を排したり。彼の說にては世には一ロゴスの普遍の啓彰あり、哲學の中に眞理あり、而も其は聖書に負ふ者なり、此故に豫備として哲學研究は重すべく、眞の知識は凡て神靈に動かされたる聖書の中に在り。故にれ御めらるゝは信仰さへあらば十分なり、必ずしも教育を要せず、然れども信仰は單に承認には非ず、神の心との交通なり、此は義の行となりて外に現はるゝ也と云へり。オリゲンは又聖書は形體的、精神的、靈的の三樣に解せらるべし。即ち第一は文字通の意味、第二は道德的の所及び歷史的其他の所を解すること、第三は神秘的思辨的に解すること也と云へり。オリゲンの神の觀念は、プロローグ、ユスチヌス、及び亞歷山のクレメントの影響を受け、神を不變にして靈的なる者、萬物の創造者、凡て善なる物の作者、常に活動し、永遠よりロゴスに由て自らを現はすとせなり。而してロゴスは神に對すること、光の大陽に於けるが如きもの、彼は子なり、神と同質のもの、然も性と人格とは神よりは他のもの、第二流の關係のもの、創造者と受造者の仲介者。其の最初の生ぜし者は聖靈也。ロゴスは永遠より一定の數の有限の靈を造り、之に自由を與へたり。此の自由により罪と隱反とに至る。世界は無より造らる、物質は元來惡ならず。人は墮落せる罪ある者、肉慾の鎖に繫がる。世界に靈の戰爭場又學校、人も、サタン惡鬼までも自由の意志に由て此所にて善に復する為。此の天地の進行は本來靈が神より發出すること、又神に歸ること外ならず。地は天啓の舞臺、天啓はロゴスの化身と聖靈の活動とにて絶頂に達す。ロゴスは初より

世に在り。之を受くる者の心、特に預言者の心に入れり。化身の動機は人を贖はんため、基督の死は惡魔に拂ひたる贖料及び神に獻げたる供物也と云ひ、彼は又終局には凡ての者の神に回復せられ惡魔さへ之に洗れざるを說きぬ。

オリゲンの感化は頗る大にして其說を受け容るゝ者甚だ少からず。彼の死後其著作を編輯し又はこれを飜譯して其說の普及を謀りし者も亦少からざりしが、彼に關しては贊否の議論頗る喧しく、第四世紀の末より六世紀の頃に至るまで尙激烈なる議論あり、羅馬教會は今日に至るも尙彼を以て異端な唱へ教會を亂したる者、敎はるゝ望なき者也となせり。

オーリン スチーブン Olin, Stephen, D D., L.L. D. 人名 一七九七—一八五一 米國メソヂスト派神學者。一八二〇年ミッドルボリー學院を卒業してメソヂスト監督教會の教職に入り、後一八二七—三四年ウォルヴヤ大學の英文學教授となり、次でダルヴニアのランドルフ、メーコン學院の長、次でコンネクチカット州ミドルタウンのウエスレー派大學の長となりて其死に至る。四年間歐洲、埃及、パレスチナを旅行せしことあり『埃及、アラビア、ペトラ及び聖地』、『希臘及羅角』等の著はす。彼は又說教にも名を得たり。全集及び傳記書論集あり。

オルガ 聖。Olga, St. 人名 希臘教會の女聖者。もと貧家の女なりしも、キエヴ大侯イグノの妻となり、其子ウラヂスラウの少時攝政し治績大に擧りたり。九五二年コンスタンチノープルに行きて其督教を信じ、テオフィラクトスより受洗、ヘレナの名を得、歸りて大に基督教のために盡したり。七月二十一日を以て其の祝日とす。

オルスハウゼン ヘルマン Olshausen, Hermann 人名 一七九六—一八三九 獨逸の新約聖書神學者。一牧師の子、一八一四年キール大學に入り二年にして伯林に轉學、ジュライエルマッヘル及びチアンデル等に感化せらる。一八一七年メランクトンの書論に頒はれたる其の人物を論じて賞を得。一八二〇年伯林個人講師(プリヴァトドーチェント)となり、翌年特別教授となり、一八二七年ケーニヒスベルヒの教授となる。チアンデルの周圍に集りし同人青年中彼は基督に於ける生ける信仰を最も強く有し、留來『王の教會の忠實なる僕たちんことをのみ願へり』。結婚後神を愚へ之がためエルランゲンに赴き其所にて死たり。彼の主力を注ぎしは新約の講解にして先づ『四正典の純正』(一八二三)を著はし、次で『最深なる聖書の意味に就て一言』(一八二四)『聖書解釋』(一八二五)を著せり。彼は『宗教的著作特に聖書を理解するには眞の宗教經驗必要なり』と云ひ、自ら此精神を以て事に當りたり。『北統說』(ヒイドウマ)の條を見よ。

オルソドックシー カトリックス 『舊カトリック派』の條を見よ。

オルリード Olearius. 人名 十六世紀より十八世紀まで神學の名家を續出せし獨逸の一族の氏名。(一) ヨハネス(Johannes) オレアリウス 一五四六—一六二三 マルブルグ及エナにて修業、ケーニヒスベルヒの希伯來語教授、ハルムステットの神學教授、ハルレの教會總理に歷任、熱心なるルーテル正派の擁護者。(二) ゴットフリード(Gottfried) オレアリウス 一六〇四—八五 前者の子。エナ及ウィッテンベルヒにて修業、其の出生地の市の教會總理に擧げらる。著書多し。(三) ヨハネス(Johannes) オレアリウス 一六一一—八四 前者の弟。ウィッテンベルヒにて修學、クエルフルトの教會總理、ザクセンワイセンフェルス侯の宮廷說教者、ワイセンフェルスの教會總理となる。又著書あり。(四) ヨハネス、ゴットフリート(Johann Gottfried) オレアリウス 一六三五—一七一一 前者の子。アルンスタットの教會總理となりしが、特に讃美歌の作者として著はる。(五) ヨハネス、クリストフ(Johann Christof) オレアリウス 一六六八—一七四七 前者の子。アルンスタットの教會總理。碩學にして又能文の人なりき。其の讃美歌學に關する著は今尙有益なり。(六) ヨハネス(Johannes) オレアリウス 一六三九—一七一三 ゴットフリードの子。ライプチッヒの古典學教授となり、後神學教授となる。敬虔派論爭の時にはスペーネ及びフランケに味方したり。又著書多し。(七) ゴットフリード(Gottfried) オレアリウス 一六七二—一七四 前者の子。ライプチッヒの古典學教授となり、後神學教授となる。正統派より獨立せること父よりも一層甚だしかりき。其の著『眞のメシア耶蘇』は世の注意を引きたり。(八) ヨハン、クリスチアン(Johann Christian) オレアリウス 一六四六—九九 ヨハネスの子。エナ、ライプチッヒ、キールにて修學、又和蘭諸大學及びストラスブルグに遊び、後其の叔父の後を襲ふてハルレの教會總理となる。敬虔派運動には公然と反對せしも而も穏和なりき。多少の著書あり。

オレフィアヌス カスパル Olevianus, Caspar 人名 一五三六—八七 獨逸改革教會設立者の一人。初め法律を研究す。然るにプールヨンにて友人溺死し、自己は僅に免れたる事ありて

決心する所あり。編書のために身を献じ、一五五八年ウェネヂアに行きて熱心にカルヴィンを研究し、翌年年地トレフェスに歸り、高等學校の教師となり大に改革主義を說きしに、忽ち市中の評判となり說教を請はれて之に應じければ、市民の半數は改革主義に心をよせぬ。此に於て教區の大監督は說教を禁じ、市會に向て彼の御問を命ぜしに、市會は之を顧みざりしかば、大監督は自ら市に赴き、人民を說服してオレフィアヌスを城に投じぬ。オレフィアヌスは金を出して免され、友人と共に追放せらる。一五六〇年選擧侯フリードリッヒ三世より招かれて、ハイデルベルヒの教師となり、翌年神學教授となる。カルヴィンと共にハイデルベルヒ告白を編成し二書を著して之を擁護す。一五七六年フリードリッヒ死し、其子ルドヴィヒ立ちしが、彼はルーテル派の人なりければ、オレフィアヌスの活動は此に止み、彼は六百の同志說教者と共に土地を去り、自らはベルレブルグに行き、保羅書輪の註解等を書けり。彼は又ザッサウ、ローゲン等の諸州に改革派を導き入れしことに於て著はる。

オロシウス パウルス Orosius, Paulus

【人名】 第五世紀の基督教辯護家。四班牙に生れ、ヒッポダニカの長老となる。四一五年アウグスチンを訪ひ、互に著書を以てプリスキラ說ヂリゲン說に就て意見を交換し、アウグスチンよりエロームへの書を得てパレスチナに行き四一五年の大會に列りしが、東方教會の諸監督よりペラギウス派なりとの訴へを受け、書を著はして之を辯護し、四班牙に歸りて後は『歷史第七卷異教徒論』を著はし、當時諸の不幸災害の原因を基督教に嫁せんとせし思想を駁し、歷史の實證を引きて基督教を辯護し、アウグスチンの著作の目的とせる所を助けたり。引用頗る我田引水的なれど中世には多く人に讀まれ、其の稿本及び古版は多く殘れり。

音樂 Music.

【慣例】 『希伯來人の間に行はれたる音樂及び樂器』 樂器はヨインの子孫の發明する處なりしかども(創四の廿一)希伯來人は古代よりこれを用ゐ、殊に以色列人が選民として他のセムチック人種より分れし以後、禮拜用として之を使用したりしが如し。尤も諸種の樂器は埃及より輸入したりし者なるべし。彼等は勝利の後、危難を逃れし時、王に音を注ぎし時、婚姻、又は嚴肅の集會をなせる時唱歌、舞蹈と共に音樂を奏し、且て神を讚美したりき。モーセの律法に據れば、聖季を告げ、犧牲を献げ又は出陣、戰爭の際人々を集むるためには喇叭のみ用ゐ、禮拜のためには多くこれを用ゐざりき(民十、十一、利廿三の廿四、廿五の九)。而して以色列人の集會が禮拜の性質を帶ぶるに及び、喇叭は祭司のみこれを吹くことを得たりき(民十の二以下)聖樂の教育はサムエルが預言者學校を立てたりしに初まり(毋前十の五、十九の十九、廿)デビデに至りて其頂點に達せり(代下廿九の廿五)彼は自ら音樂に達せしのみならず、又自ら樂器を發明したりしといふ(座六の五)デビデの樂器、預言者の歌班、神殿の樂隊等の事實は、假令草純なりしにもせよ、當時の音樂が頗る完全に發達したりしことを知るべし。代下廿三の五に據れば、神殿の樂隊は四千のレビ人に依りて成り、アサフ、ヘマン、エドトンこれを統轄したりと云ひ、神殿の落成せし時は三の歌班一となりたりしや否明ならざれ共、骨因後之れありしことは明也。喇叭二の六十五、尼七の六十七)骨因中に希伯來樂の精華を失ひしこと疑なしと雖も、彼等は尚能く之を保護し、第二神殿定禮の時には骨因より歸りたる唱歌者二百四十五人ありたりき(尼七の四十四、六十七)希伯來人の間に用ゐられたる樂器は三種に區劃すべし。

(一) 打つ樂器。最も古代に用ゐられたる打ちて音を生ずる樂器は(イ)鼓。希伯來語トフと稱す。創廿一の廿七、出十五の廿、伯廿一の十二、詩六十八の廿五等に記る。(ロ)琴と竪琴。希伯來語ツッヒリムとノムトシッタイムにして、初めて毋後六の五に記さる。(ハ)鈴。希伯來語メナアニム(毋前十八の六)鐃鈸の類なるべし。

(二) 絃器。(イ)キンノル。初めて創四の廿一に記さる。聖歌俗歌共に此樂器を用ゐ(創廿一の廿七、毋前十六の十六、書五の十二等)。邦譯聖書には『琴』と譯す。(ロ)ネベル。形狀は異れ共其性質キンノルに類す。ヨセフスに據れば、十二絃なる有し手にてかきならせる者也。尤も十絃のものもありき(詩廿三の二等)邦譯は之を『琴』と譯せり。(ハ)ヤッベカ。但三の五、七。邦譯は之をも『琴』と譯せり。

(三) 吹奏樂器。(イ)ウガブ。最も古き者にて(創四の廿一、伯廿一の十二、詩百五十の四)風笛の一種。邦譯には『笛』と譯す。(ロ)ハリル。『笛』、孔を穿つの義(毋前十の五、王上一の四十、太九の廿三其他)もと葦にて作りたる者なれ共、後樹木、骨片、角、象牙等にて作るに至り、今日も尚パレスチナにて使用せらる。(ハ)マシロキム。但三の五。『笛』と譯す。當の種類なれ共、如何なる者なりや明ならず。(ニ)ショフアイ。又羊ゃかレンドと換用せらる。共に『喇叭』と譯すれ共其區別明ならず。禮拜、告示

なすす時、聖會又は戰爭に人々を呼び集むる時等に用ゐ(出十九の十三、民十の十、賽十八の三等)。(ホ)チャットソトスクラー。直ぐなる喇叭、又相圖のために用ゐらる(民十の一—十)。

【基督教會に於る音樂】 耶蘇及び其弟子は最後の晩餐を喫し歌を歌ひつゝ橄欖山に往けりと云ひ(可十四の廿六)保羅ヒラスはピリピの獄中にて夜半神を讚美せりと云ひ(徒十六の廿五)保羅は『詩と歌と靈に感して作れる賦とを以て語りあふべし』とのことを教會に勸め(弗五の十九、西三の十六)使徒時代の基督教徒は一處に集りて斯へす神を讚美したりしといふ(徒二の四十七)是れ基督教會に於る音樂の濫觴にして、プリニーは初代基督教徒を以て基督を讚美する歌ふ人々となせり。初めて初代教會の讚美歌に組織を施したるはミラノの監督アムブロス(三七四—三九七)にして彼の主なる事業は希臘音樂を教會に採用せることなりき。"Authentic Modes"として知られたる四箇の音階(ドーリアン、フリイギアン、リディアン及びミックソリディアン)も亦アムブロスの採用せる處也と信ぜらる。法王グレゴリー(五九〇—六〇四)出づるに及び、希臘の四聲音階を廢し之に代ふるに第八度音程を以てし、又"Authentic Modes"に更に四箇の"Plagal Modes"(ヒポドリアン、ヒポフリイギアン、ヒポリディアン及びヒポミックソリディアンと稱す)なるものを加へたり。彼は又教會用として古代の詩篇及び讚美歌を集め之を順序よく編纂したりしが、四教會の大部分は直ちに之を採用せり。彼の目的は教會音樂を單純ならしむるに在り。故にアムブロスの歌の稍や情緒に過ぎて浮華に流るゝの傾向あるを見て、凡て之を廢し、代ふるに單純莊重なる者を以てせり。故に彼の歌には音の高低、節の大小、時の長短なかりしと雖も、羅馬教會及び英國教會のカセドラル音樂の基礎となりて今日に至り、其他の教會にても亦之を採用せり。歌唱の制は第四世紀の頃初めて起り、ラオデキアの會議にては會衆の歌ふことを禁じたりしが、グレゴリー其弊を改め會衆の一般に歌ふことを許したり。然れ共グレゴリー以後教會音樂は著しく衰微し、第七世紀には僧侶之を專有し且拉丁語にて之を歌へり。斯くて宗教改革の時に至る迄音樂は殆ど全く歌ふこと能はざるに至れり。第十一世紀に於てギドー、アレチノ(Guido Aretino)音樂の研究に新興味を與へ、音符の制を定め六音程のみを用ゐて之を註釋に用ゐらるゝ譜の名はパブテスマ、ディナルの依頼に依りて"Hymn Pape Marelli"を作りて之を獻じたりしに法王の嘉納する所となり、教會の音樂を危機より救ふことを得たり。近時羅馬教會にては一般に音樂に重を置けり。

羅馬教會のみならずプロテスタント教會にても近時一般に音樂を重し、オルガン手に高給を拂ひ、又歌班を養成する等に努めたり。然れ共我國の教會は尚未だ音樂に深き注意を向くるに至らず。(『讚美歌』の後參照)。

恩惠 『恩惠』の條を見よ。

恩惠の方法 Means of Grace.

【術語】 神の立て給へる靈的修養の方法の義にして、狹義に解すれば其方法三あり、神の言(讚まれ又は說教せられたる)禮典(洗禮、洗禮及び聖餐是也。アリアスブルゲの信仰告白には、特に二箇の方法を記し『聖語と禮典とに依りて聖靈與へらる』とあり。プロテスタント教會は何れも此等の方法は個人の信仰と聖靈の力とに依りて効果ありと教ふ。羅馬教會は信徒ーテルは民衆音樂の爲めに大なる注意を向け、多くの時を費して讚付讚美歌を編輯出版せり。音樂に對する熱心は獨り獨逸に止まらず、宗教改革の及ぶ所に伴ひ、英國にてはステルンホールド及びホプキンス(一五四八—四九)ルース(一六四一)テート及びブラッデー(一六九六)ウァッツ(一六七四—一七四八)等之が爲めに力を盡せり。

羅馬教會にては音樂俗化せしためパスカルの會議にて之を禁じたりしが、後トレントの會議にては全く之を教會より驅逐せり。一五六三年法王ピウス四世は此決議を實行せんため八人のカルディナルを任用せしが此時パレストリナ(Giovanni Pierluigi da Palestrina 一五二四—九四)と云へる大音樂者起り、カルディナルの依頼に依りて"Missa Papae Marcelli"を作りて法王の嘉納する所となり、教會の音樂を危機より救ふことを得たり。近時羅馬教會にては一般に音樂に重を置けり。

の自ら聖書を讀むを禁じ、又禮典の効驗は之を受くる者の信仰よりも之を掌る司祭に在りとなして、此方法の効果を沒却せしめ、友會派にては禮典を無視し獨り聖語に重を置けり。(『洗禮』『主の晩餐』等の條參照)。

オンケロス Onkelos. 人名 『タルガム』記者の重なる一人。即ち希伯來語聖書をカルデヤ語に飜譯せし者。『タルムド』に傳ふる所に由れば彼はガマリエルの門下にして保羅と同輩なり。オンケロスの『タルガム』は『タルガム』中最初の著にして、聖書の形象的表彰、例之神を人と同じ情の者と記せる如き點などの外は極めて原文に忠なり。其の含む所は五經、約書亞、士師、撒母耳、列王記、以賽亞、耶利米亞、以西結、十二小預言者なり。同書はガンベルガ及びバタストルフの聖書中にあり。ヴェネチアの『ビブリア、コムプルテンシス』中にも、ソルトンの『ポリグロト』中にもあり。

オンテルドンク ヘンリー アスチック Onderdonk, Henry Ustic, D.D., LL. D. 人名 一七八九—一八五八 米國の監督。初め醫學を研究し、一八一〇年蘇格蘭エデンバラ醫學士となり、博士ダイ、モットと共に『新育醫事雜誌』を發行せしが、一八一五年教職となり、牧會に從ひし後一八二七年ペンシルバニヤの補助監督となり、三六年監督となり、四四年停職、五六年復職す。彼は二百十二の讃美歌編輯事業に與り多くの歌を改作し、又自ら十を作れり、『我心の中の聖寶』は其一なり。同讃美歌集は一八二七—七一までは普通に新譜書と合綴せられ居たり。

カの部

カイザリヤ Caesarea. 地名 地中海岸に沿ひのヤッファの北に在る市。ヘロデ大王ユダヤの首都として再建せる處、又使徒保羅の獄に繫がれたる處也。新約時代には猶太人と異邦人と雜居し、其間に屢々爭鬪あり。第四世紀より第十三世紀迄は監督所在地にして、其最も有名なる史家ユリセビウスとなす。一九六、三三一、三五七年の三回宗教會議此地に開かる。十字軍の時此地屢〻兩軍の間に興亡に滅され、今は甚しく荒廢せり。

カイザリヤ ピリピ Caesarea Philippi. 地名 思ふに舊約の『バアル、ガド』なるべし。今パニアスと稱せらる。ダマスコの西南四十五哩、ヘルモン山の麓に在り。パレスチナの中には風景之に比すべき者なし。分封王ピリピ此都府を飾り、カイザルと自己の名とを以て之に名く。耶蘇傳道の終りに至り此地に來り、此處にて彼得信仰を告白し、又耶蘇の親變れり(太十六の十六—十七の一、二)傳說に依れば血滿を患へる婦人の家は此地に在りしと いふ(九の廿—廿二)。ヘロデ、アグリッパ二世は子ロ帝に請ひ、此市を子ロニウスと稱せり。此市はパレスチナのカイザリヤと殆ど同一の運命を受け、遂に一八〇六年其形を失ひ、今は僅に五六十戶の家屋を有するのみ。

改心 カイシン Conversion (*ἐπιστροφή*). 術語 或物より向きかへるの義にて『汝等翻へり歸へりて其惡き道を離れよ』(結廿三の十一)と云ひ『もし改まりて嬰兒の如くならずば』(太十八の三)と云ふは即ち此意也。新約にては此語を罪を悔ゆることと連れ(使三の十九、廿六の廿)又信仰とも聯結せり(十一の廿一)。此語は或物より向きかへるの義と共に、或物に歸するの意をも含めば、改心の消極的方面は悔罪にして、積極的方面は信仰也『神に對ひては悔改め、主耶蘇基督に對ひては信仰』と云へるは(廿の廿一)。此語の有する觀念の內容を遺憾なく示せる者として見るべし。此改心を來す者は神の働なりや、又は人の働なりやに關し、古來神學者の間に異論あり。カルヴィン派の神學者は神の働に重を置き、アルミニアン派の神學者は人の働に重を置けり。聖書に依りて之を見るに、使徒彼得は『神既に耶蘇を立て審判者人々を其惡より引きかへし給を得ませんがために、先づ汝等に彼を遣はせり』と云ひ(徒三の廿六)預言者エレミヤも『エホバよ汝は我神なれば我をひきかへし給へ、然らば我かへるべし』と云へり(耶廿一の十八)改心は人の働なれ共、之を願く導くは神の恩寵也。此恩寵を神學上の語にて先行的恩寵と稱す。然れ共此恩寵を受けて其導に從ふと否とは人に在りて神に非ず。故にカルヴィン派の神學者の如く神の働に不當の重を置くは聖書の教に非ず。

カイム カルル テオドール Keim, Karl Theodor, D. D. 人名 一八二五—七八 獨逸の有名なる神學者。ヴュルツブルグ及びボンに學び、ヴュルツブルグの講師(レベーテント)エスリンゲンの牧師、チュービンゲン大學の歷史哲學教授に歷任し、後健康のためヴェンにて不相當なる低き地位に就き

ぬ。カイムの生涯は全體より見て悲哀也。身體虛弱なりしかば學校の地位比較的に低く、自らも之を思ひて平かならざりき。且その神學說も唯理派なれど穩和にして正統說をも急進說をも取らざりしかば、之がためにも地位を揚ぐる能はざりき。一八五一年よりは不治の癲病に罹り、神經過敏となり批評を苦にせしが、實は柔和にして愛すべき人なりし也。一八五六—五九年の牧師生活は彼をして新生面を發揮せしめ、誠實にして精神的の牧師たることを識し、自らも愉快に感じたり。其間の說教は集められて書となり居れり。然れども彼は本來歷史家なり。初の間(一八五一—六〇)はヴルム、スリピヤ、エスリンゲンに就て各〻其の宗教改革史等を著はせしが、一八六〇年チュービンゲン大學へ赴任後は教會の初代史を研究し、同年『耶蘇基督の人としての發達』を出だして非凡の見識を表はし、續て二三の著書をなしたる後移に一八六七—七二年『摩民全體と關係せるナザレの耶蘇』三册を出だしぬ。是れ實に大傑作にして、深き學問、非凡の精力、確信、見識、敬虔を併せ含めるものなりき。並びて一八七四年『今日の學問の光に由て見たる耶蘇の一代記』を著はして唯理的に見たる前著の缺を補ひ、後又『初代基督教に關する論文集』を公にせしが、是れ最後の著作なりき。此外羅馬帝の覺したる基督教許可令、コンスタンチン改宗始末、ケルソスの眞言等に就ての著書あり。カイムは何事にても精神を傾倒して之を爲せる人也。神學說は其師バウルに屬せしも、而も獨立の見を立てたり。使徒保羅の地位に關してはチュービンゲン派と同じ意見なりしも、而もカイムは基督の力を最も重く見たり。第四福音書はカイムの否定せし所にして、奇蹟に其の證據せんとせし所なりき。而して彼は基督復活の幻影說を否定し、之を榮光を受けし基督が弟子等に現はれし也と解し、基督の人格は神の特別の工、顯現の冠にして、彼は單なる者、神の子、超人間なる奇蹟を人心に印象せる者也と言へり。カイムは獨身にて終れり。其姉妹家政を司り、カナリヤ島と猶と友となせり。文體は晦澁に傾き、手蹟は甚だ讀み難かりき。

カイン Cain. 人名 アダム、イブの初生子、土を耕す者にして、土より出づる果をエホバに供へしに、エホバはカインの弟にして牧羊者なるアベルと其供物とを顧み給ひしかども、カインと其供物とをば顧み給はざりしかば、カイン甚だ怒り、後アベルと共に野に居りける時起ちかゝりてアベルを殺せり。於是カインは呪はれてエホバの前を離れ出でゝ、エデンの東なるノドの地に住み、髮に色を建て其子の名に從てエノクと名けたりとの事創四に記さる。エホバは何が故にアベルの供物を顧みカインの供物を顧みざりしや、明ならざれ共、思ふにエホバは彼等の之を獻げたる精神を見たりしならん(來十一の四)。坐間でカインがアベルを殺したるは嫉妬のために學者等が想像せるが如く宗教又は財產に關する爭のためには非ず。新約全書中者がカインの事に言及せるは、多くは彼の精神を基督教的信仰と兄弟的愛の精神とに對比せるに在り。カイン及びアベルの物語はモーセ五經中エホバ記者の部に屬し、預言者的啓示の光明に依りて書かれたる傳說也といふを得べし。此物語が後世のもの、なる元始時代に存したる者なりしやの、ことは、種々の方面より論ぜらるゝ。例之牧者と農夫との區別、果實の供物と動物犧牲との區別の如きは元始時代に在り得べからざることにして、色々な建設するといへるが如きは尙更在り得べからず。然れ共此物語中に顯はれたる神の考き、ことは、其長く人を忍び給ふこと、罪ある人の心の分析、罪の傳播の速なること及び其憎むべきことなどは最も深く沒す可らず。

カイン派 Cainites. 學派名 グノスティク派中破倫の一派。彼等の特色は聖書の人物中カイン、エサウ、コラ、ソドム人及びイスカリオテのユダの如き人々を稱讚し、此等の人々を以て彼等の反對者よりも高き光明及び靈性を有したりしと主張せるに在りしが如し。

香 カウ **香物** カウもつ Incense, Frankincense. 物名 希伯來語に二あり、初め相異りたる意義を有せしが、後相混用せらるゝに至れり。香を獻ずることは以色列歷史の初代に見えず。ウエルハウセンの云ふ所に依れば、其初めて記載せられたるは耶六の廿にして、此處には香物を以て價貴き者也となせり。去れば初めて香を用ゆるに至りしはエレミヤ以前久しきことに非ず。當時外國との交易漸く開け、且文化の漸く進み異教と觸接するに至りて、香を用ゆるの風なも輸入したりしなるべし。祭司法典の示す處に依れば、香を用ゆること漸次多く、且最も神聖なる者として考へらるゝに至りたりとを見る。後私に香を焚くことを禁ぜられ、之を焚くは祭司長の特權となれり。香を焚くことの漸く重要なる地位を占むるに至りしは、之を焚く壇の築かれ、朝夕之を焚きたりしに依りて知るべし(出三十)。思ふに香を焚くは初め單に防臭のためなりしなるべしと雖も、良色列に在てはエホバに喜ばるゝ者也と思考せられ(申廿三の十)、又順卸の効力ありと想像せられたり(民十七の十一)。又香は聖徒の祈を表はす者となれり(默五の八)。此は薰し香の燈の天に上るに取りたる也。

高教會派（カウチクワイヤ） High Church. 【學派名】 英國教會及び米國監督教會內に在りて、教職の使徒的傳承、禮典の祭司的効力及び込入りたる儀式の必要に重を置ける一派の名にして、英國の宗教改革家は元來此等の說には重を置かざりしが、エリサベツの朝淸教徒と爭ふに至りて、其神學者の中に此等の說に重を置く者を生ずるに至れり。而して其最も著名なる代表者なる大監督ロード（Laud, 一六三三—四五）なり。後第十九世紀の初に至りて此區別は益々明となりしが、此傾向はトラクタリアン運動の起るに及びて其頂點に達し、ケーベル、ピゼセー及びウロン、ヘンリー、ニューマン之が牛耳を取りたりき（『牛津運動』の條參照）。高教會派の一派なる『儀式派』と稱す（其條を見よ）。高教會派中の人々も其所信基く一樣なるを得ざれ共、彼等は一般にパプテスマに依りて新生する事、聖晩餐の中に基督の實存する事、監督は使徒より繼承せる者なる事、及び監督の按手禮のみ効力を有する事を信ず。彼等は又込入りたる儀式を行ひ、蠟燭及び基督の十字架に釘けられたる像を用ゐ、雙飾を行ふ等凡てエリサベツ時代の宗教改革家が排斥したりしことを爲せり。然れ共英國に於ける高教會派は概して論ずるに敬虔にして、教會を建て慈善事業を行ふ等のことをなせり。牛津大學爲伯來語の教授ピゼセー博士は久しく高教會派の首領なりき。米國監督教會內に於ける高教會派は、前世紀の終りに益足の進歩を爲したりしが、レーション大學のデ、コーヴチン博士の如きは其最も重なる代表者なりき。（『低教會派』の條參照）。

高等批評（カウトウヒヒヤウ） The Higher Criticism. 【術語】 批評とは廣義に於て、凡そ何物にても產出物の價値を判斷する行爲若くは技術をいふ。聖書も亦此意義に於て批評を有す。而して聖書の批評に二あり。經旬批評（又は下等批評）及び高等批評是也。

【高等批評と下等批評との區別】 高等批評と云ひ下等批評と云ふも、便宜のために設けられたる名にして、批評の價値又は大切なる事に於て高下の差遙あるに非ず、又一方が預備的、初步的にして他方が直に進歩したる研究也といふにも非ず。然れ共此二者の區別に關しては、之を用ゐる人々の說悉く一致せりといふ可らず。即ち或る人々は下等批評は歷史の材料也と稱ぜらるゝ者が果して聞る者として承認せられ得べきやと云へる根本問題を論ずる者にして、此問題にして然りと答へらるゝ場合に起り來る（それ迄は起り來らざる）問題、即ち其承認せられたる材料に何程の重を與へ得べきやを論ずるは高等批評の範也と論ぜり。然れ共此の如き區別は全く歷史的なる研究の範圍以外に出づること能はず。又兩者の區別を以て聖に方法に關する者とし、下等批評は之を決定するに主として、或は全然、外部の現象に頼りて批評する者なる云ひ、高等批評は內部の現象に頼りて批評する者なる云ふとなす者あり。此區別の中には多少眞理を含めりと雖も、高等批評も亦外部の助を要する場合あれば、充分に意義を盡ぜりといふ可らず。又下等批評を以て一字一句の眞僞を吟味するに在りとなし、高等批評を以て文書全體の眞僞を吟味するに在りとなす者あり。『センチュリー、ディクシナリー』に『高等批評は文錦全體に關し、下等批評は特殊なる部分又は文句の眞僞又は其他の特質に關す』と定義せるが如し。此說は眞僞の問題に關して用ゐらるゝ慣例には一致せりと雖も、此語全體の意義を盡せりといふ可らず。蓋し此二者を最も能く區別せるは、二者の目的の立場よりするに知くはなし。即ち下等批評は文書の本文に關し、高等批評は其起源、形狀及び價値に關す。詳言すれば下等批評の目的とする所は、現存の本文は其原初のものと同一なりや否やを吟味し、誤謬若くは脫散あれば之を矯正し、其原初の狀態に復せんとするに在り。故に經旬批評家は本文の言語を一語一語若くは一字一字吟味し、作者は果して何を書きしやを確むる也。故に經旬の回復は高等批評の進せんとする目的を進捗する者なれ共、經旬批評は此目的を達する不可缺條件也といふ可らず。蓋し實際の目的に向ては、相當に正しき經旬さへあれば、斯る事業をなすに充分なれば也。之に反して最も精密に下等批評を用ゐんとするには、先づ作者、其文體、其境遇等の大體を知らざる可らず。而して此等の知識は主として高等批評に依りて之を求めざる可らず。左れば此二者は各々獨立する者なれ共、互に相關係し互に相助くる者也。

【高等批評の名目及び定義】 右云へる如く高等批評は、下等批評と比較して名付られたる者に非ず。學者が單に便宜のために術語となしたる者に過ぎずして『高等』といへる形容詞には何等の意義あるなし。故に之に代ゆるに『文學的批評』（Literary Criticism）の名を以てせんとする者あれ共、此語はあまりに漠然として高等批評の意義を顯すこと能はず。又『歷史的批評』（Historical Criticism）の名を以て之に代へんとするものあれ共、歷史的批評とは凡て事實の証明者くは發見の謂にして、文學的材料に關する事實の証明若くは發見の謂に非ざれば、是亦適當の名稱也といふ可らず。去ればアイタホルンに依て創始せられたる此名目は最格に云へば無意義也と雖も、之に慣りたる名目の之に代はるべき者なきを明也。然れ共高等批評の何物たるかは以上云ふ通り高等批評は文書の本文に關し、高等批評は其起源、形狀及び價値に關す。詳言すれば下等批評の目的とする所は、現存の本文は其原初のものと同一なりや否やを吟味し、誤謬若くは脫散あれば之を矯正し、其原初の狀態に復せんとするに在り。故に經旬批評家は本文の言語を一語一語若くは一字一字吟味し、作者は果して何を書きしやを確むる也。故に經旬の回復は高等批評の進せんとする目的を進捗する者なれ共、經旬批評は此目的を達する不可缺條件也といふ可らず。蓋し實際の目的に向ては、相當に正しき經旬さへあれば、斯る事業をなすに充分なれば也。之に反して最も精密に下等批評を用ゐんとするには、先づ作者、其文體、其境遇等の大體を知らざる可らず。而して此等の知識は主として高等批評に依りて之を求めざる可らず。左れば此二者は各々獨立する者なれ共、互に相關係し互に相助くる者也。

【高等批評の名目及び定義】 右云へる如く高等批評は、下等批評と比較して名付られたる者に非ず。學者が單に便宜のために術語となしたる者に過ぎずして『高等』といへる形容詞には何等の意義あるなし。故に之に代ゆるに『文學的批評』（Literary Criticism）の名を以てせんとする者あれ共、此語はあまりに漠然として高等批評の意義を顯すこと能はず。又『歷史的批評』（Historical Criticism）の名を以て之に代へんとするものあれ共、歷史的批評とは凡て事實の証明者くは發見の謂にして、文學的材料に關する事實の証明若くは發見の謂に非ざれば、是亦適當の名稱也といふ可らず。去ればアイタホルンに依て創始せられたる此名目は最格に云へば無意義也と雖も、之に慣りたる名目の之に代はるべき者なきを明也。然れ共高等批評の何物たるかは以上云ふ通

に依りて略ぼ明にして、吾人は之に定義を下して左の如くいふを得べし。曰く『高等批評とは文學的所產の起源、形狀及び價値に關する事實を、其內部の特質及び內容に基きて証明し發見することを也』故に高等批評は『聖書總論』（Introduction to the Bible）と呼ばれたる一科と略ぼ同一也と雖も、總論は起源、形狀、價値の外言語、經旬、說明の原理等に關する一般の問題をも含むを以て、『高等批評より其範圍廣し。

【高等批評の目的及び方法】 高等批評の目的は其定義に於て示せるが如く、聖書各卷の起源、形狀及び價値に關する凡ての問題を解決するに在り。起源とは作者、作者の時代及び何處に於て書かれたりやの問題、形狀とは遺話なりや、又は寓話なりや、歷史的說話なりや、又は歌若くは譬言を集めたる者なりや等の問題、價値とは著作の目的に從て其歷史的、宗教的、道德的價値如何等を定むることにして、此等の問題を証明、發見するは高等批評の目的也。此目的を達するために高等批評の取る方法二種あり。外部の証明及び內部の証明是也。外部の証明とは適當なる証人の証明に依るの謂にして、歷史的性質を有し、其價値は証人の信據するに足るや否やに存す。目擊者の証明は最も貴重なる者なれ共、聖書の批評に於て目擊者の証明なる者は實際其ガ稀也。而して既に目擊者を離れて傳聞者に移れば、所謂『傳說』となり其價値甚だ少く、高等批評は之れより唯僅に間接の助を受くるのみ。故に高等批評が實際採用する處のものは外部の証明に非ずして內部の証明也。內部の証明とは聖書を文學的所產として觀察し、其特質を吟味し、而して又之を彼此相比較し、以て作者、著作の時代、文書の歷史的地位等を定むるの謂にして、之を爲すには書中の言語、文體等の知き全然形式的性質を有する現象、并に歷史的內容の如き、思想殊に神學的思想の如き實質的性質を有する現象を吟味するを要す。故に此點に於て高等批評の採用する方法に三あり。（イ）文學的方法、即ち言語、文體等より進する方法（ロ）歷史的方法、即ち歷史的內容より進する方法（ハ）神學的方法、即ち神學思想の傾向、發達等より進する方法是也。

【高等批評の二派】 同じく高等批評家と稱する者の中に二派あり。一は凡ての宗教的信仰を以て理性に從ふべき者となす者にして、他は聖書に眞理として敎ふる者也と自ら信ずる者を承認する人々也。前者は所謂純理派（Rationalistic School）と稱する者にして、彼等は單に理性にのみ訴へて、聖書に記されたる奇跡的說話に自然的說明を與へ、聖書の內容を悉く理性に依りて理解せられ得べき形式となす者也。パウラス、セムレル、ストラウス等は即ち是也。然れ共純理派なる語は更に廣義に解せられ、凡そ如何なる形狀にても理性を用ゆる者を此名の中に含ましむることあり。舉くて理性を批評の範圍に用ゐ、聖書の與ふる信仰に何等の重を與へず、換言すれば聖書の宗教的性質に頓着せざる批評家あり。タイチン及びウエルハウセンの如き是也。是等の批評家の缺點は目前に在る許多の証明を棄て、且聖書に依りて生じたる宗教的確信を以て其起源及び價値の証據となすを欲せざるに在り。第二種の批評家を福音主義派（Christ-ian School of Criticism）と稱す。此派の特質は福音的信仰を以て眞理也として承認するに在り。此派の批評家に、純理派の批評家が理性を以て凡ての問題を決し、宗教上に及ぼす其結果如何を顧みざるに反し、理性を用ゆと雖も、理性を離れたる主義に依りて、之を爲すには書中の言語、文體等の減し矯正す。而して之を爲すに依りて彼等は之を以て不合理なる事也となさず、何となれば彼等は信仰の理性に先つことを以て合理的也とせば也。

【高等批評の歷史】 高等批評なる語は前既に云へる如く、アイタホルンより初まり頗る新なるものなれ共、聖書學者が其精神と方法とを聖書の研究に應用したるは新しき事に非ずして、古代より行はれたる事也。唯當時に在ては尙未だ一科の科學とならず、且批評家自らも其高等批評なることを知らざりしのみ。故に高等批評の歷史を分ちて二期となす。第一期は即ち其自覺なき時代、換言すれば批評の幼稚なる時代にして、第二期は既に之を自覺せる時代也。而して一七五三年即ちアストラック（Astruc）がモーセ五經の作者に關する奇名なる論文を出版せる年を以て此二期の分岐點となす。

（一）古代及び中世の批評　此時期を分ちて又二となす。第一期は基督教の初代より宗教改革に至る迄の時代にして、第二期は宗教改革より近代批評の起る時に至る迄の時代也。イ基督教初代より宗教改革に至る迄　基督起りて後基督教の起源及び基督信徒の信仰行爲の標準を示せる文書の出づるに及び、之に對する批評の起りしは自然の勢にして、基督教が漸く天下に廣まり世人の注意を惹くに及び、且其性質及び應用に關し人々の說の相分るゝに至りて、其文書の權威に關する疑問起り、新約全書は批評の中心となれり。而して當時の問題は新約の中に在る文書は眞實なりや若くは僞作なりやといふことなりしが、之が區別を定むるや內部の証據に依らずして、宗教上の意見に依りたるが如し。マルキオン（Marcion）は即ち其適例にして、彼が新約の大部分を排斥し、唯保羅の書翰と路加傳とのみを承認したりし

は、主として其宗教哲學を立てんとの希望に基きたりき。初めて內部の証據を以て新約文籍の眞僞を定めんとしたるはオリゲンにして、彼は言語、文體、思想の點より希伯來書の保羅の作に非ざるを論ぜり。亞歷山のディオニシウスも亦オリゲンと同にく、文學的、歷史的立場より數箇の理由を擧げて、約翰默示錄の使徒約翰の作に非ざることを論ぜり。舊約に關して初めて異論を唱へたるはセルサスにして、彼は創世記を以てモーセの作に非ずとなし、續でポルフィリーは但以耳書を以てマッカビース時代の作也と論じたりき。（ロ）宗教改革以後の時代　宗教改革者は改革の事業に忙しくして、批評問題の組織的研究に入ること能はざりしが、尙全くの之を棄つる事を爲さざりき。ルーテルは基督を敎へざる者を以て其何人の作なるに拘はらず使徒的に非ずとなし、又聖書の價値を以て一樣ならずとして約翰傳、羅馬書、彼得前書を最上位に置き、雅各書を藁の如しと云へり。カルヴァンとスタットはモーセ五經はモーセの作に非ずと云ひ、ホッブス、スピノザも亦同一說を取りたりき。（二）近代の批評　（イ）舊約の問題　近代に於る舊約批評は、創世記に神の種々の名の用ゐられたるを發見せしに初まる。此事實より創世記はエホバの名を用ゐたる文書と、エロヒムの名を用ゐたる文書とを其儘用ゐて編輯したる者也と推定したるなゆアンアストラック（一六八四―一七六六）となす。後アイグホルン（一七五二―一八二七）出でて、神の名の相違せる部分は文體も亦相違ぜりとの事を指摘し、且此批評の方法をモーセ五經の他の書にも適用せり。而して彼はモーセ五經を以てモーセ自ら此等の文書を用ゐて編輯せる者となせり。之を名けてモーセ五經起源の文書說（Document theory）と稱す。然れ共此說は獨逸以外には多く採用せられざりき。次で英國に於て羅馬教の神學者アレキサンデル、ゲクデス（Geddes 一七三七―一八〇二）新說を唱ふ。謂えらく、モーセ五經はダビデの治世より早からず、ヘゼキアの治世より遲からざる時代、多分ソロモンの治世中現時の形狀に成りたる者にして、古代の文書より編輯せられたる者也、而して其文書はモーセ時代に成りたる者あり、又其以前に成りたる者ありと。此說を名けて斷篇說（Fragment theory）といふ。以上二箇の說の中間に立つ者をイルゲン說（Karl David Ilgen 一七八三―一八三四）となす。彼謂えらく、創世記は十七箇の文書より成る者なれ共、第一エロヒム記者、第二エロヒム記者、及びエホバ記者三人の書にして、編輯者は三人の記者の言語を攙挿排列して之を編輯せる也と。以上は主として書中の文學的現象より來れる說なれ共、之に加ふるに書中の文歷史的材料より立論せる者あり。是れデウエッテ（W. M. L. De Wette 一七八〇―一八四九）の主唱せる處にして、彼謂えらく、創世記は一人の著作にしてエロヒム文書を中心とし、之にエホバ文書を加へ現形に編輯せる者也と。之を名けて補遺說と文書說との中間說（Supplement theory）といふ。此補遺說と文書說との中間に立てる說を唱へ出せるエヲルド（G. H. A. Ewald 一八〇三―一八七五）となす。彼謂えらく、現形のモーセ五經の中にはソロモン治世の初年に編輯せられたる『始源の記』あり。之に加ふるにサムソンの士師時代に成りたる『エホバの戰の記』『モーセ傳』『契約の書』の三書より取りたる材料を以てせり。而して此『始源の記』は前十世紀乃至九世紀頃イスラエル王國に住みたる第三史家之を敷衍し、八世紀の頃ユダ王國に住みたる第四史家更に之を敷衍し、同時頃出でたる第五史家又之を潤正せり、申命記は第七世紀の中頃別に編輯せられたる者なりしが、同世紀の終に至り五經の中に編入せられたる也と。デリッチは此說を名けて結晶說（Crystallization theory）と云へり。ハップフェルド（Hupfeld）は以上の學者とは別に研究したりしが、其結果は大抵同一にして、彼は五經の材料として第一エロヒム記者、第二エロヒム記者、及びエホバ記者の三文書を認め、編輯者は此等の文書を巧に雜合せる也と云へり（一八五三）。第十九世紀の中頃以後に至り、神學的証明（Theological argument）と稱するもの顯はれ、ヴァトケ（Wilhelm Vatke）及びゲオルゲ（Leopold George）の二人同時に之を唱出せり。ヴァトケ謂えらく、五經の律法は之を晚代の宗教的思想に比するに、通常信ずるが如き古代の產としては餘りに彫琢に過ぐる者あり。此律法の萌芽はモーセ時代に存在せしと雖も、現在吾人の有する者は前八世紀預言者の時代より更に晚出也と。ゲオルゲは利未の律法全體を以て俘囚以後の者となし、申命記をヨシア時代の作也となせり。後グラフ（K. H. Graf）出で、申命記は儀式的律法（祭司典）より先に作られたる者也との、ことを主張し、且儀式的律法はエゼキエルの作にして、エズラ以後に至り更に增補せられたる者也との、ことを敎へたり。ケイチン（Koenen）はグラフの說を繼ぎて更に之を明にし、且以色列の宗教は純粹なる自然宗教にして、他の宗教の如く多神敎に初まり、漸次發達して一神的靈的宗教となりたる也との、ことを敎へたり。ヴェルハウゼン（Julius Wellhausen）も亦グラフ說の繼承者にして、其說の大要左の如し。曰く信ずべき以色列の歷史はサムエルの日に初まる。以色列宗教の現時の形狀となりしも亦サムエルに初まり、爾くして數

世紀間繼續せり。モーセ五經は編輯せられたる者にして、其紀元及び歷史は之を四期に分つを得べし。即ち（一）前八百年頃エホバ記者（J）以色列人民の歷史を編輯す。（二）前七百五十年頃エロヒム記者（E）同樣の書を作る。此二書は初め別々に用ゐられしが、七世紀の終に至りて一書に編輯せらる、之を JE となす。（三）前六二一年より少し以前現時の申命記の大部分を爲す所の書、他の作者に依りて編輯せらる、之を D と稱す。之に續言及び附錄を附し JED と結合せる者を JED となす。（四）エゼキエルの時代に儀式的律法の著作到まる、前四四四年頃エズラ之を法典に編纂し、前二八〇年に至る迄の間に、最後の編輯者に依りて JED と結合せられたりと。此說は些細の點に於て僞正せられたりと雖も、大體に於ては現時歐米多數の學者の承認する處也。

モーセ五經に次ぎて議論ありしは、以賽亞書、但以耳書、約拿書、撒加利亞書、士師記、列王紀略、歷代志略、路得記、以士帖書、約百記、詩篇、箴言等也。此等の書に關し批評の達したる結果に就ては各々其條を見るべし。

（ロ）新約の批評　新約全書文籍の起源及び信用の批評的に研究せられたるは、自然神論の起りたる以後の事也。故に新約に於る高等批評は宗教哲學歷史の跡に從ひ、之を四傾向に分つことを得べし。其大要左の如し。

（A）新約批評の自然神論的傾向　獨逸に於る啓蒙思想の影響を受け、セムレル（Joh. Salomo Semler）は聖書の中には神の言を保有すれ共、聖書は神の言に非ず、其作者及び其文學的歷史的內容の信ずべきや否やに關する諸問題は、書中の神の言と離して研究せざる可らずとのことを主張せり。アイグホルンは舊約に於るが如く、新約に於ても全く舊來の傳說を棄て、且初めて共觀福音書の問題を提起し、之が材料となるべき一箇の原福音書ありとの說を立てゝ之を解說せんとし、又牧會書翰、彼得書、猶太書等を批評せり。後エヴァンソン。ホルスト其他の學者は第四福音書の眞實なることを否定せしが、ハッガ其他の學者は新約の文書に關し舊來の傳說を維持せり。

（B）神移的純理的傾向　セムレル。アイグホルンの純理說と舊來の傳說との中間に立つ處のものにして、シュライエルマッヘル（Schleiermacher）之が首唱者たり。聖書の宗教的勢力と歷史的內容を相異れる基礎の上に立てんとするは此派の特色也。テウェッテは此派の最も有名なる組述者なれ共、彼は批評的証明のたしかなる者の外は採用せざりしを以て、其結果屬々消極的に止まれり。ニャンデル（Neander）も亦此派有名の先驅にして、彼は彼得後書、提摩太前書を除くの外新約文籍の眞實なることを主張せり。

（C）チカビンゲン派　又傾向批評派（Tendency Criticism）と稱す。此派は歷史に題目、對偶及び綜合の三徑路を取りて進む者にして、動作の次きに反動來りて爭起り、而して此爭は遂に調和を以て終らざる可らずと云へるヘーゲル哲學に其根據を置き、基督教も亦此徑路に從ひて發達したる者也となせる者にして、此派の首唱者フェルディナンド、クリスチャン、バウル（Ferdinand Christian Baur）は羅十一の一、哥前一の十二、及び加二を以て此主義の適用せらるべき鍵鑰也と爲せり。彼れ謂えらく、耶蘇基督及び其敎訓に對する十二使徒及び保羅の解說は各相異れり。耶蘇は道德宗教の眞理を萬民に適用して敎へたりしかども、彼は之と同時に猶太的の中に住し、其律法に從ひたりき。十二使徒は耶蘇の猶太的方面のみを見、耶蘇の宗教を以て猶太教の續き也として敎へたりしが、保羅は之に反し、耶蘇の事業の他の方面を見、基督教を以て律法を脫れ萬民を救ふ宗教也となし、此の如く之を發達せしめたりき。此意見の相違は爰に衝突を來し、保羅なる以て爲樂なき基督教の改革者也として攻擊したりしかば、彼は之を辯護せんため羅、哥前後、加の四書を書きたり。而して默示錄は保羅の敎訓を攻擊するために書かれたる者也。然れ共新約の他の文籍には此爭論の形跡明白ならざるを見れば、此等の文籍は此爭論の中間に立てる溫和なる人々の作なるべし、而して此等の調和的文籍は爾派を調停せんとするの傾向を有し、且爭論的精神漸く衰へ爾派互に接近せんとしつゝありし時代の感情を表白するを見れば、第二世紀以後の作ならざる可らずと。斯くしてバウルは上記五書を以て使徒時代の作也となし、其他の文籍に就ては、馬太は元來猶太的の書なりしを、保羅派のために改正したる者、馬可は初より調停的の書、路加は元來保羅的なりし者を猶太的思想に改作したる者、第四福音書及び約翰一書は第二世紀の終に成りたる者にして新約最後の書、使徒行傳は彼得と保羅と同一の事を敎へたりとの、ことを示さんため書かれたる者にして信ずるに足らず、保羅の小書翰は保羅の精神を猶太的基督教と調和せる者、公（カトリック）同書（ヤコブ）は保羅の敎に同化せる猶太的基督教を顯はせる者也となせり。バウルが思辨的歷史哲學を混用せるは其一大缺點なれ共、初めて歷史的批評の方法を採用し、新約批評の上に一新紀元を開きたる其效は甚だ大也。

パウルの此方法は頗る學者の注意を引き、其說を發成する者甚だ少からず。ツェラ(Ed. Zeller)ヒコウエデレル(Alb. Schwegler)ヒーストリン(C. R. Köstlin)は全くパウルの說に一致せる者、ホルケマル(Volkmar)ヒルゲンフェルド(Ad. Hilgenfeld)ホルステン(Holsten)は多少反對者の說を容れパウルの說を改作せる者也。獨逸以外の諸國に在りて此派に屬する重なる學者は左の如し。Scholten(蘭) Sinuel Davidson(英) Réville及び S. Réuan(佛) Orello Cone(米)是也。然るに更に第三期に至り、此派の取りたる說及び方法は漸く其特色を失ひ、單に純理的批評の形狀を取るに至れり。Otto Pfleiderer, Adolf Hausrath, Immer, H. J. Holtzmann, C. Weizsäcker, 及び Jülicher は即ち此傾向を有する者也。

パウルの批評は、批評歷史の本流を離れて更に二個の支流的發達を爲せり。其一をストラウスの神話說(Mythical Theory)となす。ストラウスはパウルの超自然的要素を否みたりし點に重を置き、福音書中の奇蹟を以て凡て神話也と解說せり。然れ共此說は全然先天的理論に根ざせる者にして、批評學歷史の上より云へば重を置くに足らず。其二をブルノ、バウエルの全然否認說(Absolute negation of Bruno Bauer)となす。彼は新約文籍全體を以て第二世紀の作也となし、其歷史的材料としての價値を否認せり。此說は近年に至りルドルフ、ステッヒ(Rudolf Stech)又之を唱へ、和蘭の學者の中には之を採用せる者あり。

(D) チュビンゲン派以後の批評　チュビンゲン派批評の方法及び結果に對する反對は二箇の方面に起れり。其一は福音主義派にして傳說的立場より新約文籍を擁護せんとする者、其二はシュライエルマヘルの立脚地に立つ者是也。前者に屬する重なる者は J. H. A. Ebrard, W. O. Dietlein, H. W. J. Thiersch, Leohler 及び S. Hofmann にしてホッフマンの弟子には Luthardt, Rud. Fr. Grau, Naegen, Th. Zahn等あり。後者に屬する者は Friedrich Bleek, Ewald, 及び Eduard Reuss 也。然れ共此等の學者はチュビンゲン派の起らざりし以前の傳說的若くは純理的說明に歸れるに非ずして、聖書の批評的研究は其神的起源の信仰に伴ひ得べき者也との立脚地に近き傾向を有せり。此傾向に獨立的寄與をなしたる者をアルブレヒト、リッチュル(Albrecht Ritschl)となす。リッチュルは保羅の基督教と猶太的基督教との間に存する反對を否定せざりしが、彼は此反對を以て共通福音に先てる者にして、保羅の基督教も猶太的基督教も共に之より發途せる者也となせり。彼に依れば保羅の基督教は耶蘇の宗教の正出にして、猶太的運動は之が反動として起り、忽ちにして敗北せる者也。從て此兩者の爭は新約文籍の作成に何等重要なる關係を有せず。リッチュルは又奇蹟的要素を承認し、且基督教を其價値の方面より主觀的に觀察せしなる以て、文籍に關する客觀的の說には多大の重を置かざりき。トッチュルの流を汲む學者又少からず、Harnack, Schürer 及び Wendt は此派に屬する者と見るべし。現代の批評家中其調の甚だ福音主義的なるは W. Beyschlag 及び B. Weiss の著書也とす。福音主義及び保守的傾向を帶ぶる學者は英米二國に最も多し。其重なる者即ち左の如し。J. B. Lightfoot, B. F. Westcott, C. J. Elliott, Sanday, Plumtre, Lumby, Salmon, Marcus Dods, McClymont (以上英)Ezra Abbott(米)之に佛の批評家 Collerier, Gloaire, Gilly, Pressensé 及び Godet を加ふるを得べし。

ウィリヤム　カウパル

以上は新約の文籍に於る批評歷史の梗概を記せる者也。尙共說編音書の問題、第四編音書、使徒行傳、保羅の書翰、其他に關する批評は各其條下に就て見るべし。

カウパル 又クーパル　ウィリアム　Cowper, William　[人名]　一七三一—一八〇〇　英國の詩人、讃美歌作者。由緒ある血統を有す。父はウォルの二世の宮廷牧師たり、祖父は裁判官にして判長カウパル伯の兄弟たり。ウィリアムは幼より身體弱く、後年顚狂となりし基を胚胎し居たり。ウェストミンステル學校にて教育を受け、十八歲にして法律研究を始め、三十二歲にして法律事務に從ひしが、實際は文學に從へり。其の敢入不足を嘗くるに至りて、勢力ある友人の推薦により貴族院雜誌の書記候補に擬せられしに、其の資格に就て疑はれ、試驗を受くることゝなり、之が恐怖のために、又之より先從妹と結婚せんと欲して、其の女の父即ち彼がためには叔父なる人の反對を受けしため、蒙りたる影響とより、精神異狀を來たし、終に醫士コットンの私立顚狂院に送らるゝに至る。コットンは敬度の人なり。カウパルは此にて聖書を讀みて宗教

に改悔し、一七六五年ハンチンドンに行き、アンウィン一家と知り、同じ家に住みしに、六七年アンウィンは落馬して死し、妻は一家の圍せし福音主義團體の大立物ウォン、ニウトンより招かれ、カウパルと共にオルネーに移りぬ。されど被等の生活は宗教的動行のみなりしかば、カウパルの如き神經過敏の者には甚だ危險の生活たり。カウパルは唯だ貧者と交るに由て心に幾分の調和を得、又人生の知識を增すを得たりしが、而も彼は再び狂氣し、アンウィン夫人の十六ヶ月の保護と、コットンの熟練なる治療とにて辛うじて回復するを得、更にニウトンの退去ありしに由て一層福音より免るゝを得たり。此時アンウィン夫人は彼に勸むるに作詩を以てす。之より先彼は既にニウトンと共に『オルチー讃美歌』を著はし、ニウトン二百八十篇、カウパル六十八篇を作りし事あり。此に及びて進んで八二年『道德的諷刺』を出だしぬ。其頃オーステン夫人と會ひしに、夫人の活潑なる性質と世故に長じたる事とは、カウパルを感化する所深かりき。カウパルが歌ひたるウォン、ウルヒンの物語は夫人の爲へし所にかゝる。又有名の『ヌスタ』を著はすに至らしめしも夫人なり。オーステン夫人去りて後、又カウパルの從姉妹にして同じく世故に長けたるヘスキス夫人來りて、同じく詩人を感化し、彼は短篇の詩やホメル、ホラキオスの飜譯等を以て文壇を賑はし、九五年には三百磅の年金を與へられしが、其より後四年間はまた理性を失ひ、僅に『カストアカエー』を作りしのみ。死後書翰集出で非常なる趣味に充つるを示せり。カウパルの讃美歌には最も世に愛誦せらるゝ者多し。『御惠み溢るゝイマヌエルの』(Thereis a fountain filled with blood)『神は風に乘り波を步む』(God moves in a mysterious way)『御神の光よ晴を分けて』(O for a closer walk with God) 等其れなり。彼の詩は溫和清潔にして人心を引くに於て、蓋し第一なり。其の書翰も亦比類なきものなり。

降魔　慣例　又は逐鬼　Exorcism. (ἐξορκισμός) 惡鬼を逐出す目的を以て爲す嚴肅なる儀式也。耶蘇に屬ゆ惡鬼に憑れたる者を癒し、又惡鬼を逐出す力を其弟子に與へたり(太十の八)猶太人も亦惡鬼を逐出す力を有せりと公言せり。初代教會に於ては之を以て基督信徒に與へられたる恩賜也となし、テルチュリアヌは基督信徒の一言が惡鬼を逐出す力あることは爭ふ可らざる事實也と云ひ、オリゲヌスも同樣の事を說し、是れ別に魔術を要せざる事也と云へり。後に至り降魔者は僧侶の低き階級の一となり、按手禮を受けしが、羅馬教會にては尙僧侶の按手禮を受くる前に降魔者の按手禮を受ける例となす。凡て基督を信ぜざる者は惡魔に屬ける者也との思想より、新に教會に入らんとする者の爲に降魔の式を行ひ、小兒の洗禮を受くる場合には僧侶之に息を吹き込みたりき。又基督の名及び聖書の一句は降魔の効ありと信ぜられたりき。希臘及び羅馬教會にては洗禮の時尙降魔の式を行ひ、又實際惡鬼に憑られたる者に此式を執行す。宗教改革の時カルヴィン派の教會は之を排斥せしが、ルーテル及びメランクトンは之を保存するを可と爲し、ルーテル派の神學者は之に從へり。然れ共現今のプロテスタント教會は一般に之を放棄せり。

香爐　カロ　Censer.　[物名]　希伯來人の用ゐたる香爐は、埃及人の用ゐたる者と同樣なりしが知く、八角形の小き壺に長き柄を附したる者也。初代教會にて香爐を用ゐたりしことは記されず。其之を用ゐ初めたるは四世紀の頃にして、第八世紀に至りては一般に用ゐられ、其用方地方會議にて指示せられ、且表象的意義漸次燒著に附せらるゝに至れり。今日にても羅馬教會及び英國教會にては之を用ゆ。其形通常楕圓形なれ共間々方形のものあり。通常眞鍮を以て製す。

カウンシル　Councils　『宗教會議』の條を見よ。

カヴァルデール　マイルス　Coverdale, Miles　[人名]　一四八八頃—一五六九　英國の新教牧師。ヨルクシヤの北部カヴァルハムに生れしが幼時の事は詳ならず。劍橋のアウガスチヌス派僧庵に入る、同庵長は一五二三年にはロバルト、バーンスなりしが、此人は新教に轉じて一五四〇年スキスフィールドにて焚殺されし人にて、其頃には新教のため奮鬪し居たれば、カヴァルデールが新教に改宗したるも彼の導に由りしならん。カヴァルデールは一五二八年大陸に行き尙僧に著はれず。三五年始めて彼の飜譯にかゝる聖書倫敦に現はる。三八年巴理に行き拉丁語英語對照聖書の出版を監督し、又『大聖書』として知られたる馬太聖書の改譯を監督せしが、此は三八年十二月巴理にて印刷を禁ぜられ、翌年四月倫敦にて完成せり。四〇年七月クロムウエル處刑ありてカヴァルデールは獨逸に行き、ストラスブルヒ附近のベルヒファーベルンの教會の牧師たりしが、四八年歸りてエドワルド六世の宮廷牧師の一人なり。太后カザリン、パールの編纂官となられ、五〇年アナバプテスト黨狩の委員となられ、五一年エキセタルの監督なりしが、極貧にして『初穗稅』より特に免ぜられたり。五三年メリー即位して歷職より退放に處せらる。死を免れしは其の義兄弟マカルセンが丁抹王の宮廷牧師たりしに由り、王の取り做

しありしを以てなり。暫くフリースランドのウェーセルにて英人會衆の牧師となし、次でベルヒシアーベルンに行き、最後にウェネヴァに行き熱心己を忘れてウェネヴァ聖書の大成を勤く。五九年メリー死せしを以て英國に歸り、六四年より六六年まで倫敦プリザの聖マケナス會堂の司牧たりしが、先に彼なして監督職に復するを得ざらしめたる清教徒的眼識は此にも不調和の基となり、加へて病もありし故なを以て辭職す。英國の聖書翻譯者中彼ほど不德のなき人はなかりしが彼は尙此上にブルリンゲル。ルーテル。カルヴィン其他の改革者等の文書を飜譯し、又殉教者書輪集を出版し、又宗教的創作をもなせり。

カヴェナンター Covenanters. 【團體名】 第十六、七世紀の頃『カヴェナント』(契約)を作りしに加盟せる蘇國長老派一部の名也。一五五七年エディンバラに於て、貴族、地主の多數一申にアルガイル。アレンゲールン等の諸侯ありしに依りて一の契約印せらる。其目的羅馬教會に反抗しプロテスタント教の主義を擴張するに在り。後二年同一性質の契約ベルスに於て調印せらる。然れ共眞の蘇國契約は國民的契約にして、『信仰告白』と稱せらるゝ者也。此契約は初めウョン、クレーゲ之を草し、一五八〇年國王之に調印し、翌年人民一般之に調印せり。而して此契約は後年改造せらる。此契約の重なる點は、法王政治に反對する事、眞正なる宗教及び其長老政治を固守する事、及び國王に忠義なる事是也。一六四三年蘇國政府及び長老派大會は英、蘇、愛三國に於るプロテスタント教を保護し、且宗教上の統一を得んため、三國の同盟を謀り、英國の議會及びウェストミンステルの宗教會議亦之を承認し、チャールス二世又之に調印せり。然るに一六六二年に至り此契約は不法と認められ、一六八二年には正式に排斥せられ、一六八五年には此契約を守る者は謀反人と宣告せらるゝに至れり。カヴェナンターの中には國王の命に從ひ其契約を棄つる者多かりしが、蘇國人の中には又飽くまでも之を固守せんとする者ありて、激烈なる爭鬪相續き、一六八八年宗教寬容令出づるに及び、悲慘なる爭鬪の後遂に此團體の消滅を見るに至れり。

カエタン 【人名】 ヤコボ Cajetan, Jacopo 一四六九—一五三四 以太利の神學者。ガエタに生れしを以て Thomas de Vio di Gaeta として知らる。一四八五年ドミニカン僧派に入り、プレシア、パヴィア及び羅馬の神學及び哲學教授となる。一五〇八年ドミニカン僧派の長となり、一五一七年法王レオに依りてカルヴァナルに擧げられ、又ルーテルを詰責し、其運動を制止せしめんため稱選に遣はされしも其効なかりき。

永生（カヒリナイイヂ） Eternal Life. 『生、死』の條を見よ。

究りなき刑罰（カヒリナイバツ） Eternal Punishment 『生、死』の條を見よ。

カステル 【人名】 エドマンド Castell, Edmund 一六〇六—一六八五 英國の東邦學者。創橋にて教育を受け、大學に在りし時『希伯來、カルデア、スリア、サマリア、エチオピア、亞剌比亞、波斯、七語字書』を編纂す。十八年間一萬二千磅を投じ其の財産をも健康をも藏靈す。一六六六年王室牧師に任ぜられ、又亞剌比亞語教授となり、後にはカンターベリー受給者たり、ペッドフォルドシヤのハイハムの司長となりて死す。

カスベルト 聖（セント） Cuthbert, St. 【人名】 六八七死 英國の僧。第七世紀の初年ノルサムブリアの貴家に生れ、六五一年中一夜羊を牧せる間に、幻にて天啓を受け、直ちに聖メルロース僧院に行き、院主ボイシルより入院を許され、其所より他人と共にライボンに行き、アルグフリスの興へたる地に僧院を立つ。然れどもアルグフリス復活節及び剃髮等の見解に於て羅馬に從ひしかば、ライボンの僧等は之と一致する能はず、六六一年メルロースに歸りしが、同年院主疫病にて死し、カスベルトは羅馬見解を採用せしものゝ如し。何となれば六六四年リンディスフェルン院主として招かれしは此の見解を同院會員に奉ぜしめんがための目的にして、彼は之に成功したればなり。同院にあること十二年、隱遁の心切へ勝く、六七六年院主を辭し、フェアルン島に隱者として退けり。六八四年強られてリンディスフェアルンの監督となりしも、二年にして再び先の島に退き、其所にて死せり。生存中より聖者として同輩に敬はれしが、死後年を重ねるに從ひて其名高く、奇蹟續々現はれぬ。死ぬる前遺戒にリンディスフェルンの僧等いつまでも棄てざるべしと誓ひて同院に葬るを許せしものなりしかば、八七五年デーン人院を取りし時には、僧等は之を舁ぎて逃れ、八年間撰へし後チェスタールストリートに定住せしが、此も又デーン人に取られ、九九〇年再び選び去り、九九二年ダルハムに至て定住安置し今尙同所に在り。

カセドラル Cathedral. 【建物名】 カセドラ（Cathedra）なる語は、元來教會堂內牛圓形の壇上の中央に、壁に向て置かれたる監督の椅子を指したる者なりしが、後監督職を意味する語となり、更に轉

じて監督の勤務する教會の建物を指すに至り、現今此意義に於て用ゐらる。

カタコム Catacombs. 【雜語】 初代基督教徒が第五世紀頃迄死者を葬りたる地下室の名。西利亞、亞歷山、メロス、マルタ、シシリ、西班牙及び以太利全國殊にナポリ、及び羅馬に散在す。其中最も廣大にして、且美術上幷宗教上最も重要なる者を、羅馬城外に在る者とす。羅馬市を圍繞せる丘下の凝灰石を鑿ちて造れる蟻窟的行廊にして、其數五十有餘、或る物は比較的地面に接近せりと雖も、其多數は漸次地下に達して階段をなし、七十呎の深に達す。地中縱橫に亘れる無數の行廊を延張すれば五百四十五哩の長に達すべく、此處に六百萬の死者を葬るを得べしといふ。通路は多くは幅る狹隘にして（廣さ一呎四分三乃至二呎半）二人相並びて通行し難し。左右の側壁には棚の如き凹所を設備となく穿ちて、死者を葬る場所となす。時としては一凹所に二人の死體を發見することあり。凹所每に大理石の板又は燒瓦を以て蓋ひ、其上に死者の姓名と死ぜる時の年齡と信仰の表號とを記せり。初代の者は希臘語を用ゐ、後代の者は拉丁語を用ゐたり。元來カタコムは埃及人及び猶太人の間に行はれたる者にして、基督教徒の踏用したる者なれば多くの點に於て異教的なる所あり。例之死者の生前に用ゐたる裝飾品、紀念物其他の器具を墓中屍體の傍に發見せるが如きは、來世用のためにとて爲せる者にて、其異教的なること明也。又カタコムは元來秘密に造られたる者に非ず。基督教徒最初のカタコムは公道に沿ひて造られ、其入口の如き明に見るを得たりき。殉教者の遺體を葬る時は何等の困難なくして弼ることを得、且其紀念祭を墓上の禮拜堂にて行ふことも敢て困難なることには非ざりき。然るに後迫害の盛なるに及びて、初め選りたる入口を閉鎖し、容易に發見し難き場所に新なる入口を設けたり。又第三世紀の中頃に至り、基督教徒の集會禁ぜられしかば、彼等はカタコムの內に大なる室を設け其處にて禮拜を守りたりき。傳說に依れば此等のカタコムの五六箇は使徒時代に溯るを得べしといふ。基督教徒最初のカタコムは貴女の寄贈に係る土地に造たるは疑もなきことにして、此地、洞窟を爲せるよりカタコムの名を得たるならんといふ（希臘語 Κατα κύμβας の κύμβας は空杯の義あり。又 κύμβας は酒杯の義也。又 κύμβας は說に此地の附近に酒樽ありしより此名を得たるならんといふ）。

教會の勝利を得るに及び、カタコムの埋葬地として使用せらるゝこと漸次減少するに至れり。メルキアデスはカタコムに葬られたる最後の法王也（ヒピリヌスより發に至る迄十三人の法王此內に葬らる）法王ジルヴェステルはカタコムの上に自ら建てたる會堂內に葬られ、マルカスはパルビナの墳墓の入口なる紀念室內に葬らる。斯く一たびカタコム外の會堂又は

一 聖ヒシドリアの禮拜堂　二 椅子　三 監督の椅子　四 第三世紀法王の墓

カタコムの圖

其附近に葬らるゝことも初まりしより、人々皆競ふて之を撰むに至れり。然るに又コンスタンチン帝の後殉教者崇拝の行はるゝに至り、カタコムに對する新興味起り、殉教者の墓上に莊麗なる會堂を建て、且其墓を露出せんため、墓に通ずる行路の口に當る丘側を穿ち、壁に支柱を施し、通路を作り、階段を設け、大理石を以て其小禮拝室を飾り、且當時有名の美術家をして之に畫かしめたり。斯くて殉教者の誕生日には許多の群集巡詣し、其狹き室に溢るゝに至れり。エロームは四百年頃の著書四十の五、六を註し、彼が幼時其友と共に日曜日毎にカタコムに遊びたりしことを記して『兩側の壁は屍體を以て充され、且室内暗黑にして、恰ろに預言者が「生けるまゝにて陰府に下らん」(詩五十五の十五)と云へる語を思ひ出せり』と云へり。今日此遺址を訪ふ者も亦同一の感あるべし。

現存する記錄の傳ふる處に依れば、三三八乃至三六四年羅馬にて死せる基督教徒の三分二はカタコムに葬られしが、三七四乃至四〇〇年には三分一、四一〇年後は僅少の死者を葬りしのみ、四五四年以後は一人も此處に葬られず。尤もナポリ及びシシリーにてはカタコムに葬ること、第九世紀若くは十世紀の頃まで繼續せり。ヴィジゴス王アラリック羅馬帝國に勝ちて後は、羅馬の基督教徒も最早其墳墓を裝飾するの自由を得ず、四一〇年よりカタコムは漸次廢壞に歸し、四二六年後は復た墳墓堀盤のことを聞かず。後オストロゴス侵入するに及び、殉教者の墳墓を毀ち、其骨を曝すに至れり。法王ヴィクトリウス、ウルバン三世(五六八)及びセルゲウス、グレゴリ三世(七三五)之を回復するに力を盡したれ共、ロンゴバルド人再び來りて之を破壊し、聖徒の骨を奪ひ去り、人民の之に對する尊敬の念も亦漸く薄らぎ、墳墓の跡に羊欄を設くるに至れり。七六一年法王パウル一世一百の屍骸を、自ら建てたる新教會に移し、八一七年パスカル一世及びレオ四世は之を『パンセオン』(合祭廟)に移し、斯くしてカタコムは全く廢墟となるに至れり。然れ共千四百年頃に至るまで、尚此等のカタコムの三箇には巡禮者の來り訪ふ者少からざりしが、第十五世紀に至りては唯一箇のみ縱覽を許せり。一五七八年偶然に他のカタコム發見せられしが、羅馬教會は直ちに其遺物を取りて其祭壇を飾れり。法王ジックスタスはカタコム發見のために其全力を盡し、マルタ僧派のボシオはカタコム探索のために其財産を費せしのみならず、又屍々其生命を賭したりき。斯くして多くの寶玉、什器、石棺等を發見せしが、其保管の惡しきがため多くは紛失し、其殘れる者は第十八世紀に至りベチザクト十四世之を一九〇一年又偶然にしてナポリのモンテ、ディ、ディオに於てカタコムを發見せり。

カタリ派 Cathari. 【學派名】 ノスチック教の一派、自らカタロイと稱す、清教徒の義也。物質は惡にして諸惡の根源也、至上者は此世界の創造者に非ず。基督は眞實の身體を有せず、又眞實の意義にて此世に生れ又は死したりといふを得ず、人の身體は惡にして、惡しき精神の所產也との事を唱へ、新約聖書を承認すと稱し、禁慾主義の生活に依て身體の束縛を免れんと欲し、其最も進歩したりと稱する教徒は酒肉及び婚姻を斷ちたりき。此學派はパルカン半島に起り、後伊太利及び佛蘭西の南部に其勢力を及ぼせり。

カタリナ 聖 Catharina, St. 【人名】 希臘、羅馬兩教會にて共に崇拜する女聖者。アスセマニ以後は聖カタリナを以てユウセビウスが其の歷史中に記す所のアレキサンドリア貴女と同人なりとする說多し。同歷史に依れば、カタリナは富める貴族の女なりしが、マキシミヌス帝の姦淫的攻擊に打ち勝ち、之がために身は追放せられ、財は沒收せらるるあり。されどルーフィヌスの歷史には、其の貴女の名をドロテアと記すを以て相一致せず。又『羅馬殉教者傳』や、シメオンメタフラステスの書ける物語などの中には、カタリナはコンスタンス王の女、十八歲にして賢且つ美なり、皇帝の命に依りて哲學者等と議論し之を改宗せしめ、又皇后、將官ポルフィリウス、二百の軍人其他を改宗せしめたり　一たび車輪より成れる刑具に載せられしも、不思議にこを免かれしが、終に首斬られたり。其の遺骸は天使これをシナイ山に運び去りぬ。後ユスチニアヌス一世其所に僧院を立てゝ後を猶表せりとあり。彼は巴理大學の守護聖者として崇められ、中世歐家は好んで之を畫けり。

カタリナ ジェンナの Catharina of Sienna. 【人名】 一三四七—八〇　羅馬教會の女聖者。一六三五年ドミニコ派の第三部に入り、其の最精なる生活をなし、又神の靈に醉ふ如くなることに由て大なる名を博し、屢々政治上の交渉に關係せり。即ちフィーレンツェと羅馬間、ウルバノ六世とクレメンス七世間、羅馬とナポリ間等の調停者となりぬ。一四六四年ピウス二世より聖者とせらる。書翰集、祈禱集、預言集等を殘す。

カッシアヌス ヨハネス Cassianus, Johannes 【人名】 中ペラギウス說の創始者。三五〇乃至三六〇年頃に生れ、ベツレヘム僧院にて院

主ゲルマヌスの下に教育せられ、後師弟相友として善く、共に埃及の隱者等を歷訪し、大に感動する所あり、七年間埃及に在りし後、コンスタンチノープルに歸り、カッシアヌスはクリソストムより執事に任ぜられしが、四〇四年クリソストム罷められて、カッシアヌスは獨り羅馬に行けり。ゲルマヌスの事はまた傳はらず。アラリク羅馬を侵せし時、カッシアヌスも平和と安全の地に求むべからざるを看取し、アッスリアに行き僧院と尼院とを建て『デ、ケノビオルム、インスチチュチス』及び『コルラチオネス、パトルム』を著して弟子を教へ、四方教會に僧院主義を引き入れたり。宛も其頃四方教會にアウアスチヌスより深く勸かされんとしつゝありき。去れどカッシアヌスの育ちたる東方教會の思想は、アウアスチヌスの唱ふる所と甚しく懸隔し、到底預定說や神の恵の不可抗的なる事の如き思想を容るゝ能はざる有樣なりき。さりとてカッシアヌスはペラギウスと同盟するほどにアウアスチヌスと相隔たらず、却てレオ大法王に勸められ『デ、インカルナチオネ』を著して直接にネストリウスを攻擊し、間接にペラギウスを攻擊し、斯くて中ペラギウス說の創始者代表者とはなれり、四四〇年乃至四五〇年頃死す。

カッドウォルス ラルフ Cudworth, Ralph. 【人名】 一六一七—八八　英國劍橋プラトーン學派中最も錚々たる者にして、ソマーセットシアのアレルに生る。劍橋に學び其フェローとなり、後ノルス、カドベリーの牧師、劍橋クレーア、ホウル長、希伯來語教授、クライスト カレッヂ長、ヘレホルドシア、アシウエルの牧師、グローナエスターの牧師等に歷任す。哲學者、神學者として當時最も重要の地位を占め、ホッブスの自然主義及び淸教徒の非哲學主義に反對して、宗教と哲學の一致を主張せり。彼は主張すらく、眞理は感官以上の者にして、神靈に於て恒に存する者、吾人は唯吾人の心聞きて之を受け容るべき者也、ホッブスが所謂物體界の知きも、亦單に感官上の者に非ず、物體てふ觀念は既に整然たる數理上の關係なも含蓄する者にして、夫の絕久不變易する感覺の能く形成する處に非ず、道德上の原理も數學上の眞理と共に神の知性に本具せる永恒なる者にして、神意又は人意の制定に依りて始めて成れる者に非ずと。其著書の主なる者は "The True Intellectual System of the Universe" (一六七八) "Treatise Concerning Eternal and Immortal Morality" (一七三一)にして、其外 "The True Nature of the Lord's Supper" 及び "The Union of Christ and the Church Shadowed" 等の著書あり。

カッパラ Cabbala. 【學派名】 希伯來語『傳說』の義、神がアダムに與へ給ひし者也と傳へられたる猶太古代の宗教哲學若くは接神術。或學者の說に依れば此哲學は一旦巴比倫囚時代に滅亡し、後又エヂプトに默示せられたりしとする此學派有名の書は、ソロモン、ベン、ヨカイ(七二—一一〇)の作也と傳ふ。然れ共博士ギンスブルグ其他の人々の說に依れば、カッパラ哲學はマイモニデスの哲學に反對するの目的を以て、一二〇〇乃至一二一三〇年の間に首目者イサクと及び其弟子の建てたる者也といふ。其教義の或る點に基督教に類似す。又著しく希臘の新プラトーン學派の感化を受けたる跡あり。此學派の有する重なる論點は、神は絕なく、限界なく、意志、目的、願欲、及び動作なし、然れ共十のセフロト(sephiroth知識の義)彼より發出す、其初の者を不可測の高さと云ひ、其他の者を順次に智慧、知識、悲恵、權力、美、堅固、華麗、基礎、及び權威と名くるのこと也。此學派は輪廻說を教へ、猶太人の智的發達の上に大なる影響を與へたり。

カップ シクスト カルル Kapff, Sixt Karl 【人名】 一八〇五—一八七九　獨逸敬虔派の名士。牧師の子、ウルテンベルヒのギムナジンゲンに生れ、幼時より宗教心深く、チウビンゲン大學にては親友ウィリアム、ホファックルと每日祈禱を共にしたり。ホフウイルの牧師、チウビンゲンの講師(レベーテント)の地位を經、一八三三年コルンタルの敬虔派會衆の牧師、四三年ミュンゲンの、四八年ヘルレンベルヒの『チカン』となり、五〇年ロイトリンゲンの、五十二年スツットガルトの『プレラート』となり大なる感化を與へたり。彼は純粹なるスアビア人にして誠實寬容溫厚の性を併有し、附近の凡ての牧師と交り、宗教に趣味を有する人を皆引き着けたり。說教家としては神學、教會政治等に角立ちたる意見を有せず、其の說教は舊チウビンゲン派の超自然主義を多く加味したれど而も一層溫かなり。彼は人々の家庭的社會的內情を看取して之に同情し之に就て語りたり。辯舌は滑々たらざれども誠實を含み、會話的にして人の心を打つ。牧師としての感化著しく、年々の訪問三千に及ぶ。ウルテンベルヒの教勢には心を傾め、バーゼルの外國傳道會にも同情し、斯くて三十年程の間國の敬虔的分子の中心たりき。多くの說教集其他の小册子あり。其子カルル、カラブ著の傳記あり。

カッペル ルイ (又ルドヴィコス カッペロス) Cappel, Louis (Ludovicus Cappel-

Ius). 【人名】 一五八五—一六五八　佛蘭西の舊約聖書學者。佛蘭西歷史に多くの名士を出だした る一族に屬し、見ウサック、カッベル又改革教會にて教育せられ、セダンの希伯來語教授、神學教授として多くの著作をもなし有名なり。ルイはセダンに近き聖エリエに生れ、セダンにて神學を學び賢くアイロン侯の家庭教師たりしが、プルドーの改革教會の支給にて四年間英國、和蘭、獨逸、瑞西に遊學し歸りて一六一三年ソーム了學校の希伯來語教授とせられ、三三年神學教授とせらる。博學の人なりしが特に舊約原文の歷史に精通し『アルカヌム、ブンクタチオニス、レゲェラクム』『ダリチカ、サクラ』『デアトリバ、デ、ゲエリス、エト、アンチキス、ヘブライオルム、リテリス』等を著はし、希伯來文學母音の點に比較的後世の所作にして、從て聖書は逐字的に神靈の氣を吹き入れたる者と見るべからざるを說く。之を以て新教徒は非常に反對し、此等の書の出づる毎に攻擊蝟集し、甚だしきは友人さへウエネヴェ、ライデン、セダンより批評を加へ『クリチカサクラ』の知きは十六年間出版遲延したる程なり。彼は此等の批評に對して答辯を著はせしが、攻擊は益々激しく終に『フォルミュラ、コンセンスス、ヘルヴェチカ』の第一條を直接に彼に當つるに至れり。されど半世紀經て後は彼の說に一般の承認する所となりしこそ面白けれ。

割禮 (カツレイ) Circumcision (Hebr. מָלַל; Gr. περιτομή). 【慣例】 陽皮を割ることにして、亞細亞に在ては猶太人、亞剌比亞人、コルキア人、亞非利加に在ては埃及人、マンザンゴー人、ガラ人、ファラシヤ人、アビシニヤ人、ボンツ族、太洋州に在てはオタハイタン人、ハンガ島人、ポリチシヤのメラチジア人、新西ウエールス人、亞米利加に在てはアサバスカン人、ナフアトル人、アグァク人及びアマゾン族の中に行はれたる一種の儀式也。埃及に於て此儀式の行はれたる事なりしなるべし。カルナックのコンスタ神殿の壁上には二人の小兒の割禮を受くる樣を畫けり。思ふに此割禮に文身又は指の節を斷るが知きこと同じく、其初め種族の符徽なりしなるべく、又神に自己を獻ずる犧牲として行ひたるものなるべし。ステードは諸種の民族研究の結果、割禮は成年に達し市民たる權利を得たることを表する者なるべしとの事を攝論せり。果して然らば我國の元服と同一なる者也といふべし。

此儀式の起源知例は兎に角、舊約聖書はアブラハムが埃及に旅行したりし後間もなく、神とアブラハムとの間に結ばれたる契約の徵として、神の立て給へる者にして、アブラハム、其子孫、奴隸及び希伯來人となれる異邦人も、皆之を受くべしとの ことを命ぜられたりとして之を記せり。（創十七の十二、出一二の四十八）此儀式は猶太人が埃及に寓となりし間も行はれたれ共（書五の五）荒野に漂泊せる時は之を行はざりき。出四の廿四、廿五に依れば、モーセは其子に割禮を施すことを忘りたるため神の怒に觸れ、其妻ヂッポラ其所由を知り、其子に割禮を施して神の怒を和めたりしと云ふ。猶太人は迦南に入りし後ギルガルにて再び割禮を行ひ、其地を稱して陽皮山と云へり（書五の三）舊約聖書の歷史の部分には、彼等が此後割禮を行へりとのことを記さず、此儀式の斷へず行はれたりしこと疑なし。アブラハムは九十九歲の時、イシマエルは十三歲の時割禮を受けたり。イスラマイト人の中に在ては男子生長して信仰條目を唱へ得る齡に達すれば割禮を施すの風あり。同教の聖典には割禮のことを記さず共、亞剌比亞人の傳說に依れば、マホメタは割禮は强て行ふべき者に非ざれ共、之を行へは功德ありしとのことを云へりといへり。イサクの割禮を受けたるは生れて八日にして、神は男子生れて八日にして割禮を受くべしとのことを命じ給へり（創十七の十二）故に猶太人は一般に此日を以て割禮を行ふべき日也となし、且此儀式と共に命名をなすを例となせり（路二の廿一）現時猶太人の中に在りては、此儀式其兩親の家又は會堂にて行はれ、其子の父又はモヘルと稱する割禮を施す人（通常外科醫にして、且性德汚れなき猶太人ならざる可らず）之を行ふ。古昔は石の小刀を用ゐたりしが、現今は鋼鐵を用ゆ。此儀式を行ふ前夜には其兩親豫夜して警戒す。是れ此夜は惡鬼の母來りて小兒を奪ふことあるへしとの傳說あるが故也。又兩親の朋友多く來訪し、其近隣の小兒悉く來り集りし。教師は甲六の四—九、十一の十三—廿一及び民十五の骨七—四十一の聖句を讀む。其日に至れば割禮を受くる小兒は、結人に携へられて割禮を行ふ室の入口に至り、名補之を取りて室中に入る。室內には預言者エリヤに獻ぜられたる空席の椅子あり、是れエリヤが此式を守るに熱心なりしを紀念せんため也。モヘルは新綿を以て此椅子を潔別し、且寢がエリヤに倣ふて此式を首尾能く遂げんことを祈る。斯くて小兒に命名し、其子の父及び共に在る者信仰條目を唱へ、切開終ればモヘル其子のために祝編を祈り、兩親は饗宴を設けて之を祝するを例とす。

使徒時代に至り猶太的臭味の基督敎徒は、異邦人の改宗者には先づ割禮を行ひんことを要求せり。保

羅は爭論を設けんためにテモテに割禮を施したりしが（使十六の三）ヂトスには之を行ふを許さず（加二の三）羅馬書にはアブラハムが神と契約を結びしは、割禮を受くる前なりしことを論ぜり（四の十）エルサレムに於る最初の宗教會議は此問題を決定せんために開かれたる者にして、異邦人の改宗者は割禮を行ふを要せずとの一定を議決せり。尤もエテオピヤ及びアビシニヤ教會の中には此後尙割禮を行ふ者もありき。又第十二世紀に以太利に割禮を行ふ基督教の一派起りしが、間もなくして仆れたり。

割禮は猶太人の中に在りては、罪を潔むるの意を表し、陽皮なる語は頑冥及び不完全を表するの語となれり。申冊の六に『心に割禮を施す』と云へるは此義也。フィローンは割禮を以て表象的に心の淸潔なるべきことを教へ、淸潔、善眞なる行爲を高むる者也と云へり。然れ共エレミヤは外部の儀式と內部の德とは必ず併行する者に非ざるを認め、埃及人、エドム人は共に肉の割禮を受けたる者なれ共、心に割禮なき者也と云へり。（丸の廿五、廿六）保羅も亦肉の割禮と心の淸潔とを對照し（羅二の廿八、廿九『割を行ふ者を惜めよ』とエヘリ（腓三の二）。

割禮の祝節 (カツレイ) Feast of Circumcision.

【行事】 耶蘇基督の割禮を祝するため、羅馬教會、希臘教會及びアングリカン教會にて一月一日に行ふ祝節也。元來此日は異教徒がヤヌス神を祭りたるに反對し、斷食日として守りたる者なりき。

カテキウメン Catechumen. 【術語】 口語にて教へらる3者の謂にて、初代教會は洗禮志願の候補者を呼ぶに此名を以てせり。詢して之を四級に分てり。即ち（一）求道者（Inquirers）　私に教を受くる者。（二）聽講者（Audientes）　更に進歩して、マスに與るを得る者。（三）プロストラチ（Prostrati or Orantes）　會衆の禮拜に與るを得る者。（四）エレクタチ（Electi or Competentes）　洗禮を志願し且其準備ある者。受洗後の罪を恐るゝより、多くは其死期の近づく迄第三級に留まりたりき。

カテキズム Katechism. 【地名】 パレスチナ及びスリヤに此名を有せる地數ヶ所あり。（一）　カデシ、パルチア　以色列人民漂泊史中シナイを除きては、此地より著しき者なし。偵察隊を派してより、パレスチナに入る迄三十八年間以色列人の駐在せしは此地也（民廿の一、十六）幕屋の立てられたりしも、人民が禮拜及び祭例のために集び來りしも、コラの叛きたりしも、モーセの水潔を發見したりしも此地也。然れ共此地の何れに在りやに就ては古來議論一定せざりし。一八四二年ロジン、ローランド東ホル山に對するアラバ河と四ガザに接するヒリスチア海岸の間に在る樹木なき石灰石の高原に於て、古昔のカデシの地と思はる1場所を發見せり。此地に泉あり、アラビヤ人は之を呼びてアイン、カデス（聖き泉の義）とナロンテスのカデシ（代六の七十二）　ヨアナクに近き處に在り。

カテシ (カトリツヒヤ) 下等批評 The Lower Criticism. 【術語】 聖書の高等批評に對し、經句批評を稱して下等批評といふ。『經句批評』の條を見よ。

カトリック Catholic. 【術語】 三一教に又は『普遍』の義。初代の基督教徒は國民的なる猶太教會に對して基督教會を呼ぶに此語を以てし、後又異端派に對して正統教會を區別する語となりしが、近代に至り羅馬教會獨り自ら此語を用ゐ、プロテスタント教會も亦之を許容せり。然れ共羅馬カトリック教會と稱するを以て更に正しとなす。使徒信經中に『聖』（カトリツヒヤ）『公』（アポストリツヒヤ）『會』とあるは、基督教會全般の意にして、素より羅馬教會の義に非ず。

カトリック アポストリック教會 (カトリツヒ) Catholic Apostolic Church. 【宗派名】 一にアルヴィング派と稱す。エドワルド、アルヴィング（Edward Irving 一七九二—一八三四）此運動の主導者なりしを以て也。此派は、言語は其思想を言び顯はすために聖靈の用ゐ給ふ所の者也と信ずる、敬虔なる長老派の人々が一八三〇年クライド河に其運動を開始せるに初り、翌年倫敦に於て同一運動あり。一八三二年の終には言語の超自然的性質を信ずる者漸く加はり、且彼等は神の聖意は使徒臨を再興するに在りとなし、神は自ら十二人を選み給ふべしと信ず。一八三五年十二使徒の數備はる。其教義は拜眞的にして、彼等は基督の再來、及び其近きに在ること、パプテスマに依て新生すること、基督が聖晩餐中に靈的存在を爲すこと等を信じ、又信條を嚴ぜり。其教會制度は頗る嚴密にして、其禮拜は頗る儀式的也。全體より之を見るに、彼等は極端なる高教會派にして、監督教會に對し最も同情を有し、其會員の多數又監督教會より來れり。倫敦は此派の中心にして、亞細亞の七教會に倣ひて愛に七個の教會を有す。然れ共英國及び北獨逸には尙數多の教會あり。最近の調査に依れば、英國に在る信徒の數凡そ五萬人あ

り。又米國にも之れあれ共其勢甚だ振はず、一九〇七年の統計に依れば、教官の數十四、教師九十五人、信徒一、四九一人に過ぎず。

カトリック エピッスルス Catholic Epistles. 〔術語〕 新約聖書書翰中特條の教官又は個人に宛てたる書翰をいふ。此種の書翰七篇あり、即ち雅各書、彼得前書、彼得後書、約翰第一書、約翰第二書、約翰第三書及び猶大書是也。以上の書翰に就ては各書の條を見よ。

加特力教會 『羅馬教』(ローマきょう)の條を見よ。

カトリック ツルース リサイエチー Catholic Truth Society. 〔結社名〕 英國に於る羅馬教出版會社の一にして、一八七二年博士ダッカン之を創立し、一八八四年之を擴張せり。其目的簡短にして且廉價なる信徳用書を羅馬教徒の中に廣布すること、無學者の宗教的智識を高むること、プロテスタント教徒の中に羅馬教徒に關する事を知らしむること、及び誣衊にして通俗なる冥書を普及すること等に在り。創立以來羅馬教徒一般の賞勵を得、漸次盛大に向へり。其事務所は倫敦に在り。

カナ ガリラヤの Cana of Galilee. 〔地名〕 耶蘇の弟子ナタナエルの故郷(約廿一の二)耶蘇最初の奇跡を爲せし地(二の一—十一)又カペナウムより來れる大臣其子の醫されたることを聞きし處(四の四)聖書には此外にカナの記事なし。而して此等の記事より吾人は唯カナのガリラヤに在りしこと、及びカペナウムより高地なりしことを知るのみ。波學者は之を以て今ナザレの西北凡そ四哩に在るkefr kenna の地と同一視し、又他の學者はナザレの北凡そ九哩に在るkana el Jelil の地也とせり。後說言に近きが如し。

カナダ Dominion of Canada. 〔地名〕 東には太西洋、西は太平洋、南は合衆國、北は北極の間に横はる廣大なる英國の所領地にして、アラスカ及びラブラドル海岸の一角を除き、合衆國の北に在る北亞米利加大陸全體を包容し、之に散多の島嶼を加ふ。現今九州に分れ、西北諸領地を合せて總面積三百廿二萬八千九百三方哩、人口五百卅七萬一千三百十五人を有す(一九〇一年調)政體は英國並に合衆國の政體を混合せるが如き者にて、各州自治の政府を有し、又議會を有す。聯合議會は英國の制度に類し、內閣は衆議院に對して責任を有す。元老院議員は太守之を任命し終身職とす。各州に副太守を置き太守之を任命す。太守は英國王其貴族の中より之を任命し、國王の名代として全權を有す。加那太は曾て材木、獸皮の產地としてのみ知られたりしが、近來小麥、家畜を輸出することゝ爲し、又礦種の礦山あり、其富源測る可らず。歐洲よりの移民頗る速也。政體、宗教又共に頗る盛大にして、普通教育は一般に無月謝制度也、飲酒の禁能く行はれ、離婚甚だ稀に、オンタリオ、キュベック、マニトバ、サスカッチワン及びアルバタ五州に於てに全く之を禁止し。

羅馬教會は此國に於ける最も早き教會にして、其創立は此國發見の時に溯ることを得へし。何となれば當時佛國政府は最も不利なる條件を以て、ヒウグノー教徒の移住を許容したれば也。一六一五年フランシスカン派中一派の僧侶四人キュベックに移住し、羅馬教會を建つ。一六二四年イエスイト派の人々來着して傳道及び教育の事業を開始す。一六五八年フランシイス、ラヴァル新佛蘭西の監督代理として派遣せられ、一六七二年キュベック最初の監督に擧げられ、其下に教會組織初めて成りぬ。後加那太の英國の所領に歸するや久しくキュベックの監督空位となりしが、一八〇六年羅馬法王はプレタス(M. Plessis)を擧げて其空位を充たさしむ。次で加那太最初の大監督となる。後大監督區を分ちて二となし、二大監督、十二監督を置く。最近の調査に依れば信徒の數二百廿二萬八千九百九十七人(一九〇一年調)にして、新教諸派の中之に匹敵する者なし。監督教會の創立に加那太の英領に歸したりし時に溯るを得べし。一七六六年最初の監督教會モントリオルに組織せられ、羅馬教會の建物を假用して其禮拜を守りぬ。一七八七年博士イングリス英國王の任命を受けてノヴァスコシアの監督となる、是れ加那太に於る英國教會最初の監督也。一七九三年博士マウンテーン、キュベックの監督となる。一八三七年モントリオルの監督區新に組織せられ、爾後又多くの監督區組織せらる。今日加那太の監督教會は英國の母教會と何等の關係なし。最近の調査に依れば、其信徒の數六十八萬三百四十六人也(一九〇一年調)其神學校はレンノックシビル、ウイニペッグ、ロンドン、ウィンゾル及びトロントに在り。トロントに在る三一大學は其最大なる教育機關也。

長老教會は一七六五年第廿四聯隊附の牧師がキュベックに於て說教せしに初まる。一七六九年蘇國より數人の牧師ノヴァスコシアに派遣せらる。後蘇國に在る各派の長老教會各獨ふて教師を送りしが、也米の地にも亦長老教會の小派分立せしが、一七八五年此等の小派は遂に合同して『加那太長老教會』なる

者を組織せり。今や此派も亦大なる發達を爲し、東、ニューフォンドランドより西、太平洋の沿岸に至る迄、至る處此派の教會を見る。信徒の總數八十四萬二千三百一人に上れり(一九〇一年調)神學校はハリファックス、キュベック、モントリオル、キングストン、トロント及びウイニペッグに在り。キングストンのクイインス大學は其最大なる教育機關也。

會衆教會は一七五九年新英州の清教徒が、ノヴァスコシアに移住したりしに初まる。一八〇一年倫敦傳道會社は宣教師をキュベックに送り、其地に在る軍隊に傳道せしむ。一八一〇年更に宣教師を上部加那太(今のオンタリオ州)に送る。一八四〇年神學校をトロントに立てたりしが、後之をモントリオルに移せり。

メソヂスト教會は一七七二年少數の英國メソヂスト教徒がノヴァスコシアに來りし時に初まる。次の十三年間他の諸關體重に合衆國より來りて上部加那太諸地方に居を占め、各々其關人に編書を傳へたり。一七九〇年ウィリヤム、ロッシーと稱する合衆國の巡回傳道者加那太に來りて多くの悔改者を集めぬ。二年の後アスベリー監督に一名の按手禮を受けたる教師を送られんことを請ひ、ダリアス、ダンハム派遣せられたり。斯くて三十六年間加那太に於ける事業は合衆國なるメソヂスト監督教會の監督の率ゐる所なりしが、一八二八年其管理を辞し、加那太の諸傷會は加那太メソヂスト監督教會と稱する一個獨立の教會となりぬ。後五年加那太に數名の宣教師を送りたるプリチッシ、ウエスレアン教會との間に合同成り、合同教會を加那太ウェスレアン、メソヂスト教會と稱しぬ。監督制度を加へて年々會長を擧ぐることとし、其他の教會政治も亦英國に於ける母教會の制度に從ひて改めたり。一八七四年ウェスレアン、メソヂスト教官、メソヂスト、ニウコンヲクション、及び東部英領亞米利加年會の同に合同成り、新教會の名を加那太メソヂスト教會とし、三教會と英國に於ける母教會との關係は相互の合意に依りて解かれたり。一八八三年更に廣き合同行はれ、加那太メソヂスト監督教會、初代メソヂスト教會及びバイブル、クリスチャン之に入りぬ。

於是加那太のメソヂスト諸派は悉く一に歸せり。現在信徒の總數九十一萬六千八百六十二人也(一九〇一年調)其神學校はトロント、モントリオル、ウィニペッグ、マウントアリソン、ニウウエストミンスタルに在り。トロントのヴィクトリア大學は其最大なる教育機關也。

バプチスト教會は以上諸派に次ぐ大教派にして、現在信徒の數廿九萬二千四百八十五人あり。其外又幾多の小教派あり。

加那太の諸教會に注目すべき一特色は、其合同の精神に富めることにして、以上示せる如く長老教會及びメソヂスト教會は、何れも數多の小派を合同して成れる者也。而して長老教會、メソヂスト教會及び會衆教會の三派は更に三派を合同して一大教會を作らんとし、各々委員を選出して一九〇五年第一回の商議會を開きしが、委員は商議を繼續せんことを議決し、一九〇七年九月其第四回の商議會を開けり。其成否未だ明ならざれ共頗る好望也といふ。

カナン Canaan, Canaanites. 〔地名〕 ハムの子にして、クシ(エチオピヤ)ミツライム(埃及)及びフサの兄弟也。ノアが酒に醉ひたりし時ハムの之に對して爲せる行に依り、カナンは眼目れ、其兄弟セム、ヤペテの僕となりて事へんと預言せられたりしといふ(創九の廿二—廿七)然れ共ノアに對してなせるはハムにしてカナンに非ざれば此記事前後一致せず。故に此物語は古詩より取りたる者也と想像せらる。尤も此預言はカナン人が初めセムの子孫なる良色列人に征服せられ、後彼猶人、希臘人、羅馬人に征服せらるゝに至りて應驗せるを見る。

創十は人種的より也寧ろ地理的區分を示したる者にして、此處に記せる國と國民との關係は地理的位置を記したる者にして、人種的類似を記せる者に非ず。此處にカナンはシドン及びヒッツライムの兄弟也といへるは、パレスチナが埃及の一州たりし時即ち第十八、第十九王朝の時代の事にして、其後の時代に適用すべきに非ず。

カナンの名は『低地』の意義を有する語根より出で、パレスチナの『低地』の義にして、初め海岸地方を指し、後ヨルダン河の谿谷に應用せしが(民十三の廿九)漸次アモリ人の領有せる山地を含めて、全國を總稱するの名となれり。此名に長短の別あり。短きは希臘語ケナ(Ἀνία)又はアゲノルにして、ケナ又はアゲノルはフェニキヤの古名也。テル、エル、アマルナ碑にはキナクキ(Kinakkhi)と記され、南パレスチナの大部分を表す。長きはカナンにして象形文字の中に記さる。又フェニキヤ人の中にも此名を保存せり。希臘語フォイニッタム(Φοίνιξ,Phœnicia)はカナン人(Canaanite)と同義にして、フェニキヤは地中海岸元始のカナン也。拉丁にてはPœni, Punicus と名けらる。フェニキヤは鹽し櫻桃の義にして、埃及の古碑にカナン人をフェンタと稱したりしより起りし者なるべし。埃及人は又カナン及び

四利亞なカール(Kiel)と呼びたり。カールは埃及の國境より北四利亞のアラビに及べる一帶の地を總稱する名なれ共、殊にパレスチナの北部を稱し、南部なればシアヒ(Sahi)と呼べり。フェニキヤ人は商業の民なりしを以て『カナン人』なる語は『商人』と同義なる有するに至れり(賽廿三の八、結十七の四、何十二の七、番一の十一、伯四十一の六、箴卅一の廿四)預言者イザヤは希伯來語なカナンの方言と呼べり(賽十九の十八)フェニキヤの碑文及び舊約に記せるカナンの人名并び地名は此言の正確なるを證す。希伯來語とフェニキヤ語との相違は、單に後者に定冠詞なしといへるが如き些細の相違に過ぎず。テル、エル、アマルナ碑文に依れば、出埃及以前のカナン語と後代に於けるフェニキヤ語及び舊約の言語との間とには殆ど相違なかりしことを示す。當時に於るカナンの文字は巴比倫の楔形文字と同じく、所謂フェニキヤのアルハベットと稱するものは後世の作にして、最も早く此アルハベットにて記されたる者として知られたるは、タロのヒラムがバブルに獻じたるものアブ石也とす(前八五〇)。

カナン Cananean or Cananaite. 【宗派名】 太十の四、可三の十八に耶蘇十二使徒の一人シモンを指して『カナンのシモン』と云へり。希臘語 Καναναῖος は希伯來語 קנאי (此希伯來語は ζηλωτής jealous より來る)の希臘化したる者にて、路六の十五、徒一の十三にはゼロテ (Zeloteryz, Zealot) と譯せり。カナヲアン即ちゼロテは紀元六若くは七年クレニオの戶籍調査に反對せる反對黨の首領ガラのユダが創設せる宗派にして、羅馬の管轄權に反對し、兵力に依てメッシヤ的希望を成就せんとせる者也。猶太人が羅馬に反せし時、エルサレムが羅馬軍に圍まれし時、共に彼等は羅馬人のみならず同國人中の他の黨派にも甚しく敵對したりき。

カニシウス ペテル Canisius, Peter 【人名】 一五二四—九七 獨逸天主教の神學者。和蘭貴族デ、カントの甥、ケルンにて教育を受け、一五四三年イエスイット派に入る。獨逸に於ける同派の教授、五一年維納に於けるイエスイット學校の總長となる。アウグスブルヒとディリンゲンとに同派の學校を創立し、宗教改革の氣運を幾分か抑へ、更にルザナンド一世の宮廷說教者となり、新教の傳播を妨げて成功し、『獨逸の新教徒よりはテ、ホントに因みて墺太利の犬とまで呼ばれたり。著書多く、學者的也。

カーニス カルル フリードリッヒ アウグスト Kahnis, Karl Friedrich August 【人名】 一八一四—八八 獨逸新ルーテル派の神學者。一八四四年ブレスロウ大學、一八五〇年ライプチッヒ大學の教授となる。離口井に文才に富み、思想家としてよりも、通俗的學者として知らる。其著書の重なる者は『聖靈論』『聖晩餐論』『獨逸プロテスタント史』『獨逸改革史』『ルーテル派の神學』等也。

カノニカル アワルス Hours. 【術語】 新禱の爲め特定せられたる時にして、即ち午前六時 (prima) 午前九時 (terce) 正午 (sext) 午後三時 (nones) 夕刻 (vespers) 就寢時 (compline) 及び夜半 (nocturns, matins, or lauds) の七回とす。此時間に用ゆべき新禱、詩篇、讚美歌、聖者の句等を載せたる書物を『新禱日課書』(Breviary)と稱す。此新禱時の定められたる精密の時日は明ならざれ共、早くより行はれたりしが知し。使徒の尙生存せし時代には、猶太の習慣に從ひ日に三回—第三時(午前九時)第六時(正午)第九時(午後三時)—祈りたること殆ど疑なし(徒二の十五、三の一、十の卅)亞歷山のクレメント。テルチュリアン及びエロームも亦此三回を以て通常新禱の時也となせり。第三世紀に至り、之に朝夕を加へて五回とし、第四五世紀の頃に至りて詩篇(百十九の百六十四)に『我れ日に七度贊をほめん』とあるに倣ひて、更に二回を增して七回となしたりしが如し。而して初めて之を規則と爲したるはカッシャン (Cassian 四二四) 也と信ぜらる。英國教會にては午前八時より十二時迄を『キャノニカル、アワル』と稱し、此時間の前後には許可なくして婚姻式を執行するを得ず。

カノニゼーション 聖列加入 Canonization. 【術語】 羅馬教會にて有德なる神の僕を聖徒の列 (Canon Sanctorum) に加ふるをいふ。第十七世紀以前聖徒採擇に關する規律一時弛緩したりしが、法王クルバン八世慇懃なる規則を設けて之を律せり(一六二五及び一六三四年)現今にては何人も死後五十年を經るに非ざれば此名譽に與るを得ず。又聖徒の列に擧げらるゝ者は潔き生活を送り、且奇跡の之に伴ひたる者ならざる可らず。而して其所在地の監督は委員を任命して之を調査し、最後に法王の自ら議長たる會議に提出して之を定む。聖列加入の式は聖彼得大會堂に於てし、法王、カルザナルス其他の高官、僧侶及び信徒の列席せる場所に於て之を行ふ。又聖列に加入せられたる者は、之が日を定めて記念せらるゝ者とす。

カノン 正經 Canon 【術語】 神の默示

に依りて頒はされたる神聖なる眞理を記載せる文籍、即ち經典を稱してカノンといふ。希臘語 Κανών は元來眞直なる竿又は杖の意義にして、奏樂的に物を眞直ならしむるもの、即ち定規をいふ。新約聖書加六の十六及び哥後十の十三、十五、十六に此語を用ゆ。前者は規矩の義に用ゐられ、後者は量の義に用ゐらる。教會が此語を經典に用ゆるに至りし起源に關し三說あり。セムレル。パウル其他の人々は、此語は元來信徒の集會に於て公に讀みたる書物の目錄の意義を有したりしと云ひ、スタイチル其他の人々は、亞歷山の文法家が此語を古典の模範として希臘古代の作家に應用せしが如き意義にて、基督教の經典に應用するに至れりと云ひ、第三說は此語の中には初めより人の信仰行爲を規定する原理の觀念を含みたりと云へり。新約聖書には此觀念を以て此語を使用し、コンスタンチン帝の時に至るまでに書かれたる教父等の書にも同樣の意義を以て此語を使用せるを見れば、第三說眞を得たるが如し。故に此語は標準若くは根本的原理、及び根本的原理を保てる文籍の目錄の意義せりといふべし。舊新約聖書が如何にして『カノン』(正經)となりしやの次第は、各々其條下に就て之を評述すべし。

カノン Canon. 【職名】 カセドラル又は高僧教院 (Collegiate Church) に奉仕し、其律綱を受くる者をいふ。カノンの立てられたるは遠き昔に非ず。通常之を以てメッツの監督クロデガンガが第八世紀の中頃之を立てたるに初れりとなす。元來カノンはカセドラルの近傍に共同的生活をなし、監督を補佐し、其意を奉じ、監督管區の議入に依て發はるゝ下級の僧侶に過ぎざりき。彼等は八一七年迄は其動產を相續せしが、アイクスラシヤペルの會議に於て之を禁ぜられ、新なる規則に依りて支配せらるゝに至れり。然れ共彼等は漸次其羈絆を脫して獨立の團體を作りしが、猶監督の管下に在りき。第十世紀には之と同樣の團體監督の住せざる市邑に設立せられ、之をカレーヂエート (Collegiates) と呼べり(今日此團體の有するチャプテル (Chapter) なる名は後に至りて起れる者也)此團體は後漸次各所に起り、各カセドラルにはチャプテルありて、他の僧侶と區別せられる。此カノンなる名は希臘語 Κανόνες より來り、三箇の意義を有す。即ち規則、一定の歲入より生ずる恩給金、及び目錄の義にして何れも彼等に適用するを得べし。彼等は漸次嚴格なる規則を集めて、共同の生活を爲すを止めたれ共尙團體及び之に伴ふ權力の增加するに從ひ、常に聖職の務の外に他の權能を要求し、監督管區の事務を掌り、中には監督を選擧せり。中には監督に至るまでの外に首長を有せざる者有せり。其當及び之に伴ふ權力の增加するに從ひ、教會に於る通常の職務の外に他の權能を要求し、監督に空位を生じたる時は、監督管區の事務を掌り、又之を補缺するために監督を選擧せり。中には監督の統治を受けず、アイーンの外に首長を有せざる者あり。

カノン ロー 宗教法典 Canon Law. 【術語】 教會の規則、命令を集めたる者をいふ。紀元三百年頃迄は『カノン』なる語は、基督教の創立者より直接に傳へられたる、基督教徒の生活及び行爲に關する規則を指したる者なりしが、宗教會議なる者重要なる地位を占め、其命令權力を有するに至りしより、此等も亦 Canones と呼ばるゝに至れり。而して羅馬監督(法王)の主權漸く認めらるゝに及びて Canones の名稱及び權力は、羅馬監督の命令に移りしが、中世に至り『カノン』なる語は、國家の法律に對して、宗教上の凡ての規則、法典を意義するこゝとなれり。最初三百年の間は、基督及び其使徒等の教訓基督教會の生活を支配するに足りしなる以て、法典を編纂するの必要を感ぜざりき。『使徒の法典』(Apostolic Canon)と稱する者は、八十五箇の訓誡及び規則を集めたる者なれ共、此等の訓誡及び規則の何れも使徒等より出でたる者に非ず、思ふに第二世紀に至りて作られたる者なるべし。此法典は東教會に於てはトルローの會議(六九二)に於て排斥せられ、西教會に於ては其儀文慣例に一致する者凡そ五十箇條を承認せり。Codex Canonum はニカヤの會議(三二五)よりアンチオキアの會議(三三二)に至る迄に開かれたる諸宗教會議に於て定められたる規則を集めたる者にして、此外に又希臘法典あり。希臘會議にて議定せる命令の中直ちに西教會の承認する所となりし者は、ニカヤの會議に於て定められたる者のみ。然れ共第五世紀の頃既に希臘法典の拉丁譯あり。其最も重なる者はイシドリア譯、プリスカ譯、ディオニシウス譯の三にして後者の中には『使徒の法典』を含有せり。『英國教會の法典』はハムプトン、コート會議に於て(一六〇三—四)定めたる百四十一の規則より成る。カンテルベリーの會議を通過したる後國王の批准を得たりしが、一六四〇年に至りて改正せられ、更に十七箇條を加へ、國王の批准を得たり。然れ共今日英國教會の條規として奉ずべき者は『普通祈禱書』なるが故に、此法典は『普通祈禱書』に衝突せざる限りこを守るの義務あるのみ。

カパドキア Cappadocia. 【地名】 小亞細亞の極東に在る最大の州。一七年羅馬領となる。此地の猶太人ペンテコステの日エルサレムに在りし者あり(徒二の九)又初代より基督教此地に廣まりし者と見ゆ(後前一の一)。

カピストラヌス (ジオバンニ ディ カピ

ストラノ) Capistranus (Giovanni di Capistrano) 人名 一三八五—一四五六 以太利の僧、法律を研究しガリヤ王に事へしが、一四一五年フランシスコ派の僧となる。當時の最大なる說教者にして、熱心なるを以てフラチイチエリに反對して著作をなし名を得たり、五〇年フッスの徒に對抗のため獨逸に遣られしが、之には多くの意を得ざりき。去れどコンスタンチノープル陷落後獨逸人民の十字軍精神を奬勵して成功し、自らヨハネス、コルフィノスを援くる十字軍を率ひ、ベルグラードにて土耳其人を敗りし功に與かりたり。

カピトー ウォルフガング Capito, Wolfgang 人名 一四七八—一五四一 獨逸改革者の一人。フライブルヒにて先づ醫學次に法律修に神學を修め、一五一一年ブルフザルにて傳道者となり、バーゼルを經て一九年マインツに轉じ、大監督アルブレヒトと親かりしが、宗教改革に加はり、二三年去てストラスブルヒに行き、改革の主動者となり『コンフェシオネ、テトラポリタナ』を著はす。ベルンの會議には有力なる一人たり。其の穩和にして調和的なる性質は百姓戰爭及びアナバプテスト騷動に於ても感化を與ふること少からざりき。

カフタン ユリウス Kaftan, Julius 人名 一八四八 獨逸の神學者。一八八一年バセル大學の教授となり、二年の後ドルチルの後を繼ぎて伯林大學の教授となる。リッチエル派の神學者にして、其著『ドグマチーク』(一八九七出版)は同派の神學書中最善最眞の書と稱せらる。此外に『基督教の本質』(一八八一)『基督教の眞實』(一八八四)等の著あり。

カプキンス Capuchins. 僧派名 フランシスカン派中の小派。マッテオ、デ、バッシ(Matteo da Basi)の創設する所、聖フランシスの最も嚴密なる規律を勵行すべしとのことを主張す。一五二八年法王クレメント七世後等が三角形の頭巾(Capuchio)を被り、跣足にて外出し、鬚髯を生やし、且躬者の生活を爲すを許せり。

カペナウム Capernaum. 地名 パレスチナ古代の市にして、福音書にのみ記載せらる。基督はナザレに於て其郷人に棄てられしより、カペナウムを以て其本據となし、此處より各地に傳道せり(太九の一)ベッサイダの彼得及びアンデレは、カペナウムに住し、其近傍の海岸にて耶蘇に從へり(可一の十六、廿九)馬太は此地の稅關より耶蘇の召に應じたり(太九の九)耶蘇は多くの奇跡を此地にて行ひたり(可一の廿四)約六に記されたる瑪蘇の說教は此地の會堂にて爲されたる者也。然れ共此地の人々は斯く耶蘇傳道の中心地たりしに拘はらず、其教を聞て悔改めざりしが故に『既に天にまで擧られしカペナウムよ、又陰府に落るべし』との呪詛を受けたりき(太十一の廿三)此地は常に『市』と稱せらる、羅馬軍の駐在所(太八の六)稅關の所在地(九の九)王の大臣の居住地(約四の四十六)として當時重要なる地位を占めたりき。然れ共此地はゲネサレ湖岸に在り(太四の十三、約六の十七—廿一)たりしことの外、其位置に關し聖約は何事をも記さず。ヨセフスは二回此地のことを記したれ共、其何れの地に在りしやを示さず。傳說は之を以てテルハム(Tell Hum)若しくはカミンエー(Khan Minyeh)の地也とせり。近來の學者は多く後說を以て實に近しとなす。

カペナウムの跡

カマルドゥルス Camaldules. 僧派名 ロムアルドス(Romualdus 九五〇—一〇二七)の創設する處。彼廿歲にしてクラッセの僧院に入りしが、僧院の生活に滿足せず、更に聖き生活を爲さんとして諸處を遍歷し、遂にラヴェンナの附近を撰びて他に移り、類くしてハンガリヤの境に至る迄數ヶ所に其僧派を建てたり。此僧派は最も嚴肅主義なる眞心、所謂斷食を嚴かし、パンと水との外肉食を許さず、殊に最も沈默を重ぜり。然れ共後其隆盛に赴くに從ひ、規約漸く弛緩し腐敗漸く生じ、第十八世紀の終に至り遂に全く消滅せり。尤もナポリに於ては一八二二年に至り此僧派を再興せり。

神 (舊約聖書の) God. (in O. T.) 靈名 愛には舊約聖書に顯はれたる神を記す。次の二條に於て新約聖書の神及び基督教會の神の思想を略說すべし。

【神の存在】 舊約聖書の記者は神の存在を証し又は之を論ぜず、彼等は凡て之を預想す。蓋し神の存在を否み、又は之を証せんため議論を用ゆるは古代の精神に非ず。神の存在の信仰は人の自然に、一般に有する所の者なりしが如し。聖書の中にも、其心に神なしといふ者あることを記せりと雖も(詩十四の一)此は單に不敬虔なる生活を爲す者の謂にして、理論的に神の存在を否む者の謂に非ず。且『神なし』といへるも、神の存在を拒否せりとの意に非ずして、神の目の前に在ることを忘れて惡を爲すの謂に外ならず。聖書に依れば、神の存在の觀念は人の有せる原始的思想なりしが如し。希伯來人は天地萬物に依りて神の存在を推知したるに非ず、神の存在の思想を以て天地萬物を說明したる也。彼等には神と天地萬物とは同一の物に非ざりき。自然の推移は神の起し給ふ處也と雖も、自然と神とは同じからず。彼等は神の思想を以て萬有の存在、及び其推移を解說し、萬有の存在及び其推移より神の存在及び其性質を攝摩せず。換言すれば、舊約聖書には自然神學の形跡なし。然らば彼等は如何にして神を知りたりしや。舊約思想に從へば、人の神を知るは神が自らを人類に顯はし給へるが故にして、人が自己の努力に依りて神を知るには非ず。是れ舊約宗教の特質にして、所謂天啓とは是也。神は自ら顯はれ自ら語り、人は之を見之に聞く也。神は自ら人に近づき、人と契約を結び、人に訓誡を與へ、人は之を受け其聖意に從ふ也。此の如くして神は異色列の族長に顯はれ、モーセに顯はれ、預言者に顯はれたり。其顯現の方法は同一に非ずと雖も、神が自らを人に顯はすに至りては同一也。然れ共異色列の宗教の優れる點は此處に在らずして、彼等の神が論理的性質を有し、異色列に依りて人類を救はんとするに在り。但し神の顯現なる者は人心に於る準備又は共働なくしてなし得べきやといふに、然らず。イザヤが神殿に於て幻を見たるも(出三)彼等がエホバの性質を默想したりし結果に外ならず。換言すれば神の顯現は人に客觀的現象なる、のみに非ずして、必個人的思想に基因する也。即ち人は其宗教的危機に際して神を見る也。然れ共希伯來人の所謂天啓とは、宗教の範圍に於る心の自然の働に非ず、彼等實に神の靈化を受け神と新なる關係を生ぜる也。モーセ及び預言者等が其同胞の上に殊に勢力を有したりし原因は實に愛に在りき。

【神人同性說】 舊約聖書は初より神を以て人格的存在として敍はせり。エホバなる語は人格的の名也。『エホバを歌び頌めよ、彼は高らかに高くいます也、彼は馬と其乘者を海に擲ち給へり』(出十五の廿一)と云ひ『エホバを愛する者は、日の眞盛に昇る如くなれよかし』と云ひ(士五の廿一)『主エホバが知くなれよ』と云ひ(士五の廿一)『主エホバ己の聖きを指して誓ふ』(歷四の二)と云へるは即ち神を以て意識あり、人の頃め得べく、愛し得べき者也として記せる也。又神は人の如く手、腕、口、髮、目等を有し給へるが如く記し『エホバ其聖きみ手を擧げ給へり』(賽五十二の十)『山に多くの人の聖腕ゆ……』(十三の四)と云へり。是れ何れも神の存在、神の智慧、神の力、神の働を明瞭に、いき〳〵と示さんため人の事を借りて記せる也。又神が或る場所、或る狀態に於て自己を人に顯現し給へることを示さんために、エホバ『闇の中に日の涼しき頃歩み給へり』(創三の八)と云ひ『エホバ降りて彼人衆の總つる邑と塔とを觀給へり』(十一の五)と云ひ、エホバマムレの樫木にてアブラハムに顯れ、彼が備へたる食物を食へりと云ひ(十八の一、八)又ヤコブと角力し給へりと云へり(廿二の廿四)此等は神が自己を人に顯はし、之と親密なる交通を爲せりとの宗教的感情を示せる者にして、思ふに元始の人類には神の顯現に客觀的現象伴ひたりしなるべし。又或處には神も人と同に感情を有するが如く語り『エホバ地の上に人を造りしことを悔いて心に憂へ給へり』(創六の六)と云ひ『エホバ其民に禍を降さんとせしを思ひ直し給へり』(出廿二の十四)と云ひ、又惡り(王上十一の九)嫉み(申六の十五)憐れみ(詩百十一の四)愛し(王上十の九)憎み(歲六の十六)給ふと云へり。他の點より論ずれば、神は素より人の如く感情に支配せらるる者に非ず。故に又『異色列の能力たる者は眞らず悔いず、それは我は人に非ざれば悔ゆることなし』と云へり(每前十五の廿九)思ふに此處に大切なる點は、神の道德的存在にして、此等の感情を附することに依りて神は道德性を有し給へる者なることを示せる也。

【神の名】 舊約聖書は種々なる名を以て神を記せり。今左に之を略擧すべし。

(一) エル(אֵל, El) 最も廣く使用せられたる神の名にして、巴比倫、アラメヤ、フェニキヤ、希伯來及び亞剌比亞人の中に用ゐらる。以て此語が原始のセミチック語にして、後漸次各種族の方言に變ずるに至りしものなるを知るべし。此語の語源に關しては諸說一定せず。或は曰く、希伯來語のיָעַל(『強

し』)より出で『強者』の意也と。或は曰く、亞剌比亞語の『ウル』(『前方に在る』『支配する』)より出で、『嚮導者』の義也と。此意義は寧ろ『バアル』『アドン』『メレク』等の他のセミチック族の神の名に適用すべし。又曰く、希伯來語前置詞の אֶל (『まで』)より來り、神は人の向ひて進み來る目的物也との意を表せる也と。然れ共原始人民の觀念としては、此說は餘りに抽象的也。此の如く此名の語源は明ならず。然れ共第一說比較的取るべきに似たり。希伯來の散文に在りては、此語は『生ける神』『永遠の神』『いと高き神』と云へるが如く、通常形容詞と連用せらるれ共、預言書及び詩篇には、單に『神』の意義に之を用ゐ、或る場合には之を複數に使用せり。

(二) エロヒム (Elohim, אֱלֹהִים) 『エロア』(אֱלוֹהַּ) の複數にして、單數は詩(詩十八、申卅二)に用ゐられ、又間々希伯來晩出の散文に用ゐらる。單數は『エロヒム』なる複數より作成せし者也との說あれ共、亞剌比亞語及びアラメイク語にも同一の單數あれば、此說成立し難し。又之を以て『エル』の複數也となすものあれ共『エル』には別に『エリム』なる複數あれば、此說亦承認し難し。『エロア』なる語と『エル』なる語との間に何等かの關係ありや、又『エロア』の意義如何、共に明ならず。又其複數なる『エロヒム』の用方も頗る解し難し。或は多神教の遺物には非ずやとの說あれ共、元來セミチック人種は『神』に對して『諸神』の意義を有する一般的言語を用ひたる事なし。又初め或る地方の神々を指す爲めに用ゐたる者には非ずやとの說あれ共、希伯來人は一地方に唯一個の神を有するのみなれば、此說も亦受け納れ難し。或は神の力の充滿せる有樣を言ひ顯はせる者なるべしと說くものあれ共、此の如き觀念は原始人に取りては餘りに抽象的也。左れば思ふに此複數は『アドニム』『テラヒム』(毋前十九の十三、十六)の如く、卓越の複數にして、神の宇宙、人類に超絕せることを強く云ひ顯はさん爲めに之を複數になしたる者なるべし。

(三) エルシャダイ(El Shaddai) 『エル』『エロヒム』と同じく、此語の意義も亦明ならず。『シャダイ』は思ふに『エル』の形容詞なるべし。此名は頗る古く(創四十九の廿五)以色列族長の神也として記さる(創十七の一、出六の三)此語は希伯來語の『能力ある者』と云へる語より來り『力ある』又は『全能』の義なるべしと解する者あり。『破壞者』なる語より來り『暴風雨の神』又は『日の神』の義なるべしと云ふ者あり。アラメイク語の『灑ぐ』と云へる語より出で『雨を與ふる者』の意なるべしといふ者あり。又『我が主』と讀むべしと解する者ありと雖も、何れも想像說にして確固たる根據あるに非ず。近來又アッスリヤ語の『高し』なる語より出でたる者にして『山』(神を『磐』といふが如く)の義なるか、然らずんば『いと高き』の義なるべしとの解說を爲す者あり。何れか是なるを知らずと雖も『全能』の義に解する說比較的可なるに似たり。邦譯聖書には『全能の神』と譯せり。

(四) エホバ(Jehovah, יהוה)『エホバ』なる名が希伯來語の『在る』と云へる動詞と結合して、特種の意義を生ずるに至りしは、出埃及時代なれ共、此名は古代より存在したりしなるべし。尤もエホバなる發音は正しからず。希伯來人は神の名を以て神聖にして妄りに言ふべからざる者也と信ぜしが故に、יהוה なる語に代ゆるに、אֲדֹנָי (アドナイ『主』の意)なる語を以てせり。故に之を文書に記し、又は印刷に附するに方り、アドナイの母音を יהוה に附し、エホバと發音するに至れり。而して此事は宗教改革時代(一五二〇)よりもあまり遠き以前のことに非ず。此語本來の形狀は יַהְוֶה (ヤーウェー)也。此名若しくは之と同一の名がアッスリヤに在りしや否確ならず。又此語は有史以前に屬するが故に、其出處明ならず。亞剌比亞語の『ハワ』(『吹く』)より出でたる者にして『暴風の神』の意なるべしとの說あり。希伯來語動詞の『ハワ』(『降る』約百記卅七の六)より來り原動的に解し、『破壞者』又は『雷神』の義なるべしとの說あり。又希伯來語動詞の『ハヤー』(『在り』)より出で、原動的に解し『創造者』又は『約束の成就者』の意なるべしとの說あり。有史時代に入りて後の希伯來文籍には、之を希伯來語『ハヤー』の半過去動詞と結合し『在り』の義となせり。但し此動詞は實體的存在の義を有せず、唯現象的存在の意を表するのみ。又半過去は現在の『在り』の意に非ずして、未來の『在るべし』の意也。出埃及記(三の十以下)に、モーセが神に向ひて『我れ如何なる者ぞや、我れ豈パロの許に往き、イスラエルの子孫をエジプトより導き出すべき者ならんや』と云ひし時、神彼に保證して『我れ必ず爾と共に在るべし』(אֶהְיֶה עִמָּךְ)と云ひ給ひしとあり。又モーセが『我れイスラエルの子孫の所に往きて汝等の先祖等の神、我を汝等に遣はし給ふと云はんに、彼等もし其名は何と我れに言はゞ何と彼等に言ふべきや』と云ひしに、神彼に答へて『我は有りて在る者也』(אֶהְיֶה אֲשֶׁר אֶהְיֶה)と云ひ給へりとあり。又神モーセに命じて曰く『汝斯くイスラエルの子孫に言ふべし、我れは有り(אֶהְיֶה)と云ふ者我を汝に遣はし給ふと』。又曰く『汝等の先祖等の神ヤーウェー (יהוה) 我を汝等に遣はし給ふと』。是等の

語より之を見れば、記者は希伯來語の『エーエー』(『在るべし』)と『ヤーウェー』とを以て同一也となす事明にして、即ち神は神自己に就て之を云へば『我れ在るべし』にして、他より之を云へば『彼れ在るべし』也。單に『彼れ在るべし』のみにては其意明ならざれ共、思ふに彼は『彼等と共に在るべし』との意にして『助力者』『激勵者』『救援者』の義を表する者なるべし。此の如くエホバなる名は此時より新意義を生じたれ共、此時新に起りたる者也とは信じ難し。何となれば新なる名は畢竟新なる神を輸入するに外ならざれば也。思ふに此名は若し以色列民族全般の中に使用せられたりしに非ずとせば、モーセの屬せるレビ族の中に使用せられたりしなるべし。ナーレ其他の學者は、此名はミデアン人の中に用ゐられし者にして、モーセは彼等より之を學びしならんとの說を有せり。希伯來人の傳說中には直接に此說を支ふる者なけれ共、埃及に住せし種族が、東方の曠野に住せし種族と關係を有せしことは、モーセがミデアンの地に逃れたりしことに依りて推察すべし。又モーセの外舅ケニの家は以色列人と密接の關係を有したりき(士一の十六、四の十一)ケニ人より出でたるレカブ族(代上二の五十五)はエホバの熱心なる崇拜者にして(王下十の十五以下)以色列人が迦南文明を採用せるに依りて輸入したる腐敗に抗し、其宗教的生活の理想を熱心に擁護せり。又モーセは希伯來の神に犧牲を獻げんがため、三日程曠野に入らんことをパロに請求したりき(出三の十八、五の三)此等の事實はエホバの名が、又西乃半島にも知られたりし者なるを推知すべし。

【神の觀念の發達】 (一) モーセ以前の時代 モーセ以前に於る以色列人民の宗教を研究せんとするに方り、先づ起り來る所の問題は、以色列族長の事を記せる記錄なる者は、歷史として承認するを得べきやとの事也。此等の記錄は紀前十世紀の中頃より八世紀の中頃迄に成りたる者にして、其中に神話的要素の混入せるは云ふ迄もなしと雖も、大體に於て當時の宗教的觀念を反照する者あるは亦疑ふ可らざるが如し。然れ共アブラハム、ヤコブ、ヨセフ及び彼等と他の人民との關係に關せる記事は、如何程迄種族的運動にして如何程迄個人的運動なりや明ならず。而して族長に關する事跡を外にして、當時以色列人の宗教的狀態を知るべき道、先づエドム、モアブ、アンモン、及びイシマエル等以色列人民と關係したりし國民の狀態を知るに在りと雖も、彼等の間に用ゐられたる神の名を、以色列人の用ゐたりし神の名に比すれば、其間に大なる相違あり。故に假令此等の人民は其隣邦國民の感化を受けて多神を拜したりし形跡ありしとするも、以色列人は當時既に此狀態より脫化したりしが如し。又モーセ以後の以色列人中にも、木石を拜し、死人と交り、又は祖先を崇拜するが如き遺風尙存在せる者あるを思はしむる者あるが如しと雖も、要するに此は元始時代の事にして、モーセ時代に至りては神は最早自然の神也といふよりも、寧ろ人類の歷史を支配する神となり、其自然の中に働く時も尙國民の生活と密接の關係あり、道德的目的を有する者となれり。

(二) 出埃及以後エヒウの改革に至る時代 出埃及以後エホバは以色列の神にして、彼等の中にはバアルを拜したる者多少ありたりしが如しと雖も、ユダ國の衰頽して東方諸國に於る偶像禮拜の風入り來る迄は、エホバは唯一の國神として一般に崇拜せられたりき。尤も彼等の中には、他の神が他の國民の神なるが如く、エホバは以色列の神也との意義にて之な崇拜したりし者もあるべし。又實際に於てはエホバを以て自己一人の神也と信じたりしも、理論的に之を以て天地間唯一の神也と信ずるに至りしには、幾多の歲月を經たりしことなるべし。然れ共もし傳說の如く十誡を以てモーセより出でたる者也とせば、其第一誡には『爾我が前に他の神ありとす可らず』と云ひ、又『我エホバは嫉む神也』と云へり。故に當時既に一般に唯一神を信じたりしと云はざる可らず。少くともエホバなる神が道德的存在として信じられたることは最も明白にして、エホバの觀念中には初めより倫理的要素を有せりとの事は、諸學者の共に一致する所也。而して以色列人は國民として、以色列の利害を以てエホバの利害と全く同一視せり。故に以色列人と他の國民との戰鬪を記せる古文書を名けて『エホバの戰爭の記』と云ひ(民廿一の十四)メロズはエホバを助けざりしが故に詛はれたりと記され(士五の廿三)以色列人の勝利は『エホバの義しき行爲』也と稱せられたり(士五の十一)。

(三) 預言者の時代 此時代に在りてはエホバが人間歷史の神なること最も著しく、以色列人は彼等の歷史に於て益々深くエホバを學び、彼等の思想は外界より漸次內界に向ひたりき。彼等は出埃及、迦南に於る勝利及びダビデの統一を以てエホバの力の顯現したる者也と爲せしが、後强國のために敗られ國家非運に傾くに及びて、彼等のエホバに關する思想は頗る精神化するに至れり。預言者等は以色列の非運を以て敵國の力强きがため也となさず、之を以て以色列の神エホバに歸し、エホバが其道德性を顯はして其國民を懲戒する也となせり。其遂に巴比倫に滅ぼされて之が俘囚となるや、彼等は歷史と外界の

事情とに超絶し、エホバを以て靈的に交通すべき者也となし、預言は又變じて敬虔となるに至れり。預言者等のエホバに關する思想には嶄新なる者あるに非ざりしかども、エホバの性質を最も明白になし、且各預言者各々特殊の眞理を表明せり。即ちアモスはエホバは絶對的義の神にして、道德的觀念の人格化せる者なること、道德上の惡のみ惡なること、及びエホバの人に求むる者は義しき生活也との事を教へ、ホセアはエホバを以て愛の神となし、假令以色列人が彼の恩に背くも彼は尙彼等を愛すべしと說き、イザヤはエホバの超絶的存在、萬民の主なることを教へたり。之を全體として論ずるに、預言者の教訓はエホバの觀念を倫理化し、且國民的範圍より之を取りて、義なる神は萬國萬民の神也と云へり。舊約中神に關する最高の思想は之を約百記及び第二以賽亞に見るを得べし。後者に依れば、エホバは以色列の贖主にして、又人類の救主也、彼は地と人とを造り、以色列を選びて其僕となし、之に自を顯はせり、是れ以色列に依りて全人類を救はんがため也。

(四) 俘囚以後の時代　此時代に至りては別に神に關する新なる思想の發達を見ざれ共、預言者の教訓を各自に應用し、之を其經驗に同化し、精神的方面に於て大なる發達を爲せるを見る。詩篇の作者が『我れ常に爾と共に在り、爾我が右手を保ち給へり』(七十三の廿三)と云ひ、又『我は義に在りて聊顏を見、目さむる時容光を以て飽足ることを得ん』(十七の十五)と云へるが如きは、即ち其一例として見るべく、即ち神との靈的交通を歌へる者也。

【參考書】 ペートゲン『セミチック人宗教史への貢獻』(一八八八)センテフィオル『希伯來宗教講義』(一八九二)スメンド『舊約宗教歷史の研究』(一八九三)ロボルトソン『以色列の初代宗教』(一八九六)ウェゲルンス『宗教史總論』(一八九六)ヴェルハウゼン『以色列及猶太史』(一八九七)ボットレー『舊約の方面』(一八九七)。

神[カミ] (新約聖書の) God (in N. T.)

【靈名】 爰には新約聖書に於る神の教義の概略を述べ、舊約より如何に發達したるかを示す。

【猶太教の傾向】 當時の猶太教は不完全にして多くの弱點を有したりしかども、或る點に於て新約の宗教の基礎を造りたりしと疑ふ可からず。今左に其神に關する觀念の特點を略說すべし。

(一) 一元說　猶太人信仰の基礎は神は一也との事にして、彼等は最も嚴精に『以色列よ聞け、我儕の神エホバは唯一のエホバ也』(申六の四)との言を日々くりかへせり。其最も重を置けるは、異教の多神に對せる『唯一』にして、ラビ、アキバは『唯一』なる言を唱へつゝ殉教者の死を遂げたりしといふ。猶太人は後此申命記の言を引きて、基督教の三位一體說に反對したりき。

(二) 超絶說　當時猶太人の中には神と世界との間に流出を設け、神を以て世界及び人類の上に超絶せる者となすの傾向ありき。當時の哲學殊にプラトーンの思想に於て有限の狀態に超絶せる者なりとなせるプラトーンの思想に大なる影響を受けたりしと疑ふ可からず。今左に其傾向を說明せんに、(イ)神の名　エホバなる名は神の聖名にして、之に代ふるにアドナイ及びエロヒムを以てし、更に又『天』『場所』『名』『聖者』等の言を用ゐたり。是れ何れも神に對する敬畏の念より起れる者也。希臘語に於て通常代用せられたるは κύριος (主) にして、間接にはエホバの意を含蓄し、直接には主權者の思想を表す。『世界の主にして王なる神』『萬物の主』『天の王なる神』『主の主』『王の王』等なる言は、即ち何れも主權者の思想を言ひ顯せる者にして、此外に『大なる者』『全能者』等の如く、神の尊嚴を言ひ顯はせる者あり。又『至高者』と云へるは最も能く超絶の思想を言ひ顯はせる者也。(ろ)神人同性說の除去　神の超絶の思想が漸次發達しつゝありしことは、最も明にタルガムに於て見ることを得べし。此書には舊約に通常見る處の神人同性說を除去せり。即ち先づ第一に人は神の像に象られて造られたりとの思想を變じて、人は天使の像に象られて造られたりとなせり。又神が地に降れりといふに代へて、神自ら降顯はせりと云ひ、アブラハムに顯はれたるエホバの使が、其前に置かれたる物を食せりと云ふに代へて、食したるが如く見えたりと云へり。又神が『知り』『思ふ』『怒り』『悔ゆ』と云へるが如き思想を除去し、神人の交通を靈化し、ヤコブが神と角力せしことゝ、モーセが神と顏を合せて語れりといふが如きことをも削除せり。舊約の希臘譯(七十人譯)は、今日現存せるタルガムよりも數百年前に成りたる者なれ共、其中にも亦之と均しき傾向を見るべく、フィローンも神人同性說を排斥せり。(は)中間的存在者　神を以て世界よりも遠く隱れたる者となすに從て、其缺隙を充たさんために中間的存在者を置くの必要生ぜり。フィローン曰く『神は自らと之に觸るゝことなくして萬物を創造せり、神聖にして智慧ある神は不定にして混和せる物質に觸るゝこと能はざれば也、故に神はイディアと稱する無形の力を用ゐて萬物を造り、各々に適當の形狀を附與せり』と。斯の如くフィローンは神と物質との間に『力』なる者を置き、之にプラトーンの『イディア』なる名を與へ、又之を『ロゴス』と稱せり(『ロゴス』の條を見よ)パレスチナ派神學は亞歷山派神學の如く中間的存在の觀念を極端に使用せざりしと雖ども、尙均しく此觀念を有せり。其最も重なる者は『メムラ』(Memra)は『神の言』『シェキナ』及び聖靈是也。『メムラ』(エホバの言)『シェキナ』の擬人化せる者にして(創五十五の十、十一)タルガムには此言を、舊約にて其働を直接に神自らに歸する處に使用せり。此言は神人同性說を除去するためには最も便利なる言にして、凡て神の歷史的顯現及び働を記するに力りて之れを使用せり。尤も此言はタルムッドには見えざれ共、新約の時代に尙存在したりしを疑ふ可らず。曉出のタルムッド文學には『メムラ』の代りに『シェキナ』(Shechinah) を使用せり。『シェキナ』は神の現存を表する榮光にして、『メムラ』と異なるは其非人格的なる點に在り。希臘語の新約に屬々用ゐられたる δόξα (榮光) は此『シェキナ』と同じ。舊約には聖靈に言及せる處あり(其條を見よ)其最も重なる者の一は詩五十一の十一にして、愛には聖靈を以て明に神人交通の機關と爲せり。又第二以賽亞には『主エホバ我と其靈とを送はし給へり』(四十八の十六)『彼等は悖りて聖靈を憂へしめたり』(六十三の十)等の言あり。經外聖書にも聖靈のことを記したれ共、未だ之に人格を附するに至らず。タルガム及びタルムッドには之を人格化せんとするの傾向あれ共、此思想が一定の形狀を取るに至りしは新約聖書を以て初めとなす。

(三) 自尊說　猶太教は一方に於て神の超絶的性質に重を置くの傾向あること以上述ぶるが如しと雖も、亦他方に於て之に反對せる傾向あり。此傾向は舊約の律法及び猶太人民の特權を過重するより來る處の者にして、彼等は預言者の精神に依りて律法を解釋せずして、其詳細の點迄知字的に解釋せるを以て、儀文に拘束せらるゝの弊なきを得ず。又彼等は熱心に律法を研究せりと雖も、其熱心は智識に依るに非ず。且彼等は律法を愛するの極、自ら律法を與へられたることゝ之が解說者たることを誇り、終に偏狹なる自尊の念を發達するに至れり。是れ新約文學及び當時の猶太文學に於て見る處也。

以上は猶太教に於る神の觀念の概略を示したる者也。此觀念は基督教に依りて如何に發展し、如何に當曉ならしめられたりしや。是れ次の問題也。

【神の性質】 神の性質に關する新約の教訓は、舊約より來れる者なれ共、凡ての點に於て舊約の思想を強からしめ深からしめ廣からしめたり。(一)神の父なる事　舊約に於ても神は以色列國民全體の父及び各以色列人の父として教へられ(申廿二の六、耶三の四、十九、廿一の九、賽六十三の十六、六十四の八)又以色列國民及び各以色列人は神の子と稱せられたり(出四の廿二、何十一の一、耶三の十九、廿一の廿、詩八十九の廿七、申十四の一)然れ共此思想は此處に止りて發達せざりしが、新約に至りて神の父なる事は大に發揮せられ、新約宗教の基礎となるに至れり。耶蘇の教訓中にも神を以て王となすの思想なきに非ざれ共、其最も著しきは父の思想にして、神の父なる事は神の性質の一部分に非ずして其全體となるに至れり。耶蘇は特異の意義に於て神の子也、故に彼は神を稱して『我父』と云ひ以て『爾曹の父』と區別せり。又神は特別の意義に於て耶蘇の父子、神を信ずる者の父也。然れ共神は又全人類の父にして、神は己を知らざる者に對しても尙其父なる性質を顯はし給へり(詩六の卅五、太五の四十五)使徒等の教訓に至りては基督が特異の意義に於て神の子也との教義最も著しく、神の父なることの思想は耶蘇の教訓に於けるが如く著しからざれ共、此思想が全教訓の基礎たる事は明也。(二)愛　神は父也との思想の中に於ては父愛の觀念を含有す。預言者及び詩篇作者の中にもエホバの愛に特別の重を置けるの者なきに非ざりしか共、新約に至りて此思想は更に發達し、神は唯以色列人民の父なるのみに非ず、又世界萬民の父なるが故に、神の愛も亦世界的也。耶蘇は殊に神の愛の方面を明にし、其放蕩息子の譬話(路十五)に於て遺憾なく之を發揮せり。使徒等も亦此點に重を置き、使徒約翰は『神は愛也』と云ふに至れり(一約四の八)。(三)義　義なる語には種々の意義あり。從て新約聖書の所謂神の義なる語も一樣に論じ難しと雖も、其中に含める最も重なる觀念は倫理的にして司法的に非ず。保羅の思想は主として司法的なるが如しと雖も、其歸する處は倫理的にして、義なる神も尙罪人を信仰に依りて義とすと論述せり(其條を見よ)。

【神の顯現】 新約聖書の記者は新約の宗教を以て、神の性質に關する新なる啓示也となし、而して此啓示は基督及び聖靈に依りて爲されたりしと思惟せり。(一)基督に依れる啓示　新約の宗教の舊約の宗教に異れる點は、神が其子に依りて自らを顯現せりとなすに在り。最も強く此思想を表白せるは第四福音書記者にして、彼は『未だ神を見し人あらず、唯生み給へる獨子即ち父の懷に在る者のみ之を彰は

せり』(一の十八)と云ひ、又耶蘇自らして『我を見しものは父を見し也、何ぞ父を我儕に示せといふや、我れ父に居り、父の我に在ることを信ぜざるか、我れ爾曾に語りし言は自ら語りしに非ず、我に居る父其行を爲せる也』と云はしめたり(十四の九、十)。保羅は第四福音書記者の如く明に語らざりしと雖も、彼も『爾曾は神に由て基督耶蘇に在り、耶蘇は神に立てられて爾曾の智慧又義又聖又贖となり給へり』と云ひ(哥前一の卅)又『智慧と智識の蓄積は一切基督にかくれある也』(西二の三)と云へるは完全なる神の啓示の基督に依りて爲されたるを示せる也。浩伯來書記者も亦同一の思想を述べて『神曾は多くの區別なし多くの方を以て預言者に依り列祖に告げ給ひしが、此末日には其子に託りて我儕に告げ給へり』(一の一、二)と云へり。而して耶蘇自己も亦之と均しき思想を述べて『父は我に萬物を與へ給へり、父の外に子を識るものなく、又子及び子の顯はす處の者の外に父を識る者なし』と云へり(太十一の廿七)。

(二) 聖靈に依れる啓示　第四福音書記者は又聖靈に依れる啓示を說きて、基督去りたる後聖靈來りて其教へたる眞理を憶ひ出さしむべしとの事を云へり(十四の廿五、廿六、十六の十三—十五)保羅も亦同一の思想を有したりし、之は彼が『我が言ひし處、又我が宣べし處は人の智慧の婉言を用ゐず唯靈と能の証を用ゐたり』(哥前二の四)と云ひ、又『神は其靈を以て之を我儕に顯はせり』(哥前二の十)と云ひしに依りて明也。

【神の三位一體】　三位一體なる語は素より聖書の語に非ず。新約聖書の時代には未だヘルソナ(人格)の觀念なし。此觀念は羅馬法の中に發達したる者にして、之を基督教の語となしたるは基督の人格に關し神學的爭論を經たる後の事也。然れ共新約聖書の中には後に至り三位一體の教義を發達したる起因點となりたる語なきに非ず。哥後十三の十四に保羅が『願くは主耶蘇基督の恩と神の愛と聖靈の交際爾曾衆と儕に在らんことを』と云へるは即ち是也。此語に基く教義的に非ずして單に祝福の新願を述べたる者に過ぎざれ共、斯る形狀を以て祝福の新願を述べたべられたるは、當時此の如き信仰が記者及び讀者の中に在りたるに依らずんばあらず。抑も此語は三位の名を次第に從て並列したる者なりや、又は人類救贖の根源なる主上者を、一體の中に三身を有する者として考察したる者なりやと云ふに、後者は自然の解說なるが如し。果して然らば此の如き思想は如何にして發生したりしや。太廿八の十九に依れば、耶蘇は其最後の遺言として弟子等に『爾曾往きて萬國の民にバプテスマを施し、之を父と子と聖靈の名に入れて弟子とせよ』と命じたりしのことなれ共、此語が耶蘇の語に非ずして後世挿入の者なることは現今批評家の共に一致する所なれば、保羅の語の依據となし難し。共觀福音書及び第四福音書中正確に耶蘇の言を傳へたりと思はるゝ處には、耶蘇は自己を以て『神の子』と稱したれ共、何處にも『子なる神』の思想を表白し、若くは含蓄したる者なし。耶蘇を尊んで神と同列に置き之を其崇拜の目的となし、又聖靈を以て父及び子と同列に置けるは、耶蘇の死後年所を經たる後の事にして、此の如き思想は保羅及び其他の使徒の書翰に充滿せり。去れば三位一體の教義は未だ新約聖書中に之を發見すること難も、此等の思想がやがて發達して此の如き教義を生ずるに至りしは爲た旅むを要せず。

【參考書】　エデルシャイム。シュカレル等の『耶蘇傳』、モンテフィオル『浩伯來宗教講義』(一八九二)カファーズ。バイシラッガ等の『新約聖書神學』。

神(カミ)(基督教會の)　God (in the Church).

【**體**名　**愛**には基督教會に於る神の思想發達の概略を示す。

【三位一體論】　新約聖書が神を父、子、聖靈として顯はしたるは、耶蘇生活の事實と初代信徒の經驗とに基げる者にして、全然宗教的、實際的也。故に新約聖書の此點に關する教訓は、實體論的若くは神學的教義に非ず、從て後世發達せる三位一體の教義と同一視すべき者に非ず。ニカヤ、コンスタンチノープル及びトレドの宗教會議に於て定めたる三位一體の教義は、直接に新約より來りたる者に非ず、神を父、子、聖靈として顯はせる新約の啓示を保護し、辨証し、說明せんがために爲せる理論的思辨の結果にして、此教義が希臘、羅馬の思想及び言語を借り來りて大成せらるゝに至る迄には、長き日子と大なる經營とを費したりき。此教義の發達は基督教會最初五百年間の教義歷史上最も重要なる要素にして、有神論の發達に大なる影響を與へたり。此教義の承認は一方に於ては萬有神論、抽象的有神論及び惟一神論の排斥を意義し、他方に在りては有神的思想の新なる發達に其種子を供したりき。此教義は神の顯現及び啓示に關せず、其神性の組織に關し、其本質を見て三身也となす者也。此教義は神の唯一なることを確認すれ共、其唯一を以て抽象的若くは不定的同一也となさず、又意想なく變化なき單調の存在也となさず、差別と圓滿とに富める唯一—無限に生命と愛とに滿てる唯一、其神性に父、子、聖靈を有する、即ち人格に三身あり、性質に不同あり、職に種類あり、働に多樣あり、而も其性質同じ

く、其權力榮光均しく、其目的感情一に、其意志事業の調和せる唯一となす者也。而して此教義は、三身にして一實體、第一位は永遠に第二位を發生し、第三位は永遠に第一位及び第二位より發出すと云へる獨斷說として顯はるゝに至れり。此の如き教義は神の顯現に關し起り來る或問題を試明し得べしと雖も、更に又他の問題を起し來らざるを得ず。即ち實體とは何ぞ、三身とは何ぞ、發生若くは發出とは何ぞ、實體と三身との關係如何、三身の區別、及び其間の關係如何等の問題は、必然起り來る處の者にして、使徒の後五百年間此問題に關し基督教會に論爭の喧しかりしは蓋むな要せず。然れ共基督教會は遂に此教義を以て、正統教義となして承認するに至れり。

【教父の有神論】　初代基督教會の著述家は、一般に神の存在の證明を以て必要若くは有用也と思惟せざりき。彼等は神の觀念は生れ乍ら人の靈魂に賦與せられたる者、人は直覺的に神の智識を有する者にして、もし耶に依りて汚さるゝに非ざれば、人の心は必ず神を反照し得べき鏡也と信じたりき。然れ共意匠論は早くより、厭ゃ用ゐられ、又ダルツのディオニシウス、アウガスチン及びボエチウスは思辨的理論を用ゐたりき。當時尚多神教の信仰盛に行はれ、且ノスチック教、マニカイ教等の異端起りしかば、之に對して神の唯一なることを斷へず證明せられ、又神の奧妙にして人智の領解以外に在りしの事及び其認識し得べき事共に均しく主張せられたり。然れ共神の屬性に關する組織的議論は此時代に在りては未だ企劃せられず。まりゲンは天地の創造に關し特異の說を立て、創造事業には永遠の最極最古に在らざるべからずとの一ことを主張したれ共、此說は物質は創造せられたる者に非ずと云へる二元說、及び物質最も哲學的なりしはアウガスチンにして、彼は不可議論を攻擊し、認識論を以て神の智識の基礎となせり。概して論ずるに、當時の神に關する基督教の教義は、プラトーン、アリストテレースを初め希臘哲學の影響を蒙りたること頗る大也。

【中世の神學】　中世の神學界は頗る衰微にして、矛盾多く、一言を以て概言し難し。通常中世を說く者之を以て教權の盛なる時代となし、宗教上の思想なる者も頗る偏狹なりしが如く思惟すと雖も、事實は宗教的教義の思辨に於ては、中世の神學者は、プロテスタント教の神學者よりも一層の自由なる有したりき。當時傳說的神學頗る盛大なりしが、純理說も亦均しく行はれ、頗瑣哲學の繁榮したりしこと云ふ迄もなき、ことなれ共、神秘說も亦共に行はれ、又有神說と共に萬有神說も行はれたりき。然れ共中世は著しく神學の時代にして、前にも後にも此時代程神學の興味を以て研究せられたることなく、此時代の著名なる思想家は殆ど悉神學者也。中世に行はれたる最も重なる有神說に三箇の潮流あり、即ち基督教的、猶太教的及び回教的是也。後の二者を措きて單に第一の潮流に跳きて之を言はんに、是れ最も廣く行はれたる者にして、中世の基督教神學者にして有神論の諸點に關れざる者殆ど之れあるなし。而して其到達せる結論に至りては各々同じからず。例之神の存在の認識に關し、或學者は信仰若くは天啓に重を置き、他の學者は直接的意識に重を置き、更に他の學者は理性及び證明に重を置き、又間々折衷說を唱ふる者ありしが如し。アンセルムは神の存在論に論理的形式を與へ、神の觀念は思考し得べき最大者の觀念にして、思考し得べき最大者は唯觀念の中にのみ存在すべからず、故に神は現實に存在せりと論じ、アクイナスは運動あれば起動者なかるべからず、結果あれば原因なかるべからず、偶然的の物あれば必然的の物なかる可からず、善あれば最上善なかるべからず、世界に秩序と目的あるを見れば、世界を統轄する有智の存在者なかるべからずと論じ、吾人が見る可らざる神の智識に達するは、目に見ゆる被造物に依るとのことを明にせり。サボンデのレーモンドは。此實體論的及び結局論的議論に加ふるに、更に道德論的議論を以てし、オクカムのウィリアムは此等の先天的及び後天的証明を批評し、神の存在は知られたる眞理に非ずして、單に信仰の對象に外ならずとの事を主張せり。次に神の本質に關しても中世神學者の說一定せず。ダマスコのヨハン曰く、神の本質の如何なる者たるやは、吾人の知らざる處又云ふ能はざる處也と。エリゲナは曰く、神の本質は全く隱れて被造者の知る能はざる者也、天使も亦之を知る能はず。又曰く、アリストテレースの箴嘗の中、或は如何なる言語中にも、適當に神を記することを能はず、神は超實體、超神性、超眞理、超時間、超智慧なれば也、且神は神自身に迄も知る可らざる者也。エッタハルトは曰く、神の性質は性質なく、階性なく、反對なき統一なる者なれば、必然知り得べからざる者也と。人は神の眞正の性質及び其本質を知ること能はず、所謂神の屬性と稱する者は、人心にしかく見ゆる神の働の結果若くは表徵を記したる者に過ぎずとは、多くの煩瑣哲學者の主張せし處にして、アクイナスは此意義に於て神の可知的なることを拒否せり。然れ共他の一方なる見る時は、當時の神學者中にも尙人間が纔分が神

の本質の智識を有し得べしとの信仰を記述し、若くは含有する者あり。アンセルムが一方に神の超絕性を強く主張せると共に、他方に人間の心意は其自覺力智力及び意志に依り、至上者の本質の眞像を供する者也と云ひ、ヘールスのアレキサンデルが神の智識には積極的と消極的の二種ありと云ひ、又ボナベンチュラが神の智識は智覺的にして理解的に非ずと云ひしが如き是也。教授シェルドンが『之を要するに煩瑣學派の神學は、神の本質を知るの智識は全く人間になしと唱ふるにも拘はらず、尙事實最小の智識ありとなせり』と云ひしは宜也といふべし。神の性質に關する中世の神學論は、主として神の本質と神の屬性との關係及び一體と三身との關係の二點に集中したりき。第一に關し煩瑣學者多數の到達したる歸結は、屬性は客觀的に(眞實に)神の有する者に非ずして、單に神の觀念を反照せる人的表現に過ぎず、之を以て客觀的に存在し、眞實神の本質に異りたる者也となすは、神の性質を以て單純にして理解し難しとなす思想と矛盾せりと云ふに在り。第二に關し多數の學者の到達したる結論は、一見前の結論と衝突せるが如く、即ちアンセルム。ユーゴー。リチャルド。ヘールのアレキサンデル。アクイナス等の學者は三身を以て屬性中に在る區分と同一なる者也となせり。概して論ずるに中世の學者は、三位一體論に關しては古代教會の教義を其儘に繼承せり。之に對して異說を唱へたるはロッセリンにして、彼は名目論の標準より出立し、神なる語は單に抽象に過ぎずして、三身之に附隨する也と論じ殆ど三神論に陥りたりき。又ボイチィールのギルベルトは、實在論の論據より立論して、神の本質は神に非ず、神の形狀にして、即ち神を神たらしむる者也、此形狀は父、子、聖靈に共通せり、此點に於て三身即ち一體也と說けり。前云へる如く煩瑣學者等は一般に傳來の三位一體說を承認したりしかども、譬喩を以て之を解說せんと試みたる者少からず。即ちアベラールは力、智慧、愛を以て神の三身に相對する者となし、アンセルムは泉源、河流、湖水を以て神の三身を解說すべしとなせり。然れ共彼等は此等の譬喩に依りて悉く此教義を解說し得たりと思惟したるに非ず、寧ろ此教義を以て秘義となし、其眞理は天より與へられたる幻象の中に在りてのみ理解し得べしと云へり。此教義の與へたる結果の一は、最も明白、正確に神を以て絕對の存在、絕對の生命、絕對の靈、絕對の智慧、絕對の愛等として考察し、神の觀念を富瞻ならしめたることゝ也。中世の神學は神を以て超絕的實在也となしたれ共、又何處にも現在せりとのことを承認して、自然神論に陥らず、又當時萬有神論流行したりしと雖も、其最も思辨的才能を顯はしたりしは、エリゲナ、及びエツクハルトの二人に過ぎざりき。

【文藝復興時代】　中世思想に厭きて新を求めたる眼は、先づ古代希臘の文化を歎美するに向ひたりしが、其結果所謂文藝復興時代なる者を生出せり。此時代の思想の中世に異なれる特質は其自然的、人間的、世間的なるに在り。此時代には神及び神と宇宙の關係に就きて諸種の學說行はれたりしが、爰に代表者として舉ぐべきは、先づ第一クウザのニコラウスにして、彼は寧ろ中世紀思想の殿と稱すべき者なれ共、其哲學には又新時代の將きに開けんとするを示すに足る者あり。彼は神は有限を合一する無限也、神は萬物を疊める者、世界は之を開きたる者也、故に神に於ては差別と平等とは相離れたる者に非ず、凡てを含める神、是れ即ち差別雜多に開發したる神也と云ひ、神祕的、萬有神的傾向に自然界研究の傾向とを合したるが如き有神論を說けり。自然界の何たるを看破すれば、其根柢に於て神を發見することを得べく、自然界の蘊奥を探ることに依りて神の祕密に入るを得べしと思惟せるは、ジョヴァンニ、ヴィーコーにして、此說を發達せるをパラセルスとす。同じく眼を自然界に注ぎ、自己の宗教的實驗に加ふるに自然界の秘密を探求する傾向を以てしたるは、ベーメの神祕說にして、彼は萬物の暗黑なる太原を名けて神に於る自然の性、即ち未だ生れ出でざる神と云ひ、此暗黑なる太原が其自らを顯はし自らを知らんとする衝動に依りて始めて活動する神となる、而して其が自らを知らんとするは、是れ即ち其れが知る者と知らるゝ者とに分裂する也、斯く神が自らを知ることに於て父と子とに分れ、而して父の子を知る働の出づる是れ聖靈也、於是三一神が神の原性より生れ出でたる也と云へり。此外に又以太利の自然哲學と名くる者起れり。其最も重なる代表者はジョルダーノ、ブルーノにして、彼は宇宙を以て活動する者、又無際限なる者也となし、此際限なき宇宙をしてあらしむる者、即ち萬有を能造化の方面より見たる者是れ即ち神にして、世界はしかあらしめらるゝ者、即ち萬有を所造化の方面より觀たる者也とせり。

【宗教改革時代】　宗教改革者等は一般に、神の智識は人の生れ乍ら有する者にして、又天地萬有を觀察することに依りて得べき者なる事、然れ共此智識は無智と罪惡とに依りて毀傷せられたれば、聖書に示されたる天啓の光明に依りて補はれざる可らずとの事を主張せり。彼等は中世の煩瑣哲學者等が神の

性質に關し造り出したる思辨より生ずる弊害を深く感じ、單純にして疑はざる信仰に依り聖書の教訓を承認することを以て滿足するの必要を悟れり。斯くルーテルは神學は直ちに耶蘇基督より出立すべしと說き、メランクトンは吾人は神、神の唯一なる事、神の三身一體なる事等の最も高尙なる思想に全力を注がざるべからざるの理由なしと云ひ、ヅウイングリー及びカルヴィンさへも其著書に於て神の教義に就ては唯だ概略を說きたるのみ。改革教會の信仰箇條なる者も、神の教義に關しては古代教會が其宗教會議に於て定めたる處を繼承し、何物をも之に附加せざりき。然れ共人心は改革者等が正當安全也と思惟したりし範圍の内に神の思想を限り、長く之れに滿足することを能はず。且神の思想は宗教の中心にして、他の思想の變化に依りて影響せられざるべからず。故に第十七、八世紀に至りプロテスタント教會内に起りたる神學上の爭論は、神に關する教義に大なる影響を及ぼし、更に微密煩瑣なる定義を造り、煩瑣哲學を再生せしめたるの觀ありたりき。神に關するプロテスタント教の教義に於て最も重を置きたるは、贖罪に於ける神の顯現、罪に對する神の性質にして、殊に神の義を高調し、神の父なる事を看過し、神性なる愛を說かずして絕對主權を說き、其極神を以て非倫理的となすに至れり。

【近世哲學に於ける神の觀念】　近世哲學は其初より第十八世紀の終に至る迄二個の發達を爲せり。即ち一は理想的他は經驗的にして、前者はデカルト之を代表し、後者はベーコン之を代表す。デカルトは『我れ思ふ故に我れ在り』といふ出立點より、眞理の標準を立てゝ其事の判明なることに在りとし、此標準に依り更に推究して我が存在の外に尙同じく眞理の標準に合ふ者あるを發見せり。即ち無よりは何物も生ずべからずと云ふこと、原因は結果よりも少き實在を有する者なるべからずと云ふが如きは、明白に且判然と認めらる可き者也。而して吾人の意識に顧れば種々の觀念あり、神(無限者)は即ち其一にして此觀念の何れより來れるかを尋究するに我を以て之が原因となすべからず、何となれば我れ自らの性質には無限を含み居らざれば也、又此觀念は吾人が種々の限りある者より抽象して得たる者なるべからず、何となれば有限者に就て如何なる抽象作用を施すも、無限者を考へ出すこと能はざれば也、然らば無限者としての神なる觀念は眞に圓滿完全なる神より來らざる可らずと。斯くデカルトは我に無限者なる觀念のあることを以て無限者そのものゝ實在せる證據となせり。スピノザはデカルトの哲學に負ふ所少からず。彼は本體を以て自足圓滿の實在にして、凡ての物をして爾かあらしむる原因也となし、本體即ち神也と云へり。然れ共彼に依れば萬物の神に依りて存すといふは、萬物神より發生せりといふに非ず、萬物は唯神の必然の性質に依りて存在する者にして、神以外に萬物存在するに非ず、換言すれば全自然界と神とは相類したる者也。スピノザの此萬有神說の外ジューランクスのオッカジオ論、マルブランシの萬物を神に於て見るの說、ライブニッツの調和論及び樂天說及びヴォルフの純理說もデカルトの有神論より必然發達せる者といふべし。思ふにデカルトの哲學が有神論に與へたる最大功績は、神の絕對的完全に重を置きたることなるべし。ベーコンの經驗學派は、原因及び意匠論の立場より、神を以て第一原因及び最上智となすに止まり、而して此學派は稍もすれば有神論に不利なる現象說、感覺說及び聯合說に傾くの傾向を有したりき。此傾向を阻止したるはデカルト派の哲學及び劍橋のプラトーン學派なりとす。

【第十九世紀以後の有神論】　第十九世紀は有神論の歷史に於ても亦新紀元を開けり。即ちカントに依りて唱へられたる批評的哲學は、有神的思想にも亦大なる影響を與へ、現時の非有神論の一大特色なる不可識論を創始したるのみならず、又有神論の研究に向て一大刺擊を與へたり。又近時科學の發達に依りて宇宙に關する見解の變化せると共に、神の觀念にも大なる影響を與へ、今日にては神を以て遠く宇宙の外に超絕せる者也となす者なく、一般に神は萬物の原因として其組織、變化及び法則の中に內在せりとの說を奉ずるに至れり。又生物學長足の進歩と進化說の普及とは、宇宙の目的觀及び神の最上智の觀念に新なる思想を與へ、レッシング及びヘルデルを以て始まりたる歷史哲學は、宗教的光明に依りて歷史を觀察し、歷史的、批評的研究法の進歩は、聖書神學、比較神學、及び比較宗教學を發達せしめ、又近世發達せる倫理的精神は宗教を倫理的方面より觀察し、此の如くして神の觀念に一大變化を來し、教會は此の如くして發達し來れる光明に照して、神に關する其教義を改作再建するに努力せり。(『有神論』の條參照。カント以後哲學者の神の觀念に就ては各其條を見よ)。

【現時に於ける基督教神觀の內容】　斯くして發達し來れる基督教の現時の神觀の內容を略敍すれば左の如し。

(一)　人格的存在者としての神　神は人類の如き者也との思想は、宗教と共に太古より在りたる者なれ共、人格的の神と云へる語は近來の語にして、人格

なる語を神に歸するに至りしは五六十年以來の事也。神を擬人的に考ふることに就ては古來異論ありしと雖も、凡そ宇宙の事を解するには悉く擬人法を用ゆるの外なく、例之物に力を歸し、若くは物に生命を認むるも、要するに外界の事物を吾人の性質に照ぜるに外ならず。吾人の神を知るも吾人の性質を通してするより外に道なければ、擬人法は免るゝこと能はざれ共、神を以て悉く人類の如しといふにはあらず、唯神は人類の最も高尚なる點に似給へりといふのみ。人格的神の性質は二種に區別するを得べし。即ち(イ)心理的性質—神の組織構造を示す。

(ロ)道德的性質—神の目的及び性格を示す。

(イ)心理的性質　五筒の語を以て之を顯にす。

(あ)靈(Spirit)　眼に見えざる無限の靈の意を表はす。

(い)統一(Unity)　神は究極の實在者として意識的に萬有を統一し給ふ。故に此語の中には又獨一の思想を含有す。

(う)內在(Immanence)　神は萬物の中に在りとの義。即ち神の全體は凡ての物凡ての働きの中に居り給ふが故に、神以外に何物もあることなし。

(え)超在(Transcendence)　神は萬物の中に在りと雖も、萬物と神とは同一に非ずして其間に區別あり、之を神の超在といふ。

(お)生存(Living)　神は自發にして、機械的に原因結果の法則に支配せらるゝことなく、自ら事を始むるの能力を有し給ふ。之を生命又は生存といふ。

(ロ)道德的性質

(あ)神聖　消極的に云へば神聖とは神が罪より離れ罪に反對し給ふこと、積極的に云へば神は自己のため又凡ての道德的存在者のために、道德的正義を望み、且之を使用し給ふことをいふ。神が人類を監し給ふに方り此神聖は正直、公平となりて顯はる。正直とは偽らず自己の有りの儘を現はし給ふこと、公平とは道德的存在者の境遇、其道德的標準及び動機等を吟味し給ふて之に應じて審判し給ふことをいふ。

(い)愛　愛に二筒の要素あり、其一は人に凡ての爲を與へんとし、神自身さへも與へんとし給ふ心にして、其二は獲の交通に依り人を我物となさんと給ふこと也。前に說ける神の神聖も後に說かんとする神の智慧も共に耶蘇の一身に具體的に表はれたれ共、殊に神の愛は最も完全に耶蘇の人類に對する態度に顯はれたり。

(う)智慧　神は自己の目的を達せんために方法を與用し給ふ、而して其方法に依りて其完全の智慧を有し給ふことを表す。神の最も高尚なる智慧は耶蘇の生活と十字架に於て顯はれたり。

(二)　絕對者としての神　愛に絕對者といふは以上述べたる性質を有し給ふ神は、實に宇宙萬有に於ける絕對の主也その義也。絕對者としての神は左の性質を有す。

(イ)唯一又は單一(Unity or Simpleness)　神の外に何物もなく、唯神あるのみとの義。

(ロ)遍在(Omipresence)　神は何處にも在り、時間空間の制限を受け給ふことなしとの義。

(ハ)全智(Omniscience)　(ニ)全能(Omnipotence)

(ホ)不變(Immutability)　(ヘ)無限(Infinity)

以上の性質は分量的の意義に非ず。全智とは神が吾人の救のために充分の智慧を備へ給ふの義。全能とは道德的、靈的目的を遂げんために爲し給ふ力に制限なきの義。不變とは絕對的靈的完全の不變を云ひ、無限とは神の偉大尊嚴の尙未だ充分に發現せられざるを云ふ。

【參考書】　ジェルドン及びフィッシャルの『基督教々理史』ハルナッタの『基督教ドグマ史』ダノー、フィッシャル。エルドマン。ヴィンデルバンド其他の哲學史等を見よ。

カミサール Camisards.　**宗派名**　ルイ十四世の時其教會を回復せんとの目的を以て、反亂を起せし佛國ケベヌープロテスタント教徒の一團。白色の短衣(Camise)を着けしを以て此名あり。ルイ十四世は國內の新教徒を苦めんとて、ナントの勅令を廢し、又彼等の居住地に龍騎兵(dragonnade)を屯在せしめて其行動を監視せしめ、ほとは荒動に於る彼等の集會を禁じ、罰金、沒收、禁錮等種々の酷刑を課して之を苦めしかば、彼等遂に之に反抗して起り(一七〇二)先づ十五年間彼等が苦めたる延馬教の僧侶アベ、グ、シャイラを誘ふて之を殺せり。之がため其首領の一人セギールは捕へられて烙刑に處せられしが、聖篤山に逃れて更に其徒を糾合し、ローラン(Roland)及びカバリール(Jean Cavalier)を得て其首領となせり。カバリール時に齡僅に十八歲、短驅昔顏の少年なりしが、勇氣と決斷力に富み、且身一輕捷師に過ぎざりしかども軍人たるの才能を有せり。一七〇三年二月元帥モントレベル六萬の軍に將として來り、屢々カミサールを敗りしを惱ましたれ共遂に之を平ぐるを得ず。當時カミサールの數は僅に三千に過ぎず、且軍隊的の組織なく烏合の衆に過ぎざりしかども、彼等は絕望的勇敢と無心とを有し、且て彼等を苦めたる僧侶を殺し其教會を燒かんとの精神を以て職ひ、其進むや各々口に聖詩を歌へり。且陣中に在るやや宛も教會に在るが如く、說教、祈禱、聖詩を忘らず。彼等は屢々勝利を得、

殊に一七〇四年三月セーント、シャクトに於て大勝利を得たりしが、同年四月元帥ヴィラール來りてモントレベルに代り、先づ大軍を以て彼等を包圍し全く外間との連絡を斷ち、而して或時限の間に來り降る者は其罪を赦すべしとのことを令せり。カバリールは此上職ふことの無益なるを悟り、遁れて和蘭に往き、後以太利、西班牙に轉び、遂に英國に其居を定めヴェルセーの知事となり、一七四〇年に死せり。ルーラーンは戰死し、其他の諸將皆ウェヲヴァに逃れしかば、カミサールは全く其首領を失ひて漸次解體し、一七〇五年の終りに至り全く平定せり。

神の像(カミノカタ)　Image of God.　**術語**　此語に依りて言ひ顯はされたる聖書の教義二あり。一は即ち人は神の像に象られて造られたりとの事、他は基督は父の像也との事是也。

(一)　人は神の像に象られて造られたりとの事は、創一の廿六、廿七、五の一、三、九の六、哥前十一の七、四三の十、雅三の九に記さる。詩八及び保羅がアセンスにて爲せる說教中には、此語なしと雖も共に同一の思想を表自す。此思想は人に關する聖書の教義の主要なる者にして、人の尊嚴の觀念の基礎爰に存す。然れ共此語に關し古來久しく神學上の爭あり。初代の教會は神の像を以て人類が其墮落以前に有したる者也となし、人は罪を犯すことに依て之を失ひたれば贖の必要生ぜりと云ひたりしが、後羅馬教會は、人は墮落に依て神との類似(アイデチス)を失ひたれ共、其像をば存せりと云ひ、プロテスタント教は像に二の意義あり、一は智力、自由の意志及び萬物の管長たる性質にして、人は墮落せりと雖も此性質を失はず、二は靈魂不滅、美德、聖潔、義等にして、人は罪に依て之を失へりと論ぜり。然れ共聖書の所謂像には斯る二種の意義なし。近時の聖書學者は聖書本來の意義に歸り、之を以て人が他の受造物と異れる性質を指せる者也となし、主として之を倫理的に解せり。

(二)　基督は父の像也との事は骨後四の四、四一の十五—十七、來一の二、三に明記せらる。此等の言は基督の豫先存在を云へる者にして、第四福音書記者のロゴスの教義と同一義なるが如し。

神の國(カミノクニ)　The Kingdom of God (Βασιλεία τοῦ Θεοῦ)　**教義**　神の國の觀念は天啓の全體に徹り、舊約に其萌芽を有し、耶蘇の教訓に於て最も著しく、使徒等の書翰中にも亦此思想の存在するを見るべし。此處に記するは此觀念の聖書に於る發達の梗概にして、耶蘇の思想を標準として之を倫理的に解ゲ、古來之に關して世人の抱ける誤謬を正し、正當の觀念を形成することを得べし。

【舊約に於ける神の國の觀念】　神の國の觀念は天地創造の物語に於て既に其根蔕を有す。何となれば神の國とは神が完全の支配權を有する者にして、創造の歷史は自然及び道理に於る神の大權を示す者なれば也。神が全地の王にして、萬物悉く其政權の下に在り、自然及び歷史上の運行及び其變化、個人及び國民の動作及び其榮枯盛衰が悉く神の支配に基けりとは、舊約全體の教訓にして、殊に此思想は詩篇及び預言書に於て明白に言ひ顯はさるゝを見る。而して道德的獲的王國の觀念は此思想の上に其基礎を有す。自然は其性質の固有の法則に依りて誤りなく神に服從す。唯人の今造物主と親密の關係を有し、自由任意の服從を爲す得。神の國の觀念は即ち此處に在り。而して此觀念は創造の物語(創一、二)に含蓄せられたれ共、此の神の國は遂に實現するに至る者也。

謂ふべき思想なり。

【舊約の歷史に於る神の國の發達】　舊約の歷史は神の國の發達の歷史也。創一二の三、廿二の十八、廿六の四)賜くて舊約に在ては以色列は一時神の國と同一視せられたり。故に舊約の歷史は準備的形狀に於ける神の國の發達史と稱するも可也。今故も簡短に此發達の跡を叙せんに『汝の子孫に依りて天下の國民皆福祉を得べし』との約束を蒙れるアブラハムの子孫は、ヤコブに至り埃及に下り、此處にて其國民繁殖したる後、埃及國王の暴虐壓制を蒙り、轉て漸次神の目的を達すべき國民性を鍛練し、モーセに至りて其指導の下に埃及を脫出し、亞剌比亞に漂泊し、シナイ山に於て神と最も鄭重なる契約を結び、聖別せられて神の民となり、エホバ其王となれり(出十九の三—六、廿四の四—八)斯くて彼等は神の選民として全く異邦國民と自らを區別せしが、彼等の神エホバは又全地の主にして(十九の五)榮光と權威とは偏り彼にのみ歸すべく、全地の人類は悉く彼に事へ、彼の誡に從ふべきものなりき。故にエホバと彼等との契約の根柢に在る思想は、決して狹隘王らず。何となれば人は創造せられて後間もなく其原始的無罪の狀態より墜落して罪に陷いりたれば也(創三)然れ共神が道德的王國を建設せんとの計劃は之に依て變すべからず。於是神は其恩惠を以て此王國を實現せんとし、更に贖罪の道を立て給へり。神が人類の誘惑者に向ひて『我れ汝と婦の間及び汝の苗裔と婦の苗裔との間に怨恨み置かん、彼は汝の頭を碎き汝は彼の踵を碎かん』(創三の十五)と云へりとあるは、人類最後の勝利を約束し給へる者にして、此後の天啓の歷史は、惡を倒して神の國を地上に建設せんとする神の目的の發達の歷史に外ならず。而して神は此目的を達する方法として、先づ以色列の民を選び、彼等を通して全世界の人類を救はんとの計劃を立て給へり(創十二の三、廿二の十八、廿六の四)賜くて舊約に在ては以色列は一時神の國と同一視せられたり。故に舊約の歷史は準備的形狀に於ける神の國の發達史と稱するも可也。今故も簡短に此發達の跡を叙せんに『汝の子孫に依りて天下の國民皆福祉を得べし』との約束を蒙れるアブラハムの子孫は、ヤコブに至り埃及に下り、此處にて其國民繁殖したる後、埃及國王の暴虐壓制を蒙り、轉て漸次神の目的を達すべき國民性を鍛練し、モーセに至りて其指導の下に埃及を脫出し、亞剌比亞に漂泊し、シナイ山に於て神と最も鄭重なる契約を結び、聖別せられて神の民となり、エホバ其王となれり(出十九の三—六、廿四の四—八)斯くて彼等は神の選民として全く異邦國民と自らを區別せしが、彼等の神エホバは又全地の主にして(十九の五)榮光と權威とは偏り彼にのみ歸すべく、全地の人類は悉く彼に事へ、彼の誡に從ふべきものなりき。故にエホバと彼等との契約の根柢に在る思想は、決して狹隘

なる國民的觀念に非ず、從て神の國なる者も獨り以色列に止まらず、全壇に及ぶべき者なりき。然るに此點に關する神の思想と、實際に於ける神の國の實現とは頗る相懸隔し、以色列國民は遂に神の聖意に反して、サウルを立て王となすに至れり。彼等の即ち王を立てたりしことに非ず、彼等の理想が他の國民と毫も異なることなく、彼等をして軍國の名譽を得せしむべき國王を得んと欲したりしに在り（撒八の七―九、十九―廿二）此の知くして神の國の建設一時頓挫したりしと雖も、サウルの失敗に依りて、神の心に合ふダビデ起り、愛に所謂神政王國なる者設立せられ、幾分か神の國の設立に向て歩武を進めたりしが、爾後世々の王の治世は盛衰と墜落と相續ぎ、以色列國民は容易く神の國の理想を現實し得ざること漸く明白となり、遂に預言者等は此理想現實の望を將來に置き、他日一大偉人起りて之を現實すべきことを說き（賽七の十四―十六、九の六、七等）而して此神の國の觀念は漸次靈化せらるゝに至れり（耶廿一の廿一―廿四、結十七の廿二―廿四、廿六の廿五―廿七）然るに又以列國民が外國に征服せらるゝに至りて、此思想は益々發達したりしが、預言者の宗教の衰ふるに及びて、再び俗化して政治的となり、神の起し給ふべき一大偉人は政治的救主にして、以色列人を外國の壓迫より救ふのみならず、之をして天下の主たらしむべき者也と信ずるに至れり。耶蘇の生れたりし當時、以色列人は冷酷なる羅馬人に支配せられ、其壓制の下に呻吟せしを以て神の國の來るを望むこと亦甚だ切なる者ありき。而して此時に方り耶蘇來りて『神の國は近づけり』と呼びたりしかば、國民の心腸爲めに沸騰し、其感激悉く彼に向ひたりき。

【耶蘇の神の國】 『耶蘇の教訓』の條下『神の國』の項を見よ。

【使徒等の教訓に於ける神の國】 耶蘇の教訓に在りては神の國の思想重要の位置を占めたりしが、使徒等の教訓に至りては、此觀念比較的目立たず。使徒行傳には尙神の國を以て說教の要旨となせる處數箇處あれ共（八の十二、十四の廿二、十九の八、廿の廿五、廿八の廿三、廿一）書翰には甚だ少く、彼得書には此言更になく、雅各書、潘伯來書には各一回、約翰傳に二回あるのみ。保羅は此言を用ゐたれ共、彼の思想を支配せる者は他に在り。尤も約翰默示錄の重なる思想は神の國にして、此處には基督教徒神の國を作り、基督と共に世を治むべしとの希望を描けり。然れ共概して論ずれば使徒等の教訓に在ては、神の國は其重なる思想に在らず。蓋し此の如き變化を生じたる所以は、當時教會の狀態著しく變化したりしが爲めにして、即ち基督は死して蘇り、天に昇りて基督教徒信仰の中心となり、福音は猶太人を去りて異邦人に移り、教會は諸處に組織せらるゝ有樣にて、說教の中心は神の國なる言を用ゆる時は、多く世末の意義に適用し、之を基督の再來と結びつけくるの傾向あれ共、又基督教徒現在の經驗に適用せし處なきに非ず。例之『神の國は飲食に非ず、唯義と和と聖靈に依れる歡樂に在り』と云ひ（羅十四の十七）『彼は暗の權威より我儕を救出して其愛子の國に還し給へり』と云へるが如し（西一の十三）且彼等思想の全體より論ずるに、彼等は耶蘇の神の國の地上の國なるを領解せし跡歷然として見るべし。左れば此點に關する使徒等の教訓も亦其根本思想に於て耶蘇の觀念と異なる處なきことを知るべし。

神の教會 Church of God. 『クリチヂンヂ*ル派』の條を見よ。

神の子 Sons (Children) of God. 【術語】 神と の關係を言顯はすために種々の意義に用ゐられたる聖書の語。

【舊約に於ける意義】 舊約にては此名稱を左の意義に使用せり。（一）天使、創六の一―四に『神の子等人の女子の所に入りて子女を生ましめたり』とあり。是れ神話の斷片にて種々の解說あれ共、近代の聖書學者は一般に之を天使の義に解す。伯一の六、二の一に『神の子等エホバの前に立つ』とあるは同じく天使の義也。（二）有司又は審士、詩八十二の六に神は審士に向ひて『我いへらく爾曹は神也、爾曹は皆至上者の子也』と云へりとあり。又出廿二の廿八には『汝神を詛るべからず』とあり。爰に云へる神又は神の子は審士の謂に外ならず。（三）以色列國民、以色列國民は全體として神の子と稱せらる『エホバ云ふ、我子イスラエル』（出四の廿二）とあるが如し。（四）個人としての以色列、『爾曹は皆曹の神エホバの子等也』（出十四の一）、何一の十參照）とあるも知し。（五）神政王國の王、『我れ詔命を述べん、エホバ我王に宜へり、汝は我子也、今日我れ汝を生めり』（詩二の七、八十九の廿七、撒後七の十三參照）とあるが如し。以上の例に依りて之を見れば、舊約に於る『神の子』の觀念は神に近似し、神より特殊なる才能若くは特權を與へられたる者を表する者なること明也。

經外聖書にも『神の子』の名稱使用せらる。エノク書に『エホバいふ、我と我子と彼等の生命の義しき道に在りて永く彼等と共なるべし』と云ひ（百五の二）第四エズラ書に『我子メッシヤは彼と共に在る者に

顯はさるべし』と云へるが如し（七の廿八）此等の文籍にてはメッシヤ（救主）と同意義に使用せらる。

【新約に於る意義】 新約には天使を以て神の子と呼べる處なし。又國民としても、個人としても以色列を殊に神の子と稱したる處なし。然れ共新約も亦種々の意義に於て此名稱を使用せり。即ち（一）メッシヤ 耶蘇はメッシヤの意義に於て、他より神の子と呼ばれたり。其バプテスマを受けし時（可一の十一其他）及び變貌の時（可九の八其他）天より聲ありて『爾は我愛子我悅ぶ所の者也』と云ひ、惡鬼が耶蘇を呼びて『至上神の子耶蘇』と云ひ（可五の七其他）耶蘇が淚の上を歩みし時弟子が『誠に爾は神の子也』と云ひ（太十四の卅三）カイザリヤピリピにて彼得が其信仰を告白して『爾は基督活神の子也』と云ひしが如き（太十六の十六）及び此外四福音書中耶蘇の弟子及び其敵の彼を呼びて、神の子と云へるは此意義に非ざるはなし（約一の四十九、可十四の六十一、六十二、太廿一の四十）（二）人類一般 耶蘇は神を天の父と稱し、萬民皆神の國に入ることを得べしと敎へ（太八の十一、九の十二、十三）神は父の心を以て凡ての人を愛し、彼に歸り來る者の罪を赦し給ふべしとの事を說けり（路十五）耶蘇の敎訓に從へば、人類は悉く神の子なるを知るべし。（三）神に似たる者 人類は其最も廣き意義に於て悉く神の子なれ共、耶蘇の敎訓に於ても、狹義に於ては神に似たる者のみ、眞正の意義にて神の子と稱せらるゝを得べきが如し。例之耶蘇が『和平を求むる者は福也、其人は神の子と稱へらるべければ也』と云ひ（太五の九）『爾曹の敵を愛しみ爾曹を詛ふ者を祝し爾曹を憎む者を善視し虐遇迫害者の爲めに祈禱せよ、かくするは天に在す爾曹の父の子と爲らん爲め也』と云ひしが如し（太五の四十四、四十五）（四）基督信徒 使徒等も亦耶蘇を以て神の子と爲せり（約一の十四、三の十六、羅一の四、來一の一、六の六、一約一の三等）然れ共彼等が耶蘇を神の子となせるには更に深き意義あることは、保羅が父と聖靈と相並べて之に祝禱を捧げたること（哥後十三の十四）第四福音書記者が之に權先存在を附したること（約一の一―四）等に徴りて明也。然れ共彼等が耶蘇を尊崇して之を神化したるは宗教的、實際的にして、後に至り發達せる『子なる神』の思想と同じからず。

神の羔 Lamb of God. 【術語】 バプテスマのヨハネ耶蘇を指して『世の罪を任ふ神の羔を觀よ』と云へり（約一の廿九、卅六）此は第二以賽亞書に『エホバの僕』を屠所に引かるゝ羔に喩えたるより來りたる者なるか（五十三の七）又は耶蘇を逾越節に屠らるゝ羔に喩へたる者なるべし。羔は柔和、無邪氣の表徵として用ゐらる。默示錄にも亦基督を羔に比せり（五の六）。

神の友 Friends of God. 【結社名】 第十四世紀中獨逸地方に起りたる神秘派の結社にして、教會を離るゝことなく、又教會の禮典を輕視することなかりしが、禮典よりも直接神と交通することを重じ、同志相謀りて組合を設け互に共被奬勵するを目的とせり。而して彼等は別に宗派を作らざりき。其中心はコローン、ストラスブルグ及びバセルに在り。其教師は多くドミニカン派の僧侶にして、當時の社會の惡風に反對し正義を實行するに力めたり。彼等の中最も重なる者はバセルのニコラス及びヨハン、タウレルとす。其詳細の歷史は詳ならざれ共、一三八〇年の頃に至り次第に消滅したりしが如し。

神の櫃 『契約の櫃』の條を見よ。

カムパネルラ トマソー Campanella, 一三八〇年の頃に至り次第に消滅したりしが如し。

Tomaso 人名 一五六八—一六三九 以太利の哲學者。ドミニカン僧派に入る。教會に從順ならんと力めたりしが、四旬斎牙人なナポリより逐はんとの政治的運動の首領となりしより、郎を得て廿七年間幽囚の身となり、一六二六年救されて佛蘭西に往き、カルヂナル、リセリウの保護を得、其殘生を哲學の研究に委せり。彼は中世末葉の思想を受けて神學と哲學とを分ち、神學は信仰に根據する者、哲學は吾人の經驗に基き、而して數理及び理論に從ひて研究を進め行く者也とせり。彼は又吾人が一切の知識の起點は自己を知るに在りとなし、以爲らく吾人が自ら經驗する所を顧みれば、我は作爲し知識し又意志する者なることを知る。即ち我が經驗に於て我の性が力と知と愛とを以て成れることを知り、又同樣の性を具へたる者と突涉することを知る。諸物の性は吾人自らの性を知ることに依りて推知する外なし。吾人の知識の中に載き第一に確實なるは、我の存在と我の性を知ることと也。而して之を基として神の存在を推知し得べし、そは我の有する神の觀念は、我の如き有限者の造り得る處に非ずして、無限なる完全なる者に依りて始めて與へらるゝを得る者なれば也。而して其神の性質も要するに力と知と愛とに外ならずと知る。唯其見てが無限なるのみと。而して彼は萬物が神に依りて生ぜらるゝ次第を新プラトーン學派風に云ひ做し、神より生じたる萬物は皆其本源なる神に和合せんとする性質を有す。是れ即ち宗教の基く所にして、物々皆宗教心を有すといふも可也と云へり。

カムベル アレキサンデル Campbell, Alexander 人名 一七八八—一八六六 『基督の弟子』(Disciples of Christ) 派の開祖。愛爾蘭教會傳道者たる准允を得て、父トマス、カムベルの移住し居りし米國西方ペンシルバニヤに行く。父も同教派の牧師たり。父の側に在りて研究し、一八一〇年始めて說教し、其より直ちに人望を得しが、漸くにして會員等は父子の說の穩かならざるを見るに至りしかば、父子は少數者と共に別に團體を造り、之を『基督徒會』と呼びめ。彼等の主張は人間の信條や皆自は基督教徒の一致を破壞したれば、之を棄却せざる限り其の一致望むべからずとし、唯だ新約聖書中に在ること、又基督及び使徒等の許せしことの外は教會の信仰禮拜若くは信徒間の表識に何物をも容るべからずとするにありき。而して一八一二年にはバプテスマに就て考へ、浸禮ならざるべからずと信ずるに至り、會員の多數と共に浸禮派教師ルースより受浸し、此に始めて教職任職式を受く。多くの教會なる組織して初め浸禮派に屬せしも、聖書に關する意見の異るために二七年除籍せられ『基督の弟子』と稱せらるゝ一派を成すに至り、直ちに諸方に擴張し遂延す。二三年『基督教バプテスト』を發行し成功著しかりしが、三〇年『ミレニアル、ハービンガー』と合併し死に至るまで執筆す。四〇年ヴァルクニヤ州ベサニー學院を起す。カムベルは有名なる論客にして、教派存在に關し、バプテスマに關し、或は羅馬教會無謬說に關し、或は自派の特色に關し、長老派諸教師や天主教監督等と議論せしこと其だ多し。其の私生涯は潔白にして基督教的美德に充ちたり。

カムベル ジョン マクレオド Campbell, John M'Leod 人名 一八〇〇—七一 蘇國の神學者、贖罪論の著者。父はキルニッヴァンドリムに生れ、グラスゴー大學を出で、蘇國分離教會傳道者たる准允を得て、父トマス、カムベルの移住し居りし米國西方ペンシルバニヤに行く。父も同教派の牧師たり。父の側に在りて研究し、一八一〇年始めて說教し、其より直ちに人望を得しが、漸くにして會員等は父子の說の穩かならざるを見るに至りしかば、父子は少數者と共に別に團體を造り、之を『基督徒會』と呼びめ。彼等の主張は人間の信條や皆自は基督教徒の一致を破壞したれば、之を棄却せざる限り其の一致望むべからずとし、唯だ新約聖書中に在ること、又基督及び使徒等の許せしことの外は教會の信仰禮拜若くは信徒間の表識に何物をも容るべからずとするにありき。而して一八一二年にはバプテスマに就て考へ、浸禮ならざるべからずと信ずるに至り、會員の多數と共に浸禮派教師ルースより受浸し、此に始めて教職任職式を受く。多くの教會なる組織して初め浸禮派に屬せしも、聖書に關する意見の異るために二七年除籍せられ『基督の弟子』と稱せらるゝ一派を成すに至り、直ちに諸方に擴張し遂延す。二三年『基督教バプテスト』を發行し成功著しかりしが、三〇年『ミレニアル、ハービンガー』と合併し死に至るまで執筆す。四〇年ヴァルクニヤ州ベサニー學院を起す。カムベルは有名なる論客にして、教派存在に關し、バプテスマに關し、或は羅馬教會無謬說に關し、或は自派の特色に關し、長老派諸教師や天主教監督等と議論せしこと其だ多し。其の私生涯は潔白にして基督教的美德に充ちたり。

アンドリムに生れ、グラスゴー大學を出で、蘇國分離教會傳道者たる准允を得て、父トマス、カムベルの移住し居りし米國西方ペンシルバニヤに行く。父も同教派の牧師たり。父の側に在りて研究し、一八一〇年始めて說教し、其より直ちに人望を得しが、漸くにして會員等は父子の說の穩かならざるを見るに至りしかば、父子は少數者と共に別に團體を造り、之を『基督徒會』と呼びめ。彼等の主張は人間の信條や皆自は基督教徒の一致を破壞したれば、之を棄却せざる限り其の一致望むべからずとし、唯だ新約聖書中に在ること、又基督及び使徒等の許せしことの外は教會の信仰禮拜若くは信徒間の表識に何物をも容るべからずとするにありき。而して一八一二年にはバプテスマに就て考へ、浸禮ならざるべからずと信ずるに至り、會員の多數と共に浸禮派教師ルースより受浸し、此に始めて教職任職式を受く。多くの教會なる組織して初め浸禮派に屬せしも、聖書に關する意見の異るために二七年除籍せられ『基督の弟子』と稱せらるゝ一派を成すに至り、直ちに諸方に擴張し遂延す。二三年『基督教バプテスト』を發行し成功著しかりしが、三〇年『ミレニアル、ハービンガー』と合併し死に至るまで執筆す。四〇年ヴァルクニヤ州ベサニー學院を起す。カムベルは有名なる論客にして、教派存在に關し、バプテスマに關し、或は羅馬教會無謬說に關し、或は自派の特色に關し、長老派諸教師や天主教監督等と議論せしこと其だ多し。其の私生涯は潔白にして基督教的美德に充ちたり。

一の牧師にして拉丁語に精通せし學者なりしかば、カムベルも幼より拉丁語を學修せり。グラスゴー大學を中途に退きてエヂンバラ大學を終へ、准允を受け一八二五年ロー教會の教職とせられ、能く其の務を果せしが、其の會員の狀態を見て洗思の末、會員は純愛を以て神に事ふるため先づ神が基督に於て會員一人々々を愛すること、及び會員は一人々々基督に由て各自に與へられたる永生を有することを確信せざるべからず。聖書の約束は此の確信を保證す、基督凡ての人のために死にし に非ざれば、人をして神が自己を愛せりと確信せしむる保証あらざるなりと結論し、斯くて說する所なく此旨を說教せしかば、此は無制限贖罪を唱ふる異端說なりとて、三一年の總會議にて六に對する百十九の多數を以て教職を奪はる。故郷に歸りて鄉黨に說教し、三三年の初遇グラスゴーにて獨立の修道を問始し、留後廿六年間之に從ふ。其間三八年に結婚す。五一年時の論爭頗たりし晩餐問題に關し『生命の麵麭基督』を著はして、晩餐は思想を基督自身に注ぐべきためのものなり、天主教徒も新教徒も其の意義を誤ること久しと說く。五六年其名著たる『贖罪の性質と其の罪の赦し及び永生との關係』を出だす。神の子が自己を犧牲として罪を去りたる贖罪は、基督の苦痛の靈的實質及び性質にありて其が刑罰なりし故に非ずといふは、其の思想を一括せる句なり。五九年健康を損してグラスゴーを辭し、六二年『天啓に就ての思想』を出す。六八年グラスゴー大學より神學博士號を贈らる。七〇年ロスニースに移り、極めて平和に生活し『同順錄』等を出だし、知る限りの人に敬はれ愛せられて死に至れり。彼は凡て接せし人々に聖德の印象を與へ、ノルマン、マクレオドは耶蘇基督に於て見たる品格完全に彼に於て現はれたりと言へり。

カムベル レギナルド ジョン Campbell, Reginald John 人名 一八六七 英國會衆派の牧師。牛津グライスト、チャルチ、カレッヂに學び、一八九五年ブライトン市ユニタン、ストリート教會の牧師となり、聲名頗る高く、バーカー博士の死後即ち一九〇三年其後を繼ぎて、倫敦シチー、テムプルの牧師となる。其前年教育令に反對し、勞動的抵抗運動のために盡す處あり。一九〇四年勞働者の習慣に關し『ナショナル、レヴュー』に記載せる論文は大なる反對を蒙りしが、彼は其代表者と會合して討論せり。一九〇七年彼は『新神學』を公にせり。彼の云ふ處に依れば、新神學の起脚點は神の內住及び神人の實質的合一を信ずるの信仰に在り。即ち彼は人を以て神の顯現也となし、又宇宙を以て神の自現の一方法也となす。故に人類と神との間には眞實の區別なく、人類の意識には限あれ共、其存在は神と同じ。彼は耶蘇を以て人類の達すべき完全なる模範、吾人の有限なる經驗に於て完全に神を表現せる生活也となし、而して人は皆基督となり得べき力を有すと云ひ、耶蘇の使命は吾人をして神と吾人の神性との一なることを領解せしめ現實せしめんとするに在り、而して吾人に彼の生活したる生活を生活せんために召されたる也と論ぜり。此書は英國の宗教界に一時少からぬ波調を起し、賛否の聲頗る騰しかりき。

カムベルランド リチャルド Cumberland, Richard 人名 一六三一—一七一八 英國の倫理學者。博學にして且プロテスタント派に屬するの故を以て、リィリヤム三世に擢でられ、ペテルボローの監督とせらる。其著『猶太の度量衡論』及び『自然法』共に名高し。彼の倫理說に主としてホッブスの道德人爲說に對して、道德客觀說を立て、又其利己說に對して、慈惠說を唱へたる者にして、彼は以爲らく、自然法は人の道善道惡の場合に於ける有意的行爲を支配すべき僞然不變の客觀法にして、何人も絕對的に服從すべき僞然不變の客觀法にして、何の自然法なして一段有効の者たらしむる具たるに過ぎず、而してあらゆる自然法は一箇の公理なり其を掩ふことを得、曰く慈惠法（萬人の幸福を增進すべしといふ法）是也と。彼が萬人の共通善といふ法則を明白に揭げ出せるは、後の功利說の先驅と見るべし。彼は又ケムブリッヂ學派の、道德を寡ら觀念若くは智慧と說き去れるに對し、道德法を神與の規律と見、又ケムブリッヂ學派の骨の道德法を先天的實在となして、之を直覺し得べき者と說けるに對して、寧ろ其を除々間發せらるゝ者と見たり。此處ケムブリッヂ學派と後のロックとの橋梁を架したる點と見るべし。

カムベルランド長老教會 (ペスビテリアン チャルチ) Presbyterian Church, Cumberland 宗派名 一七九七年米國ケンタッキー州の西南に著しき信仰復興あり、其進歩著大にして傳道者の不足を生じたりしがため、カムベルランドの長老等は神學上尚未た充分の教育を受けざる者を聘用して之に按手禮を施し、一時の需要に應ぜんとしたりしが、より後に紛擾を生じ、此派の人々は一八〇六年遂にケンタッキー長老教會の大會を離れて新一派を組織せり。是れカムベルランド長老教會也。此派の人々はカルヴィン神學に反對し(一)水流に墜てらるゝ者なし(二)基督は一部の人のためのみなら ず、全人類の爲めに死せり(三)孩兒にして死せる者も基督の贖と聖靈の潔めとに依りて救はるべし（四）神の國に凡ての人をして言ひ盡ろうことなからしめんため、萬人の中に働き給ふとの事を主張せり。此派は漸次成長し、一九〇〇年には凡そ十八萬の會員を有するに至れり。

カムペギウス (ローレンゾ カムペッギ) Campegius, (Lorenzo Campeggi) 人名 一四七四—一五三九 羅馬法王屬の高官。ボロニヤに生る。パデュアに於ける教會法の教授より出でなり、ユーリウス二世に用ひられて重要なる外交に與かる。一五一七年レオ十世は彼をカルディナルとなす。一九年と二八年英國に使し、二四年にはレーゲンスブルヒの對抗改革の交涉をなし、同年のヌレンベルヒ議會、三〇年のアウクスブルヒ議會には法王の代表し、三四年バウル三世選擧の時には之がため大なる運動をなせし一人なり。

カムミンス ジョルジ デヴィッド Cummins, George David, D. D. 人名 一八二一—七六 米國改革監督教會の最初の監督。デラウエア州スミルナに生れ、一八四一年ディッキンソン學校を卒業し、メソヂスト監督教會にて二年傳道者たりしが、四六年監督教會に入り、バルチモーアの基督教會の補助教師となり、其後諸州の諸教會を歷牧し、其間にプリンストン學院より神學博士號を贈らる。六六年ケンタッキーの補助監督に選任せられ、直ちに同教會內の福音主義者の首領と認められしが、改正新禱書も尙缺點あることを信ずる人々に與みし、教會內部の改革に虛心せり。此を以て六九年には分離の勢迫りしも之を肯んぜず、尙不利の地位に立て會に留まりしが、意よ其の已むべからざるに至り、七三年書を正監督に送りて以後教會の制度に服する能はざる旨を發表し、之がために職を辭めらる。同志

の者彼に從ひて共に一教會を造り、之を『改革監督教會』と名け、カムミンスは自心の力を此の教會のために傾注せしが、而も非常なる非難彼に輻集して何人も堪ふべからざる程に至り、其等の勞のため終に死去せり。

カメロン派 Cameronians. 宗派名 第十七世紀の終に起れる蘇國長老教會の一派。教會の獨立問題に關しリチャルド、カメロン主謀となり、ウヨン、センプル。アレキサンデル、ペデン及びウヨン、ウェルウードと共に蘇國長老教會より分離せるより起る。アイルドモッスの戰に於てカメロン戰死し、續て蘇國政府の迫害頗る甚しかりしが、却て此派の熱心を喚起し其數益々增加したりき。此派の人々は其熱心と共に迷信甚しく、センプル。ペデン及びカメロンを以て奇跡を爲すの力ありと信ぜり。且彼等は傲慢、偏執、頑冥にして爭論を事とし、遂に其中にハミルトン派、ハルレー派、ハウデン派、マックミラン派、ラッセル派等の分派を生ずるに至れり。此派は今日も尙存在し多少の會員を有ぜり。

カヤパ Caiaphas. 人名 耶蘇に死罪を宣告せし猶太の祭司長。羅馬の太守グアレリアス、グラタメの任命せし第四の祭司長。アンナスの義子にして、彼に繼ぎて職に上り、十八年間（一八—三六）其職に在り。當時祭司長となる者は多くサドカイ人にして、彼等は耶蘇と最後の爭、及び其後使徒等の迫害には、パリサイ人よりも重要なる地位を取れり。耶蘇ラザロを蘇らしめたる結果民望を得んとせしより、爭亂の起らざるに先ちて耶蘇を殺し、以て羅馬人の復讐より國民を救はんとの議を立てしはカヤパなりき（約十一の四十九）以て彼が正義なる宗教なも顧慮せざる人なりしを知るべし。祭司長及び長の長老等が集りて、謀計を以て耶蘇を執へ殺さんとせしは、カヤパの邸の庭なりき（太廿六の三、四）アンナスの吟味の後、夜間の法廷を開きて耶蘇を審問せる重なる者はカヤパにして、彼は遂に耶蘇に『死に當れり』との宣告を下し、之を殺さんためピラトに付せり（太廿六の五十五—廿七の二）後彼は又祭司長の凡ての族と共に、彼得、約翰の審問に與れり（徒四の六）後引續き教會を迫害したりしと傳へらるゝ祭司長（徒五の十七、廿一、廿七、七の一、九の二）も思ふにカヤパなりしなるべし。

カーライル トマス Carlyle, Thomas 人名 一七九五—一八八一 歴史及び傳記作者、論文家。蘇格蘭エックルフェチャンに生れ、幼より强記と讀書を好むことを以て著はれ、一八一〇年エデンバラ大學に入り、數學に秀で、神學研究を棄て、二年間アンナンにて數學教師をなし、一六年カルタカルディの市學校長となり、其所にて獨逸語を研究し、レゲンドレの『幾何學』を譯し、一八年エデンバラに移り、二〇年より同地の『エンサイクロペデア』及び『レヂィウ』兩誌に寄書し、二四年ゲーテの『ヴィルヘルム、マイステル』を譯し、二五年『シルレル傳』を出し、二六年ウォーン、ウェルシュと結婚し、二八年クレーゲンブットッタに移り『批評及雜種文』を著はし『フレーサー』雜誌に『サルトル、レザルタス』を連載し、三四年倫敦に移り、チェルシアのチェーン街に住し、三七年『佛蘭西革命』を著す。是れ其の名を揚げし著作なり。同年よ

トマス　カーライル

り諸義を始め、四三年迄『獨逸文學』『歐洲文化の時代別』『近世歐洲の諸革命』『英雄論』等を講義し、又『チャーチズム』『過去と現在』等を著す。最傑作たる『オリバー、クロムウエル』は四五年公にせられ、古英雄に對する世人の感情を一變せしめたり。『ウォン、スタールリング傳』は彼の宗教意見を窺はしむる者なるが、五一年の出版にかゝる。最大作たる『フレデリック大王』は五八年より記稿し六五年に大成す。續編を以て十八世紀の政治史全體を傳へたるものなれど、壓制を讃し强者の權利を斷定して彼の道德感化を弱くする感あり。米國南北戰爭には南方を揚げぬ。六六年エデンバラ大學の長官に選ばる。夫人は此の時の不在中に死す。其後の五年は新聞紙に少數の文章を寄せしのみ。

カーライルは其の精力を始終一論に集中し、文學のために生きたる人なり。彼は生れながらの詩人なりしも、作詩術の束縛を厭ひて詩を賤めぬ。此を以て寧ろ說教者預言者と云ふべき人となれり。彼は滑稽諷刺に富みしが、老ゆるに從て此の質は權衡を失して發達し墨言的となれり。彼の文書には倫理哲學少からず混じ居たるも、其の哲學者倫理者宗教者としての地位は曖昧なり。誠實といふことは彼の倫理觀の根底にして、彼は現象の下の事實を見、幻影の背後の實在を取ることを誠實とし、作爲的のことなど非常に厭ふて那邊も無用なる露骨の言をなせり。其の倫理思想は力と權利とを一つに觀たる點に於て謬れり。曾は又歷史を以て英雄の記錄とし、政治問題の解決には人民の力を無意味とし、人物の偉大を尊んで其の缺點を蔽ふ。此を以て其の結論としては壓制政治と奴隷制度とあるのみとなる。歷史家として微細の點へ洩さず看取するに長じ、其の歷史は畫の配列の如し。哲學には一の系統なし。直覺的哲學にして理論者たることは明白なり。神學の立場も不明なり。有神論者なるとは明白なり。されど教義に關しては語らず。基督に對しては常に異敬の態度を取り、基督教なれば最德宗教と謂むれど、凡ての眞理之に盡くとは言はず。神に對して責任を盡すは凡ての宗教の實質なりと言へり。刑罰は惡の自然の結果として在るべしと信じ、純清なる敬神を尊びたり。批評家としては大なる知識と見識あれど、唯だ偏見に陷り易き傾ありしを惜とす。

カラミー エドマンド Calamy, Edmund 人名 一六〇〇—六六 英國の宗教家。倫敦の人。劍橋のペムブロック、カレッヂにて教育を受け、ケムブリッヂシャ内の二教會を歷牧せしが『遊戲の書』を著して淸教徒たるを顯はせしため禮職せられ、ヨークイク伯に招かれてエセクス領内の牧師となり、一六三九年更に倫敦アルダーマンボリーの牧師となり、一六三九年更に倫敦アルダーマンボリーの牧師となり、一六三九年迄に復まで在職す。ジョセフ、ホールの『謙遜なる宣明』に對してステフェン、マージャル。エドマンド、カラミー。トマス、ヤンガ。マシウ、ニューコムメン。ウィリアム、スパルストー相連合して答辯を發し、各自の頭字を取て Smectymnus 著と稱し小冊子を續々發行す。カラミーはウェストミンスタル神學者會員に選ばれて勢力あり。其の穩和なる說を以て監督派と獨立派とを合同せんことを志せり。四九年『長老政治及び教務の確證』の編纂に與かり、五四年には『ユス、デビヌム、ミニステリ、エヴンゲリキ』を著はす。五九年チャールス二世を王位に迎ふることには活動的態度を以て左袒し、議會のため和闘に送られたる神學者等の一人なり。六〇年の王朝回復の時王廷牧師の一人とせられ、又監督職を與へられしも之を辭せり。バクスターやレーノルド等と共に、式文を改正して長老監督兩黨を合同せんために努力せしことも一方ならざりき。彼は又大說教者にして議會や公會にて屢々說教せり。『神の知き人の方舟』など說教集もあれど、其長所は實際家たる所にあり。六二年非國教徒なる以て目せられ投獄せられしも、人民の激昂甚だしかりしため王命に由て直に解放せらる。

カリクスタス Calixtus. 人名 此名を有する羅馬法王三あり。（一）カリクスタス一世 ヘリオケパロス及びアレキサンデル、セヴエロス治世中の人、其傳もと頗る不明。聖マリヤトラステヴエル會堂は彼の開基と傳へられしも、特に或聖者に會堂を獻ずる習慣は後の世に起りし所、又殉教者墳墓といふも彼の名を有すれど、之も誠の述てし者なるや明ならず。四大斯倉語設定に關する傳說も信じ難く、殆ど其の一代を知るに由なかりしか、ヒッポリタスの文書『凡ての異端の否定』發見せられて此に全く以前と異れる事跡の知らるゝに至れり。同文書に依れば、コムモドスの治世中（一八〇—一九二）基督教信者にてカルポフォロスといふ官吏の奴隸にカリクスタスなる者あり。主人の金に由て魚市に銀行を立て寡婦等の金を預かりしが、事を誤りて失敗し、金を失ひ、逃亡せんとせしを港にて捕へられ、主人に付され、唐臼場にて服役せし後免さるゝや、又羅馬にて猶太人と格闘して苦うたれ、サルデニア礦山に送られしを、免されて歸りし後、法王ゼフィリヌスに知られ大墳墓の監督とせらる。此れ後に彼の名を有せし墳墓なり。其より累進羅馬監督の高位に上りしと思はる。當時教會の記錄は甚だ寬なりければ、斯かる人物が顯かる地位に上りしことも有り得しならん。

ヒッポリタス文書はカリクスタスの持説と人物とを攻撃せるものなるが、兩人の爭はセフィリヌスの時より始まり、ヒッポリタスはカリクスタスを父權獨在論者と非難し、カリクスタスはヒッポリタスを二神論者と非難せり。教會戒規に就てもヒッポリタスは大罪を犯せし者は決して教會へ復歸を許すべからずとし、カリクスタスは寛大說を唱へて羅馬教會の實習を辯護せり。ヒッポリタスが彼を異端とせしは、彼が子なる神は父なる神が唯だ人の形を取りて現はれたる者のみ、父は子を活動せしむるに猶獨が角笛を活動せしむるごとく子と共に十字架にて苦を受けたりと唱へしに由る。カリクスタスの在位は二一八年より二二三年迄と記錄せらる。(二)カリクスタス二世 佛蘭西ヴィンナの大監督より選ばれて法王となる(一一一九)ヘンリー五世の個戰にして、一一二二年メンタにて同帝と條約を結び、兩者の權限を定む。一一二四年死す。(三)カリクスタス三世 西班牙人にして、一四五五年法王に選ばる。一四五六年土耳其の侵入に對し十字軍を起さんとしたれ共、之に壓する者なし。一四五八年死す。又カリクスタス三世と稱する僞法王あり。一一六八年フレキサンデル三世に對し、フレデリック、バルバロッサの助に依り法王となる。(四)フレキサンデル三世の條參照)。

カリクスツス ゲオルグ Calixtus, Georg.

人名 一五八六—一六五六 獨逸の神學者。一六〇三—九年ヘルムステット大學にて言語學習學神學を研究し、一三年まで和蘭、英國、佛國に遊び、一四年ヘルムステットの教授となる。十七世紀に於けるメランクトン派の最有力なる代表者にして、基督教小分派を去りて一大合同をなさんことに努力せしも、折しも三十年戰爭に際して成らず、ルーテル派も彼を頑迷なりとし、一六年其著『イムモルタリターテ、アニマイ』は檢閲官より押へられ、一九年『エセトメ、テオロギエ』は捜索押收せられ、而して三四年の『テオロギア、モラリス』と『テ、アルテ、ノバ、ニフ』に至ては、天主教徒は之を自教會の主義の攻擊なりとなし、ルーテル派は之を隱密法王主義なりとして、四〇年公然攻擊を起せり。四五年トルン會議に至て形勢益々惡くなりぬ。カリクスツスは尙カルヴィン派とルーテル派の和合をも謀りしが、之には隱密カルヴィン派なりてふ猛烈なる攻擊を受けたり。されど屈せずして其の主張を雄力となり繼け、最後に『テシデリウム、エト、スチュカデム、コンコルディエ、エクレシアスチカイ』『誘誘の反對』等の著はせり。ヘルムステットにて死す。

構廬節 Feast of Tabernacles. カリホズヒツ

猶太人の祝節。チリスの月(十月)十五日より廿二日まで一週間繼續す。歴史的には其先祖が埃及を出で、巡到比亞の曠野に漂泊せるを記念するためなれ共、又收穫の感謝也。即ち此期節には人々都邑村落より果園に出で、假小屋を結びて七日の間此處に住び、歡樂をなして收穫を祝する也(出廿三の十六、廿四の廿二、利廿三の廿四—四十四、申十六の十三—十五等)此祝節には他の祝節より多くの犧牲を供ふ(民廿九の十二—廿四)七日終りて第八日には嚴肅なる聚會を行ふ(約七の廿七の日)是也)此祝節のみならず、此年の凡ての祝節は此日を以て終るを示す也。此日又大なる犧牲を獻ぐ(民廿九の廿五—廿八)。

カルヴィン ジョン Calvin, John

人名 一五〇九—一五六四 宗教改革家、神學者、宗教改革家としては第二期に屬す。ルーテルが九十五箇條の意見を公表せし時、カルヴィンは僅に八歲にして、彼が成年に達せる頃は、新舊兩教の戰爭に其頂點に達したりき。彼がジネヴァに於る事業は改革家の運動に大なる勢力を與へ、又其神學は基督教思想の上に著大の影響を與へ、彼より以後の教會は殆ど全く彼の思想に支配せられたりと云ふも過言に非ず、彼は實に基督教會の思想に於て獨敎に於る朱子の地位を占めたりき。

【略傳】 彼は佛國ピカルデーのノヨン(巴理を距る東北凡七十哩)に生る。父はノヨン監督區の書記にして、母は頗る宗教的熱心に富めり。彼は生れて體質强健ならざりしが、才氣風に顯發し、マンモルと稱する貴族の眷顧を得て、其兒女と共に教育を受くることを得たり。十二歲にして牧師職の收入を受領するを許され、後更に他の教區の收入をも加へられたれ共辭して受けざりき。父は初め彼を僧侶となさんと欲せしかば、彼が十四歲の時巴理の大學に送れり。彼は此處に在りて拉丁語及び論理學を學び、其才勢と篤學なること忽ち衆生に冠たるに至れり。十八歲の時制髮し(羅馬教會の僧侶は頭上の中央を圓く剃るの風あり)且ゆり〳〵說教したりしが僧位なれば受けざりき。此頃矣は或る動機より其初志を變じ、カルヴィンなして法學者たらしめんとせしかば、彼はオルレアンス、後バルゲスの大學に於て法律學を研究せり。彼れ勤精刻苦眠ること僅に數時間に過ぎず、爲めに其健康を害したりしが、學業の進歩驚くべく、其教授不在の時は彼れ之に代りて講演したりしといふ。此頃彼は又文學を學び、且ウォルマルと稱する獨逸の教授に從て希臘語を學べり。ウォルマルはプロテスタント教の說を信じたれば、カルヴィンは思ふに多少其感化を受けたりしなるべし。且

これより先き、彼はプロテスタント教徒にして、初めて聖書を佛語に飜譯せしペテル、オリベタンの勸めに依り、法王の命令に反抗せり。一五三〇年彼は法律學の研究を終り巴理に歸り、一五三二年セネカの論文の註釋を出版すや、彼が改心は此頃の事にして、彼は之を『突然の改心』と稱し、自ら記して曰く『余は長き間自己を反省しつゝありしが、眞理の光突然として來り、余が從來有したりし誤謬、迷想及び汚辱を余に示したりき。余は己の惨めなる狀態及び余の前途に橫たはる災禍を自覺したりし時、戰慄したりき、嗚呼主よ涙と時とを以て罪の憎み給ふ舊き生活を棄て、罪の途に進れ往くの外余果して何を爲し得べきや』と。翌くて彼は平和と安心とを得んとして、教會の教へたりし方法に之を求めて得ざりしことを語り、且自ら內に顧み、又眼を擧げて神を仰げば、益々眞心の苦痛を受くるのみなりしことを叙し『救の渚は唯一のみ、即ち基督に於て吾人に與へられたる神の慈愛是也、吾人は惡惡に依りて救はる、吾人の功勞又は行爲に依りて救はるゝに非ず、吾人は信仰に依りて基督を受け納れ、其父りに入る也、之を聖書の語にて信仰に依りて義とせらるといふ』と云へり。カルヴィンの宗教的經驗に就ては多く知ることを得ざれ共、大體に於てルーテルの經驗と同一なりし事明也。彼は初め羅馬教會を尊敬するの念より、プロテスタント教徒となることを躊躇せしが、後教會を變ずることは之を棄つることに非ずと信ずるに至れり。元來彼は遠慮勝にして且內氣なる狀態及び余の前途に橫たはる災禍を自覺したりし時、戰慄したりき、嗚呼主よ涙と時とを以て罪の憎み給ふ舊き生活を棄て、罪の途に進れ往くの外余果して何を爲し得べきや』と。翌くて彼は平和と安心とを得んとして、教會の教へたりし方法に之を求めて得ざりしことを語り、且自ら內に顧み、又眼を擧げて神を仰げば、益々眞心の苦痛を受くるのみなりしことを叙し『救の渚は唯一のみ、即ち基督に於て吾人に與へられたる神の慈愛是也、吾人は惡惡に依りて救はる、吾人の功勞又は行爲に依りて救はるゝに非ず、吾人は信仰に依りて基督を受け納れ、其父りに入る也、之を聖書の語にて信仰に依りて義とせらるといふ』と云へり。カルヴィンの宗教的經驗に就ては多く知ることを得ざれ共、大體に於てルーテルの經驗と同一なりし事明也。彼は初め羅馬教會を尊敬するの念より、プロテスタント教徒となることを躊躇せしが、後教會を變ずることは之を棄つることに非ずと信ずるに至れり。元來彼は遠慮勝にして且內氣

カルヴィン

の性質を有し、退きて靜に讀書研究するを以て此上なき樂となし、世に出でゝ之を職ふが如きは彼の好む所に非ざりき。今や彼は聖書及び宗教上の眞理の研究に其全心を注ぎしが、尙世と離れて靜かに日を送らんことを欲したりき。然れ共巴理に在るプロテスタント教徒は竊に彼を以て其首領と仰ぎ、宗教上の教訓を彼に聞きたりき。當時彼の友にニコラス、コップと云へる人あり。新に大學長に任ぜられしが、カルヴィンは彼のために就任演說の稿を起し、其中に宗教改革の意見を述べたりしが、之がため大に人心を激昂せしめ、二人共巴理を逃るゝの止むを得ざるに至りたりき。是れより凡そ二年の間彼は諸處を漂泊し、後ーたび巴理に歸り來りたれ共、プロテスタント教徒の不謹愼なる舉動に依り朝廷の怒を惹起し、之がため又巴理を去るの止むを得ざるに至れり。彼が其最初の神學書を公にしたるは此頃の事にして、此書は人の靈魂は死後蘇るまで眠れりと云へるアナバプチスト派の說を駁せる者也。彼れ佛國を去りてストラスブルアに往き、後又バセルに往きしが、至る處に歡迎せられたりき。バセルに於て彼は希伯來語の研究を始めたり。其大著『インスチチュージョン(Institutes)』の成りたるも亦此處也。彼が此書を著はせる動機は、當時佛國のプロテスタント教徒大なる迫害を蒙り居たりしが故に、此書に依りて迫害者の惑を解かんとするに在り。故に彼は先づ國王フランシス一世の新教に對する同情を喚起せんとして、懇懇なる書を裁し之を國王に獻じたり。時に彼れ齡僅に廿六歲、後廿三年間彼は幾回となく之を訂正增補したりしが、書中の教義は毫も之を變化せず。吾人は此書に於て彼の人となり、及び清廉者たる特色を見るを得べし。彼は其性情元來貴族的にして、其幼時受けたる教育も亦此傾向を助けたりしが如し。彼がルーテルと異なる點實に茲に在り。ルーテルは平民的にして、平民を感動せしむる力を有せしが、カルヴィンはルーテルよりも更に嚴密にして鍛練せる學者にして、其辯論平易にして論理となき學問あり教育ある者に適せり。且彼は秩序と其言論著しく論理的、組織的にして、又組織的の才能を有せり。メランクトンは改革家中の學者なりしが、尙カルヴィンを呼びて『大神學者』也と云ひ、プロテスタント教の敵は彼の書を『異端者のコーラン』也と稱せり。

後カルヴィンは以太利に遊び、バセルに歸り、又竊に佛蘭西に往き、故郷に歸りて其弟妹なるプロテスタント教に改宗せしめ、バセル若くはストラスブルアに永住せんとの目的を以て、歸途に就き一夜ウェチゲアに宿り、翌日必ずバセルに向はんとの決心なりしが、爰に彼が生涯の方向を轉ずる事件こそ起りたれ。そは佛蘭西の貴族にして、プロテスタント教に改宗したるがため逐はれてウェチゲアに來り、其地に在住せる佛人に傳道せるウィリアム、ファレル(William Farel)といふ者あり。彼れカルヴィンが此地に來り留まることを聞き、其宿所を探りて之を訪ひ、且曰く『君もし神の事業よりも靜居讀書を戀まんとせば、神は必ず君を詛ふべし』と。後カルヴィンの詩篇註釋の序文に當時の事を記して曰く『此等の言は宛も神が天より其手を伸して余を引き止むるが如く、深く余の心を震動せしめたり、故に余は自ら企てたりし旅程を放棄したりき』と。怯懦なる學者は斯の如くして、其從來の志望を棄てゝウェチゲアに留りて改革の事業を爲さんとの決心を爲せり。當時のウェチゲアは佛蘭西と瑞西との間に在る一小獨立國にして、其人民は頗る活氣に滿ちたりしを以て、監督の壓制束縛より逃れんとして、改革說を受け容れたりき。カルヴィンはファレルと共に鍛意改革の事業に從ひたりしが、彼等の規律嚴に過ぎたるがため市民漸く彼等を厭ひ、之に反對するの傾向を生じ、一五三八年土地の政法に不適當也との理由を以て、市民大會は其決議に依り、彼をウェチゲアより追放せり。於是カルヴィンはストラスブルクに往き、三年の間（一五三八—四一）其處に留りて靜に勉學せり。彼は此間妻を娶り三子を擧げしが皆夭死し、妻も亦九年の後死去せり。然れ共此間カルヴィンはウェチゲアを忘れたるに非ず、カルディナル、サドレーの之を羅馬教に回歸せしめんとするや、來りて大膽に之が防禦運動をなし、且屢々彼が以前の會衆に相當の勸言を與へたりき。而してウェチゲアの市民は、彼去りて後墨風の次第に增長せるを見、暫くらく之を防止する者稀り彼あるのみと。彼の再び來りて彼等の間に働かんことを切に懇願しければ、彼は心ならずも其請に從ひ、一五四一年九月再びウェチゲアに來り住せり。是れよりウェチゲアは彼の家郷、彼の教區、彼の活動の中心となり、其境遇なる規律に依りて凡ての墨風を鄧壓し、市の面目を一新せり。且ウェチゲアは當時歐洲各國に於て迫害を受けたる者の避難所にして、獨人、英人、以太利人、西班牙人、殊に佛人來りて歸を此處に避け、カルヴィンの事業を助けたりき。又カルヴィン及びベザ(Beza)の講演は數千の學生を此處に引き付け、彼の名聲屋々として擧れり。然るに彼が過度なる講學、牧會上の苦心、文者往復の煩繁等は遂に彼の健康を

害し、彼は五十五歲にして逝けり。彼は自ら謹愼を守り、慈善を專とし、死して餘財を止めざりしといふ。

【カルヴィン神學の根本思想】　カルヴィン神學の一大特色は、聖書を以て唯一の標準と爲せるに在り。彼は聖書の眞理は教會の教權の上に立てりとの說を笑ひ、聖書の教權は理性に依りて証明せらるべく、福音の眞實なることの確証は聖靈に依りて與へらるべしと云へり。彼はルーテルの如く古代の教會を尊重せず、教父殊にアウガスチンを尊敬したれ共、聖書の教に違へる…ことありと思惟する時は、其何人たりしに拘はらず遠慮なく之を辯駁せり。又彼は法王政治、及び彼が人の創意に出でたりと思惟せし教式及び儀式を輕蔑し、且之を憎みたり。然れ共彼は教會に對しては最も敬意を表したりき。彼の所謂教會とは羅馬教會の謂に非ず。彼は見久ざる教會とは眞正なる信徒より成る者にして、見ゆる教會とは正當に聖禮典を執行し、聖書を敬ふる者也となし、斯くして成立せる教會を深く尊重し、教會以外に救なし、教會を離るゝ者は基督より離るゝ者也と論ぜり。然れ共カルヴィン神學の最も著しきは、其『預定(プレデスティネーション)』說に在り。預定說は其初め改革家一般に之を唱へ、彼等皆ペラギウス說に反對して、アウガスチンの說を復興するに力を用ゐたりき。カルヴィンは論理上正當也との理由を以て必然說を唱へ、之を辯護したりしには非ず。彼は神の全能に至大の重を置きたりしが共、彼が預定說を唱へたりしは思辨の結果に非ずして、其直接の原因は實際的也。彼の考ふる處に依れば預定は一方に人の全然無力なることを意義し、他方に神の思寵に依りて救はるゝことを意義す。『選擇(エレクション)』とは人の救に自己の働に在らずして、全然神の恩寵に在りとの義にして、此選擇あるが故に信徒は誘惑の中に在りて尙安全なるを得る也。アウガスチンは、アダムの墮落は全人類の墮落にして、人の意志は全く滅びたるには非ざれ共、唯罪を犯す自由あるのみにて、善を爲すの力は全然之れあるなし。故に人類は惡く神の前に刑罰を受へべき者なれ共、神は其中より或人々を選びて恩寵を與へ之を潔め給ふ、而して他の人々をば其受くべき刑罰を受くるに委せ給ふ也と說けり。カルヴィンはエラスムスの說を駁し、アダムの墮落其物を以て神の命令に出づる說き、スコプラ、ラプサリアン說（其條を見よ）に傾きしが、後又アダムの犯せる罪を以て任意的也と爲し、アウガスチンと同一の地位を取れり。然れ共彼はアウガスチン及びルーテルと異なり、一旦改心したる者は何人も神の恩寵に洩るゝことなし、信者の數は選ばれたる者の數と均しと唱へたり。要するに彼は神の權能に最も重を置き、彼の神學に在ては義は愛よりも著しく、彼は愛の神よりも義の神、權能の神を崇拜したりき。

【彼の事業】　カルヴィンの事業にゾ其主義と同じ。彼が初めウェチゲアに來るや先づ政教の分離を主張し、政府が洗禮盤を用ゐ、若くは晚餐に無酵麵麭を用ゐることや、教會の祝節を守ることや、其他諸宮に教會の權內に屬すべき事件に干涉するを禁じ、不道德を行へりとの理由を以て、ウェチゲア市及び此地に來るや、全權を其手に提り其理想を遂行せんと試みたりき。即ち彼は先づ教會裁判の必要を認め、六名の牧師と十二名の長老を選びて教會法院を組織し、每木曜日に之を開きて、教會員の品行及び市民一般の行爲を調査し、頗る嚴重なる所罰を行へり。彼は賭博は云ふ迄もなく、演劇の如き嬉戲をも禁じ、信仰問題に贊成せず、又教會の取締に服從せざる者は市外に放逐し、異端者を死刑に處し、且墨口賢瀆と見做すべき言行を禁じ、犯す者は嚴刑に處せり。例之或人其妻に料理書を與へ、戲れに『是れ汝に適當せる讀美歌也』と云ひしことを長老の耳に入り、賢瀆の言也として證責せられたることあり。又或學者は基督教に反對せる古書を讀みたるため、獄に投ぜられたることあり。又或小兒は親を擊ちたるため死刑に處せられたることあり。此の如き苛酷なる取締に對しては素より反抗する者あり、種々の方法を以て彼の事業を妨害する者もありしが、彼は毫も之を恐れず、大決心を以て其所志を遂行したりしかば、市中の風儀は漸く一變して、遂に宗教的生活の模範市となるに至れり。彼が改革の方法として用ゐたりし最も重なる者は、說教にして日曜日の外、隔週每日平易、直截なる說教をなし、又每金曜日質問會を開き諸種の質問に應じたりき。

【カルヴィンと其反對者】　カルヴィンはルーテル、ヅヴィングリーの如く、アナバプチスト派と爭ひたりしが、一五三七年公然之と議論し、之に勝ちし後は再び彼等の爲めに煩はさるゝことなりき。然れ共彼は又他の反對者なゝりし。其一は佛蘭西の論難者にして牧師なるカロリ(Pierre Caroli)也。元來カルヴィンは神學上の言語に頗着せず、之に依て眞理を顧はずを得ば如何なる言語にても可也とせり。於に彼は別に深き理由ありしには非ざれ共、神の性質を論ずるに方りて『三位一體』及び『ペルソナ』なる言を用ゐず、又彼の起稿せる信仰告白書にも此等の言語

勿りき。於是カロリはカルヴィンを以てプリウス派の神學を奉ずる者也との訴訟を提起し、カルヴィンは之が爲めに大なる迷惑を蒙りしが、審問の結果其無罪なること明となり、カロリは其職を褫れて追放せられたり。又ベルセリエル(Berthelier)及びボルセク(Bolsec)もカルヴィンに反對したりしが、幾なくして彼等の敗北に歸せり。彼の反對者中最も有名なるはミカエル、セルヴェタス(Michael Servetus)也。セルヴェタスはカルヴィンと同年に西班牙に生れ、曾て巴黎に於て相識となれり。深く羅馬教の信仰の根據なきことを感ぜしが、又プロテスタント教殊に其三位一體の教理に滿足することを能はず。一五三一年『三位一體誤の誤謬』と題する書を著し、サベリウス說に類似する說を述べたり。後ヴィンナに往き其地の大監督に身を寄せ『基督教の復古』と題する書を著し、窃に之を印刷して匿名にて出版し、其敵都なるウェチヴァに送りたりしが、サルヴェタスの著述なること顯れて拘へられ、教會法廷に依りて審問せられたり。彼れ自己の著書に非ざることを强辨せしが、到底其證明の成立し難きを察し、窃に獄を脫し遁れてウェチヴァに往けり。カルヴィンは偵して之を知り捕へてウェチヴァの議會に送り、其徒と共に之を訴へたり。サルヴェタスは大體に其所說を固守し、且カルヴィンの告訴の惡意に出づるを指摘し、寧ろ彼を追放せんことを求めたりしが、意外にも自ら有罪の宣告を受けしかば、カルヴィンを獄に招きて彼のカルヴィンに對する厚置の經當ならざりしことを謝し、其即を敎さんことを請へり。然れ共彼は飽くまで自說を固守して動かざりしかば、一五五三年遂に焰刑に處せられたり。而して彼が此極刑に處せられたるに就ては、其是非の議論は兎に角、カルヴィンが大に其責に任ずべきことい ふ迄もなし。

【彼の性格】　若しルーテルを以て眷目の知くなりしとせば、カルヴィンは夏日の知くなりしといふべし、ルーテルの初期快活にして愛すべきに反し、彼は峻烈苦酸にして寄り親むべき者を有せず。彼の弟子、朋友にして且其傳記著者なるベザは彼に就て語りて曰く、彼は其少童たりし時底に其夥倡の過失、缺點の檢察者なりきと。彼はクランメル、メランクトンの如き長者に對してさへ、苛酷の言語を用ゐたりき。彼は眞實忠誠にして勇氣を有したりしこと疑なけれ共、又一方より見れば其性躁りに苛辣にして、且自說を守るに餘りに頑固なるの譏を免れず。メランクトンの如き溫厚なる君子さへ、嘗て彼の書簡の無禮なるを怒り、之を寸斷したることありしといふ。彼が過勞の結果其健康を害せし後は、一層ル性癖を增し、屢々熱情に驅られて自制の念を失ひたること屢々なり。彼自ら此過失を知り、曾て正直に告白して、金は憤怒の野獸を驅らさんとして幾度か失敗したりきと云へることあり。彼の稱讚家なる彼の傳記作者さへ、彼の敬度は餘りに舊約的なりしと云へり。彼の說教の大部分が其題目を舊約より取りたりしは著しき事實にして、自己の思慮、感情、意志、他人の生活及び教會と國家とを悉く之を法律に服從せしめんとする傾實に彼の目的なりき。彼は神の大能と至聖との念に撲たれ、此思想其全心を支配したりき。神の榮意に從ひ、神の榮光を顯はさんとするは、彼の生活に於ける最大目的にして、彼は此目的を達せんため自ら全能者の榮光を演ずる者也と認むる者は極力之を攻擊せり。而して彼は神の取なる惰むを以て怪すべからざる義務也と思考し『余もし彼等に對し怒を發することを能はずんば、寧ろ發狂すべし』と云へり。彼はルーテルの如く、人生實際の生活に觸るゝこと少く、從て之に對して博廣なる同情をも有することを能はざりき。彼にはルーテルの如き詩才なく、其頭腦は全く論理的なりき。彼が其一生の大作なるジェチヴァ綱神に送りたりしに拘はらず、一言其美に言及せざりしは注目すべき事實也。要するに彼は聖にして大能なる敬神家にして、其心を滿せる者は聖にして大能なる神のみなりき。故に彼には露々たる和氣なく、深厚なる同情なく、從て又世人の同情を得ることも少かりしと雖も、其學殖の深かりしこと、精力の大なりしこと、其大體にして所信を實行し、地上の權力を恐れざりしこと、其神の全權を尊重し、全然神に服從し、毫も私心を挾まざりしこと等を思ひ又認れか彼の偉大なるを讚歎せざらんや。

【彼の著書】　彼の著書は之を神學及び註釋學に區別すべし。前者の最も重なる者は前に云へる Institutio of the Christian Religion" にして、後者の最も重なる者は羅馬書の註釋也。彼は原語にも精通し、註釋家として最も適當なる資格を有したりき。

【參考書】　カルヴィンの著書。ベザの『カルヴィン傳』。ホン、パウル、ヘンリーの『ヨハン、カルヴィンの傳及び書翰』。ダイエルの『カルヴィン傳』。

カルヴィン派神學 Calvinism.

學派名

カルヴィンの神學說に名けられたる語なれ共、元來アウガスチン(三五三—四三〇)の創唱に係り、アウガスチン派神學(Augustinianism)と名けられたる者也。今日カルヴィン派神學と稱するは、獨りアウガスチン、カルヴィンの著書中にのみならず、此教を奉ずる教會の信仰告白及び其標準的神學書の中に顯れたる、此教義のプロテスタント教的に發達せ

るもの之謂也。

【カルヴィン派神學の要領】　一　造物主と被造物者の關係　此學派は神は萬物の上に超然たると同時に、萬物の中に內在せりとの事を敎ふ。神は有意識的人格的靈神にして、常に世界の外に在り、又其上に在り、自己の自由意志に依りて、其造れる自然の各部分に超自然的勢力を及ぼすの力を有し給ふ。彼は通常第二原因を通じて働き給ふと雖も、其好む處に從て自由に働くの力あり。從て被造物の存在するは全く神の意志にして、彼等が第二の原因となりて働くの力を有するも、亦全く神の意志に依れり。以上は大體に於て凡ての基督敎徒の信ずる有神論と大差なし。此點に於て此學派の特色とする處は、ペラギウス學派(Pelagianism)に對して、人の靈魂が墮落以前より靈的生命と道德的完全とを有したりしは、神靈の恢力(concurrence)に依れる也と云ひ、而して其靈的死と道德的無力とは直接原因を以て神が此恢力を撤回し給へるに在りと爲せる點に在り。此神の力は或る程度、或形狀に於て凡ての被造物の共に享有する處にして、神が人類の道德的性格及び動作を改善せんとて、超自然的方法を以て再び之を罪ある靈魂に運附し給へる者なるが故に、之を名けて『恩寵』(grace)と いふ。扨又神が萬物を造り給へる故如何にと云ふに、聖書は神が之に依て自己の榮光を顯はさんとなし給ふ也と云へり。此學派は此敎義を取りて、神が人に對する篤般の行爲、及び人の神に對する義務を說明せんとせり。

二　神の永遠の計劃と實際の人事(預定說)　此點に關する此學派の所說を列叙すれば左の如し。(一)神の永遠不變の計劃は、人を自由の動作者として創造し給へり。故に神は人の自由の動作に干涉し給ふを得ず。(二)然れ共此創造せられたる自由の意志は絕對的獨立を有する者に非ず。斷に其根據を有す。(三)無より萬物を創造し給へる全智全能の造物主は、後起るべき凡ての出來事を元始より預知し給へり。此預知は又預定を意義す。何となれば創造の時預知せられたる凡ての原因結果は、其直接なると偶然なるとに拘はらず、素より創造に依りて決定せられたる者なれば也。(四)凡ての出來事は唯一箇の組織を爲す者なるが故に、造物主は其組織を全體として包容し、其最微なる各要素を一箇の調大なる目的の中に包容せざる般的なる目的は目的とし、又方法及び情態は之に依屬せる目的との關係に從て、之を決定せざるべからず。故に凡ての出來事は常に其原因に依り、偶然の出來事は其情態に從て生ずることなれ共、神の目的には一として偶然といふものなし。何となれば其原因若くは情態なる者は又神の目的なる者なれば也。故に神の命令は凡て絕對と呼ぶべき者にして、自ら決定するの性質を有す。而して之を以て道德的ならしむるは聖靈の內在に依る。故に意志を決定せらるゝ者に外ならざれば也。(五)然れ共此決定は被造物の原因作用、並に人間及び天使の自由決定に抵觸せず、寧ろ之を助く。創造せられたる道德的動作者が其神聖を保持するは、內住するに依り、其即を犯すは內住せざるに依る。故に自由の動作者たる人の意志中に存する善は悉く其原因を神に歸すべく、凡ての惡(過失、缺乏)は單に神之を許し給へるのみ故也となすべきなり。此見解に從へば一切の出來事は悉く神の永遠の目的の中に包容せらる。サタン及びアダムの墮落、及び之より生ずる一切の結果亦然り。然れ共此學派は良で宿命論と同一觀すべからず、何となれば宿命論は一切の出來事を以て盲目的運命と同一說す可からざれば也。

三　諸罪の事業に於る神の仁愛、正義及び惡憎　正義と仁愛とは神の性質の最も重要なる要素にして、神の聖意の基礎たり、又之が品質を決定す。神は其完全なる性質に依りて、無罪なる者に對し仁愛を顯はし、罪人の罪を贖し給ふ。福音書の敎ふる所に依れば、神は罪人と罪とを區別し給ふ。其子の代贖的苦難に依りて、罪ある人も尙彼を信じて義とせらるゝと敎ふるが如し。故に神は同時に正義と仁愛とを行ひ給ふ。罪と律法とに對しては正義、罪人に對しては仁愛なる是也。而して價値なき者に對して仁愛なる、之を惡憎といふ。是れ此學派の此點に關する主張にして、神の仁愛を說かざるに非ざれ共、其最も重を置くは正義と惡憎とも也。

四　アダム墮落の其子孫に及ぼす影響　人の靈魂は其生得の能力及び習得の習慣と共に、意志の機關にして、自ら決定するの性質を有す。而して之をして道德的ならしむるは聖靈の內在に依る。故に意志をして正しからしめんには常に神の助を要す。アダムは其創造せらるゝに方りては神との交通、心の聖さ傾向及び罪を犯さゞるに充分の力を有したりき。而して又之と同時に其短き試期中罪を犯し得べき力をも與へられたりき。而して其一たび罪を犯すや聖靈は人類より離れ去り、彼と其子孫とは罪を犯すべき者となりたり。換言すれば人は道德上全然無能となりたり。然れ共此神學說は哲學上の必然說と混淆すべからず。此學派の所謂『意志の束縛』抔云へる言は、墮落せる人類の窮敝せる傾向にのみ適用すべき者にして、此傾向を良で宿命論と同一觀すべからず、何となれば完全なる光にして且愛なる人格的神の聖意は盲目的運命と同一說す可からざれば也。

三　諸罪の事業に於る神の仁愛、正義及び惡憎　正義と仁愛とは神の性質の最も重要なる要素にして、神の聖意の基礎たり、又之が品質を決定す。神は其完全なる性質に依りて、無罪なる者に對し仁愛を顯はし、罪人の罪を贖し給ふ。福音書の敎ふる所に依れば、神は罪人と罪とを區別し給ふ。其子の代贖的苦難に依りて、罪ある人も尙彼を信じて義とせらるゝと敎ふるが如し。故に神は同時に正義と仁愛とを行ひ給ふ。罪と律法とに對しては正義、罪人に對しては仁愛なる是也。而して價値なき者に對して仁愛なる、之を惡憎といふ。是れ此學派の此點に關する主張にして、神の仁愛を說かざるに非ざれ共、其最も重を置くは正義と惡憎とも也。

四　アダム墮落の其子孫に及ぼす影響　人の靈魂は其生得の能力及び習得の習慣と共に、意志の機關にして、自ら決定するの性質を有す。而して之をして道德的ならしむるは聖靈の內在に依る。故に意志をして正しからしめんには常に神の助を要す。アダムは其創造せらるゝに方りては神との交通、心の聖さ傾向及び罪を犯さゞるに充分の力を有したりき。而して又之と同時に其短き試期中罪を犯し得べき力をも與へられたりき。而して其一たび罪を犯すや聖靈は人類より離れ去り、彼と其子孫とは罪を犯すべき者となりたり。換言すれば人は道德上全然無能となりたり。然れ共此神學說は哲學上の必然說と混淆すべからず。此學派の所謂『意志の束縛』抔云へる言は、墮落せる人類の窮敝せる傾向にのみ適用すべき者にして、此傾向

は上より新なる力を與へらるゝことに依りて又更に變化せらるべき者也。而して此學派は之と同時に人は凡ての道德的動作を爲すに方りて自ら決定するの自由を有することを主張す。故に此學派は刑罰の原因(Original Guilt)に就ては(イ)人の罪はアダムが自由の心より神に背きしに基するが故に、神の怒と咒詛とを受くべき者にして、不易の正義は之が刑罰を要求す。(ロ)アダム既に此の如く罪を犯せるが故に、神は其子孫も亦其罪の刑罰を受くべき者也となし、生命を與ふる交通を之より撤回せり。故に全人類及び各個人は悉く神の義しき賞罰を受くべき者也。故に基督の贖罪は如何なる意義に於ても全然神の恩惠の產物也。神が之を少數の人のために設くるも、多數の人のために設くるも、人類全體のために設くるも、又何人のためにも之を設けざるも皆神の自由也、之を定むるは外物に非ず、全然神の聖意に依れりと云ひ、原罪(Original Sin)に就ては(イ)原くアダム墮落の故に、人は皆其出生以前の罪惡の狀態を以て世に出で來り、道德上聖靈の活力を受くること能はざる者となれり。故に其思想、感情、及び行爲に於て、道德的善に向ふ自發的傾向なき者となれり。(ロ)然れ共道德的責任は積極的にして、靈魂は活動的なるが故に、益々神の事に就きて盲目、無精神となり、益に惡に向て積極的傾向を有するに至る。換言すれば腐くして人の全性質腐敗し、善を爲す意志全く不能となり、益々墮落し、益々罪を受くべき者となるに至る。故に之を全然墮落といふと論ぜり。

五 更生的恩惠の性質及び必要 恩惠は之を受くるに足らざる者に與へらるゝ價なき賜物也。カルヴィン派は『通常の恩惠』と『有力なる召』とを區別す。『通常の恩惠』とは基督の事業の結果として、眞理を通して人の靈魂の上に働く聖靈の道德的感化の謂にして、此恩惠は人の善しき感情を制する力あれ共、人は之を拒むを得べく、實際更生せざる人は常に之を拒みつゝある也。『有力なる召』とは人の道德的品性を變化し、凡て神に服從し得るやう、後與へらるべき恩惠を信力し得べき傾向を靈魂に植え付くる神の働の謂にして、人は此新なる力に依り自發的に基督を信じ神に向ふも、而して此新なる神の力は後常に人の靈魂を支へて善事を爲すを得せしむる也。

六 贖罪事業の適用 預定說はカルヴィン派神學の特色にして、之が適用に二箇の別あり。此派中の一派は神の絕對的性質より推論して、神は創造以前に於て既に人を選び、或者を救ふべく預定し給へりと主張せり、之を『スウプララプサリアン說』と云ふ。然れ共此派中の多數は此說を取らず、神の選擇は創造の後に在り、神は罪科ある多數の人類中より其民を選び擧げて、之が爲めに贖罪の道を開き、彼等の信仰と悔改とに導き、贖くして之を救ふ、故に此を得る條件に非ずして彼等が預定せられたる結果也と論ぜり。神の選擇を以て創造の後に在りとなす說を『インフララプサリアン說』といふ。

【カルヴィン派神學の歷史】 東方の教會はノスチック教に對する反動より、初めより人の自由意志の働を信じ神に向ふも、而して此新なる神の力は後常に人の靈魂を支へて善事を爲すを得せしむる也。

特色にして、之が適用に二箇の別あり。此派中の一派は神の絕對的性質より推論して、神は創造以前に於て既に人を選び、或者を救ふべく預定し給へりと主張せり、之を『スウプララプサリアン說』と云ふ。然れ共此派中の多數は此說を取らず、神の選擇は創造の後に在り、神は罪科ある多數の人類中より其民を選び擧げて、之が爲めに贖罪の道を開き、彼等の信仰と悔改とに導き、贖くして之を救ふ、故に此を得る條件に非ずして彼等が預定せられたる結果也と論ぜり。神の選擇を以て創造の後に在りとなす說を『インフララプサリアン說』といふ。

【カルヴィン派神學の歷史】 東方の教會はノスチック教に對する反動より、初めより人の自由意志の働を信じ神に向ふも、而して此新なる神の力は後常に人の靈魂を支へて善事を爲すを得せしむる也。

六 贖罪事業の適用 預定說はカルヴィン派神學の特色にして、之が適用に二箇の別あり。此派中の一派は神の絕對的性質より推論して、神は創造以前に於て既に人を選び、或者を救ふべく預定し給へりと主張せり、之を『スウプララプサリアン說』と云ふ。然れ共此派中の多數は此說を取らず、神の選擇は創造の後に在り、神は罪科ある多數の人類中より其民を選び擧げて、之が爲めに贖罪の道を開き、彼等の信仰と悔改とに導き、贖くして之を救ふ、故に此を得る條件に非ずして彼等が預定せられたる結果也と論ぜり。神の選擇を以て創造の後に在りとなす說を『インフララプサリアン說』といふ。

【カルヴィン派神學の歷史】 東方の教會はノスチック教に對する反動より、初めより人の自由意志の働を信じ神に向ふも、而して此新なる神の力は後常に人の靈魂を支へて善事を爲すを得せしむる也。

反對したりしはペラギウスにして、彼の說は古代教會の信仰に背けりとの理由を以て、東西兩教會共カルセード(四〇七—四一六)ミレヴ(四一六)エベソ(四三一)の諸會議、及び法王インノーセント幷にゾシムスに依りて禁ぜられたり。後アウガスチンの教義は又半ペラギウス說と職て之に克ち、爾來溫和なるアウガスチンの神學は西歐諸國教會の正統說と認められ、煩瑣哲學者の多數及び宗教改革以前の改革者(ウィックリッフ。ヨッス。ロイヒリン。ストーピッツの如き)は多く其說を奉じたりき。宗教改革は羅馬教會の衰敗に對する反動なると共に、又當時漸次流行しつゝありし半ペラギウス說に對する反動なりき。故にルーテルを初とし、改革家は悉く此學派の神學を奉じ、英、蘇、獨、蘭諸國に於る改革の運動は又カルヴィン派神學の運動なりき。カルヴィンはカルヴィン派神學の創立者に非ざれ共、之を改鑄してプロテスタント教的となし、一大系統を立てゝ之を世に示したるは彼の功にして、彼は之と共に教會政治に於る長老主義、國家に於る共和主義を宣傳したりき。而して彼の神學は彼より漸次ツリングル。タルレッチン。ウィントシウス。ヨハン。オウエン及びウロナサン、エドワルヴに傳はり、又ドルト(一六一八—一九)及びウェストミンステル(一六三八)の會議之を承認し、倚、西、蘭、英、蘇諸國の教會之を受け、獨立教會、浸禮教會及び長老教會之を信奉せり。英國及び米國の監督教會の中には之に關し異說なきに非ざれ共、其創立者の意が此神學を採用するに在りしこと疑なく、其教義は大體に於て同じくカルヴィン派の神學也。尤も此學派の神學が之を信奉する教會及び國々に於て多少改變せられたるは云ふまでもなし。即ち獨逸に於てはメランクトンの始

化に依りて緩和せられ、佛、英、蘇諸國に於てはコックサイアス及びウエストミンステル神學者の提出せる『同盟誓約』に依りて改作せられ、米國に在りては新英州神學者に依りて更に發達せられたり。(『新英州神學』の條を見よ)

カルク エドワルド ノリス Kirk, Edward Norris, D. D. 人名 一八〇二—七四 米國長老教會の牧師。プリンストン神學校を出でアルバニーの第四長老教會の牧師となり、一八三七—四二年には歐洲及米國合衆國内を旅行して外國傳道會社を視察し、四二—七一年ボストンのベルモン山教會牧師たりしが、晩年は全く盲目となりき。彼は福音同盟會の最初の會員の一人たり、又歐洲天主教國教化の熱心なる主唱者なり。

カルクランド サミュエル Kirkland, Samuel 人名 一七四四—一八〇八 米國の人、會衆派の牧師。六個の國民への宣教師として名高し。革命戰爭の時は軍隊附牧師となりしが戰終りて再び印度人へ傳道す。一七九三年ホワイツタウンにハミルトン、オチイダ學校を建つ、是れハミルトン、カレッヂの濫觴なり。

カルケミシ Carchemish. 地名 ヘテ人の首都にして紀元前三四千年商業の中心として知られぬ。舊約には埃及王ネコがユダ王ヨシアを破りし處(代下廿五の廿)後四年(前六〇五)ネコがネブカドネッザルの爲めに敗られたる地也として記さる(耶四十六の二)此市の位置に關しては古來種々の想像說ありしが、近時アッスリヤ碑文研究の結果、ユフラト河の西岸ヤラボルス岡の近傍也と推定せらる。

カルジル ドナルド Cargill, Donald 人名 一六二〇—八一 蘇國契約徒の一首領。アルヴィンにて教育を受け、一六五〇年グラスゴーのパーロニー教會の牧師となる。六一年蘇國監督制嚴行の時、之に從ふを拒みて、大監督より追放を命ぜられしが立ち退かず。七九年カメロン。ドーグラス。ハミルトン等に黨して監督制反對の教徒に加はり、六月二十二日ボスウエル橋の敗軍中に在り、一たび和蘭に脫れしも歸り來り、翌年カメロン及び同志と共に『サンカル宣言』を作る。政府は賞を懸けて彼等の首を求む。七月エアスモスを攻めてカメロン死し、カルヴル首領となり、九月トルウッドの野外演說にて王と貴族とに破門の宣告をなす。ヨルク侯蘇國に來るやカメロン徒を壓迫すること甚だしく、カルヴルも獄り立てられ、八一年六月捕へられて エヂンバラに送らる。彼は斷乎として自ら議會に出頭し自己の罪狀を言ひ放ち、議會は終身禁錮數年と死刑とに分れしが、アルヴル從の投票にて死刑と定まり終に首斬らる。

カールスタット アンドレアス ルドルフス ボーデンスタイン Carlstadt, Andreas Rudolphus Bodenstein 人名 一四八三頃—一五四一 獨逸宗教改革者の一人。フランコニアに生れ、以太利大學に學びたる後、一五〇四年ウイッテンベルヒに來り、一三年同大學教授兼教會の大執事となる。中世學者の學問に精博なりしが、一五年羅馬に旅し、歸りて見れば大學の神學はルーテルのため全然一變し、中世學者は棄てられて聖書とアウグスチヌスとのみ用ひられり。大學の代表者を以て自任し居りし彼の事なれば心甚だ快からず、一たびは抵抗を試みしも其の無益なるを見るや、又其の性質により全く大勢に降り、却て極端に走り神秘者となれり。暫くはルーテルと全然一致して働きしも、エッタとの論爭となり、一九年六月の討論にてエッタの議論に負じたるに由て自己の旗色の動きしと、ルーテルが自己を拔いて大き為を增し世の注目の中心となりしを見、又此に甚しき焦慮煩悶なし、翌年無名の『デカノニキス、スクリプチュリス』に由てルーテルを攻擊したり。彼は固より宗教改革に熱中したりしなれども、唯だ己れ何事にも首位に立たんとの心のために誤られしなり。彼は決してさる器量の人に非ず。ルーテルがヴートブルヒに在りし間はカールスタットは自由に手腕を揮ふを得しも、其の性格突飛なるため、人望なきのみか大學なも會議なも危險に陷らしめたり。二一年のクリスマスの聖餐には懺悔や麵包と酒の聖別や其他一切天主教儀式に屬するものを廢し、二二年一月には非常に派手なる式を以て結婚し、偶像破壞會院廢止等の急激なる改革を行はんと準備し、學生や暴民は司院長等の家を包圍投石するに至り、危くも混亂に陷らんとせり。三月ルーテル同市に歸りて秩序此に回復し、突飛手段抑へられ、而してカールスタットも寬大に待遇せられしにぞ、彼はまたも非常に愧ちて謹ゝ、二三年の春市を去て附近の農村に退き、自ら新平人と稱へ何等野心なき者の如くなりぬ。然れども二三年の末ヂルクミュンデの牧師とせらるゝや、また前の經驗を繰り返し、アルステットのミュンツエルと相並で亂暴なる壓迫の二中心となり、全ツシギアを動かし、二四年サキソニアより追放せらる。ルーテルの仲保に依て二六年歸還を許されしが、嚴重の監督を受け公事に干ることを許されず、著作出版を禁ぜられ、ウンギベル麵包と麥酒とを鬻で生命を繋ぎ居たり。是れ固より高慢なる人の惡び得る事ならず、二八年脫走してホルスタイン、フリースラ

ンド、ライン地方を流浪し、三〇年ストラスブルヒに至れば、正にルーテルとブウインゲリとが聖晩餐に就て議論中なり。彼は勿論ブウインゲリに贊せしかば、ストラスブルヒ及びチューリヒにては厚遇せられ、人々は彼のため何事かなし與へんと欲したり。三一年ライン谷のアルトスッテンの牧師となり、三四年パーセルの神學教授となられしが同地にて疫病のために死せり。

カルステールス ウィリアム Carstares, William (or Carstairs). 人名 一六四九—一七一五 蘇格蘭の牧師又政治的首領。父ヨン、カルステールスは幡端なる契約徒に屬す。ウィリアムはエヂンバラにて學びし後、ウトレヒト大學に行き、ウィリアム三世と知りしが、此の友交や其他の事にてチャールス二世の政府に疑はれ、一六七四年英國に上陸するや否や捕へられて塔獄に入れられ、翌年エヂンバラに移され、七九年迄在獄す。後愛蘭に行きて非國教會の牧師となり、八二年また和蘭に行き、翌年倫敦に歸りしが、モンマス侵攻の擁立に加はり、八三年七月露見して蘇國議會より審査せられ、嚴しく拷問せられしも實を吐げず、王は終に彼を免す。和蘭に歸れば、オレンジ公ウィリアム喜び彼を迎へ宮廷牧師となす。ウィリアム英國王となるや、彼を蘇國宮廷牧師となす。彼は其の教會に關する廣き見解と學問とを以て王に事へ、蘇國長老派を新創に包容し終り、アーン及びジョルジ一世の朝にも亦よく事へ、エヂンバラ大學總理、聖ヂャイルズ教會の牧師なも兼ねて歴任せり。總會議には四たび議長に選ばる。

カルセージ Carthage. 地名 北亞米利加ナュニス市の近傍に在りし古代有名の市。屢々宗教會議の開かれたる處にして、其中二の會議最も重要也。其一は四一一年羅馬皇帝の命に依り三日間開かれたる者にして、其目的ドナチス派の誤謬を破り、之をして教會と調和せしめんとするに在りき。此會議に列席せる者正統教會の監督二百八十九人、ドナチス派の監督二百七十九人、アウガスチンは前者を代表し、パサリアンは後者を代表せり。アウガスチンはドナチス派の說を駁して教會の一致を主張したりしが、ドナチス派の徒斷然正統教會に復歸するを拒みしが故に、此會議は遂に其目的を達することを得ざりき。其二は四一二年カルセージの監督アウレリアスの召集したる會議にして、ミランのパウリナス出でゝペラギウス說を駁し、ペラギウス說は此會議に於て初めて異端として禁ぜられたりき。

カルケドンの大會議 Council of Chalcedon. 事蹟 カルケドンはコンスタンチノープルの對岸ボスホラス河畔に在り。四五一年マルシアヌス帝の召集に依り、此處に第四回の宗教大會議を開く。出席せる監督五百三十名（多くは東方の教會より來れり）法王レオ一世の代員及び皇帝の遣はせる委員亦臨席せり。會議は十月八日に初まり、同卅一日を以て終る。議決の重なる者は、ユーテケスの異說の禁制と、正統教會信仰條條の決定とにして、其決定せる信仰箇條は左の如し。曰く『我等が信ずる主耶蘇基督は、神性に於ても亦人性に於ても完全にして、即ち眞の神たり、又靈魂と肉體とを有する眞の人也、而して神性を以ては天父と同質、人性を以ては吾人と同質にして、即を除く外は凡ての事に於て我等と同一の者也。即ち神性を以ては吾人を救はんために神の母マリアより生れし者也。又獨一の主なる基督は二箇の性質を有する者にして、此二箇の性質は相互に混雜を來すことなく、獨一の基督は此二箇の性質を有する者也』。

カルタイゼン ハインリヒ Kalteisen, Heinrich 人名 獨逸の僧。コプレンタのドミニコ派僧庵にて教育せられ、維納及びケルンにて學び、一四五二年トロンイエムの監督となる。一四三三年バーセルにてフッス派と討論し、三日に亘りたるにて名を得たり。

カルダーウッド デヴィッド Calderwood, David 人名 一五七五—一六五〇 蘇格蘭教會の歴史家。一五九三年エヂンバラにてマスターの學位を得、一六〇四年クレーリンゲの牧師となり、ヨエームス王が蘇國に監督制度を布かんとするに反對す。一七年ヨエームス蘇國に行きし時王に不忠順の行爲ありて獄に投ぜられ、有力なる人々の仲介ありしも赦されず、終に自ら國外に立退くべきを約して免され、一九年和蘭に行き其の跡を晦まし生死も不明となり、二二年には『カルダーウッドの改說』と稱する揑造の書まで出でしが、彼は此時既に蘇格蘭に在りて其の教會史の著述に從ひ居たるが如し。二四年蘇國ペンケートランドの牧師となられ、再び有名となる。四八年の總會は蘇貨八百磅の年金を給して、彼に其の蘇國教會史を大成せしむることを決議せしが、同書未だ成らざるに先だちて死せり。其の原稿に長く印刷に上らざるまゝ殘りしが、一八四二年より四九年までにエヂンバラにて出版せられたり。其外小さき『蘇國教會眞歴史』あり『ダマスコの祭壇』あり。歴史は勤勉忠實を以て材料を集めあれば史材として大なる價値あり。

カルダーウッド ヘンリー Calderwood,

Henry 人名 一八二九—一九七 蘇格蘭の哲學者。一八五六年聯合長老派教師の按手禮を受け、一八六八年エヂンバラ大學の道德哲學教授となる。其重なる著作は『無限者の哲學』『道德哲學入門』『心意と腦髓との關係』『進化論と自然に於る人の地位』等也。

カルツジアン派 Carthusians. 僧派名 一〇八六年聖ブルーノの創設せる僧派にして、斷食、祈禱、讀書、勞働及び沈默を守るを以て其特色となす。紀十八世紀は其最も盛大を極めたる時にして、當時百七十二箇の僧舍あり。其中七十五箇は佛國に在りしが、革命の時諸く破壞せらる。以太利、西班牙、瑞西其他の諸國に於ては之を寛容し、今日尙其存在せるを見る。

カルディ ゲオルグ Kaldi, Georg 人名 一五七〇—一六三四 匈牙利の僧。イエスイト派に入りオルミュッにて神學を教へしが、後プレスブルグの學院の長となる。聖書を匈牙利語に譯し（一六二六）改革派のカスオル、カロリーの譯（一五八九）と對立せしめたり。

カルディース Culdees. 僧派名 第九世紀より第十二世紀頃まで、愛爾及び蘇格蘭に存在せし宗教的團體の名にして、其起源に關しては、久しく論爭せられたりしが、過去五十年間に於て此問題は略ぼ一定せり。七四七年メッツの監督聖クロデイオンジア（St. Chrodiguang）による者、其頃迄寺院誓約なき守して通常の信徒と略ぼ同一の生活を爲したる僧侶のために、規約を設けたりしが、此規約は後修正せられ且其範圍を擴めて隱遁者をも含蓄することゝなれり。此新規約八世紀の終りに愛爾に輸入せられ、爰ならずして隱遁者及び寺院に屬せざる僧侶之を採用したりしが、此人々の團體を稱してカルディースと云へり。然れ共愛爾にてはカルディースは終に重要なる地位を占むるに至らず。彼等の修道院は多くは單に通常寺院の附屬物に過ぎざりき。蘇格蘭に於ては國王チャルメン羅馬に退き（七一七）續倒國外に放逐せられたりし時、カルディースの徒愛爾より到着したりしかば、彼等に戰爭者なくして弘布するの便を有したりき。女王マルガレット蘇國教會の再組織を開始し、其子デービッド王之を完成せしが、此時カルディースは通常の修道院となり、又僧派となるに至れり。カルディースなる語は尙暫らく使用せられたりしが、後修道院と同一の意義を有するに至れり。カルディースの寺院には各々寺院長なる者ありて之を支配せり。而して其富める者は富のために漸次虐敗し、其貧しき者は無學と迷信とに陷れり。彼等は尙引續きて隱遁者、僧侶相混突し寺院に生活したりしが、僧侶の中には惰怠する者あり、其規約は當時英國の僧侶の守れる規約より嚴なる者には非ざりき。

カルディナル Cardinal. 職名 羅馬教會最高僧官にして、法王の次に位す。法王の內閣を作りて之を輔佐し、法王死する時は秘密會議を開き、て其相續者を選定す。通常彼等の中より擇ぶるを例とす。而して相續者の決定するまではカルディナル會教會の事務を總管す。カルディナルの數は初め一定せざりしが、法王シックスタス五世の時以色列七十人の長老に倣ふて七十人と定め、六人をカルディナル、ビショップとし、五十人をカルディナル、プリーストとし、十四人をカルディナル、ディーコンとす。然れ共此數に充つること甚だ稀也。カルディナルを任命するは全く法王の權內に在り。其候補者

となる者は監督と同じく、正當の婚姻に依て生れたる者ならざる可らず、少くとも一年前下級の僧侶たる按手禮を受けたる者ならざる可らず、子孫を有する者なる可らず。法王は各國民の中よりカルディナルを任命せざる可らずと雖も、通常其過半は以太利人の中より擧げらるゝを例とす。以太利人以外より擧げらるゝ者を protectors と名く。カルディナルの有する特權は法王に選擧せらるゝを得ることゝ、法王を選擧すること、及び懸案する總を有する赤帽を蒙り、紫衣を纒ふを得ること是也。彼等は二週間毎に會議を開き、法王之に臨席して之が議長となる。詳細の事件は更に部門を分ちて各別に集會を開き、各々特別の問題を研究す。

カルデヤ Chaldaea. 地名 (一)土地 舊約にカルデヤ人の地と稱するは、通常巴比倫なる語の中に含める地を總括す。デリッチはカスダ（Kasdu）後カッス（Kassi）といへる巴比倫の名は『カスの領地』（ヲ）は領地の義）といへる義にして、カス（Kas）は紀元前十三世紀以前中央巴比倫に勢力を有せし民也との說を主張せり。カルダの地は紀元前千年以後數百年間巴比倫の東南に位し、ビトヤキン及び被斯灣頭に迄達せり。思ふに西は亞剌比亞沙漠に達したりしならん。ラムマンニラリ三世の碑に依れば、カルデは巴比倫全地の總稱也。センナケリブは一方に亞剌比亞人、アルメニヤ人を置き、他方に『カルデヤの民』を置きて之を區別せり。アッスリヤの衰へ新巴比倫の起るに及び、カルダなる語は、北及び南巴比倫并に他の數種族の占有せる附近の地を含有せり。後世のカルデヤは長凡そ四百哩、幅平均百哩に渉れり。此名の起源は明ならず。

(二)人民 カルデヤ人（Chaldaeans）の起源は明なら

す。彼等が何時何處より下巴比倫に來りしやも亦明ならず。巴比倫に於けるカルデヤ人の先驅はカスダ也との說もあれ共(前項アリッチの說參照)もし此說にして眞也とすれば此低地には此時代に既に混合民族ありしと假定せざるを得ざることなれ共、カルデヤ人はセミチック人種たる特質甚だ著し。彼等は彼頹褥より北の方巴比倫に向て突進し、數百年間アッスリヤと爭へり。彼等は元來牧畜及び農業を營み市生活を輕蔑したりしが、下巴比倫の文明人と接觸するに及びて自重の念を養ひ、市府を建て、更に北方に向て其所領を擴張せり。

(三)言語　カルデヤ人の言語は巴比倫楔形文字にして、文字、文法共に大抵、アッスリヤ語と同じ。

(四)賢人　但一の四其他に『カルデヤ人』なる語を占星學者、天文學者の意義に使用せり。蓋しカルデヤは早くより占星學、天文學に關する知識の中心なりしがためなるべし。

カルトライト　トマス　Cartwright, Thomas　人名　一五三三—一六〇三　英國長老派の勇士。劍橋を出で聖約翰カレッヂ及びトリニチー、カレッヂのフェローとなり、バチェロル號を得、一五六九年マーガレット講座神學教授となり、使徒行傳を講義して淸教徒的見解を明かにし、大に人望を得しも、博士ホウイトギフトをはじめ高等教職等の反對ありて、其より長き間益々激しくなり行きし英國教會内の長老派及び高僧派の分爭の基を作れり。淸教徒側の主張としてカートライトが自ら示せし所は、大監督大執事の名を廢し、監督及執事の執務は使徒時代に在りし範圍に復し、監督は神の言を說教し、執事は貧者を顧みるに限ることゝし、教會の行政は監督の下僚たる大執事に委せず、各教會その教師と長老とにて統治せらるべく、又教師團體が牧會の責任を負はず、教師一人々々各自の會衆を牧することゝし、何人も教職候補に人を薦めず、自ら立つを許さず、教職は人民に由て公平に、又公然と選擧せらるべしと云ふにあり。七〇年之に由て教授並にフェローの地位を奪はれ、大陸に周遊し、ジェネヴァに行きてベザ等改革派の首領と會ひ、七二年友人の勸に由て歸國す。友人ジョン、フィールドとトマス、ウィルコックスとは彼の著作『教會制度の改革に就て議會への諫言』を公にせしに、二人は之に由て獄に投ぜられしかば、カートライトは更に『第二の諫言』を出しホウイトギフトの『答駁』あり。七三年カートライトはまた書を作りて之を反駁し、ホウイトギフト七四年にまた二つの書を出して高僧主義を辯護す。其の年十二月カートライト捕縛令下り、彼は大陸に脫れアントワルプとミッドルブルフの英國人信徒の牧師となり、其所より七六年ウエルシー及びゲルンセー諸島に行きて、淸教徒と共に自己等の教會制度を立てしことあり。七五年と七七年にはまたホウイトギフトの說を駁するの書を公にし、七四年にはウイリアム、トレーヴァースの拉丁語の書を『教會制度の充分且つ明白なる宣明』と題して英譯し、益々敵の憎惡を刺激したり。八二年蘇國聖アンドリウス市神學教授に招かれしも之を辭し、八三年淸教徒の諸友に勸められてレーン語譯聖書を否定する著作に從事す。されど其の結果は英國教會有權者に妨げられて長く公にせられず、死める前年『レーン語譯聖書序言に對する答』現はれ『レーン語譯聖書の否定』は一六一八年に至て始めて公にせられたり。一五八五年友人たるレーセスター伯及び大藏卿アルレーの保護にて英國に歸りしが、監督エールマーのために捕へられ獄に下され、三ヶ月にして勢力ある友人の力に由て免され、レーセスター伯より其の立てたるワーウィク病院長に任ぜられ、敵の甲斐なき反對の間に『諫言』及び『傳道之書』に就て著作す。此等は死後出版せられたり。斯かる間に教會の爭は日一日と激しくなり、淸教徒は急速に增加し、七二年最初の長老會ワンヅウォルスにて組織せられ、全英國中長老團秘密の中に續生し、八三年『制度書』カートライト及びウォルター、トレーヴァース共編にて出來、倫敦が鋸橋にて開かれたる總會にて之を採用すべく決議し、八四年倫敦大會にて修正し、諸會に配り、其より諸方にて採用せられ、九〇年には之に記名せし教師五百人に上れり。監督派は大に驚き、首領等をば捕へ制度書をば及ぶ限り破棄せり。されど尙殘本ありて後一六四四年倫敦國會より發行せらる。長老派と高僧派の爭激しかりし時に、又ブラウン派の現出とマーチンの高僧懲罰小冊子發行とあり。カートライトは前者に對しては其の分離主義を攻め、後者に對しては其の惡意を咎めしが、高僧派は故らに此等の不名譽なる黨派と淸教徒とを同一視し、九〇年カートライトを高等委員會に召喚し、フリート街の獄に投じ、同人みな初に三十一個條、後に三十四個條の罪に問はる。カートライトはエドマンドスネープ其他と星の間會議に召喚されしが、有力なる友人等の運動に由て、九二年健康を損ひたるまゝ靜息し居るべき約束にて出獄を許され、ゲルンセー島と其の愛する病院とに在て餘生を靜養せしが、サトクリッフといふ人小冊子にて激烈に彼を攻擊せし時、又書を著はして之に答へたり。カートライトは英國長老派の勇士にして、又淸教徒主義を廣く深く立てたる人として長く忘るべからざる人物なり。著書は以上に舉げしもの丶外尙數多あり。

カルバリー　Calvary.　『ゴルゴダ』の條を見よ。

カルペンタル　メリー　Carpenter, Mary　人名　一八〇七—七七　英國の女流博愛家。ラント、カルペンタルの女、父の教育を受く。一八三三年印度人の改革者ラモフン、ロイより刺激を受けて犯罪者改良を志し、墨少女感化學校設立を企て、五四年の議會にてブリストル裁判所長マシウ、デヴエンポルト、ヒルの助を得て其の案の通過を見たり。五七年に通過せる工業學校條例も亦メリーの唱道にかゝる所多し。彼は又印度の改善を熱望して四たび自ら之を訪ひ、其の報告を議會に提出し、七一年國民的印度協會を立て、雜誌を發行せり。此等の高潔無私なる生活は全く其の敬神の念より來るものなり。彼は又其の企つる目的のため多くの著作報告をなせり。此外『朝夕の靜思』『印度の六ヶ月』等あり。

カルペンタル　ラント　Carpenter, Lant, LL.D.　人名　一七八〇—一八〇C　英國のユニテリアン神學者又著作者。初め非國教會牧師たらんとせしが遂にユニテリアン派に入り、一八〇五—一七年エキセタル教會の教師、一七—三九年ブリストルの教師たり。以太利ナポリとレグホルンの間にて溺死す。著書多く『新約地理總論』『ユニテリアン主義即ち福音書の教義』『メジー監督がユニテリアン及び改眞譯に試みたる攻擊の研究』『福音書の一致』『實際問題に關する說教』等あり。其子博士ダブリウ、ビー、カーペンタルは有名なる生理學者なり。其女メリーは又有名なる博愛家なり。

カルポクラテス派　Carpocratians.　學派名　第二世紀の初め埃及亞歷山に起りたるノスチック教の一派。カルポクラテス(Carpocrates)の創唱せし篤にして、其教義は萬有神說也。

カルメー　アウギュスチン　Calmet, Augustine　人名　一六七二—一七五七　佛蘭西の僧。ツール教領メンシルラホルグに生れベネディクト派の僧たり、一七一八年ナンシーの聖レオポルの庵長、二八年セモン庵長となる。著述甚だ多し。『聖書字引』は最も有名にして英譯あり。

カルメル　Carmel.　地名　(一)パレスチナの邑の名。ヘブロンの東南十哩ユダに在り。今のカルマル(kurmul)の地。(二)パレスチナの山の名。西北方に在る長き小山にして、西、地中海に達す。今エベル、マル、エリア(Jebel Mar Elyas)と稱す。カルメル山は聖地として有名なる地にして、イスラエルの預言者エリヤがバアル神の祭司と論じて之に勝ちたりしは即ち此山也(王上十八の十七以下)ドルウセ人(Druses)も亦此地を聖地となせり。羅馬時代に至りては此地は神託の出づる地として知られ、ヴエスパジアンは帝位に即くべしとの神託を祭司より受けたりしと傳へらる。カルメル派が此山上に僧舍を建立せしことに就ては次の條を見よ。山下ハイフアには獨逸の殖民地ありて葡萄の耕作に從事す。

カルメル派　Carmelites.　僧派名　一一五六年以太利の僧ベルトルド(Berthold)が、パレスチナのカルメル山上に創設せし僧派。然るに之を以て預言者エリヤの時以來カルメル山上に隱者的生活を送りたる聖者の系統也と信ずる者ありて激烈なる爭論あり、一六九八年僅に法王の諭勅を以て之を抑止せり。一二三八年カルメル派の人々はカルメル山を去りて歐羅巴各國に移住し、爾後其禁慾的規約著しく變化し、殊にユウゲニウス四世の時(一四三一)に至りては、彼等は遂に托鉢僧と變ずるに至れり。且之と同時に彼等は大に隆盛を極め、僧院解散の當時英國のみにても、五十二箇の僧舍を數ふるに至れり。一五六二—一五年西班牙に於ては聖テレサ一大改革を施せり。今日英國は七箇、愛蘭は八箇のカルメル派僧舍を有す。西班牙には更に多くの僧舍あり。

カルロス五世　Charles V.(英語チャールス、獨逸語カルル、佛語シャール)　人名　一五〇〇—五八　西班牙王、日耳曼帝國皇帝。伯耳義のゲントに生る。墺太利の大侯フィリプとアラゴニアのヨアンナとの間の子。フランダルスにて銳敏なる政治家ウイリアム、ド、クロイとウトレヒトのアドリアン(後の法王)との教育を受け、一五一七年母方の祖父たる西班牙のフェルディナンドの位を繼ぎ、シチリア、ナポリ、サルデニア及び新に發見せし亞米利加に併せて王たり。一九年更に父方の祖父マキシミリアンの位を繼で獨逸、墺太利、バルガンデアの帝たり。同年日耳曼皇帝に選ばる。世界統一を夢みて三十六年間の戰爭をなし、有らゆる苦辛を嘗れしも、到底其の望の達すべくもあらぬを見、衆怨を身に集めて終に安息を求め、五六年位を讓り、西班牙及びネテルランドは子フィリプ二世、墺太利及び日耳曼の帝位は兄弟フェルデナンドに之を繼ぎ、彼は隱者となりて西班牙エストラマデュラの聖ユステ僧院に退きしが、而も大食を事とし間もなく死せり。カルロス五世は新教の壓抑者として何人にも知らるゝ者なるが、其のフランダルスにて實行し、獨逸にても試みんとしたる殘酷なる手段は、其の壓制者的天性のために色どられたる政略に外ならず。彼は何物にも意を專らにする人に非ず。天主教に就ての熱心のために行動せしに非ず、唯だ

抱きしはシャールマン帝國の再興といふ事のみ。而して此の目的を遂行するため、佛蘭西のフランソア一世と衝突するや、彼は凡てを犧牲にしても之を遂げんとし、衆國一致のために新教徒を根絶せざるべからずと信じたる也。若し大勢之に反し居りしならば、彼は少しの躊躇もなく法王を犧牲にしたるや疑なし。

ウォルムス議會を召集してルーテルを罪せしは、彼が帝位に即きし翌年なりしが、間もなくフランソア一世との戰爭起り、之がため二六年のスピーレス議會にては、寛逸の宗教分爭を放棄して各州の爲すに任すと決せり。然るに二九年の第二スピーレス議會の時は小康なりしため、天主教徒等の請により新教の發達を禁ずるの布令を發せり。新教公侯は之に抗議せしも、カルロスは此に其の壓制者たる天性を暴露し、銀くまで新教を壓迫せんとせしが、寃も土耳其人の寇ありて道害甚しからずして已みぬ。されどアウグスブルヒ議會にては、全く天主教主義を容れ、三〇年十一月十九日の布令にて新教の骨白を罪し、無條件の服從を要求せり。然るに新教徒は翌年二月二十七日スマルカルド盟約を造りて之に對し、一方にはソリマンあり、一方にはフランソアありてカルロスに迫らんとせしかば、終に三二年七月二十三日ヌレンベルヒにて休戰條約を結び、其心の自由を許せり。去れど寛逸にて新旨爾教の爭は尚ほ起らで已むべからざりしが、四五年ミュルベルヒ戰爭にて新教徒大打擊を受けし後は、彼は却て新教徒を寛待したり。ウィッテンベルヒ入城の時は、新教禮拜一時中止せしも、彼は命じて之を再興せしめぬ。宗教分爭の早く止みて、教會の一致せんことは彼の願となりしなり。斯かる中にフランソア死し、ヘンリー八世とた死し、土耳其人も沈睡せり。然るに法王は會議をトレントよりボロニヤに移し、凡ての點に於てカルロスに不服なるを示せしかば、カルロスは議に新教徒に對し如き憎惡を以て法王に對し、此度は新教徒と結ばんとせり。されど此は彼の能力の及ぶ能はざりし所なり。間もなくサキソニア侯モリツはインスブルヒにて彼を覆へし、五二年八月二日の パッサウ條約にて彼に迫りて宗教の全然たる自由を許さしめたり。サン、ユステ院の晩年に彼の愚ひし所は教會の一致の一事のみなりしが、漸くにして彼は時代の勢を見るに迂なりしため方針を誤りたることを覺りたるならん。

カレブ Caleb.

人名 舊約聖書中の人物、カナンの地を偵察せんためモーセ(紀元前一四〇〇)エホバ古典に依れば、彼はたる一人也(民十三、十四)エホバ古典に依れば、彼はカナン人は強くして敵し難しと復命せる他の偵察者の說に反對せる唯一の人なれ共(民十四の廿四)祭司典に依れば、ヨシュアも亦偵察隊の一人にして、彼と共に使命に忠實にして、二人共に約束の地に入るべしとの約束を得たり(民十四の卅)彼れ八十五歳にしてヨシュアより約束の地を與へられ、ヘブロン及び其附近の山地を得たり。カレブの名は又カレブ人(Calebites)の祖先の名として用ゐらる。然るに此カレブ人を母上廿五の三及び三十の十四にはユダ族と別種の者として記され共、代上二の四、五、九、十八、四十二にはカレブ人の祖先を族長ユダに忍凋らせたり。而して民卅二の十二、書十四の六、十四にはカレブをケナズ人の子となせり。此等の記事を總合するにカレブ人は其本族レナズ人より分れ、南ユダ族と結合し、其中の一種なりしが結び、後遂にユダ族と結合し、其中の一種なりしが如く思はるゝに至りし者なるべし。

カレンダル ブレズレン Calendar Brethren.

結社名 第十三世紀頃サキソニヤに起り、後獨逸の北部及び中部、ハンガリヤ及び佛蘭西に擴がれり。毎月初日(カレンダ)に會會せるより此名を得たり。病人の世話、會員中死亡者葬儀の斡旋其他慈善事業に其主力を注ぎたりしが、寄附金、遺産等に依りて其資力充滿するに及び漸次虐殺し、第十六世紀宗教改革の時始ど絶滅せられたり。

姦淫 Adultery.

術語 有夫の婦人と不義の交を爲すの義にして、古代に在ては單に之を宗教の立脚地より考察し、神に對する罪也と爲せしが、文化の進むに從ひ、漸次之を社會的方面より觀察し、社會に對する罪惡也となすに至り、後又法律上の罪惡と見做され、國家の法律を以て之を處罰し、依て以て之を防止せんとしたりき。是れ希伯來民族、羅馬民族、日耳曼民族の共に取りたる過程也とす。

希伯來人が古昔姦淫を單に宗教的方面よりのみ觀察したりしことは、斯る疑を受けたる婦人ある時、苦水を用ゐて之を吟味したることありしと(民五の十一—廿一)舊約には屢々偶像禮拜を示す表象として、姦淫なる語を使用するとに依りて之を知るべし(耶三の八、九、結十六の卅二等)然れ共モーセの律法の立脚點は宗教的なるよりも寧ろ社會的也。其律法に從へば、姦淫は社會に對する罪惡、婚姻制度(妻は夫の所有也と云へる)及び相續法(血統を亂すことに依りて)に違反する者として、死を以て之を罰し(申廿二の廿二)姦夫姦婦共に之を石にて撲ち殺したり(申廿二の廿二)然れ共姦婦の社會的位置異り、從て其罪惡異る時は、刑罰も亦異れり。即ち姦婦もし奴隸なれば單に之を革の鞭にて撻つに過ぎず。此の如く宗教的方面よりの觀察は全くなくなり、單に社會的立脚點よりのみの觀察となれり。而して實際の行爲は更に一歩を進め、初め姦夫は姦婦よりも重く罰せられしものが、後姦婦のみ罰せらるゝことゝなり、後又姦淫を以て犯罪となすの觀念さへ消失して、單に之を以て損害と見做し、離婚に依りて其受けたる損害を賠償し得べしと考ふるに至れり。斯くて基督の時代に至りては、離婚は富太人の中に在りて普通に行はれ、初めて基督教の羅馬に入りし時、羅馬も同樣の狀態なりしが、後基督教が羅馬の國教となるに及びて大なる變化を生じたりき。

基督は姦淫を以て離婚の正當なる理由となし(太五の卅二)且婚人を見て色情を起す者は心既に姦淫したる也となして之を罪せり(太五の廿七—卅二)新約聖書には姦淫及び離婚の問題に關して云ふ處少く、男女共に潔行を重ずべしとのことを說けるのみ。然れ共基督教は之を以て宗教的、殊に基督教的立脚地より觀察し、之を以て神に對する罪惡也となせり。羅馬帝コンスタンチンは之を以て製潰罪となし死を以て之を罰し、勅代教會の法律も亦同樣の見解を取りたりき。アンシラの宗教會議に於ては(三四四)姦淫を犯せる者の聖晩餐式に與る禁じ、ネルレアンの第六宗教會議に於ては、姦淫を犯せる教師の職を罷ざ終身之を僧院に幽閉せり。現今新教に在りては、之を犯せる者を教會より放逐するを例とす。又新教の教師は姦淫の故を以て離婚せられ、他に再婚せんとする者の婚姻式を執行するを拒むの風あり。

韓國 Korea.

地名 韓國又朝鮮といふ。朝鮮の名は太古箕子徳氏の時に於て之を稱せしも、其後國號屢々變ぜしが、近世李氏の王業を創するに及び、又朝鮮の舊號を用ゐたり。故に前者を古代朝鮮と云ひ、後者を近世朝鮮となす。李氏の國を開きしは一三九二年(我が足利義滿の時代)にして、それより以後凡五百餘年間朝鮮を稱し、一八九七年(我が明治廿年)即ち今の太皇帝光武元年に至り國號を改めて韓國と稱し、王號を廢して皇帝と稱す。此國全般の歴史を論ずるは素より此書の目的に非ず。唯左に此國に於ける基督教傳道史の梗概を叙するのみ。

【羅馬教】 羅馬教の韓國に傳はりたる初は詳ならず。我文祿元年(一五九二)日本の侵入の時我軍中多くの基督信者ありて之を韓人に傳へ、翌年羅馬教宣教師セスペデス亦初めて來邦せりとの說あれ共、當時基督教は未だ韓國に傳播せしとは見えず。後第十八世紀の中頃に至り北京にて發行せる基督教の書類漢書に混じて韓國に傳はりしが、丁若鏞及び李蘗實李惡實兄弟等當世の名儒を以て之を讀み、祖先傳來の教義と比較して其教旨の適に深遠なる者あるを喜び、深く之を尊信し、密に其書を國王に上りしことあり。斯くて此教は搖根固を中心として奉安郡に傳播し遂に全羅道に及び漸く盛大を極めしが、政府は此教が祖先禮拜を禁ずるの故を以て正祖八年(一七八四)之を禁じ、前の三人を絶島に流し其他の盡疑者を罰せしが、教徒は甚だ熱心にして依然布教を繼續せり。當時行はれし基督教の書類は多く支那より傳來せしものなりしを以て十年(一七八六)には大司憲金履素の言を容れて、燕京に使する者の書を購ひ歸ることを禁じ、十五年(一七九一)には更に其禁を嚴にし、明末清初の文集及び神官雜記より經書史記に至る迄燕京より持ち來ることを勿らしめ、且令を下して『齊之以刑、不知道之以德、予將大其書而人其人、會京外家藏二四洋書者、自首千官、聚且火之、凡爲邪術者、且刑以論、朋黨惑化』と云へり。而して朴承遍の如きは其書を購ひ來りて人を教誘せしを以て誅せられたりき。斯くて政府は凡そ二年の間間斷なく教徒を道害せしが、後其禁漸く弛み其結果再び教徒の增加を見るに至り、加後の十年間には外國宣教師の傳道なくして尙增加したる教徒四千人に上りたりしといふ。斯くて純祖元年(一八〇一)に至り其教次第に盛衰せしを以て政府は又大に搖蕩を行ひ、捕縛拷問、流竄、殺戮に遭ふ者續々として顯れたり。時に於て嗣永(アレキサンドル、リン)と稱する者あり、深く基督教を信じ、燕國蘇州の人周文謨が使命に從て潛に來りしを迎へ入れて男女を教誘せしが、文謨の誅せらるゝに及びて嗣永は機を知りて亡命し、書を歐洲羅馬教國政府に寄せ、六七萬の兵を送りて朝鮮を占略せんことを請ひしかば、大逆の律に照されて誅せられたり。後廿五年を經て又基督教の道害起り、極めて短時日の間に教徒の總に就きたる者五百人以上に達し、而して其多くは拷問の苦獄に投ぜられ、又は絶島に流されたり。

歐洲宣教師の入國 此時迄は此教有力者の間に行はれしかども、單に支那との關係に止まりしが、漸く歐洲人と氣脈を通じ遂に直接關係に移らんとするの端緒を開きたり。即ち憲宗の初佛國イエスイト派の宣教師モーバンなる者滿洲に於て巡回布教しつゝありしが、韓國基督教徒中の道案内を利用し其助を得許多の障害と危險とを犯し、遂に一八三六年の初め韓國領内に入ることを得たり。續てシャスタン、ブンベル來り、寓に京城に入りて宣教に從事し、京畿道、忠清道にも其教旨を傳へ、且朝鮮の少年三人を澳門に留學せしめ、信徒漸く增加して九十人の多きに達せり。蓋し王の初めには甚しく教徒を虐遇することあ

らざりしが、趙寅永等が權を恣にするに及びて深く之を憎み、五年(一九三九)七月新に嚴令を下し、男女老幼に拘らず悉く教徒を捕縛し之を勦絶せんとせり。此時教徒は外國宣教師三人を隠匿したりしが、三人の宣教師は政府の之を求めんがため教徒數人を拷問して其所在を告げんことを屈れるを聞き、自ら縛に就きて教徒追放の事を免めんことを請へりしに、政府は彼等三人を殺したるのみならず、尚教徒の追放を繼續し　此時凡そ百三十餘人を虐殺せり。當時の斥邪論旨の中に『今亟辛酉(純祖元年)四十年所、禁網疎疎、邪教又盛　鳥獸蜂起、損秀島嶼、逆黨雖出沒、秋譯貨貨而交通、濤客洋人、至再至三、而聲氣接於異域、脉絡遍於同騷、比諸辛酉、殆有浮島』とあり、又『嗚呼此者爲先朝正大之教、則何必潛授於昏夜密室之中、遭髮於深山究谷之間、而蔚種潮翠失志愚國之後、下濺千愚財傳淫之輩、五倫教友、各設邪職、藏頭隱尾、打成一片也哉、即此形跡、已列其罪狀、而究竟計、不出於黃巾白蓮之包藏耳』とあり。亦以て當時傳道の狀態を知るべし。

其後の布教　後逸禁は從容嚴にして宣教師は容易に內地に入ることを能はざりしと雖も、千辛萬苦を犯して、或は海路より或は陸路より入國せんと試れり。此時獨り他の韓人二人と共に鴨門に留學せし金某(アレキサンドル、キン)は監督ヴェレオルの命に依り幾多の困難を經て海路黃海道に來りて捕へられ、四寓に遍する の故を以て斬に處せらる。崔某(トマス、ジョイ)は宣教師マイステルと共に道を鎮洲に取り、陽春に至りて臨遂せられしが尙之に屈せず、十四年(一八四八)崔は窟に清州より入りて京城に達し、マイステルも亦四年の後支那の漁船に搭して辛ふじて入國するを得たり。當時の傳道は頗る困難にして宣教師の中には風土病に罹り又は奔命に疲れて死する者あり、土人傳道師も種々の困難のため意氣銷沈し、苦心頗る慘憺たる者ありしと雖も、道害の漸く顯なるに從ひ宣教師の又新に渡來する者あり、彼等もまた自ら責任を重じて布教したりしかば其事業大に進歩したり。而して彼等は口頭の傳道のみなを以て足れりとせず、重要なる宗教の書籍を韓譯し、教義及び道論に關する簡短なる教科書を編纂し、京城に活版所を設けて是等の書類を出版し、又京城に一個の學校を立てゝ拉丁語學習の生徒を教育し、又韓人治療のため調劑所を設立する等の事を爲して布教を助けしかば、信徒益々增加して、哲宗の末には一萬八千人の多きに達したりしといふ。

大院君と基督教徒　今の太皇帝位に即き生父大院君攝政の位に居るに及びて、權を握にする時に至りては、樞要の地位に居る者にして基督教を信ずる者益々多く、帝の乳母朴氏(マルタ、パク)承旨南鐘三(ジャン、ナム)洪鳳周(トマス、ホン)李勇逸の徒は其尤なる者也。殊に南鐘三は學問該博にして才略あり、張敬一宗教書類の刊行に務めたり。三年(一八六六)正月露國の軍艦一隻元山に來りて通商を求め願る脅喝の言なをなし、朝廷爲めに震駭す。南鐘三等此機に乘じて基督教の根據を堅くせんと欲し、上書して英佛二國に結びて露國を防ぐの策を獻ず。大院君之を納れ、乃ち南鐘三を遣はして當時北京に在りし監督ベルノーを召し、託するに露人に談じて韓國の領土を去らしめんことを以てし、其成功に對して布教の自由を許可すべきことを約せり。當時韓國官憲の基督教に對する態度は一變し、官民の基督教を信ずる者益々增加せしかば、ベルノーは更に數人の宣教師の援助を要するの盛況を呈するに至りしか、朝廷の議又更に一變し、基督教排斥の輿論盛に起り、少使節の北京より歸り來りしの事を報ずるあり、又鴨門に骨喝の官なをなしたる露艦は既に去りて復影を止めず、且佛國は憲宗五年の苛戮に對しても復仇の擧を爲さりしを見て、西洋諸國の又恐るゝに足らざるを思ひ、一擧して基督教徒を勦絶せんと決心したり。於是大院君は左通牒に命じて鐘三、周鳳、勇逸及び佛國宣教師ベルノー、ダブルイ。張敬一等を捕へて悉く之を虐殺し、又令を下して國內を搜索し、教徒數千人を捕へて或は流竄し或は誅戮せしかば、佛國宣教師の廿餘年間辛苦經營せし宣教事業は一時其迹を絶つに至れり。此事變に當りて佛國宣教師十數人の中、僅に潛伏して其死を免れたる者はリデル。フェロンカライスの三人のみなりしが、リデルは竄に此事變を書し英國商船に托して北京に贈り、又自己は基督教徒となれる漁夫と共に內浦(忠淸南道)より一葉の扁舟に乘じ、芝罘を經て天津に達し佛國艦隊司令官ローズに其狀を報ぜり。此時北京駐劄の佛國代理公使ベロネーは此報告を聞て大に怒り、令をローズに傳へ先づ軍艦三隻を派して漢江を探險せしめ、其還るに及びて更に軍艦七隻に六百人の陸戰隊を乘ぜしめ、來りて宣教師を殺すの罪を問へり。大院君は之を聞き直に檄を八道に傳へ兵を徵して之を禦がしめしに、佛軍利あらず、支那に向ひて逃れ去れり。於是大院君は頗る得意の色を見はし益々排外主義を鼓吹し、邪學を斥くるの論を著して國內に頒布し、遍く基督教徒を索めて之を殺せり。斯くて太皇帝即位の初より十年に至るまで大院君の權を握にするの時

に於て、基督教を信ずるがため誅戮せらるゝもの前後廿餘萬人に及べりといふ。

斯くて大院君は一八七三年に至り勢力を失墜し政治上の關係を絶ちたりしが、是より韓國に於る教徒の道害は全く其跡を絶ち、基督教は漸次盛大に向へり。一八九七年の調査に依れば羅馬教徒の數は二八、八〇二人あり。同派に屬する宣教師の數に三十四人にして『ツサイエチー、デ、ミッション、エトランゲール』に屬す。此團體は此時十九箇所の武教所を有し、外に定期武教を爲す場所四百四十六箇所、學校廿三箇、其生徒四百七十五人、外に廿四人の生徒を收容する宗教中學一校あり。京城に在る羅馬教會は壯大にして首府に於る最良の建物の一也。

【プロテスタント教】　プロテスタント教の韓國に傳道したるは、一八八四年米國長老派の京城其他に武教所を設けたるを以て嚆矢となす。其翌年米國メッゼスト、エピスコパル教會亦來り、現今は以上の外バプチスト、アングリカン二派亦傳道せり。プロテスタント教は基傳道の方法として教育ある階級を誘導し、又學校を立て子弟を教育し、病院を設け醫療を施す等のことを爲せり。最近十年間に於ける基督教の進歩は頗る著しく、現今信徒の數十二萬以上に及び寄附金の年額十萬圓以上に上る。

(一)　長老教會　此教派は南北亞米利加各一、濠太利一、加那太一を有す。(イ)北米長老派　此派は一八八四年渡來し、京城、釜山、元山、及び平壤に傳道を開始し、後其他の地に及べり。學校の建築は此派の大に注意せし所にして、諸派の中最も多數を有す(教會、學校等の數は表に示す)此派の宣教師中最も有名なるをエナ、ウー、アンダーウード。エス、エ、モフエット。ウエー、エス、ゲール。エフ、エス、ミルラー及びジー、ウー、ディントンとす。

(ロ)南米長老派　一八九二年渡來し、其宣教師は初め三年間京城に在りて韓國語を學び、後金州、鄙山、木浦及び其他の地に傳道を開始せり。(ハ)墺太利長老派　一八九一年渡來す。此派に於ける婦人の事業は最も注目すべき者にて、彼等は釜山の韓民區に住居し、韓國婦人及び孤兒のため力を盡せり。(ニ)加那太長老派　一八八九年傳道を開始し、初めは甚だ微々たる者なりしが、一八九八年北米長老派元山の傳道地を讓り受け、漸々として進歩しつゝあり。

(二)　メッゼスト、エピスコパル派　此派は北米メッゼスト、エピスコパル及び南米メッゼスト、エピスコパルの二種あり。前者は一八八五年日本に在る同派宣教師の傳道を開始したるに初まり、北米長老派に亞げる者也。此教派は深く教育事業に注意し、又土著人より傳道者を作ることを謀れり。又京城に一九九六年より韓語の新聞を發行せり。又此教會に附屬せる數箇の病院あり。又此派の婦人傳道會社は韓國の婦人に教旨を傳ふるの目的を以て女學校を設立し、且婦人病院を設け女子の患者を取扱ふことを爲せり。此派の宣教師中有名なるはシー、エチ、ウロンス。エチ、ゲー、アベンセラー。及びダブリウ、ピー、スクラントンとす。一九〇四年米國メッゼスト、エピスコパル教會總會はエム、シー、ハリスを日本及び韓國宣教師監督に任じしが、一九〇八年總會は更に彼を韓國の宣教監督に任じ、京城に住せしむ。南米メッゼスト、エピスコパル派は一八九六年始めて傳道を開始し、京城及び開城を初め其他の所にて傳道せり。

(三)　英國教會　此派は福音傳道會社の設立する所にして、福音傳道會社は支那及び日本にもあり。英國教會設立の企圖は既に一八八〇年に起されたりしと雖も、其實行甚だ延引し、一八八七年に至り北清及び日本の英國監督が韓國を視察し、本國に通知して遂に宣教師を送ちしめ以て其事業を開くに至れり。一八八九年監督コルフーに韓國に於る英國教會の管理を依托し、之が爲め維持費として一萬五千磅を支出したりしが、事業開始の初期は經費の不足、疾病、土語修習の困難、聖書斯爾書等の韓譯書の不足等に依り大に其進歩を妨げられたり。之がため聖書を拔萃して之を韓譯し以て宗教入門の用に供し、其他宗教の教科書として出版したるもの多し。此派は初めより京城、仁川に二個の會堂を設立し、監督の初めて韓國に入りたるは一八九〇年にして、哈之と同時に京城及び仁川に病院及び藥局を設立し、京城には又婦人病院ありて女醫之を管理し、何れの病院に於ても見童の看護は倫敦聖復得看護婦協會の手に於て施設せり。

(四)　米國バプチスト教會　一八九五年渡來し、京城に傳道を開始し、漸次南韓地方に事業を擴張しつゝあれ共、其勢甚だ振はず。

以上諸派の外近頃に至り敎世軍諸教敵名英國より派遣せられ、京城を本部として地方に屯營を設置し、其數既に四十箇所に達せり。又モグンスデー、アドヴェンチスト派も鎭南浦附近に傳道を開始せり。

以上諸派の中重なる宗派最近の教勢を統計にて示せば左の如し(一九〇七年韓國プロテスタント福音派宣教總會の調査に依る)。

第一表（外國宣教師、土着傳道師、教會員及び日曜學校）

	宣教師(妻を含む)	土着傳道師	正會員	教會員總數	日曜學校數	同上生徒	韓國信徒寄附金年額
北米長老派	七九	四九三	一五、一五三	五四、九八七	五九六	四九、五四五	八〇、二六四、六五
メソヂスト、エピスコパル派	四二	二二〇	三、八八五	三九、六一三	一一二	三、三三三	二七、〇一八、七五
南米長老派	二四	四四	一、九六一	九、二六七	五五	一、七八四	八、六九八、六〇
南メソヂスト、エピスコパル派	一四	四六	一、九八五	五、〇一〇	三三	一、七七〇	四、七六〇、五三
加那太長老派	一〇	一八	八一四	三、八三〇	五八	三、三六六	五、一四六、六〇
墺太利長老派					五	二〇四	
合計	一九〇	八六三	二二四、〇二五	一一三、四九九	九〇〇	六九、〇〇二	一二五、八八九、一三

第二表（諸學校、其生徒、教會、禮拜堂數）

	神學校	其生徒	高等學校	其生徒	其他ノ學校	其生徒	自給學校	集會所	教會及禮拜所
北米長老派	一	五八	一	一三	七	六四	三四	六、七四二	三三四
メソヂスト、エピスコパル派	一	四八〇	一	三	二	二四九	一〇三	三、五三八	一〇三
南米長老派							四八一		一六
南メソヂスト、エピスコパル派		六		一		二〇	八二	四八一	二
加那太長老派				二五一		三	三〇五		一四
墺太利長老派				四		三	三〇一		六〇
合計	二	五四八	一	二二	一、二九一	七	七	四六九	一、四七九	一、〇〇八

日本の諸教會も亟年主として韓國在住日本人のため傳道を開始せり。即ち日本組合教會は明治廿七年（一九〇四）六月創設者吾を京城に送り、京城、仁川、開城、平壤、群山に傳道を開始せり。現今京城は教勢好況にして會員凡そ八九十名あり。平壤には六七十名の會員あり。日本聖公會は明治四十年（一九〇七）京城に傳道を開始し、現今釜山、及び仁川にも傳道せり。日本基督教會は宣教師コルテス京城に傳道を開始せるに初まり、明治四十一年（一九〇八）石原保太郎來りて京城に働く、信徒の數凡そ四五十名あり。又同年群山にも傳道を開始せり。日本メソヂスト教會は明治廿七年（一九〇四）五月木原外七を京城に送り傳道を開始せるに初まる。現今會員の數一百餘名あり。後仁川、平壤、鎭南浦にも傳道を開始し、仁川には三十名、平壤には七十名以上の會員を有す。以上逐ぶるが如くプロテスタント教の韓國傳道は一八八四年以來の事にして日尚甚だ淺しと雖も、近年教勢頗る良好にして、既に外國傳道會社の補助を離れて自給せる教會も少からず。近時米國の教會は此機に乘じ多數の宣教師を增派して此國を基督教化せんとするの企あり。今後尚一層の進歩を示すことなるべし。

【番服教】 番服教の韓國に傳ぼりたるは、京城に於る露國居留民の百人に達したる一八九〇年の初中期に初まれり。一八九七年七月三日京城に番服教會を設くること及び此地に番服教會の寺院を建設するの裁可を得、公使館附屬會堂に附設し、京城に於て洗禮を受けたる韓國男女數百人に上れり。斯くして京城に其基礎を置き北韓方面より傳道に着手したりしが、一九〇四、五年の役露國が韓國より驅逐せらるゝに及びて其勢力振はざるに至れり。

【參考書】 露國大藏省編輯『韓國誌』（日本長南藤會山林局藏版）林泰輔譯『近世朝鮮史』アンダーウード『韓國の召し』(Hr. G. Underwood's "The Call of Korea") ウォンス『韓國、土地及び國民』(G. H. Jones' "Korea: Land, Country and People").

感情 カンジャウ Affection. 【術語】 基督教倫理の點より論ずるに、感情は自然にして神も亦之を有す。故に最格なるストイシズムと、神經的敬虔派の病的敬虔は、健全にして實際的なる基督教徒の取らざる所也。如何なる感情と雖もそれ自ら罪ある者に非ず。耶蘇は此點に於ても基督教徒の標準也。彼は曰へ（廿二の六、廿六の廿八）哭き路十九の四十一）痛く哀み（廿二の四十四）悶み（太九の廿六）怒り（約二の十四）喜び（路十の廿一）又狂氣せりと思はれたり（可三の廿一）保羅、約翰、彼得、雅各の知きも亦同じく感情の人なりき。新約全書には『神に熱心』（約二の十七、羅十の二）『神に憂ふ憂』（哥後七の十）等の言あり。又禁ずべき怒（四三の八）と許容すべき怒（弗四の廿六）との

間に區別なせり。要するに新約全書は不潔、下等なる感情を抑制すべしとのことを教ふれ共（太五の廿二－廿、廿八－四十七、十の廿八）更に必要なるは基督及び其使徒等の模範と教訓とに從ひ、他人の幸福と神のために爲さんとする心より出づる高貴の感情を興當し養成せしむること也（約二の十七、羅九の二、十二の十五、哥後十一の廿九）換言すれば下等なる感情を代へて之を高貴の目的に用ゐん事也。

カンスタイン カルル ヒルデブランド 男爵 Canstein, Karl Hildebrand, Baron von 【人名】 一六六七－一七一九 獨逸の博愛家。フランタフェルトにて法律を學び、一時蓄滿士陸軍に入りし事ありしも退隱し、宗教的研究、博愛事業に身を委れ『四福音書の一致』親友スペーネルの傳等を著はし、一七一二年にはカンスタイン聖書館なるものを起し、新舊約聖書を廉價に販賣し、之に依て非常の多額を頒布したり。

完全論 カンゼンロン Perfectionism. 【學說名】 カルヴィン派及びルーテル派の神學者は、人は現世に於て完全の域に達すべき者に非ずと論ず。然れ共之に反し、人は現世に於ても完全の生活を爲し得べしと論ずる者あり。羅馬教及び希臘教徒、ウエスレヤン、アルミニヤン派、及びフレンド派（友會派）是也。而して之にオベルリン學派を加ふるを得べし。然れ共此四者の所謂完全の意義に至りては各相同じからず。（一）羅馬教及び希臘教は、義とせられたる人は神の命令を守ることを得べし、其人假令罪を犯すことあるも、『我等の罪を赦し給へ』と祈らば、其罪赦さるべし、且彼に律法の要求以外に神に從順なることを得べし、又或る場合には神の特許を得て、凡ての罪を證くることを得べしと教ふ。（二）ウエスレヤンヘアルミニヤン派は、完全とは天使的完全に非ず、アダム的完全にして、即ち基督の贖に依り其心潔まり、愛に依りて律法を完ふするの謂也と教ふ。ウェスレー曰く『人が其靈魂の身體と共に在る間到達し得べき最高の完全には、無智、過失及び樣々の弱點なしと云はすべからず、基督教的生活の初歩は全き服從也、即ち此服從を破壞することも、神の約束と福音の教訓とは、人もし斷へず、且全く之を心に留めて、之に從ふ時は、信徒をして完全なる服從の生活を送ることを得せしむべし、而して是れ現世に於て到達すべき者也と教ふ。

カンターベリー Canterbury. 【地名】 英國倫敦の東南五十五哩、ドヴェルの西北十六哩に在る市にして、英國教會大監督の所在地として有名也。聖アウガスチン初めて英國に傳道せし時、此地に寺院を建つ（六〇五）後大監督となるに及び此地を以て大監督所在地と爲ぜり。現時の大會堂（カセドラル）はランフランク（Lanfranc 一〇七〇）の改築に係り、アンセルム更に之を增築せしが、一一七四年火災のために、其一部を燒失せしを以て更に之が改築に着手し、一四九五年全く之を落成せり。建物は十字架形をなし、ノルマン風の建築にして宏壯佳麗を極め、ベルハルリー塔殊に美也。東本堂に連りて數間の禮拜堂あり。極東の禮拜堂を "Becket's Crown" と稱し、歷代の大監督が就職の時用ゐたる石造の椅子を藏す。又ヘンリー四世、ヘンリー四世の皇后、ナバルのヨアン、黑太子、カルディナル、ポール等を初めとして數多古代の紀念碑あり。近年又大監督ベンソン（一八九六死）のために佳麗なる紀念碑を建設せり。アウガスチン傳道學校は古代寺院の建物を修繕して、其中に之を設く。又一八九九年開設したる "Beauly Institute" の中には博物館及び圖書館あり。カンターベリー會堂の歷史上最も著名なる出來事は、一一七〇年大監督ベケットの殺害、及び之に次で起りたるヘンリー二世の懺悔也とす。ベケットの廟はトリニチー、チャペルの中に在りて、英國及び歐洲大陸より參詣者絶えざりしが、ヘンリー八世に至り其廟破壞せられたり（一五三八）此參詣者の光景はチョウサー（一三二八－一四〇〇）の『カンターベリー物語』に描かる。此物語は馬上ゆるやかに物語り往く善男善女の參詣者が往きに歸りに、物語りせる體に書きたる者にして、其一行には勳爵士あり、僧侶あり、麵麭屋あり、商人あり、其物語には繼物語もあれば鬼の話もありて興頗る深く、以て十四世紀の信仰及び風俗を知るを得べし。

カンダケ Candace. 【雜語】 エチオピヤ女王朝の名なりしが如し。其大臣エルサレムよりの歸途ガサの近傍にて、ピリピより洗禮を受けたりしのこと、使八の廿七に記さる。

カント

人名　イムマヌエル　Kant, Immanuel　一七二四―一八〇四　獨逸の哲學者。普蘭士のケーニゲスベルヒに生る。父なるヨアン、ゲオルゲ、カントと云ひ、蘇國人の血統に屬し、馬具師にして勤勉實直の人なりき。次に彼は其匠としてよりも品性の高尚なる點によりて同僚間に尊重せられたり。家は赤貧と云ふには非ざりしも決して富有には非ざりき。一七一五年アンナ、レヂナ、ロイテルと結婚し十一人の子女を生めり。四人は男子、七人は女子にして、インマヌエルは其第四子なり。カントの末弟はホリンリッヒ、カントと稱し、家庭教師として幾多の貴族に歴事し、遂にレヂン州の教師長となりてカントに後る〻事數年にして死せり。三人の姉妹の中長姉は未婚にして死し、他の二女は婚嫁して賢母眞妻となり、カントよりも長命せり。カントは獨身なりしが終生其親戚や子供等に對して慈惠者たり、其財産の全部は皆之れを彼等に分與したり。

カントの母はカントが十三歳の時死去したり。彼女の死因は如何に彼女が慈心深き善女なりしかを證するに足るものあり。彼女知己の一婦人曾て精神の興奮より來る熱病に犯されしが彼女は熱心に其病を看護し居りしが、一日患者の藥を飲まざるを見て勉めて取りて強て口腔に當て飲むべきを勸めしかども肯ぜず、病益々重きを加へしかば、彼女は自ら其藥を飲みて例を示し、以て其愛で飲むべきを教へたりしに、彼女の之れを飲下するや忽ち神經に劇變を來たし、同日熱病に感染して數日の後死去したり。カントは深く母を愛し母に愛せられたるが故に、後年に至るも言母に及ぶ時は、必ず憎怒として今昔の感に堪へざるものありき。彼の母は極めて敬虔なる人にして、彼が母の事を語るや、内心の平和と喜樂を有し、外界の境遇によりて變易せざる敬虔なる婦人てふ言を以てせり。父は商賣上の事より同業者と論爭する事ありしかども、母は何時も寛大なる心もて敵人を遇し、且萬事の成行を神の攝理に一任すべきを勸めたり。去ればカントの記臆中には父よりも母の面影は

インマヌエル　カント

明白に遺り居りしもの3如し。彼は幼時を回顧して母と共に田畝に來往したる事、母が自然界の懷々なる現象に彼の注意を喚起して、知れる限りの説明を與へ、かくして造物主の智慧と德とを讃美したりしを回想して、母の面影を偲びぬ。思ふにカントは母の最愛の子なりしならん。斯くカントは敬虔の家庭に生長し、又常に教會に出席したり。母の牧師たる教授シュルツは熱心なる教師にして德化の深かりし人なり。屢々カントの家庭に出入し、種々の點に於てカントの家庭を補佐したり。

一七四〇年彼は十七歳にして、ケーニゲスベルヒ大學に入り、初めは神學を學びしが、間もなく他の學科に移りたり。彼は神學生たりし時其近隣の田舍教會にて一二回説教したる事ありき。こは當時の普蘭士に於ける神學生が一般に爲せし所にして、彼も亦其習慣に從ひし也。彼は拉丁古文學に對して深き趣味を有し、熱心に之れを研究したりければ、數年の後には長き章句も之れを誦する能たる程なりき。彼は其性來の傾向よりすれば、或は言語學を自己の研究科目となすべかりしならんと思はる。然れども言語學は當時極めて不完全なりしが爲めに、カントを誘ふに足らざりき。於是彼は遂に專攻學科として哲學、數學を撰びたりしが、此撰定たるや實にカン

カンタベーリー

(一) 聖マルチン教會　(二) タライストチャルチ門　(三) 大會堂　(四) 唱歌所及びケント　クラウン　(五) ノルマン　スチーアーズ

ト一生の運命を定めたゝものなりき。彼は此處にて當時一般に行はれたるウォルフ學派の思想に養はれ、又ニウトンの物理學上の知識を得、尙廣く自然科學上の研究にも其心を用ゐたりき。彼は家貧なりしため大學に在りし間多くは自ら給ぜざるを得ざりき。大學を卒へて後一七四六年より九年間ばかりは相續きて二三の家の家庭教師となり、其間の關係に依り一侯爵の家と相識るに至り、此處にて文雅なる紳士の學び上流社會の交際にも慣るゝに至れり。一七五五年彼は博士の學位を得、其年の冬より生地の大學に無給講師として講義を開くことを許されたりしが、彼が爾來講義せる課目には數學、物理學、論理學、純理哲學、道德學及び法理學あり。其他にも曾て地文學、人類學を講じ、又自然神學及び數會學をも講じたり。彼は曾て數學及び哲學の員外教授の椅子を得んとしたれ共、偶ゞ此椅子の廻ぜらるゝに逆ふて其目的を達することを能はず。一七五八年には論理學及び純理哲學教授の椅子の空しくなりしことありしも是亦他人の占むる所となり、一七七〇年に至りて漸く此椅子を占むることを得たり。彼は曾て他の大學より招聘せられたることありしかども辭して行かず、一意其大學に於る教授に心を傾けて、一七九六年に至る迄絶えず其職に力めたりしが、此年に至りて老衰の爲めに止むを得ず講義を止むることゝなり、一八〇四年終に老病を以て逝きぬ。カントの講義は大に學生等の愛する所となりき。彼の講義するや專ら學生に與ふるに知識を以てするのみならず、又道德及び宗教上其心を感動にせんことを心掛けたりき。

カントは其性頗る溫厚快調にして規律正しく、且信義を重じ、又人と交るに頗る友誼に厚かりき。彼は貧

事の時朋友を招きて共に相語ることを樂みしが、其等の談話に於ては勉めて哲學上の事を談ぜざるを好みき。彼は政治上に於ては自由主義を主張し、亞米利加合衆國の獨立戰爭及び佛國革命事業に對して大なる同情を表したりき。彼は生涯東普蘭士の域外に出でたることなかりき。彼の生活は非常に規則正しく、朝に臥床を起き出でゝより夕に寢に就くに至る迄、或は業務を執り或は食事をなし或は散歩する等悉く其時間を違ふことなかりき。彼は大にルーソーを愛讀し、教育思想に於ては其感化を受けたることも少からざりき。

【カント思想の梗概】 カントが其大著『純理批判』を出版せしは一七八一年の事なりき。此著は出版の當時は世の注意を引かざりしが、數年の後哲學界に新紀元を開けるものとして世の驚讃嘆々だるものあり。今此書の立論如何を稽ふるに、こは人間理性の本來の性質を考究し、其際限を割定せんとせるもの、別言すれば人智を批評的に攻究せしものなり。從前の哲學にありては、デカルト、スピノザ、ライプニッツ、ウォルフの如き學者すらも、人智の何物たるを究めずして空中樓閣を築ふが如き獨斷說に陷り、從て極端なる懷疑說を誘起するの弊ありき。是を以てカントは此評哲學を創唱し、一方には獨斷說の僭越を破り、他方には懷疑說の雲霧を排き、可知を可知とし不可知を不可知とするの確論を主張したり。彼は現象界を可知となし、實在界(本體)を不可知となせり。則ち人智は現象界に限るものにして、實在界は人智の及ばざる所なりとなせり。此故にカントは實在の智識に達すべしとなせる舊來の合理的心理學、合理的天地創造論、合理的神學なる否定したり。即ち不滅の實體としての靈魂、有限若しくは無限なる全體としての宇宙、完全なる存在者世界の據成者創造者としての神に關する智識は之れを否定したり。かく人智の際限を現象界に限れるによりて失ふ所あるが如しと雖も、而かも亦得る所少からず。蓋し不眞實なる智識を固執せんか、何時迄もヒュームの如き懷疑論者の攻擊は絶ゆる時なかるべしと雖も、人智を現象界に限らば、現象界の法則を確定し得て科學の基本を供給し得べければなり。但し現象なるものは人心の對象にして夫れ自らに存在を有するものに非ず、五官の印象を綜とすれば人心は即ち經なり、經緯相合して現象てふものを生起するものなれば、先づ人心自然の法則を研究するを主要とす。カントは『純理批判』に於て心を分解して人心に幾多の根本的必然の法則ある事を發見したり。一は時間空間の法則にして、萬有が時間的空間的關係によりて知らるゝは一に此法則の然らしむる所なり。而してこは數學の根柢をなすものなり。二は原因結果の如き根本的法則なり。而してこは物理學の依て立つ所の根基なり。かくの如き法則は人心固有のものにして、經驗によりて得たるものに非ず否寧ろ經驗の基本となるものなり。去れば經驗とは人心が外界より受くる印象を其儘保存するの謂に非ずして、外界より受くる印象を自己固有の鑄形に容れたるものの謂なり。故に人心は受動的に非ずして自動的なり、被動的に非ずして能動的なり。カントはかく人心を分解して、必然の眞理と空想獨斷とを區別し、人智の際限確實を証驗したり。彼は此自說を超然的唯心說と命名したり。

カントは純理批判に次で『實際理性批判』を出版したり。是れ實に一七八八年の事なりとす。彼は『純理批判』に於ては神、靈魂不滅の如き現象以外の問題

は人智の到底解し能はざる所なりとなせしと雖も、『實際理性批判』に於ては道德性の嚴然として犯す可からざるものあるを見て、神の存在、靈魂不滅を假定するの止む可からざるを說きぬ。カントは爲らく『吾人は神を世界の第一原因および構造者としては知る能はずと雖も、道義の主宰者として神を信ぜざる可からず』と。但し此宗教的信仰たるや道義法の絶對的確實に根基するものなるが故に、カントは此『實際理性批判』および『倫理哲學の根本』中に反覆詳論して、道義法の確實を打ち建つるに勉めたり。其之れを爲すの熱心なる『純理批判』に於て科學の確實を論ぜしよりも更に勤めたりと云ふべし。案するにカントは一時シャフツベリー及びハッチソンとともに、道義の基本を道義的感覺者くは感情に置きしかども、後感情に訴ふるの危險なるを確認し、倫理の純潔は獨り理性が示す法則に從ふにありとなすに至りぬ。『實際理性批判』の立場は即ち夫れなり。カントに從へば、何時如何なる場合にも善なるものは唯善意のみ、即ち道義法に服從するの意志のみ。而して此道義法なるものは理性其物が命ずる所にして、所謂無上上大法(カテゴリッシェ、インペラティフ)——吾人の行爲よりして利己の念を去り、萬人が齊しく行ひ得るの行爲を爲す可しと命ずる——なり。此無上大法に服從せんが爲めに動機と物慾とに勝ち得る者は自由なる存在者ならざる可からず。自由を有する者のみが獨りかく執意しかく行動し得るのみ。此故に彼に人の道義的意識なる根據として人の自由意志を假定したり。彼れ曰く『我に義務の念あり、故に我之れを遂行し得るの能力を有す』と。然れども科學は萬事萬物に嚴然たる法則ある事を示すに非ずや、人間の行爲には因果の法則あらざるか カントは此疑問に答へて曰く、科

學に現象界に法則ある事を敎ゆ、然かも人間に道義的存在者としては單に現象のみの存在者に非ずして、宇宙の一部分なり、其道義的意識に於て更に高尙なる實在界に屬する者なり、此故に人意はこれを現象として現象界の法則に當て推むべきものに非ず、現象として現ほるゝ點丈に於ては因果の法則に依ると雖も、意志其物の住家たる實在界に於ては自由なるものなるべしと。かくカントは『純理批判』と『實際理性批判』とに於て殆んど矛盾せりと見ゆる二說を叙述したりしが、一七九〇年を以て『判斷批判』なる一書を公にして、如上の二說を調和せんと試みたり。然れども之れが充分なる調和はかの唯心的識續者輩によりて成し遂げられしなり。

今歷史上に於けるカントの位地を稽ふるに、彼は近世思想の先覺者懸導者醒覺者を以て目せらる。近世哲學史を案するに三大時期の劃然たるものあるを認む。而して之が新時代を劃せし三大人物はデカルト、ロック及びカントなりとす。而してカントが最近世の思潮を導き亦支配するの巨人なりしに何人も爭ふ能はざる事實なりとす。カントは實に哲學界の思潮を導き支配するのみならず、カント一流の思索法は各方面に其感化を及ぼせるものあるを見る。殊に神學上の思索に於ては非常なる影響を蒙れるを見るなり。カントは實に哲學界の曉星、近世思想の先覺者なりき。

カントの重なる著書は慨れ英譯せられたり『純理批判』はマックス、ミュラー及びモイクレッションにより て(此書邦譯あり)『倫理學の學說』『判斷批判』はバルナルドによりて飜譯せられたり。カント哲學の精髓なる論述したるはクーヤドの『批評』『批評哲學』アダムソンの『カントの哲學』を以て最上とす。カントの傳を學ば

んと欲せばドロースの『カント』を見よ。

監督 (カントゥス、ヒエル、カント)

Bishop (episcopos)

職名 希臘語は廣義の監視の意にて、政府、町村の吏員に用ゐしが聖書は之を取りて教會の監視者を稱する名となし、後職名となり、羅馬教會、希臘教會及び英國教會にては僧侶の職位となるに至れり。

【新約聖書に於る監督】 新約聖書には屢ゞ監督及び長老(Elder, presbyteros)の事を記す。然れ共此二の職は同一なりしか如し。何となれば(一)監督及び執事は相異れる職として相聯れて記されたれ共、監督及び長老は曾て相聯れて記されたることなし。(二)餅一の一に『監督執事』(冠詞なし)とあり。もし監督の外に長老あらば之を洩すことある可らず。又提前五の十七に『長老を尊ぶべし』とあり、故にエペソの教會に長老ありしこと明なれ共、三章には監督及び執事に對する勸言を記せるのみにして、長老に及ばず。之に反して多一の五—七には、提前三に於て監督に就きて記したると殆ど同じ語を以て長老に就きて記し、監督を洩せり。(三)提前三に記されたる監督、提前五の十七の長老、及び使徒五の二の長老共に牧師たる職掌を有す。徒廿の十七の長老、及び多一の五—七の長老も亦同じ。(四)同一の人監督と呼ばれ、長老と呼ばれたるが如し(徒廿の十七、十八、多一の五—七)要するに使徒時代に在りては、此二の職は大體に於て均しき者なりしこと殆ど疑なし。

初代教會に於て監督(長老)を任用するには、會衆之を選擧し、使徒之を立てたりしが如し。夫の七人(徒六の五、六)は會衆之を選み、使徒等祈りて其上に手を按きて之を立てたり。ルカヨハネの長老の選

ばれたりしも亦均しき方法に依りしが如し（使十四の廿三）。パウロの長老はテトスを任じ、エペソの監督はテモテを立てたりしかども、其前會衆先づ之を選みたりしなるべし。要するに教會の役員は、勿論會衆の選擧、次に按手を以て立てられたり。但し地方的ならざるものは聖靈の意に依りて立てられたり（使十三の二、提前一の十八、四の十四、提後四の五）。

監督（長老）の職務は教會を管理すること（使廿の廿八、提前三の五、五の十二、十七、多一の七、彼前五の二、三）教訓を爲すこと（提前三の二、五の十七）病者を見舞ひ（雅五の十四）實底及び貧者を慰恤之を教父等の書に就て見るに、クレメントの哥林多に贈れる書翰中には、監督と長老とを區別せず。ポリカルプの腓利比人に贈りたる書翰、及びヘルマスの牧者とも稱する書中にも亦二者の區別なし。イレニウスも、此二の職は元來同一なりしことを云ひ、エロームも、使徒等は明に長老は監督と同一人たることを教へたりと云へり。然れ共イグナチウスの書翰には此二者を區別し、監督を以て教會に於る基督の代表者也と爲せり。此二者が使徒以後の時代に至りて區別せられたることは明なることなれ共、何時如何にして始く區別せらるゝに至りしやは、今日より之を斷定し難し。

【教會に於ける監督の位置】　監督の起源、職掌及び位置に關し、諸教會取る所の說同じからず。今其概略を左に擧ぐ。

羅馬教會　羅馬教會は監督の起源及び權威を神に歸し、トレントの會議に於て其地位を明にし『監督は使徒の繼承者にして、神の教會を治め、司祭（長老）の上に置かんために、聖靈に依りて立てられたる者也。何人にても監督を以て司祭の上に置かるべき者に非ずと云ふ者あらば咀はるべき者也』と云へり。

プリアヌスは『教會は監督の中に在り』（Ecclesia in Episcopo）と云へり。是れ羅馬教會の說を代表する者にして、此教會の說に從へば、監督は聖典の教會に必要なるが如く必要にして、監督なくんば教會は存立す可らず。監督は使徒直接の繼承者にして、唯管轄區域の範圍のみならず、其特權及び職務の種類に於て司祭及び執事に優れり。羅馬の監督（法王）は諸監督の首長にして、使徒彼得直接の繼承者也。基督は此彼得の上に教會を立つべしとの一ことを約束せり（太十六の十八、十九）彼得は實に羅馬最初の監督なりき。諸監督は羅馬の監督を基督の代表者として、之に服從せざる可らず。而して彼等の使徒的權能は聖別せらるゝことに依りて來る者也。

希臘教會　監督の起源及び其使徒的傳承に關しては、此教會も亦羅馬教會と同一の說を採れり。其之を異なる點は、唯羅馬法王を承認せず、之を以て篡奪者となすに在るのみ。

和蘭ヤンセン派教會及び舊カトリック教徒　羅馬教會と同じ。

英國教會及び米國監督教會　二個の說を容認す。即ち高教會派及び低教會派是也。（一）高教會派の監督は基督の代表者、使徒彼得の錯誤なき繼承者也として、羅馬法王に最上權を附することを肯ぜず。然れ共監督制度を以て、教會の存在に必要缺く可らざる者となし、又按手に依りて使徒的傳承を受くる者也となす。プラント曰く『監督は使徒的傳承說を維持す。其最初の監督は、正當に按手せられたるヴァルデンシアン監督スチーブンスに依りて、一四六七年選擧せらる。やはり、監督は使徒の時代より長老、執事と異り、其上に置かれたる職位なりしと主張す。大監督ロード（一六三三—四五）は監督の神權を主張せる最も極端なる代表者として目せらる。（二）低教會派及び廣教會派は、監督制度を以て教會の利益を進むるために必要なる者也となせ共、之を以て其存在に缺く可らざる者とはなさず。監督制度は聖書の中に記されたる唯一の教會制度に非ざれ共、神の國を進むる方法として最良なる者也と云へり。此派に屬する最良なる著述家は、監督は長老より登達せる者にして、新約聖書には長老、執事の二職位あるのみ也との事に一致せり。ダルハムの監督ライトフート曰く『監督は長老の中より擧げられたる者にして、元來長老と同一なりしが、時の移るに從ひ其上に置かれたる者となるに至れり』と。ディーン、スタンレーも亦曰く『初代より來れる教會の最も嚴密なる規則に從へば、長老、執事の二職位ありしのみ』と。アーノルド。フルフォルド。ジェーコブ。ハッチ等の知きも亦同一の說を取りたりき。

レフォルムド、エピスコパル教會　此教會は監督を以て神權を有する者となさず、然れ共監督制度は最古の最も便宜なる制度也との理由を以て之を採用す。此教會の基礎にして其最初の監督は、ケンタッキー監督教會の補助監督たりしカンミンス博士也。モラヴィアン教會　宗教改革以前より監督職を有す。米國に其監督管區を有せしは、監督教會（一七八四）及びメソヂスト教會（一七八四）に先つこと四十年也。此教會には使徒的傳承說を維持す。其最初の監督は、正當に按手せられたるヴァルデンシアン監督スチーブンスに依りて、一四六七年選擧せらる。

ルーテル教會　此教會は略ぼ監督制度を保持せり。但逸に於ては教師の一職位を認むるのみ。監督と均しき統治權を有する者を總理（Superintendent）と稱し、便宜のために之を置く。環典の教會は監督を有すれ共、其傳承の確實なるや否疑はし。丁抹教會の監督は使徒的傳承を要求せず。

レフォルムド教會　長老、執事の二職位を認め、新約聖書の監督を以て長老と同一視す。彼等は便宜上監督制度を承認すれ共、其神權及び使徒的傳承說を承認せず。

亞米利加英國教會　米國のメソヂスト、エピスコパル教會は監督を有す。然れ共メソヂスト教會の監督は長老にして、別に一職位を爲さず。教師及び信徒代議士に依りて成れる總會に依りて選擧せられ、總會に對して責任を有す、一地方に住せず、常に各地を巡回して教會を統轄す。此教會の監督は使徒的傳承を要求する能はず。勸めウヨン、ウエスレー米國の說教者に按手禮を施さんことを倫敦の監督に請ひしに許されず。依て自らトマス、コークに按手禮を施し（一七八四）之を米國メソヂスト教會最初の監督となせり。

福音教會及び同胞教會　此等の教會も亦監督を有す。然れ共一定の時期間此職に選ばるゝのみにして、終身職に非ず。

日本メソヂスト教會　監督を有す。其在職は八年間にして終身職に非ず。其他は米國英國教會の監督と大體に於て同一なれ共、此教會にもと監督制度を有する米國英國教會、同南美國教會及び監督制度を有せざる加那太メソヂスト教會の日本に在る宣教々會が合同して組織せられたる者なるが故に（一九〇七）監督の權限は大に縮小せられたり。日本人にして監督となりし者は、此教會の監督第一なる宣教師ポリヤンの定むる所に從ひ、教長、大監督『メトロポリタン』及び監督に區別せり。即ち（一）監督區內通常の職務を行ふこと（二）禮拜式、教會條例の執行及び各監督の行爲に關し、監督區を總監すること是也。英國は過去十二世紀間カンターベリー及びヨルタの二大監督區に區別せられ、カンターベリーの大監督は廿四監督區を管し、ヨルクの大監督は九監督區を管す。愛爾蘭に二個のアングリカン大監督區あり、アルマ及びダブリン是也。羅馬教會の大監督は英國に一（ウエストミンスチル）蘇國に二（聖アンドリウス及びエヂンバラ）愛爾蘭に四（アルマ、ダブリン、カッシェル、チュアム）あり。英國殖民地に於ける英國教會には五の大監督を有し（シドニー、ルペルツランド、モントリオル、ケープタウン及びウヤマイカ）羅馬教會には廿一の大監督を有す（濠洲に六、合衆國を除き米國に八、亞細亞に七）合衆國にはアングリカン派の大監督なしと雖も、羅馬教會は十四の大監督を有す。

監督管區（カンドククワンク）　Bishopric.　【衛　區域ないふ。基督教の尙迫害を受けつゝ發達したり

監督管區

し初代に於て、教會の中心として許多の小集會を周圍に集まり來れり。其各集會を牧會管區（parish）と稱し、數多の牧會管區集りて監督管區を作すに至れり。今日にても東教會にては尙 parish 及び bishopric なる語を用ゆれ共、西教會にては第九世紀に至り、監督管區を diocesis と云ひ、各個教會を parochia といふ。監督管區の新設及び變更は第四世紀以來宗教會議の定むる所に依る。

監督教會（カンドククワイ）　Episcopal Church.　【宗派名】　通常英國教會、アングリカン教會、米國プロテスタント、エピスコパル教會、レフォルムド、エピスコパル教會、日本聖公會の知き監督を有する教會を概して監督教會と稱す。各々其條下に就て之を見るべし。

カンドリッシュ　ロバルト　スミス　Candlish, Robert Smith　【人名】　一八〇六—七二　蘇格蘭自由教會の創立者又首領の一人。エヂンバラに生る。父は醫學教師にしてロバート、バーンスの友たりしが早く死す。カンドリッシュはグラスゴー大學を卒へ、二年後傳道者となり、クラスゴー其他にて補助牧師をなし、一八三一年エヂンバラ聖ジョルジ教會牧師として按手禮を受く。說教者として名聲忽ち揚り、三九年にはエヂンバラ大學聖書批評の教授に勅任せられしが、貴族跋扈にてアベルディン伯の激怒せる演說のため任命取消となる。四一年米國プリンストン校より神學博士を贈らる。四三年の教會破裂前には凡ての公の場合に於て、特に總會の討議に於て其の頭角を露はし、主動的の地位に在りしが、破裂後は其の精力を勵まして自由教會の組織に盡し、之が發達の助となりたるに於て第一位に居れり。ナヤルマース死して總會よりエヂンバラニウ、カレッヂの神學教授に選ばれ、一旦之を受け

も更に之を詳して、聖ウロルウ自由教會の牧師として留まり、カンニングハムの死後其後を繼でニウ、カレッザの長となれり。自由教會の學校制度の組織と擴張には主要なる勢力者となり、總會議にては常に首領と目せられ、凡ての活動に與かり、其の討論に於ける能辯と事務的才幹とに由りて能く其の地位を維持し、多少無作法なる態度あり、外交術の如く見ゆる事ありしも其がため失敗する事なかりき。著書甚だ多く『創世記解釋』三冊『贖罪論』『聖書の人物』其他『モーリス神學論文の研究』『生命の復活』『二大戒』『神の父なること』『約翰第一書解釋』『教の綱領』『說教集』等は其主なるものなり。

カンドルマス Candlemas. 【行事】聖母清淨の祝日。羅馬教會にては、マリアが耶蘇誕生後四十日目にエルサレムの神殿に往き清淨の式に與り、且其子イエスを神に獻げたることを紀念するため、二月二日を祝す。之をカンドルマスの祝日といふ。英國教會も亦此日を守る。獨逸の或る地方にては、此日に或る儀式を行ひ、來らん年の收穫を祈るの風あり。又蘇國にては此日を以て春季の初となし、此日の天候如何に依りて春の氣候を卜すべしと爲せり。

カンプ ミーチング Camp-Meeting. 【術語】野外集會の義。森林、曠野等に天幕又は假屋を設け、數日若くは數週說教又は祈禱を爲す宗教上の集會をいふ。一七九九年米國ケンタッキー州レッド、リバーの河岸にて長老派の一教師及びメソヂスト派の一教師が之を始めたりしに起る。爾後此方法此二派間に通常行はれたりしが、長老派は齋次之を廢し、後メソヂスト派及びバプチスト派のみ之を採用せり。ウエスレアン、メソヂスト派の教師ヒウ、ボルン（Hugh Bourne）ウィリヤム、クロース（Williams Closes）の二人之を英國に開始せしが、一八〇七年ウエスレアン教會年會は此方法を非認し、且彼等を除名せり。於是彼等は一八一〇年プリミチブ、メソヂスト教會を創設せり。但し此種の集會は現今漸次衰頽しつゝあり。

感靈說 Spiritualism. 『精靈說』の條を見よ。

カンニングハム ウィリアム Cunningham, William, D. D. 【人名】一八〇五—一八六一　蘇國の神學者。エヂンバラにてナヤルマルス等の下に學び、一八二八年傳道者に准允せられ、三〇年アリーノックの牧師、三四年エヂンバラ、トリニチ、カレッザ教會の牧師、四三年ニウ、カレッザの教授、四八年ナヤルマルスに繼て其の校長となる。學生時代より學問と議論とに非凡の能力を顯はせしが、エヂンバラに來りてより蘇格蘭教會の問題に於て其能力を發揮し、メドウィン辯や、サー、ウィリアム、ハミルトン等の學者と對論し、總會議にては其の言說甚だ重きをなしたり。然れども彼は大なる論客なりしと共に早純卒直にして又熱情あり、故に敵には恐れられしも友には非常に愛られ、教授としては學生の大なる信用を得たり。總會より教授に任定せられし時、米國の教授の調査を命ぜられ之に從ひしかば、米國にてもプリンストンのホッヂ博士と親厚なる友情を結びぬ。神學說は寧頭徹尾カルヴィン主義なりき。著書には『歷史的神學』二冊『改革派及び改革の神學』『教會原理の研究』其他講演說教集等あり。

橄欖山 Mount of Olives, or Olivet. 【地名】舊約には『橄欖山』（哀十四の四）『山』（尼八の十五）『エルサレムの前なる山』（王上十一の七）『邑の東の山』（若十一の廿三）『橄滅山』（王下廿三の十三）等と記され、新約には一般に『橄欖山』と記さる（太廿一の一、廿四の三、廿六の卅、可十三の四、十四の廿六、路廿二の卅九、十九の卅七、約八の一）東はエルサレムを隔てる山にして、南はキデロンの谷に依りてエルサレムを隔てる山にして、現今エベル、エト、ツル（Jebel-et-Tor）（海拔二千七百呎）と稱する者是也。其頂上に『昇天教會』（The Church of the Ascension）あり。四の廻廊する處にゲッセマネの園あり。然れ共橄欖山の名は又、エルサレムの東の山脈に亙行し、神殿の東北に在る『プロスペクト山』（橄欖山本山の南に續がれる『預言者の山』（預言者の墳墓ある此處に發見せらるゝより名く）及びシロアムの池に向へる『罪過の山』（海拔二千四百四十呎）を含める全山脈なを總稱す。ダビデは此山を過ぎてアブサロムの難を逃げ（毎下十五の十四、卅）ソロモンはケモシのために此山に祭壇を築けり（王上十一の七）近代の傳說に依れば、耶蘇が最後にエルサレムに入りたるは、此山の頂上よりにして、遙にエルサレムを望み見て泣きたるは此山の中腹なりしと云へり。然れ共スタンレーは之に反し、耶蘇はベタニヤを經、南の道よりエルサレムに入れり。即ち耶蘇の過ぎたりしは、『預言者の山』の頂と『罪過の山』との間なる、此山の南の肩に方れる處にして、現今騎馬の旅客がエルサレムに入る通路也と云へり。又耶蘇が昇天に先ち最後に其弟子に現れたるは、此山の東坡也といふの說あれ共、古代よりの傳說に依れば、此は此山の中腹『昇天教會』の在る處にして、此傳說は路加傳の記事に符合せり。

ガイゲル Geiger, Abraham 【人名】『アブラハム』一八一〇—一八七四　獨逸生れの猶太

人、希伯來語及び『タルムッド』學者。ウイスバーデン、ブレスラウ、フランクフルト、伯林にて『ラビ』たり。改革派猶太人に屬し、同志と『猶太神學時報』を出だし、『コーラン』に就て論文を作り、其他多くの著あり。就中『聖書原文書と其の傳達』は最も好著にして、二十年間研究の結果に成り、猶太教文書研究方法に一新生面を開きたる者也。

蓋然主義 Probabilism. 『決疑學』の條を見よ。

概念論 Conceptualism. 【學說名】普遍は唯名目のみ、眞の實在は個物也と云へる唯名論と、普遍は實在也と云へる實念論との中間に立ち『普遍は個物の內に存する實在也』と云へる者にして、アベラルドの之を唱ふ。彼に謂へらく、普遍は實在也。然れ共それは個體を離れて存する者に非ずして個體內に在り、個體の外に在りては唯概念として存するのみと。故に彼の立脚地を呼びて概念論と稱す。

ガイレル ヨハン Geiler, Johann 【人名】一四四五—一五一〇　獨逸の神學者、說教者。初め哲學倫理學を修めしも、ウエルツンの書に由て勸かされ、パーセルに至りて神學を研究し、一四七五年博士となり、歸りてフライブルグの教授となり、一四七八年ストラスブルグ大會堂の說教者となる。十五世紀の末は變動の時期にして、印刷術の進歩人民の狀態を一變し、諸壇に一層人民と近接するの要あり。說教者は皆な煩瑣神學の舊套を脫し一層自由にして深切直截なる說教を試みんとせり。ガイレルは此の時運の代表者にして、聖書のみならずウエルツンやプラントの著書、理髮師の獄など凡て目に觸れ耳に聞るゝものより引用句を取りて、短刀直入民心に訴へて說教せり。其の說教は言下に拉丁に譯せられ、又蒲刺りて高部獨逸語に譯せられね。今尚殘るもの多し。

ガウジ ウィリアム Gouge, William, D. D. 【人名】一五七五—一六五三　英國の清教徒牧師。觀橋に學ぶ。其間九年曾て每朝の禮拜堂所謂會に缺席したることなく、嚴格なる生活のため『清教徒長』（アーナ、ピリヤン）の稱を得たり。一六〇八年プラクフライアースにて任職式を受け、一生同地に終れり。而も彼は倫敦牧師等の父と言はれし程勢力ありき。初めウェームス王と爭ひ、彼は其の出版物の信仰ありしことを明になりて九這後に免されぬ。其の說教集は種々あり、其の信仰問答の方法も一種詳の說を挿さ多くの版を重ぬ。一六四三年ウエストミンスタル神學者會議々員となりて重きをなし、四七年に『猶太人の招き』のために賦に投ぜられしも、正統派は其の勤役の一人となる。又教職任定委員たり、全會議の事業たる聖書註解の著者の一人たり、ウエストミンスタル信仰告白の起稿に加はり當時の分離派と爭ひたる一人たり。一六四七年の第一倫敦地方會議の代理に選ばれ、一致してチャールス一世の處刑に反對し、ウエルツンの墓畔に抗議せし牧師等の首領と認められる。遺著『希伯來書講釋』あり。

合理說 Rationalism. 【教義】主理說、唯理說、純理說又は個理說とも譯す。『個理說』の條を見よ。

ガヴァッチー アレッサンドロ Gavazzi, Alessandro 【人名】一八〇九—八九　以太利の說教家、改革家、愛國者。ボロヂナに生れ、パルナバ派の僧となる。ナポリにて修辭學教授となり、後羅馬の人民に自由主義を鼓吹し、遂に羅馬教會を脫せり。一八四九年羅馬の圍まれたる際愛國者として働き、其間落後英米諸國を浸遊し、以太利プロテスタント派の狂信的な自譯せり。一八六〇年ボルディーのシノリヤに往きし時はこれに伴へり。

雅歌 Song of Songs. (Canticles) 【經名】舊約聖書中の一書。猶太の正經には諸篇の時會堂にて讀まれたる五卷の中第一位を占む。

【題號】本書の題號には三あり『歌』（Canticles）『ソロモンの歌』（Song of Solomon）及び『歌の歌』（The Song of Songs）是也。希伯來文の意は『歌の歌』なれ共、此意義に關し三說あり。其一はソロモンの歌多くあり、此歌は其中の一也との意也と云ふ者あれ共、此解說は希伯來語の文法に適せず。第二說は同一の主意に關する多くの歌を集めたる歌集の意也と云ふに在れ共、此歌は唯一の歌にして、別々の歌に非ず。第三說は歌中の歌、即ち最上の歌といふ意義也となす者にして、此說採用すべし。邦譯の『雅歌』は漢譯より取りたる者なるべけれ共、原語に何等の關係なく殆ど無意義也、原語の如く『歌の歌』と譯するか、然らざれば題意を取りて『愛の歌』と譯するに如かず。

【結構】此書は希伯來の劇歌にして、愛を題とせる歌なれ共、其問答體に記せる處、何人が語りたる語なりや、如何に詩中の語を分配すべきや、之を區別すること容易ならず。故に此書の結構に關し新舊兩說あり。舊說はテリッチ之を代表し、之を以てソロモンとシュラムの處女二人の演劇となす。新說はエワルドと之を代表し、ソロモンとシュラムの處女と其情人なる青年牧羊者と三人の演劇也となす。兩說各々長短あれ共新說優るゝに似たり。今左にエワルドに從て本書の結構を述ぶ。

人物

シュラムの少女　牧羊者なる青年　少女の異母兄弟

シュラムの里人　ソロモン王　王城の宮女
エルサレムの市民
場所
エルサレムの王城　シュラムの山村

第一歌　序幕　一の二―二の七
一景　エルサレム都城なる御園に於て、シュラムの少女、情人なる牧羊者を慕ひ、自己の放なく王宮に留められたるを歎き、情人の在處を尋ねて宮女と問答す(一の二―八)
二景　ソロモン王入御、純潔なるシュラムの少女を見、其風姿のめづらしきをほめ、荊棘中の百合花といふ。少女は國王の言に耳なも傾けず、雜樹中の林檎と呼びて情人を慕ひ、宮女に向ひて戀愛の神聖なる說く(一の九―二の七)。

第二歌　二幕目　二の八―三の五
一景　少女過去を顧みて、情人が嘗て少女の家を訪ひ、相伴ひて山野を逍遙したりしことを憶ひ、貧女が彼のために歌ひし歌をくりかへし、一日も早く彼に遇はんとの切望を述ぶ(二の八―十七)
二景　少女情人を尋ねて之に遇ひたりと夢みたりしことを語る(三の一―五)
夢にさへ類く情人を慕へば、好まぬ人の貧女に對する戀愛心を刺激する勿れとの意を述ぶる也。

第三歌　三幕目　三の六―五の八
一景　市民城門の前に集り、國王の行列を見る(三の六―十一)。
此行列はソロモン王少女に其感情を見せしめ、少女もし王の意に從はゞ榮譽忽ち其身に及ぶべしとのことを示さんために催せるものなりき。王は其大婚の日に母后より與へられし王冠を戴きて願はる。
二景　ソロモン王再び入御あり、少女の愛を得んことを求む(四の一―七)。
三景　少女再び情人の聲を聞き、起らで戸を開けば其人なりしと夢みたりしことを語る(五の二―八)。

第四歌　四幕目　五の九―八の四
一景　宮女少女が王の切なる望に從はずして、情人を慕ふに驚く、少女彼等に情人の風姿を語る(五の九―六の三)。
二景　ソロモン王三度入御あり、少女の愛を得んとして其美にしきをほめ、胡桃の園の舊誼を憶ひ、宮女に少女の舞を見る(六の四―十三)。
三景　ソロモン王、少女の愛を得んとして最後の試を爲す(七の一―九)。
四景　少女終に國王の言を聞かず。尙情人を慕ふ(七の十―八の四)。

第五歌　大切　八の五―十四
一景　シュラムの里人、少女と牧羊者なる青年の來るを見る。少女青年共に往事を語る。少女の來るを見る。少女青年共に往事を語る。少女歌を吟じて青年に山野の逝を勸む(八の五―十四)

女の家にて異母兄弟新夫婦を祝ふ、少女歌を吟じて青年に山野の逝を勸む(八の五―十四)

【解說法】　此書の解說法に三あり、即ち譬喩的、摸型的、知字的是也。(一)譬喩的　之を譬喩也と見て解き、其中に寓意を發見せんとする者にして、タルガムは此法を用ゐ、此書中には埃及を出でしより以來の以色列人の歷史を包含せりと說けり。基督教世初代の教父も亦此法を採用し、オリゲンの如きはソロモンを以て基督に喩へ、シュラムの少女を以て教會に喩へたる者也となせり。然れ共此書中には此詩の譬喩たることを明指せる者なし、之を此の如く說きて詳細の點まで應用せんとする時は、從に技巧に流るゝの外なし。(二)摸型的　監督ロリスは此書はソロモン王がパロの女と婚姻せる事實に依り、基督が異邦人の中より撰みたる教會と結婚せりとの事を表したる者也と說けり。近世の學者の中にも此書を以て單に人情を記したる者也となすを好まず、之を摸型的に說明せんとする者少からず。即ちアイヽは之を以てエホバの其民に對する愛を表したる者也とし、モセス、スチュアルトは人が神に對する愛を表したる者也とし、デリッチ及びキングスベリーは基督の教會に對する愛を表したる者也となせり。此解說は譬喩的解說に優れ共、此詩中には此の如き解說法を明指せる者一もあるなし。舊寬聖書中に保存せられたる文錄は、悉く神もしくは基督のことを說きたる者也と假定せるより來りたるに外ならず。且以上の二方法は、此詩を以てソロモン王及びシュラムの少女二人の演劇也となして解說したる者なれ共、エヴルドの說に從ひ、之をソロモン王、シュラムの少女及び青年牧羊者三人の演劇として解說する時は、此解說は無意義となるべし。(三)知字的　是れエヴルド以來近世學者の一般に採用する處の方法にして、此書を宗教文學として見、シュラム農家の少女が、女王と成るべき程の名譽を以て試みられたりしに拘はらず、其聽定の情人青年牧羊者に對する愛を貫き、其身を汚さずしした歌へる愛歌也と解說す。是れ自然の解說にして、作者本來の意は猶太土代の貴族的邪惡なる不正なる戀愛の中に聖戀愛あり

しことを說きて、男女眞正の愛情の如何なる者なるやを教へんとするに在りしなるべし。

【著者及び著作の時代】　此書の著者及び著作の時代に關しては古來諸說ありて一定せず。傳說に依れば著者はソロモン也と云ひ、本文一の一にもソロモンの歌と記したれ共、此は後世の攙入に過ぎず。此書中には「アラメイック」語を用ゐたる處少からず、且本書の主人公はシュラムの處女にして、作者は淸き田舍と汚れたる都會とを比較して、神の選民は却て田舍に多く、ソロモン宮廷の雲の如き宮女も、其純潔なる愛に於て一の田舍女に及ばざることを論じたる者なれば、之を以て北部イスラエル文學者の作也となす方自然也。書中テルザとエルサレムとを共に榮榮なる都として記せるにより、此書を以てテルザが北王國の首都たりし時代(王上十四の十七―十六の廿三)即ち紀元前十世紀の作也となす者あれ共、テルザは其後も尙盛大なりしと云へば(王下十五の十四)之に依て直ちに時代を確定し難し。アラメイック語の混入(?)より見れば、或は巴比倫囚虜以後の作なるやも知ると可ず。

【參考書】　デリッチ『舊約書註釋』、エヴルド『舊約聖書の詩人』、ギンスブルグ『雅歌論』、スミス『雅歌論』(英國百科全書中)チェーテ『雅歌論』(聖書字彙中)、グリフィス『荊棘中の百合花』、リーデル『雅歌』、ドライヴェル『舊約文學概論』、ルース『舊約文學史』。

學派　神學上の　Schools in Theology.

【解說】　神學上の學派は宇宙の根本問題、又は神の權力、基督の性格、自由意志、聖書の說明の如き特殊の問題に關する學說の異同より起る。ノスチック派は基督教最初の學派にして、宗教に哲學的基礎を與へんとして起れり。第二世紀以後に榮へたる小亞細亞學派は信仰の堅固を以て、亞歷山學派は哲學的思辨を以て、アンテオク學派は聖書の批評的說明を以て顯はる。基督の性格に關しては、アリウス、アポリナリス等の諸派あり、自由意志に關しては、前にアウガスチヌス及びペラギウス、後にカルヴィン及びアルミニウス諸派對立せり。近代著名なるチカピンゲン派は初代教會の歷史に一新見解を立て、リッチュル派は歷史的基督を以て基督教唯一の基礎と爲せり。

學者　Scribes (Γρ. γραμματεῖς literatus).

【術語】　耶蘇在世當時の猶太人の敬神の甚だ形式的律法的にして、敬虔なる猶太人の全生活の嚴格に律法の支配する所となれり。彼等以爲らく、律法と突通する所に存するに非ず、神の前に律法に依りて正當なる生活をなすに在り、律法を愛することは敬虔の第一要素にして律法に一致することは一切正義の標準と本源也と。

エヴラ、ネヘミヤ時代より慣を費せし此の律法的傾向は、特別に律法の研究と註疏に熱中する一派の人士を起すに至れり。左れ共初代の學者等は淸一の點に於て新約時代の學者等と同一視すべきにあらず。後者は重に法律家にして、前者は宗教文學者即ち聖書殊に律法に關する膨寫者稿錄者學者解釋者等なり。猶太の傳說に從へばエヴラは初代の學者即ち律法の註疏家の大撰述なりしと云ふ(剛七の六、十一、十二、尼八の一、四、九、十三、十二の廿六、廿六)。斯くてエヴラの直接相續者起りて、希伯來文學に無學なる多數の普通人民に以色列の神聖なる文學を說明し、且律法を信仰并に生活の規則となさんとして

爾來に從事するに至れり。然れ共マカビー朝時迄の律法に服從する精神并に態度には、後代の猶太教主義の偏狹固陋の弊害は存せざりき。

エヴラ自身の如く學者等は本來祭司及び利未族中に定められしが、敬虔なる普通信徒も自然に律法の研究に從事するに至れり。故に祭司の外に關係的獨立の態度を以て律法の註解者たる公職を見るに至れり。希臘時代には此の獨立は一般の祭司職に反抗するに至りしも、祭司の貴族政治に傾きたる者ありて純先の律法と習慣とを疎略するに至れり。アンチオカス、エピファネスの猶太宗教に對する高壓手段は其が運命の危機を齎らしければ、學者の律法に對する熱心は一層其の度を增し獨ム偏狹の弊害に陷るに至れり。マッカビース朝に及びて彼等の偏狹は益々激烈となりて彼等はパリサイ宗を應じに至れり。新約時代に於て彼等は久律法家、博士、教法師と稱せられ、此等の三名稱は殆ど同意味に使用せられたり。彼等はパリサイ人の學者と(可二の十六)して敬稱せらるゝことあるも、實際に於てはパリサイ人として同一視に屬する者なり。彼等の最も大なる活動地はユダヤにしてガリラヤにも及び、恐らくディヤスポラにも至りしならんといふ。彼等は何處に住するとも律法に對する熱心は缺く可からざる要素なりき。猶太人の會堂に於て集會者の中聖書を朗讀し且說明するのみ成るべき者あるも學者の出席せし際は自然に學者の義務なりき(可一の廿二)學者は名譽心強くして特に其の弟子等より之を得んことに慕心せり(太廿三の五、十一、可十二の三十八、路十一の四十三、四十五、二十の四十六)而して彼等は普通ラビ

《我主』の義)の敬稱を受けたり。彼等の職分は絶對的と云ふ程には非ざれ共律法の研究を以て主要の義務となす。之れに關する彼等の職分は三種となる。(一)理論的に律法其者の發達を謀ること。(二)其の弟子等に向て律法を教ゆること。(三)『サンヒドリン』及び他の地方審判所に於て書判者たること等是れ也。

ガザ Gaza. 【地名】 埃及とパレスチナとの境に接する地中海岸の一市、今のガザ (Gazzah) 是也。アブラハムの時代には迦南文明の中心にして、迦南の以色列に滅ぼされて後は、ユダ支派の占領する所となれり (書十五の四十七)。後ペリシテ人に奪はれ、サムソン、ソロモン、預言者、亞歷山大王、トレミー、マッカビース、ヘロデ大王及び羅馬人の歷史に著名の地位を占めたり。六三四年アラブ人のために滅され、後十字軍に依りて一度回復せられしが、一一七〇年再びサラディンのために略せられたり。

ガスパラン アジェノア 伯爵 Gasparin, Agénor, Comte de 【人名】 一八一〇—七一 佛國の新教々會の普通信徒の名士。若き時は政治に關係し代議士の議員ともなりぬ。されど最も宗教の事に趣味を有し、一八四六年『基督教と偶像教』を著はし、改革教會大會に列してはモノドと共に、對定せる教義の必要を唱へたり。終りの二十年間はウェヂゲァにて送りしが、其の雄辯は善く福音的基督教の振興を助くる所ありたり。他にも多くの著書あり。妻また美はしき思想を有する著作家なりき。

ガスリー トマス Guthrie, Thomas, D. D. 【人名】 一八〇三—七三 蘇國の神學者又博愛家。ブルキンの學校及びエヂンバラ大學にて教育を受け、巴理にて醫學を學ぶ。一八二五年説教者の准允を受け、二三の地位を經て一八四〇年セントウヨンの新設教會の牧師に任ぜられしも、同教會解散し、自由教會に轉じ、自由セントウヨン教會の教師となる。一八六四年に至り疾病のため退職し『日曜雜誌』の編輯者となれり。ガスリーの最も秀でしは其の説教なりき。好んで聞解的の説明をなし、其の態度の質朴なるさ、其の辯舌の次第に熱し行きて、而も自失するに至らざるとに甚だ深き印象を聽者に與ふるを常とせり。ガスリーは又博愛家としても大なる一人なり。牧師の地位を有しつゝエヂンバラのカウゲート貧民窟の狀態を改良せんと企て、先づ貧民學校のために力を盡しぬ。貧民學校の必要が世に切に感ぜらるゝに至りしはガスリーの力に由ると謂て可なり。彼は又禁酒事業に熱心し、其の有力者たり。彼は又チャルマースの地方區劃制度に倣ひて、エヂンバラ諸教會の設立に勉め、之をして今日の盛況ある基を立てしめたり。彼は又巨額の會員を募りて自由教會牧師等の狀態の進歩を謀り、惡を正し不幸なる者を救ひ、貧者の助言者たり和め倒れたるを起たしむる途を講ずるの助言者たりき。

ガダラ　ガタラ人の地 (ピト) 【地名】 ガダラ人の地は、耶蘇が鬼を逐出したる奇跡に關聯し、唯一回聖書に記されたるのみ (太八の廿八—可五の一、路八の廿六) 而して此奇跡の行はれたる海岸の都市(まち)が、果してゲサレ湖よりも少くも六哩離れたるガダラ市と同一なりや否疑はし。尤も奇跡の行はれたる地は、ガダラ管下の或地方に在りしならんと想像するを得べきも、ヨセフアスの記す處に依れば、ガダラはペリアの首府也。於是奇跡はガダラ、ゲルゲサ兩市管轄の境に於て行はれ、豚の飼主は兩市に屬したるならんといふものあり。又トムソンは馬太は此地方より來りしことなれば、此地方の事を熟知せしなるべく、彼が之をゲルゲサと記せしは正當也、馬可及び路加は此地方のことを熟知せざりしが、之をガダラ人の地と云ひ、遠方の讀者に奇跡の行はれしは、蓋豫定せるべしと云へり。

ガダラ市は聖書の歷史には別に關係なしと雖も『ミシナ』に依れば、ヨシュア此處に城壁を築きたりしといふ。デカポリスと呼ばれたる地の一部分にして (太四の廿五) 其住民は多く異教徒なりしが、後一たび基督教の監督所在地となりたりき。其滅亡の時日及び原因は明ならず。現今のウム、カイスと稱する村落は其遺跡也といふ。

ガテーカル トマス Gataker, Thomas 【人名】 一五七四—一六五四 英國の神學者。餓橋の聖ヨハネ、カレッヂに學び、一五九九年新設のシドニー・カレッヂのフェローとなり、一六〇一年リンコルンス、カレッヂの説教者となり、一六〇一年サアハイスに移り、四三年議會より神學者會議に列席すべき命を蒙り。トリニチー、カレッヂの長に任ぜられ、又之より排せらる。學問深くして著書多く、其の『獵の性質及用法』は遊戯的の獵は差支へなけれど、況ひとして之を用ふるの非なるを敎へしものなるが、多くの議論を呼び起したり。此外『晩餐化體説論評』『信仰小問答』『説教集』其他の著あり。

ガーディナル スチーフェン Gardiner, Stephen 【人名】 一四八三—一五五五 英國ウインチェストルの監督、宗教改革の反對者。餓橋の卒業者、ヘンリー八世に事へ、カザリン離婚問題の

突港に關係する所多く、法王クレメント七世の朝に使し、又『デ、ベラ、オベデエンシア』を著はして王の主上權を唱ふ。然れども新教を喜ばず、エドワルド六世の時改革に反對のため獄に投ぜられ、五年在獄す。メリー位に即きて免され、舊の如く監督とせられ、又大尚書とせらる。後自らは好まざりしもフイリップと結婚問題に就て突港す。彼は初め新教徒の迫害を喜びしも、後かゝることなればボンナーに讓りぬ。其の能力ある人なりしことは治績に由て知らる。必ずしも或史家の傳ふる如き惡むべき人物にはあらざるが如し。

ガド Gad. 【人名】 以色列十二支派の一。『以色列の支派』の條を見よ。

ガド Gad (ガド, *daiwkwoy, Tuyy*). 【靈名】 原語『ガド』は『福』の義なれば、元來形容詞なるもの神の名となりたる者なるべく、古代後斯語の神は『バガ』にして、サンスクリットの『バガ』は『福』の義なれば、其起源は蓋し同一なるべし。此神は古昔廣く拜まれたる者の如く、スリア人が之を祭みたりしことは、レアの神ゴルバ、ヤコブに子を產みし時、レア『福來れり』と云ひて、其名をガドと名けたりしに依りて推知すべし (創世の十一) 尤も巴比倫文籍の中にはガドの名見えざるを以て見れば、以色列人が迦南の語を傳へしものなるべく、而して彼等は巴比倫人、アッスリヤ人等が其神になせしが如く、ガドに机を供へたりき (賽六十五の十一)。迦南人がガドを拜みたりしことは、バアルガド (書十一の十七十二の七、十三の五)、ミガダルガド (十五の世七) など云へる地あるに依りて知るべし。天文學者の中にはガドを以て星星ヴェセトル (木星) と同一視する者あれ共、思ふに此は晩代の考なるべし。

ガブリエル Gabriel (ガブリエル, *Γαβριήλ*) 【靈名】 原語『神の人』の義。預言者ダニエルに牡羊と牡山羊との異象を説明し、七十年に就て預言し (但八の十六、九の廿一) 又バプテスマのヨハネと耶蘇との誕生を告げし天使 (路一の十九、廿六) にして、エノク書 (九章) に依れば、ミカエル、ウリエル、ラファエルと共に四大天使長の一也。聖書以後の文籍には重要の地位を占め、『プスウド、ヨナタン』には彼はヨセフを其兄弟に導き (創世七の十五)、又ミカエル、ウリエル、ヨフィエル、エフェフィア及びメトラトロンと共にモーセの屍を葬れりと云ひ、『タルガム』にはセナケリブの軍をうちたる天使也と云へり (代下廿二の廿一)。『コーラン』には天啓の仲保者として記さる。故に回教徒は彼を『聖靈』又は『眞理の靈』と呼ぶ。

ガブリエル シオニタ Gabriel Sionita 【人名】 一五七七—一六四八 レバノン山の村落に生れ、羅馬にて教育せられ、一六一四年巴理の佛蘭西學院の東邦語教授となり、ル、セーの諸國語共譯聖書中の亞剌比亞譯スリヤ譯を完成す、亞剌比亞、拉典、及太利諸語の著書多し。

ガブレル ヨハン フィリップ Gabler, Johann Philipp 【人名】 一七五三—一八二六 獨逸の唯理派神學者。アルトルフ及びエナの教授に歷任、其の大事業はアイヒホルンの『初代史』を編纂せしことなり。其他にも小論文數多を書けり。唯理派なれど謹愼敬虔なりしこと、ヘルデルに似たり。

ガマリエル Gamaliel. 【人名】 紀元第一世紀初半に出でたるパリサイ宗徒にして、有名なる猶太のラビ。其孫なるヤブネのガマリエルと區別するため、通常長老ガマリエルと稱せらる。『タルムッド』には一般に彼を割禮し『長老ガマリエル死して後律法の光榮去れり』と云へり。彼等の云ふ處に依れば、彼はテベリヤ、カリゲラ、クラヴデオ諸帝の在世中猶太サンヒドリンの議長なりしとのことなれ共疑はし。使徒行傳に依れば、彼は唯サンヒドリンの一會員に過ざりしが如し。新約の傳ふる處に依れば、彼は伊徒保羅の教師にして (徒廿二の三) 基督教に對しては頗る寛大なる態度を取りたり。即ち彼はサンヒドリンの會員に向ひ、もし基督教にして神より出でなば人之を滅ぼすこと能はず、もし人より出でなば自ら滅亡すべければ、之を自然に任すべしとのことを助言せり (五の世四、世九)。基督教の傳説に依れば、彼はニコデモの甥にして、後基督教に改宗し、彼得及び約翰より洗禮を受けたりとのことなれ共、タルムッドの云ふ處と一致せず、作話に過ぎざるべし。

ガラテヤ　ガラテヤ人 (ピト) 『加拉太書』の條を見よ。

加拉太書 (ガラヤシヨ) 【經名】 Epistle to the Galatians. 新約聖書中の一書。使徒保羅がガラテヤに在る諸教會に贈りたる書翰。

【此書の贈られたる地方】 當時ガラテヤと稱する地方二箇處あり、一は小亞細亞の北部に在りて、普通ガラテヤと稱せられたるケルト民族の住せる地方を指し、他は羅馬領ガラテヤを總稱し、北は黑海より南は殆ど地中海にまで達する廣大なる邦土を含蓄せり。後者をガラテヤと唱へたる所以は、當時羅馬政府が公務上の名稱として此地方をガラテヤと呼びたりしがためにして、此廣大なる領土の中にはフルギヤ、ルカオニヤ、及びピシデヤ等の部分を包容したりき。翻も保羅が此書翰を贈りたるガラテヤ人と

は、何れの地方の人民を指せる者なりや、之に關して二說あり。監督ライトフートは北ガラテヤ說を主張し、ドッグ其他の學者も此說を贊承せり。然るにハウスラッス及びレナンは南ガラテヤ說を唱へ、近時小亞細亞の研究に於て最も有名なる博士ラムセーも熱心に此說を主張せり。北ガラテヤ說を主張する者は謂へらく、使徒行傳の地名は普通の意義に從て、羅馬の名稱を用ゐたり、故にガラテヤなる名稱も古昔の地理的區分に依り、北ガラテヤを指せりと解する方適當にして、且自然也。然れ共吾人は之に依て保羅は羅馬の名稱を用ゐさりしと斷言すること能はず。既に當時北は黑海より南は地中海に達する羅馬の領土を稱して、ガラテヤと呼びたることなれば、ガラテヤなる名は名譽ある稱となりたりき。去れば保羅が其書翰を贈るに當りて此名譽ある名稱を用ゐたりしと解するは、決して不當の事に非ず。或は曰く、然らば何ぞ故に使徒行傳に於て、ルカオニヤ、ピシデヤ、フルギヤ等の地名は、ガラテヤ以外のものゝ如く用ゐられたりしやと（徒十三の十四、十四の六、廿四、十六の六）之に答ること容易也。即ち使徒行傳の著者は、單に地理上の見地に依りて此地方を稱呼し、且保羅の道筋を詳に叙述する必要より此の如くなしたる也（徒十六の六に『フルギヤとガラテヤの地を過ぎし時』とありて、一見フルギヤとガラテヤとは相異れる二地方の如くなれ共、是れ單に一の地方を指示する二箇の形容詞を用ゐたる者にして、二箇の異りたる地方を示せるに非ず。是れチッセンドルフ。ウエストコット等近世有名なる學者の皆承認する所也）或は曰く、當時北ガラテヤに住したりし者はケルト民族にして、彼等が酒を嗜み貪婪酷くことを知らず、虚名を好み爭鬪を事とし、輕佻浮薄にして移り易りしことは、古の史家の證する處にして、此書に示す處頗る之に符合する所の者ありと。然れ共保羅が此書中に數へたる惡德はケルト民族のみ特有せる者に非ずして、南ガラテヤに在ては恐くはケルト民族よりも更に大なる番鬼的惡風と稱太的要素とを有したりしなるべし。故に之を以て此書の北ガラテヤに贈られたる證となすべからず。寧ろ其反證となすを得べし。

北ガラテヤ說の困難は、當時保羅が其地方に傳道したりしと信ずべき形迹甚だ乏しきに在り。使十三、四章に記せる保羅の第一回傳道旅行は、南ガラテヤ地方を傳道したりし記事にして、彼が此時北ガラテヤに傳道したりし形迹なきと其だ明也。吾人の疑問は第二回及び第三回の旅行に於て、保羅が北ガラテヤに傳道したりし形迹ありや否やとの事也。使十六章の初は亞細亞に於る第二回傳道の記事にして、其四―六節の本文は頗る不明了なれ共、六節に『彼等フルギアとガラテヤの地を過ぎたり』とあるは、四、五節に含まれたる事實を地理的に反復したる者にて、四、五節は一節に於て叙述せるルステラ、デルベ等南ガラテヤを通してイコニウム、アンテオケ迄の傳道事業を記載したる者也。故に六節は一節の記事より地理的叙述を詳細、併せてルステラ以後の旅行を記したるもの也。故に吾人は此本文に從ひ、保羅はシラスとテモテを携へ、ルステラを出でし後暫くの間此地方の諸市色に時日を費し、保羅が曾て道を傳へて多くの信者と朋友とを有したりしイコニウム、アンテオケに於て亞細亞に道を傳ふることを聖靈に依りて禁められたれば、當初の計劃を變じて轉りて北部の諸國に道を傳へんと欲し、先づムシヤに到へる處に至り（邦譯に『近づき』とあるは『對へる處』と譯すべし）尚ビテニヤに往かんとせしが、耶蘇の靈之を許さざりければ、再び方向を西に轉じ、ムシヤを經てトロアスに下り、此處より航海してマセドニアに渡れりと解すべし。然るに北ガラテヤ說を主張する者は想像すらく、保羅は先づルステラを發しイコニウムに進りてアンテオケに至り、此處にて亞細亞に道を傳ふることを禁ぜられ、終に遠くビテニヤ、アマストリスの東部及び其周圍の地に道を傳へんとの目的を以て大陸を經過して北に進み、それより北ガラテヤの首府なるアンシラを經てアマストリス道に向ひ、而して此地方に於て病を得（加四の十三）止むを得ずビテニヤ傳道を見合せ、ガラテヤに赴き、それより再びビテニヤに向て進み、ムシヤに對する處迄來りし時に、ビテニヤに入ることを禁ぜられ、ムシヤの南なるガラテヤの都市に道を傳へんと欲せば、幾多の時日を費さるを得ず。加ふるに論者の想像する如く、保羅北ガラテヤに於て病に罹りたりしとせば、必ずや少からざる時日を費に費せりと假定せざるべからず。然るに事實此傳道旅行に要せられたりしとして提出せられたる普通一般の年代史に於ては、ガラテヤを編音の道に歸せしむるを得たるが如き大事業を寄るゝの餘地なを有せず。且北ガラテヤ說に從へば保羅は北ガラテヤの首府アンシラに於て病に罹り、長き日子を疲勞の旅路に費したりしとなさるを得ず。然れ共上部ガラテヤの北方は寒冷不毛の地にして健康に適せざりしといふ。然るに保羅はガラテヤ人に告げて『義に我れ肉體病りしが故に曾て汝に編音を傳へしことは曾て之を知へり（四の十三）去れば保羅がガラテヤに來りしは、其肉體

病かりしがためなりしを知るべし。保羅が病臥を以て此冱寒不毛の北ガラテヤに來り、第二傳道の如く長くして勞力多き事業を成就したりしと想像するは頗る難し。且吾人は第二旅行の間所謂北ガラテヤ宣教の中に在りて、實際保羅が病に罹りたりしと想像するに足るべき事實を發見すること能はず。從て第二旅行に於て保羅が北ガラテヤに傳道したりしとの形迹をも發見すること能はず。然らば第三旅行に於ては如何。使十八の廿三に曰く『ガラテヤ及びフルギアの地を逐次に經て凡ての弟子等を堅ふせり』と此言も亦甚だ不明了にして歸し難しと雖も、ガラテヤなる文字は十六の六と同じく形容詞にして、ガラテヤに附屬せるフルギアの部分を指せるに外ならず。故に吾人は此處にも保羅が北ガラテヤに傳道したりし形迹を發見すること能はず。此の如く吾人は何れの部分に在ても保羅が曾て北ガラテヤに宣教したりしとの事實を確證するに足る者あるを見ず。去れば此書が羅馬領ガラテヤに在る諸教會に贈られたる者なること明也。

【此書の書かれたる狀態】　保羅の初めてガラテヤに傳道したりしは、其第一回の傳道旅行を爲せる時、パムフリアのペルゲよりピシデアのアンテオケに至りし時に在り（徒十三の十三、十四）彼がガラテヤに來りしは其肉體病りしがためなりき（加四の十三）パムフリアは低地にして温暖を帶び、氣候甚た惱くして健康に適せず、由來熱病は此地の特産物也とは一度此地方に旅行せし者の均しく證明する處也。保羅が此地に達せしは種々困難なる旅行の後にして、心神共に疲勞を感じたりし時なれば、思ふにペルゲに到着せし時彼は既に一種の熱病に犯されたりしなるべし。故に彼は轉地療養のためピルナバと共に此地を去りてアンテオケに來り、此處に暫らく留りてイコニウムに下り（徒十三の五十一）それよりルステラ、デルベ及び四周の地に遁れ彼處にて福音を傳へたり（徒十四の六、七）是れ即ち保羅がガラテヤに道を傳へし初にして、彼は其第二、第三の傳道旅行に於て再び此地方に來り、其一度道を傳へたりし同志を堅くしたりき（徒十六の一―六、十八の廿三）。初め保羅のガラテヤに傳道したりし時、彼等は保羅の病臥を厭はず同情と愛とを以て彼を款待したりき（四の十四）而して彼等は善く走りたる前途多望のクリスチャンなりき（五の七）保羅は又麼々彼等を見舞ひ以て彼等の信仰を堅くしたりき。然るに經僥なる彼等は長く其信仰を保つこと能はず、保羅の去りし後猶太教の分子教會の內に入り來りて、基督教徒たる者は割禮を受け、又凡て猶太教の儀式を守らざるべからずとのことを論じたりき。於是ガラテヤの教會は動搖して危殆の有樣に顯するに至りたりき。保羅の此書を贈りたるは即ち此等の議論を論じたりしなるべし。

【此書の內容】　保羅は議論を三段に分ちてガラテヤ教會に在る猶太的分子を攻擊せり。即ち一、二章に於て彼の使徒たる職權に關する流言を駁し、三、四章に於て猶太教を基督教と同一の地位に置くの妄を辯じ、五、六章に於て自由と放恣とを混同する議論を論ぜり。先づ彼は其使徒たる職權に關する彼等の流言に對し、三種の答辯をなせり。即ち第一は彼は『人より』に非ず又人に由らず、耶蘇基督と彼を死より蘇らしゝ父なる神に由りて立てられたる使徒也』とのことにして、彼は劈頭第一に其職權を辯護し（一の一）進んで其經歷を略叙し、彼の教訓は人より受けず、又人より教へられず、唯基督の默示に由りて受けたりとの事を明にせり（一の十一―十九）次に彼はエルサレムに在る使徒等も彼の福音の眞實なるかりしがためなりしを知るべし。保羅が病臥を以て此冱寒不毛の北ガラテヤに來り、第二傳道の如く長くして勞力多き事業を成就したりしと想像するは頗る難し。且吾人は第二旅行の間所謂北ガラテヤ宣教の中に在りて、實際保羅が病に罹りたりしと想像するに足るべき事實を發見すること能はず。從て第二旅行に於て保羅が北ガラテヤに傳道したりしとの形迹をも發見すること能はず。然らば第三旅行に於ては如何。使十八の廿三に曰く『ガラテヤ及びフルギアの地を逐次に經て凡ての弟子等を堅ふせり』と此言も亦甚だ不明了にして歸し難しと雖も、ガラテヤなる文字は十六の六と同じく形容詞にして、ガラテヤに附屬せるフルギアの部分を指せるに外ならず。故に吾人は此處にも保羅が北ガラテヤに傳道したりし形迹を發見すること能はず。此の如く吾人は何れの部分に在ても保羅が曾て北ガラテヤに宣教したりしとの事實を確證するに足る者あるを見ず。去れば此書が羅馬領ガラテヤに在る諸教會に贈られたる者なること明也。

【此書の書かれたる狀態】　保羅の初めてガラテヤに傳道したりしは、其第一回の傳道旅行を爲せる時、パムフリアのペルゲよりピシデアのアンテオケに至りし時に在り（徒十三の十三、十四）彼がガラテヤに來りしは其肉體病りしがためなりき（加四の十三）パムフリアは低地にして温暖を帶び、氣候甚た惱くして健康に適せず、由來熱病は此地の特産物也とは一度此地方に旅行せし者の均しく證明する處也。保羅が此地に達せしは種々困難なる旅行の後にして、心神共に疲勞を感じたりし時なれば、思ふにペルゲに到着せし時彼は既に一種の熱病に犯されたりしなるべし。故に彼は轉地療養のためピルナバと共

る為承認したりしのことを述べ(二の一―十)次に彼は彼得が異邦人と食したりしとの事實を擧げて、彼の編會と其使徒たる職の確實なるを証せり(二の一―廿一)斯くて彼は論歩を進めて猶太的臭味を帶べる信徒の妄を駁ぜんとし、先づ彼等の經驗に訴へて曰く『我れ唯此事を爲曾より聞かんとす、爲曾が靈を受けしは律法を行ふに由るか、將聞きて信ずるに由るか』(三の二)と。云ふ迄もなく彼等が救を受けしは聞て信ぜしに由る也。信仰の父アブラハムを見よ、彼の義とせられたるは行爲に由るに非ず、信仰に由りて也。故に信仰に由る者は其猶太人と異邦人たるとを問はず、悉くアブラハムの子孫也(三の六―八)律法は唯に人を義とすること能はざるのみならず、『凡て律法に由る者は詛はるべし、蓋律法の書に載せたる凡ての事を恒に行はざる者は詛はると錄されたれば也』(三の十)且夫れアブラハムに約束し給ひし『契約』は四百三十年後の律法之を棄て其約束の言を徒然(むなしく)するこなを能はざる也、嗣業となることもし律法に由らば約束には由らざるべし、去れど神は約束に由りて之をアブラハムに賜へり』(三の十七、十八)然れ共人或は云はん『然らば律法の用は何ぞ』と。之に答へて曰く『此は基督の來る迄那の為に加へし者也』(三の十九)律法は神の聖と義とを顯はし人をして罪を惡ませしめたり。律法に由らずんば人は罪を惡ずること能はず、然れ共律法は人を活すこと能はず。故に『信仰の來らざる先には吾人律法の下に拘禁られ且守られて其顯はれんとする信仰を俟てり、斯く律法は吾人をして信仰に由りて義とせらるゝことを得せしめんが爲めに、吾人を基督に導く師傅となれり、然れ共今信仰既に來りたれば、吾人は最早師傅の下に在らず』(三の廿三―廿五)如此律法の用は既に終れり。故に吾人今にして尚サーセの律法を守り、猶太教の儀禮を行ふべくんば、是れ『弱く賤しき小學に歸りて、再び之が僕たらん』とする者也(四の九)是れ豈愚蒙の至りに非ずや。

斯くて保羅はアブラハムの二人の子の譬話に依りて、吾人は奴隷の子に非ずして自主の子なることを示し(四の廿一―廿一)最後に吾人の基督に依りて得たる自由と放恣とを混同すべからずとのことを論ぜり。曰く『自由を得るを機會として肉に循ふ勿れ、唯愛を以て互に事ふることをせよ、夫れ己の如く鄰の隣を愛すべし』と云へる此一言凡ての律法を全ふする也』と(五の十三、十四)而して又彼は肉の行と靈の行との別を示し、肉の慾を爲すことなく、靈に由りて歩み、靈のために蒔き、以て靈より永生を獲り取るべき」こを勸告し此書を結べり(五の十六より終りまで)。

【著者及び著作の時代】 此書の著者の保羅なることに關しては古來曾て異論なし。然れ共其時代に就ては正確に證據すべき者なし、故に學者の說二に分る。之を以て寄前の前に書かれたりとなす者と、其後に書かれたりとなす者是也。監督ライトフートは之を以て五九年の冬、若くは五九年の春書かれたる者とせり。此說に從へば此書は保羅がマセドニヤ若くはアカヤに在りし時書きたる者也。教授ツァーフィールド及びラムセーは共に之を以て寄前の書かれたる前、即ち凡そ五五年の頃書かれたる者也と爲す。其重要なる理由は保羅がガラテヤ教會の遠に保羅より離れたりを惜しみたりし事實と(二の保羅より離れたり)を惜しみたりし事實と(二の六)寄前に於て保羅が既に此書を書きたりしことを暗指せる者ありとの事也。即ち寄前十六の一に『聖徒の爲めに金を捐(いと)すことに就てはガラテヤの教會に我が命ぜしが如く爾曾も行ふべし』と云へるは、既に此時ガラテヤ教會に書翰を贈りたりしことを示す者也と云へり。然れ共是れ甚だ薄弱なる証據にして未だ其議論を盡むるに足らず。もし此書翰にして寄前の書かれたる前に書かれたりし者ならば、此書翰の存在したりし証跡尚明白に其中に顯はれざるべからず。夫の律法に依るに非ず、信仰に由りて救はるべしとの教義は、羅馬書に於て一層發達せる者あるを見るべしと雖も、寄前に此教義の明白に顯はれたる者なきを見れば、此書翰はそれよりも後に書かれたる者也と推論せざる可らず。故に吾人はライトフートの云へる如く、寄前の書かれたる後即ち五十八九年の冬に書かれたるもの也と推定することを以て適當也と思惟す。

【參考書】 ライトフート『加拉太書註釋』(一八六五)サンデー『加拉太書註釋』(一八七九)ホルステン『保羅の福音』(一八八〇)ヴィエル『加拉太書註釋』(一八八五)フィンドレー(『エキスポジテル、バイブル中、一八八八)ゲーベル『新約文學』(一八九六)ツァイズ『保羅の書翰』(一八九六)ツァン『新約聖書總論』(一八九七)ラムセー『加拉太の歷史的註釋』(邦文宮川巳作『加拉太書研究』はラムセーの著作に據りて作れる者にして參考とすべし)。

ガリカニズム Gallicanism. 術語 ガリア主義、ガリア人主義と譯す。ガリア人即ちゴール人、即ち今の佛蘭西人が其教會内に於て羅馬法王の權力を制限し、佛國の教會をして法王の拘束を脫せしめんとする主義、傾向を指す。『ガリカン教會』及び『リルトラモンタニズム』の條を見よ。

ガリカン教會 Gallican Church. 羅馬法王に對し其權利を主張したるより、佛蘭西の教會に與へられたる名にして、ガリカン主義と云へば法王の教權に對する比較的獨立の態度をいふ。此主義の極端に達したるは一六八二年ルイ十四世の時、監督ボメエー(Bossuet)指導の下に、佛蘭西の監督三十五人、他の僧侶三十五人が四箇條の宣白書を作りて之に調印したる時に在り。此四箇條の主意は(一)國王及び諸侯伯は其俗政に關しては、教權に從屬すべき者に非ず、又教權に依りて廢立せらるべき者に非ず。(二)法王は宗教大會議の決議に服從せざるべからず。(三)法王は萬國教會の宗教法、又佛國政府及び教會の規則、慣例及び制度を侵す可らず。(四)信仰上の事に關する法王の裁決は、全教會之を承認するに非ざれば最終たるを得ずとの事是也。一六九〇年より一八〇〇年に至る迄法王歷山八世、クレメント十一世及びピウス六世は相續て此宣白を排斥せり。革命の後ナポレオン一世初めて法王と一の契約を結びたりしが(一八〇一)一八一〇年帝は此宣白に示されたる條件を主張し、一八一三年ピウス七世をして遂にポンテーンブリウの契約に調印せしめたり(後ピウスは之を棄却せり)此契約は佛蘭西の監督を任免する法王の權利を承認せざる者也。

ガリカン信仰告白 The Gallican Confession. 信條 一五五九年巴理に開きたる佛蘭西レフォルムド教會第一回佛國大會が、カルヴィンがフランシヨア、デヴレルに送りたる草案に基て起草せるを採用せる者にて、ヴェヂヴァに印刷し、通常佛語聖書に附せらる。一五六一年ポアシー會議開會中、佛國レフォルムド教會の衆一同の代表者は之を公然國王シャール九世に呈せり。一五七一年ラロシュに開きたる第七回佛國大會は其最後の進化なり。之に與へ、爾後佛國レフォルムド教會の信仰箇條としてナント令の廢止せらるゝ時迄、教師は其教職に入るに先ち、教會員は會員となるに先ちて之に記名すべき者となれり。一八七二年の佛國大會は之が教權を回復するには至らざりしが、之を撤廢し佛國レフォルムド教會の信條となし、現に今日之を奉ぜり。

ガリッチン デメトリウス アウグスチン Gallitzin, Demetrius Augustine 人名 父は露西亞の公爵、一八九二〇―一八四一 母より近衛士官として米國に留學を命ぜられしに、使命を棄てゝ天主教に投じ、一七九五年僧職に就き、九九年志願してペンシルバニヤ洲カムブリヤ縣に行き、土地を買ひ又は與へられて天主教殖民地を造るに盡力し、熱心に由て神父スミスの名を得たり。スミスは歸化のために取りたる名なり。露西亞より得べき金を預想して土地を買込みしに、其が贋錢したるより一時非常の困難ありしも、勤勉寛己遂に大方は之を排するを得て其の事業をつゞけたり。

ガリヨ Gallio. 人名 羅馬の哲學者セネカの兄弟、使徒保羅が初めてコリントに往きし時アカヤの代官たりき(徒十八の十二)其實名をマルクス、アンチウス、ノヴァツスと云ふ。其死せる時と有樣とは明ならざれ共、思ふにセネカと同じくネロ帝の爲めに殺されしなるべし。

ガリラヤ Galilee. 地名 舊約に六回記されし共、ガリラヤなる語の起源、及び此名がパレスチナの北部に適用せらるゝに至りし次第等に就ては記す處なし。基督の時代にはヨルダン河西のパレスチナなユダヤ、サマリア、ガリラヤの三部に區別せり。ガリラヤは其最北の地にして、ヨシュアがアセル、ナフタリ、ゼブルン、イッサカルの四支派に分配せし地を包容し、東はヨルダン河を界し、北はレオンテ河に至り、西はツロ領に接し、南はギニアよりカルメル山脈に從ひて地中海に達し、廣袤東西凡そ三十哩南北凡そ六十哩あり。ヨセフスは之を上下の二州に分ち、タツキア、テベリア、カナ、ナザレ等の諸邑を下部ガリラヤに置けり。基督の當時ガリラヤはヘロデ朝の下に在り、ヘロデ朝は羅馬帝の恩顧に依りて其位を保ちたりしと雖も、其猶太人たりしの故を以て、ガリラヤ人は稍や得意を感じたりき。ガリラヤの地は當時土地最も膏腴にして能く耕され、許多の農產物を出したるのみならず、又工業の中心にして、且世界貿易の公道に當りたりき。北方には豐饒なる平野、人煙稠密の村落、恠奇なる丘陵と參差相交り、而してヘルモン山は皚々たる白雪を戴きてガリラヤ群峯を拔き、西に膏腴なる田園、豐富なる市邑相連りて地中海に達し、東は風光明媚のテーベル山を控へ、ヨルダン河岸の屈沃なること又いふ許りなし。南にはエスグラエロンの沃野茫々として限りなく、而して樓閣の間にエフライムの山を望むべし。ガリラヤ一帶の地は實に氣候溫和、土地豐饒にして物產繁殖し人々著息したりしのみならず、風色亦絕佳にして、世界遊歷者の言に依れば世界中最も美麗なる土地の一也といふ。

ガリラヤの民は之をユダヤの民に比するに、概して質朴にして敬虔の念深く、且勤勉にして勇氣に富めり。然れ共思辯の力乏しく口傳的傳說を輕じたりしかば、ユダヤの學者ラビの輕蔑を蒙り『愚なるガリラヤ人』と稱せられたりしといふ。然れ共ガリラヤが殊に名高き所以は宗教史上特異の地位を占むるがため

めにして、即ち此地は基督教搖籃の地也といふも可也。ヨセフ、マリアは此地に住し、耶蘇も亦其一生の大半を此地に送れり。耶蘇の弟子の多くは此地の産にして、傳説に依れば保羅の父母も亦ガリラヤのギスカラといへる處より出でたりといふ。而して聖書に記されたる耶蘇の説教及び奇跡の多くはガリラヤにて爲されたる者にして、カペナウムは實に耶蘇傳道の中心地なりし也。(ヨハネ六59、マタイ四13の條參照)

ガリラヤの海 Sea of Galilee.

地名

聖書には又ゲネサレ湖又テベリアの海と稱す。舊約にはキンネレテの海とあり(民廿四の十一、書十二の三)然れ共最も能く知られたるはガリラヤの海にして、此名新約には五回使用せらる(太四の十八、十五の廿九、可一の十六、七の廿一、約六の一)之をガリラヤの海と稱するは、其ガリラヤに在るがためにして、テベリアの海と稱するは、其西岸にテベリア市あるがためなれ共、之をゲネサレ湖と稱する理由は明ならず、多分キンネレテと同意義なるべしといふ。此湖水の大サは長十三哩、幅は其最も廣き處にて七哩あり。寔も梨實の如き形狀をなし、南端に於て小也。其平面地中海より低きこと七百呎。北には上部ガリラヤ連山の起伏するあり、其後方にはヘルモンの高峯雲表に聳へたり。西峯には豐饒なる耕地層をなして傾斜し、ゲネサレの牧野此處に青絨を布く。東岸は狹く平坦なる沙濱波に洗はれ、背後は兀々たる斷崖崎嶇たる岩壁峭立してガラニテイスの外城を爲す。而して南方はヨルダンの平原に接し各種の植物爰に生育するを見る。高く峙ちたる山は低く流へたる水に映じ、蒼天碧波赤自ら髣髴たる者あり。

ガリレオ Galileo, Galilei.

人名

一五六四—一六四二　伊太利の天文學者、物理學者。一五八八年ピサ大學の講師となり、水秤を發明せしが、教會の疑惑を蒙りたるがため一五九一年ピサを去り、パドヤ大學の數學教授となる(一五九二—一六一〇)一六〇九年和蘭のハンス、リッペルシエーの模型に從ひて望遠鏡を造り、且木星の四衛星を發見す。一六一〇年タスカニ侯コシモに招かれ、フロレンスに住く。然るに彼はコペルニ

ガリラヤの海の景

住説に排ぴたり、ゲネサレの海是也』と云ひて之を稱讃したりしといふ。現今にては甚だ衰へたれ共、當時ガリラヤ湖岸が一筋の樂園なりしことは、プリニーも亦之を云へり。此湖岸に在りし市邑はテベリア、ゲルゲサ、ガマラ、ヒッポス、ユリアス、ベテサイダ、コラヅン、カペナウム　マグダラ、ベタルベル等なりき。ヨルダン河は海の北端に入りて南端に出で、斷へず澱清を流し來れ共、湖の水は常に澄澄にして且甘美也。湖邊の氣象の激變に依り湖上屢々風波を起すことあり、太八の衛四に記せるが如き、ことは今日と雖も亦稀ならず。又湖上には常に多くの船舶を見る。是等は漁舟に非ずんば、貨物又は旅客運送のため、此岸より彼岸に航行する者也。ガリラヤ湖水は猶太人の誇りとなしたる處なれ共、之を不朽ならしめたるはナザレの耶蘇にして彼が足跡は此湖岸至る處に印せらる。即ち彼は湖岸の一市カペナウムを中心となして、此處に其弟子を呼び、此處に多くの人の病を發し、鬼を逐出し、又此處に許多の説教を爲せり。彼がガリラヤの海を渡りしは一再ならず、風波に逢ふて之を鎮めたりしことは最も驚くべき奇跡の一として福音書の記す處也。

カス説を採用し『太陽は世界の中心にして不動也、地球は世界の中心にも非ざれば不動にも非ず、日々其軸に依て回轉すとの説を主張したりしがため、一六一六年宗教裁判所の前に召喚せられ、太陽不動、地球回轉の説は謀妄にして明に聖書に背反する者也と宣告せられ、且同時に此主意に關するコペルニカスの書は禁止せられたり。而して法王パウロ第五世はガリレオに會ずるに今後は譎て此學説を敎へ又は論述するを禁ぐべしとのことを以てし、ガリレオは此宣告に服從すべき旨を約し、フロレンスに近き彼の別莊に退き、從前の如く科學上の研鑽に從事したりしが、一六三二年に至り彼は『世界系統問答』(Dialogues on the Systems of the World)と題する書を著し、再び地動説を唱へたりしを以て、法王ウルバン八世に依りて羅馬に召喚せられ、數回訊問を受けたる後翌年六月異端の宣告を受け、拘禁に處せられ且其著書の發賣を禁ぜられたりしが、同年十二月法王の許を得、假放還人としてフロレンスに近きアルセトリの別莊に歸り、其友と共に其好める科學上の研鑽に從事せり。其有名なる大著『新科學問答』(Dialogues of the New Sciences)を述作せるは實に此地に於てなせる也。晩年彼は明を失ひフロレンスに移住し、其處にて歿せり。

ガル子ット ヘンリー ハイランド Garnet Henry Highland, D.D.

人名

一八一五—八二　最初の印度人牧師。父はメリーランドにて奴隷たりしが、一八三四年彼を携へて紐育に脱走し、彼は同州ホワイトタウンの勞働學校にて教育を受け、四二年トロイの長老會議にて准允を得多年間教職に勉め、其の高き性格と其の大なる能力とに由て人々に敬はれ、長老教會の有力なる牧師、附近印度人の首領を以て目せられたり。一八六五年二月國民議事堂にて説教す。印度人にして同堂にて説教せしは彼を嚆矢とす。一八八一年ガーフィールドの下にリベリヤ駐劄公使兼領事となせらる。

ガルベルト ジョーバンニ Gualbert, Giovanni.

人名

十一世紀の中頃フィーゾール教領中アベンニヌス山のヴァロムブロサのケノビタ宗を立てし人。僧院中にフラートルス、コンベルス(普通信徒の教役者)を設け、僧侶なして全然思念斯禱に專らなるを得しめたり。一〇九三年死し、百年後聖者となせらる。

ガローデット トマス ホプキンス Gallaudet, Thomas Hopkins, LL.D.

人名

一七八七—一八五一　米國の聾啞教育の開始者。エール、アンドーヴァル兩大學卒業、聾啞教育に趣味を抱き一八一五年歐洲に行きて其の施設を觀察したる後、ハートフォルドの教育所に長となり、一八一七年七人の生徒を收容し、聾啞者ローレン、ル、クレアを助手として教育を開始し、其の勢に由て大なる功を奏し、國内所々に彼の研究に負へる進歩的方法設備を有する同種類の教育所を見るに至れり。一八三〇年健康のため所長職より退きしも尙之を助け、三八年より死するまでハートフォルド所在コンネグチカット精神病養生所の監督となりたり。

キの部

舊カトリック派 The Old Catholics.

宗派名

第十九世紀の末獨逸に於て、ヴァチカン會議の決議に反して起りたる羅馬教會の改革派。其之を稱カトリック派と稱するは、最初の七大會議(七八七年ニカヤ第二會議に至る)の決議を以て、其信仰及び行爲の標準となせるに由る。其起源及び發達の大要左の如し。

【獨逸帝國内に於る舊カトリック派の起源及び發達】　一八七〇年八月の初、ブラウンスベルグ大學の教授ミケリス(Michelis)法王ピウス九世を以て異端者、教會の掠奪者となして攻擊せる公文を發したりしが、其月の終に至りミューニッヒ大學のドローリンゲル(Dollinger)及びフリードリッヒ、ブレスロウ大學のライケンス。ウエベル及びベルシエル、ボン大學のクヌード、ブレーガ大學のホン、シュルトー等有名なる神學者も亦ヴァチカン會議を以て萬國會議に非ずとなし、且其決議を以てカトリック派の教義に反せりとなすの公文を發したり。此公文にはミューニッヒ大學の羅馬教に屬せる四十四人の教授連署したりしが、ブレスロウ、フライブルグ、ウエールツブルグ及びボン諸大學の羅馬教諸教授も亦均しく、ヴァチカン會議の決議に反して抗議し、ケーニガスウインテルに於て開きたる羅馬教信徒の會議は殊に手強き抗議を爲せり。一八七一年一月ドローリンゲルは其大監督の命令に依り、彼はクリスチ

ヤンとし、神學者とし、歴史家とし、國民として、教王無謬説を排斥すること、及び此説の聖書、教父、傳説及び歴史に戻れりとの事は何時にても監督及び神學者の面前にて證明すべしとのことを認めたる書面を作りたりしが、彼はウインナ、ウュールツブルグ、ミュニックと其他より多數の稱賛狀を受け取り、ヴァチカンの決議は國家に危險也とのことを認めたる政府への建白書には一萬二千人の連署を得たり。斯くてドーリンゲルは四月十四日を以て破門せられ、教授ユーベルは劇烈なる答書を大監督に贈れり。而して同年九月舊カトリック派第一回の會議（コンゲレッス）なミュニッヒに開き、獨逸の各地方より五百の代議員列席し、古代カトリック教會の信仰、禮拜及び憲法を固守すること、ヴァチカン會議の決議の無効、及びこれが為め惹起せる破門宣言の無效なることなる全會一致を以て可決し、又ウトレヒト舊カトリック教會を承認し、且希臘教會との合同、及びプロテスタント派との接近を希望する旨を宣言せり。然るに會長ホン、シヨルト博士は牧師を任命して獨立の公拜を起し、且成るべく速に自己の監督政治を設くべしとの案を提出し、ドーリンゲルは之を以てプロテスタント改革者の取りたる方法に倣ひ、新派を造る者なれば程當の處置に非ずとして反對したりしが、大多數を以て可決せられたりしを以て、彼は退て單に多數の意に反對せざる態度を取ることゝなれり。一八七二年コローンに開きたる第二回の會議には英米二國の監督教會、露國の正統教會及び佛、墨、西等より代議員を送り、其熱心なる誠意を表せり。此會議に於て宗教大會及び會衆に關する規則を設け、宗教大會は僧侶及び會員二百人毎に一人を選出する代議員を以て成ること、此大會に於て監督を選舉すること、監督の外に五人の僧侶七人の信徒より成る大會局（シノドスボード）を設け、監督と共に宗教大會の命令の疑議を決すること、牧師は會衆之を選み、監督之を任命すること等の事を定め、一八七三年七月コローンに於て廿二人の僧侶五十五人の信徒を以て成れる會議に於て監督を選び、教授ラインケンス（Reinkens）其選に當り、ボンを以て監督居住地と定めたり。斯くて獨逸舊カトリック派第一回の大會は、三十人の僧侶、五十九人の信徒を以て、一八七四年五月ボンに於て開會し、耳語的懺悔を廢止すること、但し眞心を束縛し、又は時を定めて之を行ふが如きこと勿らしむること、斷食の道德的價値を認むること、但し強制的斷食及び食すべき者と食す可からざる者との區別を廢すること等を議決せり。第二回の大會に於ては國法を以て定めたる婚姻を認むること、但し非基督信徒及び離婚者との婚姻なれば承認せざることを議決し、第三回の大會に於ては獨逸の禮文を採納することに決し、第四回の大會に於ては獨撒祭を爲すに方り會衆の希望に從ひ、自國語を用ゆることを許可すべしとのことを決し、第五回の大會に於ては最初の大會より懸按となれる僧侶の强迫的獨身制廢止を可決せり。而して一八八三年の大會に於ては、獨逸居住の英國教會員には曉鐘の二要素を與ふべきこと、但し自派の會員は當分從前の通り一要素の制を採るべしとのことを議決せり。此派の人々は基督教徒の義務として國家を愛し國法に從ふべしとのことを主張し、プロシヤ、バーデン、ヘッセ諸政府の保護を得たり。一八八五年の調査に依れば、獨逸國に於る此派の教會一〇七箇、僧侶五十六人、會員三萬八千五百人にして、一歩大なる勢力を以て進歩したりしが、後其勢甚だ振はず、以て今日に至れり。

【他の諸國に於ける舊カトリック派】一、瑞西　舊カトリック派（瑞西にてはクリスチヤン、カトリック派と稱す）運動の瑞西に起りたりしは、一八七一年にして、忽ちにして全國に廣まれり。一八七六年オルテンに開きたる大會に於て、教會の禮拜に自國語を用ゆることを許可し、僧侶の强制的獨身制及び信徒の强制的懺悔を廢し、教授ヘルツオグを監督に選擧せり。一八七九年に於ける此派の信徒七百人、僧侶七十二人なりしが、後其數減少せり。

二、墺太利　此國に於ても亦法王無謬説に反對の聲高く、一八七二年僧侶アントンの指導に依りて最初の舊カトリック派教會ウィンナに於て設立せられ、後又ボヘミヤ其他に於て數箇の教會設立せられたり。一八七七年政府の公認を得、一八八〇年其第一回の大會議を開き、教會の禮拜に自國語を用ゆること、强制的懺悔、斷食、獨身制等を廢止するの決議をなせり。

三、以太利　以太利に於ては一八六二年以來、獨逸舊カトリック派運動と同一主義に基き、以太利教會なる者を創立せしが、羅馬聖寂得教會のカノン、カウント、カムペロが一八八一年羅馬法王に反對するの宣言を爲すに至りて、國内大に動搖せり。然れ共彼は羅馬教會に對して忠誠なるべく、且其企圖する處獨逸舊カトリック派と異るなき旨を宣言し、羅馬にカトリック改革派を造らんことを企てたり。一八八三年サヴァレスも同一の態度を取り、一八八六年にはレニールも亦法王より離れて同一歩調を取るに至れり。

尚之と均しき運動、佛蘭西、西班牙及び墨其古にも起りたれ共、何れの國に在りても此運動最初の如く

盛ならず。

舊教（キウケウ）『羅馬教』及び『希臘教』の條を見よ。

救拯學又は救濟論（キウジヨウガクまたはキウサイロン）Soteriology.　**學科名**

基督教神學の一科にして、耶蘇基督の贖罪に依れる人類の救拯を論ずる學科也。然れ共救拯學は耶蘇基督の性格（其化身、神性、人性、一人格に兩性を備ふる事）を論ずる基督論（Soterology 又は Christology）と混同す可からず。又救拯學の中には創造、攝理等に於ける神子の事業を含蓄せず。此學科の中に含める基督の事業に關する概念は、贖罪又は中保なる語に依りて之を表するを得べし。

此學科を論ずるには先づ之を二項に分つを得べし。即ち第一項は基督に於ける贖罪にして、此項に於ては贖罪の事實なること、贖罪の必要なること、贖罪の意義、贖罪の價値及び其效果の及ぶべき範圍等を主として基督の方面より救拯を論じ、第二項は基督に於ける救拯にして、此項に於ては救拯を受くるに必要なる條件、獲得の自由、稱義、新生、確信、成聖、教會等を主として人類の方面より贖罪に浴する方法を論ず。此等に關する教義を知らんとせば前者は『贖罪論』（シヨクザイロン）、後者は『救』の條に就て見るべ一。

救世軍（キウセイグン）The Salvation Army.　**宗派名**

『近世の方法を以て初代基督教會の精神を復興し、世界を基督教化し、迷へる者を救ひ、棄てられたる者を助けんとの計劃を代表せる一大團體の名にして、其歴史は其創立者ウィリヤム、ブース（William Booth）及び其妻カサリン、ブース（一八二九—九〇）の事業と甚る可らざる關係を有す。ウィリヤム、ブースは一八二九年英國ノッチンガムに生れ、其處にて教育を受け、一八五〇年メゾヂスト、ミカ、コンチネション派の教師となり、一八六一年迄傳道したりしが、普通一般の方法にては世の貧窮困苦に惱める多數の人民を救ふこと能はざるを悟り、一八六五年倫敦の貧民窟なる東倫敦に入り、一種特別の方法を以て貧民窟者の救濟に着手せり。是れ即ち今の救世軍の起源にして、ブースが軍隊組織を採用し、軍人の稱號、軍樂、軍服等を用ゐ、之を救世軍と稱したるは、一八七七年耶蘇誕生節少し以前の事なりき。彼等が軍服を纏ひ、旗を立て、行列をなして街頭に讃美歌を歌ひ、戒教をなす等の行爲は、初め世人の嘲笑を蒙り、又其反對と迫害とを受けたりしが、ブースの熱心なる献身的勤勞は次第に世人の認むる所となり、英國に於ける彼の事業は大なる進歩をなし、遂に一九〇四年英國王エドワルドは彼に謁見を賜ひて其事業を嘉稱する旨を述べ、倫敦及びノッチンガム二市は彼に自由市民權を贈るに至れり。而して救世軍の事業は獨り英國に止まらず。一八八二年の末倫敦エキセテル、ホールに開きたる集會に於て、其士官を印度、亞米利加、ニウヂーランド、瑞典、喜望峯等に派遣するの議を決せしが、爾來救世軍の事業は世界各國に蔓延し、今日にては殖民地、屬領等を併せて五十二箇國の廣きに渉り、小隊及び分隊の數七、六八四箇、士官及び軍屬二〇、〇七七人、下士官四五、三二〇人、樂隊員一九、四九八人にして三十箇の國語を以て福音を傳へ、廿四箇の國語を以て定時刊行物を出版す、而して毎歳の費行部數百廿萬部に及ぶといふ。救世軍の標語さしいふべきは『價なしに與へらるゝ凡ての人の救』（a free salvation for all）及び『聖潔』（holiness）の二語也。其政治は中央に於ては獨裁的にして、ブース大將は水營より全世界に於ける救世軍の運動を指揮すれ共、其支營に在りては共和的也。救世軍の兵士たるものは禁酒の誓約をなし、且喫煙をも禁ぜらる。士官のためには士官學校ありて、此處にて其事業に必要なる教育を授く。

救世軍の社會事業は、社會下層に在りて困窮零落したる人々を救濟するは、唯訊教、訪問の如き者のみを以て足れりとす可らず、場合に依りて其肉身上の世話をなすの必要ありとの事より起りたる者にして、ブース大將は一八九〇年『最暗黑の英國及び其救濟策』を公にし、救濟事業の方案を示したりしが、爾來救世軍は之に依りて盛に其社會事業を經營せり。世界に於ける救世軍社會事業部最近の狀況を統計表にて示せば左の如し。

社會事業の士官の數	二、〇九〇
婚人救濟所の數	一〇七
一年間正業に就かしめたる婚人の數	五、五五四
木賃宿及び安料理店の數	二〇五
一年間宿泊者の數	五、〇六九、六六二
一年間食物を捐きし數	八、七五六、七四一
出獄人救濟所の數	一五
授産場及び工場の數	一〇四
勞働紹介所の數	四七
農業部の數	一三
飲酒家感化院其他	九六
育兒院の數	三七
貧民窟屯所	一三二

此等の社會事業經營の費に充てんため、ブース大將は一八八六年『窮己』運動の制を立て、此一運動には救世軍の士官、兵士は勿論、一般の同情者に請ひ特別の儉約をなして其金を集むることゝなせり。一九〇六年此方法に依りて英國にて集めたる金額は七萬二千七百磅以上に上れり。

【日本の救世軍】　英國より派遣せられたる救世軍士官の一隊が始めて日本に到着したるは明治廿八年（一八九五）九月にして、東京を中心として直ちに其運動に着手し、熱心と奮闘とを以て前進し、初めは世人の嘲笑を蒙りしが、其社會事業は頗る世の注意を惹き、今日にては朝野の尊敬と同情とを得、明治四十年四月ブース大將の來朝せし時は朝野擧て之を歓迎したりしのみならず、天皇陛下又之に謁見を賜へり。最近の統計に依れば小隊及び分隊廿七箇、士官百五十人、機關新聞『ときのこゑ』毎週の發行部數一萬に上る。目下救世軍の日本司令官はエステル少將也。邦人にして初めより救世軍のために盡力し之なして今日あらしめたるは山室軍平にして、彼は今救世軍中佐にして其書記長官也。現今傳道事業の外に救世軍の經營せる事業左の如し。

救世軍日本本營

（一）水兵及び水夫館　神戸、横濱の二ヶ處に在り。軍艦又は商船の水兵及び水夫等のために設け、双方にて百十人を宿泊せしむべき設備あり、別に讀書室、食堂、浴殿其他の備あり。

（二）出獄人救濟所　東京に在り、明治廿九年の設立に係り、出獄者に職業を授け、同情と慰藉とを與へ、以て改過遷善の實を擧げしむるを目的とす。

（三）婦人救濟所　醜業に陷らんとする婦人、陷りたる婦人の相談相手、保護者となり之を救濟せんとする者にて、目下東京、大連、廈門の三ヶ處に之を設け、其成績頗る良好也。

（四）木賃宿及び一膳飯　木賃宿霜船屋及び禁酒一膳飯屋は共に東京本所區花町に在り。前者は四十人を止宿せしむべき設備を有す。

（五）勞働紹介所　東京神田區三河町に在り。多くの失業者の爲めに職業の世話をなす。

（六）學生園及び寄宿舍　學生にして救世軍の兵士又は兵士志願者たるものを結合し、救世軍學生園を設け、毎週集會を營み、内に在ては各自の修養をなし、外に向ては男女學生を導くために奬力す。別に學生寄宿舍を設け、學生のために純潔にして宗教的感化ある宿舍を創ふ。

（七）士官學校　東京牛込市ヶ谷に在り、學期は十ヶ月にして救世軍士官を養成す。

（八）出版事業　機關新聞『ときのこゑ』を毎月二回、兒供新聞『少年兵』を毎月一回發行し、其外諸種の書類を出版す。

（九）克己週間と慈謝祭　以上の社會事業及び傳道事業を維持し擴張するため春秋二季に特別献金及び集金をなす。春季に守るを克己週間となし、明治四十一年に於ける此週間の集金は五千圓餘に達し、秋季に守るを慈謝祭とし、同年に於る集金亦四千圓餘に及べり。

（十）諸種の特別運動　以上の外救世軍には女中寄宿舍、愛國隊等の設あり。後者は時々貧苦疾病の人々を訪問し之を慰め助くる等のことを爲す。（救世軍のことに就き尚委しく知らんと欲する者はコーツの『貧民の福音』ブース、タッカーの『ブース大將傳』英文にては『ブース大將傳』日本に於るブース大將傳等の書を見るべし。此條日本に關する部は主として『救世軍一覽』に據る）。

舊約聖書 The Old Testament.　【經名】　舊約は希伯來語を以て記され、猶太人の聖書にして、プロテスタント教會經典の一部分也。希臘譯の中には猶太人が今日經外聖書と稱する者なし含蓄す。羅馬教會も亦之を採用して聖書の中に入れたりと雖も、パレスチナの猶太人が經典として有したりしは、今日吾人が有する三十九卷の文籍のみ。而して彼等は現今の希伯來語聖書と同じく、之を三部に分てり。即ち律法（創世記、出埃及記、利未記、民數紀略、申命記）預言書（約書亞記、士師記、撒母耳前後書、列王紀略上下、以賽亞書、耶利米亞書、以西結書及び十二の小預言書）及び聖文學（詩篇、箴言、約百記、雅歌、路得記、哀歌、傳道の書、以士貼書、但以耳書、以士爾書、尼希米亞書、歷代志略上下）是也。今左に此等の文籍の起源及び發達、并に猶太人及び基督教會に於て此等の文籍の如何に使用せられ、如何に解説せられたりしやに就き其概略を叙すべし。

【起源及び發達】　（一）律法　希伯來語にて之をトラーと稱す。トラーとは古代以色列に於ては、凡て律法又は行爲に關し宗教的教權の與ふる教訓又は判決を指す語なりしが、後此語は斯る教訓を保有する聖書に適用せられ、又遂に舊約最初の五卷の名目となるに至れり。宗教上の禮拜に關する規則を定むるは素より祭司の職なりしが、初代以色列に在ては裁判を執行することも亦祭司の職なりき。故に民は審判を受けんとて祭司の許に往きたりしが、之を稱して『神に問ふ』と云ひ、又祭司の與へたる審判を『神の法度と作法』と稱したりき（出十八の十五、十六）斯くて祭司は神の教訓及び律法の保護者及び教師となり、且最高法廷に於る審判者の一人となりたりき。而して彼等はモーセに溯りて其教訓及び律法の源を求め、且其道統を繼續せしめんがため、凡ての律法はエホバより出でモーセ之を傳へたりとの主義に基き、モーセの名に依りて之を發布せり。思ふに彼等の出したる律令なる者は、其初は單に口頭なる以て之を傳へたるに過ぎず、文化の進むに從ひ之を文書に記すこと至りしなるべし。然れ共何時頃より文書に記すこと初まりたりしや明ならず。思ふにモーセの時既に不完全乍らも文籍に載せられたる律令存在したりしなるべし。然れ共最初の言語又は形狀を保存するは彼等の重要視したる處に非ず、故に時代と狀態との變化に從ひて漸次更改せられたり。今日保存せられたる律法の中最も早く書かれたる者は出廿一廿三、廿四の十四—廿八に載せられたる者也。又其發布に關し確實なることの証明せられ得べき教訓の中最も早く書かれたる者は、申命記若くは其重なる部分にして、是れ即ちヨシア王の第十八年（前六二一）エルサレムの神殿に於て發見せられたる者也（『申命記』の條を見よ）是より以後以色列人民は文籍に載せられたる律法を有し、『夜も晝も之を念ひて其中に錄して律法又は行爲に關し宗教的教權の與ふる教訓又は判決を指す語なりしが、後此語は斯る教訓を保有する聖書に適用せられ、又遂に舊約最初の五卷の名目となるに至れり。宗教上の禮拜に關する規則を定むるは素より祭司の職なりしが、初代以色列に在ては裁判を執行することも亦祭司の職なりき。故に民は審判を受けんとて祭司の許に往きたりしが、之を稱して『神に問ふ』と云ひ、又祭司の與へたる審判を『神の法度と作法』と稱したりき（出十八の十五、十六）斯くて祭司は神の教訓及び律法の保護者及び教師となり、且最高法廷に於る審判者の一人となりたりき。而して彼等はモーセに溯りて其教訓及び律法の源を求め、且其道統を繼續せしめんがため、凡ての律法はエホバより出でモーセ之を傳へたりとの主義に基き、モーセの名に依りて之を發布せり。思ふに彼等の出したる律令なる者は、其初は單に口頭なる以て之を文書に記すこと至りしなるべし。然れ共何時頃より文書に記すこと初まりたりしや明ならず。思ふにモーセの時既に不完全乍らも文籍に載せられたる律令存在したりしなるべし。然れ共最初の言語又は形狀を保存するは彼等の重要視したる處に非ず、故に時代と狀態との變化に從ひて漸次更改せられたり。今日保存せられたる律法の中最も早く書かれたる者は出廿一廿三、廿四の十四—廿八に載せられたる者也。又其發布に關し確實なることの証明せられ得べき教訓の中最も早く書かれたる者は、申命記若くは其重なる部分にして、是れ即ちヨシア王の第十八年（前六二一）エルサレムの神殿に於て發見せられたる者也（『申命記』の條を見よ）是より以後以色列人民は文籍に載せられたる律法を有し、『夜も晝も之を念ひて其中に錄したる所を悉く守りて行へ』と命ぜられたり。斯くてトラーは正式に以色列人民の聖書となるに至りし也。

ヨシア王の宗教改革は失敗に歸し、王はメギッドーの戰に陣歿し、人民は偶像禮拜に陷り、農ならずしてユダ王朝は滅亡せり。於是以色列宗教改革のために申命記以外のものゝ必要起り、律法再編纂の運動開始せられたりき。此運動の消息は以西結書之を傳ふ。エゼキールは神殿及び祭司の神聖を高調し、精細緻密なる宗教的儀式を作り、且國家を教會化し、律法と教例とに依りて國民の生活を支配するに非ざれば國家前途の望なしと論じ、モーセの教へたる所に從て以色列人民のために新律法を作れり。是れ即ち祭司古典と稱する者にして、エズラは之を人民に與へ、人民は之を神の律法として受領せり（尼八—十、前四四四又は四四三）斯くて申命記と此祭司古典とは共に神の律法として權威を有する者となれり。聖文籍を數皆編纂するは『學者』の職掌にして、此『學者』は俘囚時代及び其後に發達し、律法の擁護者となり且之に註釋を附し又は之を自由に敷衍せり。彼等は約書亞記をモーセの六經より離したり。斯く前三世紀迄には律法は其最終の形狀に達せざりき。

（二）預言書　之を二部に分つ。前の預言書（約書亞、士師、撒母耳前後、列王上下）後の預言書（以賽亞、耶利米亞、以西結及び十二小預言書）是也。預言者は感情又は直覺に依り飢饉に達したる神秘的宗教家にして（『預言者』の條を見よ）祭司と同じく古代の教訓及び律法を說明せり。其祭司と異なれるは律例又は法典の形狀に於てせずして、エホバの直接的啓示として警告及び勸誡の形狀に於て之を表白せるに在り。斯くして預言者は國家の良心、歷史の解釋者と

なれり。而して彼等は其初め活ける言語に於て其教訓を傳へ、之を文籍に載することなく爲さゞりしが如し。其之を文籍に載するに至りしは、若人が亞歷、何西阿、以賽亞、米迦等の書に於て見るが如く、前八世紀頃の事也。然れ共此等の書に記載せられたる言語は、如何程迄直接預言者より出でたる者なりや、又如何程迄學者又は聽衆の報告に基きたる者なりや明ならず。イザヤは後の証據として其教訓を保存すべしとのことなニたび命じ(八の十六、卅の八)後百年エレミヤはエホバの命に依りて自ら其言論を錄し(卅六)エゼキールの時代には卷物と云へば預言者の言の義なりき(二の九—三の三)其記錄の今日に傳へられたる預言者の最後は馬拉基也(前四五〇)今日多くの學者は阿巴底亞、約耳、約拿、撒加利亞九—十四及び以賽亞廿四—廿七は希臘時代に書かれたる者也と思惟す。『後の預言書』の編纂せらるゝに至りし特別の原因又は方法に關しては、別に記錄の傳はる者なし。思ふに此事も亦律法に於けると同じく、『學者』の事業なりしなるべし。

歷史的文籍(約書亞、士師、撒母耳前後及び列王上下)が預言書の中に編入せられたるは、其物語の中に預言者的の人々の事蹟の記されたるがためなりしや、又は其著者を以てヨシュア、サムエル、エレミヤ等の人々に歸したりしが爲めなるべし。何れにするも此等の書が預言者的精神を有せる人々の著作なるは疑なく、又此等の書中にはエホバが如何に古代以色列人を取拔び給ひしやを錄し、以て エホバの聖意と性質とを示せり。書中古代の神話及び古譚を存するを見れば、此等の物語が以色列最古の者たるは明白にして、思ふにソロモン王の時代に初まり、後多くの人々の手を經、且學者に依りて體寫保存せられたりしなるべし。此等の材料及び朝廷又は神殿に保存せられたる年代記等を基として、以上の書は前六二一年後編輯せられ、後又祭司及び學者等の改正增補を經て、今日吾人の有する形狀に發達したる者なるべし。『前の預言書』と『後の預言書』とを合せたりしは何時頃のことなりしや、又此等の書は其以前別々に編輯せられし者なりや否明ならず。然れ共此等の書が以色列に於て初めより高き地位を占めたりしは明なること也。其存在に關する最古の證據は前三百年頃書かれた歷代志略上下に之を用ゐたりしに在り。預言書が明白に聖書の一部となりしは前百三十年若くは百八十年の頃也。

(三)聖文學　律法及び預言書よりも後の著作を含む。是れ別に一部をなせる所以の一理由也。但以耳書は其性質よりすれば『後の預言書』に屬すべき者なれ共、其書かれたるはマッカビース時代なりき。其教訓の性質より直ちに神より出でたる者として承認せられたりき。歷代志略上下、以士貼、尼希米亞及び以士帖は『前の預言書』に類似すれ共、之に編入せんには餘り晩く出でたりき。以士貼、尼希米亞二書は歷代志略の筆を措きしより以後猶太教創立の時までの以色列史を錄す。聖書として承認せられたるは思ふに之がため也。路得記も亦然り。歷代志略上下は元來以士貼、尼希米亞二書と結合し、四書共に同一著者の書きたる者なりしを後之を區別せる者也。以士帖書はヒューリム祭のことを說明せる者にして、從て其聖書たること早く承認せられたりき。詩篇、約百記、箴言、傳道書、雅歌及び哀歌は律法及び預言書と異り、天啓の記錄と云はんよりも、寧ろ人の觀察、思索及び渴仰の結果より出でたる者なりしかば、他の書の如く容易に神より出でたる者也との承認を受くる能はざりしが、其內容は素より宗教的にして律法及び預言書と異なる處なし。故に詩篇、哀歌、箴言及び約百記は幾ならずして神の言として承認せらるゝに至りしが、雅歌及び傳道の書はインスピレーションの跡しかく明白ならざりき。雅歌は思ふに元來婚禮の時歌はれたる者を集めたる者にして、希伯來詩の上乘なる者として貴重せられたりしが、後之を以てエホバの以色列國民に對する愛を顯はせる者也として解釋し、斯くして聖書の中に入れられ、之をソロモンの著作に歸したりしが如し。傳道の書が聖書の中に入れられたるは、ソロモン之を作れりと思惟せられたるに依るが如し。此部の文籍が編纂せられたる次第に關しては、預言書と同じく別に記錄の徵すべき者なし。前一三二年に書かれたるジラク書序言に『律法、預言書及び他の書』とあり。『他の書』の意義漠然なるが故に、當時既に此部分は完成せられし者なりや否明ならず。新約全書は舊約の三部分を承認し、エズラ第四書及びヨセファスも亦舊約經典の現狀を承認せり。

【猶太教會に於る舊約】　(一)其保存せられて今日に傳はりし事　舊約聖書は初め羊又はパピラス紙の卷物に書かれたりき。サマリヤ語及び希臘譯の五經が希伯來語の文と相違せる者あるは、其初め未だ聖書の言語及び文字を神聖視するの觀念發達せざりしを證す。然るに後此觀念發達し紀元百年頃に至り、ラビ達は猶太人はモーセの書きたりし者は一語をも變ざりしと云ひ、ヨセファスは何人も聖書を添削し又は改竄する程に大膽なる者なしと云ひ、タルムッドには謄寫者の事業は神聖にして一字を增減すべき者に非ずとのことを記せり。此の如く文字を貴ぶの風起りしと共に、會堂及び學校に於て一定の

ヂプチャル經文を用ゐるの必要生じ來り、エルサレム滅亡(七〇)後猶太教の再興するに及び、ラビ、アキバの盡力に依り、一の經文を採用するもとなれり。如何なる主義に依りて之を採用したりしや明ならざれ共、許多の寫本中より最眞の者を擇びたりしことは疑ふ可らず。然れ共其最眞の者も尙誤謬を免れざりしは論なし。斯くして一定の經文採用後は非常の注意を以て之を傳へ、且精細嚴密に研究し、紙端にマソラと稱する附註を施せり。且人々の讀み易からんために、各語に母音を施し、音調を附し、句を切り、斯くして遂に現今のマソラ經文(Masoretic Text)なる者現出するに至れり。此經文の最古の寫本は九世紀若くは十世紀に成れる者にして、希伯來語の寫本は凡てマソラ經文也。

(二)使用及び解釋　(イ)初代ラビ及びタルムッド時代(前四〇〇—紀元七〇〇)猶太教會に於ては、律法は常に他の部分よりも高きインスピレーションを受けたる者として貴ばれ、且其中には神の聖意の本來の啓示を保有せりと信ぜられたりり。而して預言書及び聖文學は第二位を占めたる者也と思惟せられたれ共、均しく聖書として尊重せられたり。基督の時代には律法と預言書は每安息日に會堂にて讀まれたれ共、聖文學は適當の場合を除きては讀まれざりき。紀元前一世紀の頃小兒に聖書殊に律法を敎ふるため學校設立せられたりしが、律法の研究は凡て他の義務に先つこととなり、且律法を嚴行することは敬神及び愛國の証徵と思惟せられ、人々努めて生活の危機に律法を適用し、舊約の言より敎訓を得んことを心掛けたりき。

斯の如く聖書の意義を研究し、解釋し、適用することを名けてミドラーシムといふ。(『求むる』の義)ミドラーシムの解釋法は聖書の言語が其自然の意味に從て何を意義するやを求むるに非ず、他の句と結合する推論を求むる也。此ミドラーシムは口述を以て傳はり、紀元二世紀に至りて初めて文籍に錄せらるゝに至りしが、其最古の者は『ミシナ(タルムッド)』と稱する律法を解說するに必要なる者とせられ、斯くして基督はモーセより傳はりたりと解せられ、斯くして基督の時代には漸次聖書と同一、若くは聖書以上の權威を有する者となるに至れり。耶蘇が屢々『聞曾の傳說』に依りて神の誡に背けりと云ひて當時の猶太人を譴責せるは即ち是也(太十五の二、三、六、可七の三—十三)其中最も著しき例は安息日に關することにして、舊約に安息日に爲すべからずと規定せる數箇の勤勞をミシナは三十九箇に增加せり。又當時ラビは聖書の言語を以て、人の語る通常の言語と異れりとなし、片言隻語と雖も聖書は柔く縛れたる意義を有せりとなし、アキバの如きは第二世紀の頃熱心に之を敎へたり。又聖書に比喩的解釋を施せる者あり。フィローンの如き其最も著名なる者なれ共、ラビは多く此解釋法を採用せり。此の如く此時代の解釋法には倫理的、靈的價値なきに非ざりしが、舊約の歷史的意義を理解せんには何等の利益なきも與へざりき。

(ロ)後世のラビ時代　第八世紀に至りタルムッド傳說の權威を否み、舊約の如字的解釋を主張せる一派起れり。之をカライズムと云ふ。經文の宗教の義也。此運動はタルムッド派を倒すこと能はざりしが、舊約の研究に大なる刺激を與へ、其結果文法的、註釋的の書物多く著作せらるゝに至れり。此時代(九〇〇—一五〇〇)を猶太註釋の黃金時代と稱す。此運動の先驅をサアディア(九四二)となす。巴比倫に於ける猶太學派の首領にして、當時の用語たりし亞剌比亞語に聖書を飜譯し、之に略註を附せり。彼の目的は理性とタルムッドの傳說とに從て舊約を解釋せんとするに在り。彼に從て聖書を解說せんとする學者續て起りしが、東邦に於る猶太學は衰へ、西歐殊に西班牙之に依りて猶太文學の中心となり、希伯來語の研究此處に起れり。イブン、ヤナク(Ibn Janach. 一〇五〇)は最初の合理的聖書批評家にして、聖書には神的要素あること勿論なれ共、人間の慣例に從て之を解說せざる可らずとのことを唱へたり。彼に次ぎてラシ(一一〇五)イブン、エズラ(一一六七)ダビデ、キムヒ(一二五五)其他の學者相續て起りしが、何れも自然の意義に從て聖書を解說せざる可らずとのことを唱へ、ミドラーシ的解說法を排斥せり。而して當後の註釋家は近代批評的運動を代表せる基督教の聖書學者と同仁流を汲むに至れり。

【基督教會に於る舊約】　(一)經句批評　オリゲン。エローム及びアンテオケ學派が間接に之に關係したりし外、宗教改革以前の基督教會には適當に經句批評と稱すべき者なし。改革家等はマソラ經文を以てインスピレーションを受けて書かれたる者にて、誤謬なしと信じ、改革以後の學者は希伯來語母音點までもインスピレーションを受けたる者也と信じたりき。初めて此說を排したるはカペルス(Cappellus 一六五八)及びモリヌス(Morinus 一六五九)にして、彼等は希伯來語母音點が比較的後世の者なるのみならず、現時のマソラ經文も古代の飜譯を用ゐて改正されたる者也との、ことを明にし、近代經句批評の基礎を據文たり。第十七世紀に於て經句批評の業の勃となりしは、歐國語を以て記されたる聖書也。第

十八世紀に至り、希伯來語寫本の比較研究行はれ、其結果希伯來語寫本は凡て大抵同一也との事明にせられたり。今日にては經句批評及希伯來語の經文と古代の飜譯との比較研究に依りて爲されつゝあり。

(二) 使用及び解釋　(イ) 新約聖書に於る耶蘇及び新約の記者は舊約の天啓及び權威に關し、當時猶太人の一般に抱きたりしと同一の意見を有したりき。即ち彼等は之を聖書と稱し（太廿二の廿九、約五の廿九、羅一の二）聖靈に依りて記されたりと云ひ（彼後一の廿一）爰に彼等の言語の權威の邊據を求めたり。然れ共彼等は之と共に舊約の天啓を以て部分的にして不完全也とせり。即ち耶蘇は自己の教權をモーセの律法以上に置き（太五の廿一以下）保羅は律法を以て福音に劣れりとなし、律法は即ち知らしむる小學也と云ひ（加四の三）希伯來書記者も亦舊約を以て福音に劣れりとなすは唯比較的にして、耶蘇は決して舊約の啓示及び教權を拒否せず『聖言は壞る可らず』と云ひ（約十の廿五）又『律法の一點一劃も拭け盡すして廢ることなし』と云へり（太五の十八）保羅も亦律法の神より出でゝ潔く、義しく且善良なることを認べ（羅七の十二、十四）人を基督に導く師傅となれりと云へり（加三の廿四）希伯來書記者も亦舊約の眞實なることを承認し、基督及び其福音に於て完全に現實せられたりと云へり。此の如く舊約の價値は、基督及び其福音を預表するに在りとせられ、斯くて舊約を以て惡く預言の性質を有する者となすの觀念起れり。此觀念に從て基督及び初代教會の生活に適用すべき言語出來事あり、若くは基督教の教義を慥むるに足る者あれば惡く之を左樣に適用せり。此解說は個々の事實に在ては當らざる者ありと雖も、全體として論ずれば正當の解說たるを失はず。

(ロ) 初代教會に於る(六〇〇年に至る)　イレニウス(二二〇)及びテルチュリアン(二二〇)は如字的解說(二〇二)及びテルチュリアン(二二〇)は如字的解說法を取りたれ共、初代教會は一般に比喩的解說法を極端迄採用し、舊約は基督教々義の要略として、精神的、比喩的に解說すべき者也と爲せり。此說は最初の教會作者の中にも見えたりしが、オリゲン(二五四)に至りて一般に流行するに至れり。オリゲンは聖書には文法的、實際的及び比喩的の三意義ありとなし、文法的意義を排して比喩的意義を取れり。エローム(四二〇)は舊約の歷史を事實に非ずとなすが如き極端に走らざりしかども、尚比喩的解說法を取り、アウガスチン(四三〇)も亦此方法を採用せり。此解說法に反對したるはアンテオケ學派にして、舊約の相違を認め歷史的解說法を採用せしが、チストリウスの異端を採用せしため、幾ならずして滅亡せり。

(ハ) 中世に於る(六〇〇―一五〇〇)　此時期に在ても引續きて比喩的解說法流行し、教會の慣例舊約に預表せられたりと思惟せられたりき。ニコラス、デ、リラ(一三四〇)に至りて、初めて自然的解說の新紀元開けたるを見る。

(ニ) 宗教改革時代(一五〇〇―一六〇〇)　宗教改革家は希伯來語舊約のみを以てインスピレーションを受けたる者也となし、比喩的解說法を排して自然的意義に依りて之を解說し、聖書を說くに傳說又は教會の權威に依らず聖書を以てすべきことを主張せり。然れ共彼等は舊新約に發達の歷程あるを認め、教義の教授に初より、永遠に繼續する者也とせざりし。

(ホ) 改革以後の時代(一六〇〇―一七五〇)　此時代は煩瑣的神學、逐語的インスピレーション說の時代にして、舊約に記せる宗教的眞理のみならず、歷史、科學に言及せる事も惡く誤謬なしとなし、啻も天啓に進歩あるを認めず、基督教々義の根據を同樣に新約及び舊約に求めたり。アルミニアン派の神學者中には、グロチウス(一六四五)の如く此傾向に反し、歷史的解說法に重きを置く者あり。又英國清教徒の中にも舊約の歷史的解說法を取る者ありしか、不幸にして迎歷せられたり。

(ヘ) 近代批評の時代(一七五〇年以後)　批評的運動はプロテスタント以外　信者以外の學者の中に初まれり。即ち佛國の羅馬教徒ペーレール(Peyrere 一六七六)猶太人哲學者スピノザ(Spinoza 一六七七)及び英國自然神論者ホッブス(Hobbes 一六七九)はモーセ五經のモーセの作たるを否み、之を後代の產物となし、羅馬教徒シモン(一七一二)は五經の一人の產に非ざるを指摘せり。然れ共近代舊約の研究は第十八世紀に於る智的運動の一方面にして、此運動の下に舊約は文學として研究せられ初めたり。ヘルデル(Herder 一八〇三)は此方面に於る先驅者にして、セムレル(Semler 一七九一)は歷史的解說法を鎖れ、アストラック(Astruc) 一七六六)は創世記に異れる神の名の使用せらるゝことに依りて、其材料の相違を認め、五經科學的批評の端を開けり。然れ共此等の人々に優りて舊約の文學的研究に影響を與へしは、アストラックを離れて別に創世記の材料を發見したるアイクホルン(Eichhorn 一八二七)也とす。爾後幾多の學者輩出し、其研究の結果、モーセの六經なる者はエホバ古典、エロヒム古典、セイル古典、祭司典を編輯したる者也との事明となり、今日は一般に此說を信ぜり(『モーセの六經』の條を見よ)。其他の書に就ては、以賽亞書は異りたる時代に書かれたる預言を集めたる者也と云ひ、但以耳書はマッカビース時代の作也と云ひ、士師記、撒母耳前後書は諸處相調和せざる物語を編輯せる者也と云ふ說一般に承認せらる。又舊約歷史の觀念も近時大に變化せり。即ち近頃迄は舊約に記されたる物語は眞正の歷史的記錄として承認せられたりしが、近代の思想に從へば、此中には神話及古傳あり。從て之を全く誤謬なしとなし、若くは科學上歷史上惡く信ずべき者也となし難し。

【舊約の永久的價値】　然れ共舊約は宗教上永久の價値を有す。其價値あるは書中に示されたる天啓の單純にして、元始的普遍的宗教の眞理の眞面目に記されたるに在り。(一) 爰には神は哲學的抽象として顧はされず、超絕的なれ共、人類と親密の交通を有し、人類の要求に從ひ熱愛、憐憫を與ふる具象的神格として顧はさる。(二) 人の神に對する關係も亦族長、其他の人々の經歷及び以色列の歷史に就きて描かる。道德的教訓、行爲の法則も亦充分に記載せらる。(三) 舊約は亦希望の書にして、基督に依りて成就せられたる贖を勝利の調を以て記せり。

【參考書】　ドライヴェル(一八九七)　クーニッヒ(一八九三)キーチン(一八八五―八九)ライト(一八九〇)ストラック(一八九八)等の舊約總論及びディルマン(一八九五)シュルツ(一八九六)スメンド(一八九九)等の舊約神學。

舊約聖書神學（きうやくせいしょしんがく）

【學科名】　聖書神學の前半、即ち舊約聖書に顯はれたる宗教并に道德上の思想を歷史的に表明する神學の一科也（聖書神學の如何なるものなるやに就ては其條を見よ）舊約神學は要するにエホバ學にして舊約は以色列の神なるエホバとエホバの民なる以色列と、エホバと以色列との關係即ち教を記したる者なれば、舊約神學を論ずる學者の中には、之を神、人、敎の三部に區別して、此等の觀念の發達を叙する者あれ共、又歷史の時代を區分し、其時代の文學に反映せる國民の宗教思想を叙して其發達の次第を表明する者あり。例之舊約の時期を區分して(一)族長時代、即ちアダムよりモーセに至る時代。(二)モーセの時代、即ちモーセよりサムエル、ダビデに至る時代。(三)神政時代、即ちサムエル、ダビデの時より前八百年頃分離王國の衰頽に至る時代。(四)預言者の時代、即ち前八百年頃よりエグラ、ネヘミヤ、エルサレムを再建するに至る時代。(五)祭司法典の時代、即ちエグラよりアスモニアン朝に至る時代となる。舊約は以色列の神なるエホバの民なる以色列と、エホバと以色列との關係即ち教を記したる者なれば、舊約神學を論ずる學者の中には、之を神、人、敎の三部に區別して、此等の觀念の發達を叙する者あれ共、又歷史の時代を區分し、其時代の文學に反映せる國民の宗教思想を叙して其發達の次第を表明する者あり。例之舊約の時期を區分して(一)族長時代、即ちアダムよりモーセに至る時代。(二)モーセの時代、即ちモーセよりサムエル、ダビデに至る時代。(三)神政時代、即ちサムエル、ダビデの時より前八百年頃分離王國の衰頽に至る時代。(四)預言者の時代、即ち前八百年頃よりエグラ、ネヘミヤ、エルサレムを再建するに至る時代。(五)祭司法典の時代、即ちエグラよりアスモニアン朝に至る時代となる。舊約は以色列の神なるエホバの民なる以色列と、エホバと以色列との關係即ち教を記したる者なれば、舊約神學を論ずる學者の中には、之を神、人、敎の三部に區別して、此等の觀念の發達を叙する者あれ共、又歷史の時代を區分し、其時代の文學に反映せる國民の宗教思想を叙して其發達の次第を表明する者あり。例之舊約の時期を區分して(一)族長時代、即ちアダムよりモーセに至る時代。(二)モーセの時代、即ちモーセよりサムエル、ダビデに至る時代。(三)神政時代、即ちサムエル、ダビデの時より前八百年頃分離王國の衰頽に至る時代。(四)預言者の時代、即ち前八百年頃よりエグラ、ネヘミヤ、エルサレムを再建するに至る時代。(五)祭司法典の時代、即ちエグラよりアスモニアン朝に至る時代となる。舊約は以色列の神なるエホバの民なる以色列と、エホバと以色列との關係即ち教を記したる者なれば、舊約神學を論ずる學者の中には、之を神、人、敎の三部に區別して、此等の觀念の發達を叙する者あれ共、又歷史の時代を區分し、其時代の文學に反映せる國民の宗教思想を叙して其發達の次第を表明する者あり。例之舊約の時期を區分して(一)族長時代、即ちアダムよりモーセに至る時代。(二)モーセの時代、即ちモーセよりサムエル、ダビデに至る時代。(三)神政時代、即ちサムエル、ダビデの時より前八百年頃分離王國の衰頽に至る時代。(四)預言者の時代、即ち前八百年頃よりエグラ、ネヘミヤ、エルサレムを再建するに至る時代。(五)祭司法典の時代、即ちエグラよりアスモニアン朝に至る時代となる。舊約は以色列の神なるエホバの民なる以色列と、エホバと以色列との關係即ち教を記したる者なれば、舊約神學を論ずる學者の中には、之を神、人、敎の三部に區別して、此等の觀念の發達を叙する者あれ共、又歷史の時代を區分し、其時代の文學に反映せる國民の宗教思想を叙して其發達の次第を表明する者あり。例之舊約の時期を區分して(一)族長時代、即ちアダムよりモーセに至る時代。(二)モーセの時代、即ちモーセよりサムエル、ダビデに至る時代。(三)神政時代、即ちサムエル、ダビデの時より前八百年頃分離王國の衰頽に至る時代。(四)預言者の時代、即ち前八百年頃よりエグラ、ネヘミヤ、エルサレムを再建するに至る時代。(五)祭司法典の時代、即ちエグラよりアスモニアン朝に至る時代となる。舊約は以色列の神なるエホバの民なる以色列と、エホバと以色列との關係即ち教を記したる者なれば、舊約神學を論ずる學者の中には、之を神、人、敎の三部に區別して、此等の觀念の發達を叙する者あれ共、又歷史の時代を區分し、其時代の文學に反映せる國民の宗教思想を叙して其發達の次第を表明する者あり。例之舊約の時期を區分して(一)族

舊約聖書總論（きうやくせいしょそうろん）

【學科名】　舊約聖書序論又は緒論とも譯すべし。舊約聖書各卷の性質、結撰、內容、作者、著作の時代及び其由來、目的な研究する學科也。第十九世紀の初に力りゲネシアスが希伯來語研究の新紀元を開きしより、古代以色列文學の研究に其一生を獻げたる學者輩出し、舊約聖書の註釋、經句及び高等批評の上に一大進歩を爲し、從て舊約聖書各卷の歷史的性質明白となれり。舊約聖書總論は即ち舊約聖書の歷史的性質を認め、其各卷の內容、著作の目的等を研究し、且作者及び其時代を定むる者也。

近時世に出でたる舊約聖書總論の中、簡明にして要を得たる者、ドライヴェル博士のものに若く者なし。此書はインテルナショナル、セオロジカル叢書中の一書にして、一八九四年の出版に係り、最も廣く世に行はる。セオロジカル、エジュケートル叢書中のライト博士の著は小なれ共初學の用となすべし。獨逸文にてはケーニッヒ、クイチンを可とす。

舊約聖書の經文（きうやくせいしょのけいぶん）Text of the Old Testament.

【雜語】　爰に經文と稱するは聖書の本文をいふ。

(一) 希伯來語舊約の印刷本　希伯來語聖書の印刷に上りしは詩篇を以て嚆矢となす(一四七七)モーセの五經は一四八二年初めて出版せられ、預言書は一四八五年、聖文學は一四八七年初めて出版せられたるは、一四八八年にして、ソンシノに於て刊行せられたるは、一四八八年に於て(一四九一―九三年)第三版はアレシアに於て(一四九四)出版せられたり。ルーテルは此第三版を用ゐて之を獨逸語に飜譯せり。此舊約には三版共每書點及び發音を附せり。爾後今日に至るまで舊約書の出版せられたる者一々爰に擧げ盡し。第十九世紀に至りてベーア舊約の各卷を別々に出版せり。又色別り批評版と稱する者あり。バウル、ハウプト編輯を監修し、各專門の學者舊約の各卷を擔當せり。今日迄既に出版せられたる者既に十數卷あり。

(二) 舊約の寫本　舊約の寫本に卷物と書物との二種あり。其最も古きは卷物にして、今日にても猶太の會堂にて禮拜の時朗讀せらるゝものは卷物也。此卷物は通常羊皮を用ゐ、又柔皮を用ゐることあり。

巻物の始終には木製の軸あり。讀み終りたる者は之を其始の軸に巻くを常とす。書物の形狀を爲せる寫本には舊約全部を包容する者あり、又は其四部（即ち五經、前の預言書、後の預言書、聖文學）の中一部若くは二部のみを包容する者あり。其材料は羊皮若くは紙にして、其大さは四折版也。大抵の寫本は毎書點及び發音を有す。舊約の寫本は未だ充分に科學的研究を經ず。最も重要なる寫本は左の如し。(一)紀元八九五年モーセ、ベン、アッシェル（Moses ben Asher）の書きたる、前後預言書の寫本。此寫本は今埃及カイロ市カライトの猶太人會堂に在り。(二) בראשית ברא אלהים את השמים ואת הארץ׃ והארץ׃ היתה תהו ובהו וחשך על־פני תהום ורוח אלהים׃ מרחפת על־פני המים׃ ויאמר אלהים יהי אור ויהי׃ אור׃ וירא אלהים את־האור כי־טוב ויבדל אלהים בין׃ האור ובין החשך׃ ויקרא אלהים׃ לאור יום ולחשך׃ קרא לילה ויהי־ערב ויהי־בקר יום אחד׃ פ

現今の希伯來語舊約聖書文　創世記一の一より

ヨロ一二の書きたる聖書。今アレッポーの猶太人之を有す。(三)一〇〇九年サムエル、ベン、ヤコブがカイロ市に於て書きたる聖ペテルスブルグ聖書。(四) Prophetarum posteriorum Codex Babylonicus Petropolitanus 是也。其外尚寫本あれ共眞に古代に關する寫本は甚だ少し。何が故に舊約古代の寫本は左様に少きや。新約の寫本は其數甚だ多きに、舊約寫本の斯く少きや理由如何。蓋し是には二箇の理由あり。其一は中世期殊に十字軍の時代に、猶太人を迫害するに力り、狂信なる基督教徒が舊約の寫本殊にモーセ五經の巻物を少からず破毀せしこと是也。其二は猶太人自ら寫本の多數を匿し、ために喪失したるに在り。タルムッドは既に蠹蝕せるモーセ五經の巻物が如何に聖徒の死屍の下に葬られたりしやを語れり。此風習は後聖書及び聖書以外の寫本に及び、此等の者は會堂の警に匿されたりき。埃及の空氣は乾燥せるが故に、斯くして匿まれたる文書屢々カイロの古市に於て發見せらる。

(三) 舊約の翻譯　希伯來語舊約の古寫本を得ること甚困難なるが故に、此等の寫本以前の舊約經文の性質なる研究せん爲め、古代の翻譯は最も緊要の材料也。古代舊約の翻譯と稱するは七十人譯、タルガム、ペシトー及びエローム譯是也。此等の翻譯に就ては他の條を見よ。

舊約聖書の言語（キウヤクセイショノゲンゴ）　Language of the Old Testament.　**雜話**　舊約聖書の大部分は希伯來語を以て記され、其小部分はアラメイック語を以て記まる。アラメイック語を以て記されたるは即ち申二の四―七の廿八、創四の七―六の十八及び七の十二―廿六に引かれたる文書、并に耶十の十一にして、其外作者が曾もすればアラメイック語に移らんとするが如く見ゆる箇處一にして是らず、此は思ふに謄寫者の誤なるべし。

希伯來語はアッスリア人之を『四の國の語』と云ひ、聖書記者自らは『カナンの方言』（王下十八の廿六、廿八）又は『ユダヤ語』（王下十八の廿六、廿八）と云ひ、ラビは『聖語』又タルガムに對して『經語』學者の言に對して『律法の語』と云ひ、パレスチナのラビは更に之を希伯來語と稱せり。希臘語を用ゆる猶太人も希伯來語の名を用ゐ、初代基督教徒も斯く稱し、此名今日一般の稱となれり。フィローンが之をカルデヤ語と稱せるは誤れり。希伯來語は迦南の以色列方言にして、舊約の外亞歴山以前の以色列方言の現存せる者は、英國牛津アスモレアン圖書館に保存せる分銅の旬及びシロアムの銘にして、ヘゼキア王時代のものなるべしといふ。去れ共最古の者はテル、エル、アマルナ書板にして、此等の書板は紀十五世紀のものなるべしといふ。然れ共迦南語の存在は尚其以前に溯るなる得べし。此語はフェニキヤ人に依りてパレスチナより亞非利加、地中海の諸島并に諸海濱及び西班牙に携へられしが、後希臘語之に代り、拉丁語更に之に代れり。然れ共前五世紀頃迄は尚語られたりしが如し。此語はセミヤック語類に屬し、アラビヤ語と近似す。

今日存在する最古のアラメイック語文書は紀八世紀のもの也。アラメイック語は文法上よりすれば南アラビヤの方言サビアン語に酷似し、單語よりすれば迦南語に酷似す。此語は巴比倫時代に於て既に大に用ゐられたりしを見る。スリヤ、巴比倫、埃及、アラビヤ等にて發見せるアラメイック語の銘に依れば、此語のジラス（聖書のクロス）以前に既に使用せられたりしを知るべし。此語は羅馬帝國時代にも尚東方諸國に於て使用せられ、幾多の方言を發達せり。七世紀に至りアラビヤ語のために其地位を奪はれたりしが、今日に至るも尚メソポタミヤ基督教徒の方言中に之を見るべし。『以色列』の條をも見よ。

舊約聖書の時代（キウヤクセイショノジダイ）　『以色列』の條をも見よ。

舊約聖書の正經（キウヤクセイショノセイケイ）　Old Testament Canon.　**術語**　茲に正經と稱するは、教會が其權威に依りて聖書也と宣言せる書物の謂にして、舊約聖書の正經と云へるは、即ち教會が教義の標準として承認せる書なりふ。

然れ共教會が正經として承認する舊約聖書の目錄は新教と舊教と相同じからず。新教にては我等が通常の英語又は邦語の聖書中に有する三十九卷のみを以て正經と爲せ共、羅馬教會は此外に我等が經外聖書と稱する者をも正經の中に加ふ。且トレントの會議に於ては、凡ての正經は均しくインスピレーションを受けたる者也との事實に重を置き、經外聖書を包容せる正經の目錄を掲げたる後、拉丁譯聖書中に在る書を否む者は呪はるべしとのことを附加せり。之に反し新教各派の教會は、經外聖書を以て教義の標準となさず、ウェストミンスチルの信仰告白は、明に經外聖書が教會に對し何等の權威を有せざる者なるを宣言せり。新教各派が經外聖書を承認せざる所以は、希伯來語聖書の中に之を含有せざると、初代教會の教父等が明に之を正經と區別したりしと、又羅馬教の著作者等が之を引きて煉獄說及び功德說を立てたりしとに基けり。

初代の基督教徒が舊約の正經を猶太教より得たりしは疑ふ可らず。斯く云ふは初め基督教徒が猶太教と分離せる時に、明白に確定せられたる正經を有したりしと云ふに非ず。唯正經の問題に關しては彼等は猶太人の說に從ひしと云ふのみ。サルディスの監督メリト（一七〇）は聖書文學の起りたる國に往き、特別の研究を爲したる後初めて舊約の目錄を擧ぐるを得たりしといふ。亦以て初代基督教會が舊約の正經を自ら決せんとするの念乏しかりしを知るべし。然らば猶太教會は何時如何にして舊約の正經を定めたりしや。吾人が今日舊約の中に有する三十九卷の書は一時に成りたる者に非ずして、幾多の歲月を經て漸次に成りたる者なれば（『舊約聖書』の條を見よ）其正經の定りたるも漸次にして一時の業に非ず。ミドラーシュ及びタルムッドの証する處に依れば、三十九卷の書が正經となりたるは紀元一世紀の終にして、即ちエルサレム滅亡後パレスチナ猶太教の中心となれるヤムニアに紀元九十年頃開かれたる會議に於て、舊約正經の問題最後の決定を爲したりしといふ。エズラ第二書及び史家ヨセファスも亦此說の確實なるを証せり。

舊約聖書歴史（キウヤクセイショレキシ）　History of the O. T.　**學科名**　歴史神學の一科にして、舊約に記載せられたる以色列國民の政治、宗教、道德等の發達を表明する者也。スミスの『舊約聖書歴史』（大小二種あり）ロボルトソンの『歴史、預言及び禮錄』（三卷）等は此主意に關する參考書として推すを得べし。

舊約の年代（キウヤクノネンダイ）　Chronology of the O. T.　**事蹟**　舊約は天地創造の時より、エルサレムのカルデヤ人のために滅ぼされし時に至る迄の年代を編み得べき材料を有す。今便宜のため之を數時期に分ちて左に略述すべし。

(一) 創造より大洪水に至る　此時期の材料は創五の系圖及び七の六に記載せる洪水の年數に於て之を見るべしと雖も、希伯來語聖書、サマリア聖書及び七十人譯の記す處各々異れり。即ち左表の如し、

人名 ／ 次の人の生れたる年、又は死したる年、又は洪水の起りたる年の標	希伯來聖書	サマリア聖書	七十人譯
アダム	一三〇	一三〇	二三〇
セス	一〇五	一〇五	二〇五
エノス	九〇	九〇	一九〇
カイナン	七〇	七〇	一七〇
マハラレル	六五	六五	一六五
ヤレド	一六二	六二	一六二
エノク	六五	六五	一六五
メトセラ	一八七	六七	一六七
ラメク	一八二	五三	一八八
ノア	六〇〇	六〇〇	六〇〇
創造より大洪水迄	一六五六	一三〇七	二二四二

通常希伯來語聖書の數を以て正しとなせ共、近來サマリア聖書の數を以て正しとなす者あり。又希臘化したる猶太人及び初代の基督教會は七十人譯の數を以て正しと爲したりき。然れ共何れを以て正本也となすも、此等の數に歴史的として承認すること能はず。何となれば原始時代には通常に暦と稱すべき者なく、又文字の發明らなければ、生死の年月を精密に計算し記錄すべき筈なければ也。故に吾人は創造より洪水に至るまでの年代に就ては之を知ること得ず。

(二) 大洪水より出埃及に至る　大洪水よりアブラハムの生るゝ迄の時期に就ては、創十一の十―廿六に、創五のそれと均しき系圖を載せたり。而して此時期に關しても三書記す處の年數相同しからず。即

ち左表の如し。

人名 ／ 次の人の出たる頃 ／ 次の出來事の起りたる頃	聖書	サマリア聖書	七十人譯
セム	一〇〇	一〇〇	一〇〇
アルパクサデ	三五	一三五	一三五
ケーナン	—	—	一三〇
シラ	三〇	一三〇	一三〇
エベル	三四	一三四	一三四
ペレグ	三〇	一三〇	一三〇
リウ	三二	一三二	一三二
サルク	三〇	一三〇	一三〇
ナホル	二九	一七九	一七九
テラ	七〇	七〇	七〇
アブラハム	—	—	—
大洪水前セスの生ける年	三九〇	一〇四〇	一二七〇
大洪水よりアブラハムの出生迄	二九〇	九四〇	一一七〇

此三書の中希伯來聖書の正水なること疑なしと雖も、創十一の系圖も亦創五のそれと同じく、後人の作に係り歴史的價値を有する者に非ざるはいふ迄も勿るべし。

アブラハム出生以後出埃及に至る迄の時代は左表の如し。

	聖書	サマリア聖書	七十人譯
ハランを去る時アブラハムの齢	一〇〇	一〇〇	一〇〇
イサクの生れたる時アブラハムの齢	一〇〇	一〇〇	一〇〇
ヤコブの生れたる時イサクの齢	六〇	六〇	六〇
埃及に下る時ヤコブの齢	一三〇	一三〇	一三〇
族長等が迦南に留りし年數	二一五	一四五	一四五
族長等が埃及に留りし年數	二一五	一四五	一四五

アブラハムの生れたる時より出埃及の時迄　四三〇
大洪水よりアブラハムの生れたる時まで　二九〇
創造より大洪水まで　一六五六
創造より出埃及まで　二五六六

此表も亦前二表と同一の材料より出でたること疑なければ、其歴史的價値なきも亦前二表と大差なかるべし。

(二) 埃及寄寓の時期　ヨセフの物語に依れば、以色列人の埃及に下りしは、セミヤック人種の埃及王朝に入ることなり得べく、且其人民の寄易く土地を所有するを得たる時代なりき。ヒクソス（Hyksos）朝即ち牧者王朝（ヒエバーヤキシアス）の治世は最も此狀態に適す。故に以色列人の埃及に下りしは此時代也とのことは、古代の傳說にして、聖書學者も亦一般に之を承認す。埃及年代記の不分明なるがため、ヒクソス朝の時代の何時頃なりしやは確實に之を定むること能はずと雖も、此王朝が數百年間繼續し、前一五三〇年頃まで存在したりしことは疑なきが如し。ヒクソス朝の最後の王の一人アポフィスの時代に機運起りたりしとの事記錄に存するを以て、此王は即ちヨセフの事を以色列人をして府庫の色ピトムとラメセスを建てしめたりしパロ（出一の十一）はラメセス二世にして、此事實は想像に過ぎざりしが、ナヴィルは即ちピトムと發見せらるゝに至りてラメセス二世の建設する所也とのこと常ラメセス二世の直ぐ後の繼續者メチフタ王若くはセチ二世の時なるべしと思惟せられたれ共、此二王は尚有力にしてポレスチナ及びシナイ半島を統御せしを以て、第十九王朝の末王檀の衰微したる時也とアブラハムの大洪水よりアブラハムの生れたる時迄　創造より大洪水まで　創造より出埃及まで

なす方眞に近きが如し（キッテル。ウィードマン等此說を取る）若し果して然りとせば、是れ前一一八〇年以後のことならざるべし（マイエルの計算に從ふ、ロウリンソン其他に依れば尚百年早し）マツカーデは出埃及を以て第廿王朝、ラメセス三世又は直ぐ其後の時代なるべしと云ひ、之を前千二百年頃となせり。

(三) 出埃及よりエルサレムの神殿設立に至る　上六の一に依れば、ソロモン神殿の設立は出埃及後第四百八十年（七十人譯は四百四十年）也と云へり。此記事にしてもし歴史的也とすれば、當時既に以色列國民の間には精密に年代を計算する方法立ち居りしと假定せざる可らず。以色列人は年々の祝節、殊に安息年を守りしを以て既に時日計算の方法立ち居りしと想像せらるべけれ共、王朝以前には精密なる曆法ありし証據なく、安息年の如きも、神殿建設以前に之を守りたりとの確証なし。去れば此處に四百八十年といふも、モーセ五經の年代と同じく單に想像に過ぎず、思ふに一代を四十年と見、之に十二代を乘じたる者なるべし。此間の年代は實際餘く長からず、蓋し三百年に過ぎざるべし。而して前既に云へる如く出埃及はラメセス二世の治世以前に非ずせば、神殿の建設は前十世紀の中頃より後のことには非ざるべし。士師時代の如きは社會の狀態頗る混亂したりしことなれば、當時一定せる曆法ありしとは想像し難く、況して當時の出來事を精密なる年代に從て記錄したりしとは信じ難し。從て士師記の記せる年代に人爲的の形跡あるは寧しむに足らず。即ち左の如し。

以色列クシャンリシタイムに事ふ（三の八）八年
オテニエル以色列を救ふ、國太平（三の十一）四〇年

エホデ以色列を救ふ、國太平（三の廿）八〇年
ヤビン以色列を虐ぐ（四の三）二〇年
デボラ以色列を救ふ、國太平（五の廿一）四〇年
ミデアン人以色列を服す（六の一）七年
ギデオン以色列を服す、國平穩八の廿八）四〇年
アビメレク以色列を治む（九の廿二）三年
トラ以色列を審く（十の二）二三年
ヤイル以色列を審く（十の三）二二年
アモリ人以色列を虐ぐ（十の八）一八年
エフタ以色列を審く（十二の七）六年
イブサン以色列を審く（十二の九）七年
エロン以色列を審く（十二の十一）一〇年
アブドン以色列を審く（十二の十四）八年
ペリシテ以色列を虐ぐ（十三の一）四〇年
サムソン以色列を審く（十五の廿、十六の廿一）二〇年
計　四一〇年

之れに左の年數を加へざる可らず。

荒野に漂泊すること　四〇年
ヨシユアに連ねられて勝利を得ること　X
エリ以色列を審く（母前四の十八）　四〇年
サムエル以色列を審く（母前七の二）　二〇年
サウル王の治世　Y
ダビデ王の治世（王上二の十一）　四〇年
ソロモン王治世の中（王上六の一）　四年
計　一四四年プラスXプラスY

右の表に依れば全時期五百五十四年となる。然るに之を四百八十年となしたるは、他國民に征服せられたる百四年を除き、而してヨシユア統率の時代三十年、ソウル王の時代十年を加へたる者なるべし。然れ共四十年及び其半數、倍數等の點や頗はゐなる見れば、此等の年數の歴史前に非ずして想像に過ぎざるは推察するに難からず。

（四）神殿設立よりエルサレム滅亡に至る　此時期に至りては、以色列國民の文化も漸く進み來りたることなれば、王室には重要なる出來事を記錄する官吏を置へたりしことなるべし。而して此等の出來事を記すには、何王の治世何年とやうに記したりしなるべし。少くとも列王紀略上下、耶利米亞書、及び以西結書には斯く記せり。然れ共此の如き記錄が果して能く保存せられたりしや否明ならず。且此時代の年代に關する聖書の材料なる列王紀略の書かれたるは、此時代の終り、即ち此書に記されたる最早き時の代の出來事の起りたるより數百年後のこと也。此書の作者は常にユダ王及びイスラエル王の年代記に言及せりと雖も、作者自ら直接に此等の年代記に據りしに非ずして、此等の年代記に據りて作れる歴史に據りたるものなるべし。王上下にはユダ王國及びイスラエル王國諸王の名、ソロモン王よりサマリア及びエルサレム滅亡に至る迄諸王治世の年數を記せり。今之を示せば左表の如し。（代上下に記せる年數亦同じ）。

一　イスラエル王國

國王名	治世の年數	即位の年 同上（アッスリヤ錄紀に據る）
エロボアム	二二	前九八九
ナダブ	二	九六七
バシヤ	二四	九六六
エラ	二	九四二
ザムリ	七日間	九四一
オムリ	一二	九四一
アハブ	二二	九一九
アハジヤ	二	前九八九
ヨラム	一二	九八八
エヒウ	二八	八八四
ヨアハズ	一六	八五六
ヨアシ	一七	八四〇
エロボアム二世	四一	八二三
ザカリヤ	六ヶ月間	七七一
シナラム	一ヶ月間	七七〇
メナヘム	一〇	七七〇
ペカヒヤ	二	七六〇
ペカ	二〇	七五八
ホシヤ	九	七二八
サマリアの滅亡	—	七一九

二　ユダ王國

國王名	治世の年數	即位の年 同上（アッスリヤ錄紀に據る）
アハブ	八九七	八五三
ヨラム	八	八五二
エヒウ	二八	八四二
ヨアハズ	一六	八一五
ヨアシ	一七	七九八
エロボアム二世	四一	七八二
ザカリヤ	六ヶ月間	七七一
シナラム	一ヶ月間	七七〇
メナヘム	一〇	七四一
ペカヒヤ	二	七六〇
ペカ	二〇	七三七
ホシヤ	九	七三六
サマリアの滅亡	—	七二八
アハズ	一六	七三四
ヒゼキヤ	二九	七二二
ソロモン	四〇	前一〇五九
神殿の設立	一	一〇一九
レハベアム	一七	九七七
アビヤム	三	九八九
アサ	四一	九五九
エホシヤファト	二五	九一八
エホラム	八	八九三
アハジヤ	一	八八五
アタリア	六	八八四
ヨアシ	四〇	八七四
アマツヤ	二九	八三八
アザリヤ（ウジヤ）	五二	八八〇
ヨタム	一六	七五七
アハズ	一六	七四一

ヘヒキア		二九	七二五	七二六
サマリアの滅亡		—	七一九	七二二
セナカリブの侵襲		—	七〇一	七〇一
マナセ	五五	五九	六九六	六九七
アモン	二	二	六四一	六四一
ヨシヤ	三一	三一	六三九	六三九
エホヤハズ	三ケ月間	—	三〇八	六〇八
ヨホヤキム	三ケ月間	三ケ月間	六〇八	六〇八
ヨホヤキン	一一	一一	五九七	五九七
ヒデキヤ	—	—	五九七	五九七
エルサレムの滅亡			五八六	五八六

（五）俘囚以後の年代　エルサレム滅亡以後の年代は左の如し。

ヂブカド子ザル王	
第十九年	五八六
クロス王即位	五三九
同　第一年	五三八
	五三七
	五三六
ダリヨス王の即位	五二二
同　第二年	五二〇
同　第六年	五一六
アルタシヤスタ王の即位	四六五
同　第七年	四五八
同　第廿年	四四五

エルサレムの滅亡（王下廿五の八）
クロス巴比倫を滅す
以色列國民解放の詔（歴一の一）
ゼルバベルに率ゐられ歸國
神殿の設立（歴三の八）
ハガイ及びザカリアの預言（基一の一、廷一の一）
神殿の落成（歴六の十五）
エズラ、エルサレムに到着（歴七の八）
ネヘミヤ、エルサレムに遣さる（尼二の一）

キウルトン ウィリアム Cureton, William. 人名 一八〇八—六四 英國の東邦學者特に西利亞學者。牛津のクライスト、チャルチ、カレッヂに學び、ボドレイアンの圖書館副長、大英博物館の原稿保管者、女皇宮廷牧師、ウェストミンステルの『カノン』、ウェストミンステル聖マガレット院『レクトル』に歴任す。彼は聖書及び師父の文書に深き造詣あり。『イグナチウス書簡の四利亞譯』『大英博物館内亞剌比亞語原稿目錄』『ヴィンディキエ、イグナチア』『コルプス、イグナチアヌム』『エペソの監督ヨハネ』（四利亞語）『スピキレギヤム、シリアクム』『クヲチュオル、エヴァンゲリオルム』『クヲチュオル』等は如何に彼が大なる東邦學者なりしかを証する著書なりといふべし。

機械的世界觀 Mechanical View of the World. 學說名 有機的又は目的論的世界觀に對し、究竟部因の觀念を排し、一切の現象を物理的法則に從て運動する物質の必然的結果として説明せんとする學說をいふ。尤も宇宙の進化的歴程に目的ありとの說を否定せる說、又目的を否定せざるも、宇宙の物質的方面は因果の法則を以て說明し得べしとなす見解なも機械的と稱するとあり。機械的なる語はプリストテレースの時より用ゐられたれ共、機械的世界觀を立て、目的論的世界觀と對せしむるに至りしは近世の事也。即ちホッブスは哲學上吾人の考察し得べき範圍内の一切の現象は、皆機械的に生起する者にして、又皆機械的に說明し得べき者也との主唱し、デカルトも『全に物質を與へよ、去らば世界を造るを得ん』と云ひて、殆ど同樣の說を唱へ、スピノザも亦目的觀に依りて宇宙の現象を說明することを拒み、謂へらく、世界の事物が或る目的に從ひて形造らるゝと考ふるは、畢竟人間の感想を世界に移せる誤謬にして、之を以て自然界の生起を說明す可らざるのみならず、斯の如き目的說は却て辭を以て不完全なる者となす者也、何となれば辭もし或る目的に從て活動すとせば、其目的を造せざる間は完全圓滿也と云ふ可らざれば也、故に自然界の事物は全く機械的に考へざる可らずと。ライプニッツは近世自然科學の要求より來れる機械的說明と、舊來の哲學及び宗教の要求より來れる目的論的說明とを調和せんとしたる者にして、其說に謂えらく、物體に於ける一切の狀態は、其を動かす勢力に依りて生ずる者なるが故に、在らゆる物理的現象は全く機械的に說明すべき者也、去れど自然界の諸物が凡て機械的關係を以て活動する所以の究極的原因は何ぞやといふに、其然かするに宜しき目的を具へたること是也、即ち機械的に活動する物界全體の根據は其れの成就すべき目的に在りと云はざる可らずと。有名なる化學者ロボルト、ボイル（Robert Boyle 一六二六—九一）も亦化學上宇宙を一の機械と見ることを許したると共に、又知性ある造物主の存在を主張し、宇宙てふ機械は其を造り其に最初の動力を與へたる者の存在を示すと唱へて、非目的觀を排擊せり。カントも亦自然界を支配する機械的因果性と、物自體としての人、即ち實踐理性に於ける倫理的の自由因果性とを立て、各自異れる範疇に於て機械性と自由性（即ち目的性）とを閑立せしめ、以て機械觀と目的觀とを調和せんと試みたり。ロッツェは『機械的作用の範圍は如何に絶對的に普遍なるやを示すと同時に、此作用が世界の撰成に對して主どるべき職能の如何に從屬的のものなるかを示すは余が哲學の目的也』と云ひて、一方に一切の自然現象は機械的に說明せられ得べき者なるを說くと同時に、目的論的說明は機械的說明と隣立し得べきのみならず、前者は寧ろ主にして、後者は從なるべきを主張せり。然れ共全然機械的世界觀を取る者尚全くなきに非ず。獨逸の生物學者ヘッケルの如きは其最も重なる者にして、彼は進化說の立場より目的論的說明を排斥し、機械的說明を取れり。我國の加藤弘之赤之が最也。

機會說又は機會原因說 Occasionalism. 學說名 心身の關係に就きデカルトの二元論より起り來る難點を避けんがために、ウーランクス（Arnold Geulincx 一六二五—六九）の唱道せし處にして、吾人が意志する時に身體の動くは、實は神が我が身體を動かすに依る、我が意志は唯機會（occasio）即ち緣を爲すに過ぎず、即ち吾人が意志する場合に吾人の身體は神に依りて動かさるゝ也、蓋く心と身との相影響するが如くに見ゆるも、一が決して他の變動の原因たるには非ずして唯機會たるに外ならずと說く。是れ機會說又は機會原因說と稱せらるゝ所以也。此學說又音譯に從ひ『オッカヲオ論』とも稱せらる。

紀元 （ヂ）Era. 雜語 古代の國民は紀元を用ゐず、此の如きことは凡て之を歴史家、年代記者に委ねたりき。羅馬國民は其建國の年を以て紀元となしたれ共、唯執政官の名に依りてのみ公私の文書に其年代を附せり。後又之に加ふるに皇帝治世の年を以てせり。舊約の歴史及び預言書には幾ゃ或る種の年代を記せりと雖も、或る一定の點より續て計算するが如きことは甚だ稀也。モーセの五經に在ては、ヤコブの時までは凡ての年代を系圖と共に記載せり。以色列人が國王を有するに至りては、其治世に從ひ、其外國に征服せらるゝに至りては、外國王の治世に從ひ、共に何王の治世第何年と記せり。新約にも亦此の如く記せる處あり（路三の一、太二の一）又時さしては國民的大事件を以て年代の起點となせる者あり、例之出埃及（出十九の一、申廿三の廿八）巴比倫俘囚の初（結卅三の廿一、四十の一）等の如し。猶太人が西利亞に征服せられし後は、セリジディアン紀元（Seleucidian Era）を用ゐ、前三一二年を以て紀元となせり。而してマッカビース書は二書共此紀元を用ゐたり。

基督教徒は尚歐百年間古代の慣例に從ひたりき。即ち東部の諸國に在ては尚引續きセリジディアン紀元を用ゐ、西利亞の基督教徒は今日にても基督紀元の外に、教會に關する事には之を用ゆ。亞歴山にては復活節を計算するにディオクレシアン紀元を用ゐ、アイオクレシアンの治世（二八四年八月廿九日）を以て初む。ディオヒヤの基督教徒に依りて用ゐらる。但し後ディオクレシアンの基督教徒に依りて用ゐられたれ共、其初めて登明せらるゝ迄には五世紀を要し、其一般に採用せらるゝ迄には尚五世紀を要したりき。五三七年羅馬帝ユスチニアンは、凡ての公文書は皇帝の年代に依るべしとの事を命じたりしが、五四一年最後の執政官の選ばるゝに及び、永久的紀元を定むるの必要漸く深く感ぜらるゝに至れり。斯る際即ち五二五年羅馬の僧デニシウス（Dionysius）なる者其復活節表を作るに方り、ディオクレシアン紀元を用ゐずして、主イエスの年（ab incarnatione Domini）なる者を以て起點となし、羅馬建國七五四年を以て紀元元年となし、一月一日より十二月廿一日に至り、耶蘇の誕生を以て十二月廿五日となす。此計算法は一般の採納する所となり、第十世紀に及びては頗る廣く用ゐらるゝに至れり。然れ共西班牙にては久しく前七一六年を起點となせる西班牙紀元なる者を用ゐ、第十四世紀の終に至りて初めて基督紀元を採用せり。露西亞にては一七〇〇年彼得大帝之を採用せり。然るに日の起點に就ては十二月廿五日、一月一日、三月廿五日（復活節）の相違ありて初め一定せず、頗る不便を極めたりしが、獨逸は第十六世紀の終、佛國は一五六七年、蘇國は一五九九年、英國は一七五二年に至り、一月一日を以て新年の起點となすに至り、漸く一定せり。

創世記の記事より數へ出せる天地創造を起點とせる世界紀元は、基督の時代まで猶太人の中に行はれ、史家ヨセファスも亦之を用ゐたり。然れ共此紀元の困難は學者計算の結果の一致せざるに在り。即ちユリアス、アフリカナスは創造の時より基督の時まで五千五百年也と云ひ、ユウセビウス及びビードは五千百九十九年也と云ひ、スカリゲル及びカルヴィシウスは三千九百五十年也と云ひ、ケプレル及びペタヴィウスは三千九百三十八年也と云ひ、アッシエルは四千四年也と云ひ、其他尚諸說ありて到底一致を期す可らず。所謂バイザンチン紀元又はコンスタンチノポリタン紀元と稱する者も亦創造より初まり、基督の時までを五千五百九年となす。此紀元は初めて第七世紀に起り、後バイザンチン史家、東羅馬諸帝及び東教會の教父等一般に之を採用し、今日にても露西亞を除きては希臘教會一般に之を用ゆ。

キース アレキサンデル Keith, Alexan-